英雄と女王の子

剣の舞姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
英雄と女王の子

【Ｎコード】
Ｎ６４５６Ｉ

【作者名】
剣の舞姫

【あらすじ】
大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドと災厄の女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子、アリス・スプリングフィールド。
若くして『二代目サウザンド・マスター候補』と呼ばれる彼が、弟のネギ・スプリングフィールドの居る麻帆良学園を訪れた。
ネギの周りで起きる騒ぎに巻き込まれたアリス、彼の夢が終焉を迎える時、ネギ達は何を思うのか、そして魔法世界はどうなるのか？

プロローグ　※11月9日、画像追加。提供Ｒａｉｎ様

英雄と女王の子

＞ｉ３０５６８―２２９６＜

プロローグ

　ウェスペルタティア王国の女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシアが処刑された一年後、英雄ナギ・スプリングフィールドの誰にも知られてない隠れ家にて産声が響いた。隠れ家の中には隠れ家の主のナギと、処刑された筈のアリカが居て、アリカの腕の中には赤に近い金髪の赤子が抱かれていた。

「すまんなナギ・・・このような事態に子を産んで足を引っ張る事になってしまって」

「気にすんなよ。それに、コイツは俺とお前が望んで生まれてきたんだ、それで良いだろ？」

　スヤスヤと眠る我が子に優しい眼差しを向けるナギとアリカ、逃げ回る日々の２人には子を産む為と育てる為にこの場に暫く留まるのは痛手であるのにも関わらず、そんなリスクを負ってでも望んだ子だ。可愛くない筈が無い。

「それで、コイツの名前は如何する？　男だしネギなんて如何だ？」

　だからこそ、そんなリスクなど今は考えず、生まれてきた我が子に名を付けてこの幸せを噛み締めたいのだ。

「それも良いが・・・この子には私から名をつけてやりたいのじゃ。ネギという名はもし次に私が子を産む事があって、それが男の子ならつけてあげて欲しい」
「そっか、お前がそう言うなら好きにしな」

特に気にした風でもなく、ナギは笑顔で我が子の頬を突っつきながら答える。柔らかな感触が気に入ったようだ。何よりそうしている事で自分が父親になった事を実感できるのが嬉しいのかもしれない。

「では、この子の名は・・・アリス、アリス・スプリングフィールドじゃ」
「アリス？　女の名前じゃねーか」
「私の名と・・・アスナの名から取った名じゃ。確かに男には可笑しいかも知れんが、できればこの名にしてやりたい」

アリカの脳裏に映るのは妹の顔、第3王女のアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの顔だ。

「アリカのアリ、アスナのスでアリスか・・・なるほど、なら決まりだ！　コイツ名は今日からアリス・スプリングフィールドだ！」

英雄と亡国の女王の子アリス・スプリングフィールドは、両親の深い愛情を受けてこの世に誕生した。この先アリスに待ち受けるのは波乱か、それとも平穏か・・・今はそんな事知る由もなく、母の腕に抱かれ、父に見守られて安らかに眠り続けるのだった。

アリスがこの世に生を受けてから5年後、5歳になったアリスは両親に魔法と剣を教わっていた。元々アリスは父と母、両方の魔力

を受け継いでいるため、魔力量には恵まれている。更に剣の腕は母や父の仲間から手解きを受け、魔法剣士としての戦い方は父に教わっているため、５歳にして既にＡＡランクの実力を持つ程に成長した。ただ、魔法の得意属性は父と同じではないということが本人には不満なご様子。父の属性は風、光、雷に対し、アリスは闇、炎、雷と、被るのは雷のみ、それが不満なのだ。

「気にすんなよ、俺と同じ属性が雷で良かったじゃねーか。俺の得意な魔法を教えてやれるんだ、文句言うな」

「・・・うん」

雷の魔法で父が教えてくれて、完璧に使えるのは白き雷と雷の斧だけ、雷の暴風も教えてくれたが精度はまだ低い。

「今日教えるのは雷の投擲と、俺が最も得意とする千の雷だ」

雷の投擲は兎も角、千の雷は父が最も得意としている魔法なだけにアリスもよく知っている。だが、その難易度は高く、まだ５歳のアリスが習得できるかは疑問だった。

「心配すんな、お前はこの俺様の息子だぜ？　出来ない筈がねぇ！！」

気合十分で放たれた千の雷は得意としているだけあって凄い威力だった。まさか山一つ消滅するなど誰が予想できようか、それだけ凄まじい破壊力だということなのだが。

「父さん、山・・・」

「ハッ、山一つ消えた位で一々心配しすぎだっつーの、俺が本気で千の雷を使ったらこの辺り一帯の地形が変わるぜ？」

言葉も無い。アリスは改めて自分の父が如何にデタラメな存在なのかを思い知ったのだった。ちなみにこの後見せてもらった雷の投擲が地面を抉り過ぎて何故か温泉が湧き出したのは良い思い出だ。

「愚か者、アリスに魔法を教えるのは良いが、山を消して如何するのじゃ」

あの後隠れ家に帰った父とアリスだが、父の放った千の雷の事を母に話すと直ぐに母による父への説教が始まった。父は相変わらず母と犬猿の仲らしく、いつも口現下が絶えない。

本来ならそんな両親の下で育ったアリスは怯えるなり何なりするのだろうが、両親が互いを信頼し合っている事を知っているアリスにはこの喧嘩もじゃれ合っているようにしか見えないのだ。

「まったく・・・それで？　アリスは雷の投擲と千の雷を覚えれそうか？」

「う～ん・・・雷の投擲は出来そうだけど、千の雷はまだ無理。虚空瞬動の方が覚えやすそう」

「だろうな、ナギは規格外だから良いが、アリスはゆっくりで良いから確実にモノにするが良いぞ」

頬にでっかい紅葉が浮かんでいる父を無視して母は優しくアリスの頭を撫でる。母は厳しい所も多々有るが、優しい時は過保護と言っても良いほど優しい。そんな母がアリスは大好きだし、厳しい所は恐いが、それ以上に尊敬している。

「確り学ぶのじゃぞ。いつか私達の下を離れても生きていけるように」

「お前が一人立ちするその日まで、俺たちが確りと鍛えてやる」

父と母が優しくアリスを抱きしめる。その温かさはアリスにとってこの世で最も安心できるモノ、最も大切な温もり。優しい父と母をアリスは抱きしめ返してその親愛に答えたのだった。

二年後、アリスが7歳の時にアリスは兄になった。アリカがナギとの二人目の息子を産んだため、その名は嘗ての約束通りにネギという名に決まり、訳あってアリスと共にネギは旧世界のイギリス、ウェールズにある小さな村に預けられる。そこにはアリスの従兄妹に当たるネカネ・スプリングフィールドがいるのでネギの世話は基本的に彼女が行う事になった。

ウェールズに住む事になったアリスは生活費を稼ぐ為に一人で仕事をしていた。魔法世界に行ったり旧世界で活動したりと、実戦経験を重ねていく。

勿論怪我して帰れば心配しているネカネが怒るのでなるべく怪我をしないように心がけている内に回避能力と防御能力は格段に上がった。

父と母と別れる時に無理言って譲ってもらったアリカの愛剣、黄昏の剣“姫”（コミック２６巻の表紙でアリカが持っている剣）を魔法発動体にして魔法剣士としてのスタイルを確立したアリスは今、7歳にして将来を期待される「次期立派な魔法使い」と呼ばれるようになる。

だが、アリスは決してマギステル・マギになるつもりは無いし、父の二つ名のサウザンド・マスターの名を継ぐつもりは全く無い。周りが勝手に期待しているだけなのだ。

そんな生活が数年続き、ネギが４歳、アリスが１１歳になった頃、事件が起きた。

この頃からネギはナギに会いたいと強く願っていたし、周りから父は凄い人間だと聞かされてきたネギの中では何時しか父は正義の

味方と言う形で固定され、父に会うには自分がピンチになれば来てくれると思い始めていたのだ。

「邪魔だ！」

そしてそのピンチは最悪の形で実現した。

いつもの様に長期の仕事を終えて村に帰る途中、妙な魔力を感じて少し急ぎ足で村に戻ると大量の悪魔が村を襲っていたのだ。家は破壊され、燃やされ、村人は石化魔法で石にされている。

アリスは直ぐに影に仕舞っていた姫を抜いて悪魔に切りかかり、魔法を駆使して粗方の悪魔を殺すと、ネギが気になって瞬動を使い自宅に向かった。途中に居る悪魔を倒しながら家に向かうと覚えのある魔力を感じて立ち止まる。

「父さん・・・」

泣いているネギと足を石化されて倒れているネカネ、石にされたスタン爺さんを守るように悪魔の群れに立ち塞がっているナギの姿が見えた。４年ぶりの父の姿は相変わらずで、少し涙が出そうになるが今はそれ所ではないと思い直し、瞬動でナギの横に並んだ。

「よう！　アリスでっかくなったなぁ！！」

「うん、父さんも久しぶり・・・母さんは元気？」

「ああ、アイツも元気だ」

「そっか、安心した。父さんも元気そうだし」

それが聞ければ十分、直ぐに姫を構えて悪魔の群れに向き直ると詠唱を始める。見るとナギも合わせるように詠唱している。つまり同時に魔法を使うという事だ・・・多分、今のアリスの力も見たいのだろう。

「上等！　ボルグ・ボルクス・ボルメテウス！　来たれ雷精、風の精！　集い来たりて吹きさすべ南洋の嵐！」

昔は苦手だったこの魔法だが、父と母と別れてからずっと苦手を無くす為に練習を続けた。今なら完璧に使いこなす事が出来るという自信がある

「「雷の暴風！！」」

二人の雷の暴風が眼前に広がる悪魔の群れを一瞬で薙ぎ払った。世界最強の男とその才能を受け継いで同じ最強クラスの実力を身に付けた息子二人が同時に放った雷の暴風は悪魔の群れを消し去り、向こう側の山まで削ってしまい、見ていたネカネとネギは呆気に取られるしかなかった。

「強くなったじゃねーか」
「まだまだ父さんには追いつかないけどね」
「はっ！、当たり前だ。まだまだ追いつかせるかよ、」

不適に笑う父は振り返って此方を見ているネギに向き合い、泣きそうになっている顔を見つめた。そこにある感情は恐らく誰にも読み取れないだろう。育ててやる事も出来なかった息子を見て、彼は何を思うのか。

「お前がネギか？　大きくなったな・・・・・そうだ、この杖をやろう、俺の形見代わりだ」

形見とは縁起でもないと思ったが、ナギにだって何か思う所があって形見という言葉を使ったのだと理解しているアリスは出来た息

子なのだろう。

「本当ならこの杖もアリスにやるつもりだったけど、考えてみればアリスは母親から貰ってるからな・・・だからこの偉大なお父様からはネギにやるよ・・・強くなれ、光に生きろネギ、アリス」

突然の突風が吹き、目を逸らした瞬間ナギはこの場から姿を消していた。

ネギの鳴き声を聞きながらアリスは空を見上げ、何処かで生きているであろう父と母を想い、“姫”を空に大きく突き出して胸に誓った。いつか強くなって必ず会いに行くと・・・・・。

プロローグ　※11月9日、画像追加。提供Ｒａｉｎ様（後書き）

ネギま小説初挑戦です。
まだまだ未熟ですが、楽しんでいただければ幸いです。

一話　「麻帆良学園」

英雄と女王の子

一話

「麻帆良学園」

突然だが、アリス・スプリングフィールドは１６歳になっていた。母から譲り受けた“姫”を振るい、時には“姫”を魔法発動体として魔法を駆使し、敵をなぎ倒していくその様は正に“英雄の子”に相応しい姿だ。

「ふぅ、やっと終わった。・・・そういえばネギってもう魔法学校の卒業式終わってたっけ・・・修行先は何処かな？」

本来、先ほどまでやっていた仕事は数ヶ月前に終わって、弟の卒業式には出席できる筈だったのだが、手違いやその他諸々の諸事情から遅れてしまったのだ。

仕方ないと懐から取り出した携帯電話で従兄妹に電話を掛ける事にした。

『もしもし？』

「ああ、ネカネ？　私だけど、ごめん・・・先ほど仕事を終えたよ」

『アリス兄さん!?　よかった・・・中々連絡が着かないから心配したんですよ？』

「うん、ごめん・・・それで、ネギの修行先って何処かな？　折角だから行って見ようかと思ってるんだけど」

『そ、それが・・・・・・』

何でも、ネギの修行は日本で教師をやる事らしく、メルディアナ魔法学校校長の友人が学園長をやっている麻帆良学園に行ったとの事だ。

麻帆良学園と言えばアリスも耳にしたことがある。世界的にも有名な巨大学園都市にある学校で、幼稚園から大学までエスカレーター式で存在するマンモス校だ。

裏では日本の関東魔法協会本部になっていて、魔法先生の中には父がリーダーだった赤い翼のメンバーの一人が居ると聞いた。

「あそこか・・・確かタカミチさんが居たね」

『そうですけど、心配だわ・・・・・・』

「まぁ、私が見に行くから、安心しなよ」

『お願いできます？』

「うん」

電話を切って直ぐにアリスは仕事の報酬金の5割をネカネに郵送して空港に向かった。行き先は日本の麻帆良学園、弟が確りと修行に励んでいるか見学する為、アリスは機上の人となった。

日本の成田空港に着いたアリスは電車を乗り継いで埼玉県にある麻帆良学園都市に向かった。流石日本と言うべきか人が多い。

アリスは現在、仕事着であるラカンから貰った拳闘士の服ではなくスーツを着ている。スーツを着ていなかったら目立ったなと安堵しつつ、久しぶりの日本の光景を楽しんでいた。

「しかし、2月にもなると寒いな・・・ロシア程ではないけど、日本も中々寒いね」

以前、仕事で真冬のロシアに行った事があるが、あれは地獄だった。あの時の寒さ程ではないが、日本もそれなりに寒い。

「でも、北海道は東京圏より寒いんだって聞いたなぁ」

何となくカニが食べたくなったので、ネギの様子を見終えたら北海道に行ってカニを食べようと決めたアリスの目に麻帆良学園都市が見えてきた。

噂通りの巨大な都市に驚きつつ、アリスの目は確りと結界の存在を写していた。ただ妙なのは、対象の何かの魔力を封印する術式の結界が張られている事だが、自分には関係無い事だろうと思って気にしない事にした。

「さて、まずは学園長室に向かうか・・・案内板は・・・・・・」

学園長室が女子中等部校舎内に在ると聞いたので、目的の駅で降りたアリスは駅にある案内板を見つけて道を確認した。

「よし、とりあえず行ってみるか」

結論から言うと・・・・・・迷った。広すぎて判りづらいのだ、この学園は。

「あ～・・・・・・誰かに道を聞こうかな?」

丁度アリスの少し前を艶やかな黒髪を真っ直ぐ下ろしたストレートヘアーの女の子が歩いている。麻帆良学園中等部の制服を着ているので此処の生徒であろうから道くらい判るだろう。

「すみません、道を聞いても宜しいですか?」

「はい？　道？　おにーさん何処行きたいん？」

女の子の話し方が前に行った事のある京都の女性に似ていた。恐らく京都出身なのだろう女の子が振り返ってその顔を見た時、その顔に誰かの顔が重なった。

「あれ？　君・・・近衛　木乃美さんの親戚？」
「ん～？　お母様の知り合い？」
「お母様って事は・・・木乃美さんと詠春さんの娘さん？」
「そやよ～、ウチは近衛　木乃香やえ」

まさか、父の友人の娘だとは思わなかった。世の中は狭いものだと納得して名乗られたのだから名乗り返すのが礼儀だ。なので此方も名乗る事にする。

「私はアリス・スプリングフィールド、私の父が君のお父さんと友人だったんだ。ナギって聞いた事無い？」
「なぎ？　ん～・・・ああ！　そういえばよくお父様が酔ったとき口にしとったなぁ・・・・・・はて？　スプリングフィールドって、アリスさんはネギ君の親戚なん？」

更に驚いた、まさか弟の事も知っていたとは。だが、丁度良い、木乃香に頼んで学園長室に案内してもらう事になり、途中でネギと自分の関係を説明、自分が幼い頃に会った詠春の話も聞かせてあげた。

「は～、お父様に剣を教わってたんか～、お父様って強かったん？」
「うん、西洋剣術と東洋剣術の違いはあったけど、それを抜きにしても凄かったよ」
「それにしてもネギ君のおにーさんやったやなぁ、確かに似てるな

ぁ」

「そう？　ネギは父さん似だけど、私は父さんと母さんの二人に似て中性的な顔らしいから、そこまで似てないと思うけど・・・」

「ううん、そっくりやよ～」

話している内に学園長室の前に着いてしまった。とりあえず木乃香が先に入ってもらい、事情を説明してもらう事になった。

木乃香が入って少し経つとアリスが呼ばれたので扉を開け、一礼してから中に入ると・・・仙人が居た。

「よく来てくれたのぅ、ワシが麻帆良学園学園長の近衛　近右衛門じゃ。よろしく頼むぞぃ、アリス・スプリングフィールド君」

「・・・・・あ、いえ、此方こそよろしくお願いします。それと、弟が大変お世話になってます」

「よいよい、堅苦しいのは無しじゃよ」

「はぁ・・・」

人間離れした後頭部の長さに呆けてしまったアリスだが、直ぐに我に返って挨拶した。流石に思った事を口にしない所は大人だ。

「それで、ネギは元気にしてますか？　従兄妹が随分と心配してまして」

「うむ、元気にしておるよ。それに、木乃香からも聞いておるじゃろ？」

「ええ、彼女のクラス担任だと聞いた時は驚きました」

更には木乃香が住む寮の部屋に居候しているとの事で恐縮してしまった。

「さて、すまんが木乃香や、アリス君と少し真面目な話がしたいの

じゃが・・・」
「ほならもう行くな？　一時間目サボってもうたし、流石に行かんと不味いわ」
「あ、ごめんね？　私が案内頼んだ所為で」
「ええよ～、面白い話聞かせてもろたし、それでチャラにしといたげる。ほなな～アリスさん」

そう言って去っていった木乃香を見送り、アリスは改めて近衛門と向き合った。その表情は既に弟を心配して来た兄のモノではなく、一人の魔法使いとしての表情だ。

「さて、よく来てくれたの。アリス・スプリングフィールド君」
「お初にお目に掛かります。関東魔法協会会長殿」
「うむ、君の噂は聞いとるぞ？　“二代目千の呪文の男（二代目サウザンド・マスター）”」
「・・・できればその名はやめて欲しいですね。私はその名を継ぐつもりは一切ありませんので」
「ほう？　・・・よかろう。ではアリス君、君に関東魔法協会会長として依頼をしたい」

依頼内容は木乃香の護衛とネギが麻帆良学園に居る間の警備員の二つ、報酬は月々に給料として支払い。
護衛については理解できる。関東魔法協会会長の孫で関西呪術協会の長の娘である以上、政治的な面で狙われやすい。
更に、彼女を見て直ぐに判ったが、木乃香の内包魔力量は父を遥かに超えている。色々な意味で利用される危険が高いのは道理だ。

「良いでしょう。報酬も確りしているみたいですし、断る理由がありませんね」
「そうか、そうか・・・君ほどの実力者が来てくれて正直助かるわ

い。人手不足で実戦経験も豊富な魔法使いが少なかったからのぉ」

住む場所に関しては学園側で用意してくれるらしいので任せる事にした。問題は麻帆良学園に居る間の身分だが。

「良ければネギ君が担任をしている２－Ａの副担任をしてみないかの？　木乃香も居るし、護衛するには打って付けじゃと思うが？」

「先生ですか・・・教員免許は持ってませんよ？」

「構わんて、ネギ君も持っておらん」

「そういう問題ですか？」

ふぉ、ふぉ、ふぉ、と笑って誤魔化されてしまった。しかし、護衛する以上２－Ａの副担任を務めるのは確かに都合が良い。

釈然としないが仕方なく首を縦に振ると何処から出したのか採用書類にサインさせられた。

「して、アリス君の得意科目は何かのぉ？」

「英語は母国語ですから問題ありません。後は世界史と理数系ですね」

「ふむ、英語はネギ君がやっておるから数学をお願いできるかの？」

「分かりました」

年度の終わりも近いこの日、アリスは麻帆良学園女子中等部２－Ａの副担任に就任した。今後、アリスを待ち受ける波乱はこの時より始まり、そしてアリスにとって未来を左右する大きな一歩がこの時だとは、まだ思いもしなかった。

一話　「麻帆良学園」（後書き）

ありきたりですがアリスの副担任就任でした。
次回はアリスの戦闘を少しだけ取り入れる予定です。

二話　「歓迎、アリス先生」

二話
「歓迎、アリス先生」

翌日から就任という事になっているので、その日は学園都市内にあるビジネスホテルに泊まった。朝にもう一度学園長室に行ってネギとネギの教員指導を行なっている先生に顔合わせをする事になるので、早めに床に着いた。
朝になるとスーツに着替えてから荷物を影に仕舞って学園長室に向かう。

「失礼します。本日より２－Ａの副担任になるアリス・スプリングフィールドです」
『入りたまえ』

もう一度「失礼します」とだけ言って中に入るとまだネギは来ていないようで、学園長しか居なかった。

「随分はやいのぅ、よく眠れたかね？」
「ええ、早寝早起きの習慣を身に着けていますので」
「ふぉっふぉっふぉっ、それは関心じゃ。さて、まず今時期なんじゃが・・・学年末試験の期間が近いんじゃ」

その学年末試験をネギの最終試験にするつもりらしい。課題は毎回テストで最下位を取る２－Ａを最下位脱出させる事。それを手紙で伝えるつもりだったのだが、丁度良くアリスが来たので顔合わせ

の時に言う事にしたのだとか。

「それでじゃな、もう直ぐ此処にネギ君が来る。その時に挨拶をしてくれ・・・それを渡すタイミングは君に任せるぞい」
「そうですか・・・教室に行く時にでも渡しますよ」

丁度その時、学園長室の扉がノックされた。どうやらネギが来たようだ。

「おお、来てくれたか。入ってよいぞ」
「失礼します。学園長、何かごよ・・・う・・・」

ネギが学園長室に入った時、思いがけない人物を目にして言葉を失った。まさかアリスが居るなど予想していなかったのだろう。

「に、兄さん!?」
「久しぶりだね、元気そうで安心した」

アリスは木乃香から話を聞いていると思っていたのだが、ネギの様子を見る限り聞いてなかったらしい。学園長に目を向けると悪戯が成功した子どものような笑顔をしていたので、学園長の根回しだと直ぐに気付いた。

「ネギ君、アリス君は仕事の一環で暫く君のクラスの副担任を務める事になったのじゃよ」
「えええ!?　に、兄さんが副担任!?」
「そ、暫く兄弟水入らずだ」

最初こそ驚いていたネギだったが、アリスと暫く一緒に居られると解った途端、嬉しそうな顔をしてアリスに抱きついた。

昔から仕事で一緒に居る事の少なかったアリスが暫くの間とはいえ一緒に居られるのだ。嬉しくない筈が無い。

「さて、そろそろ教室に行こうか？　私の紹介もあるだろうし、少し早めに行った方が良いよ。それでは学園長、失礼します」
「し、失礼します！」
「うむ、頑張るのじゃぞ？」

アリスとネギが出て行って直ぐ、学園長はデスクの鍵が付いた引き出しから親友のナギとその妻、アリカが写った写真を取り出して感慨深げに呟いた。

「お主等の息子達は、二人とも良い子じゃな・・・・・・ナギ、アリカ姫」

学園長室から出たアリスとネギは２－Ａの教室に向かってた。その途中でアリスは学園長から受け取った最終課題の書かれた手紙をネギに手渡す。

「最終課題？」
「そう、それに合格したら正式に教員として採用するって」

ネギが恐る恐る確認した手紙の内容はアリスが学園長から聞いた事と寸分の違いも無かった。テストが毎回最下位というクラスだけに、それはかなり困難な課題らしい。

「ど、どうしよう・・・・・これならドラゴン退治の方が楽な気が」

それも流石にどうかと思うアリスだが、ネギの様子を見るに強ち冗談でも無さそうだ。

「それを何とかするのが教師の仕事だ。私も生徒達の勉強面ではフォローするつもりだけど、それに甘えず確り成し遂げなさい」

兄の激励に不安が解消されたのかネギが気合を入れなおした。若干強く頬を叩きすぎたらしく、少し赤くなっていたため、苦笑しながら無詠唱魔法を使ってネギの頬を治療した。既に隠蔽結界を張ってから使用しているので誰かに見られる心配も無い。

「ありがとう、兄さん」

「ん、頑張れ」

教室に着くと先にネギが入り、騒いでいるクラスを静めてＨＲを始めた。最初に新任の副担任がいる事を説明してアリスを呼んだ。呼ばれたアリスは少しだけスーツの皺を整えてから扉を開き、教室に入った。

「えっと、今日から副担任になるアリス先生です。・・・ご挨拶をお願いします」

「はい。・・・・・今日からこのクラスの副担任を勤めるアリス・スプリングフィールドです。ファミリーネームでお分かりだと思いますが、ネギ先生の兄です。ネギ先生同様、気軽に話しかけてください」

暫くの沈黙の後、教室が割れるのではと思うほどの歓声が響いた。その殆どが「かっこいい」とか、「綺麗」とか、そういう言葉で彩られている。

「はいは～い、それじゃあクラスを代表して、この新聞部の朝倉和美が質問させてもらうよ？　えっと、アリス先生の年齢は？」
「今年で１７になるので、今は１６です。大学は既に飛び級で卒業してますので、教員免許は持ってます」
　勿論、嘘である。
「ネギ君と兄弟って事だけど、余り似てないね？」
「あ～、ネギは完全に父に似たけど、私は父と母の二人を足して２で割ったような顔付きらしいので、その辺りで似てないと思うのかも。よく見たら似てる所もあるよ」
　確かに良く見れば似ている所が幾つか見受けられる。納得した和美は次の質問に移った。
「ズバリ！　今、付き合っている人っていますか？」
「いません」
　女性の従者が一人いるが、恋仲と言う関係ではない。彼女とは戦いにおける相棒、背中を預け合えるパートナーと言うべき存在だ。
「質問は他にありますか？　無いようでしたら時間も差し迫ってますので、ＨＲの続きをネギ先生にしてもらいますが」
　得に質問は出なかったので、ネギが残りの時間でＨＲを終わらせるとそのまま１時間目の英語の授業になったので、アリスは職員室に戻った。
　職員室に戻ったアリスはネギから借りた名簿を職員室に備え付けてあるコピー機でコピーして自分用の名簿を作った。
　ネギ用の名簿はネギの机に置いて、アリスは自分用の名簿で２－

Aの顔と名前を覚える為に一人一人のプロフィールを確認し始めた。
・・・所々にある落書きは無視して。

「・・・ん？　神楽坂明日菜？　・・・・・・アスナ叔母さんに似ているな」

２－Aの一人、神楽坂明日菜の顔を見て母の妹を思い出した。幼い頃に一度だけ会った事のあるウェスペルタティア王国の王女で、黄昏の姫巫女と呼ばれていた幼き叔母、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアに。

「顔といい、名前といい、青と緑のオッドアイといい・・・・・・それに神楽坂のカグラはガトウさんを思い起こすけど・・・偶然か？」

確か父の仲間の一人、ガトウのフルネームはガトウ・カグラ・ヴァンデバーグだった筈。とても偶然には思えない。

「タカミチは確か明日帰ってくるんだけ・・・・・・聞いてみるか」

そこで思い出した。今日からアリスは何処で寝れば良いのか、ホテル暮らしと言う筈もないだろうから、恐らく学園長が用意している筈なのだが・・・・・・。

「何か嫌な予感がするなぁ・・・」

その予感が現実のものとなるまで、残り7時間。

「さて、随分と愉快なクラスだな」

名簿を確認し終えたアリスは愉快すぎるクラス構成に苦笑を隠せなかった。

「（闇の福音と、神鳴流剣士、忍者に、関西呪術協会の長の娘・・・果ては幽霊か）」

まだ何かあるのは確かだろうと思うと笑いが止まらない。トンでもないクラスの副担任になったものだと思いつつ、担任になってしまった弟の冥福を祈った。

「これは、仕事の報酬を上げて貰わないと釣りに合わないかもね」

その事も後で住む場所を聞くときに追求する事にして、早速2時間目から始まる２－Ａの数学の授業の準備に入るアリスの表情は・・・・何処か楽しそうだった。

二話　「歓迎、アリス先生」（後書き）

２－Ａの副担任就任おめでとうアリス先生。
という事で、次回はアリス先生の歓迎かい・・・にしたいのですが、
テスト期間ですので、ネギ君が図書館島へ行きます。
アリス先生はどうするのか？

三話　「力試し」

英雄と女王の子

三話
「力試し」

何事も無くアリスの初授業を終え、その日の仕事は終わった。
帰りのＨＲが終わって直ぐにアリスは学園長室に来て今日からの寝床は何処なのか聞き出すことになった。
学園長室の前に来てノックをすると、中から「入ってよいぞ」と言う声が聞こえたので、中に入ると満面の笑みを浮かべた学園長と、苦笑しているネギの指導教員の源しずなが待ってる。

「待っておったぞアリス君、用件は寝泊りする場所じゃろ？」

察していると言いたげな口調、若干カチンと来るものがあるが堪えて溜息を吐くと改めて今日からの住まいの事を尋ねる。

「うむ、今日からアリス君が住む場所なんじゃが・・・、職員寮に空きが無くてのぉ、それでスマンがネギ君も暮らしている女子寮に部屋を用意した」

渡された資料には女子寮管理人室と書かれている。まさか其処に住めと言う気なのだろうか？

「あの・・・幾ら女顔の私でもこれは」
「自覚はあるのじゃな・・・・・、しかしの、女子寮に部屋を用意したのには理由がちゃんとあるぞ？　女子寮には２－Ａの生徒が

住んでおるから、護衛に関して一番やりやすいと思ってのぉ」

尤もらしい理由だが、楽しんでいるのは確実だろう。しかし、確かに護衛する上でこの場所は都合が良いのも事実で、断る理由が見つからない。

「・・・判りました。釈然としませんが、今日から其処に住みます」

「よろしく頼むぞぃ、これが鍵じゃ」

渡された鍵をポケットに押し込んで用事はもう終わりだと学園長室を出ようとした時、まだ何か用事があるのか学園長が呼び止めた。

「今夜なんじゃが、麻帆良学園の魔法先生及び魔法生徒との顔合わせがある。２３時半に世界樹前広場に来なさい」

顔合わせで何をするのか凡そ予想できた。準備の都合もあるので、アリスは早々に学園長室を立ち去り、女子寮管理人室に向かうのだった。

余談だが、女子寮管理人は前年に定年退職しているため、現在は不在。部屋も空き家状態になっていたらしい。

麻帆良学園中等部女子寮管理人室は女子寮の裏に建っていた。見た目は普通の一軒やだが、中に入ってみると管理人室だというのが頷ける。

女子寮全体の防犯システムの制御装置や防災システムの監視装置等々、様々な機械が並んでいる。

機械全ての電源がＯＮになっているという事はアリスがこれを管理しろという事なのだろう。当然するつもりでいる。

「さて、二階の一部屋を寝室に使って、隣りの部屋に装備を保管するか・・・」

家の周りには防犯結界及びトラップ結界を張っておいたので、盗難にあう心配は無い。

「必要な物はこれから何日か掛けて揃えるから良いとして・・・・・こんな所か」

漸く整理を終えて時計を見ると２１時を回っていた。

一先ず食事にする事にしてキッチンに入ると影から食材を取り出して適当に調理する。明日は食材を買い揃えておく必要があるなと考えつつ、完成させた夕飯を平らげた。

因みに、影の中に入っている食材は戦場にいる時用の食料として保管しておいたものなので、滅多な事では使わない。

「いただきます」

夕飯を済ませると２２時を回っていたので、そろそろ行くかと準備して管理人室を出る。

世界樹広場に着くと自販機で買っておいた缶コーヒーを飲みながら月を眺めて時間を潰していた。

「早いのぉ、待たせたなアリス君」

待ち合わせ時間の５分前には真帆良学園の魔法先生、魔法生徒の主だったメンバーと学園長が着ていた。

魔法生徒の中には２－Ａの生徒も居たが、予想していたため驚く事はない。サッと来ている全員を見渡して学園長に向き直った。

「それで、私が此処に呼ばれた理由は力試しで合ってます？」
「気付いておったか・・・その通り、君の活躍は此処に来ている殆どの者は知っておるが、一応実際に目で見て知ってもらいたいのじゃよ。2代目サウザンドマスター候補と呼ばれる君の実力を」

学園長の言葉で少しだけアリスの眉がピクリと動いたのだが、気付く者は一人も居ない。更に、少しだけ機嫌が悪くなったのだが、矢張り気付く者は誰一人として居なかった。

「それで、誰がお相手を？　正直、此処に来ている人たち全員を見る限り、全員一斉に掛かって来られても全力を出すに値しませんが」

と言うより、此処に来ていない魔法先生、魔法生徒も含めて、真帆良学園の魔法関係者全員が相手でもアリスには無傷で勝てる自信がある。

「本当なら高畑君に相手をしてもらいたかったのじゃが、今は出張で居らんからの。ガンドルフィーニ君、刹那君、高音君、君達で相手をしなさい」

丁度先ほどのアリスの言葉でカチンと来ている三人を名指しした。確かにガンドルフィーニも高音もアリスの活躍は知っているが、自分達だって真帆良学園で修行して強くなったという自負がある。

刹那については、刹那自身はアリスの事は余り詳しく知らないが、それでも木乃香を守るという決意の下で必死に修行しているのだ。それを否定するような言葉に不快感を覚えていた。

「3対1ですか・・・構いませんけど」

影の中から“姫”を取り出してダラリと下げたまま構えている3人と向き直る。

「・・・学園長」
「なんじゃ？」
「30秒もいりませんよね？」

それが合図となった。ガンドルフィーニが魔法銃を抜き、高音が影操術を使って影を伸ばし、刹那が夕凪を抜いた。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス・・・」

アリスの詠唱を聞いて刹那が瞬動に入った。魔法使いに詠唱をさせて魔法を使われると厄介だ、その前に倒す。

「甘いね」

だが、詠唱中だと言うのに瞬動に入ったアリスは刹那の後ろに回り、“姫”の柄で後頭部を殴って意識を刈り取った。

「来たれ深淵の闇　燃え盛る大剣」

アリスに向かって影が刃となって伸びる。高音の影操術だと判断して飛び上がると虚空瞬動を使って高音の背後に着地、刹那と同じように意識を刈り取った。

「闇と影と憎悪と破壊　復讐の大焔」

銃声と共に迫る魔法銃の銃弾を“姫”で弾き、再び瞬動を使う。

「我を焼け　彼を焼け　そはただ焼き尽くす者」

アリスが後ろに回るのは予測していたのだろう、直ぐにその場から離脱してアリスの一撃を回避したガンドルフィーニだったが、次の瞬間、その顔が絶望に染まった。

「奈落の業火！　術式固定、黄昏の剣　魔法付与！！」

固定された魔法の塊が“姫”に吸収された時、“姫”の色が赤黒く染まり、黒い炎に包まれた。

「術式付与完了　是、“地獄の焔姫”」

アリスが“姫”を動かす度に炎が空気を焼く、この世の有りとあらゆる物を焼き尽くすのではと思える程のおぞましい剣がガンドルフィーニに向けられた。

「降参してください。この魔法は手加減ができませんので、殺してしまいますから」

冷たい眼光も相まって、ガンドルフィーニは己が生命の危機を感じたために降参を口にした。

模擬戦を見ていた全員が言葉を失っていた。ガンドルフィーニも高音も刹那も実力的に魔法先生、魔法生徒の中では高い方だ。それを本当に３０秒も掛からずに終わらせてしまうアリスの実力に恐怖すら覚えた。

「それと、一つだけ学園長に言っておきます」
「何じゃね？」
「私は、二代目サウザンドマスターになる気も、マギステル・マギになる気もありませんので」
そう言ったアリスの顔は、ツマラナイ戦いをしたという事と、先ほど二代目サウザンドマスターと呼ばれた事による不満からの不機嫌そうな物になっていた。

三話　「力試し」（後書き）

短いですけど、第三話更新です。
次回から学年末試験編が始まります。

四話　「闇の福音」（前書き）

大変遅れました！
ネタが浮かばず難航したり、インターネット使えなくなったりで大変な思いをしましたが、漸く更新です。

四話　「闇の福音」

英雄と女王の子

四話

「闇の福音」

力試しの夜が明けて翌日、職員室で授業の用意をしていたアリスはふと何を思ったのか屋上に向かった。屋上に行くと２－Ａの生徒が二人、金髪幼女とライトグリーンの髪のロボットが揃ってアリスを待っていたらしく、アリスが到着すると金髪幼女がニヤリと哂った。

「来たか、アリス先生」

「まぁ、魔力に指向性を持たせて放出したら流石にね・・・・・・私を呼びつけたという事はスプリングフィールドの人間に用があると見ていいのかな？　闇の福音」

険呑な空気が屋上を支配するが、その空気を破ったのは金髪幼女

「いいかげん金髪幼女はやめろ！！」・・・・・・闇の福音エヴァンジェリンだった。

「アリス・スプリングフィールド・・・・・・貴様、私のモノにならんか？」

「へぇ、てっきり血が欲しいとでも言われるのかと思ったけど」

「それは弟の方から貰うさ・・・・・・だが、貴様は別だ。魔法界でも有名な最強クラスの魔法剣士、二代目サウザンドマスター最有力候補と呼ばれるほどの実力を持つ貴様はこの最強の魔法使いである闇の福音にこそ相応しい」

成る程、父に聞いた通りの性格をしている。そして、何より・・・・・弄りやすそうな空気を醸し出している。

「私は誰かに仕える気は無い。私の剣と翼を預けるに相応しい者はこの世に存在しないから・・・・・それは闇の福音、あなたとて同じだ」

「ふん、成る程・・・・・二代目紅き翼が何処にも属さない理由はそれか」

二代目紅き翼とはアリスが立ち上げた組織で、嘗ての大戦で活躍した父の紅き翼の二代目という事でその名を貰っている。メンバーはアリスとアリスの従者、ラカンとタカミチの四人だけだが、その実力は既に魔法界最強の名を不動のモノとしている。

「メガロメセンブリア元老院が煩いけどね」

「あそこの石頭共ならそうだろうな・・・・・大方英雄の子を手元に置いておきたいのだろうさ」

「英雄の子・・・・・ね」

それを言うのなら災厄の魔女の子でもあるのだが、という言葉を飲み込んだ。

「それにね、私には大きな夢・・・・・人生の全てを掛けてでも成し遂げなければならない大きな目的があるから」

「ほう？　貴様程の実力者が人生の全てを掛けている夢か・・・・・面白い、聞かせろ」

「う～ん・・・・・余り言いたくないな。知っているのは私の従者一人だけだし、他の人に言うのはね」

「この私が誰かに洩らすとでも思ったか？」

「それは無いけど・・・・・・ううむ」

如何したものかと悩んだ末、アリスは指をパチンと鳴らして外部との完全遮断結界を張った。これで学園長と言えど遠見魔法を使っても結界内を見ることは出来ない。

「それで良い、聞かせろ・・・・・・それと茶々丸、お前も今から聞く事は全てメモリーから削除しておけ」

「かしこまりました」

「それじゃ、私の目的は・・・・・・」

アリスが語り終えてから暫く沈黙が降りた。いや、エヴァンジェリンだけが俯いて身体を震わせている。その（薄い）胸の内に溢れる感情が何なのかアリスには窺い知れない。

「クッ・・・・・・フフフ、ははははっはははははっはははは！！！」

だが、俯いていた顔を上げたかと思うと突然大笑いし出した。何が面白いのかお腹を抱えて転げまわっている。

「無謀！　無謀すぎて笑える筈なのに、貴様が言うと何故こうも実現してしまうのではと思えてしまうのか、実に愉快だ！」

そう言って笑い転げているエヴァだったが、唐突に真剣な顔になるとアリスを見上げた。その瞳に宿っている光は明らか有無を言わせないと言っている。

「貴様、本気でその夢を叶える心算か？　叶えられると思っている

のか？」

「叶える心算だし、思っているのではなく叶えるよ絶対に・・・・・・それが母さんと父さんに誓った私の誇りだから」

絶対の自信を持って言い切ったアリスに対してエヴァはもう笑わなかった。彼女はそういった誇りを持ち、尚且つその為に絶対の信念を掲げている人間は好ましく思っているのだ。だから笑ったりしない、それはその者が持つ誇りや信念を侮辱する行為だからだ。

「フン、良かろう。貴様がその夢を実現する日を楽しみに待たせてもらおうか」

「ああ、私が生きている間に必ず実現させて見せるよ」

アリスの言葉に満足したのかエヴァは珍しく授業に出ると言って屋上を後にした。

残されたアリスは徐に携帯電話を取り出して何処かに掛けた。暫くのコール音の後に聞こえて来たのは女性の声、ネカネではない。

「久しぶり・・・・・・私？　元気にしてるよ。今は旧世界の日本にある麻帆良学園に居る・・・・・・うん、前に話したでしょ？弟の事、麻帆良学園の学園長の依頼でネギのサポートをする事になってね・・・・・・期間？　ネギの修行が終わるまでだけど・・・・・こっちに来る？　いや、それは待って欲しいな。最低でも来年度が始まるまで・・・・・・うん、それでね、闇の福音に会った・・・・・・いや、焦んなくても大丈夫だよ。何もされなかったし・・・・・だから大丈夫だって、心配性だなぁ・・・・・・え？　いや、だから来るのはもう少し待ってってば・・・・・・うん、うん、それじゃそろそろ授業があるから切るよ・・・・・・うん、それじゃあね・・・・・・シルヴィア」

電話を切ったアリスは携帯を懐に仕舞うと空を見上げる、曇り一つ無い快晴空だった。

「期待された以上、気張るしかないよね・・・・・・母さん、父さん」

教室に戻ると少し騒がしくなっていた。委員長の雪広あやかに事情を聞いてみるとネギとバカレンジャー5人、木乃香の7人が行方不明になっているとの事だ。

「行方不明ね・・・・・・何が起きているのやら」

如何した物かと考えていると校内放送でアリスが学園長室に呼ばれた。ネギ達の事だろうと思って場の収集をあやかに頼むと教室を出て学園長室に向かった。

アリスが学園長室に入るとそこでネギ達の現在地を聞かされた。同時に無事であることと学年末試験までは戻らない事も。

「図書館島の最下層ね・・・・・・まぁ、学園長が安全を保障するなら問題無いでしょうから、私は学年末までネギの代わりに2－Aの面倒を見ますよ」

「すまんのう、任せるぞい」

「ネギの事を任せるのですし、ギブアンドテイクです」

話を終えるとアリスは教室に戻ってネギ達の無事を説明し、戻るまでの間はアリスがネギの代わりを務める旨を伝えた。

多少のゴタゴタがあったものの、その日一日を無事に終えたアリスは仕事を終えて帰宅しようとしていたのだが、教員玄関で再びエヴァに会った。

「如何した?」
「いや・・・・・貴様の実力を実際に見ておきたくてな、先日の力試しには行かなかったから人伝でしか知らん。貴様があれ程の夢を語ったのだ、それ相応の実力が無ければ不可能・・・・・期待するからには実際に見て知っておく必要がある」
「成る程・・・・・・」

要するに自分と戦えと言う事だ。ならば話は早い、一度管理人室に戻ってスーツから戦闘服に着替えてくると言ってエヴァと別れると早足で帰宅する。
管理人室に戻ったアリスはスーツを脱いで戦闘に使う拳闘士の服を着る。そして立て掛けている“姫”を影の中に入れるとアクセサリーケースから紅い翼を模ったピアスを着けて黒銀の指輪を左手薬指に填めると少しボロボロの茶色い外套を羽織って準備を終えた。

「・・・・・よし」

全ての準備を整えたアリスは足元にある自身の影に沈み出した。それは魔法の中でも高度な技術を要する転移魔法の一つ、影を使った転移魔法だ。
転移した先はエヴァの住んでいるログハウス近くにある適当な木の影、そこから出てきたアリスはログハウスの扉まで行くとノックをして返事を待った。
少しの間が開いた後、中からメイド服を着た茶々丸が出てきた。

「お待ちしておりましたアリス先生」
「待たせたね、エヴァンジェリンは?」
「マスターは既に別荘でお待ちです、先生が到着次第ご案内するよう託っております」

こちらです。と言って案内されたのはログハウスの地下、その一室にある球体の中には城や海などが入っている。

「へぇ、別荘ってこれの事なんだ・・・・・魔法界でもかなり高額の代物を持っているとは、恐れ入るね」

中に入ると外の一時間が内部では一日になるというマジックアイテム、高度な技術と魔法を駆使して作られた代物で、まほネットでも一応売っているが値段が有り得ない位高いのだ。その額は物によって多少の上下はするが、一番安い物でも数世代先まで遊んで暮らせる程の金額で取引されている。

「其方の魔方陣に入ってください。それで中に入れます」

言われた通り茶々丸と共に魔方陣の中に入ると転移独特の感覚を感じた。次の瞬間には周囲の景色が変わり、上を見れば青空が広がっていて、遠くには海や城などが見える。

目の前にある吊り橋を渡って階段を降りるとビーチに出た。そこでは腕を組んで此方を不機嫌そうに睨みつけるエヴァが待っていた。

「遅い！」

「準備してから行くって言っておいたんだから、文句を言われる筋合いは無い」

その通りなのだが、暫くエヴァの機嫌は直らなかった。

漸くエヴァの機嫌が直って改めてアリスの実力を測る事となった。

アリスの相手はエヴァと茶々丸、それとエヴァの初代従者チャチャゼロの三人（？）

「ケケケケ、テメェガさうざんど・ますたーノムスコカ？　アンマニテネーナ」

チャチャゼロの見た目こそ小さな人形だが、侮る事無かれ。闇の福音の初代従者として長き時を共に闘いぬいた歴戦の戦士だ、その実力は並の魔法使いとは比較にならないほど高い。

既に臨戦態勢となっている三人を見据えながらアリスは影から“姫”を取り出して構えると深呼吸をした。

「・・・・・・いくぞ！」

初っ端から瞬動でエヴァ達の背後に回ったアリスは無詠唱の身体強化魔法を使った。

「（戦いの葬送曲！）ボルグ・ボルグクス・ボルメテウス！」

更に高速詠唱を併用しながら斬撃を繰り出すが、チャチャゼロの持つ大剣に止められる。更に茶々丸が持っていた大型銃の銃口から弾丸が打ち出されたが瞬動でかわすと殺気を感じて上空に上がった。

空には既にエヴァが不敵な笑みを浮かべながら飛んでいて、更に詠唱までしていた。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！」

「チッ！　契約に従い　我に従え　高殿の王。来たれ　巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて　走れよ稲妻！」

「来たれ氷精　闇の精。闇を従え吹けよ常夜の氷雪！　闇の吹雪！！」

先に放たれた闇の吹雪を虚空瞬動でかわすと既に終えている呪文とは別の魔法の呪文を唱え始める。

「来たれ深淵の闇　燃え盛る大焔。我を焼け　彼を焼け　そはただ焼き尽くす者！」

二つ目の呪文を終えると頭にチャチャゼロを乗せた茶々丸がブースターを噴かせて飛んでくるのが見えた。同時にエヴァの方から飛来する氷の矢が凡そ１０１本、だが遅すぎると哂ったアリスは再び虚空瞬動でその場を離脱すると更に詠唱を重ねる。

「影の地統ぶる者　スカサハの　我が手に授けん　三十の棘もつ霊しき槍を！」

これで準備が整った。飛んでくる氷の矢と銃弾をかわしながら最後の仕上げを行なう。

「千の雷、奈落の業火、雷の投擲！　術式混合固定、黄昏の剣　魔法付与！」

三つの魔法が混ざり合って固定され、それが“姫”に吸収された。すると“姫”を中心に激しい雷を纏った黒い炎が巨大な槍の形に広がる。

「術式付与完了　是、“魔槍　焔雷神”」

完成したアリスの魔法を見たエヴァの表情が驚愕に彩られた。当然だろう、見覚えのある方法で作られた魔法なのだから。

「まさか、それは“闇の魔法”！？」

「原型はね・・・・・・いくぞ！！」

巨大な焔の槍を自在に操るアリスは終始三人を圧倒していた。槍が巨大すぎる分、動きが鈍重になると思っていたエヴァだが、アリスの使う戦いの葬送曲が思いのほか優秀だったため動きに然程変化は見られなかった。

更に虚空瞬動を駆使して動き回るアリスは茶々丸のブースターと銃を破壊して戦闘不能にし、茶々丸が落ちる前に飛び上がってアリスに切り掛かってきたチャチャゼロも強化された足蹴り一つで呆気なく戦闘不能。

残ったエヴァは元々魔法使いタイプ、魔法剣士タイプのアリスとは相性が悪い。一応エヴァも魔法戦士タイプと戦う為の心得はあるものの、相手が悪すぎた。

「チィ！　流石は世界最強クラスか・・・・・・」

元々後衛の魔法使いタイプの自分では近接戦において同等の実力、若しくはそれに近い実力の相手にはエヴァも勝ち目は無い。

喉元に突きつけられた焔の槍を冷や汗掻きながら見ていたが、勝敗が決してしまった以上は仕方が無い。素直に降参したエヴァは目の前にいるアリスを見上げた。

「流石は奴の息子か」

「伊達に先代の紅き翼メンバーから直に魔法や戦い方を教わってないよ」

成る程、確かに世界最強だ・・・・・・。その時、彼女はそう思ったらしい。

四話　「闇の福音」（後書き）

次回は木乃香と絡ませてみますかね……。

オリキャラ設定（前書き）

アリスのプロフィールが見たいとの事ですので書いてみました。

※5月11日、編集しました。

オリキャラ設定

主人公

名前：アリス・スプリングフィールド

年齢：１７歳

魔法発動体：黄昏の剣“姫”、指輪、ピアス

属性：火、闇、雷

発動キー：「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス」

戦闘スタイル：魔法剣士

従者：４人

アーティファクト：ガントレット型、名称『えいゆうの籠手』・剣型、名称『キシノアカシ』

容姿：赤に近い金髪を腰まで伸ばし、三つ編みにして先端を赤いリボンで結んでいる。顔は中性的で、ナギとアリカを足して２で割った感じ。瞳の色はネギと同じだが、とある事をした時だけ明日菜やアリカと同じ青と緑のオッドアイになる。
　主にスーツを着ているが、戦闘中は拳闘士の服に茶色い外套を羽織っている。

詳細：主人公でネギの兄、ナギ・スプリングフィールドとアリカ・

アナルキア・エンテオフュシアの息子で、実力は父やその仲間に並ぼうかという程で、所謂最強クラス。
　とある野望を胸に秘めており、その野望の詳細を知っているのは従者只一人だけ。
　魔法使いが目指す「立派な魔法使い（マギステル・マギ）」になる気は一切無いのだが、魔法界ではアリスをマギステル・マギにする心算でいる。また、麻帆良学園に来てからは魔法先生や魔法生徒にまで期待されてウンザリしている。
　日本には何度か来た事があり、父の友人の近衛詠春とも顔見知り。それどころか父の仲間とは全員顔見知りである（生きている人物のみ。ガトウとも幼い頃に会った事があるが、余り覚えていない）。

声優：保志総一郎

画像
＞ｉ３０４４７―２２９６＜
Ｒａｉｎ様提供

アリスの従者

名前：シルヴィア・オーギス

年齢：２１歳

魔法発動体：指輪、杖、宝石

属性：風、氷、光

発動キー：セイ・セイヴ・リオ・セイクリット

戦闘スタイル：魔法使い

アーティファクト：宝杖型、名称『宝石の主』

詳細：アリスの従者で魔法世界出身の魔法使い。アリスがリーダーを務める二代目・紅き翼のメンバーで、主にアリスとタッグを組んで戦い、アリスの補佐をメインにして戦っている為に“最強を補佐する最強の補佐”という呼び名が付けられている。
単独戦闘でも最強クラスの魔法使いで、アリスからは全面的な信頼を寄せられている。
彼女の生まれを知っているのはアリスとラカン、タカミチと本人のみで、魔法界でも謎の多い人物だと有名。

声優：草薙順子

画像

＞ｉ３０５６１―２２９６＜

Ｒａｉｎ様提供

オリキャラ設定（後書き）

設定は偶に更新します。

９月２９日更新：そう言えば、シルヴィアの声優設定に載せてる草薙順子さん、知ってる人って居るのかな？

五話　「和風美人」（前書き）

今回の話はあまり自身無いや……。

五話　「和風美人」

英雄と女王の子

五話

「和風美人」

エヴァンジェリンとの模擬戦を終えて別荘内にある城のテラスで紅茶を飲んでいたアリスとエヴァ、そこでアリスの使った魔法について尋ねられた。

「先ほどは“闇の魔法”が原型と言っていたな、どういう事だ？」

「どういう事も何も、そのまま・・・・・“闇の魔法”は固定した術式を体内に取り込んで術式兵装を施すというものだよね？」

「うむ」

当然、“闇の魔法”を作り出したエヴァンジェリン本人がその詳細を知らない筈が無い。アレはエヴァンジェリンの固有技法なのだ。

「そして、私が使ったのはその固定した術式を魔法発動体として使用している剣に取り込んで使った物・・・・・そうだね、術式武装って言った所かな」

ラカンに教えてもらった闇の魔法を基に開発したアリスオリジナルの魔法、それが術式武装だ。

「これの利点は身体に術式を取り込むのと違って術者に対する負担が一切無いこと、弊害として術式武装に使った魔法発動体は使用中に魔法発動体として使う事ができないんだ」

その弱点を補う為に普段からアリスは“姫”以外の発動体も持ち歩いているのだ。

「その指輪とピアスが発動体か・・・・・しかし、貴様の膨大な魔力に耐え切れるのか？」

「市販の物だとすぐに壊れるけどね、これ等は特別製なんだ。材料から製造から全て拘って作った最高級品だよ」

手に入れるのに苦労したが、指輪もピアスもミスリルという魔法界でも貴重な金属で凄腕の錬金術師に作ってもらったのだ。お陰で強度に関して言えばネギの持っているナギの杖と同等の仕上がりになったのだ。

「ふん、基が私の固有技法とは言え、それは既に貴様の固有技法と言っても良いかもしれんな」

「一応、魔法界では私の固有技法扱いになってるよ」

その後は外に出れるようになる時間まで雑談をしたりエヴァンジェリンをからかったりと、有意義な時間を過ごした。

なお、外に出た時にからかわれた仕返しとばかりにエヴァンジェリンが放った氷爆をカウンターで跳ね返したアリスは瞬動でその場を去った。残されたのは返された氷爆をまともに受けて目を回しているエヴァンジェリンと、それを見てエヴァンジェリンが楽しそうにしていると満足している茶々丸と、相変わらず笑っているチャチャゼロだけだった。

学年末試験は無事に終わった。試験前にはネギ達も帰ってきて、２－Ａは最下位脱出し、見事学年１位になった。そのためネギは晴

れて試練合格、来年度からアリスと共に今の２－Ａ、新年度の３－Ａの正式な担任、副担任になる。
　試験が終わって終業式も無事に済まされると学園は春休みに入った。アリスも春休みになると仕事が殆ど無くなるのだが、その日は少々用事があって学校に来ていて、その用事を終えて帰ろうと玄関に向かった。

「アリスさんや～」
「ん？」

　靴を履き替えようとしていたアリスの後ろから声を掛けられた。振り向いて見ると見るからに高級そうな着物に身を包み、薄くだが化粧を施した木乃香が居た。

「木乃香ちゃん？　如何したのその格好は・・・・・・」
「これはな～・・・・・って、こんな事してる場合やない！　アリスさんこっち来てや！」

　木乃香に手を引かれて校舎内に向かって走り出したアリスは後ろから木乃香を呼んでいる声が複数聞こえてきた。何事かと思って見てみると黒服の男が数人、木乃香を探しているではないか。
　漸く落ち着ける場所（教室）に来て呼吸を整えている木乃香を見てアリスは考え事をしていた。初対面の時にも思ったが、本当に木乃香の母親とそっくりだと。

「それで、何で逃げたの？」
「あ～、それがなぁ」

　何でも今日は学園長が勝手に決めたお見合いの日だったらしく、それから逃げてきたのだとか。お見合い相手の写真を見せてもらっ

たが、その殆どが年上で、中には木乃香の倍ほども年の離れた男も居る。

「成る程ね、それは逃げるのも無理は無い」
「そやろ～、うちはまだ子供なんやから、人生のパートナーを決めるんは早すぎやと思うんよ」
「確かに、今年１５になる孫娘にお見合いを勧めるのは如何かと思う。相手の家柄を見る限り学園長の後釜候補とかじゃないかな？」

医者の息子に弁護士の息子、国会議員の孫までいた。

「せや、うちかて恋愛したいんやから、お見合いで相手決めたないえ」
「花も恥らう乙女っていう事？　思春期だし確かにそうかもね」
「そやえ～！」

まあ、木乃香には言わなかったが、他の思惑もあるのだろう。だがそれは裏の事情なのだし、表の世界の住人である木乃香には知る必要の無い事だ。

「そういえばアリスさん、恋人おらん言うてたけど、好きな人とかおらんの？」
「私？　・・・・・考えた事無いかな。父さんや母さんが居なかったから、代わりにネギや従兄妹の生活費を稼ぐのに忙しくて恋愛してる暇なんて無かったよ」

女性の従者が居ると言っても恋愛関係ではないので完全に恋愛初心者と言っても良い。

「はぁ～、凄いんやな～。うちとそんなに年違わんのに」

「家庭が特殊だったからね、どうしてもそうなってしまうんだ」

感心している木乃香に照れながらアリスはそう返した。正直そういった事で褒められたり感心される経験が殆ど無いのだ。

「さて、そろそろ昼食時なんだけど・・・・・何処か食べに行く？　折角だし奢るよ」

「ええの？　ほな一旦着替えに帰らな」

「そうだね、一緒に行こうか」

「はいな！」

追ってが居ないのを確認しながら学校をでたアリスと木乃香は女子寮の前まで行く。アリスはそのまま着替えに入った木乃香を女子寮の前で待ち、私服に着替えてきた木乃香を連れて学園都市内のレストランに向かった。

「それにしてもアリスさん、エスコート上手いなぁ」

「一応、イギリス人だからね。女性のエスコートくらい出来なきゃ」

ハーフだけど、とは口にしないで運ばれてきたパスタを食べる。・・・・・中々美味だ。

「この店のご飯上手いなぁ。少しレシピ盗もうかな」

木乃香も頼んだ魚定食が以外に美味しかった為、そのレシピを盗もうと真剣に味を賞味している。その光景を見ながら、アリスは木乃香の容姿を自分なりに評価している。

「（木乃香ちゃんみたいな子を大和撫子って言うのかな・・・・・・和風美人って言葉が似合う木乃美さんの娘だし、将来は確実に美人

確定だろうね）」

まだ子供の木乃香は美人というより可愛いと言った表現が似合うが、後数年もすれば美人になるだろう。

「ん？　アリスさん、うちの顔に何か付いとる？」

「ああ、いや・・・・・本当に木乃美さんに似ていると思ってね。将来は確実に美人になるだろうなぁっと」

「いややわ～、お世辞でも嬉しいやん」

アリスの言葉に頬を赤らめる木乃香だが、満更でもないのか上機嫌で魚定食に箸を進めた。

「そう言えば、アリスさんはいつからお母様やお父様と知り合いなんや？」

「ええっと、詠春さんは生まれた頃からの知り合いだし、木乃美さんと初めて会ったのは確か・・・・・ネギが生まれる前だから、私が６歳の頃だね」

その頃は木乃香も４歳になっているのだが、木乃美と会った時は詠春と木乃美の二人しか居なかった。

「ああ、そうだ。あの頃たしか、私と年の近い娘が居るって言ってたね、今考えるとそれって木乃香ちゃんの事だ」

「ん～、その頃の事はあんま覚えてへんなぁ」

１０年も前の事だ、覚えてないのも無理ない。

「１０年前だからね、仕方ないよ」

「そやな～」

それから、食事を終えた二人は学園都市探索をする事となった。
来たばかりのアリスを木乃香が案内すると言ったため、アリスもそれに甘える事にしたのだ。

「やっぱり広いね、噂以上だ」
「世界最大の学園都市やからなぁ、他にこんだけ広い学園都市はあらへんやろ？」
「うん、学園都市ってだけでも珍しいのに、更にこれだけの広さとなると滅多に無いよ」

旧世界、魔法界の両世界に幾つかある学園都市をピックアップしてみるが、やはり麻帆良学園は最大規模だ。他の学園都市だと大きくても麻帆良学園の半分ほどが最大、故にこの大きさは今でも驚愕してしまう。

「他の学園都市かぁ～、いっぺん行って見たいな～」
「此処ほど大きくはないよ？」
「それでもや、他の学園都市って興味あるやん」

そういうものなのだろうか、と考えてしまうが、木乃香の表情を見る限りそうなのだろう。

「機会があったらその内、連れて行ってあげるよ」
「ホンマ！？」
「うん、まあ機会があればだから、あまり期待しないでね」
「それでもええよ！　楽しみにしてるな？」

笑顔で指きりさせられてしまった。何故か木乃香の笑顔には逆らえないアリスだったが、何処と無く心地良いと感じていた。

「さて、そろそろ寮まで送るよ」
「ほか？　ほな頼むなぁ」

夕方になり、そろそろ木乃香も帰らなければならなくなったので寮まで送る事にした。道中も他愛ない話をして、寮の前に着くとそのまま分かれてアリスは管理人室に戻った。
管理人室に帰ってきたアリスは軽く夕食を済ませると庭に出て“姫”で素振りを始めた。

「ふぅ・・・・・木乃香ちゃんね。確かに凄い魔力だった」

今日一日木乃香と共に居て感じたのはその膨大な魔力だ。アリスをも上回るその魔力の大きさに若干嫉妬してしまう。

「本人は裏の事を一切知らないんだっけ・・・・・詠春さんの教育方針も解らなくはないけど、危険すぎる」

だが、だからこそ・・・・・。

「私は守らなければならないんだろうな・・・・・あの笑顔を」

木乃香の笑顔を思い出す。その時、アリス自身は気付かなかったが、一瞬だけ心臓が高鳴ったのだった。

五話　「和風美人」（後書き）

次回からは多分ネギＶＳエヴァの話になります。……どう書こうかなぁ（汗）

六話　「桜並木の吸血鬼・始動」（前書き）

早く修学旅行編に行きたい……。

六話　「桜並木の吸血鬼・始動」

英雄と女王の子

六話

「桜並木の吸血鬼・始動」

春休みが終わり、新年度が始まった。元２－Ａは３－Ａとなり、ネギとアリスも変わる事なく担任、副担任として就任した。

『３年！』

『Ａ組！』

『ネギせんせー！　アリスせんせー！！』

金○先生？　そう思ってしまったアリスだが、それを知っているというのも凄い。

それはさて置き、新年度最初のＨＲは身体検査だ。アリスとネギは教室から出て生徒達を体操着に着替えさせなければならないのだが。

「それでは、身体検査がありますので、みなさん服を脱いでください！」

空気が凍った。アリスも思わず凍ったが、直ぐに我に帰るとネギの首根っこ引っ掴み瞬動で教室の外に出た。生徒たちの目の前で瞬動を使ってしまったが、この際は仕方ない。

「馬鹿者、脱いでくださいは無いだろう。目の前で服を脱いで下さいなんて何処の変態だ」

「あぶぶ・・・・・ごめんなさい兄さん」

呆れつつ今日の欠席者の確認を始めた。先ほど見た限りだと数席が空いていて、殆どが保険委員のため保健室に行っているのだが、一人だけ違う生徒がいる。

「佐々木まき絵さんが欠席か、あれだけ元気な娘が欠席というのも珍しいな」

出席簿の佐々木まき絵の欄に欠席を付けようとした時だった。廊下の向こうから保健室に行って身体検査の準備をしていた筈の和泉亜子が泣きながら走ってきたのだ。

「大変やー！　まき絵がー！！」

その声を聞いた３－Ａの面々が着替え中なのにも関わらず窓やドアから飛び出してきた。もう少し恥じらいや慎みを持って欲しいものである、と思いつつ、直ぐに顔を背けて亜子を落ち着かせるアリスだった。

「佐々木さんがどうしたのか、落ち着いて・・・ゆっくりで良いから話して？」

「あ、はい・・・・・さっき身体検査の準備する為に保健室行ったんやけど、そしたらベッドにまき絵が寝てて、先生に聞いたら昨日の夜に桜通りで倒れてるんを発見されて運ばれた言うんや」

「そう・・・・・ネギ、私は先に和泉さんと保健室に行ってるから、皆を落ち着かせたら直ぐに保健室に来て」

「う、うん、わかったよ兄さん」

ネギを残し、亜子の案内で保健室に来たアリスはベッドの上で呑

気に寝ているまき絵を見てこっそり魔法面からの診察を始めた。
幸い、貧血で倒れただけのようで命に別状は無い。ただ気になるのは生命力が若干減っている事と・・・・・・。

「（首にある噛まれた跡・・・そこから感じる魔力の残滓は）」

十中八九、吸血鬼の仕業だ。そして、この学園に居る吸血鬼と言えば一人しか居ない。

「（もう行動を起こすのか・・・・・・いや、ネギがこの学園に来た時期を考えると、少し遅すぎる位なのか）」

ならアリスに出来る事は何も無い。これもネギを鍛える良い機会だし、何よりこの後にでも学園長から直々に指示が出るだろう、それに従えば良い。

「大丈夫、本当に唯の貧血みたいだ。もう暫くしたら目を覚ますだろうし、そうしたら何か飲み物・・・そうだね、ポカリスウェットでも飲ませてあげて、鉄分のある食事でも食べれば何とも無いよ」
「ほ、ほんま？」
「うん、多分部活か何かで疲れたんだね。今年の夏には大会だって言うし、余計に練習が大変だったんだろう」

とりあえず魔法の事を話す訳にいかないので適当な理由を付けて亜子を安心させると後ろに居た大河内アキラの方を向いた。

「大河内さん、すまないけどこれでポカリを買ってきてもらって良いかな？」

スーツのポケットから財布を出して１２０円を取り出すとアキラ

に手渡す。

「あ、はい・・・でも、先生が出さなくても私が出しますよ？」
「いや、一応私も先生だからね。生徒の為にこれ位はしないと・・・お願いできるかな？」
「・・・わかりました。行ってきます」

アキラが保健室から出るのとほぼ同時にネギと明日菜、木乃香、鳴滝姉妹、椎名桜子、しずな先生が入ってきた。

「兄さん、まき絵さんは？」
「寝てる、唯の貧血みたいだね」

ネギに簡単な症状等を説明してアリスはしずなの方にも説明をしておく。

「そう、ならこの場はアリス先生とネギ先生に任せても良いかしら？」
「ええ、しずな先生は生活指導の方に桜通りの封鎖を頼んでおいてください」
「そうね、学園長にも話を通しておくわ」

こういう時、しずなが魔法先生で良かったと思う。色々と便宜が利くし、アリスとしても助かる。

「お願いします。私はもう暫く此処にいますので」
「お願いね？」

そう言って保健室から出て行ったしずなを見送ったアリスはふとネギを見る。どうやらまき絵に残る魔力の残滓に気付いた様だ。

「・・・・・・（この辺は、優秀だな。しかし・・・）」

問題はネギが彼女相手に何処まで戦えるかだ。

「（封印されていて全力は出せないとは言え、６００年の経験は・・・才能で覆せるほど、簡単ではない）」

才能はあっても実力が伴っていないネギが、６００年を生きた最強の魔法使い相手に、如何戦うのか、少し楽しみなアリスであった。

放課後、アリスは教室にまき絵を残して簡単な診察をする事にした。一応医学知識もあるので診察する事は出来る。

診察用の白衣を着たアリスは椅子にまき絵を座らせて眼球や顔色、体温などを調べて問題無いかどうかを確認する。

「・・・・・うん、確り寝て水分も摂らせたし、昼食も鉄分のある物を食べたみたいだし、もう大丈夫だね。顔色も今朝より良くなってる」

「本当ですか！？」

「うん、でも用心に今日は早めに寝ること、それと今日と明日は部活を休んだ方が良いよ。一日休んで体の疲れを取れば若いんだし直ぐに何時も通り元気になる」

診察を終え白衣を脱いだアリスは立ち上がると教卓に置いてある自分の鞄の中に仕舞って、代わりにサプリのような物を出した。

「これ、知り合いが製薬会社に勤めていて今度新発売するサプリを貰ったんだ。その中の鉄分のサプリ、とりあえず一週間分ね」

ピルケースに入ったサプリを渡すとそのまま帰る為に身支度を整えた。

「それじゃあ、気を付けて帰るんだよ」

そのまま教室を出て帰路に着いたアリスは真っ直ぐ帰ろうとしたのだが、桜通りの方から魔力を感じたので其方に足を向けた。

桜通りに着いて最初に目にしたのは何故か素っ裸で倒れている宮崎のどかを介抱する明日菜と木乃香だった。

「神楽坂さん、木乃香ちゃん、如何した？」

「あ、アリス先生・・・・・・」

「アリスさんや！」

とりあえず風を引いても困るのでジャケットをのどかに掛けてあげると事情を聞くことにした。

「それで、何が？」

「そ、それが、あたし達が来た時にネギが裸の本屋ちゃんを抱きかかえていて、それで」

「噂の吸血鬼を追いかける～言うて凄いスピードで走ってったんやえ」

やはり動き出した。そう確信したアリスは如何したものかと考えたが、一先ずのどかを抱き上げると寮まで運ぶ事にした。

「すまないけど、宮崎さんの部屋まで案内してくれるかな？　っと、その前に何か着替えがあれば良いんだけど」

「ほんならウチとアスナの部屋に行こか？　ウチの服ならのどかも

着れるえ」

それを聞いて三人揃ってのどかを木乃香と明日菜の部屋に運び、のどかに服を着せている間外に出ていたアリスは外に魔力探知の意識を向ける。すると終わったのか明日菜が部屋から出てきた。

「どうした？」

「あたし、ネギを追いかけてくる」

「・・・・・それが何を意味しているか、理解しているのか？」

「ネギのお兄さんだからそうだと思ってたけど、やっぱりアリス先生も魔法使いなんだ？」

「まぁね、それで・・・・・本気で行く気？　何で君が魔法を知っているのかは予想できるからいいけど、この世界は死と隣り合わせだよ」

「なら！　何でアリス先生はネギを追いかけないんですか！？」

それを言われると辛いのだが、理由を言った所で理解出来ないだろうから言わない。如何言ったものかと悩んでいると痺れを切らしたのか明日菜がアリスを振り切って走って行ってしまった。

「まったく、アスナ叔母さんは・・・・・言い出したら聞かない所は母さんソックリだな。流石は姉妹と言った所か」

呆れてしまうが、明日菜にこの先必ず訪れるであろう試練の為に、これは良い機会なのかもしれない。

「仕方ない、私も行くとするか・・・・・まあ、ネギを助けるのはこの一回きり、この先は助けられると思わないことだ」

言いながら玄関から外に出て瞬動で移動する。既に魔法の気配は

遠くまで行っている、追いつくには飛行魔法を使うしかない。

「っふ！」

瞬動の後、その場で飛び上がり、虚空瞬動を使って更に高く上がるとそのまま触媒無しの浮遊術を行使、ネギが戦っているであろう場所まで一気に飛んでいった。

「さて、どうやら詰みの様だな」

辿り着いたビルの屋上、その隣りのビルの屋上でネギとエヴァンジェリンが対峙していて、エヴァンジェリンの前には茶々丸が立っている。

「少しだけ、手助けしておくか・・・・・ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　影の地統ぶる者　スカサハの　我が手に授けん　三十の棘もつ霊しき槍を！」

展開した４本の雷の投擲を構え、照準をネギと茶々丸の間にセット、ネギが茶々丸が走り出そうとしたその瞬間を狙って放つ。

「雷の投擲！」

寸分違わずにネギと茶々丸の間に突き刺さった雷の投擲、それに若干同様したのかエヴァンジェリンと茶々丸、ネギが動きを止め、その為隙が出来たのか全速力で走ってきた明日菜の飛び蹴りがエヴァンジェリンの魔法障壁を突き抜けてエヴァンジェリンと茶々丸の頬を穿った。

「はぶぅっ！！」

妙な奇声と共に豪快に後ろへ飛んでいくエヴァンジェリンとチャチャ丸の体は地面に激突、勢いを殺せずに滑って漸く止まった。

「っ！　か、神楽坂明日菜!?　それにさっきの槍は!!」

エヴァンジェリンが視線を向けた先、そこは彼女が槍の飛んできた方向から割り出した射出ポイント、そこに居たのは間違いなくアリスだった。だが、当のアリスはと言うと右手の人差し指を立てて口元に持って行き内緒だというジェスチャーをしている。

『すまないけど、私がネギに手助けするのはこれだけ、以降は手伝う気も無いし、私の存在は気付かなかった事にして』

次いで頭の中に響いてきたアリスの声、察するに念話だろう。なのでエヴァンジェリンも同じように念話で返した。

『成る程、この私を弟の成長に使うか・・・・・・面白い』

誰かに使われるというのは本来気に食わないのだが、アリス程の実力者の弟を鍛える為に使われるというのは中々愉快だ。

「よくも私の顔を足蹴にしてくれたな神楽坂明日菜・・・・・・覚えておけよ!!」

ごちゃごちゃと煩かった明日菜にそう言い残して茶々丸に抱えられたエヴァンジェリンは早々に立ち去った。

今後、ネギが如何出るのか、それを考えると若干だが楽しみになってきた。

六話　「桜並木の吸血鬼・始動」（後書き）

実は、アリスの従者候補が六話までで既に出てます。さて、誰でしょう？

七話　「仮契約」（前書き）

今回の話の中に私オリジナルの設定があります。それも込みで楽しんでいただければ幸いです。

七話　「仮契約」

英雄と女王の子

七話

「仮契約」

ネギとエヴァンジェリンの最初の戦いの翌日、アリスは朝から元気の無いネギを見て呆れつつ、サボっているエヴァンジェリンを探しに屋上に向かっていた。

屋上に辿り着いてみれば案の定、エヴァンジェリンが眠そうな顔で座っていた。何処から如何見ても普通の中学生か、下手したら小学生にしか見えないその姿は何処か微笑ましくすらある。

「サボりか？」

「ん？　ああ、貴様か・・・・・・15年も中学生をやっていれば、授業など退屈を通り越して苦痛でしかないからな。それに、昼は眠い」

半分寝惚け眼だった。傍から見れば可愛らしいのだが、如何せん正体を知っている身からすれば笑いを誘う光景だろう。

「事情を知っているから煩く言えないのが空しいね。私の授業にはキチンと出席してるから文句も言えない」

「貴様の授業は別だ、最強クラスの魔法使いが先生をしているという愉快な姿が見られるからな」

苦笑してしまう。確かに世界最強クラスとまで言われたアリスが先生をしてる姿など、タカミチとは別の意味で笑えるのだろう。

「それにしても、貴様の弟・・・・・あの無様な様は何だ？　仮にもナギの息子で貴様の弟なのにも関わらず、あれでは面汚しとしか言えんぞ」

確かにその通りだ。だが、それも仕方が無いのかもしれない、英雄の子と言う事でチヤホヤされ、魔法学校主席卒業という肩書きに慢心しているのだから。

「まあ、実戦経験も無いし、心構えからして出来ていない。何より全てにおいて甘えが存在しているから」

そもそも魔法使い全員が“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”を目指しているなどという妄言を信じ、常に口にしている時点で終わっている。

「そういう事だ、私のような“悪い魔法使い”が存在し、貴様のような“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になる気の無い者だって存在している。それを否定している時点であのガキは甘ちゃんなのだ」

過去何度かアリスにネギを鍛えるようにという依頼が来ていた。だが、その依頼がメガロメセンブリア元老院からと言う事と、例え弟であろうと甘えを許さないアリスはそれを断った。

アリスがネギを鍛えればネギは甘えてしまう。勿論実際に鍛えるのであれば甘えさせる心算は無いのだが、ネギの精神に必ず甘えが生まれるだろうからやらない。それがネギのためだと思うし、アリス自身、弟子を作る気が無いのだ。

「まあ、今回の事がネギに良い経験となるし、精々壊さない程度に

イジメてやってくれ」

アリスとエヴァンジェリン二人で笑っていた。黒い内容であるとはいえ、この二人はそれなりに良い関係を築けたという事なのだろう。

「・・・む？」

「どうした？」

「ああ、何者かが学園結界に侵入してきた」

侵入者ということだ。調べに行く事にしたエヴァンジェリンと別れたアリスは職員室に戻り、今日の仕事を終えた所で夕方となったので管理人室に帰宅、夕飯の用意をしてた所に来客があった。

「おや、木乃香ちゃん・・・どうしたの？」

「あんなぁ、ネギ君がペット飼いたいゆーてな、許可貰いに来たんやえ」

「ペット？　別に構わないけど」

しかし、ネギが突然ペットとは、何かあるのだろう。様子を見に行く事にした。

「一応、そのペットとやらを見に行くから、風呂上がりみたいだから冷えたでしょ？　大浴場にでも行って温まってきなさい」

はいな、と言って大浴場に行った木乃香を見送って、アリスは夕食の準備を中断するとネギが泊まっている明日菜と木乃香の部屋に向かう。ネギは居候の身なのだから、一言お礼を言うのが礼儀だ。

明日菜と木乃香の部屋の前に着くとノックをする。暫く騒がしくなったが、それも収まって明日菜が出てきた。

「あれ？　アリス先生じゃん」
「ああ、木乃香ちゃんからネギがペットを飼いたいと言う事を聞いてね、ちょっと様子を見に来たんだ」
「あ、そっか、アリス先生ってこの寮の管理人だっけ？」
「そういうこと」

部屋に通されて中に入るとネギと白い小動物、オコジョが出席簿の写真を見ていた。

「あ、兄さん」
「ペットを飼いたいって聞いたから来たけど・・・・・・それ、オコジョ妖精だよね？」

ネギが言うには昔助けたオコジョ妖精で、名前をアルベール・カモミールというらしい。そして今はエヴァンジェリン対策としてパートナー候補を選んでいると言う事だ。

「・・・・・・アホ」
「ええ！？」
「一般人からパートナーを選んで如何する、一歩間違えれば死ぬかもしれない世界に、平和な世界に住む彼女達を巻き込む気か？」

若干一般人ではない人物も居るが、大半は魔法のまの字も知らない一般人だ。パートナーとして選ぶのはおかしな話だ。

「いやしかしよぉ旦那、相手はあの闇の福音だぜ？　戦えないにしても手駒は多いに越した事はないんじゃねえか？」
「そういう事は戦える人間、裏の事も知っている実力者を選んでから言え、私もパートナーは既にいるが、彼女は元より戦いに身を置

く人間だからな」
「えええ!?　兄さん、パートナーいるの!?」
ネギは初耳だったらしい、アリスにパートナーがいる事は魔法界でも有名だし、ネカネも一応知っている事なのだが。
「ん、ほら、パクティオーカード」
パートナー本人が写っている方は見せないが、懐から取り出したカードは間違いなくパクティオーカード、それもマスターカードだ。
「えっと・・・・・何？　これ」
ネギはパートナーパートナー言ってる癖にパクティオーカードの存在を知らないらしい。
「仮契約をした時に契約者と被契約者にもたらされる契約の証、マスターカードはパートナーへの身体強化・召喚・念話を使う事が出来て、パートナーが持つコピーカードは強力なアーティファクトへと変化して武器としての行使を可能とする」
仮契約の仕方にも幾つか種類があり、一番簡単な方法としてキス・・・粘膜の接触による契約。その他は血液を用いた方法で互いの血液を混ぜ、それを二人が飲むというもの。後は互いが一つずつ宝石を持ち、自分の魔力を持っている宝石に浸透させた後に相手に渡し、渡されたソレを飲み込むという方法。他にもまだあるが、メジャーな方法と言えばこの三つだろう。血液と宝石に関してはグロかったり、宝石を飲むなど嫌だという意見が多数で不人気だ。
「な、何か・・・宝石とか血液って、如何にも魔法使いって感じね」

明日菜が若干引いていた。無理も無いが、この調子だと本契約の方法は教えない方が良さそうだ。ネギには勿論教えない、本契約とは魔法使いと従者にとって一生に一度の大切な儀式なのだ。

「まあ、それは置いといて、パートナーを選ぶにしても、一般人はやめとく事だね」

何より、ナギ・スプリングフィールドの息子のパートナーとなれば、否が応でも狙われやすくなるのだ。ナギに恨みを持つ者は少なからず存在するのだから、当然なのだが、ネギはそこまで考えていないだろうし、ナギに恨みを持つ者がいるなんて思ってすらいないだろう。

「そろそろ戻るよ。夕飯を作っている最中だったから」
「あ、うん、それじゃあね兄さん」
「お休みなさい、アリス先生」
「うん、木乃香ちゃんにもよろしくね」

ネギと明日菜に見送られて寮を出たアリスは管理人室に戻ると中断していた夕飯作りを再開する。

少し遅くなった夕飯を食べ終えると食器を洗い、立て掛けてある“姫”を持って庭に出ていつも通りの素振りをする。

適度に汗を流すと風呂に入り、パソコンを起動して次の授業の資料を作成、同時にもうすぐ来る修学旅行の日程原案を作り始めた。

凡その作業を終えた所でパソコンの電源を落とし、寝る準備でもしようかといった所で携帯に着信が入る。相手は先日と同じ、アリスがシルヴィアと呼んだ女性だ。

「もしもし？」

『あ、アリス様、そちらは夜ですよね？　夜分遅くに申し訳ございません』

「それは構わないけど、如何したの？」

『此方の仕事は凡そ済みましたので、そろそろそちらに合流しようかと思うのですが・・・』

「そうか・・・・・ならこちらの修学旅行に合わせて来てくれ、日程的に二日目の夜に旅館に来て貰えると助かる。予約は此方でしておくから、旅館には着いたら私の名前を出してくれれば良い。日にちは・・・・・・」

アリスにとって、ネギとエヴァンジェリンの戦いは重要ではない、その後にやってくる修学旅行の方が重要なのだ。関西呪術協会と関東魔法協会の関係、関西呪術協会の現在の情勢、そして木乃香の存在、嫌な予感がしたアリスは万が一の為の保険を掛けておく。

木乃香の笑顔、アリスの頭から離れないで、いつしかアリスの中に強い印象を刻み込んだあの温かい笑顔を守る為、アリスは全力を尽くす。

「父さんが母さんを守ろうとした時も、こんな感じだったのだろうか・・・・・・？」

未だ、その気持ちが何なのかに気付かないアリスだが、それがアリスの夢に、将来に大きく関わると、今はまだ、知る良しも無かった。

七話　「仮契約」（後書き）

次あたりでネギ対エヴァ編を終わらせたいなぁ……。

八話　「戦う覚悟の無い者」（前書き）

もうすぐ修学旅行編に入る～。
う～ん、楽しみだねぇ……。

八話　「戦う覚悟の無い者」

英雄と女王の子

八話

「戦う覚悟の無い者」

カモが学園に来た翌日、仕事を終えたアリスは帰宅する前に買い物をしようと街に出て夕飯の材料を買い終えた。後は特に用事も無いので帰ろうと広場の近くを通りがかった時だった、魔力の高まりを感じてまさかと思い、瞬動で移動してみれば丁度ネギと明日菜が茶々丸と戦っている最中だった。

エヴァンジェリンが居ないのを見る限り、茶々丸一人の時を狙ったのだろう。戦法としては間違えていないし、強者を倒す上で効率の良い方法なのだが・・・・・今のネギの立場的に不味い。

明日菜のでこぴんでバランスを崩した所にネギがトドメとばかりに光の射手を１１本放ったのを見てすぐさま行動に移った。

「魔法の射手　連弾・闇の１１矢！」

詠唱破棄をしているが、アリス程の実力者ともなればネギ程度の詠唱入りの魔法の射手を詠唱破棄の魔法の射手同数で撃ち落すなど造作も無い。

結果は予想通り、ネギの光の射手１１本はアリスの闇の射手１１本で全て掻き消され、撃ったのと同時に瞬動で茶々丸の前に立ったアリスに驚いて言葉を失っている。

「さて、言い訳を聞こうかネギ・・・・・教師であるお前が生徒、それも担当しているクラスの生徒である茶々丸を何故殺そうとして

いるのか」

足元の影から“姫”を取り出し、その切っ先をネギと明日菜の方に向けて殺気を身に纏う。

「聞かせてもらおうかアルベール・カモミール・・・・・・教師というネギの現在の立場を度外視した作戦をネギに提案した理由を」

アリスの周りに闇の射手が３３本展開された。込められた魔力は桁違いで、一発一発がネギの雷の暴風に匹敵する威力を持っている。

「理解しているのか？　神楽坂明日菜・・・・・君がネギと仮契約をした事で踏み入れたこの世界が、常に死と隣り合わせ、歩む道全てが血に塗れた修羅の道に等しい事を」

アリスの放った殺気が空間を歪ませているような錯覚を引き起こす。常人なら一瞬で意識を失いかねない雰囲気に明日菜は腰を抜かし、ネギとカモは青褪めた表情でガタガタ震え出した。

「解っているのか？　ここで茶々丸を殺せば、この後でエヴァンジェリンはお前達を容赦無く殺しにくる事を・・・・・封印されていても、闇の福音の実力は確かだ。お前達程度を殺すのに、１０分も要らない」

「し、しかしよぉ！　ネギの兄貴は命を狙われてるんですぜ!?もし兄貴が負けて殺されでもしたら!!」

「だから？」

「え？」

「なっ!?」

アリスの言葉にネギと明日菜が絶句した。

「殺されたのなら所詮ネギはその程度だったという事、この世界にいる以上その程度の事はよくある事だ」
「な、なら何で旦那は兄貴を守らねえんですかい！？　弟が心配じゃねーのかよ！！」
「何故私が・・・・・私は裏の事でネギを助ける気なんて一切無いし、今回の事だって傍観に徹するつもりだ」

ネギが泣きそうになり、明日菜の表情が怒りに染まっているのがわかる。大方アリスに助けてもらおうと考えていたのだろうが、そんな甘えをアリスが許す筈も無い。

「甘えるなよネギ、この世界にいる以上は兄弟の情など無意味に等しい。戦えなければ死ぬ、足手まといになるなら見捨てる・・・・・私が見てきたのはそういう世界だ、そして私も今までそうしてきた」

生き残る為に親兄弟で殺しあっている光景を見た。戦場で力無い者が無残に殺されるのを幾度も見てきた。それが裏の現実、甘えなど許されない、生き残りたければ自分の力で如何にかしなければならない世界、スプリングフィールドの人間なら・・・・・ナギ・スプリングフィールドの息子であるなら余計に、甘えなど許されないのだ。

「行け、茶々丸・・・そしてエヴァンジェリンに伝えろ、ネギ・スプリングフィールドは闇の福音を潰す為に本気で掛かってくると」
「・・・・・かしこまりました」

アリスに向けて頭を下げた茶々丸は背中と足裏のジェットを噴射させてその場から立ち去った。・・・・・少し熱かったのは秘密

だ。

「これでお前はエヴァンジェリンと本気で戦う事になった・・・・・・自業自得だろう？　茶々丸を殺そうとした時点でお前はエヴァンジェリンに本気で狙われる事になったんだ。なら足掻け、死にたくなければな・・・・・それでもまだ甘えるのであれば・・・死ぬだけだ」

とうとう耐え切れなくなったネギは泣きながら杖に乗って飛び去ってしまった。後に残るのはネギに振り落とされたカモと、怒りに詰め寄ってきた明日菜だけ。

「ちょっと！！　どうしてあんな事言ったのよ！？　あんたネギのお兄さんでしょ！？　なのに何で助けないとか、死ぬとか酷い事ばかり言うのよ！！」

「ネギを甘やかす気が無いだけだ。この世界で生きていく以上、あの甘たれが直らない限り早死にするだけだからな」

「だから、何で助けてあげないのよ！！」

「事戦いに関しては、兄弟である事に意味は無い。死にたくなければ自分の力だけで足掻くしか無い、それが私とネギの生きる世界の現実だ・・・・・勘違いするなよ神楽坂明日菜、こちらの世界はゲームでは無い、血と硝煙、死臭と腐臭の匂いが漂い、人の死を直接感じる現実だ」

お前にその世界で生きる覚悟はあるのか？　それを聞かれた明日菜が再び青褪めた表情で言葉を失くす。

言いたい事を言い終えたアリスは“姫”を影の中に戻して放り出した買い物袋を拾って帰路に着く。袋の中では買ったばかりの卵が全て割れていた為、帰ってからそれに気付いたアリスは作ろうと思っていたオムライスを断念するしか他に無かった。

翌日、昨夜作れなかったオムライスがどうしても食べたくなったので昼になると街に出てレストランに向かう、その途中で珍しい組み合わせに出会った。

「おや、木乃香ちゃんと大河内さん・・・おはよう、珍しいね二人が一緒にいるなんて」
「あ、アリスさんや～、おはよさん」
「おはようございます、アリス先生」

どうやら二人とも一人で街に出てきた所で偶然会い、折角なので一緒に昼食でもと話していた所らしい。

「そう、なら丁度良いや。二人とも、何処かオムライスの美味しい店知らないかな？　昨日買った卵を誤って落して割っちゃってね、食べ損ねたんだ」
「ん～オムライスかぁ、うちはあんま知らんなぁ」
「あ、それなら私が・・・この前亜子やゆーなと行ったオムライス亭が美味しかったです。折角ですから一緒に行きませんか？」
「良いのかい？」
「うちもかまへんよ～？　アリスさんなら歓迎や」

という事で木乃香とアキラも連れてオムライス亭に向かった。連れてこられた店で食べたオムライスは確かに美味だ、流石は専門店というだけの事はある。

「うん、確かに美味しい。玉子の半熟具合といい、中のライスの炒め具合や具の大きさといい」
「ほんまや～今度アスナとネギ君も連れて来てみようかなぁ」

「気に入ってくれたなら、嬉しいです」

食べ終えて休憩していた時に木乃香が昨日ネギが帰って来なかった事を話してきた。明日菜も木乃香も心配しているらしい。

「それは・・・・・心配だね」

「ん～、そうだね・・・・・実は昨日ネギが仕事で少し大きなミスをしちゃってね、それで私が叱ったんだけど。ほら、木乃香ちゃんには話したと思うけど、私は昔からネギと従兄妹の生活費を稼ぐのに忙しかったって言ったでしょ？　それで余り家に居なかったから私に怒られ慣れてないんだ、だから余計に落ち込んだのかな」

居場所は学園長が知ってるから心配無いと嘘を言って木乃香とアキラを安心させた。アリスの言葉を信じたのか木乃香もアキラも途端に安心した顔になり、運ばれてきたジュースに口を付ける。アリスも同じ様にコーヒーを飲むが、やはりコーヒーは好きになれず、顔を顰めてしまう。

「アリス先生は、コーヒー嫌いなんですか？」

「ん？　まぁ、ね・・・・・イギリスだとコーヒーより紅茶を飲む事が多くて、コーヒーは飲み慣れてないんだ」

「この店は紅茶無いもんな～」

オムライスは美味しいのだが、紅茶が無いのは惜しい。アイスティーならあるのだが、紅茶は出来ればホットで飲みたいアリスだった。

飲み物を飲み終えて店を出る時、支払いはアリスが出すと言ったのだが、二人が遠慮して自分で出すと言うのだが、一応年上としての威厳もあるので何とか言いくるめてアリスの奢りで済ませる事が出来た。

「すいません、奢ってもらって・・・」
「構わないよ、美味しい店を教えてもらったお礼でもあるんだし」
「うちは何もしとらんで～？」
「木乃香ちゃんにはネギがいつもお世話になっているお礼って事で」

その後は特に用事も無いアリスは木乃香とアキラに付き合って街を回り、夕方には二人を寮まで送って管理人室に戻った。
どうやら既にネギも帰ってきているらしく、チラッと見えた限り何かを吹っ切った良い顔をしていたので少し安心した。

「さて、エヴァンジェリンとネギの対決・・・・・どうなるのか楽しみだ」

戦う覚悟が出来たであろうネギが、闇の福音と何処まで戦えるのか、それを思うと本当に楽しみで仕方ない。
面白い事が好き、そんなスプリングフィールドの血を色濃く受け継いだアリスの表情をエヴァンジェリンが見れば、恐らくこう言うであろう・・・・・「父親（あのバカ）にソックリだ」と。

「ん、職員会議で言ってた大停電の日も近い・・・・・色々と準備が必要かな」

そう言って懐中電灯や蝋燭、マッチなどの点検を始めたアリスは、やはり笑顔だった。

八話　「戦う覚悟の無い者」（後書き）

アリスは戦う覚悟が無い癖に戦場に立とうとする人間が嫌いです。
理由としては昔の話ですが、戦う覚悟の無い人間がアリスの足を引っ張ったからという設定となっています。

九話　「暗闇の戦い・前編」（前書き）

次回でＶＳエヴァンジェリン編が終わります。
漸く修学旅行編に入り、オリジナルの展開も入ってきますね。

九話　「暗闇の戦い・前編」

英雄と女王の子

九話

「暗闇の戦い・前編」

月曜の朝、早くから学校に来ていたアリスの電話に着信が入った。相手は茶々丸だったのでどうしたのかと思い出てみると、エヴァンジェリンが風邪を引いてしまったので休み、茶々丸も看病のため休むとの事だった。

「ふむ・・・・・・」

「おや、アリス先生如何されました?」

「あ、新田先生・・・実は3－Aの絡繰から電話がありまして、マクダウェルが風邪で休むとの事ですので心配になってしまいましてね」

季節の変わり目の風邪は性質が悪い、それを理解している新田先生も神妙そうに頷いた。

「そうでしたか、確か絡繰とマクダウェルは寮ではなく桜ヶ丘の自宅に二人暮らしでしたな・・・・・・もし何でしたらアリス先生、様子を見に行って貰えますかな?」

「構わないんですか?　確かに今日は授業も入ってませんけど・・・・・」

「生徒を心配するのは教師として当然の事ですよ、私も気持ちは解ります。ですので教師の代表として行って貰えますかな?」

そこまで言われては断る訳にもいかない。丁度良いので新田先生の言葉に甘え、直ぐに出掛ける準備をする。

「それでは、職員会議の方は任せて良いですか？」
「やっておきましょう、それじゃあお願いしましたぞ」

職員室を出て人目の付かない所まで移動すると足元の影に沈みこんだ。影を使った転移魔法で前と同じ様にエヴァンジェリンの家の前にある適当な木の影へ転移したアリスは何食わぬ顔でドアをノックする。

「・・・・・はい」

ドアが開いて出てきたのは前と同じで茶々丸だ。最も、エヴァンジェリンが来客を自分で出迎えたりする筈もないし、今日は風邪を引いて動けないらしいので仕方ない。

「おはようございます、アリス先生・・・・・今日はどのような御用でしょう？」
「ああ、おはよう。今日はただのお見舞いさ、一応副担任だからね・・・風邪の様子見」
「そうでしたか・・・・・」

茶々丸に案内されて二階に上がるとベッドで寝ているエヴァンジェイリンが居た。どうやらアリスが来た事で目が覚めたらしく、少し起き上がろうとしている。

「寝てて良いよ、唯の見舞いだから」
「・・・フン、ならそうさせてもらうか」

素直に横になったのを見てアリスはずれた掛け布団を直してあげた。丁度その時後ろに控えていた茶々丸が傍で空になった土鍋を片している、恐らくおかゆでも入っていたのだろう。

「マスター、この後大学病院に行ってお薬を貰ってきますので、支度をしてきます」
「ん・・・頼む」
「はい、ではアリス先生・・・申し訳ございませんが暫くマスターの事をお願いします」

ぺこりと頭を下げて階段を下りていった茶々丸を見送り、アリスは再びエヴァンジェリンに目を移す、随分と眠そうな目をしていた。

「眠いなら寝てもいいよ、私も暫くここに居るから」
「ん、む・・・そう、か・・・・・・ならスマンが、少し寝る。だるいし、眠い・・・・・・」

そのままエヴァンジェリンが寝に入ろうとした時だった、下の方から何やら話し声が聞こえる。片方は茶々丸だがもう一人は・・・・・。

「あの声は・・・ネギ？」
「ふん、あの坊やか・・・どれ、私が出よう」

アリスが押さえつけるより早く、エヴァンジェリンがベッドから降りて階段に向かってしまった。だが熱の所為で足元がフラフラしているのを見るに、やはり立って歩くのも億劫なのだろう。

「まったく・・・・・・ほら、支えてあげるから」
「ぬ・・・スマン」

「いえいえ」

フラフラのまま階段を下りたら転がり落ちそうだったので支えてあげた。本当なら抱きかかえた方が良いのだが、流石に彼女もそれは拒否するだろうからやらない。

「一体、坊やは何の用なのだ？」

「さあ？」

下に降りてみればやはりネギが居て、茶々丸がその対応をしていた。気になるのはネギが持っている手紙のような物だが・・・・・・。それよりも学校は如何したのか、この時間だとＨＲが終わって既に授業が始まっている筈なのだが。

「あっ！　エヴァンジェリンさん！　と・・・兄さん！？」

「ふん、何の用だ坊や」

「それ以前に、授業は如何した？」

うぐっと言葉に詰まったネギを見て確信した。どうやらサボったらしい、何とも後先考えない子供というか、呆れて物も言えない。

「それで？」

「は、ハイ！　あの、エヴァンジェリンさん！　僕と決闘してください！　そして、僕が勝ったらもう悪い事は止めて、ちゃんと授業に出てください！　このままサボってばっかりだと卒業出来ませんよ！？」

「アホか！　貴様等の親父が掛けた呪いの所為で卒業しても中学１年に逆戻りだ！！」

そもそも、ネギ程度の実力で闇の福音に勝てると思っているのだ

ろうか？　そこまで自意識過剰でもないと思うのだが・・・・・・。

「ふん、まあいい。その決闘、受けてやる・・・何なら今ここでやるか？」

そう言って手に魔力を集中させるエヴァンジェリンと、受けて立つとばかりに杖を出して魔力を高めるネギ、呆れていたアリスは二人の頭を叩いた。

「んにゃ！？」
「あうっ！？」

王家の魔力を込めたので二人の魔法は発動段階で消し飛ぶ、二人の魔力障壁など叩く時に霧散した。

「エヴァンジェリン、お前は熱があるんだし無理するな阿呆。ネギも、彼女の顔色見れば判るだろうが」
「で、でも不老かつ不死のエヴァンジェリンさんが風邪なんて、ありえないでしょ？」
「見て判らんのか阿呆」

エヴァンジェリンを見てみると、アリスにもたれ掛かって荒い息を吐きながら意識を失っていた。仕方ないと抱き上げて二階に連れて行くとネギも付いてきた。後ろには茶々丸も控えているのを見るにいつでも後ろからネギを攻撃出来るようにしているのだろう。

「茶々丸、看病は私がやっておくから早く薬貰って来て」
「畏まりました、それではアリス先生・・・申し訳ございませんが暫くマスターの事をお願いします」

ぺこりと頭を下げて出て行った茶々丸。次にアリスはネギに氷枕を用意するよう指示を出し、下に降りていったネギを見送ると自分の親指を少し食いちぎってエヴァンジェリンの口元に寄せ、出てきた血を飲ませる。

「あっ・・・・・・私の血って、一滴に含まれる魔力量が半端無いんだっけ・・・ネギに死亡フラグが立った」

見る見る内にエヴァンジェリンの顔色が良くなった。感じられる魔力もトンでもない、今なら魔法薬の触媒無しで魔法も使える位の魔力が感じられる。

「・・・・・・ま、いっか」

それはそれで面白そうだし、負けるネギというのも今後を考えれば重要な筈だと考え、放置する事にした。

ネギが作ってきた氷枕をエヴァンジェリンの頭の下に入れて、布団を更に厚く掛けてあげればもうやる事は何も無い、茶々丸が帰ってくるまでエヴァンジェリンの様子を見ているだけである。

ふと、エヴァンジェリンが何かに魘されるように寝言を言い、その中にサウザンドマスターの名が出てきた。

「ん？」

魔力を感じてネギの方を見ると、杖を持って何やら呪文を唱えている。あれは確か・・・・・・。

「ネギッ！　何をやっている！！」

それが夢見の魔法だと気付いて直ぐに王家の魔力で夢見の魔法を発動前に霧散させた。他人の夢を見て何をする心算だったのか、予想は出来る。

「兄さん邪魔しないで！　父さんの手がかりを掴むチャンスなんだ！」

「馬鹿者！　自分の目的の為に他人のプライバシーを覗くなど、許されると思っているのか！？」

「でも！　兄さんは知りたくないの！？　父さんの情報を！」

王家の魔力を込めた戒めの闇を使ってネギを拘束した。流石にコレは先生として以前に人として不味い、人のプライバシーを無断で見るなど、どんな理由があろうとも許される事ではない。

「他人を利用してまで知りたいとは思わん、それは人として最低の行為だ」

そもそも、アリスは母が生きている事を知っている。そして、母が生きているということは間違いなく父も生きている。生きている限りいつか会えると信じているのだから、無理に知りたいと思わない。

「それに、父さんの事を知りたいと言っても、私はネギが生まれるまでずっと父さんと母さんと一緒に居たんだから、これ以上何を知れと？」

「そ、それは・・・でも！　僕は父さんの事を何も知らないんだ！　兄さんみたいに父さんと一緒に暮らした事なんて無いんだよ！！」

いい加減に父さん父さんと煩くなってきた。何故アリスが今話題に出した母の事を何も聞こうとしないのか、ネギにとって母の事・・

・アリカの事を知るという概念は存在していないのだろうか。
それにあまり煩くしていてもエヴァンジェリンの邪魔になる、影を使った転移魔法でネギを家の外まで強制転移させて一段落した。

「まったく・・・父さんを追いかけて“立派な魔法使い”を目指すのは良いが、もし母さんの事を・・・災厄の女王と呼ばれた母さんの事を知ったらネギはどうするのか」

最も、母の事をネギに話さないようにとメルディアナの校長や麻帆良学園の校長、魔法界の重鎮からも言われているので言わないが、アリスにとって母の存在は父と並ぶ大切な存在、アリスの名を付けてくれたのは母だし、“姫”を譲ってくれた人、感謝と尊敬を抱く偉大な母なのだ。

「母さんの事を蔑ろにするネギに・・・良い感情を持てないのは、当然なんだろうな」

知らない事は時として罪だ、いつかネギは母の事で苦悩する日が来るだろう。

「私と同じ道を行くならそれはそれで良し・・・しかし」

母を断罪する等といった事をしたり、アリスの行く道を阻むのであれば、その時は・・・・・・。

「・・・容赦しない！」

九話　「暗闇の戦い・前編」（後書き）

王家の魔力に関して、原作ではまだ詳しく出ていなかったのでオリジナル設定です。
簡単に言うなら攻撃（直接打撃や魔法攻撃問わず）に王家の魔力を込める事で明日菜の完全魔法無効化と同じ事が出来るようになります。
明日菜は常に全身に王家の魔力が巡っていて、それで完全魔法無効化能力を持っているという事で考えてください。

十話　「暗闇の戦い・後編」（前書き）

今回でＶＳエヴァンジェリン編が終了します。

十話　「暗闇の戦い・後編」

英雄と女王の子

十話

「暗闇の戦い・後編」

麻帆良学園都市大停電の日の夜、アリスは女子寮の屋根の上に居た。今夜、停電が始まったその瞬間からネギとエヴァンジェリンの戦いは始まる。

停電まで残り数分を切った今、アリスはエヴァンジェリンが女子寮の近くに隠れているのに気付いていた。

「成る程、以前血を吸った佐々木さんを魔力が戻った瞬間支配下に置いて手駒を増やすのか・・・流石だね」

やはり６００年以上生きてきただけあって戦法はレベルが高い、しかも手駒にするのと同時に人質としても利用できる相手を選ぶというのは彼女らしい。

「まさに悪の魔法使い・・・・・・か」

ネギは・・・いや、この学園の魔法使いは毛嫌いしそうだが、こんな事は戦場であれば幾らでも起こりえる事だ。正々堂々と戦うなど馬鹿のやる事、戦場を知らない温室育ちの魔法使いの考える事でしかない。

「さて、もう停電の時間だ・・・・・・ネギ、お前は最強の魔法使い相手に・・・如何戦う？」

麻帆良学園都市全体が一気に暗闇に包まれた。先ほどまで輝いていた明かりは消えて無くなり、満月の光のみが唯一の明かりとなる夜闇が支配するこの都市に、１５年ぶりに最強の魔法使い“闇の福音”が復活する。

「おやおや」

大浴場の方から吸血鬼の気配が現れた。感じられる気配の力の弱さから佐々木まき絵だろう、次々とエヴァンジェリンの配下となる吸血鬼を量産、合計四人の吸血鬼が大浴場に揃った。

エヴァンジェリンも移動を開始したらしい、配下の居る大浴場に行きネギを待つつもりなのだ。

「さて、ネギはというと・・・・・・」

先ほど佐々木まき絵が女子寮から出て行くのが見えたから恐らくネギの所に行くのだろう。それを目で追ってみると案の定、その方角からネギの魔力が感じられる。

「動き出したか・・・」

丁度まき絵が戻ってきた。彼女が大浴場に戻って少ししてからネギの姿が見えた、杖に乗って飛んでくるネギは随分と大袈裟な重装備をしていたが、アンティーク魔法具程度でエヴァンジェリンに勝てるかと言えば、答えはＮＯだ。

「まあ、精々足掻く事だ」

ネギが女子寮の大浴場に入ってから少ししして随分と身軽になった

ネギが窓から飛び出してきて落下する前に杖で飛行、逃走を開始する。それを追う様にエヴァンジェリンと茶々丸、佐々木まき絵、大河内アキラ、和泉亜子、明石裕奈が飛び出してきた。
エヴァンジェリンと茶々丸は少し後ろから観戦し、残りがネギの相手をしているものの、やはり吸血鬼化したとは言え一般人では魔法使い相手にまともな戦闘を勤められる筈も無く。四人を無力化したネギは全速力でエヴァンジェリンから逃げ出した。

「眠りの霧か・・・相手を無力化するのなら効率の良い魔法だな」

良い選択をする弟に感心するが、現在の状況を見て眉を顰めた。
エヴァンジェリンから逃げるネギは何処か思惑を持って動いている様にも見える。まるで何かを狙っているか、何処かに誘導するかの様に。

「考えられるのは罠か・・・・・・へぇ」

丁度橋に降り立ったネギと、同じ様に橋に降りたエヴァンジェリンと茶々丸が相対し、いざ本格的な戦闘に入ろうとエヴァンジェリンが一歩足を踏み出した時、エヴァンジェリンと茶々丸の足元に魔方陣が展開され、拘束魔法が二人を縛りつけた。

「捕縛結界か・・・なるほど、父さんが使いそうな手だけど・・・・・甘いな」

聞いた話によると、エヴァンジェリンがナギと戦って負けた原因は落とし穴という罠に嵌った為だとか。程度の違いこそ在れ、彼女が罠という手段に対抗策を講じていない筈が無い。
予想通り茶々丸が結界破壊プログラムを起動して捕縛結界を破壊、結界を破壊された事で焦ったネギの詠唱途中にそれを妨害、杖を奪

ったエヴァンジェリンがそのまま橋の下・・・つまり川へと投げ捨ててしまった。

「呆気なかったな・・・・・・それにしても」

泣き喚いているネギを見て呆れを通り越して微かな怒りが沸いて来た。負けた程度で泣き喚いているその姿勢が余りに情けなく、同じ魔法使いとして、戦う者として失格としか言えない。一体魔法学校で何を教わったのか、魔法学校では魔法戦闘について何を教えたのか。

「・・・・・・ん？」

突然、女子寮近くの森で奇妙な魔力を感じた。ネギとエヴァンジェリンの戦いに興味が無くなったアリスは嫌な予感がした為、全速力で魔力を感じたポイントに急ぐ。

飛行魔法の速度がネギと比べて些か劣るアリスは虚空瞬動を繰り返して目的地に着くと、そこに居たのは鬼・・・・・東洋の神秘、陰陽術によって召喚された鬼が五体、棍棒やら剣やら槍を構えて立っていた。

「・・・大方、木乃香ちゃんを狙ってきた関西呪術協会の間者が召喚したのだろうが」

アリスに見つかった時点で運が無かったとしか良い様が無い。

「少しイラついていたから丁度良い、八つ当たりさせてもらうぞ！！」

影から抜いた“姫”を振るって鬼一体を一瞬で還した。残りの四

体はそれを見て焦ったのか、それとも良い相手を見つけた事に狂喜したのかそれぞれの獲物を持って襲い掛かってきた。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス・・・・・契約に従い　我に従え　雷の帝王　来たれ　殲滅の雷　轟く轟雷　奔れよ　大地を焼きし　塵と雷雲　罪人達に　裁きの雷を！」

迫り来る鬼の武器を瞬動でかわしたアリスは移動しながらの詠唱を終え、鬼たちの後ろに回り込んで魔法を固定させる。

「轟く雷帝！　術式固定、黄昏の剣　魔法付与！　術式付与完了、是“降雷の皇姫”」

“姫”が雷を纏って空気を振動させた。アリスの周囲でバチバチと電流の音が鳴り、“姫”の周りに砂鉄のような物が引き寄せられては弾かれてという現象を繰り返している。

「雷刃一閃！　偽・雷光剣！！」

昔、木乃香の父親であるサムライマスターの近衛詠春から神鳴流の業を幾つか教えてもらった事がある。流石に今使った雷光剣は教えてもらっていないので見よう見まねのものだが、それでも世界最強クラスの魔法剣士の攻撃だ、一瞬にして残りの鬼が蒸発してしまった。

「手応えが無い・・・やはりこの程度の相手だと戦った気がしないな」

これがラカンなら今の攻撃を受けても気合でピンピンしていそうだから面白いのだが、中級程度の鬼ではアリスの相手としては完全

に役不足、八つ当たりにもならなかった。

「さて、それじゃあ・・・・・・そこの術者、出て来い」

鬼では八つ当たりにもならなかったので近くに隠れていた術者に殺気を向けた。案の定、アリスの殺気をまともに受けた関西の者であろう術者は腰を抜かして座り込んだままアリスに見つかってしまう。

未だ雷を纏っている“姫”の切っ先を術者の眼前に翳してアリスは残酷な笑みを浮かべた。

「精々足掻いてくれ・・・・・じゃないと、直ぐに死んでしまうぞ。それだと私も面白くないから、頑張れ」

それは余りに無情な宣告だった。

関西の術者が最後に見たのは頭上高くまで“姫”を振り上げ、それを振り下ろそうとするアリスの姿だけ。

次に気がついたときには牢獄の中で拘束され、関東魔法協会長の尋問が始まる所であった。

侵入者を近くに居た魔法先生に引き渡してアリスはそのまま橋の近くに向かった。途中で停電が終わったのでネギとエヴァンジェリンの戦いも既に終わっている頃であろう。最も、ネギがアレ以降で戦う気力を取り戻していればの話だが。

「おや？」

何故か橋には先ほどまで居なかった明日菜とカモミールが居て、高架下では杖に跨って素っ裸になったエヴァンジェリンの腕を掴ん

で引き上げようとしているネギの姿があった。

「おやおや・・・明日菜叔母さんとネギの間に仮契約のラインらしき精霊の気配を感じるな・・・・・・成る程、仮契約したのか」

それならもうこの場に用は無い。出したままにしていた“姫”を影の中に戻して星の見えなくなった夜空を見上げながら帰路に着いたアリスは懐から一枚のカードを取り出した。そこに描かれていたのは・・・・・軽鎧に身を包み、“姫”に似ていて何処か違う一本の剣を構えたアリスの姿だった。

「ごめんね・・・・・・母さん」

十話　「暗闇の戦い・後編」（後書き）

次回から修学旅行編に入ります。
因みにアリスが明日菜の正体を知ったのはタカミチに聞いたからなんですが、その辺りのエピソードを外伝で書こうと思いますので、完成するまで待っていてください。

十一話　「修学旅行へ」（前書き）

アリスって、結構チートキャラだなあと最近自覚してきた作者でした。

十一話　「修学旅行へ」

英雄と女王の子

十一話

「修学旅行へ」

大停電の翌日、アリスは仕事を終えて学校の近くにあるＳＴＡＲＢＯＯＫＳ　ＣＯＦＦＥＥに来ていた。特に用事も無いのでエスプレッソを飲みに来ていたのだが、丁度先に来ていたらしいエヴァンジェリンと鉢合わせた。

「おや、エヴァンジェリンと茶々丸・・・二人もお茶しに来たのかい？」

「こんにちはアリス先生」

「む？　ああ、貴様か・・・・・家に居ても暇だったからな」

茶々丸を後ろに控えて二人でエスプレッソを飲んでいると、今度はネギと明日菜が来た。

「あ・・・・・・」

「ぬ・・・・・・」

夕べの戦いの結果は既に聞いている。彼女は引き分けたと言っているが、僅差でネギが勝ったらしい。

「こ・・・こんにちはエヴァンジェリンさん、兄さん」

「フン！　気安く挨拶を交わす仲になったつもりはないぞ」

相変わらず素直じゃないエヴァンジェリンに苦笑しているアリスだが、ふと以前アルビレオ・イマから聞いた事を思い出してそれを口にした。

「そう言えばエヴァンジェリン、父さんの事が好きだったらしいね」

「ぶふぁ！！」

丁度エスプレッソに口を付けたタイミングを見計らってアリスが言った言葉は見事にジャストミートしたらしい、盛大に噴出して顔面がエスプレッソに染まっている。

アリスの言葉にニヤリと口元を歪めたのは明日菜だった。流石は年頃の乙女（本当はそんな年など遥か昔に過ぎているのだが）と言ったところか、こう言った話題に嬉々として食いついてきた。

「へ～、エヴァンジェリンって意外と乙女ねぇ～♪」

「う、ううう煩い！！　アリス貴様！！　何故それを知っている！！！」

「ん？　昔とーさんの仲間から聞いたから」

「アルか！　アルだな！？　あんのナルシスホモがぁあああ！！！」

どうやら彼の事はエヴァンジェリンも知っているらしく、此処に居ないナギの仲間に向かって雄叫びを上げている。

「それで、エヴァンジェリンはとーさんが死んでいるって事は知っているよね？」

「・・・・・ああ、そうさ・・・奴は死んだ。１０年も前に」

「うんそう・・・・・・戸籍上はね」

「・・・何？」

ごそごそと懐に手を入れたアリスが取り出したのは一枚のカード、

黒いローブを纏ってレッドメタリックのガントレットを両手に装着した幼いアリスの絵が描かれている。

「それは、パクティオーカード！？」

「そう、私が父さんと仮契約した証、カードは生きてるでしょ？」

「・・・うむ、確かにな・・・・・と言うことは」

「間違いなく父さんは生きてるよ」

ナギが生きている、その事実を知ったエヴァンジェリンは脱力したように背もたれにもたれ掛った。そして何が可笑しいのか突然笑い出す。

「は、はははは、あはははは！！　そうか！　奴は生きているか！　殺しても死なない奴だとは思っていたが・・・・・成る程成る程、ククク」

笑いすぎと嬉しさで目尻に溜まった涙を拭ったエヴァンジェリンは呆然とアリスのパクティオーカードを見ているネギに声を掛けた。

「坊や、京都だ・・・京都に行け」

「・・・え？」

「あそこに確か奴の別荘があった筈だ」

「ああ、あそこね・・・・・最後に行ったのは2，3年前だったかな？」

ネギは知らないが、京都にある父の別荘には何度か行った事があるアリス。あそこは父と母の愛の巣だったという事もあり、色々と複雑な思いで掃除していたのを覚えている。

「ほう？　やはり貴様は行った事があったか」

「まあね・・・・・詠春さんがあそこの掃除を私に押し付けるから、定期的に行かないと直ぐに埃だらけになるから」

今は木乃美さんのお怒りで詠春も自分で掃除をするようになったため、アリスは暫く別荘に行っていない。

「で、でも如何しよう？　京都に行こうにも時間も費用も・・・・・・」

アリスと明日菜は溜息を吐いた。何で担任であるネギが知らないのか、ちょっと問題なのだが致し方ない。

「大丈夫よネギ、てゆーか丁度良かったじゃない」
「だな」
「ハイ」
「うむ」
「？」

何故なら来週から修学旅行、行き先は京都なのだから。

「えええええっ！？　しゅ、修学旅行の京都行きは中止～～～っ！！？」

翌日、学園長室に呼ばれたアリスとネギは、学園長から直接その知らせを聞いた。・・・・・聞いたのだが、その瞬間にネギがフラフラとよろけて砂になって散ってしまった。

「これこれ、早とちりしてはいかんぞ？　まだ中止とは決まっとらん。・・・ただのう、先方が嫌がっておっての～」

「・・・・・と言うと、関西呪術協会の強硬派ですか？」
「流石はアリス君じゃ、詳しいの」
「一応、大まかな事情は調べてますし・・・・・昔、詠春さんに関西と関東の関係を聞いてますから」

昔から関東魔法協会と関西呪術協会は仲がよろしくない。
特に関西呪術協会の代々長を務めていた近衛一族の人間である近衛近右衛門が魔法に手を出して、更に関東魔法協会の理事長になってしまった事が余計に関係を悪化させているのだ。
現在は近衛家に婿入りした青山宗家の出である近衛詠春が関西呪術協会の長を務めて何とか下を抑えているが、それも時間の問題だろう。

「そもそも、木乃香ちゃんを関東に呼んだのが失敗だったのでは？」
「そうなんじゃがのう・・・・・あのまま関西にあの娘を置いておいても政治の道具になりかねんから婿殿と相談して決めたんじゃが」
「結果として・・・関西呪術協会長の跡取りである木乃香ちゃんを関東魔法協会に置いた事で関西の強硬派は彼女を関東魔法協会理事長の跡取りにするつもりだと思われてしまった」

結局の所、そういう事だ。このまま修学旅行で京都に行けば下手したら強硬派が木乃香を拉致して政治の道具として使われ、一生日の目を見ない人生を送る事になりかねない。

「そこでじゃ、ネギ君・・・・・ワシとしても、これ以上西と東で仲違いしているのは辛い。いい加減仲良くしたいのじゃよ、そこでこの親書を関西呪術協会の長に届けてくれないかの？」
「は、はい！」

今まで難しい話をしていた為、事情の知らないネギは目を白黒させていたが、学園長が取り出した親書を見て、頼まれた事を聞いて簡単な事だけは理解出来たらしい。
自身満々に頷く弟を見て不安を募らせるアリスだが、学園長が何を言いたいのか理解し、そして最初に交わした契約を思い出して力強く頷いた。

「（要するに、私が木乃香ちゃんを守れば良いんだな）」

彼女の護衛である桜咲刹那と共に。

学園長室から出た後アリスはネギと別れ、屋上に来ていた。
まだ少し肌寒い空の下、懐から取り出した携帯電話でとある人物に電話を掛けているのだ。

「すまないねシルヴィア、こんな時間に」
『構いません、其方はまだ昼位ですよね？』
「まあね・・・・・・それで、頼んでおいた仕事は終わった？」
『はい、昨日の段階で全て終わっております』
「そう・・・ならすまないけど急ぎ日本に来て欲しい。来週から私は修学旅行で関西呪術協会本拠地である京都に行く事になってるから、修学旅行2日目の夜に宿で合流しよう」
『何か理由でも？』
「関東魔法協会理事長の孫、そして関西呪術協会長の娘でもある教え子がね・・・・・・私以上の魔力の持ち主なんだけど、裏の事を一切知らないんだ」
『あらあら・・・・・・だとすると少々危険ですね』
「ああ、最近“完全なる世界”の人間が一人、旧世界に来たという情報もあったし・・・・・・下手すると厄介な事になるかもしれない」

『わかりました。直ぐに日本に向かいましょう』
「頼むね」
『はい、それではアリス様・・・ごきげんよう』

通話を終えるとアリスは二枚のカードを取り出した。片方は父との仮契約の証であるパクティオーカード、もう片方もパクティオーカードなのだが、それは・・・・・・。

「父さん、母さん・・・・・・また一歩、あなた達に近づけるかもしれません」

ガントレットを装備した幼いアリスが描かれたパクティオーカードと、剣を持った幼いアリスが描かれたパクティオーカード、暫くそれを見ていたアリスは静かに影へと沈み、やがて完全に屋上から消え去った。

十一話　「修学旅行へ」（後書き）

次回は京都へ……ではなく。な、何とアリスがでーｔ（ｒｙ

十二話　「アリスの初デート・・・・・・ではなかった」（前書き）

そういえば神楽坂明日菜ではなくアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの誕生日っていつなんでしょうね？

十二話　「アリスの初デート・・・・・・ではなかった」

英雄と女王の子

十二話

「アリスの初デート・・・・・・ではなかった」

修学旅行が明後日に迫った休日、アリスは何故か木乃香とネギの三人で渋谷に来ていた。

そもそもの発端は朝から部屋で修学旅行の準備をしてたアリスの部屋に木乃香がネギを連れてやって来た事だ。何でも今日は明日菜の誕生日との事なので、そのプレゼントを買いに行こうという事らしい。

「しかし・・・・・日本の都会はゴチャゴチャしてるな」

「だね・・・僕はイギリスに居た時も都会とか行った事が無かったからよく判らないけど」

「私は一応、色んな国の都市を見てきたからあれだけど・・・・・・アメリカはこれよりもっと酷かったかな」

明日菜の誕生日はそもそも違うのだが、それを知っているのはアリスだけだし、それはアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアのものであって、神楽坂明日菜の誕生日は今日なのだと納得した。

話は変わるが、渋谷に来るのは初めてのアリスとネギ、その人の多さと都会独特の蒸し暑さに色々と驚いていた。

「なな、コレなんてどやろう？　ネギくん、アリスさん」

木乃香が手にとって見せた服は確かに明日菜に似合いそうだが、ネギは木乃香に向かって似合いそうだと言っている。今日の目的を忘れてやいないだろうか？

「服も良いけど、アクセサリーとかも見てみよう？　彼女もそういうの好きでしょ？」

「あ～、そやなぁ・・・部屋にも結構アスナのアクセ雑誌置いてるからなぁ」

服屋を出て装飾品店に向かう。後ろから覚えのある気配と視線を感じたアリスはそれが生徒のものだと感づいて無視する事にした。

「そう言えば、二人は修学旅行の準備は終わった？」

「終わったえ～、後は当日を待つだけや」

「僕も終わってるよ、兄さんは？」

「旅慣れてるから直ぐに終わるし、今日帰ったらやる予定」

丁度昼の時間になったので適当な喫茶店に入ると軽食を頼み、木乃香がふざけてネギと一つのジュースを二本のストローで一緒に飲んでいるのを見ながら紅茶を飲んでいるアリスは先日明日菜から聞いた事を思い出していた。

ネギと木乃香が不完全ながら仮契約をしたという事、頬への口づけだったためスカカードで済んだとは言え、木乃香には膨大な魔力が眠っている。その仮契約が切欠で魔力が目覚めたりでもしたらと思うと冷や汗が止まらなかった。

幸いと言うべきか木乃香の魔力はまだ完全に目覚めてはいない。確かに目覚めの兆候は確認できるが、このまま何もなければ兆候も消えてなくなる・・・・・が、修学旅行で確実に裏の騒ぎが起きる筈。

「（覚悟はした方が良いな・・・・・・木乃香ちゃんが魔力に目覚めて、本格的に裏に関わる事）」

本当にあの小動物は碌な事をしない。聞けば宮崎のどかとも仮契約させようとしたと言うではないか、一般人を裏に巻き込む事の重大性、危険性、そして何よりその責任を如何考えているのだろうか。

喫茶店を出て三人は装飾品店や服屋を見て周り、その都度妨害されていた。

「（何をやりたいのだろうか、あの三人は・・・・・・）・・・・・・はぁ」

先ほどから買い物を妨害してくる三人、３－Ａの生徒であるチアリーディング部三人娘こと柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子の行動に呆れてしまう。

一応プレゼントは買い終えたので特別支障は無いのだが、元気でも有り余っているのだろうか、その奇行の理由が如何も理解できない。

「二人とも、買い物は終わってるし・・・・・適当に観光でもしようか？」

「あ、せやね。アリスさんもネギくんも東京は初めてやろうし」

木乃香に案内されて東京観光する事にしたアリスとネギは夕方までずっと歩き続ける事となり、今までずっと文系だったネギは体力的に辛くなってしまった。見た目元気そうにしているが、足元がフラフラしている。

「ネギ、疲れただろう？　木乃香ちゃん、少し座って休もうか？」
「ほな此処の階段に座ろう？　ネギくんフラフラや」

階段の一番下の段に腰掛けたアリス、木乃香、ネギだったが、ネギは限界なのか木乃香の膝枕でグッスリ眠ってしまった。まだ子供だから疲れて眠ってしまうのは仕方ない事で、木乃香もアリスも滅多に見ないネギの年相応の姿に微笑ましげな表情を浮かべている。

「そういえばな～？　ネギくん、アスナのカード持っとったんよ。あれタロットカードか何かなん？」
「神楽坂さんのカード？　・・・・・・（ああ、パクティオーカードの事か）こんな感じのカードかな？」

懐から取り出した二枚のカード、アリスの絵が描かれた二種類のパクティオーカードだ。

「おお！　これやこれ！　アリスさんのカードは・・・・・・や～んかわぇー！！　これってアリスさんの子供の頃なん？」
「まあね、小さい頃に両親から貰ったものだよ」
「ええなぁ～、なあアリスさん、ウチもこのカード欲しいんやけど、どないしたら手に入るん？　ネギくんに頼んだらネギくんとキスしたら作れるゆーて、キスしたらへちゃむくれな絵のカードになってまうしー」

困った事になった、一体如何答えたら良いものか悩んでしまう。正直に話す訳にいかないので何か良い答えが無いかと考えるが、何も思い浮かばない。

「ネギくんはキスしたらええゆーし、ほんならウチとアリスさんがキスしたらどうなんやろ？」

「っ！？」

余りに唐突な言葉に一瞬何を言われたのか理解できなかったが、脳が瞬時にそれを理解した瞬間、アリスは頬を赤くして少し後ずさった。

「ま、待て・・・・・流石にそれは早とちりというかなんというか私とキスしても出来ないことはないというか今此処では不可能というか・・・・・・」

ワンブレスで言い切った事に感心している場合ではない。先ほどからアリスの心臓がバクバクと高鳴り、顔が熱く、背中に冷や汗が流れて止まらない。

「ウチは・・・・・アリスさんやったら、キスしても・・・ええよ？」

「ちょっ！？」

何てことを言うのかこの娘っ子は！？　などと結構余裕がありそうな事を考えているが、実際アリスは思考に余裕が無い。

いよいよアリスの精神に限界が訪れようとしたその時、救いは現れた。明日菜と雪広あやかが凄いスピードで走ってきたのだ。

「コラ～～～！！　お待ちなさい～～～～～～ッ！！」

「雪広さんと神楽坂さんだね」

「せやなぁ、なんやーみんなそろってこんな所でー？」

どうも怒り心頭という顔をしているあやかだったが、木乃香に膝枕されて眠るネギを見た瞬間噴出してプルプルと震え出した。

「こ、こここのかさん、ネギ先生を膝枕など・・・・・・私がしたいですわ！！」

何をぶっちゃけているのだこの子は・・・・・・。話には聞いていたが、本当にショタコンだったとは。ネギ変な事をしないか監視でもした方が良いのかもしれないと本気で思ってしまったアリスは、正しいのだろう。

「んー・・・・・あ、あれ？　皆さん・・・アスナさんまで！？　なんでこんなところに・・・」

あやかが騒いだ所為で目が覚めたらしい。明日菜とあやか、それと何時の間にか出てきていた美砂、円、桜子を見て驚きの声を上げた。

「ネギ、丁度良い機会だ。アレを渡したらどうだ？」
「あ、うん・・・えっと」
「ネギくん、これやで～」

木乃香が手渡した包み、ネギはそれを手に持って明日菜に差し出した。

一方、その明日菜はというと・・・突然の事で呆気にとられている。どうやら本人はすっかり忘れているようだ。

「アスナさん、４月２１日の誕生日おめでとうございます」
「へ・・・・・・？」

何故か明日菜ではなくあやかが声を上げた。幼馴染のあやかすら忘れていたという事なのだろうか？　随分な幼馴染である。

「明日は神楽坂さんの誕生日だと聞いてね、折角だから今朝からネギと木乃香ちゃんと一緒にプレゼントを買いに来てたんだ」
「アスナの好きな曲のオルゴールあったんで、それを選らんだんや～」
「本当は明日渡そうかと思ったんですけど・・・・・・」

それに便乗するように美砂たちも妨害して買った商品を次々と渡している。それで感極まったのか段々と明日菜は涙を浮かべ、心の底から嬉しそうな表情を浮かべた。

「あ・・・ありがとうネギ、このか、アリス先生、みんな・・・・・・こんないきなり。わ・・・私・・・私、嬉しいよっ」

この笑顔を見れただけでも買った甲斐があるというものだ。アリスの知る明日菜とは思えない程の笑顔を浮かべた彼女にアリスは満足気に頷くと先ほどから出しっぱなしにしている二枚のカードに目を落した。

「・・・・・父さん、母さん、アスナ叔母さんは元気に・・・友達に囲まれて幸せそうにしているよ」

小さな声だったので誰かに聞かれる事は無かった・・・・・・筈だったのだが、アリスは知らなかった。この時、木乃香がその言葉を微かにだが聞いていた事を。

十二話　「アリスの初デート・・・・・・ではなかった」（後書き）

次回から京都～、オリジナル展開も始まってきますよ～。

十三話　「いざ行かん、京都へ」（前書き）

修学旅行始まりました！　もうすぐアリスの謎の電話相手が登場します。

十三話　「いざ行かん、京都へ」

英雄と女王の子

十三話

「いざ行かん、京都へ」

修学旅行当日の朝、アリスは6時前に大宮駅に来ていた。既に何人かの教員と、何故か3－Aの生徒数人が居たので、教員の方に挨拶を済ませておく。

「おはようございます新田先生、しずな先生、瀬流彦先生」
「おはようございますアリス先生、お早いですな」
「おはようございます、今日から三日間よろしくお願いしますね」
「おはようアリス君」

先に来ていた新田先生としずな先生、瀬流彦先生に挨拶を終え、アリスはなんとなく周りを見渡すと丁度ネギが来た所だった。

「あ、おはよう兄さん」
「ああ、おはよう・・・良く眠れたか？」
「うん！　あ、そうだ、このかさんからおにぎり預かってるけど、食べる？」
「あ～・・・・・そうだな、頂こうか」

ネギからおにぎりを受け取ると近くのベンチに座って食べる。ネギは他の先生方に挨拶をして生徒たちの輪の中に入ってた。
随分と生徒たちの中に溶け込んだみたいで、兄としても安心だ。

「うん、美味い・・・・・・」

木乃香の作ってくれたおにぎりを味わいつつ、生徒の集合時間である9時を待った。・・・・・・柱の影から何故かアリスに微かな敵意を向けている野太刀を持った生徒に苦笑しながら。

9時、生徒たちが集まったので点呼をしていよいよ新幹線に乗り込んだ。

新幹線の中に入れば後は京都に着くまで自由時間となるので生徒たちも各自、好きなことをして過ごしている。勿論アリスも教員席に座って音楽を聴きながら読書をしていたのだが、魔力・・・・・・ではなく気の力を感じたので顔を上げてみれば・・・。

「・・・・・何で蛙?」

直ぐに式神だと気づき、呆れつつも握りこぶしを作って親指を弾いた。

指弾によって放たれた魔力の弾丸がアリスの近くにいた蛙と木乃香の周りの蛙を消滅させる。後はネギに任せる事にしたのかアリスは我、関せずとばかりに再び読書に戻る。時々アリスと木乃香に近づいてくる蛙には指弾を放ちながらそれなりに有意義な時間を過ごしていた。

京都に着いた。早速3－Aが向かったのは京都観光の代表格と言っても良いであろう程の有名な場所、清水寺だ。

「京都ぉーーっ!」
「これが噂の飛び降りるアレ!」
「誰か!!　飛び降りれっ」
「では拙者が・・・」

「おやめなさいっ」

相変わらず元気の良いクラスだが、修学旅行という事でかなりハイテンションになっているようだ。

時々耳に入る綾瀬夕映の薀蓄を聞きながら清水の舞台から京都の街を眺めていたアリスはその懐かしさに心穏やかな気持ちでいた。

「懐かしいな・・・・・京都に来たのは本当に久しぶりだ」

いつまでもこうしてる訳にいかないので移動しようとしたアリスだったが、懐に入れている携帯に着信が入ったので立ち止まると通話ボタンを押した。

「もしもし?」

『あ、アリス様・・・シルヴィアです。只今よろしいですか?』

「ああ、生徒の引率中だからそんなに時間は取れないけど」

『申し訳ございません。それで、今日本に向かっていますので、予定通り明日の夜にはそちらの宿に着きます』

「わかった・・・・・一応、道中気をつけて、妨害とか考えられなくないから用心しておくこと」

『畏まりました。それでは明日の夜に』

通話を終えて歩き出すアリスは既に戦闘モードに切り替わっていた。周囲を探知して微弱な魔力・気の反応も逃さないようにしながら表面上は普通を装う。

“姫”こそ影の中にしまっているが、アリスの指には指輪が、耳にはピアスが、それぞれアリスが信頼する魔法発動体が太陽に照らされてキラッと光った。

微かな気の反応を感じて来てみればあやかとまき絵が落とし穴に

嵌って、その中に式神の蛙がいたという事で随分と騒がしかった。

「本当に、過激派は何をしたいのか・・・・・・」

その後、３－Ａは音羽の滝の水の一つに縁結びの効能があると言うことで挙って行ってしまった。流石は思春期、縁結びといった恋愛事になると目の色変えて飛び付くのか。

「そしてこの様か・・・・・・」

現在、アリスの目の前にある惨状は・・・・・・酔い潰れて眠ってしまった生徒たちの阿鼻叫喚（？）。

試しにアリスが音羽の滝、縁結びの水を舐めてみると原因がはっきりした。酒が水に混ざって流れているのだ。しかも水で薄くなっているとは言えかなりアルコール度数の高い日本酒が。

酒を飲み慣れていない中学生が薄くなっているとはいえ高アルコールの酒を飲めば当然、急性アルコール中毒を起こしても不思議は無い。

「ん・・・？　何かお酒くさくないですか？」

「あああ！！　こ、これは・・・・・・っ！？」

丁度通りがかった瀬流彦先生と新田先生を見てネギが何か言い訳をしようとしているが、アリスはそれを拳骨で黙らせて後ろに下がらせる。

「どうやら音羽の滝の縁結びの水に酒が混ぜられていたみたいで・・・・・恐らく修学旅行などの観光客を狙った悪質な悪戯ですね」

被害にあった生徒を見せ、証拠の水を一口飲ませてみると二人と

も納得したらしい。その後駆けつけたしずな先生も交えて今後の事を話し合う事にした。

「３－Ａは取りあえず潰れてしまった生徒をバスで休ませます。残った生徒は一応観光を続けさせますが・・・・・こういった悪戯が他にも無いか警戒した方が良いですね」

「そうですな、他のクラスの生徒にまで被害が出ては困りますし・・・・折角の修学旅行をいきなり中止にしては生徒も可哀想ですからな」

取りあえず修学旅行中止は避けられた。酔い潰れた生徒はすぐさまバスで休ませ、しずな先生には京都の役所に被害届を出しに言ってもらう事に。

新田先生と瀬流彦先生は他のクラスの生徒に注意を促す事となって、ネギとアリスは残った３－Ａの生徒の引率を続ける。

「さて・・・・・この分だと今夜辺りに動きそうだな」

その後は特に問題も無く、一日目の観光が終わって麻帆良学園一同は宿泊先のホテルであるホテル嵐山到着した。

酔い潰れた生徒たちはそれぞれの部屋に寝かせ、アリスはしずな先生に言われたので露天風呂に入っていた。日本に来た時は必ず温泉・・・・・それも露天風呂に入る程の温泉好きのアリスにとって最もリラックス出来る一時である。

「あ、兄さん」

「旦那ぁ！」

「ん？　ネギとカモミールか・・・」

警戒しつつも割りとのんびりしていた所にネギとカモミールが来

た。恐らくしずな先生にでも言われて来たのだろう。

「すごいねー、これが露天風呂って言うんだぁ」
「そう、日本人の心の故郷らしい」
「いいねぇ、これで桜咲刹那の件が無ければなぁ」
「・・・・・・は？」

突然何を言い出すのかこの淫獣は？　と言うか何故このタイミングで刹那の事が出てくるのか解らない。

「旦那、気づいてなかったんですかい！？　桜咲刹那はスパイ！関西呪術協会の刺客だぜ！？」
「・・・・・ちょっと待て、何故そんな話になる？」
「名簿を見れば一目瞭然じゃねーですかい！　あいつは京都出身！京都・・・かみ、なる？　流って書いてるぜ！！」

かみなる流ではなくて神鳴流なのだが・・・・・。そもそも京都出身だからって刺客だと決め付けるのは如何なものか、というより正体を知っているから何とも言えない。
その時、ガラガラという音が聞こえてきた。誰かが入ってきたのだろうが、アリスは嫌な予感がした。
この露天風呂が混浴だと言うことは知っている、そして聞こえてきた音が女用脱衣所の方からだという事に気づいてしまった。

「おいおいおいおい・・・・・」

入ってきたのは今正に話題に挙がっていた桜咲刹那だった。幸い岩の陰に居るから向こうから見える事は無いだろうが、何故かアリスの顔は青褪めている。

「困ったな・・・魔法使いであるネギ先生なら・・・何とかしてくれると思っていたのに・・・・・・アリス先生は良くやっているけど・・・あの人は何となく苦手だし」

刹那の呟きでネギが焦り出した。そして直ぐにネギから微かな殺気を感じる。

「（馬鹿！？）」

案の定、刹那はネギの微かな殺気に感ずいて夜光灯を小石の指弾で割って明かりを消すと（何故か）持っていた野太刀を抜刀、そのまま抜刀術での奥義・斬岩剣で岩を真っ二つに。その際、ネギのアホ毛が半ばから切られてしまった。

更に、ネギの風花・武装解除で刹那の野太刀が弾き飛ばされるが、そのままの勢いで刹那は右手でネギの首を、左手でネギの・・・・・・まあ、急所を鷲掴みにしてしまった。

「何者だ・・・答えねばひねり潰すぞ？　・・・・・・って、アレ？　ネ・・・ネギ先生、アリス先生？」

「あわわわ・・・」

「・・・・・・はぁ」

結局は誤解だったのだ、勝手にネギとカモミールが刹那を疑っていただけで、アリスの口添えで何とかネギとカモミールの誤解を解こうとしたのだが、女用脱衣所から木乃香の悲鳴が聞こえた。

「こ、この悲鳴は・・・・・・このかさん！？」

「このかお嬢様！？」

「木乃香ちゃん！」

油断した。刹那が入ってきたことで若干パニックになってしまい、周囲の警戒を怠ってしまったアリスのミスだ。
直ぐに影から“姫”を出してネギと共に先に走り出した刹那の後を追う。

「大丈夫ですかこのかさん!?」

扉を開いて中に飛び込んだ瞬間に体の力が抜けた。何故なら、大量の猿が木乃香と明日菜の下着を脱がそうとしているのだから。

「・・・・・っと、呆れている場合じゃないか」

木乃香が完全に下着を脱がされた事でキレた刹那が野太刀を抜刀して猿を切ろうとした所を、何トチ狂ったのかネギが可哀想だと止めているので、木乃香が攫われる前にアリスは“姫”に気を通した。

「神鳴流奥義・・・・・百烈桜華斬!!」

アリスの放った百烈桜華斬が一瞬で大量の猿を紙切れに戻した。
呆然とアリスを見ているネギと明日菜、そして驚愕している刹那を尻目に、アリスは近くの茂みに確認した気配に左手中指に填めた指輪を向ける。

「魔法の射手・・・雷の２１矢、闇の２１矢」

詠唱破棄して放った魔法の矢、合計４２本が茂みを吹き飛ばすも、アリスは手応えの無さから術者が既に逃げている事を悟った。

「逃げたか・・・・・・」

今度の相手は間違い無く陰陽師、下手したら神鳴流も居る可能性を考慮したアリスは夜空を見上げる。満天の星空が、今は何故か不気味に思えてならなかった。

十三話　「いざ行かん、京都へ」（後書き）

アリスが神鳴流を使える理由は恐らく察することが出来ると思いますが、一応補足。
アリスの戦いの先生は父と母、旧・紅き翼のメンバー（ガトウとゼクス以外）です。

十四話　「ネギ初見、アリスの実力の一端」（前書き）

遂に京都編初の戦闘シーン突入！

十四話　「ネギ初見、アリスの実力の一端」

英雄と女王の子

十四話

「ネギ初見、アリスの実力の一端」

脱衣場での一件の後、木乃香から刹那の事について、二人の過去の事についてネギと明日菜に説明があった。アリスも同席していたが、詳しい事情に関しては学園長から聞いているし、貰った資料にも書いてあったので知っている。

木乃香と刹那は幼馴染、互いに「せっちゃん」「このちゃん」と呼ぶほど仲の良い親友同士だった。しかし、ある日、二人が川原で遊んでいる時に木乃香が誤って足を滑らせ、川に転落して溺れ掛けた時、刹那は当然助けようとしたが・・・・・結果的に二人共に大人に助けられてしまう事となった。

その後、刹那は神鳴流の稽古で忙しくなり、木乃香とは会えず仕舞い。麻帆良学園で再会してからは今のように、木乃香は刹那に避けられ続けている。

語っている時の木乃香の涙を浮かべた笑顔は、アリスの心に残った。表面上は笑っていても、木乃香の心は深い悲しみに染められ、泣いていたのだ。

「知っていた筈なのにな・・・・・」

屋根の上で月を見ながらアリスは麻帆良に来てから見てきた木乃香の笑顔を思い浮かべる。確かに笑顔の似合う可愛い娘だが、今思えばあれは心の底からの笑顔だっただろうか？　確かにそう思うか

もしれない、しかし、それでも心に存在する悲しみは何処かしらに見受けられた。

「私も、まだまだだね」

自嘲気味に嗤うアリスだが、やるべき事が決まった。

「この修学旅行が良い機会だ・・・・・・せめて進展する機会でも作ってあげられれば」

あの二人の事だ、きっと切欠さえあれば昔のように仲睦まじい姿を見せてくれるようになるだろう。

「うん・・・明日に備えて寝る、か・・・・・・・っ！」

アリスの視界に猿の着グルミが映った。しかもそいつは木乃香を抱えている・・・つまり。

「来たか！」

敵襲、三日間の修学旅行最初の襲撃だった。

猿の着グルミが向かっている先、そこから人払いの結界が張られているのを感じたアリスは先回りする事にした。

少し先の駅まで人払いされている事から、そこに逃げるのであろうと予測して浮遊術と虚空瞬動を併用しながら移動し、猿の着グルミと、それを追うネギ、明日菜、刹那より先に人払いされている最終地点に辿り着いた。

どうもキナ臭い気配がしたので、自身の気配を完全に消し、尚且つ隠れてネギたちの到着を待つ。

「近くにいる気配は一人か・・・・・・随分の血の臭いが濃い、狂った気配だこと」

随分とアリス好みの気配に関心していた直ぐ後だった、漸く猿の着グルミとネギ達が到着した。

全員ずぶ濡れになっているのが不思議だったが、特に気にした事でもないのでスルー、猿の着グルミは関西呪術協会の術者だったらしく、中から清掃員の服を着た女が出てきた。

呪術の一つ、京都大文字焼きによって進路を炎に絶たれたネギ達だったが、影から“姫”を抜いたアリスが虚空瞬動で炎の中心に飛び、詠唱破棄の魔法を発動させた。

「水華・水流乱舞!!」

“姫”を振って発生した激流が炎を完全に消し去ってしまった。

「兄さん!」
「アリス先生!」
「旦那ぁ!」
「アリス先生・・・・・・」

アリスの登場にネギと明日菜、カモミールは喜びの声を上げるが、刹那は複雑そうな顔をして声のトーンを落とした。

「な、何なんやあんさん!?」

猿女が驚愕と焦りの入り混じった声で問いかけてきたが、アリスはそれを無視して詠唱を開始する。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　来たれ深淵の闇　燃え盛る大焔　我を焼け　彼を焼け　そはただ焼き尽くす者」

猿女はアリスの詠唱を聞いて焦ったのか猿と熊の式神、前鬼・後鬼を召還してきたが、それを見てもアリスの表情に焦りといった変化は一切無い。

「奈落の業火！　術式固定、黄昏の剣　魔法付与！」

固定された術式が“姫”に取り込まれる。その瞬間“姫”が黒い炎を纏い、周囲の空気を焼きながら揺らめいた。

「術式付与完了・・・是、“地獄の焔姫”」

術式武装を完成させたアリスは、更に浴衣の懐から一枚のカードを取り出した。父とのパクティオーカードだ。

「アデアット！」

カードが光り、消えて無くなると、アリスの両手にガントレットが装備され、服装がホテルの浴衣から紅を基調としたシルバーのラインが入ったジャケットと黒いズボンに金属製のブーツを履いて外套を纏った姿に変わる。

「いくぞ猿女・・・最強クラスの魔法使いの実力、その目に焼き付けろ！」

アリスの後ろでネギが明日菜に魔力を供給してアーティファクトを渡していた。パクティオーカードが変化して出てきたのはカードに描かれている大剣かと思われていたのだが・・・・・、何故か

ハリセンだった。

「な、なにこれー！　ただのハリセンじゃないのよー！！　アリス先生みたいなカッコ良い武器じゃないの！？」

「あ、あれー、おかしいなー・・・」

明日菜のアーティファクト、“ハマノツルギ”は聞いた事がある。自然の摂理を覆す魔法や呪術に対する絶対効果“破魔”と“破邪”の力、その強力な力と魔法使いに対する危険性故にマスターピースを越えたアーティファクト、グランドピースに属する究極クラスのアーティファクトだ。

「まだ担い手になるには不相応であるが故の弊害か・・・・・・それでも効果は劣化しているとはいえ、呪術に対して有効なのは変わりない、か」

刹那の声に反応して明日菜も状況を思い出し、ヤケクソになりながら刹那と共に猿と熊・・・・・猿鬼・熊鬼に掛かって行った。

明日菜と刹那の攻撃は簡単に防がれてしまうが、アリスはその隙に瞬動で猿女に切りかかろうとした。しかし、猿女の後ろから漸く狂った気配の主が瞬動で現れ、そのスピードのままアリスの斬撃を弾いたのだ。

「どうも～、神鳴流です～。おはつに～」

「・・・・・・チッ」

やはり神鳴流が護衛に居た。ゴスロリ服を着て小太刀と短刀の二刀を持った一見弱そうな少女だが、アリスには判る。この少女から感じられる人外の気配と狂った気配、そして・・・・・・咽返る程の濃厚な血の臭いが。

予測は当たったが、出来れば外れて欲しかったアリスは舌打ちをしつつも黒い炎を纏った“姫”を構えなおし、切り札を切る事も視野に入れた。

「神鳴流か・・・それにしては魔の血よりも人間の血の臭いが濃いな・・・・・堕ちたか？　貴様」

「はい～、妖怪はん切ってんのも飽きてもうて～・・・試しに人切りしてみたら楽しかったんですぅ～」

「成る程な・・・・・・これは、桜咲では勝てんか」

「先輩とも戦ってみたかったけど、あんさんの方が面白そうやね～」

「そう・・・・・私はアリス」

「月詠いいます～」

互いに名乗る、それが引き金となった。互いに瞬動を使い、超高速の斬撃を繰り出しては弾き、弾かれ、“姫”の黒い炎が月詠の腕を焼くも、当の焼かれた本人は気にしていないのか、それすら楽しんでいるのかニコニコしている。

互いに譲らずの剣戟を繰り広げている中、アリスは飛び上がって虚空瞬動を使い、月詠の頭上に移動すると腕に気を纏った。

「ラカン直伝！　羅漢適当に右パンチ！！」

巨大な気の塊が拳となって月詠を襲うが、彼女は余裕でかわして、巨大な拳型に窪んだ地面に着地したアリスに再び切りかかってきた。

「流石にかわすか」

「アリスはん、すごいな～・・・あんなパンチ見たのはじめてや～」

高速で剣を交えながら会話する二人、傍から見れば異常な光景だが、二人は余裕の表情・・・むしろ楽しそうにしている。

「ざーんがーんけーん！」
「斬鉄閃・炎！」

月詠の斬岩剣とアリスの斬鉄閃、二つの神明流の技がぶつかり合った。結果は一目瞭然、術式武装によって大幅に強化された“姫”に小太刀が勝てる筈も無く、月詠の小太刀は刀身の半ばから叩き折られてしまった。

「あやー、アリスはん神鳴流使えたんやな～、うちの小太刀が真っ二つやわ～」

折れた小太刀を捨てた月詠は短刀を鞘に戻してペコリと頭を下げた。

「楽しい死合いでしたけど～、本日はここまでにしときます～」
「その様だね・・・・・・」

見るとネギ達の方も決着が着いたらしく、木乃香が刹那に抱きかかえられていて、猿女は三人に追い詰められていた。

「ほな、さいなら～」

月詠は瞬動で猿女の傍に移動し、猿女が召還した式神に乗って共に去っていった。

「どうやら今回の仕事・・・・・・良い収穫が出来そうだ」

月詠と剣を交えた事でアリスは機嫌が良さそうだった。その胸の内にあるものは何なのか、今はまだ、誰にも窺い知れる事は無い。

十四話　「ネギ初見、アリスの実力の一端」（後書き）

次回か、その次辺りにアリスの従者が出てくると思います。

十五話　「奈良、合流した最強の従者」（前書き）

遂にアリスの従者が登場しました！

十五話　「奈良、合流した最強の従者」

英雄と女王の子

十五話

「奈良、合流した最強の従者」

猿女と月詠が去った後、木乃香が目を覚ましたのだが、刹那は木乃香の笑顔を見て逃げ出してしまった。

若干しゅんとしている木乃香の頭に手を置いて、アリスはゆっくりと艶やかな髪を梳くように撫でる。

「アリスさん？」

「友達・・・だったんでしょう？　折角二人の故郷に来たんだから、まだまだチャンスはある。諦めないで、木乃香の気持ちをぶつけてあげれば良いと思うよ」

「・・・・・そうやね！　うちはせっちゃんの友達や！　せっちゃんとまた仲良うなる為にぶつかるわ！」

そう言って笑った木乃香の笑顔は、今までに無い輝きがあった。

旅館に帰って床に就いたアリスは用心に用心を重ねて影から作った鳥型の使い魔を１０羽、木乃香の影の中と旅館全体に配置して就寝した。

結局、朝まで何も起きる事無く、アリスは教員の起床時間１０分前に起きて修学旅行２日目の予定を他の教員と打ち合わせる事になる。

「一応、昨日のような悪質な悪戯が無いとは限りませんので、各先

生方の方で警戒はしておいて下さい。生徒たちの安全を守るのも、教師の仕事ですからな」

新田先生の話が終わって打ち合わせは終わった。この後直ぐに大広間で朝食になるので、教員はそちらに移動、既に来ている生徒も幾らか見受けられたが、時間的にまだ早いので少し待つ事になるだろう。

「それでは麻帆良中のみなさん！　いただきます！！」
『いただきまーっす！！』

朝食の時間となり、生徒も全員がそろって自分の席に着いたのでネギとしずな先生の合図で朝食を食べ始めた。
久しぶりの京都の食事に太鼓判を押しつつ、アリスは2日目の予定を頭の中でシミュレートしてる。
今日の行き先は奈良、関西呪術協会の連中も流石に奈良で襲ってくる事も無いだろうし、何より昨日の今日だ。おそらく一日使って準備を整え、明日にでも襲撃してくると考えた方が現実的だ。

「今日は比較的のんびりだな」

ならば今日はどうするか考えるのだが、何も思いつかない。

「あの、アリス先生」
「ん？　ああ、大河内さん・・・どうしたの？」
「今日は、予定ありますか？」
「特には」

アキラには以前オムライス屋を紹介してもらってからよく話しをする機会が多くなった。

最近は麻帆良学園都市だけでなく、都心の方の美味しい食事処を教えて貰ったり、お互いの話をしたりと、数少ないアリスと仲の良い生徒の内の一人になっている。

「今日の奈良観光、良かったら私たちの班と一緒に回りません？」
「そうだね・・・・・うん、そのお誘いに乗らせてもらおうかな」

チラリと刹那と戯れる木乃香（木乃香が一方的に見えるが、刹那も若干嬉しそうな顔をしている）に目を向けて、昨晩の内に彼女の影の中に自身の影で作った使い魔を忍ばせている事を思い出してアキラの誘いに乗った。

朝食も終わり、バスに乗り込む３－Ａを眺めながらアリスは旅館に残す使い魔とは別に新たな使い魔を作り出し、生徒全員とネギの影の中に忍ばせた。

少し疲れる程度の代償なので行使した警戒方法だが、案外使い勝手の良い方法でなるのは経験から知っているし、色々と信頼もある。

生徒達が全員バスに乗り込んだのを確認したアリスはネギの後にバスに乗った。ネギの隣に腰を下ろしてイヤホンを耳に掛けると、鞄から新幹線の中で読みかけだった本を取り出して読み始めた。因みに、アリスが聞いている音楽は歴代ウィー○少年合唱団の歌や海外の有名歌手の歌等々、後は最近気に入った日本の歌手の歌だ。

バスの中で本を読んで車酔いしないかと心配する弟に魔法を使って酔わないようにしていると伝えているので、特に邪魔が入る事無く読書を続けるアリスだった。

奈良の中でも観光地として最も有名なのは鹿と触れ合える奈良公園だろう、アリスも奈良に来たのは初めてなので少し浮かれ気味だ。

アリスはアキラに誘われたのもあって、明石裕奈が班長を務める４班と共に行動していた。

「アリス先生は、奈良初めて？」
「うん、日本で行った事があるのは京都と東京、後は沖縄くらいだからね」

アキラと並んで奈良公園を見て歩いているアリスは、傍から見ても楽しそうだ。それこそ年相応の笑顔を見せている。いくら大人びていても、アリスは１６歳の子供なのだ。

「あの大きなお寺の中に、有名な奈良の大仏があるんだっけ？」
「うん、教科書にも載ってたけど、凄く大きいんだって」

鹿に鹿煎餅を食べさせながらアリスとアキラは穏やかな時間を過ごしていた。お互いに饒舌な方ではないので会話こそ多くはないが、それでも楽しそうに過ごしている。

「そろそろ時間だね」

楽しい時間と言うのは直ぐに過ぎ去っていく。自由時間をめいっぱい使って鹿と戯れたり、大仏を見たり、茶屋で団子を食べたり、アリスにとってもアキラにとっても楽しく、有意義な時間となった。

余談だが、そんな二人の様子を４班の残りのメンバー、裕奈と亜子、まき絵、龍宮真名が隠し撮りしながら妖しく哂っていた事に、終ぞ気付かなかった

夜になり、アリスは旅館の玄関で人を待っていた。以前から電話で散々話していたアリスの従者、シルヴィアがそろそろ到着する頃なのだ。

「もう来る頃なんだが・・・・・・」

その時、アリスの前に一陣の風が吹き、その風の中から一人の女性が出てきた。

「只今到着しました。アリス様が従者、シルヴィアに御座います」

プラチナブロンドの艶やかな髪を膝の辺りまで伸ばした西洋人、年の頃は二十歳を超えているだろうか、整った顔立ちとスカイブルーの瞳が美しい女性だった。

「仕事を終えたばかりなのにすまない。今回の仕事は少し大事になりそうだ」

「お気になさらず、私の身も心も、命すらも、全てアリス様に捧げたのですから、この程度の事」

アリスの前で頭を下げていたシルヴィアが立ち上がってアリスの目を真っ直ぐ見た。

「それで、アリス様の弟・・・確か、ネギ・スプリングフィールドでしたか？　今何処に？」

「ああ、ロビーで呆然としてる姿を見たけど、何してるんだか・・・・・」

一先ず、いつまでも旅館の玄関で立ち話をしていても仕方が無い。シルヴィアのチェックインを済ませてロビーに行くと何故かネギがゴロゴロと転がっていた。・・・・・スーツは埃塗れになったが、床が綺麗になっている。

「ネギ、何をしている？」

「あ、兄さん・・・・・と、誰？」

アリスに声を掛けられて落ち着きを取り戻したが、その隣にいたシルヴィアに気付いて疑問符を浮かべた。

「彼女は私の従者で、シルヴィア。それで、この子が私の弟のネギだ」

「初めまして、アリス様の従者をさせて頂いてます。シルヴィア・オーギスと申します」

「し、シルヴィア・オーギスだってぇ！？」

シルヴィアの本名を聞いて驚きの声を上げたのはカモミールだった。ネギは知らない様子だが、流石に魔法界に精通している彼は知っているらしい。

「カモ君、知ってるの？」

「知ってるも何もアニキ！　シルヴィア・オーギスを知らねぇんですかい！？　魔法世界でも超が付くほどの有名人で、アリスの旦那がリーダーを務める二代目・紅き翼の一員、“最強を補佐する最強の補佐”って二つ名を持つ最強クラスの魔法使いですぜ！？」

「えええええっ！？」

最強、つまりアリスやラカンを補佐する事においても、そして、単独戦闘でも最強クラスの魔法使いであるが故に付けられたシルヴィアの二つ名“最強を補佐する最強の補佐”、前衛が大半の二代目・紅き翼の中で唯一の後衛である為、二代目・紅き翼の砲台とも言われている。

「で、でも何でそんな凄い人が此処に居るの？」

「今回の仕事で少し気になる事があってね。丁度以前の仕事を終え

ていたシルヴィアを呼んでおいたのさ」

その気になる事が何なのか教えて欲しそうにしているネギだが、これは二代目・紅き翼の機密事項に関わっている為、話す事は出来ない。

「それより、何かあったのか？」

「う、うん・・・・・それが」

何でも、ネギが宮崎のどかに告白されてしまい、それで悩んでいたのだと。ネカネから生徒と恋愛関係になるのは御法度だと教えられているが、イギリス紳士としては女性からの告白を無碍にする事は出来ないので、散々考えているのだが、何も思いつかないらしい。

「兄さん、何か良い方法は無い？」

「・・・・・色恋沙汰は流石に助言できないな。私自身、恋愛経験が皆無だから」

「シルヴィアさんは？」

「ん～、確か日本は教師と生徒の恋愛は駄目なんでしたね。でも、ネギ君はまだ１０歳、教師をしていてもまだ子供なんですから、その辺の事について重く考える必要は無いと思いますよ？」

流石は女性、良い助言をしてくれる。

「ネギ君が考えるべきなのは、その娘と如何したいのか、ネギ君自身はその娘の事を如何考えているのか、ネギ君の偽らない気持ちを伝えるのが一番だと思います」

「・・・僕の、気持ち・・・・・」

少しはマシな顔をするようになった。先ほどまでの情けない表情

は薄れ、真剣な顔つきになっている。

「少し、考えて見ます」

「それが良い。悩みぬいた先に出された選択が何であれ、それは宮崎さんにとっても、ネギにとっても将来的に大切な結果を齎す」

「うん！」

ネギに別れを告げてアリスはシルヴィアと共に彼女が泊まる事になっている部屋へ向かった。

部屋に荷物を置いて一段落すると、アリスは部屋に備え付けられたお茶を飲みながら昨晩に起きた事をシルヴィアに聞かせる。敵の主犯と思しき呪術師と、神鳴流剣士の存在、その他にま人員はいるのかもしれないので、注意して置くべきだと言う事と、アリスが昨夜に考えていた事。

「確かに、必要だとは思いますが・・・・・・大丈夫なのですか？その・・・性格的に」

「多少の難は在りそうだが、飼い慣らす自信はある」

こうして、最強の魔法剣士の下に最強の魔法使いが合流した。だが、二人はまだ気付かない。・・・・・・この夜、二人が予想打にしなかった事態が発生する事など。

十五話　「奈良、合流した最強の従者」（後書き）

次回はいよいよ……修学旅行編のある意味での見せ場？

十六話　「アリス困惑、新たな従者」（前書き）

そろそろ激展開が予想される……。

十六話　「アリス困惑、新たな従者」

英雄と女王の子

十六話

「アリス困惑、新たな従者」

シルヴィアを自室に招いてアリスは今後の話をしていた。

修学旅行が無事に終われればアリスたちは麻帆良に帰る。シルヴィアにも当然付いて来てもらうが、それからの事を考えなければならないのだ。

二代目・紅き翼のメンバーの内、リーダーのアリスとその従者であるシルヴィアの二人が長期間も麻帆良に留まるのはそれなりに問題も発生するのだ。唯でさえ二代目・紅き翼の一人であるタカミチが麻帆良に常駐しているのに、アリスとシルヴィアまでとなると魔法界が煩い。

「一応、来る前にラカンさんに連絡しておいたのですが、彼でも魔法界を抑えきれる筈がありませんね」

「そういう事、それに二代目・紅き翼で最も仕事をしない男だけが魔法世界に残った事になるんだから、ＭＭの堅物共が喚くだろうな」

もしくは、これ幸いとばかりにメガロメセンブリア元老院は再びネギを鍛えるよう依頼してくるだろう。一度断っているとは言っても、あそこの堅物共は諦めずアリスにコンタクトを取ろうとしているが、アリスは仕事が忙しいと言ってシカトしてきたのだが、アリスとシルヴィアがネギの傍にいるとなると再び来るだろう。

「最悪なのは学園長を経由して依頼してくる事か・・・・・」

それでも断るが、麻帆良でのアリスの評判が落ちる可能性もある。気にしないが、アリスの活動に制限が出来てしまえば流石に困った事になる。

「一番しつこそうな人間は誰だ？」
「最有力候補を挙げるのでしたら・・・クルト・ゲーデル総督かと」
「ああ、父さん達・・・初代・紅き翼の裏切り者か」

正確にはメンバーではなかったが、共に行動していて考えが合わなかったからと言って離れ、今や父と母にとって敵と言っても過言ではないメガロメセンブリア元老院に属している男。アリスにとっても敵という認識しか持てない下郎だ。

「・・・・・ん？」
「今、誰かが温泉で魔法を使いましたね」
「この魔力は・・・ネギ？」

何かあったのだろうか、と気になってロビーに行ってみるとネギが泣いていた。そして明日菜が詰寄って怒っているし、刹那が呆れているという何とも言えない光景があるではないか。

「何かあったの？」
「あ、アリス先生！　・・・・・と、誰？」

アリスの声に反応して振り返った明日菜がシルヴィアを見て疑問符を上げた。刹那も誰かと警戒しつつ目で訴えている。

「先ほど合流した私の従者、ミニステル・マギで、私がリーダーを務める二代目・紅き翼のメンバーの一人」

「シルヴィア・オーギスと申します」
「アリス先生の従者!?　え、えっと・・・神楽坂明日菜です」
「神鳴流剣士、桜咲刹那です」

挨拶もそこそこに、何があったのか聞く。・・・・・・何でも麻帆良のパパラッチという呼び名で有名な３－Ａ生徒、朝倉和美に魔法の事がバレてしまったらしい。それを聞いてアリスもシルヴィアも呆れてしまった。次いで沸いてくるのは怒り。

「ネギ・・・・・・魔法の秘匿意識が低すぎるんじゃないのか？聞く限りだとその場で記憶消去もしていないみたいだし、お前は魔法学校で何を学んできた？　修行中の身で気を抜きすぎるとは何事だ！」
「ご、ごめんなさい～～～！　で、でも仕方なかったんです。人助けというか、猫助けというか・・・・・・」
「それでも話にならん、この事は学園長と魔法界に報告しておくぞ」
「そ、それだけはぁ！！」

報告なんてされれば強制送還され、その後はオコジョにされて刑務所行きだ。犯罪者のレッテルを貼られるのは必然、それだけは勘弁とばかりにネギはアリスに縋り付いた。

「甘えるな、普段であれば兄弟だから何とかしてやったが、魔法や裏関係については兄弟である事に意味は無い」

流石に厳しすぎるのではないかと明日菜と刹那がネギの弁護をしようとした時だった。廊下の向こうからカモミールを肩に乗せた和美がやって来たのだ。

「おーい、ネギ先生ー」

「ここにいたか兄貴ー」

呆れて頭を抱えるアリスだったが、和美とネギたちの会話を黙って聞いていると和美は魔法を口外しない代わりにネギの仲間になると言ってきた。流石にそれはアリスも黙っていられない、影から“姫”を抜いて切っ先を和美の喉下に突き付けた。

「ひっ！？」
「ちょ、ちょっとアリス先生！？」
「兄さん！？」

突然の行動に驚愕したネギと明日菜、刹那とカモミールとは違い、和美は剣を喉に突き付けられ、恐怖に震えていた。シルヴィアはネギ達が動かないように無詠唱の戒めの風で拘束している。

「朝倉・・・・・コチラの世界に足を踏み入れる事を気楽に考えているみたいだが、今すぐその気楽な考えを捨てろ。コチラの世界ではこの状況がいつ訪れるとも知れない、殺伐とした死の世界だ。この剣がこのまま喉に突き刺さって首を落とすと言う事が簡単に起こり得る血塗れの道しか存在していない」

ほんの少しだけ切っ先が和美の喉に食い込み、血が滲んだ。恐怖に涙を滲ませる和美を見て剣を下ろしたアリス、影の中に“姫”を戻して背を向けると、シルヴィアと共に去っていった。因みに戒めの風は解除してある。

部屋に戻った後、アリスとシルヴィアは久しぶりの再会と言う事もあって大人の時間に突入した。
仮契約をした時から続くこの関係、恋仲という訳ではなく、肉体

関係を持った主従という魔法世界でも珍しくない複雑な関係だ。
　情事が終わって裸のまま眠ってしまったシルヴィアに布団を掛けたアリスは浴衣を着直してから廊下に出た。何時の間にか生徒達の喧騒が静まり返り、何とも言えない空気が旅館一杯に漂っている。

「まあ、騒げば新田先生のお怒りが下されるのだし、生徒達も流石に静かになるか」

　非常口から外に出て初日から自販機で買い溜めしておいた缶コーヒーのプルタブを開けた。それを一口飲んで夜空を見上げると、何故か人影が見えた。
　敵襲かと思ったが、その人影の正体が３－Ａの生徒、宮崎のどかと綾瀬夕映だったので殺気を消し、屋根を伝ってアリスの前に下りてくるのを待った。

「あ、アリス先生！？」
「あ、あぅ・・・・・・」
「危ないよ、何をしている？」

　オドオドしているのどかではなく、夕映に問い掛けたが、夕映は口を閉ざすばかりで何も言わない。

「・・・・・まったく、早く中に入りなさい。風邪を引いては元も子もない」

　非常口の扉を開けて中に入るよう諭す。二人ともペコリと頭を下げて入っていったのを確認してから扉を閉め、もう一度コーヒーを口にした。

「何してるんだか」

一気にコーヒーを飲み干して空き缶を影の中に入れた後、そそくさと非常口を開けて中に入った・・・・・・所で何故かアキラとばったり遭遇してしまった。

「アリス、先生・・・・・・」
「大河内さん？　こんな所で何を」
「あ、あの・・・眠れなかったので少し旅館内を散歩してたんです」

修学旅行で興奮でもしたのだろう、学生によく有り勝ちな事だと以前、書物で読んだ事がある。

「そう、でもあまりうろうろしてたら新田先生に怒られるよ。部屋まで送るから、早く戻なさい」
「はい・・・・・・」

アキラと並んで歩き出す。歩いている最中アキラは何故か緊張しているみたいで、顔を赤くしてモジモジしているのが気になるが、それが何なのか判らないアリスは遂に気付かなかった。アキラの葛藤と、その末の決意を・・・・・・。

「あ、アリス先生！」
「ん？　何・・・・・・？」
「えっと・・・少し目を瞑ってじっとしてて貰えますか？」
「はあ、構わないけど」

言われた通りに目を瞑ってその場に立ち止まった。そして、それで精神集中が出来てしまったために漸く旅館の周りに感じられる魔力に気が付いた。
先ほどまではシルヴィアとの情事とその名残、旅館を流れる妙な

雰囲気によって気が付かなかったが、今なら解る。この魔力、仮契約の魔方陣から漏れ出る魔力と一緒だ。

「ん・・・・・・」

「んんぅ!?」

しかし、気が付いた時には既に遅く、アリスとアキラの唇は重なってしまっていた。

十六話　「アリス困惑、新たな従者」（後書き）

アキラがアリスの従者になってしまいました。
次回はアリスが大激怒！

十七話　「危険の発端、マスターピース」（前書き）

今回は朝倉とカモミールへのお仕置きはありません。まあ、その内必ずＯＨＡＮＡＳＩが待っているのは確実ですがね。

十七話　「危険の発端、マスターピース」

英雄と女王の子

十七話

「危険の発端、マスターピース」

「ちょっと、どーすんのよネギ！　こーんなにいっぱいカード作っちゃって一体どう責任取るつもりなのよ！！」

「えうっ！？　僕ですか！？」

翌朝、旅館のロビーで明日菜の怒声が響いた。明日菜の手にある六枚のカード、仮契約によるスカ・カード五枚と宮崎のどかとの成立カード一枚。

「まぁまぁ姐さん」

「そーだよアスナ、もーかったってことでいいじゃん」

「朝倉とエロガモは黙ってて！　って言うかあんた達この事がアリス先生に知られたらとんでもない事になるわよ！？・・・っ！？」

明日菜がそこまで言った所でロビー全体の空気が凍った。勿論、比喩表現でしかないが、そう表現するのが適切だと思えるほど冷たく、重苦しい空気がロビーにいる全員に圧し掛かった。

「神楽坂さんは理解しているみたいだな・・・・・・当然、説明してくれるな？」

和美が持っていたもう一つのパクティオーカード、麻帆良の制服姿で水を操るアキラの絵が描かれたカードが廊下の向こうから歩い

てきたアリスに向かって飛んでいった。

「昨日、あれだけ言ったのにも関わらず・・・・・この様な所業をして、覚悟は出来ていると考えても良いのだな？　申し開きがあるのなら一応聞くが、罪状は変わらないのだし期待しない方が良い」

シルヴィアを後ろに控えさせて和美の前に仁王立ちしたアリスの手には勿論“姫”が握られていて、アキラを従者としたパリティオーカードのマスターカードをヒラヒラさせている。

「さあ、聞こうか・・・・・朝倉和美、カモミール・アルベール、どんな言い訳を聞かせてくれるのか、楽しみだ」

“姫”の腹で和美の頬をペタペタ叩く、それだけで和美の顔は真っ青になり、カモミールはシルヴィアにダガーナイフを突き付けられてガタガタ震えている。

「あ、アリス先生！　やりすぎよ！！」

「そうだよ！　兄さん！！」

「・・・まあ良い。だが覚えておけ、朝倉和美、お前はクラスメートを死の世界に巻き込んだのだと言う事を。それと、学園に帰ったら必ず私の家に来る事・・・・・わかったな？」

のどかとアキラの契約は成立している。直ぐにでも契約破棄は出来るが、たとえ契約破棄した所で無駄だ。彼女たちの身に掛かる命の危険は跳ね上がった。

これが普通の魔法使いと仮契約したのなら特段気にする事でもないのだが、二人の契約相手はネギ・スプリングフィールドとアリス・スプリングフィールド、英雄ナギ・スプリングフィールドと災厄の魔女アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子という良い意味

でも悪い意味でも超ＶＩＰなのだ。

「それで、宮崎さんのパクティオーカードは？」

「あ、これです」

明日菜から受け取ったのどかのカード、そのアーティファクトの絵を見た瞬間、アリスの表情は一変、驚愕のそれに彩られた。

「いどのえにっき！？」

「そんな！？」

その名を聞いた瞬間、シルヴィアの表情まで強張った。しかし、二人が何故そこまで驚くのか理解できないネギ、明日菜、刹那、和美、カモミールは首を傾げている。

「知ってるの？　兄さん」

「・・・・・ネギ、これで宮崎さんに降り掛かる命の危険度が更に跳ね上がった」

『えええっ！？』

「いどのえにっき・・・・・これは１４６９年に魔導師シャントが作ったマスターピースのアーティファクトだ」

「なんだってぇ！？」

流石はオコジョ妖精、マスターピースについては知っている様だ。同時にその危険性も理解しているのだろう、どんどん顔が青褪めていく。

「カモ君？　マスターピースって一体・・・・・・・」

「兄貴、しっかり聞いててくれよ・・・・・・マスターピースのアーティファクトってぇのは、簡単に言やぁ、その能力の危険性が最

高レベルに高いって事なのさ」
「もう少し詳しく言うのなら、数あるアーティファクトの中でも超一級品のアーティファクト。立場によっては切り札にもなるし、危険な代物にも成りえる」
「マスターピースの上にはグランドピースっつー更に危険な代物もあるけど、マスターピースだって十分危険な代物なのさ」

宮崎のどかがマスターピースのアーティファクトを手に入れられる程の人材だと魔法界に知られれば間違いなくのどかは危険人物として排除の対象にされるか、生け捕りにされて女として、人間としての尊厳すら無くなる程の悲惨な状況に追い遣られる。

「昔、マスターピースのアーティファクトを持つ人物と会った事があるけど、その人物もやはり殺されている。マスターピースを持つというのは、それだけ危険なのだということだ」
「じゃ、じゃあ・・・本屋ちゃんには絶対に魔法の事は秘密にしないと」
「そうですね、アリス先生の言う事が確かなら・・・この先、必ず危険と遭遇しかねません」

学園に頼んでのどかの護衛も付けてもらう必要が出てきた。
メガロメセンブリア元老院に足の掛かっていない者を護衛に付けて欲しい所だが、麻帆良学園自体がメガロメセンブリア元老院の下位組織だからそれは不可能、ならばのどかの事を元老院に報告させないように注意しておかなければならない。

「さて、神楽坂さんはパクティオーカードを受け取った?」
「え?　はい・・・これです」

明日菜はポケットからパクティオーカードのコピーカードを取り

出して見せた。

「うん、それじゃあ・・・それを持ったまま“アデアット”って言ってごらん。それがアーティファクト召喚の呪文だから」

「えっと・・・・・・あ、アデアット！」

瞬間、明日菜が持っていたカードは消え、代わりにハリセンが握られていた。

「凄い！　手品に使える！！」

「いや、ちゃんと武器として使ってくれ・・・・・・」

世界最高峰の究極アーティファクト、グランドピースのアーティファクトを手品に使われては困る。戦闘に使う物を一般的な用途に使っては本末転倒もいい所だ。

「仕舞う時は“アベアット”と言えば良い。それでカードに戻る」

「うわー！　すごいすごい！！　私も魔法使いみたいー！！」

まるで子供だ・・・・・。しかし、それでも良いとも思える。昔は一切笑わない人間だった叔母が、今こうして無邪気に笑っているというのは本当に嬉しい事だ。

修学旅行3日目、自由行動日は各班が好きな所へ観光しに行くことになっている。京都観光するも良し、大阪まで行くのも良し。

ネギとアリスは5班と共に京都観光へ行く事になり、現在は京都市街のゲームセンターに来ていた。

「ここで別れた方が良いね。ネギは神楽坂さんとカモミールを連れて呪術協会本山へ、私と桜咲は残りの5班メンバーを引き付けなが

ら木乃香ちゃんの護衛をする」
「わかった。兄さん、コノカさんの事、よろしくね」
「ああ」

５班のメンバーがゲームに夢中になっている隙にネギと明日菜がゲームセンターから出て行った。残されたアリスと刹那は無邪気に遊んでいる木乃香を見守っていたのだが、その途中で微かな殺気を感じた。

「気付いたな？」
「・・・はい」
「私が先行する、木乃香ちゃんを連れて付いてきて」
「わかりました」

刹那が遊んでいる木乃香の手を掴んで走り出したのと同時にアリスもゲームセンターから走り出す。刹那と木乃香の前を走り、その後ろに二人が付いてきた。何故かその後ろに早乙女ハルナと綾瀬夕映が付いて来たが、緊急事態なので後回しだ。

「せ、せっちゃん、アリスさん、どこ行くん？　足速いよぉ」
「ああ！　す、すいません、このかお嬢様」
「今は何も聞かないで兎に角走って！」

殺気の主は今だ着いて来ている。アリスは懐からパクティオーカードを取り出して額に当てた。

「聞こえているな？」
『はい、今アリス様たちの後ろを走ってます』
「この先にあるシネマ村で合流しよう、先に行っててくれ」
『かしこまりました』

念話でシルヴィアにシネマ村合流を伝えると、それを聞いていた刹那が頷いた。それに頷き返してスピードを上げる。
途中で飛んできた飛針数本を刹那がキャッチしているのを見る限り、牽制か何かだと思うが、兎に角油断を許さない状況になった。

「白昼堂々か！」

あの手の暗器を使うのは神鳴流、月詠だと当たりを付け、シネマ村で起きるであろう戦闘に意識を向けた。客も大勢いる中での戦闘になるだろうが、最早贅沢を言っていられないのだ。

「シネマ村で迎え撃つぞ」
「はい！」

見えてきたシネマ村、アリスと刹那の意識は既に戦闘中のそれに切り替わっていた。

十七話　「危険の発端、マスターピース」（後書き）

次回、シネマ村戦開始。木乃香の能力が目覚める？

十八話　「シネマ村大激突」（前書き）

連投開始！

十八話　「シネマ村大激突」

英雄と女王の子

十八話

「シネマ村大激突」

木乃香を連れてシネマ村の中に（無断で）入ったアリスと刹那は敵の気配を警戒しつつ、お手洗いに行った木乃香を待っていた。

「一先ず、これだけの人が居れば時間稼ぎにはなるね」

「はい。ここでネギ先生の帰りを待ちましょう」

「式神と連絡は？」

「それが、何度もしているのですが・・・先ほどから連絡がつかなくて」

「そうか・・・・・私の使い魔からの連絡も途絶えたから、向こうでも何かあったと考えた方が良いか」

木乃香の近くに待機させているシルヴィアに念話で連絡を取ると、木乃香は丁度アリスと刹那の所に向かっているらしい。

そのまま少し待っていると、漸く木乃香がやって来た。・・・何故か着物を着て。

「お、お嬢様・・・その格好は？」

「知らんの？　そこの更衣所で着物貸してくれるんえ」

確かに周りを見渡してみると着物や侍、忍者の格好をしている人もチラホラと。

「ホレホレせっちゃんもアリスさんも着替えよ！　ウチが選んだげるー！」
「ちょ、ちょっとお嬢様！？」
「木乃香ちゃん！？」

女の子の細腕とは思えない力で引っ張られ、刹那とアリスは着替える事になってしまった。
更衣所から出てくると、刹那は新撰組局長の近藤勇の格好に模造刀と野太刀を腰に差した姿、アリスは新撰組副長の土方歳三が着ていた洋服で腰に鞘に収めた“姫”を差した姿になっていた。

「何故、私は男物の服なのですか・・・？　夕凪が死ぬほどそぐわない・・・・・・」
「新撰組は知ってるけど・・・その服に洋剣はミスマッチだよね」

気配を察知してみると、近くで見ているシルヴィアが笑いを堪えているのが分かった。念話で怒鳴りつけたら飛び上がってペコペコしている様は笑える。

「さて・・・・・近いな」

薄ら寒い殺気が近くに居る。それも二つ・・・・・・正確には三つだが、一つは猿女だろう、大した脅威にはなりえない。

「一つは月詠・・・・・・もう一つは・・・何だ？」

感じられた桁違いの殺気の内、一つは月詠のモノだが、もう一つは解らなかった。ただ、その実力は間違いなくアリスを上回っている事だけは、直ぐに解った。

「不味いな・・・・・・こんな所で最強クラスの人間が居るとは」

最強クラスのアリスよりも実力が上、それは即ちアリス同様の最強クラスの敵だという事。この場にいる戦闘要員はアリスと刹那、シルヴィアの三人だけ。そして最強クラスの人間はアリスとシルヴィアの二人、刹那は最強クラスにはまったくと言っていいほど届いていない。

正直、アリスよりも強い相手に刹那という足枷を抱えたまま戦える程、アリスもシルヴィアも強いとは言えないのだ。

「・・・む？」

如何したものか、と悩んでいると馬の足音と馬車の音が聞こえた。アリス達の前に止まった馬車から降りてきたのは紛れも無く月詠、洋館にでも住んでいそうな貴婦人の格好をしている。

「どうもー神鳴流です～。じゃなかったです・・・・・・そこの東の洋館のお金持ちの貴婦人にございます～」

演技しているつもりだろう。ニコニコと笑っているが、その全身から滲ませる殺気は隠す気が無いと見える。

「そこな剣士お二人はん。今日こそ借金のカタにお姫さまを貰いに来ましたえ～」

厄介な事になってきた。劇に見せかけて白昼堂々と木乃香を攫いに来たのだろう。

「随分と派手な登場をしてくれるな月詠・・・お仲間は近くで見学か？」

「あや～、アリスはんは気付いてはりましたか～。まあ、今度ばかりはウチらの勝ちで終わるんやし、かまへんかけどな～」
「そうはさせんぞ！　このかお嬢様は私が守る！！」
「キャーせっちゃんカッコええ！！」
「わ、い、いけません！お嬢様・・・・・・」

木乃香と刹那のじゃれ合いに興味が無いのか月詠は手袋を外して刹那に向けて投げた。それは西洋で有名な決闘の申し込みだった。

「このか様をかけて決闘を申し込ませていただきますー。３０分後、場所はシネマ村正門横、“日本橋”にてー」

月詠の事だからアリスと戦いたがるものだと思っていたが、意外にも彼女の選んだ相手は刹那だった。
アリスの相手はもう一人の殺気の持ち主という事か・・・・・・。

「逃げたらあきまへんえー・・・・・・刹那センパイ」

最後に神鳴流剣士特有の白黒反転した眼を向けて言い放った。

「本気みたいだな・・・・・・本気で殺しに来る」
「アリス様・・・」

何時の間にかアリスの後ろに立っていたシルヴィアが心配そうな表情をしている。彼女も心配しているのだろう、明らかに最強クラスの実力を秘めている月詠相手に、刹那が勝てる筈が無い事を。

「不味い展開になってきたな・・・・・・これだけ一般人の目がある中で、魔法を使う事は出来ない。実質、魔法使いのシルヴィアは戦えず、私の戦力も半減されているのだから」

魔法使いのシルヴィアに近接戦の手段は無い。魔法剣士のアリスは神鳴流を使えるが、その全てを使える訳ではないし、術式武装も封じられてしまった様なものだ。

「此処に入ったのが裏目に出たね」

「はい・・・・・・」

悔やいても仕方が無い。ミスを挽回出来るか如何かはアリス達に掛かっているのだ。

何故か付いて来た３－Ａの生徒数名の後ろを、歩くアリスとシルヴィアは、冷たい決意を胸に秘めていた。・・・・・いざという時は、他の生徒を犠牲にしてでも木乃香を守る・・・と。

３０分後、アリス達一行は日本橋に来ていた。月詠に恐怖を覚えた木乃香と、これから戦う刹那、既に戦闘モードになっているアリスとシルヴィア以外は興味本位で楽しそうに笑っている。

「刹那さん、兄さん、シルヴィアさん！」

すると、刹那とアリス、シルヴィアの間にデフォルメされたチビネギと、その上に乗ったカモミールが現れた。

「ネギ、チビせつなの紙型を使ったのか？」

「うん、それより何があったの？」

「・・・・・話している暇は、無さそうだな」

「・・・・・ええ」

日本橋に目を向けると、向こうから月詠が小太刀と短刀の二刀を

構えたまま歩いてきた。

「ほな、始めましょうかー、センパイ。このか様も刹那センパイもアリスはんも・・・ウチのモノにしてみせますえ～」

笑っている。笑っているが・・・・・既に殺気を放って臨戦態勢になっている。

「せ・・・せっちゃん、アリスさん。あの人・・・・・・なんか怖い」

刹那とアリスの後ろに隠れて怯えている木乃香、彼女の頭に手を載せて軽く撫でてあげたアリスは木乃香の手を握った。

「大丈夫、桜咲は何があっても木乃香ちゃんを守ってくれる」
「そうです。お嬢様は、私がお守りしますよ」
「アリスさん・・・・・・せっちゃん」

何故か、周りに拍手されてしまった。

「桜咲さん!!　お二人の愛!!　感動いたしましたわ!　お力をお貸しします!!」
「だから違うんですってばいいんちょー!!」

良い具合に勘違いしてくれている。これなら盾としても、捨て駒としても使えそうだと、アリスは内心思っていたが、それを知る者はシルヴィアのみだ。

「ツクヨミ・・・と言ったか?この人達は・・・」
「ハイ、センパイ。心得てます～。この方達には私の可愛いペット

がお相手します～」

月詠が呪符をばら撒いて気を込めた。

「ひゃっきやこぉー！！」

日本が誇る呪術の一つ、百鬼夜行。百匹の鬼・・・つまり妖怪を召喚する呪術だ。

「ネギ！　私の肩に乗れ！　木乃香ちゃんを安全な所へ連れて行く！」

「え、でも刹那さんが・・・」

「アリス先生の言うとおりです。私に構わず行ってください！」

「木乃香ちゃん、行こう！」

左手に木乃香の手を握って肩にネギが乗ったのを確認したアリスは“姫”を抜いて近づいてきた妖怪を切り裂きながらその場を去った。

「シルヴィア！　脱出経路の確保！　私は木乃香ちゃんを安全な場所に避難させてから桜咲を連れて合流する！！」

「了解！　お気をつけて」

瞬動で横に並んだシルヴィアに用件を伝える。それに頷いたシルヴィアは再び瞬動でその場から消え、アリスは城を目指した。

「ここに隠れよう、木乃香ちゃん」

「う、うん！」

中に人の気配は無い。この中なら安全だと考えてアリスは階段を

上った・・・・・・が。

「ようこそこのかお嬢様」

長い階段を上った先にある部屋に、猿女と、白髪の少年が待ち受けていた。

「転移・・・・・・したのか？　東洋魔術師が・・・・・・」

確かに人の気配は無かった。という事は転移してきたとしか考えられない。

「そうや、月詠はんも旨い具合に追い込んでくれたわ」

「・・・雑魚が、粋がるなよ」

猿女の背後に現れた鬼、だがアリスにはその程度で脅威を感じる筈が無い。

「確かに、この鬼では君相手には役不足かもね」

だが、白髪の少年が前に出てきてアリスの表情は一変した。

「お前は・・・フェイト・アーウェルンクス！？」

「へぇ、僕を知ってたのか・・・・・・流石は英雄の才能を全て受け継いだ息子、そして災厄の魔女の子・・・か、二代目・紅き翼のリーダー、アリス・スプリングフィールド」

災厄の魔女、その言葉はアリスの前で言ってはならない言葉だった。その瞬間、アリスを中心に強力な魔力流が吹き荒れ、“姫”が一瞬で地獄の焔姫へと変化した。

「黙れ人形・・・！　母さんを、災厄の魔女などと呼ぶな！！」

瞬動、それでフェイトの懐に踏み込んだアリスは胴を真っ二つにせんと横凪に“姫”を振るった。

「くっ・・・・・・！」

だが、フェイトは黒い炎を纏っている“姫”の刃を素手で受け止め、手が焼かれているのを気にもせず、空いている拳をアリスの顔面に叩き込んだ。

「がっ！？」

拳がクリーンヒットしたのかアリスの意識が一瞬だけ飛んだ。そのまま慣性に身を任せて壁まで飛んでいき、背中を叩き付けて肺の中の空気を全て吐き出してしまう。

「アリスさん！？」
「兄さん！！」
「ぐっ・・・かはっ」

たったの一撃でかなりのダメージを負ってしまったアリスは立ち上がる事が出来ない。“姫”も黒い炎が消えて元に戻ってしまい、アリスはほぼ戦闘不能になってしまった。

「・・・君は確かに強いけど、まだまだ僕と戦うには足りないね」

倒れるアリスを冷たい眼差しで見るフェイト。その瞳には殺気も敵意も何も感じられない・・・・・・アリス達では敵にすらならな

いという事なのだろう。
　興味が無くなったのかフェイトはそのまま水を使った転移魔法で消えてしまった。

「ほほほほ、これで邪魔者はおらん。このかお嬢様は頂いていきますえ」
「そうはさせない！」

　ネギが小さい体を駆使して城の屋根に木乃香を逃がしたが、当然猿女と鬼は追って来た。屋根という逃げ場の無い場所で、遂に追い詰められたネギと木乃香、鬼は巨大な弓に巨大な矢を番えて構えている。

「くそっ・・・・・動け！」

　木乃香の影に仕込んだ使い魔から様子を見ていたアリスは必死にダメージの大きい体を動かそうとしていたが、フェイトの拳がアリスの脳を振動させていたのだろう。まともに動かせない身体に苛立つ。

「クソッ！　木乃香ちゃん！！！」

　だが、アリスの悲痛な叫びが木乃香に届いたのも束の間、風が吹いて動いてしまったネギに反応した鬼が矢を放ってしまった。

十八話　「シネマ村大激突」（後書き）

書き溜めたもの全て載せます。

十九話　「関西呪術協会」

英雄と女王の子

十九話

「関西呪術協会」

放たれた矢、式神のネギを貫いて消滅させ、更に木乃香を貫こうろしたその矢は木乃香に刺さる前に止まった。・・・・・・いや、止められたと言う方が正しい。何故なら、鏃はベットリと血に塗れており、木乃香の前には刹那が立っていたのだから・・・・・・右胸に矢が突き刺さって貫かれたまま。

矢の勢いを殺さぬまま、刹那は木乃香から離れるように後ろに動き、そのまま屋根から落下してしまった。

「せ・・・せっちゃーん!!!!」

そして、刹那を追う様に木乃香が屋根から飛び降り、刹那に追いついた。

「木乃香ちゃん!!　桜咲!!」

アリスの叫びが響いた時、奇跡は起きた。木乃香を中心に眩い光が発せられ、木乃香と刹那の落下スピードが緩やかになる。

刹那を貫いていた矢は半ばで折られて抜け落ち、穴が開いて血が溢れていた刹那の肩に淡い光が集まった。その光は刹那の傷を癒し、光が収まった時には二人は地面に降り立っていて、刹那の傷は完治していた。

「せっちゃん・・・よかった」
「お、お嬢様・・・・・・傷が、無い？　お、お嬢様・・・チカラをお使いに・・・・・・」
「ウ、ウチ・・・今何やったん？　夢中で・・・」

兎に角、助かったのなら良かった。アリスはふらつく身体に鞭打って転移魔法を発動、木乃香の影に転移した。

「兎に角逃げるよ・・・追ってくる前にネギ達と合流しよう。カモミール、案内頼む」
「ガッテン！」

何時の間にか刹那の肩に居たカモミールに道案内され、ある程度回復したアリスは刹那と木乃香を連れ、脱出経路を確保していたシルヴィアと合流して着替えてからシネマ村を去った。・・・・・・刹那の荷物の中にＧＰＳ携帯を仕込まれていたため、途中で和美、夕映、ハルナに追い付かれてしまったが。

京都市街外れにある山の中、アリス達はネギ、明日菜、そして何故か二人と一緒に居たのどかと合流した。

「な、何なのこの状況は～!?」

明日菜の小声の叫びが空しい。

「すまない。彼女達に追い付かれてしまって・・・撒いて行くより連れて来た方が色々と安全だと判断したんだ」
「そういう事です・・・・・」

アリスの説明に刹那が肯定したため、明日菜も納得はしたが、危険があると知っている以上、やはりいい気はしないらしい。

「見えてきたな。関西の総本山」

前方に見えてきた立派な門前構えの大きな神社、あれこそ、裏の関西が誇る関西呪術協会総本山だ。

「うぉ～！　何か雰囲気あるね～！」
「レッツゴー！」
「「「いえー！！」」」

先に走り出した木乃香、ハルナ、のどか、夕映、それに続くようにアリス達も走り出した。

『お帰りなさいませ。このかお嬢様ーッ』

出迎える大勢の巫女、全員関西呪術協会に席を置く呪術師達で、近衛家の使用人も兼任している。

「いらっしゃいませアリス様、お久しぶりです」
「ええ、暫く振りですね」

前に来たことがあるアリスは挨拶してきた巫女に会釈していた。

「さ、桜咲さん、アリス先生、これってどーゆー・・・・・・」

事情を知らなかったらしい明日菜とネギが刹那とアリスに詰寄ってきた。と言うか、学園長から何も聞いていなかったのだろうかネ

ギは。

「えーっと、つまりその・・・・・・」

「ここは関西呪術協会の総本山であるのと同時に、学園長の生家であり、木乃香ちゃんの実家でもあるんだ」

衝撃の事実だったらしい。とんでもなく驚いているのが何処か面白いと思ってしまうアリスの性格は、歪んでいるのだろうか？

中に案内された一行は大広間で関西呪術協会の長を待つこととなった。用意された座布団に座って暫く待つと、置くから出てきたのは一人の男性。神主の服を着た明日菜が好みそうなダンディーな眼鏡のおじさんだ。

「ようこそ明日菜君、このかのクラスメートの皆さん。そして担任のネギ先生。それと、お久しぶりですねアリス君、シルヴィア君」

「お父様！　久しぶりやー！！」

「ははは、これこれ、このか」

彼こそ、関西呪術協会の長であり、木乃香の父、そして初代・紅き翼の一員でサムライマスターの異名を持つ英雄の一人、近衛詠春だ。

木乃香に抱きつかれて口では嗜めているが、顔はこれでもかと言うほど緩んで嬉しそうに笑っている。父親というのは娘に甘いと言うが、詠春も例に洩れず娘には甘いらしい。

「あ、あの長さん・・・これを。東の長、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門から西の長への親書です。お受け取りください」

「確かに承りましたネギ君、大変だったようですね」

「い、いえ」

受け取った親書を開いて読み始めた詠春だが、その内容を見て苦笑している。流石に妻の父親からの叱責は堪えるみたいだ。

「・・・・・いいでしょう。東の長の意を汲み、私達も東西の仲違いの解消に尽力するとお伝えください。任務ご苦労!!　ネギ・スプリングフィールド君、アリス・スプリングフィールド君!!」

こうして、ネギとアリスの任務は無事に終了した。

一行はこのまま総本山に一日滞在する事になり、詠春の好意で歓迎の宴が開かれる事となった。

「所で、アリス先生と一緒にいる女性は誰です?」

「え?」

今更だが、夕映がシルヴィアの事を問うて来た。シルヴィアの事を知らない夕映、のどか、ハルナは興味津々なのか何度もアリスとシルヴィアに視線を動かしていた。

「ああ、彼女は私の海外での仕事仲間でね。向こうでの仕事を終えた彼女に日本まで来てもらったんだ」

「シルヴィア・オーギスと申します。今後ともよろしくお願いします」

シルヴィアがアリスの恋人ではと勘繰っているが、そんな関係ではないと説明して、その場を逃れた。

「あ、でも僕達、修学旅行中だから帰らないと・・・・・」

「それなら問題ない。先ほど皆の影に仕込んでおいた使い魔を旅館に向かわせた。使い魔に身代わりをたてさせるから大丈夫」

問題も無事に解決、夕方には宴会場で宴が始まった。
宴では御馳走が振舞われ、歌や踊りを眺めながら騒ぎ、楽しいものだった。一般生徒・・・・・つまりのどか、夕映、ハルナ、和美の飲み物には酒を仕込んでいた事からこの後で裏の話があるのだろう。

「アリス君、シルヴィア君」
「詠春さん・・・それに、木乃美さん」

先ほどまで刹那と話をしていた詠春がアリスとシルヴィアの方に来た。その後ろにはいつの間に来たのか木乃香の母、木乃美が居る。
近衛木乃美、近衛近右衛門の娘で、詠春の妻、そして木乃香の母であり、関西呪術協会の呪術者でもある。木乃香をそのまま大人にした容姿で、木乃香には無い大人の魅力に溢れた女性だ。

「お久しゅう。アリスはん、シルヴィアはん」
「はい、本当にお久しぶりです」
「お元気そうで何よりです」

アリスもそうだが、シルヴィアも一度だけだが木乃美には会った事がある。久しぶりに会っても変わることのない雰囲気、美貌に安堵した。

「如何ですか？　二代目・紅き翼の活動は」
「そうですね・・・順調ですよ。偶にラカンが馬鹿やらかす事もありますが、概ねは」
「そうですか、あの馬鹿は変わらないようで・・・苦労を掛けますね」

初代・紅き翼からそのまま二代目・紅き翼に所属しているラカン、昔の戦友の話に詠春もどこか嬉しそうだ。

「ただ一つ・・・・・・やはり神鳴流剣士がメンバーに欲しいなという所ですね」

「そうですか・・・心当たりのある剣士で、二代目・紅き翼に所属出来るほどの剣士は殆ど居ませんし・・・・・・」

居るとしたら詠春の生家である青山家の青山鶴子と青山素子だが、正直アリスが欲しい人材とは言えなかった。

「一応、良いなと思う剣士に心当たりがあります」

「そうですか、勧誘できると良いですね」

「ええ」

詠春も気付いているのだろう、アリスが誰を勧誘しようとしているのか。それでもアリスを信じているからこそ何も言わない。その事に感謝しつつ、アリスは食事を再開しようとしたのだが、木乃美が何かを言いたそうにしているのに気が付いた。

「どうしました？　木乃美さん」

「いえ・・・・・・アリスはん、このかの事、どうぞよろしゅうな？　あの子はこれからエライ大変な目に合う。それを解っていてもなんもしてやれんのが、母として口惜しゅうてな」

「・・・・・・勿論、理解しています。任せてください」

木乃香の母としての言葉、その重みを感じてアリスは確りと頷いた。それが教師として、生徒の親に対する礼儀であり、一人の魔法使いとしての責任でもあるから。

二十話　「総本山襲撃」（前書き）

今回ネタバレ有り

二十話　「総本山襲撃」

英雄と女王の子

二十話

「総本山襲撃」

関西呪術協会総本山に到着したその夜、アリスとシルヴィアの二人で夜桜を見ながらお茶を飲んでいたのだが、一瞬の後、二人の手には湯飲みではなく武器が握られていた。

「気付いたな？」

「はい。何者かが総本山の結界を抜けたみたいです」

総本山の結界は麻帆良学園の学園結界並みの強度を誇る頑強なもの、それを抜けるには並大抵の術者では不可能、それこそアリス達の最強クラスでなければならない。つまり、その結界を抜けた者は最強クラスの人間で、そして敵の最強クラスと言えば二人だけ。こんなに堂々と結界を抜けるなんて事をやりそうなのは一人だ。

「来たか・・・“地”のアーウェルンクス！」

敵の一人、完全なる世界の人間で、アリス達にとっても宿敵であるフェイト・アーウェルンクスが侵入してきたと言う事、そうなると一大事だ。

「生徒達が危ない！」

兎に角、先に詠春と合流しようと考え、詠春の気を探った。どう

やら近くにネギと刹那も居るようなのでアリスとシルヴィアは瞬動を行使して三人の下へ急いだ。
最後の瞬動でネギ達の前に到着すると、詠春が石になっていた。どうやらアリス達の情報にあるフェイト・アーウェルンクスが得意としている石化魔法を受けたのだろう。

「兄さん、シルヴィアさん！」
「アリス先生、シルヴィアさん・・・・・・」
「詠春さんが石化されたか・・・・・・シルヴィア、解呪を」
「はい」

シルヴィアは魔法の腕前は超一流だ。特に治療や解呪、サポート系魔法に関してはアリスを上回っている。

「セイ・セイヴ・リオ・セイクリット・・・戒めし呪いの呪縛　解き放たれん　浄化の風」

石化した詠春の身体に風が巻きついた。不可視だった風が虹色の輝きを放った時、詠春も頭から徐々に石化が治り、足元まで完全に解呪してしまった。

「長さん！」
「長！」
「私、は・・・・・・」

何が起きたのか理解出来ていない詠春に石化を解呪した旨を伝える。詠春も自分が完全に石化してから殆ど時間が経っていない事を理解してシルヴィアに木乃美の解呪をして貰うよう頼み、それを承諾したシルヴィアは再び瞬動で移動した。

「さて、他の方々の解呪は妻がやってくれます。我々はこのか達と合流しましょう」

途中、詠春は倉庫から一本の野太刀を持ってきた。無名だが、刹那に譲った夕凪並みの強度と性能を持った由緒ある刀らしい。

「これで私も戦えます。実戦を離れて結構経ちますが、まだまだ若い方に引けを取るつもりはありませんよ」

元は青山家の長男として当主の座に着いていた事もある詠春だ。初代・紅き翼の一人でもあるし、現役を引退した今尚、英雄としての実力は健在なのだろう。

兎に角、心強い味方が加わった為、一同はシルヴィアと合流して木乃香と明日菜と合流すると決めているらしい風呂場に向かった。

風呂場に到着すると、何故か裸の明日菜が倒れてピクピク震えていた。咄嗟の事で明日菜の全裸を見てしまったアリスは少し頬を赤らめて顔を逸らし、シルヴィアに来ていた外套を明日菜に着させた。

「何があった？」

「ご、ごめん先生・・・・・・このか、攫われちゃった」

『！』

「き、気をつけて、アイツ・・・まだ近くにいるかも」

その瞬間、アリスの剣と詠春の野太刀が閃いた。アリス達の後ろに現れたフェイトの首と胴を両断した二つの刃だったが、どうやら水の幻影だったらしく、ゆらゆらと残骸が漂っていた。

「やはり気が付くか・・・それに、近衛詠春は石化したと思ったんだけど」

「解呪させてもらった。貴様もすぐに追いついて始末する」
「・・・・・楽しみにしてるよ」

言い残してフェイトは唯の水になってしまった。既に転移しているのだろう、辺りに敵の気配は感じられない。

「アリス様・・・急いだ方が良いかもしれません・・・・・・何か嫌な予感がします」
「・・・詠春さん」
「何でしょう？」
「この辺で、木乃香ちゃんの膨大な魔力があるからこそ出来る事って、ありますか？」

少し考えて何かを思い出したのか詠春がかなり焦っている。それほどヤバイものがあるのだろう。

「この近くに以前、サウザンドマスターを含む私達、初代・紅き翼が戦い、封印したリョウメンスクナノカミという鬼神がいます」
「かの有名な飛騨の鬼神か・・・・・・」

話は聞いた事があるのだろう。刹那もそれを聞いてかなり焦りだした。

「このかの莫大な魔力を持ってすれば、封印を破るのは容易い事かと」
「それって、このかがその何とかって鬼の封印を解くのに利用されるって事！？」
「た、大変ですよ！」

事態の大変さを理解した明日菜とネギも焦りだした。スクナの事

は判らないだろうが、木乃香が利用されると言う事だけは理解できたみたいだ。

「急ごう、木乃香ちゃんを助けるんだ」

皆が頷くと、今まで黙っていたカモミールが何かを閃いたのか突然叫びだした。

「どうした？」

「いや何、良い案を思いついただけでさぁ。刹那の姉さん、ネギの兄貴の事・・・好きかい？」

「えっ！　それ、何の関係が・・・」

「・・・つまりだな、刹那の姉さんと兄貴がチュウすんだよ！」

こんな時に何を考えているのだろうかこの淫獣は、詠春もかなり呆れている。

「この非常時に何言ってんのよーっ！！」

「ち、違うよ姐さん。仮契約だよ仮契約！！」

「あ、あー・・・・・」

「刹那の姉さんは気が使えるだろ？　そこに兄貴の魔力を上乗せすれば一気に倍のスーパーパワーＵＰって訳さ！」

簡単に言っているが、それは大きな問題がある。確実に失敗するであろう原因があるからだ。

「不可能だ。気と魔力の合一、それは究極技法と呼ばれる技法、咸卦法だ。専用の修行をしていない桜咲では失敗してスプラッタな事になる」

「それに、ネギ君の魔力も余計に消費する事になってしまうからね。

あまりお勧めはしないですよ」

兎に角、話し合っている暇は無い。仮契約の事は忘れて総本山を飛び出した。・・・・・・明日菜の着替えを忘れずに。

総本山を出て山の中を進むと漸く敵の姿が見えてきた。猿女改め、天ヶ崎千草と手足を縛られた状態で猿の式神に抱かかえられ、お札で口を封じられた木乃香、そしてフェイト・アーウェルンクスが手ごろな岩の上に立っている。

「千草君！　もう止めるんだ！！　こんな事、君の罪が重くなるだけだぞ！！」

「なんや、長はんまで来はったんどすか・・・まあええ、あの場所まで行けばウチらの勝ちや。そこで娘はんの力の一端、よう見ときなはれ！」

千草が指を鳴らすと、木乃香に張られた御札が光り輝き、木乃香の魔力が強制的に解き放たれた。

「オン　キリ　キリ　ヴァジャラ　ウーンハッタ」

千草の呪文と共に彼女の足元と、その周りに無数の光の陣が展開され、その中から出てきたのは鬼、烏族、河童、狗族、妖狐、天狗、等々。

ざっと見ても３００体近くは居るであろう妖怪たち、その全てがアリス達を囲んだ。

「ちょっとちょっと！　こんなのありなのーっ！！？」

「やろー、このか姉さんの魔力で手当たり次第に召喚しやがったな」

召喚された妖怪たちを見て明日菜が涙目になりながら叫び、カモミールが冷静に分析している。
確かに並の術者だとここまでの量の妖怪を一度に召喚するなど不可能だ。しかし、極東一と言われる木乃香の莫大な魔力を用いればこの程度は簡単だろう。

「あんたらにはその鬼どもと遊んでもらおか。ま、大半はガキやし、そっちは殺さんよーに“だけ”は言っとくわ。安心しときぃ・・・・・・まあ、長はんと金髪のガキと銀髪の小娘は別やけどな・・・・・・ほな」
「まっ・・・待て!!」

千草たちが去った。後に残るのは無数の妖怪とアリス達だけだ。
千草はこう言った。詠春とアリス、シルヴィアは殺すが、ネギや刹那、明日菜は殺しはしないがそれ以外の用途には使うと。特に刹那と明日菜は女だからネギよりも使い道はある。

「せ・・・刹那さん、アリス先生・・・こ、こんなの・・・・・・さすがに私・・・」
「明日菜さん落ち着いて・・・大丈夫です」

昔の記憶が無くなって一般人になった明日菜には流石に厳しい状況だろう。初めて感じる命の危険に涙を浮かべ、足がガクガクと震えている。

「兄貴、時間が欲しい。障壁を!」
「OK、ラス・テル・マ・スキル・マギステル　逆巻け　春の嵐我らに風の加護を　風花旋風・風障壁!!」

ネギが発動した障壁魔法によって竜巻が起こり、その中でアリス達は障壁が消える2，3分以内に作戦を考える事となった。
木乃香を奪われ、若干の焦りを見せているアリス。その胸の内を占めている黒い感情、それに気付いている者はシルヴィアと詠春、この二人しかいない。そして、この後、アリスの力の一端が明かされる。

二十一話　「狂剣士、月詠」（前書き）

月詠オリジナル設定あります。

二十一話　「狂剣士、月詠」

英雄と女王の子

二十一話

「狂剣士、月詠」

無数の妖怪に囲まれたアリス達、作戦を考える為の時間稼ぎとしてネギが発動した風障壁による竜巻の中に隠れる事になった。

「よし！　手短に作戦立てようぜ!?　どうする、こいつはかなり不味い状況だ!!」

カモミールの言うとおりだ。アリスとシルヴィア、詠春にとっては物の数ではないが、ネギや明日菜、刹那にしてみれば敵の数は脅威になる。そして、アリス達最強クラスにとって、キツイ言い方になるが、足手纏いが三人も居ると戦い難い。

「二手に分けよう。作戦の最重要点はこのかの救出、これはネギ君と私、明日菜君で行きます」

「ならば残りの私、シルヴィア、桜咲はここで妖怪達の殲滅・・・・・・決まりですね」

「・・・・・いえ、私が一人でここに残り、鬼達を引き付けます。アリス先生とシルヴィアさんもネギ先生達と一緒にお嬢様を追ってください」

刹那の言葉にネギと明日菜が驚いた。刹那一人では流石にこの数の妖怪と戦うなど無茶だ。

「じゃ、じゃあ私も一緒に残るーっ！！」
「あ、アスナさんっ」
「刹那さんをこんな所に一人で残して行けないよっ！」
「ああ、そうだ。桜咲の実力では時間稼ぎにはならない。私とシルヴィアは始めから残るつもりだ」

特に、明日菜のアーティファクトは攻撃しただけで召喚された存在を送り返す程の代物、この状況で鬼と戦うには最適な武器だ。
そして、アリスとシルヴィア、最強クラスが二人いれば時間稼ぎするには十分。戦い難いと言っても、この程度、アリスとシルヴィアにとって良いハンデだろう。

「判りました。では私とネギ君の二人でこのかを追いましょう。ネギ君、明日菜君への魔力供給を防御の最低限に節約して、最大で魔力は何分持ちますか？」
「え、えっと・・・・・術式は難しいですけど、５分・・・いえ１０分。ううん、１５分は頑張れます。でも・・・っ」
「現状でフェイト・アーウェルンクスと戦う必要はありませんよ。あれとまともに戦えるのは詠春さんとアリス様、私くらいですし、このかさんを助けられれば十分です」
「ネギ君は空を飛べますし、私も瞬動を駆使すればネギ君に置いて行かれる事もありません」

作戦は決まった。アリスとシルヴィア、刹那、明日菜の四人はこの場に残って妖怪達の足止め、ネギと詠春は一撃離脱で木乃香を奪取、その後合流して本山まで逃げれば、後は木乃美が呼んでくれているであろう援軍を待てる。結界は詠春とアリス、シルヴィアが全力で張れば援軍到着まで持つだろうから、これで決まりだ。
「決まりだな！！　よし、そうとなったらアレもやっとこうぜ！

ズバッと、ブチュッとよぉ！！」
「アレって？」
「キッスだよキス！　仮契約！！」

まだ言ってるのかこの淫獣は。だが、刹那の手札が増えるという点から見れば良いアイデアだとは思うが、この淫獣の場合、他の企みがありそうで素直に頷けない。
結局、カモミールの迫力に押されてネギと刹那が仮契約をする事になった。魔方陣の上でネギと刹那がキスした瞬間、仮契約が成立し、カードが出てきた。

「そろそろ時間だ。私が道を作るから、ネギと詠春さんはそこから」
「わかった、お願い兄さん」
「・・・フッ、ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　契約に従い　我に従え　高殿の王　来たれ　巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆。百重千重と重なりて　走れよ稲妻！！」

アリスの詠唱が終わったその瞬間、竜巻が消え去る。そして、鬼たちが動き出すその前に、アリスの持つ“姫”の先から魔力が溢れ出した。

「千の雷！！！」

収束して放たれた千の雷が１００以上の鬼を消し去りながら道を作った。

「今だ！！」

合図と共にネギが杖に乗ってトップスピードで包囲網を抜けた。
それに続く形で詠春も虚空瞬動と瞬動でネギを追う。

「「アデアット！！」」

二人を見送って直ぐにアリスとシルヴィアは懐からカードを出すと、呪文を唱えてアーティファクトを出した。

アリスの両手に覆われるメタリックの光を放つ紅いガントレット、シルヴィアが最初から持っていた所々に様々な宝石をはめ込んだ身の丈はある大きな杖とは別に現れた金剛石を先端に取り付けた同サイズの黄金の杖、二人のアーティファクトが月光に照らされて光り輝く。

「“えいゆうの籠手”」
「“宝石の主”」

それぞれ、アーティファクトの名を口にし、武器を構えた。

「神楽坂さん、落ち着いて・・・・・君のアーティファクトの力は強力だ。それに私達もいるから、絶対に死なせない」
「アリス先生・・・・・う、うん！！」

震えている明日菜を落ち着かせ、“姫”を構えたアリスは、己が切り札の一つを開放する。

「戦いの葬送曲。多重・高速詠唱！　千の雷！　奈落の業火！」

無詠唱の戦いの葬送曲で身体強化をして、切り札の一つ、多重・高速詠唱によって一瞬で完成した千の雷と奈落の業火が固定された。

「黄昏の剣、魔法付与！　術式付与完了・・・是、“焔雷の獄姫”」

激しい雷を纏った黒い炎の剣となった“姫”、それを構え、アリス達は鬼の群れに突撃した。

明日菜のハリセンが鬼を一体一体送り返し、刹那の夕凪が閃く度に妖怪は切り裂かれていく。その少し離れた所ではアリスが焔雷の獄姫の一振りで２０体近くの妖怪が消滅していた。更にシルヴィアが上空で眼下の鬼の群れを確認すると二本の杖に魔力を通した。

「多重・高速詠唱、魔法の射手　氷の１０１矢、光の１０１矢！！」

合計２０２本の魔法の射手が妖怪の群れに降り注いだ。魔法の射手が鬼達の頭上から股下まで貫通し、両肩を両断して一気に数を減らしていく。更にシルヴィアは懐から５つの宝石を取り出し、アリスたちの居ない群れ５箇所に投げ入れた。

「開放、こおる大地」

術式を刻み込まれ、大量の魔力を込めた宝石の術式を開放すると、込められた魔力を使って魔法が発動。宝石が投げ込まれた五箇所の群れは一瞬で氷像と化した。

アリス達の善戦で数がグンと減った鬼達だが、やはりと言うか、歴戦の猛者はいるようで、一際大きな鬼や烏族が現れて刹那と明日菜が苦戦を強いられている。

そんな中、アリスは静かに背後を振り向くと、予想通り出てきた小太刀と短刀の二刀流剣士。

「月詠・・・・・」

「ほんとうならもう少し出てくるんは待つ手筈やったんですけど～、アリスはんの戦いっぷりを見てたらウズウズしてきてん。さあ、楽しゅう殺し合いまひょ！」

瞬動で突っ込んできた月詠の剣戟を“姫”で受け止めたアリスはその腹に蹴りを入れた。それで距離を取った月詠は少しだけ咳き込んで再び突っ込んできた。

「にと～れんげき、斬岩け～ん！！」
「神鳴流奥義、斬岩剣！！」

二人の斬岩剣がぶつかり合った。だが、アリスは剣一本に対し、月詠は二刀流、当然二本目の斬岩剣がアリスを襲うが、それがアリスに届く前に瞬動によって宙を切った。

「流石に、二刀流相手に剣一本は辛いか・・・・・・」
「でもアリスはん程のお人に、それはハンデになりまへんやろ？」
「だね。でも、君には全力を出しても良いと思える。君にはそれほどの価値があるよ」
「光栄です～」
「だから・・・・・・アデアット！」

懐から取り出したもう一枚のカード、それをアーティファクトに変化させた。
アリスの手に握られるもう一本の剣、黄金の光を放つ銀の刀身と蒼い柄の西洋剣は、母との仮契約の証。

「“キシノアカシ”」

バランスは悪いが、“姫”とキシノアカシの二刀流となったアリスは月詠が突っ込んでくる前に瞬動で背後を取った。

「二刀連撃、斬空閃！！」

二つの剣閃、そこから発生した風の刃が二つ、月詠に迫る。

「にと～れんげき、ざ～んく～せ～ん」

二つの風の刃が月読のそれで相殺され、二人は剣をぶつけ合い、火花を散らす。二人とも殺し合いをしているのにも拘らず、楽しそうに剣戟を繰り広げているその光景は傍から見れば異様に映るだろう。

「楽しいなぁ～、ほんまにたのしいわぁ～。アリスはんとならいつまでも死合いたいわ～」

「楽しいのは同感だけど、いつまでもというのはお断りだ！」

「あん、イケズ～」

その時だった。刹那が戦っていた大鬼の頭に何かが貫通し、消滅してしまった。

「あれは、術式が刻まれた弾丸・・・・・・」

そんなものを使う人間は３－Ａに一人しかいない。茂みから出てきた二人の人影、３－Ａの生徒の龍宮真名と古菲だ。

二人が加わった事で刹那と明日菜の方も苦戦していたのが嘘のように再び善戦を繰り広げている。

「向こうも良い戦いをしてるな・・・・・・月詠、そろそろ本気を出しても良いんじゃないか？」

「ん～？　ほんならそれはアリスはんもやろ～？」

「クッ、違いない」

少し笑ってアリスは外していた指に填められた指輪に目を落とした。

「なら少し時間を貰えるか？　時間が掛かる」

「ええです～。本気のアリスはんと戦えるんやったらお安い御用や～」

「忝い。焔雷の獄姫解除・・・・・・多重・高速詠唱！　千の雷、奈落の業火、雷の投擲、雷の斧、雷の暴風、燃える天空！　・・・グッ！　じゅ、術式混合固定！　黄昏の剣、魔法限界付与！」

多重・高速詠唱とは本来、多重詠唱と高速詠唱に分かれた技法であり、アリスが考案して完成させたアリスオリジナルの究極技法。そしてそれを合わせたものが多重・高速詠唱だ。

多重詠唱とは一度に二つ以上の詠唱を同時に行う技法で、思考分割、マルチタスクと呼ばれる方法を用いる事で可能とした方法だ。

高速詠唱とは一見無詠唱に見えるが、その実、全く違うもの。無詠唱魔法には詠唱して使った魔法よりも若干だが威力が下がるという欠点があり、その欠点を無くし、尚且つ無詠唱並みのスピードで魔法が使えるようにと考案された技法だ。

その名の通り、高速・・・一瞬で長い詠唱を済ませてしまうという技法で、かなり高度な技法となった。

多重・高速詠唱とは二つを合わせ、二つ以上の詠唱を同時に、一瞬で済ませてしまうというものだ。しかし、これにも欠点はあった。・・・・・それは、脳に多大な負荷を与えてしまうというもの。多重詠唱と高速詠唱、それぞれが多少なりとも脳に負荷を与えるのに、それを合わせて行えば倍以上の負荷を脳に与えてしまう。それは使う魔法の量が増えれば増える程大きい。

「術式付与完了・・・・・・限界点突破」

五つの魔法を混合固定して“姫”に取り込んだ。アリスの最後の切り札であり、最強の切り札でもある究極の術式武装。

「是、“魔戦斧・爆雷闇風姫”」

“姫”を中心に激しい雷と暴風を纏った黒い炎が広がる。アリスの身の丈はありそうな炎のハルバートになり、アリスの足元の水が巻き上がり、水蒸気に変わって白い煙が昇った。

「あああぁ～、ええわぁ～。これや、これ・・・・・・このゾクゾクずる緊張感、たまらんわぁ～。ウチはこれを待ってたんやぁ～」

上気した頬で内股になってモジモジしだす月詠、まるで発情でもしているかのようなその姿はどこか艶っぽく、淫猥な雰囲気を纏っていた。

「ほんならウチも本気出さな失礼やねぇ～・・・・・・ウフ、ウフフフフフフフフフフ」

突如、月詠の瞳が白黒逆転し、その身に狂気を纏っていく。そして全身と刀を強化していた気が黒く染まって見事な金髪がゆらゆらと揺らめいた。その姿はまるで悪鬼か何かだ。

「サア、始メマヒョ・・・・・・アリスハン」

今までとは比べ物にならないスピードの瞬動でアリスに近づいた月詠は黒い気を纏った小太刀を振るい、アリスの首を切り落とさんとしてきた。

「チィッ」

間一髪、瞬動で避けたが、既に月詠は動いていた。避けた時には既にアリスの後ろに現れていたのだ。

「アハハハハハハ！！」

「グゥッ！」

最早神鳴流の剣筋など無かった。今の月詠は戦う本能のままに両手の剣を振るい、目の前の獲物を殺すために動く怪物だ。

少女の腕から出されるとは思えない力で振るわれた刀を受け止めた時、アリスの身体は若干だが地面に沈んだ。足元の地面が陥没しているのだ。

「正にバーサーカー・・・日本では狂戦士と言うのか。剣士だから狂剣士と言った所か」

面白くなってきた。アリスは本気でそう思っていた。一度戦って彼女が底知れない実力を持っている事には気付いていたが、まさかこれ程とは思いもしなかった。

「嬉しい誤算だ・・・・・そして、尚更欲しくなったよ。君の事がね！！」

月詠を弾き飛ばして気合一閃、ハルバートになった“姫”を構えたその時だった。

「な、なんだ！？」

ネギと詠春の向かった先で、巨大な光の柱が現れ、その中から現れた二面四つ手の巨大な鬼。

戦いは既に、大詰めに差し掛かっていた。

二十二話　「飛騨の大鬼神、アリスの大魔法」

英雄と女王の子

二十二話

「飛騨の大鬼神、アリスの大魔法」

飛騨の大鬼神、リョウメンスクナノカミ。１８年程前にサウザンドマスターを含む初代・紅き翼によって打ち倒され、封印された存在であり、その力は英雄達には及ばないものの、並の魔法使いでは手も足も出せない程。伝承によれば身の丈１８丈はあると言われているが、アリス達の目に映る大鬼神の大きさはそれ以上だ。

「最悪だ・・・とーさんに聞いたあの大鬼神が復活したのか」

依然、狂気を身に纏う月詠と交戦しながらネギと詠春の向かった先に見える大鬼神の姿に、焦りを見せ始めた。

上空で同じように大鬼神の姿を見ていたシルヴィアはこの場を離れる訳にもいかず、かと言ってネギと詠春だけで大鬼神を倒せるかどうかと心配になって表情に焦りの色を見せ始めている。

「シルヴィア！　この場は何とかする！　ネギと詠春さんを追え！！」

「アリス様！？　・・・・・畏まりました。御武運を！！」

虚空瞬動で消えて行ったシルヴィアに満足したアリスは改めて月詠に集中した。変わらず黒い気を全身と二刀に纏わせ、狂気の瞳にアリスを映す月詠は強い。間違いなく最強クラスの実力を持っている。

「だからこそ・・・余計に君が欲しいよ・・・・・・月詠！！」
「ウチモ、アリスハンガホシイワ！！」

小太刀とハルバートが激突して衝撃波が生じる。その余波で周囲の水が弾け、雑魚妖怪が消滅していくが、それを気にすること無く黒い気を纏う刃と雷を纏う黒い炎の刃が何度もぶつかっては衝撃波を生み、地面すら抉っていく。

「ハルバートに気を取られすぎだ！！」
「ッ！？」

そう、アリスの武器は術式武装をしてハルバートになった“姫”だけではない。片手に持っている剣型アーティファクト“キシノアカシ”があるのだ。

「神鳴流奥義、百烈桜花斬！！」

花弁が舞う。無数の斬撃が月詠を襲い、彼女は後退を余儀なくされる筈だった。・・・・・・しかし。

「キキマヘンヨ～、コナイナコウゲキ・・・ムダヤ！！」

斬撃は全て黒い気によって霧散され、技を使った後の無防備を狙われた。

「防御も完璧・・・かっ！！」

だが、アリスも伊達に最強クラスの魔法剣士を名乗っていない。迫り来る月詠の猛攻をかわし、受け流す事で全てを向こうかする。

「しかし・・・このままでは埒が空かない。アレを使うか・・・・・」

思いっきり賭けになってしまうが、それしか他に手は無いと考え、術式武装を解いてしまったアリス。

その意図を理解出来ない月詠は少し疑問に思うも、関係無いとばかりに瞬動で突っ込んできた。

「神鳴流奥義・・・・・・」

キシノアカシを地面に刺して“姫”を腰溜めに構えると気を纏わせた。突っ込んでくる月詠に狙いを定め、アリスの手札の中でも成功率の低く、未だ未完成の奥の手を放つ。

「斬魔剣！　弐の太刀！！」

アリス自身、詠春に教えて貰ったのは良いが、成功率が低い奥義だった斬魔剣・弐の太刀。普段の成功率は2割にも届かないが、アリスも英雄の子、ここぞと言う時は成功するものである。

本職の神鳴流剣士には及ばないが、それでも見事な斬魔剣・弐の太刀が月詠を切った。咄嗟に防御したのだろうが、黒い気を貫け、防御ごと右腕を切り落とされた月詠はその場に倒れてしまった。

「私の勝ちだ・・・・・・月詠」

「はい～・・・・・・ウチの負けです。アリスはん」

負けたのにニコニコ笑っている月詠。強者との本気の死合いが出来て、その上での敗北であるからこそ、笑っているのだろう。

「月詠・・・・・良かったら、私の・・・私達二代目・紅き翼の仲間にならないか？」
「アリスはんの仲間ですか～？　面白そうやけど、人・・・切れます？」
「ああ・・・・・直ぐには無理だけど、時が来たら思う存分切り殺せる」
「ほんならええです～」

詳しい話は後だ。アリスは月詠の身体を抱き上げて切り落とした腕を回収しると近くの森に移動する。腕を繋げて治癒魔法を掛けてやれば動かないまでも、切断面は繋がったので良しとすると、地面に仮契約用の魔方陣を書いた。

「私の目的は後で教える・・・間違いなく月詠も満足出来る内容だから楽しみにしてくれ。それで、私達の仲間になる為に君には首輪が必要だ。ここで私と仮契約をしてもらう」
「アリスはんの従者になるん？」
「そうだ・・・私では不満か？」
「そんな事あらへんよ～、アリスはんはウチ好みの強いお人やから、文句なんてあらへん」

それは良かったと、陣を書き終えたアリスは魔力を流し込む。陣が光って仮契約の準備が終わると月詠と共にその中に入ってキスをした。

「これからよろしゅうな？　我が主様♪」

契約成立によって現れたマスターカードとコピーカード。マスターをアリスが持ち、コピーは月詠に渡す。

「ほへ～、称号は“狂気の剣士”ですか～。ウチにぴったりな称号やね～」

月詠のパクティオーカードには露出が少し多めで動き易さ重視のフリルドレスを身に纏った月詠が小太刀二刀を構えた姿が描かれている。

「ほんで、ウチはこれからどないしたらええんです～？」
「私は大鬼神を倒しに行くから、月詠はここで待っててくれ」
「ウチも行きたいですけど、この腕やと無理やね～」

仕方なく残る事を了承してくれた月詠を残してアリスは浮遊術で大鬼神の方に向けて飛んだ。

到着してみるとネギは片腕を石化され、明日菜とシルヴィアに守られるように膝を着いている。詠春はその前に立って野太刀を構え、フェイト・アーウェルンクスと対峙していた。

大鬼神の方を見ると刹那が背中に純白の翼を広げて空を飛び、大鬼神の肩の上にいる千草と木乃香に向けて一直線に移動している。

「となると・・・・・アレは私が倒すか」

アリスの残り魔力も心許ない。だがそんな事を言っている場合ではないので“姫”とキシノアカシ、えいゆうの籠手と指輪とピアスの合計５つの発動体に魔力を流し込んだ。

「合わせろ！　アリス・スプリングフィールド！！」

いつの間にか何故かエヴァンジェリンがアリスの隣に居た。登校地獄の呪いで学園から出られない筈の彼女が此処にいる理由は解らないが、今考えても無駄な事。茶々丸が結界弾によって大鬼神の動

きを止めてくれたのでチャンスは今しか無い。

「多重詠唱！　ボルグ・ボルクス・ボルメテウス！」
「リク・ラク・ラ・ラク・ライラック！」
「契約に従い　我に従え　高殿の王」
「契約に従い　我に従え　氷の女王」
「来たれ　巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆！！」
「来たれ　とこしえのやみ！　えいえんのひょうが！！」

刹那が木乃香の救出に成功して離脱した直ぐ後に、エヴァンジェリンの魔法によって大鬼神が一瞬にして氷のオブジェと化した。しかし、まだ終わっていない。

「百重千重と重なりて　走れよ稲妻！！」
「全ての命ある者に等しき死を　其は安らぎ也！！」

二人の詠唱が終わった。英雄の才能の全てを受け継いだ最強の魔法使いと、誇りある悪として６００年を生きた最強の魔法使い。二人の最強の魔法使いの最強の魔法が解き放たれる。

「術式混合！　五重・千の雷！！」
「おわるせかい！！」

放たれた５つの千の雷によって体の殆どが砕かれた所に追い討ちを掛ける様に砕かれた破片全てが粉微塵になって消し飛んだ。
これこそが世界最強クラスの魔法使いの実力、世界最高位に属する者の魔法だ。それが二人も居れば勝てる存在など同クラスの魔法使い以外に居るはずがない。

「ククク、それが貴様の本気か、アリス・スプリングフィールド・・

・・・あの馬鹿には及ばないが、貴様も十分にバケモノクラスだな」

「本物のバケモノに言われると変な気分になるね・・・まあ、褒め言葉として受け取っておくよ」

「ああ、そうしろそうしろ・・・ククク」

こうして、大鬼神を倒して木乃香の救出も終わった。だが、まだ恐るべき敵が残っている事を、忘れてはならない。

二十二話　「飛翔の大鬼神、アリスの大魔法」（後書き）

連投終わり～。

二十三話　「癒しの姫、始動」（前書き）

二話連投です。

二十三話　「癒しの姫、始動」

英雄と女王の子

二十三話

「癒しの姫、始動」

リョウメンスクナノカミが氷のオブジェと化し、粉々に砕け散った事で天ヶ崎千草の企みは潰えた。スクナの消滅を見届けたアリスとエヴァ、茶々丸はネギと明日菜、詠春、シルヴィアの所に降りてネギから尊敬の眼差しを向けられる。

「所でエヴァンジェリン、登校地獄の呪いは如何した？」

「あ、そーよ！　学園の外に出られないんじゃなかったの？」

「ん？　ああ、それか・・・」

「強力な呪いの精霊を騙し続けるため、今現在複雑高度な儀式魔法の上、学園長自らが５秒に１回“エヴァンジェリンの京都行きは学業の一環である”という書類に判子を絶えず押し続けています」

茶々丸の解りやすい説明で納得できた。が、学園長も災難だろう。５秒に１回判子を押し続けると言う事は、エヴァンジェリンが戻るまで一睡も出来ず、食事も出来ないしトイレにも行けない。中々地獄な真似をするものだ。

「登校地獄の呪いと学園結界から逃れた今の私の力はほぼ全盛期と同等・・・・・反則気味の最強状態という訳さ」

「是非とも戦ってみたいけど、私は魔力が殆ど残ってないから無理だね」

実に残念だ。全盛期と同等の強さになったエヴァンジェリンと戦ってみたいというアリスの欲求は我慢するしか無さそうだ。

「私も残念だが、まあ久しぶりに全開でやれて満足だ。貴様との本気の戦いはいずれ楽しみに待たせてもらうさ」

さて、そろそろネギの右腕の石化はレジストも限界だろう。シルヴィアに頼んで石化解除をしてもらう事になり、シルヴィアは残り魔力を駆使してネギの石化を解呪した。

「わあ！　ありがとうございますシルヴィアさん！」
「すっげぇなー！　如何でいシルヴィアの姐さん、ネギの兄貴とも仮契約しねえか？」
「それはお断りします。私の主はアリス様唯一人ですので」

シルヴィアの魔法の腕前にエヴァンジェリンは感心していた。アリスの従者であり、二代目・紅き翼の砲台と呼ばれている“最強を補佐する最強の補佐”ことシルヴィア・オーギスの事は噂で聞いていたが、実際に腕前を見て感心の声を漏らす。全盛期の自分程ではないが、それでも世界最強クラスに名を列ねるだけの事はあるというものだ。

「さて・・・っ！」

アリスが帰ろうと言おうとしたその時、背後から殺気を感じた。エヴァンジェリンとアリスを狙ったその殺気の主は水の中から現れて襲い掛かってくる。

「障壁突破、石の槍」

咄嗟にエヴァンジェリンを突き飛ばして地面から突き出てきた石の槍を身に受ける。腹部を貫いた槍が臓器も傷つけたのを感じたが、今のアリスにそんな事を気にする余裕は無い。

「ラカン直伝！　ラカン・インパクトォ！！」

周りの悲鳴も無視して槍を切断すると、瞬動で術者の前に移動した。予想通り犯人はフェイト・アーウェルンクス、腹部に手を当てて膨大な気を一気に爆発させた。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・・・・グフッ！」

臓器が重大な損傷を負っているためか、大量の血を吐き出した。それでも気丈に立って煙が晴れるのを待つ。

煙が晴れた所には下半身が消し飛んだフェイト・アーウェルンクスが水に変化している。水の幻影だったのだろう。

「流石に反撃してくるか・・・・・・でも、邪魔者はこれで始末できた」

「地の・・・アーウェルンクス！！」

「余りその名を口にしないでくれるかな、機密なんでね」

そう言い残してフェイト・アーウェルンクスは水になって消えてしまった。残されたアリスは遂に力尽き、その場に倒れてしまう。

「兄さん！」

「アリス君！」

「アリス先生！」

「アリス様ぁ！！」

倒れたアリスを中心に地溜まりが広がった。明らかに致命的な出血量で、このままではアリスは確実に死に至る。

その時、漸く木乃香と刹那がこちらに駆けつけた。裸だった木乃香はシーツを羽織って体を隠し、血を流して倒れるアリスを見て顔を青褪める。

「アリスさん！！？」

木乃香と刹那が駆けつけた直ぐ後に恐らくネギの援護でもしてたのだろう、長瀬楓と、石化を逃れた綾瀬夕映もやって来た。

「危険な状態です。貫通した石の槍が臓器を傷つけ、出血が止まりません。このままでは致死量の血を流してアリス先生は助からなくなります」

茶々丸の診療は正確だ。このままではアリスの出血は致死量に達する。そうなってしまえば待っているのは死、駆けつける援軍など待っていられない。

「し、シルヴィアさん！　さっきネギを治したみたいに治療できないんですか！？」

「申し訳ございません。先ほどの石化解呪で魔力が底を尽いてしまって・・・・・・っ」

「エヴァちゃんは！？」

「わっ・・・わわ、私は治癒系の魔法は苦手なんだよ。不死身だから治癒魔法なんて必要無かったし・・・・・・」

万事休す、詠春は元々神鳴流剣士なので刹那と同様治癒系呪術など使えない。エヴァとネギは治癒魔法を覚えてないし、治癒魔法が使えるシルヴィアは魔力切れ、残された手は無い。

「・・・・アスナ、シルヴィアさん。ウチ・・・アリスさんにチューしてもええやろか？」
「は？」
「このかちゃん？」
「えっと・・・パクティオーとかいうやつ、ウチならそれでアリスさんを治せるかもしれんのやろ？」

良い手だ。確かに仮契約には対象の潜在能力を引き出す力がある。仮契約をする事で木乃香の大量の魔力が治癒に働けばシネマ村での刹那の時と同様、アリスの傷を癒す事が出来るかもしれない。

「膳は急げだ！　おれっちが陣を書くから、直ぐに準備してくれ！！」

カモが大急ぎで仮契約の魔方陣を書くと、アリスをその上に移動させて木乃香はアリスにキスをした。
木乃香の大量の魔力が仮契約によって溢れ出し、アリスの腹部に開いた大穴が塞がっていく。完全に傷が塞がって内臓も完治した所で光は消えた。残ったのは静寂と、アリスと木乃香の間に生まれた二枚のパクティオーカード。陰陽師の姿をした木乃香が両手に扇子を持って微笑んでいるカード、アリスを主とした木乃香の仮契約の証。

「良かった・・・・・アリスさん」

傷が癒え、安らかに眠るアリスをゆっくりと抱きしめ、木乃香が一筋の涙を流した。それは、親しい人が無事だった事への感涙の涙か、それとも別の感情から流したものか、本人も周りも、判らなかった。

翌朝、総本山の一室でアリスは目を覚ました。少しの間を置いて昨夜の事を思い出すと慌てて腹部に手を当てるが、痛みも傷の感触も一切感じられなかった。

「あれだけの負傷を、どうやって・・・・・・」

明らかに致命傷だった筈、それを治す事が出来る術者はあの場でシルヴィアだけだった。しかし、そのシルヴィアは魔力切れでそれも不可能、ならば誰が？　という疑問は枕元に置いてあったパクティオーカードのマスターカードが物語っていた。

「これは・・・・・木乃香ちゃん？」

アリスを主とした木乃香のカード、それは木乃香がアリスの従者になった事を意味している。

「巻き込んでしまった・・・・・私が、木乃香ちゃんを」

守ろうと思っていた少女を、血に濡れた修羅の道に巻き込んでしまった。後悔がアリスの胸を押し潰しそうになる。懐から取り出したアキラのカードと並べて眺めると余計に後悔が押し寄せてくる。

「今契約破棄をしても、一度契約をしてしまった以上・・・あの子達に平穏は戻らない。必ず危険が身に降りかかるのは目に見えている」

ならば覚悟しなければならない。巻き込んでしまった以上、それはアリスの責任だ。命を掛けても守り通す。そして、彼女達が自分

の身を自分で守れるだけ強くなれるよう、強くしなければならないのだ。

「大河内さんにも、話さないとな・・・・・・一般人だとしても」

事故みたいなものとは言え、英雄と災厄の女王の息子と仮契約をしてしまったと言う事は、それだけで危険に身を落とす事だ。故に一般人だから魔法の事も仮契約の事も話さないという選択は消えた。

ネギが仮契約した相手、宮崎のどかはネギの責任だから判断はネギに任せたが、木乃香とアキラはアリスの責任、アキラに魔法の事を伝えると判断したのもまた、アリスの責任の下の決断だ。

「学園に帰ったら、話さないとな・・・・・・」

立ち上がって着替えを済ませると外に出る。そこには笑顔でアリスを待っていたシルヴィア達、アリスもまた、笑顔でそれに応えるのだった。

二十三話　「癒しの姫、始動」（後書き）

これにてアリスの従者は全員揃った……多分。

二十四話　「父の別荘へ、両親の愛の巣」（前書き）

さ、サブタイトルがダサい……。

二十四話　「父の別荘へ、両親の愛の巣」

英雄と女王の子

二十四話

「父の別荘へ、両親の愛の巣」

修学旅行5日目、ネギとアリス、シルヴィアと5班はエヴァンジェリンに付き合わされて京都観光をしていた。

日本贔屓のエヴァンジェリンは15年間、一度も修学旅行に行ったことが無いため、思う存分連れ回されてしまう。余程鬱憤が溜まっていたのだろう。

「あ～、満足だった」

晴れやかなエヴァンジェリンの顔を見ると何故か殺意が沸いてくるのは疲労の所為だろうか。思わず握り拳を作ってしまうアリスをシルヴィアが宥めていた。

「やあ皆さん、休めましたか？」

今日はエヴァンジェリンの京都観光だけではなかった。詠春と約束しており、この日はナギの別荘に行く事になっているのだ。

私服にタバコを吸っている詠春がにこやかに一向を出迎えていた。

「スクナの再封印は完了しました」

「うむ、ご苦労。近衛詠春」

「すいません、面倒を押し付けてしまって」

「いえ、こちらこそ。迷惑を掛けてしまいましたし、こちらとして

も感謝してます」

ナギの別荘に向かう途中、スクナの再封印について詠春がアリスとエヴァンジェリンに伝えてきた。丁度気になっていた事だったので、有難い。

「長さん、小太郎君は・・・・・・」

ネギが聞いて来たのはネギが戦ったという狗族の少年、犬上小太郎の事。詠春の話では彼はそれほど重い罪にはならないとの事、それなりの処罰はあるが、気にするほどの事ではないらしい。

昨夜、チャチャゼロが捕らえたらしい天ヶ崎千草については言葉を濁したが、エヴァンジェリンとアリスは感づいた。実行犯でもあるので間違いなく極刑になるだろう。

「それとアリス君、月詠の事ですが・・・・・・」

「ああ、彼女は私が引き取ります。審査が通り次第で良いんで麻帆良に寄こして下さい」

「はあ、構わないんですが・・・・・・良いのですか？　彼女は色々と問題のある娘ですが」

「責任の全ては二代目・紅き翼で取りますから、大丈夫ですよ。飼い慣らす自信はありますから」

月詠は現在総本山の反省房に入っている。アリスの従者となった事で重い罪にはならなかったが、本人は暇だと文句が五月蝿いらしい。

因みに、アリスが約束した事は麻帆良に来た時に話すと言ってあるので、月詠は今から麻帆良に行く事を楽しみにしているとの事。頼んで取り寄せてもらった麻帆良学園のパンフレットを見ながら鼻歌を歌っている程だ。

「それより問題は、あの白髪のガキか・・・・・・」
「現在調査中です・・・・・・」
「確か貴様やナギが昔戦った奴だと聞いているが」

フェイト・アーウェルンクス、彼は詠春やナギ達、初代・紅き翼のメンバーが戦った“完全なる世界”の幹部。その実力は最強クラスに属しており、ナギ達でも苦戦したらしい。
そして、アリスにとっても最大の宿敵、初代同様、二代目・紅き翼にとっても倒すべき敵だ。

「フェイト・アーウェルンクスの事は私達でも捜査をしています。アリス様に言われてラカンにも連絡しておきましたので、ラカンも“向こう”での調査をしてくれるでしょう」
「そうですか、ラカンは“向こう”でしたね・・・・・・あの筋肉馬鹿はちゃんと仕事をしますでしょうか？」
「流石にアーウェルンクスの事だから、真面目にやると思いますよ」

話をしている内に別荘に着いた。数年前まで、アリスが掃除をしていた別荘は少し、懐かしい。

「わーっ！！」

中に入ってみると、壁一杯の棚に所狭しと入れられた本に図書館島探検部の面々が歓喜した。

「懐かしいね・・・・・・詠春さんが私に掃除を押し付けてくるから何度か来たけど、何も変わってない」
「ハハハ・・・いや、すまなかったね。木乃美に怒られてからわちゃんとやってるから安心してください」

アリスもシルヴィアと一緒に他の皆と同様、見て周る。
母の処刑後、紅き翼のメンバーと母、そして明日菜はここに泊まっていたらしい。ついでに言うならこの別荘は父と母の愛の巣、聞いた話しだとアリスはこの別荘で仕込まれたとか。

「下世話な事考えたな」
「如何しました？」
「いや、ただ何となく・・・ここで父さんと母さんは夫婦としての人生を歩き出したんだな、と・・・・・・」

その頃はまだアリスも生まれていなかった為、当時の事は何も知らないが・・・・・・何故か懐かしいと思ってしまうのは何故なのだろうか。

「このか、刹那君、こっちへ・・・・・・明日菜君とアリス君とシルヴィア君も」

二階にいる詠春に呼ばれた。上がってみると詠春の他にもネギとエヴァンジェリン、茶々丸も居て、初代・紅き翼の集合写真を見せてもらった。

「これがアリス君達の先代・・・・・・サウザンドマスターの戦友達、初代・紅き翼のメンバーです。黒い服を着ているのが私です」
「前にも見ましたねコレ、久しぶりに見るとラカンが今と全く変わってないのが笑えますよ」

写真に写っているのはナギと詠春、ラカンとアルビレオ・イマ、それと、初代の中で既に故人となっている二人、ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグとナギの師匠だった少年、フィリウス・ゼクトだ。

「こうして見ると、ほんまにアリスさんよりネギ君の方がお父さんに似とるなぁ～」
「前にも言ったでしょ。私は父さんと母さん、二人に似たんだって」
「そうですね。アリス君はナギと彼女の二人に似ましたね」

ふとネギを見ると、やはり母の話題が出ているのにも関わらず、話を聞く気が無いのか写真に釘付けだった。これがアリスの中で嫌悪感を与えているのだが、ネギは気付きもしない。

「私は、かつての大戦でまだ少年だったナギと共に戦った戦友でした。・・・・・そして、２０年前に平和が戻った時、彼は既に数々の活躍から英雄・・・サウザンドマスターと呼ばれていたのです」

その大戦、完全なる世界との戦争で天ヶ崎千草の両親は死んだらしく、それで西洋魔術師に深い恨みを持っていたのだ。

「あの大戦から、私と彼は無二の友であったと思います。しかし・・・彼は１０年前、突然姿を消す・・・・・当時の事はアリス君の方が詳しいでしょう」
「いえ、私も知っている事は殆ど・・・・・ネギが生まれて直ぐに、母さんを連れて父さんは私とネギをネカネの家に預けて姿を消しました。私は母さんから“姫”を受け取って、行き先は聞いたんですが、魔法世界とだけ言って・・・・・」
「そうですか・・・・・その後の彼の足取り、彼がどうなったかを知る者はいません。ただし、公式の記録では１９９３年　死亡――」

それ以上の事は詠春も知らないらしい。アリスもそれ以上の事は何も知らないので、あまり手掛かりは無さそうだ。

その後、詠春がネギに何かを渡して、和美の提案で写真を撮る事となった。ナギの別荘での集合写真、いい思い出になっただろう。

ホテルに帰還して直ぐに麻帆良学園生徒はバスにに乗り込んで京都駅に向かう。このまま新幹線に乗り継いで麻帆良学園に戻るのだ。

新幹線に乗り、発車して直ぐに３－Ａの生徒は皆眠ってしまった。疲れたのだろう、修学旅行中元気一杯だったのだから当然と言えば当然だ。

「やれやれ、あれほどうるさかった３－Ａが、静かになったものですな」

「ふふ、ほんとに・・・ハシャギ疲れたんでしょうね」

「麻帆良に戻るまでは暇ですし、ゆっくり休むのも良いと思いますよ」

「ええ、アリス先生も、休んでも良いのですよ？」

「はい。見回りが終わったらお言葉に甘えて」

別の車両に乗っているシルヴィアも如何やら寝ているらしい。

「今回は・・・・・色々とあったな」

新しい従者が３人増えたり、宿敵に会ったり、父の別荘に行ったり、死に掛けたり。本当に色んな事が一気に起きた旅行だった。

「帰ってからが、もう一波乱になる」

大河内アキラの事、木乃香の事、魔法の事を伝え、そして・・・・・。

「まあ兎に角、今はゆっくり・・・休もう」

自分の席に着いて直ぐに睡魔が襲ってきた。その欲求に逆らう事無く、アリスの瞼は閉じられる。

英雄の子達は、僅かな時間を安らかに過ごす。今後訪れるであろう激闘の日々は、今は考える事無く、唯安らかに。

二十四話　「父の別荘へ、両親の愛の巣」（後書き）

次回から再び学園編スタート！！

二十五話　「兄弟の亀裂、凶剣士到着」（前書き）

今回はネギアンチ気味な表現が出てきましたが、決してアンチ物ではないと信じたい作者

二十五話　「兄弟の亀裂、凶剣士到着」

英雄と女王の子

二十五話

「兄弟の亀裂、凶剣士到着」

波乱の修学旅行が終わって、アリス達は麻帆良学園に帰ってきた。翌日、日曜の朝からアリスはシルヴィアを連れて学園長室に訪れている。理由はシルヴィアの事だ。

「と、言う事で、彼女・・・二代目・紅き翼の一人であり、私の従者でもあるシルヴィアの麻帆良滞在許可が欲しいんですけど」

「ふぉっふぉっふぉ、構わんよ。シルヴィアくんには京都の事件でも世話になったからの、婿殿からも良くしてくれるよう頼まれておる」

シルヴィアは麻帆良滞在中の仕事としてアリスが学園での仕事をしている間の女子寮管理人代理を行う事となった。住まいはアリスが住んでいる管理人室、同棲だ。

「それと、木乃香ちゃんと大河内さんの事なんですが」

「仮契約・・・・・かの？」

「はい。木乃香ちゃんの事は詠春さんから任されてますし、魔法の事も話して良いと許可を貰ってます。ただ、大河内さんについてですが・・・・・・」

「ふむ・・・アリスくんの判断で話すと良いて、任せるぞい」

アリスの判断で・・・・・話した方が良いと判断したら話して

も良いし、話さないと決めれば仮契約した経緯についての記憶を消して契約破棄する。その後は勿論影から護衛は付けるが。

「仮契約した日にちから考えて、契約破棄出来る期間は残り少ない。早めに決断するべきじゃぞ」

話が終わり、アリスとシルヴィアは管理人室に帰ろうと帰路に着いたのだが、その途中でネギと明日菜に会った。ネギが随分と真剣な表情をしているのが気に掛かる。嫌な予感がするが・・・・・。

「あ、もしかして弟子入りってアリス先生の事？」

嫌な予感が当たった。

「はい。兄さん！　僕を兄さんの弟子にしてください！　僕は力が欲しいんです。大切なモノを守るための力が」

「・・・・・・断る」

「・・・・・・え？」

断られるとは思ってなかったのだろう。呆然としたネギだが、直ぐに明日菜と一緒に詰寄ってきた。

「なんでよ！　ネギはアリス先生の弟でしょ！？　弟子入りさせるくらいいいじゃない！！」

「お願い兄さん！　僕を兄さんの弟子にしてください！！　お願い！」

「何と言われようと駄目だ。私はネギを弟子入りさせる気も、鍛える気も無い。それに、ネギを私が鍛えるとなると、ネギの心に必ず甘えが生まれてしまう。この世界で甘えを持つ人間に待っているのは確実な死だけだ」

甘え、それは戦う者として絶対に持ってはいけない感情。アリスに弟子入りすればネギは何処かで自分では如何する事も出来ない相手が出てきた時にアリスに頼ってきてしまう。それではこの先、生きていくなど不可能。

「大丈夫だよ！　僕は兄さんに甘えたりなんてしないから！！」
「本人は何とでも言えるさ。でも、ネギは根本から変わらなければ必ず甘えてしまう。仮に私がネギを弟子入りさせたとして、ネギは私が兄だからと、優しくしてくれる。そう思ってしまう……いや、既にそう思っているんじゃないか？」
「そ、それは……」

普段のアリスはネギにも優しい兄だ。それがネギの知るアリスだから、それ以外の、厳しいアリスを完璧に知っている訳ではない。

「父さんに魔法を教えてもらっていた私が言えたことではないが、肉親に弟子入りするというのは、あまりお勧めしない」

最も、アリスの場合はアリスから何か言う前にナギ達が積極的に教えていたのだが、本来、肉親に弟子入りするというのはあまり良い方法ではない。一般的な魔法使いも幼い頃は親や学校から基礎を教わるだろうが、それ以降は肉親以外の魔法使いに弟子入りして強くなる。それが普通なのだ。

そろそろシルヴィアの荷解きをしないといけないので、これ以上何か言われる前に話を打ち切り、アリスはシルヴィアと共に管理人室に転移した。

転移して直ぐにシルヴィアの荷物の荷解きを行い、夕飯の準備を行っている間に日も暮れてきた。

「アリス様・・・ネギ君を弟子入りさせない理由はメガロメセンブリア元老院ですか？」
「そう、あそこの老いぼれ共は私をマギステル・マギにして自分達の配下にするのを諦めてないから、ネギを弟子入りさせれば間違いなく隙を作ってしまう。奴らがその隙に喰らい付いてくるのは目に見えている」

メガロメセンブリア元老院に恨みを持つアリスは一切の隙を見せる事が出来ない。過去にネギを鍛えろという依頼が来ているのだから、此処でネギを弟子入りすれば間違いなくメガロメセンブリアは何かしらのアクションをして来る筈、そして英雄の息子二人を自分達の配下に置こうと画策する筈だ。

「母さんを陥れたメガロメセンブリアに、頭を下げるなど・・・冗談じゃない！」

これこそが、アリスの心の闇。昔、まだ術式武装を開発する前、ラカンから教わった闇の魔法にアリスは適正があった。その適正となる心の闇こそが、メガロメセンブリア元老院に対する憎しみ。

「シルヴィア・・・・・私の目的、忘れるなよ」
「・・・はい。私はアリス様に忠誠を誓った身、アリス様の目的に殉ずる覚悟はいつでも御座います」

翌日の月曜日、アリスは詠春から連絡を貰い、月詠が麻帆良に向かっていると言う事を聞き、朝から駅まで迎えに来ていた。

「意外と早かったな・・・・・」

もう少し掛かるものだと思っていたが、詠春が気を利かせてくれたのだろう。

「そろそろか・・・・・・」

新幹線の到着予定時刻も聞いているので、時計で時間を確認するともうそろそろ到着する時間だ。

数分後、漸くホームから新幹線の到着した音が聞こえた。このまま改札で待っていれば月詠も姿を現すだろう。

「アリスは～ん、来ましたえ～」

月詠の声が聞こえた。そちらに目を向けると改札を出て少し大きめな荷物を引っ張る月詠が居た。

「長旅ご苦労様、疲れてない？」

「大丈夫です～、それより早う行きまひょ。最初は学園長に挨拶やろ～」

月詠はアリスの従者として麻帆良学園に転入する事になっている。学年は木乃香達の一つ下で、二年生だ。

「月詠、学校に行ったことは？」

「ありまへん、せやから楽しみや～」

駅からバスに乗って学園に到着した。そのまま真っ直ぐ学園長室に着き、ノックをして中に入ると学園長とタカミチが待っていた。

「おお、来たか。待っておったぞ月詠君。ワシが麻帆良学園学園長、関東魔法協会会長の近衛近右衛門じゃ」

「ここの魔法先生兼警備員をしている高畑・T・タカミチだよ。よろしく」
「神鳴流剣士、月詠です～。よろしゅう」

月詠はバッグに入れていた資料等を学園長に渡し、西と東の関係修復の為の親善大使も兼ねて此処に来ている事を伝えた。

「あいご苦労、麻帆良学園学園長として、月詠君の入学を歓迎するぞい」

この後、学園での月詠の立場と、仕事についての話し合いになった。

立場としては西との親善大使とアリスの従者、仕事は学園の生徒になるので夜の警備員としての仕事をアリスとシルヴィアを入れた三人でする事に。

「警備員ですか～、人間切れへんのは残念やけど～、侵入してきた妖怪は切り放題やろ～？」
「うむ、進入してきた妖怪や悪魔などは気にせず殲滅して良い」

途端に上機嫌になる月詠、切れれば何でも良いらしい。

話し合いも終わったので月詠の住まいとなる女子寮の一室の鍵を受け取って学園長室を出た。寮の一人部屋が与えられるらしく、中にはアリスの部屋に直通の転移魔方陣があるらしく、いつでもアリスの部屋に行けるし、アリスの部屋からも月詠の部屋に行けるとの事。

「そういえば刀は如何したんだ？」
「パクティオーカードをアーティファクトにしたら小太刀二刀になったんえ～。せやから持ってきてません」

それなら身軽で済む。しかしアーティファクトが小太刀二刀とは月詠らしいというか、どのような効果を持っているのかが気になり、想像したら薄ら寒くなった。

「アーティファクトの話は部屋に行ってからしよう。どんな効果があるのか、アーティファクトの名称が分かれば資料もあるし、直ぐに判明する」

アリスの部屋に置いてある書物の中にはアーティファクトに関する記述が載った物もある。そこから探せば月詠のアーティファクトの詳細も見つかるかもしれない。

「所で・・・月詠は神鳴流の技をどの位使えるの？」

「ん～？　青山宗家でしか教えへん弐の太刀も含めて殆ど使えるえ～」

つまり、神鳴流の技で使えない技の方が少ないと言う事になる。随分と頼もしい従者に笑みが零れるアリスだった。

「アリスはんも神鳴流を使えるみたいやけど～、どれくらい出来るんです～？」

「月詠と同じ、弐の太刀を含めて殆ど使えるけど、完璧に使える技は半分も無い」

青山宗家の出である詠春から大半の技は教えてもらっているが、完璧に使いこなせ、尚且つ実戦で使えるだけの完成度を持つ技は本当に少ないのだ。特に、弐の太刀については殆どが未完成。

「まあ、私の場合は神鳴流剣士って訳じゃない。あくまで魔法剣士

なんだから、技の完成にそれほど拘ってない。手札が多い方が良いけど、神鳴流は言っては悪いけどオマケみたいなものかな」

オマケでしかない技術を少ないとは言え、完璧に使えるものもあるというのは可笑しな話だが、アリスは気ではなく、魔力を用いて魔法を使いながら剣で戦うのだ。メインは魔法剣士、神鳴流はサブという位置づけになる。

「ウチはそのおまけで負けたん？」
「おまけとは言っても一応は鍛えたから並の神鳴流剣士よりは強いという自負はあるけどね」

その辺りは詠春のお墨付きだ。

管理人室に着いて直ぐに転移魔方陣を確認した。そこから月詠の部屋に転移すると荷解きを始める。それほど荷物が多い訳でもないのでそれ自体は直ぐに終わり、管理人室に戻ってシルヴィアを交えて月詠のアーティファクトについてを調べる事になった。

「えっと・・・月詠、アーティファクトの名前は？」
「ん～？　“聖魔の敵対”やって」
「聖魔の敵対ねぇ・・・・・・」

武器タイプのアーティファクトの中でも東洋系の武器の一覧を調べてみると刹那のアーティファクト、匕首・十六串呂が見付かったが、今は関係無いのでページを進めると漸く見付かった。

「あった・・・・・聖魔の敵対。小太刀二刀型のアーティファクトで、左右で別々の能力を持ったアーティファクト」

片方は聖天の太刀、聖なる力を秘めており、敵が闇に属する者であれば浄化して消滅させる。もう片方は常闇の太刀、闇の力を秘めており、相手が光に属する者であれば闇に堕とし、絶望の中で滅びを与える。

この力は魔力、若しくは気を一定量込める事で発動可能で、普段は唯の小太刀二刀である。

「うわ・・・・・このアーティファクトが弱点となる者に対しては絶大な力を発揮するからマスターピースとまではいかないけど、ハイパーピースのアーティファクトに指定されてる」

マスターピースの一つ下のランクに位置するアーティファクトということだ。随分と厄介なアーティファクトだこと。

「闇に属するといえば人外の存在だな・・・、光に属するとしたら・・・・・ああ、立派な魔法使いとかの正義を掲げる馬鹿だ」

何ともまあ、月詠にピッタリのアーティファクトが現れたものだ。でもその分、アリスにとっては好都合とも言えるし、心強いとも感じられた。

「これからよろしく頼むよ・・・凶剣士・月詠。改めて、君の主となった二代目・紅き翼のリーダー、黄昏の王、アリス・スプリングフィールドだ」

「最強を補佐する最強の補佐、シルヴィア・オーギスです」

「こちらこそよろしゅう、神鳴流の月詠です～」

こうして、後の二代目・紅き翼の神鳴流剣士、初代のサムライマスターの後継者とも呼ばれる事になる凶剣士が誕生した。

残された問題は二つ、木乃香と大河内アキラの事。これをどうす

るのか、それはアリスの決意が物語っている。

二十五話　「兄弟の亀裂、凶剣士到着」（後書き）

次回は愚か者に対する制裁と、木乃香とアキラのお話にする予定です。

二十六話　「夢見る愚者、少女の決意」（前書き）

朝倉へのトラウマ級のお仕置きです。

二十六話　「夢見る愚者、少女の決意」

英雄と女王の子

二十六話

「夢見る愚者、少女の決意」

月詠が麻帆良学園に来た。それはこの先の歴史に大きな変化をもたらす事となるだろうが、アリスのやるべき事は何一つ変わらない。今はただ、愚か者への制裁をする。ただ、それだけだ。

月詠が来た次の日、アリスは電話でエヴァンジェリンからネギが彼女の所へ弟子入りに来た事を聞いた。エヴァンジェリンなら実力的にも十分信頼に足るので、後は彼女が出すと言う弟子入りテストにネギが合格するかどうか、それはネギ次第だ。

学校に行くとネギからもその旨を聞いたので特に問題は無かったが、ネギはまだアリスに教わる事を諦めていない様子。呆れてしまうがそれを無視して朝のＨＲを済ませると授業が始まった。

３－Ａで行うアリスの授業は４時間目、それも終わりに近づき、チャイムが鳴ったので授業を終わらせると挨拶の前に連絡事項を伝える事にした。

「朝倉、大河内さん、放課後に生徒指導室に来なさい・・・朝倉に関しては逃げたら、地獄の底までも追いかけて捕まえるつもりだから」

カモミールは朝の内にネギの肩から掻っ攫って厳重に束縛した状態でシルヴィアに預けてある。後は和美とアキラを生徒指導室に呼べば準備は終わり。

顔色を真っ青にしてガクガク震えている和美を尻目に教室を出ると職員室に向かった。

放課後、生徒指導室で待っているとノック音が聞こえた。如何やら二人とも来たらしい。

「開いてるよ」

失礼します。と言って入って来たのはアキラ、その後ろに暗い顔で和美が続いている。

「ああ、大河内さんごめんね。先に朝倉に話があるから外で待ってくれるかな？」

「あ、わかりました・・・失礼します」

アキラが退室して扉が閉まったのを確認すると防音結界を張った。未だ震える和美を尻目に、念話で管理人室にいるシルヴィアに連絡を取ると直ぐにカモミールを握ったままのシルヴィアが転移してきた。

「さて、まずは修学旅行で起きた集団仮契約の事だ・・・・・・とは言っても大半がスカ、成功は宮崎さんと大河内さんの二人・・・だが、その行為自体が問題だ」

「いや、でもよぉ旦那。兄貴に仲間が増えればその分戦力として「宮崎さんが戦力になるのか？」いや、まあ・・・ムリッス」

「そして何より、二人が契約した相手はネギと私・・・・・・大戦の英雄ナギ・スプリングフィールドの息子だ。お前も英雄の負の遺産位は知っているだろう」

確かにアリスとネギの父、ナギは英雄として多くの人々に憧れの対象とされている。しかし、その反面、ナギを憎んでいる者も多く存在しているのだ。

それだけではない、メガロメセンブリア元老院は英雄の子を欲している。アリスとネギの存在は政治的な面でも大きな意味合いを持つ。

そしてもう一つ、知っている者は少ないがアリスとネギの母、アリカの事もある。災厄の女王の子でもある二人は何時、命を狙われても可笑しくないのだ。

「カモミール、朝倉・・・お前達の軽はずみな行動が二人にどれだけ大きな悪影響を与えたのか、理解してないのだろうな・・・・・・何か言い訳でもあるか？　朝倉和美」

「い、いや～・・・アリス先生が大げさなんじゃないかな？　ネギ君も言ってたけど、魔法使いは皆、立派な魔法使いを目指してるんでしょ？　だったらそんな命を狙われるとか、そんな物騒な事・・・・」

瞬間、影から“姫”を貫いて和美に突きつけた。修学旅行の時にも同じ事をして忠告しているのに、まだそんな世迷言を言っているのかと、少し憤慨しているのだ。

「愚か者が・・・総本山で石化された人間の言葉とは思えないな。魔法使い全員が立派な魔法使いを目指している？　笑わせる・・・そんなの現実を見ない馬鹿の戯言だ。現に、私は立派な魔法使いなど目指してないし、なる気も無い。世の中にはな、良い魔法使いと悪い魔法使い、そして魔法を唯の技術の一つとしてしか認識していない魔法使いが存在しているんだ」

魔法使いの犯罪者など無数に存在するし、魔法使いが金を稼ぐ為

に傭兵をやっている事も普通にある。

「一般人には非現実的な世界に夢を見すぎたな・・・朝倉、私の目を見ろ」

「え？」

和美がアリスと目を合わせたとき、朝倉の意識は現実を離れた。傍目から見ればただ呆けているだけにしか見えないが、和美の意識はアリスが使った魔法、幻想世界（ファンタズマゴリア）だ。

「だ、旦那・・・幻想世界まで使えたんすね」

「滅多に使わない、闇の系統だから使えるだけだ」

「と、所で・・・ブンヤの姐さんには何を見せてるんです？」

「私が知る限り全ての性犯罪を犯した魔法使いに追われ、無残に犯されて壊され、殺される寸前までをリプレイで１００回近く」

女にはトラウマ物の幻想だろう。拘束魔法で身動きを封じられ、特殊な魔法薬で強制的に快感を底上げさせられた状態で何人もいる男に同時に犯されるなど、鬼畜以外の何者でもない。しかも、精神崩壊を起こさないように魔法で細工をしているのだから尚、性質が悪い。

後は眠りの霧で眠らせてシルヴィアが朝倉を抱き上げて彼女の部屋に転移する。最後に防音結界を解いてアキラを呼んだ。

「失礼します・・・・・あれ？　朝倉、何処行ったんですか？」

「ああ、窓から逃げられた」

因みにここは一階である。

「さて・・・・・・」

再び防音結界を張り、同時に人払いの結界も重ねる。

「・・・あれ？」

今、自分がいる部屋の中だけ雰囲気が変わった事に気が付いたらしい。随分と外界の変化に敏感な子だ。

「大河内さん・・・修学旅行の時に朝倉から貰ったカード、持ってる？」

「え？　あ、はい。ありますけど・・・・・・」

「見せてもらっても？」

「わかりました・・・」

ポケットに入れてたらしい、直ぐに取り出してアリスに差し出した。

アリスを主としたアキラのパクティオーカード、中央には花柄のパレオが付いた水色のビキニを着たアキラの周囲に水飛沫が舞っている絵柄が描かれている。そしてその絵のアキラの両耳には深い蒼のピアスが着けられている。

「称号は源海の巫女、アーティファクト名は・・・ウンディーネの涙、か」

「あの・・・・・・？」

「ああ、悪いね・・・これの事も含めて、大河内さんには話があったんだ」

そして語る。アリスとネギが生きる世界、この世界の裏の事、魔法の事、魔法世界の事、それは普通の生活をしてきた一般人であるアキラには物語の中の話みたいで、だが現実だと判断するに足る証

拠が多々あった。（カモが喋ったり、影の中から“姫”をだしたり）

「魔法・・・・・本当にあるんですね」

「うん、それとごめんね。仮契約してしまった事で大河内さんは強制的にこちらの世界に関わる事になった。この先、命を狙われる事にもなる可能性が大きい」

たとえアキラが知らなかったとしても、あの魔方陣に気が付かなかったアリスの責任だ。そう思って頭を下げたアリスにアキラが慌てた。

「待って先生・・・頭上げてください。あの、それで・・・私はどうしたら」

「うん、大河内さんには悪いと思うけど、大河内さんには強くなってもらう事になる。自分の身は自分で守れるくらい強く」

「それって、魔法を教えてくれるって事ですか？」

「そうなる」

アキラも女の子だ。小さい頃は魔法少女に憧れを抱いていただろう、自分が魔法使いになるというのなら興味があった。

「うん、やる。人を傷つけるのは苦手だけど、魔法には興味があるし、アリス先生と契約したのなら、足を引っ張りたくない」

最初はその程度の覚悟でも良いだろう。突然巻き込まれてしまったのだから仕方が無い。だが、その内嫌でも現実の厳しさを目の当たりにして更なる覚悟を持田なければならなくなるが、アキラなら大丈夫だろう。

「なら、今日からさっそく教える。一緒に来て」

「はい・・・・・・それと、先生」
「ん？　どうかした？　大河内さん」
「それ・・・・・・アキラで良いです」
「・・・・・・わかった。アキラ、行こう」
「はい！」

アキラを連れて生徒指導室を出た。向かう先はエヴァンジェリンの家、シルヴィアには念話で先にエヴァンジェリンの家に行くよう伝えたし、場所は予め地図を見せてあるので知ってるはずだ。
エヴァンジェリンの家に着くとノックをして数秒待つ、直ぐに中から茶々丸が出てきた。

「お待ちしておりましたアリス先生、アキラさん。シルヴィアさんとマスターは既に別荘でお待ちです」
「茶々丸さん？」
「そう、ここはエヴァンジェリンと茶々丸の家で、この中にアキラを鍛えるための場所があるんだ」

中に入って地下室に下りると前にも見たダイオラマ魔法球が見えた。

「うわぁ、ボトルに入ったミニチュア模型？」
「いや、これもマジックアイテム・・・ダイオラマ魔法球って言って、この中に入ってアキラを鍛えるんだ」
「中に？」
「そう、足元に魔方陣があるでしょ？　そこに入ったら中に入れる」

言われた通り、アリスと茶々丸と共に魔方陣の中に入ると周囲の風景が変わった。石造りの壁から晴天の広がる外の風景、その中央に立つ白い塔の上に立っていた。

「すごい・・・・・これも魔法なんだ」
「しかもこの中では一日が外の一時間になるという代物、中々便利だけど多用は出来ないんだよね」
あまり多様すると老ける。タカミチが良い例だろう、彼はこの中で修行していて外での実年齢より老けてしまったのだから。
「さて、まずはこの中で一週間、みっちり基礎を教えるから」
話をしながら砂浜に下りるとエヴァンジェリンとシルヴィア、チャチャゼロが待っていた。テラスを出して優雅に紅茶を飲んでいる。
「やっと来たか・・・それで、大河内アキラがここに居るという事は、教えるのだな？」
「ああ、それ以外の道は無い」
エヴァンジェリンの家に来た時点で彼女も魔法使いなのだろうと予測していたが、こうして見ると本当に魔法の世界の凄さを感じる。この別荘の持ち主もエヴァンジェリンなので、おそらく彼女はベテランの魔法使いなのだろうと思っていたが、先ほど教えてもらったのだが、まさか６００年も生きている吸血鬼だとは思わなかった。
「さて、まずはアキラに合った属性を調べるとしようか・・・・・確か入れてたよな」
アリスは突然自分の影の中に手を突っ込んで中を探ると、漸く目的の物を見つけたのか引っ張り出した。
「貴様の影は倉庫か・・・・・」

エヴァンジェリンの力無い突っ込みをスルーしてアリスが取り出したのは水晶で出来た球体、占い師が持っているような見るからに高そうな水晶だ。だが、水晶に見えたのは最初だけ、影から出した途端に黒く濁り、中に炎と雷が見えた。

「アキラ、この水晶を持って」

「あ、はい」

アリスに言われた通りに水晶を持つと、黒く濁っていた水晶が透明度の高い水の塊のような見た目に変化した。持った感触は水晶のそれだが、見た目は完全に水の塊で、中に氷が浮かんでいる。

「へえ、水と氷か・・・水泳部だからアキラらしいかな」

水晶を返してもらったアリスは影の中に水晶を仕舞って今度は小さな杖を取り出した。指示棒の先に月が付いてる玩具みたいな杖、それは初心者用の杖で、アリスがナギから魔法を教わっていた頃に使っていた思い出のある品だ。

「この杖、アキラにあげる。暫くはこれで練習ね」

「はい」

杖を受け取ったアキラは漸く自分も魔法使いの端くれになったかのような思いに捕らわれた。だが、呆けてもいられない。アキラが強くなれるかはこれからに掛かっているのだから。

「最初に教えるのは基礎の基礎、魔法で火を灯す事から」

“姫”は出さずに左手薬指に填めていた指輪をアキラに見せると

魔力を流して呪文を唱える。

「プラクテ・ビギ・ナル　火よ灯れ！」

すると、指輪はアリスの魔力を源にして小さな火を灯した。

「これが魔法使いになるための最初の試練。これが出来なければ魔法使いになるのは不可能だ」

ゴクっと息を呑んだ。アキラにしてみれば火を灯した事そのものが既に驚きの領域なのに、それを自分がやるとなると、緊張して杖を持つ手が汗ばんでしまう。

「・・・・・・」

「さあ、やってみて、自分の中から力を杖の先端に集めて祈るような感じで」

アリスに言われた通り、杖を構えて自分の内界へと意識を集中する。魔力と気の事は教えてもらった、そのイメージを自分の中に投影して、その力を杖の先端へ集め、祈りを捧げるように呪文を唱えた。

「プラクテ」

そして、これが始まり。

「ビギ・ナル」

後の二代目・紅き翼の一角を担う魔法使い、アリスと並んで戦う、水の加護を持った魔法使いの・・・・・・。

「火よ灯れ」

誕生が。

二十六話　「夢見る愚者、少女の決意」（後書き）

朝倉については肉体的には何も無いが、精神的に大ダメージ。確実にトラウマになるであろう幻想を見せられて、でも精神崩壊できないから恐怖以外の何者でもない。

今まで様々な小説を見てきましたが、朝倉にこれほど鬼畜なお仕置きをしたのは私が始めてかも……。

外伝1　「術式武装への道」（前書き）

何となく外伝を書いてみました。

外伝１　「術式武装への道」

英雄と女王の子

外伝１

「術式武装への道」

スクナを倒した次の日、エヴァンジェリンに付き合わされてアリス達は京都観光をしていた。その最中、エヴァンジェリンがネギ達から少し離れてアリスの方に寄って来た。

「一つ、聞かせろ。貴様の術式武装・・・・・・あれを作るのにどれ位掛かった？」

「ん？　ん～・・・結構掛かったかな。魔法剣士としての戦い方を模索している最中に考えた方法だったけど、結構難しかったし」

あれはまだアリスが１３歳の頃だ。既に二代目・紅き翼のリーダーとして活動していたアリスは魔法剣士としての己に足りないモノを感じていた。

魔法世界、その中でも有名な場所の一つである新・オスティアの近隣に位置する二代目・紅き翼の隠れ家。そのリビングで当時１３歳のアリスが“姫”を磨きながら何やら難しい顔で唸っていた。

「むぅ・・・・・・」

「よおアリス！　なぁに変な顔してんだよ？」

「ラカン・・・」

アリスの後ろから話しかけてきた筋肉逞しいヘラス族の男、初代から紅き翼に所属している英雄、ジャック・ラカンだ。現在、二代目・紅き翼最強の男でもある。

「少しね・・・・私は魔法剣士として戦っているけど、私の戦い方には何かが足りない気がして」

今のアリスの戦い方は身体強化して剣を振るい、無詠唱魔法や高速詠唱魔法を併用しての一般的な魔法剣士の戦い方だ。だが、アリスにはそれが何か物足りなく、何か新しい技術でも無いかと考えているのだ。

「ふ～ん、随分とめんどくせー事考えてやがんなぁ」

「めんどくさいって・・・一応、私の戦い方の事だし、それ次第では今後生き残れるかも別れるからね」

「んんん～・・・・・おっ！　そうだ良いモン教えてやるよ！！」

突然ラカンがアリスの腕を引っ張って外に連れ出した。当然、文句は言ったのだが、笑いながらスルーされ、結局近くの滝まで連れて来られてしまった。

「それで？　何を教えてくれるって？　また羅漢シリーズ？」

「いんや、こいつはな、かの闇の福音が作り出した固有技法だ。まあ見てろ・・・・・・」

水面に立つラカンが精神を統一したかと思った途端、周囲の空気が重くなった。そして・・・・・・。

「プラ・クテ・ビギナル！　来たれ深淵の闇　燃え盛る大焔　我を焼け　彼を焼け　そはただ焼き尽くす者！！　奈落の業火！！！」

何でラカンはこう・・・・・魔法使いでもないのに初期の起動キーで上級魔法を使えるのだろうか。その疑問は恐らく、ラカンだからの一言で片付けられてしまうのだろう。

「術式固定!!!　掌握!」

発動した奈落の業火を放出せずに固定し、それを体内に取り込んだ瞬間、ラカンの着ていた服が消し飛び、身体が黒く染まって黒い炎を纏った。

「ぬっぐうううううっ・・・・・これが、闇の魔法だ・・・・・・適正の、無いヤツには、危険な技法、だが・・・おめぇには、ピッタリ、かもな・・・・・・たわらばっ!!!!!!!」

ラカンが大爆発した。まあ死なないだろうから放置してアリスは今見た闇の魔法を思い返す。見た感じ、魔法を取り込む事で肉体を一時的に精霊化する技法。だが、闇と名が付く以上、必要な資質も出てくるのだろう。

「いきなり上級魔法を取り込むのは危険かな・・・・・ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　闇夜切り裂く　一条の光　我が手に宿りて　敵を喰らえ　白き雷!　術式固定!!　掌握!!」

固定した白き雷を握り、体内に取り込んだ。すると、特に変な衝動は無かったが、確かに肉体は大幅に強化されているのが解った。

「でもこれ・・・使い続けるのは危険だな」

今は妙な衝動は無いが、これは何度も使っていれば人間を止める

事になりそうだ。流石は真祖の吸血鬼が編み出した技法だと感心するが、これではアリスの求めていた物にはなりえない。

「あ、でも・・・・・もし魔法を取り込むのが自分の肉体ではなくて無機物だったら？　たとえば剣とか杖とか・・・」

闇の魔法を解除してアリスは今考え付いた事を只管纏め上げていく。理論上は問題無さそうなので、後は実験をするだけだ。

「よし、適当な剣とか槍とか杖とか、色々買って試してみよう」

そのままアリスはプカプカと水に浮かんで動かないラカンを放置して街の方に向かって走り去ってしまった。

アリスが腕一杯に剣や槍、杖などの武器を持って帰ってきた時にはラカンは無傷でピンピンしていて、放置したアリスに文句を言ってきたが、無視して自分の考えをラカンに伝える。

「ほう、おもしれー事考えやがったな。っつーかあの後試して、しかも適正まであったのか」

ラカンが言うには、闇の魔法の適正は、心に闇を持っているかいないかで決まるという事。心に闇を持っている者に、闇の魔法は適正を示すのだ。

「つまりアリス、てめーは心に闇を持ってるって事だ。あるんだろう？　心の闇になり得るような大きな憎しみや悲しみといった感情が」

「・・・・・・（ああ、これがそうか）」

ラカンの問いには答えなかったが、アリスは自身の心に潜む大き

な憎しみを自覚した。それはメガロメセンブリア元老院に対する大きすぎる憎悪、憎しみの感情が確かに存在する。

「確かに、心の闇はあるよ・・・・・・」
「そうか・・・・・まあ、それが何なのか予想はできるから聞かねぇけどな」
「予想できるって・・・ラカンみたいな馬鹿にそんな芸当が出来たの？」
「んだとてめー！！　つか、馬鹿だとぅ！！？」

ギャーギャー煩いラカンを無視してアリスは早速外に出て実験を開始した。だが、そう簡単に出来る筈も無く、試した端から武器や杖が内側から崩壊していく。いくつか成功したかと思ったが、上位の魔法を取り込んだ途端にやはり崩壊してしまい、結局は失敗に終わってしまうのだ。

「むぅ・・・・・理論通り、確かに取り込めるけど・・・武器が取り込んだ途端に崩壊してはね」

結局、半年以上悩み続けて、それでもまだ完成しなかった。だが、様子を見ていたラカンがふと何かを思ったのか実験用の剣を手にとって数回振り回すと直ぐに地面に刺してあからさまにアリスを馬鹿にしたかのような表情をする。

「何？　馬鹿に馬鹿を見るような目で見られるのは不快なんだけど」
「一々てめーは一言多いな！！　いいか？　てめーが実験に使ってる剣も槍も、杖も全部！　鈍らじゃねぇかよ！！　こんなのに魔法を取り込んでも無駄だっつーの！！」
「でも、良い剣や杖は高いし」
「持ってるだろうが、一本だけ世界最高級にして世界最高の剣を」

ラカンが指差したのはアリスの影、どうやら中に入っている“姫”の事を言っているらしいが、アリスにはそれは出来ない相談だ。

「やだよ。これは母さんから貰った大切な剣なんだから、もし壊れたら如何するのさ」

「あのな、アリカの剣・・・“姫”はウェスペルタティア王国の王族が先祖代々受け継いできた由緒ある剣だ。歴史も古く、さらに王族の宝剣と言うだけあって強度は世界でも最高位の剣だ。ナギの杖より強度は遥かに高いんだぜ？　そこらの剣とは比べ物にならねえよ」

それだけ言ってラカンは隠れ家に戻った。残ったアリスは暫く悩んで漸く“姫”を取り出すと、母を思い出して、その気高さが“姫”にも宿っているのを確かに見た。

「・・・・・ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　契約に従い　我に従え　雷の帝王　来たれ　殲滅の雷　轟く轟雷　奔れよ　大地を焼きし　塵と雷雲　罪人達に　裁きの雷を　轟く雷帝」

詠唱を終えて術式を固定した。そして緊張で手が震えてしまうのも構わず、固定した轟く雷帝を意を決して“姫”に取り込む。

「・・・・・で、きた」

アリスの目には確かに、激しい轟雷を纏って放電する“姫”が映っていた。

「上位古代語魔法を取り込んでも問題無し・・・・・成功だ！！」

こうして、後のアリスの固有技法・術式武装が完成したのだった。
術式武装を完成させてからは足りなかった何かを埋める事が出来、魔法剣士として更に成長したアリスが最強クラスに名を列ねるようになったのは、言うまでも無い。

語り終えたアリスはシルヴィアと共にネギと離れてしまったので急いで追い掛けて行ってしまった。残ったエヴァンジェリンは後ろに控えた茶々丸に買った物を渡して一人、考え込んでいる。

「（アリスの心の闇はメガロメセンブリア元老院への憎悪だろう・・・・しかし、適正があっても危険性が消える訳ではない。それに直ぐ気付いて応用を見つけるその頭の回転の速さ・・・坊や並の天才か）」

だが、アリスは“姫”を持っていたから出来た事。持っていなければ今頃、最強クラスにアリスの名は無かったかもしれない。そう考えると・・・・・。

「運も味方に付けた本当に最強となるべき男か」

何にしても、エヴァンジェリンにとって、アリスのこれからが本当に楽しみでならなかった。

外伝1　「術式武装への道」（後書き）

ちょっと構成が甘いかなぁ

二十七話　「水の巫女、癒しの巫女」（前書き）

インターネットが使えない日々が辛いのなんの……。

二十七話　「水の巫女、癒しの巫女」

エヴァンジェリンの別荘であるダイオラマ魔法球の中に入って外で5時間、中では5日が経った。

アキラは初日からずっと初心者用の杖で火を灯す練習をしているが、3日目に一瞬だけ杖の先端が光る様になっただけで、一向に進展の兆しを見せなかった。だが、確かにアキラは変化しつつあるのはアリスもエヴァンジェリンも気付いている。

「大河内アキラ・・・成功はしていないが、確実に魔力を感じつつあるな」

「うん、後はそれに本人が気付けば直ぐに次の段階に進めるけど」

それに気付ければ火を灯すのは容易いだろうし、次の段階に入れば伸びるのも早い。

「しかし、驚いたな・・・・・・アキラの魔力量には」

「む？　ああ、魔法を教え始めて漸く表に出てきたから解ったが、あの魔力は一般的な魔法使いの平均を大きく超えている」

そう・・・アキラに魔法を教え始めて初めて気が付いたのだが、アキラの潜在魔力はアリスやエヴァンジェリン、ネギには劣るものの、一般の魔法使いを大きく超えており、シルヴィアより少し下というレベルなのだ。

「面白い・・・・・アリス、大河内アキラに氷系の魔法を教える時は呼べ！　私が直々に氷系魔法を教えてやる」
「以外だね・・・闇の福音がそんな事を言い出すなんて」
「いや何、貴様の夢の為でもあるが・・・・・何より、あの女が力をつけた時、貴様の隣でどれほどの活躍をするのかが楽しみなだけだ」

　氷系はシルヴィアが教える事になり、氷系はエヴァンジェリンが教える。そして魔法使いとしての基礎の全てはアリスが叩き込むから、アキラは間違いなく強くなる。最強クラスの３人が教えるのだから、アキラもまた、その域に上り詰める事は容易に想像できる。

　更に別荘内で一日が経った。この日、アリスは一旦外に出て世界樹前広場で木乃香と待ち合わせている。

「アリスさ～ん、来たえ～」

　少しして木乃香が小走りでやって来た。まだ着替えてなかったのか制服姿のままだが、特に支障は無いので早速話をする事にした。

「アリスさんがウチを呼んだゆーことは魔法の事なん？」
「そう、詠春さんからは木乃香ちゃんに裏の事は話しても良いって許可が降りたし、私と仮契約したんだから私から話すべきだと思ったからね」

　木乃香を連れて再びエヴァンジェリンの家に歩き出す。途中で木乃香のパクティオーカードを確認したが、彼女らしいアーティファクトだった。“東風ノ檜扇”と“南風ノ末廣”という東洋系治癒用アーティファクト。病気以外なら怪我してから３分以内であれば、

たとえ瀕死の重症であろうと完全治癒してしまうハイパーピース中位のアーティファクトだ。

「さ、着いたよ」
「ここ、何処なん？」
「エヴァンジェリンの家」

到着したエヴァンジェリンの家の地下に下り、ダイオラマ魔法球に入ると木乃香が魔法としてのスケールの大きさに呆気にとられている。アキラを連れて来たときの彼女と同じ反応だ。

「凄いなぁ～、これも魔法なんやね」
「そうだよ。此処で木乃香ちゃんに魔法を教える事になる」

塔を下りて砂浜に行くとアキラがエヴァンジェリンとシルヴィアから色々と教えられている最中だった。

「あ、アキラちゃんや」
「あ、うん・・・・・事故で彼女とも仮契約してしまってね。アキラにも魔法を教えているんだ」
「・・・そうなんや」

少し声の質が落ちた気がしたが、気のせいだと思い、直ぐにアリスはアキラにも使用した水晶を木乃香に渡した。

「これ何なん？」
「これで木乃香ちゃんに最も合う属性を調べるんだ」

木乃香に渡した水晶が緑色の光を放って輝き出した。これは光の属性と治癒の属性に適正があるという事。

「ほう、近衛木乃香は光と治癒か・・・まあ、らしいと言えばらしいか」

いつの間にかエヴァンジェリンとアキラ、シルヴィアが近くに来ていたらしく、特にアキラは木乃香が此処にいる事に驚いていた。

「何で木乃香が此処に？」

「ウチもアリスさんと仮契約してん。それにウチのお父様が元々裏に関わってたんやえ」

アキラは木乃香がアリスと仮契約したと言う事に驚き、少しだけ落ち込んでしまったみたいだが、アリスだけが気付かなかった。

それは兎も角、アキラはアリスが居ない間にやっと火を灯す事が出来るようになったらしく、エヴァンジェリンとシルヴィアに次の段階の説明を受けていたらしい。

「とりあえず大河内アキラは火を灯せる様になったのだから、後は貴様が教えてやれ」

それだけ言ってエヴァンジェリンはテラスに戻ってしまった。取り合えずアリスは木乃香に予備として小さい頃に買った初心者用の杖を木乃香に渡すとアキラにも見せたように火を灯す魔法を実演してそれを繰り返しやらせる事に、アキラには次の段階である風を起こす魔法を教える事になった。

「アキラに教える次の段階、風を起こす魔法ね。プラクテ・ビギ・ナル　風よ！」

瞬間、アリスの魔力を源に生み出された風がデッキチェアーに寝

そべっていたエヴァンジェリンの髪を大きく巻き上げ、そのままクシャクシャにしてしまった。

「な、なあああああああああああっ！？」

突然の事で驚いているエヴァンジェリンを無視してアリスはアキラにやってみる様に言うが、その際に首を少しずらして背後から飛んできた氷の矢をかわした。

「危ないぞキティ」

「き、貴様あああああ！　髪が滅茶苦茶になっただろうが！！　それとその名で呼ぶなぁあああああ！！！」

次々と飛んでくる魔法の射手を同数の魔法の射手で打ち落としながらアリスはアルビレオ・イマを思い起こさせる笑みを浮かべていた。

「いやいや、丁度良い所に実験台が居たから・・・つい」

「つい、じゃなあああああい！！　そこに直れ！！」

ついには断罪の剣を使ってきたが、瞬時に抜いた“姫”を地獄の焔姫にして迎え撃った。

「この！　このぉ！！」

「ＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡＨＡ」

「ムカつくからその笑い方をやめろ！！」

怒り心頭のエヴァンジェリンと嗤っているアリスが断罪の剣と“姫”をぶつけ合うたびに衝撃波が生まれているのだが、シルヴィアが瞬時に張った結界でアキラも木乃香も被害は無し。ただ、魔法使

いとしてのスケールの大きな戦いにアキラも木乃香もやや緊張していた。いつか、自分達もアレくらい出来る様になるのか、と・・・・・。

「さて、エヴァンジェリンの事は置いといて、的を用意したからそれに目掛けて風を起こしてみて」

漸く落ち着いたエヴァンジェリンはデッキチェアーで不貞寝する事にしたのか、早々に眠りに就いてしまい。残ったアリスとシルヴィアはアキラと木乃香にレクチャーをする事になった。

「じゃあシルヴィア、アキラの方をお願い。私は木乃香ちゃんの方を見てるから」

「畏まりました」

早速風を起こす魔法の練習に取り掛かったアキラの方にシルヴィアが付き、火を灯す魔法に取り掛かった木乃香にはアリスが付く。早速教えた呪文を唱えてみた木乃香だが、流石にいきなり成功するはずも無く、杖の先端に火花が散る程度の事しか出来なかった。

「うん、既に魔力に目覚めて、その感覚も無意識に掴み始めている木乃香ちゃんなら最初はこんなものか」

「あや～、やっぱ難しいなぁ」

ぼやきつつも何度か繰り返していくと、ドンドン出てくる火花が大きくなり、一瞬だが発火するようにもなった。

「なんという成長スピード・・・・・アキラ涙目だな」

一日でここまで出来る様になった木乃香の才能に驚きだ。

この日の練習は此処までにして一向はレーベンシュルト城の中の食堂で夕飯にする事にした。食事は基本的に城の中に配備している茶々丸の姉妹機が用意してくれるので、誰かが作るという事も無く、豪華なディナーとなった。

「わぁ～、すごい豪華やなぁ～」

別荘内で食事をするのは初めての木乃香は出された食事の豪華さに驚いている。アキラも初日はあまりの豪華さに萎縮してしまった位だ。

「シルヴィア、アキラの方は如何？」

「はい、最初こそコントロールが上手くいかず、風が的から逸れてばかりでしたけど、最後の方になるとコントロールの仕方も掴んできたのか１０回に３度は的を倒せる様になりましたよ」

そう、風を起こす魔法は初心者にとって魔力をコントロールする為の練習なのだ。

最初に火を灯す事で魔力の扱い方を覚え、次に風で的を倒す事で魔力と魔法のコントロールを身につける。

「なら明日辺りから魔法の射手と同時に初級魔法に入っても良いかもしれないね」

「ほ、本当ですか？」

初級魔法を教えてもらえる。それを聞いてアキラが身を乗り出してきた。余程嬉しいのだろう、その後も食事進める表情は笑顔だ。

「水系と氷系の初級魔法と言えば・・・・・・ああ、蒼き水と冷えし氷か」

エヴァンジェリンが二つの属性の初級魔法で何があったか思い出して名前を口にした。

「しかし、早過ぎないか？　あの二つは中級への足掛かりとなる魔法だ。魔法の射手と同時に教えるというのは・・・・・」

「それくらいやらないと強くなるなんて無理、魔法学校でやっているスピードで教える気はないから」

むしろそれでは遅すぎる。アリスも一度魔法世界と旧世界、両方の魔法学校を見学した事があるが、その教え方が余りにも遅すぎて、見ていてイライラしたほどだ。

「勿論、前半で基礎を徹底的に反復させてから、後半で教えるし、問題無いと思うよ。私とシルヴィアが教える以上、生半可な教え方はしない」

基礎が出来ているなら直ぐに次へ進む。それが今の状況では一番適切だろうし、アリスと仮契約してしまった以上、のんびりやっている時間が惜しい。

「少なくとも、外での一週間以内には上位古代語魔法を習得してもらう心算だから」

「ちょっと待て！！　いくらなんでも無茶だ！　二人を壊す気か！？」

「壊さない程度に扱く、それが私のやり方だから」

エヴァンジェリンは仮にネギが自分に弟子入りしたとして、此処まで無謀な育て方はしないつもりでいたが、アリスはそれを平然とやってのけると言った。

流石に哀れに思ったのかエヴァンジェリンはアキラと木乃香に同情の眼差しを向け、当の二人は若干顔色が悪くなっていた。

翌朝、木乃香にはシルヴィアが付き、アキラにはアリスが付いた。早速、アキラに風を起こす魔法を見せてもらったが、精度はそれなりに良くなっており、始めてから3時間もすればコントロールも完璧になっていた。

「うん、アキラは飲み込みが早い。成長速度もかなり速いから教え甲斐があるよ」

褒められて若干照れたアキラだが、気を取り直して次に移った。

「次はこれ・・・・・・プラ・クテ・ビギナル　光よ！」

指輪から光が発せられ、眩く輝いた。所謂目晦ましの様な魔法だ。

「これは魔力の最大放出量を高める為の魔法だから、込められるだけの魔力を込めてやってみて」

「はい！　プラ・クテ・ビギナル！　光よ!!」

アキラの杖から放たれた光は眩いと言うには少し足りない。まだまだ魔力の最大放出量が少ないのだろう。

「まあ、最初はこんなものか・・・・・・これを何度もやって、ドンドン放出量を増やしていこう」

それだけなら1～2時間もあればそれなりに放出量が増えている筈だ。

アリスの予想通り、3時間もしたらアキラの魔力の最大放出量は

大幅に増えていた。３時間で数えるのも億劫になるほど繰り返せばそれ位は当然だが、魔力の消費が激しく、アキラは荒い息を吐いている。

「後で魔力回復用の薬を飲んで貰うから、今は休憩ね。後半に入ったら他の基礎と魔法の射手を教えるから」

最後には初級魔法を教える段階まで行けるだろうと予想し、アリスはシルヴィアの指導の下、練習をしているであろう木乃香に目を向けると丁度光を発する魔法をやっていた。

「早いな、もうコントロールを身に着けたんだ」

本当に木乃香の才能には脱帽する。

確かに早く成長させようとしたのはアリスだが、木乃香にしても、そしてアキラも、アリスの予想より早く成長していた。

「面白い・・・・・もしかしたら、良い戦力になるかもしれないね」

二十七話　「水の巫女、癒しの巫女」（後書き）

やっとネットが使える……。

二十八話　「福音の弟子」（前書き）

朝倉へのお仕置きの結果と、カモへのお仕置きは暫くお待ち下さい。

二十八話　「福音の弟子」

英雄と女王の子

二十八話

「福音の弟子」

ダイオラマ魔法球でアキラと木乃香の修行が始まってから外で数日が経とうとしていた。

この数日間でアキラも木乃香も随分と成長し、木乃香は治癒系魔法の上位と光系攻撃魔法の中位までを修め、アキラは水系と氷系の下位古代語魔法まで進んでいた。

修行していくにつれてアキラと木乃香の戦闘タイプも決定し、アキラは魔法剣士として戦えるが、魔法使いとして戦うのをメインとした後衛寄りのオールラウンダーとして、木乃香は後方支援を重視した魔法使いタイプとしての修行も開始した。

「ネイ・ネル・プート・ネプチューン！　来たれ水精　大地を覆え　青き星の　生命の故郷を　のみこむ津波！！」

「ルム・リル・リック・リプシオール！　来たれ光精　炎の精　灼熱より出でて　輝け　天の光　太陽の輝き！！」

アキラが発生させた大津波をかわし、木乃香が放った灼熱の光もかわしたアリスは両手に持った剣、“姫”と“きしのあかし”をそれぞれに向けた。

「二重詠唱、ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　来たれ　虚構の雷　薙ぎ払え　雷の斧！！」

両方の剣を振るって放たれた雷の斧がアキラと木乃香の前に落ちた。それに怯んだ二人を囲む様に展開された闇の矢と雷の矢が、アリスの勝利を告げている。

「うん、魔法の方も大分良くなってきたし、そろそろアーティファクトの扱いに入ってもいいかな」

今までは魔法にのみ力を注いでいたので、アーティファクトに関しては一切手を付けていない。だが、そろそろアーティファクトの扱いに入っても良い頃だと判断したアリスはこの後の修行スケジュールを考案していた。

「アリス先生」
「アリスさん」
「ああ、二人とも・・・新しい魔法発動体との相性も良いみたいだね」

アキラの右手薬指にはサファイアの付いた蒼い指輪が填められており、木乃香はエメラルドを付けた瑠璃色の指輪を同じ指に填めている。これは二人が起動キーを開発して直ぐにアリスがプレゼントした発動体が壊れてしまった為にエヴァンジェリンと共に作った新しい発動体だ。

「強度は私の指輪やピアスと同じだから、壊れる事は無い筈。その新しい発動体とアーティファクトで、これから更に強くなってもらうよ」

今でも既にネギよりも強くなってしまった二人だが、アリスがそれで満足する筈も無く、これから更に過酷な修行が二人を待っているのだった。

アキラと木乃香のアーティファクトを使った修行が始まった日、朝からエヴァンジェリンが別荘にネギと明日菜、刹那とのどか、そして古菲と何故か夕映を連れて来た。どうやらネギはエヴァンジェリンに無事弟子入りしたらしい。

「アリス先生!?　それにアキラちゃんとこのかまで・・・・・・何で此処にいるの!?」

「何でって・・・私の従者になったアキラと木乃香ちゃんを鍛える為に決まっているでしょ」

明日菜もアキラと木乃香がアリスの従者になった事は知っている。だが、ネギを弟子入りさせずに二人を弟子入りさせた事に不満を持っているみたいだ。

「それよりネギ、何故ここに綾瀬さんが?」

「そ、それは・・・・・・」

大方、自力で魔法の事に辿り着いた夕映に強引に迫られて断れなかったと言った所だろう。相変わらず甘いが、この事に関してはネギの責任なのでアリスは関知する気は無い。朝倉の様に魔法の事を公表しようとした愚か者なら話は別だが。それと、これ以上ネギの事で頭を悩ませるのが馬鹿らしくなってきたのもある。

「まあ、全責任をネギが負うのなら好きにすれば良い。私は二人の修行を見なければならないから、勝手にやれ」

後はエヴァンジェリンに任せてアリスはシルヴィア監督の下でアーティファクトの扱い方を練習している二人の方に向かった。

アリスが木乃香たちの方に行ったのを見届けたエヴァンジェリンは早速ネギにパクティオーカードのマスターを用意させ、明日菜、のどか、刹那を横一列に並ばせる。

「よし、では始めろ。刹那、気は抑えておけ・・・相応の練習が無ければ魔力と気は相反するだけだ」

刹那が気を抑えたのを確認してネギは杖とカード三枚を構え、魔力を放出した。

「契約執行１８０秒間！　ネギの従者、宮崎のどか、神楽坂明日菜、桜咲刹那」

ネギの従者三人にネギの魔力が供給されたのを確認し、エヴァンジェリンは次の指示を出す。

「よし次だ。対物・魔法障壁全方位全力展開！」

「ハイ！」

肉眼では確認できないが、今ネギの周りには対物用の魔法障壁が展開されている。これでネギには物理攻撃が効かなくなる。

「次！　対魔・魔法障壁全力展開！！」

「ハイ！」

「そのまま三分持ちこたえた後、北の空へ魔法の射手２９９本！種類は任せる、別荘内の結界はかなり強固に出来てるから遠慮せずやれ！」

「うぐっ・・・は、ハイ！！」

三分後、全力で放たれた光の矢２９９本が空に輝くが、限界を超えたネギがフラフラになって倒れてしまった。

「フン、この程度で気絶とは話にもならんわ！！　いくら奴隷りの強大な魔力があったとしても、使いこなせなければ宝の持ち腐れだ！！」

「よーよーエヴァンジェリンさんよぉ。そりゃ言い過ぎだろ、兄貴は１０歳だぜ？　三人同時契約三分＋魔法の矢２９９本なんて、修学旅行の戦い以上の魔力消費じゃねぇか。気絶するのも当然だぜ。並の術者ならこれで十分・・・・・・」

「黙れ下等生物が・・・並の魔法使い？　その程度でこの私が満足できるか！　・・・・・・煮て食うぞ？」

ガタガタ震えるカモミールを無視してネギを叩き起こしたエヴァンジェリンは丁度一休みしていたアリス達を呼んだ。

「何？」

「丁度良い、アリス・・・貴様に手本を見せてもらおう」

訳も分からずアリスは“姫”を片手にシルヴィアとアキラ、木乃香のカードを構えた。

「何で私がこんな事・・・・・・」

「良いからやってみろ」

「・・・・・契約執行３６０秒間、アリスの従者、シルヴィア・オーギス、大河内アキラ、近衛木乃香」

更に全方位に対物・対魔・魔法障壁を全力で展開したアリスは６分経って北の空に“姫”を向ける。ただ、全力を出してはいるが、その表情はやる気がなさそうだ。

「闇の精霊２９９９９柱　集い来たりて　敵を射て」

放たれた闇の矢、２９９９９本が空で弾けた。その後もアリスは相変わらずやる気が無さそうな顔をしているが、特に倒れる事も無く、フラフラしている様子も無い。

「見ろ、ぼーやと同じ数の従者にぼーやの倍の6分の魔力供給をして、障壁も同じように全力で展開後、魔法の射手２９９９９本、その後もまったくフラフラしていないし倒れもしない。ぼーやとアリス、兄弟でここまでの差が出ている。魔力量はアリスの方が大きいが、それでも魔力消費は坊やの比じゃない・・・・・ぼーやがどれだけ鍛え方が足りないのか解ったか？」

最早言葉も無い。アリスの凄さは修学旅行の戦いの時に知ったが、ネギとの力量差がこれ程大きいとは思わなかった。何故兄弟でここまでの差が出るのか、ネギには理解出来なかった。

「アリスとぼーやの実力差が大きい理由など簡単だ。ぼーやはまだ魔法学校を卒業したばかりで、アリスは今のぼーやより幼い頃から実戦に出て、戦いの中で己の力を鍛え上げてきた本当の戦士だ。弱ければ死ぬ、そんな戦いを繰り返してきたアリスと、ぼーやの力量差が大きいのは当然だ」

確かにネギは並の魔法使いと比べればそれなりに強い方になるのだろう。だが、それは並の魔法使いと比べての話だ。アリス達の領域にいる者からすればまだまだ未熟な弱者だ。

「理解できたか？　まあ、出来なくとも構わんがな・・・・・兎に角、いいか？　今後、私の前でどんな口答えも許さん。少しでも

弱音を吐こうものなら貴様の生き血、最後の一滴まで飲み干してやる。心しておけよ」

こうして、ネギの最初の修行は終わりを告げた。

父の後を追うため、闇の福音に弟子入りしたネギ。だが、たとえ力を付けたとしても、この先の道は確実に茨の道、ネギを襲う危険は変わらない。それどころか更に大きくなるだろう。

そして、ネギにとって最も強大な障害が存在する事など、まだ知る由も無かった。

二十八話　「福音の弟子」（後書き）

次か、その次辺りでヘルマン編かな…。

二十九話　「ネギの原初、闇を知る」（前書き）

この話でネギの甘さが浮き彫りになるかもですね。

二十九話　「ネギの原初、闇を知る」

二十九話
「ネギの原初、闇を知る」

エヴァンジェリンの別荘、その中では現在エヴァンジェリンとネギの模擬戦が行われていた。ネギ一人対エヴァンジェリン＋従者二人の模擬戦、まだまだネギの実力では互角に戦うのは不可能、殆ど防戦一方になっている。

その模擬戦を見ながらアリスはアキラと木乃香に身体強化の魔法を教えていた。今まで二人が使っていたのは戦いの歌だが、今教えているのはアリスが好んで使う戦いの葬送曲という戦いの歌の上位魔法だ。

「戦いの歌と戦いの葬送曲の大まかな違いは理解した？　戦いの歌は基本的に自身の肉体に魔力を供給して身体能力の上昇をする魔法だけど、戦いの葬送曲は自身の魔力を肉体だけでなく精神にまで流して身体強化、戦闘意識等の戦いに必要とされる全ての要素を爆発的に上昇させる身体強化系最大の魔法だ」

勿論、弊害も存在する。戦いの葬送曲は一日に使える回数が一回という制限があり、それを超えてしまえば肉体に何らかの障害を齎すか、精神に重大なダメージを負ってしまう。最悪廃人になってしまう危険性も兼ねそろえているのだ。

「だから、使用には十分な注意が必要だ。気をつけて使うように」
「「はい！」」

戦いの葬送曲はアリスは勿論、シルヴィアも好んで使っているので、二代目・紅き翼では当たり前の魔法となっている。この二人にも教えるのは当然だ。

ネギ達の方を見ると、丁度エヴァンジェリンの使った雷の斧でネギがノックアウトされていたので、どうやら終わりらしい。

周りでも明日菜と刹那の剣の訓練も丁度終わっていたのでアリス達も引き上げる事になった。

「さて、食事の用意でもしようか」

外では月詠がアリスの代わりに色々と仕事をしてくれているので、こういう時は助かる。

気が付けば空も日が暮れているので直ぐに夕飯になった。相変わらず豪勢な食事とエヴァンジェリンとシルヴィアの二人にはワインが、未成年組には別荘で採った果物で作ったジュースが振舞われている。

ただ、その夕飯の席で修行の見学に来ていた古菲、綾瀬夕映、宮崎のどか、それと何とか復活した朝倉和美（ただし、未だにアリスの顔をみると顔を真っ青にしてガタガタ震えて泣き出すが）の内、夕映がのどかを連れてエヴァンジェリンとアリス、シルヴィアに話しかけてきた。

「魔法を教えてほしいです」

「・・・・・はあ？」

突然、何を言い出すのかと思えば、随分と馬鹿な事を。と、図らずしも三人は同時に思った。

「理由を話してみて」

「は、はいです。私は修学旅行で偶然にも魔法という世界を目にした訳ですが、それを見て私は思ったのです。この世には私の知らない危険と冒険、ファンタジーに埋め尽くされた世界が存在するのだと。私は、その世界に足を踏み入れたいと思ったです」

エヴァンジェリンとシルヴィアしか気が付かなかったが、この瞬間、アリスの頭に青筋が浮かんだ。確実に怒っているのだろう。

「断る」

「な、何故ですか！？　アキラさんとこのかには教えているのに！」

「あの二人は私の従者だから教えている。綾瀬は私の従者と言う訳ではない、教える義理も義務も存在しないし・・・何より、その理由が気に入らない」

話を聞いていた木乃香とアキラがあちゃーっというような仕草をして頭を抱えていた。二人も気付いたのだろう、アリスの怒気に。

「何故ですか！？　危険と冒険に溢れるファンタジーな世界に足を踏み入れる覚悟ならあるです！　それの何が気に入らないですか！？」

それが限界だった。アリスが無詠唱で展開した雷の矢が夕映の周りに浮かび、いつでもその命を奪えると言う事を示していた。

「兄さん！！」

「黙ってろネギ、朝倉といい、綾瀬といい・・・・・・最近のガキはこれだから」

流石に“姫”を抜いたりはしなかったが、アリスの指輪とピアスが不気味に輝いているのは、気のせいだと思いたいアキラと木乃香

だった。

「私達が命を掛けて生きる世界を、そんな幼稚な言葉で理解した風に語るなよ小娘。私もシルヴィアも、エヴァンジェリンも、こちらの世界でどれだけ危険な思いをしてきたか・・・死ぬかもしれない、死んだ方がマシだと思ってしまうような現実を叩きつけられるこの世界を、歩む覚悟があると、言うつもりか？」

「そ、それは・・・・・・」

アリスは父と母の事で命を狙われている立場だし、シルヴィアは過去、アリスと出会うまでは辛く、苦しい生活をしてきた。その中には命の危険すら感じる事もあっただろう。

エヴァンジェリンにしても、吸血鬼になった当時は魔女狩りの時代で、多くの人間に狙われ、死ねない身体であるが故に、死んだ方がマシだと思う事が多々あった。

「命の危険が無く、常に平和なこの世界を生きるお前達が、どれだけ幸せか・・・理解しているのか？　お前は今、その幸せな世界を捨てて血塗れの地獄としか言えない世界に足を踏み入れると、そう言ったんだ」

「な、なら！　このかとアキラさんはどうなんです！？」

「木乃香ちゃんは、生まれが生まれだから、いつかは自身の意思とは関係なく裏に関わる事になっていただろうね。アキラに関しては、カモミールと朝倉が馬鹿をやらかして巻き込んでしまった」

最も、アキラも既に覚悟は出来ている。アリスとシルヴィア、エヴァンジェリンと月詠という、裏の世界でも最も辛く苦しい現実を理解している四人が懇切丁寧に説明して、アリスとエヴァンジェリンの幻想空間を使っての裏の現実を見せられて、覚悟を固めている。

「ゆえ、ウチ等が生きとる世界を、甘く見たらあかんえ」
「何も知らないで覚悟を決めたと言っても・・・意味が無い世界なんだ」

木乃香とアキラもアリスの意見に賛成する。二人からしても、夕映の言っている事が余りにも戯言としか聞こえなかったからだ。
裏を知る事の恐怖、裏に関わるという覚悟、それは何も知らない人間が簡単に口にして良いものではない。

「まあ、そんなに死にたいのならネギにでも教えてもらえ。私はネギに関する事なら一切関与しないから」

夕映がアリスに魔法を教わると言うのなら容赦しないが、ネギに教えを請うのならアリスは一切無関係、どこで死のうが関係無い。

「・・・・・わかったです。ネギ先生に教えてもらうです」

納得していない。そう顔に書かれているが、ネギの方に行った夕映に構う事はない。アリスは十分に食事を楽しむことにした。

夕食が終わり、アリスとシルヴィア、エヴァンジェリンは部屋に戻り、ビーチではネギが夕映、のどか、和美、古菲がネギに魔法を教えてもらっていた。
今日の訓練が終わった木乃香とアキラはそれを遠巻きに眺めて、ネギのあまりの迂闊さに少し頭を抱えている。

「ネギくん、ホンマに教えてまうやなんて・・・・・・」
「な、何ていうか、魔法使いの学校って・・・秘匿について何も教えないのかな？」

ネギに見本としてアキラと木乃香もやった火を灯す魔法を見せてもらい、初心者用の杖で実際に火を灯そうとしているクラスメートにも呆れてしまう。もっとも、やはり初心者はいきなり成功する筈も無く、誰一人として火を灯す事は無い。

「あ、お嬢様」
「せっちゃん！　せっちゃんはあれ、やらへんの？」
「いえ、私は出来ますから・・・」

木乃香とアキラの後ろから明日菜と刹那が歩いてきた。丁度二人も様子を見に来た所なのだろう。

「せっちゃんも出来るって・・・ああ、アリスさんが言うてた気をつこうた術やな」
「ええ・・・・・・・i（ラン）」

刹那が実際に指先に火を灯して見せて隣の明日菜が感心している。四人の様子が見えたのかネギ達もやって来て、皆でやろうと言う事になり、木乃香とアキラは出来るのかと言う話になるが。

「ウチとアキラちゃんはアリスさんに教えてもらっとるんよ？」
「出来ない筈ない」

実際、木乃香とアキラは指輪型の発動体の上に火を灯して見せた。

「ウチらはもう実戦レベルまで教えてもらっとる。アリスさんからはいつでも実戦に出ても問題ない言われてんよ」
「今度、アリスさんとシルヴィアさんの仕事に付き合う事になってるから」

夕映たち初心者とはもうレベルの差が大きく違う。そしてネギは気が付かなかったが、アリスとシルヴィアの仕事とはエヴァンジェリンと茶々丸、刹那も参加している警備員の仕事だ。当然、それなりの実力と非情さが必要となる仕事であるため、ネギでは実力的にまだまだ参加するのは早いと学園長は判断している。

しかし、その仕事に木乃香とアキラが参加すると言う事は二人の実力は既にネギを超えていると言う事だ。果たして、ネギはその事実に気が付くのかどうか・・・・・・。

夜、アリスはシルヴィアと過ごす予定だったのだが、外に人の気配を感じたので二人で出てみるとネギと明日菜が何かを話しているのが見えた。同時に物陰から様子を伺っているのどかとエヴァンジェリン・・・というか別荘内に居る全員の姿も。

「エヴァンジェリン、何やってる?」

「む? 貴様か・・・何、ぼーやが面白い事をやるみたいだからな、宮崎のどかのアーティファクトで盗み見る事にしただけだ」

ネギは明日菜に自身の記憶を見せる為の意識シンクロ魔法を使うらしい。それをのどかのいどのえにっきで見ようという事だ。

「見せる記憶は・・・ネギの事だ・・・・・・あれかな」

それは、アリスも忘れられないウェールズの惨劇。父と母に大きな誓いを立てた夜であり、恐らくネギにとってはトラウマとも言えるし、アリスでも判るネギの闇の原初。

「私には恥ずかしい記憶になるな・・・あの頃はまだまだ未熟だった」

まだ術式武装も使えなかった頃の未熟な自分、それを見られるのは恥ずかしい。まさかこんなに早く、弟子に自身の未熟だった頃を見られるとは思いもしなかった。

「始まるぞ」

始まった。最初に見えたのはネギとネカネの会話、アーニャの言葉、サウザンドマスターの死。スタン老のナギへの罵倒とネギが自身へのピンチにナギが現れるという子供の妄想。

そこから始まったネギの愚かな行動の数々、高い木から飛び降りたり、犬にイタズラしたり、真冬の湖に飛び込んで溺れたり。

アリスはこの頃から仕事で旧世界と魔法世界を飛び回っていたので、滅多に帰って来ないから、どうしてもネカネがネギを叱るしかなくなる。時々アリスが帰ってきた時はアリスが叱るが、それでもネギは変わろうとしなかった。

そして、運命の日・・・・・ネギが一ヶ月ぶりに帰ってくるネカネを迎えに行こうとした時、幼いネギの視界に映った光景は、地獄だった。

燃え盛る炎に包まれた村、石化された村人達、そして・・・ネギの前に現れた悪魔が幼い命を奪おうとしたその時だった。

悪魔の巨大な腕を受け止めるナギ、その後ろから駆けつけたアリスは少し会話を交わし、同時に詠唱すると、二人の雷の暴風が悪魔の群れを消し去り、向こうの山の形まで変えてしまった。

だが、残っていた悪魔によってネカネの両足とスタンの全身が石化され、かろうじて悪魔は封印されたが、これで村の生き残りはネギとネカネ、アーニャとアリスのみになった瞬間だった。

最後に、ナギから杖を受け取ったネギ、別れを告げて去るナギと、“姫”を空に掲げて誓いを立てるアリス。これが、ネギの心に深く根付く闇になるのだった。

この事件以来、ネギは父にもう一度会いたい、あの村の事件は自

分の所為だと、それがネギの全てになり、いつしか立派な魔法使いになる事を夢見るようになった。いや・・・妄信するようになったと言った方が良いかも知れない。

記憶を見終わり、ネギに泣き付く面々を眺めながらアリスとシルヴィア、エヴァンジェリンと木乃香、アキラは先ほどのネギの記憶について考えを巡らせていた。

「なあ、アリスさん・・・石化された人たちは、もう元に戻らんの？」

「いや、永久石化とは言っても万能じゃない。高位の治癒魔法使いなら治せるよ」

もっとも、それは最強クラスの魔法使いと同レベルの治癒魔法使いでなければならないが。

「まあ、現状では不可能かな。今まで最強クラスの治癒魔法使いは確認されていないから」

シルヴィアは治癒魔法を使えるが、あくまでもメインは戦闘。治癒をメインにしている訳ではないので不可能。

だが、アリスは最近可能性を見つけたのだ。

「木乃香ちゃんが私達と同じ領域まで着たら、可能な事だ」

アリスも、その考えがあるから木乃香を鍛えているのだ。今は戦闘系を教えているが、この後の方向性は見えている。

「それにしても、ぼーやの記憶は見ていてイライラさせるな」

「ええ、私も同じです。あの程度で悲劇と言っているとは・・・・・

・」

エヴァンジェリンとシルヴィアはネギの甘さ、弱さ、自身を悲劇の主人公だと言わんばかりの記憶に機嫌が悪くなっている。

「あの程度で悲劇だと？　私はアレ以上の悲惨な地獄を魔女狩りの時代に経験しているわ！」

「私も、幼少時に経験しています。生きるか死ぬかの瀬戸際を・・・・・・オスティア難民でしたから」

エヴァンジェリンとシルヴィアにとって、ネギの過去はただの自虐に過ぎない。自身を悲劇の主人公にして、悲観している、自身の不幸に酔っているただの甘ちゃんだ。

「私は、まだ悲劇とか経験した事は無いけど・・・・・・ネギ君の記憶では誰も死んでないよね。確かに悲劇かもしれないけど、誰かが死ぬより、まだまともなんじゃないかな」

アキラの言うとおり、エヴァンジェリンもシルヴィアも目の前で死を見ている。しかし、ネギは別に死を見たわけではない。それでは本当の悲劇とは言えないのだ。

「だが、ネギにとっては悲劇さ・・・・・・あの事が切欠で生まれた心の闇は、いつかネギの甘さが原因となって牙を剥く。ネギ自身にも、そしてネギの周りの人物にも」

このまま行けば、ネギは破滅する。アリスの夢を壊す事にまでなれば、その時は容赦しない。

そして、ネギについて行くという彼女達は、その時どうするのか、それはその時になってみなければ判らないが、後悔したとしても遅

いだろう。

「そろそろ、ネギには試練が必要だ・・・・・・ネギが自身を変える為の、試練が」

二十九話　「ネギの原初、闇を知る」（後書き）

さて、次回は漸くカモミールとのＯＨＡＮＡＳＩタイム！　と、悪魔侵入編でございます。

三十話　「学園の甘さ、責任は誰が」（前書き）

サブタイトルあまり関係ない内容になってしまった……。

三十話　「学園の甘さ、責任は誰が」

英雄と女王の子

三十話

「学園の甘さ、責任は誰が」

早速だが、アリスはカモミールを握り締めて女子寮管理人室に居た。そこにはアリスだけでなく、シルヴィア、月詠、木乃香、アキラもそろっていて、カモミールが逃げ出せないように結界を張っている。

「だ、旦那!?　何をするおつもりで・・・・・」

「いや何、朝倉へのお仕置きは終わったからな・・・・・お前へのお仕置きをそろそろやろうかと、思っただけだ」

カモミールがムンクの叫びのような顔になる。が、それに構わずアリスは用意したオコジョ妖精用の奴隷首輪をカモミールに装着した。

「こ、これは!?」

「魔法界では有名だな、奴隷の首につける服従用の首輪」

何故こんな物をアリスが持っているのかは不明だが、カモミールは己が運命に絶望を感じる他無かった。この首輪をつけられたが最後、アリスに逆らう事は不可能なのだから。

「このオコジョ妖精用の奴隷首輪には特殊な能力があってね」

「と、特殊な能力っすか・・・・・？」

「そう、この首輪を着けたオコジョ妖精に対する魔法や気による攻撃は全て、肉体ダメージではなく精神ダメージに変換してくれるんだ。しかも精神崩壊をしないようにリミッターも備わっている」

完全にカモミールが青白くなってしまった。口からは魂が抜けかけて、これから訪れる地獄の予感に現実逃避しそうになっている。

「うえっ!?　あ、足が動かねぇ!!?　オレッチの影が抑えてる!!!?」

アリスは影を使った魔法も使える。カモミールの影を操ってカモミールの足を完全に拘束したのだ。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス」
「セイ・セイヴ・リオ・セイクリット」
「ネイ・ネル・プート・ネプチューン」
「ルム・リル・リック・リプシオール」
「神鳴流奥義」

カモミールの影が窓までカモミールを持ち上げた。窓は開けられているので放たれた魔法はそのままカモミールを貫通して外に行ってしまうから部屋に被害は出ない。

アリス、シルヴィア、アキラ、木乃香の始動キーと、小太刀を構えた月詠を見たカモミールの恐怖がＭＡＸになる。

「契約に従い　我に従え　炎の覇王　来たれ　浄化の炎　燃え盛る大剣　ほとばしれよ　ソドムを焼きし　火と硫黄　罪ありし者を死の塵に」
「契約に従い　我に従え　光の王　来たれ　正義の裁き下す　必滅の輝き　罪在りし者に　断罪の光を」

「契約に従い　我に従え　水の皇王　来たれ　始祖の大地を覆いし
原始の水　万物全てを飲み込み　流れろ　生命の源」
「契約に従い　我に従え　光の姫君　来たれ　常夜を照らす輝き
生きとし生ける者の　希望を司る　命の光を」
「にと～れんげき」

この瞬間、カモミールは今までの人生？　を振り返った。良いこと、嫌なこと、沢山あったなぁと思いながら、悔いの無いものだった。出来る事なら、もう少しネギの傍に居たかったと、そう思った。

「燃える天空！」
「贖罪の光！」
「始まりの海！」
「輝く世界！」
「ざ～んくう～せ～ん！」

この日、アリスの部屋から声ならぬ悲鳴と、爆弾でも爆発したのではという程の爆音が響いたが、学園長の根回しで事態は早々に終息したのだった。その際、学園長は一週間ほど眠れなかったのだが、大した問題にはならなかった。

この日は朝から雨と雷が酷い一日だった。いつものようにエヴァンジェリンの別荘に行っていたネギ達は雨の中寮に帰り、ネギと明日菜、刹那は自室へ、木乃香とアキラはシルヴィアと共にアリスの部屋へ行き、他のメンバーは大浴場に向かった。
アリスの部屋には部屋の主であるアリスと、既に来ていた月詠がおり、シルヴィアとアキラ、木乃香もやって来て修行の経過を話し合っていた。

「そろそろ月詠も参加させての修行に入ろうかと思う」

「ええよ～、ウチもお嬢様がどれほど成長したか見てみたいわ～」

月詠はアリス並の近接戦闘者だ。更には気に関して言うとこの中で一番の使い手、アキラと木乃香には良い勉強になる筈。

「「・・・っ！」」

その時だった、アリスとシルヴィアは妙な気配を感じたのは。確かに感じる悪魔の気配が二つ、この近くにいる。

「一つは伯爵級か・・・・・・」

「もう一つは・・・・・・凄いですね、侯爵クラスはありますよ」

公爵クラスは無いのが唯一の救いだろう。兎に角、侯爵と伯爵クラスの悪魔ならこのメンバーにとって脅威にはならない。

「木乃香ちゃんとアキラにとっては初の実戦になりそうだ。相手にとって不足はない」

二人の初の実戦相手としては十分だと判断したアリスは全員で悪魔の気配を感じた場所に向かった。その場所は学園祭で使うと聞かされていたステージ、その近くの建物の屋根に来たアリス達は呑気に傘を差してステージを見ていた。

「へえ、随分と人質がいる・・・・・・狙いはネギかな」

人質となっているのは明日菜、刹那、のどか、夕映、和美、古菲、那波千鶴だ。明日菜は鎖で繋がれて、刹那と千鶴はそれぞれ別々の水の檻の中に、後はまとめて一つの水の檻の中に捕らわれている。

「まあ、那波さんは巻き込まれただけみたいだけど」
「他の皆さんは安易に裏に関わったが故の末路ですね」
「センパイ、簡単に捕まるやなんて・・・がっかりやわ～」

飛び出そうとした木乃香とアキラを抑えた所でエヴァンジェリンと茶々丸、チャチャゼロが来た。どうやら彼女達も様子を見に来たのだろう。

「ほう、貴様らも来ていたか」
「こんばんはアリス先生、シルヴィアさん、このかさん、アキラさん、月詠さん」
「ケケケケケ、オモシロソウナコトニナッテンジャネーカ」
「ああ、人質はあそこにいる。敵は侯爵級悪魔と伯爵級悪魔の二体、それと使い魔のスライムが三体だ」

エヴァンジェリンはそっと人質を見て含み笑いを浮かべた。この状況を心底楽しんでいるというような態度だ。

「クク、まあ自業自得だな。安易にコチラの世界に足を踏み入れるからこうなるのだという良い見本だ」

そうこうしている内に、ネギが飛んできた。杖にはネギの他に、修学旅行の時に天ヶ崎千草の陣営にいた狗族のハーフである少年、犬神小太郎も乗っている。

「おろ？　小太郎はんやな～、何でおるんやろ？」

その辺りは判らないが、ネギは牽制として戒めの風矢を放つが、悪魔の一人に当たる前に障壁のような物で弾かれてしまった。

「あれは、障壁か？」
「いや・・・魔法無効化だな。ああ、神楽坂さんの能力を何かしらの方法で使ってるんだろう」

一瞬だが、明日菜の胸元で何かが光ったのを見た。恐らくマジックアイテムを使って明日菜の魔法無効化能力を悪魔が使える様にしているのだろう。

「面白い事考えるね・・・これはアキラと木乃香ちゃんだと分が悪いかもしれない」

もっとも、分が悪いだけで、二人が負けるとは思っていないアリス。そろそろ二人を行かせても良い頃だと思い、アキラと木乃香に合図した。

合図を確認した二人は頷いて瞬動でその場を離れた。現れた先はネギと小太郎の隣、突然現れたアキラと木乃香にネギと小太郎は驚いていた。

「このかさん！　アキラさん！　お二人とも危ないですから、下がっててください！」
「それは聞けへんよネギ君」
「私たちも戦う、少なくとも、アリスさんの下で修行してきたから、ネギ君に心配されるような腕じゃないよ」

パクティオーカードを構えたアキラと、指輪を光らせる木乃香を見て悪魔二体は面白そうな顔をしている。二人の実力を測って、その高さに興味を持ったのだろう。

「良いだろう、ヘルマン、貴様はネギ・スプリングフィールドの相手をしろ」

「良いのですか？」
「構わん、このお嬢ちゃん達はこの私、ベリアル様が務める」

ベリアル、その名は有名だ。無価値なものを意味する悪魔で、闇の子達の指導者とも呼ばれている存在だ。

「アキラちゃん、緊張してへん？」
「大丈夫、このかは？」
「問題無しや」
「「戦いの葬送曲！！」」

木乃香とアキラ、二人同時に戦いの葬送曲を使い、身体強化を施すと更に同時にパクティオーカードを掲げる。

「「来たれ（アデアット）！！」」

アーティファクトを出現させた二人は服装も変化した。
木乃香は陰陽師の姿になり、両手には扇子、アーティファクト・“東風ノ檜扇”と“南風ノ末廣”が握られている。
アキラは普通の巫女服、しかし袴の色は赤ではなく深い蒼になっており、その耳にはアーティファクトである“ウンディーネの涙”というイヤリングが着けられていた。

「掛かって来い、幼き魔法使い！」
「言われずとも！　高速詠唱！　のみこむ津波！！」

高速詠唱で放たれたアキラののみこむ津波がベリアルに届く、が・・・・直前でヘルマンと同じように魔法無効化によって掻き消されてしまった。

「なら！」

後ろで詠唱している木乃香を気に掛けつつ、アキラはウンディーネの涙の力を使う。周辺の空気に含まれている水分がアキラの手に集まり、形を成していく。その形は一本の刀、約２ｔの水を圧縮して作られた刀を握り締め、アキラは瞬動でベリアルの懐まで突っ込んだ。

「何！？」

アキラの瞬動が予想より速い事に驚いたベリアルは反応に遅れてしまった。その隙を突いてアキラは水の刀を一閃、ベリアルの片腕を切り落として直ぐに離脱。

追い討ちを掛ける様にいつの間にかベリアルの後ろに移動していた木乃香が切り落とされた腕の切り口に手を添えた。血に汚れるのも構わず手に装填していた魔法を、一気に開放する。

「開放！　灼熱の白光！！」

「ガアアアアアアッ！！！」

傷口に白熱電球と同じ効果を齎す魔法を受けて絶叫を上げるベリアル。

「思ったとおりだ。魔法無効化も、ゼロ距離なら使えない」

「せやね、でもウチらは基本後衛やから、大変やわ～」

しかし、これで戦い方は決まった。ベリアル相手に、二人は確かな勝機を見た瞬間である。

三十話　「学園の甘さ、責任は誰が」（後書き）

次回、決着です。アキラと木乃香がどれほど強くなったか、楽しみにしてください。

三十一話　「最強への道程、巫女達の目指す場所」（前書き）

いつの間にやら三十話を超えていたんですねぇ。

三十一話　「最強への道程、巫女達の目指す場所」

英雄と女王の子

三十一話

「最強への道程、巫女達の目指す場所」

学園祭特設ステージ前では、現在ネギと小太郎対ヘルマン、アキラと木乃香対ベリアルの戦いが繰り広げられていた。

ネギと小太郎はヘルマン相手に苦戦、魔法が効かないので格闘戦を強いられるネギと、犬神を使えない小太郎では伯爵級の悪魔に肉弾戦のみというのは無茶だったのだろう。

方やアキラと木乃香はベリアル相手に善戦、片腕を切り落としてゼロ距離からの魔法でダメージを与えるという快挙を見せていた。

「小娘がっ！　甘く見ていたようだな、このベリアル様とあろう者が・・・・・・良かろう、貴様らには本気を出すだけの価値があると認める」

今まで人間と同じ姿をしていたベリアルだったが、突如、魔力が上昇し、その姿が人間のソレから悪魔のモノに変わる。切り落とされた片腕は再生し、背中からは悪魔特有の羽が生え、眼光は正に侯爵級悪魔の名に相応しい鋭さを放っていた。

「行くぞ・・・着いて来れるか？　小娘共」

ベリアルの姿が消えた。アキラと木乃香にはそう見えたが、それ所ではなかった。気が付けばアキラは脇腹から血を噴出して転がり、木乃香は頭から血を流して木に叩きつけられていたのだから。

「ガハッ!?　・・・はぁ、はぁ・・・・・・い、いつの、間に」
「ククク・・・・・・どうやら着いて来られぬようだったな、小娘共」

ベリアルの右手、その爪にはアキラの血がベットリと付着していた。ベリアルはその血をペロリと一舐め、その味を楽しんでいた。

「ほう・・・背の高い小娘、貴様は生娘だったか。この様子だとあちらの高い魔力を持った小娘も同じだな」

一瞬、アキラは何を言われたのか理解出来なかったが、生娘という言葉の意味を思い出して顔が真っ赤になった。それは木乃香も同じで、女としての屈辱、そういった感情が渦巻いて頬の火照りを鎮める事ができない。

「しかし・・・・・このまま私が一方的に弄り殺すのも味気ない。どうだ？　チャンスをくれてやる・・・・・私はこれから5分間、この場を一歩も動かず、防御も攻撃も一切しない。小娘共はその間、私に好きなだけ攻撃すると良い」

舐めている。いや、余裕なのだろう。確かにアキラと木乃香は強くなった・・・・・しかし、それでも侯爵級の悪魔と戦うには実力も経験も少ない。故にベリアルは二人にチャンスを与えたのだ。

「アキラちゃん・・・・・・」

木乃香がアーティファクトでアキラの傷を治療した。見ると木乃香の頭の出血も止まっている事かあら、既に自分の治療も終わっているのだろう。

「私とこのか・・・今出せる最大の魔法をゼロ距離で撃つよ」

二人が放てる上位古代語魔法、その中でも最高位の力を持ち、尚且つ今の二人が使える魔法をゼロ距離で放つ。それは有効かもしれないが、その反面、危険も大きい。

ゼロ距離という距離での攻撃魔法は相手だけでなく自分にもダメージを与えてしまうのだ。先ほど木乃香がベリアルにゼロ距離で放った魔法はベリアルにダメージを与えたが、木乃香の手のひらも炭化しかけてしまった。アーティファクトによる完全治癒で手は元に戻ったが、木乃香のアーティファクトが治癒系のアイテムでなかったらと思うとゾッとする。

「ネイ・ネル・プート・ネプチューン」
「ルム・リル・リック・リプシオール」

作戦が決まり、二人は詠唱を始めた。同時に瞬動の構えを取り、いつでもベリアルの懐に飛び込める様に準備を整えている。

「契約に従い　我に従え　水の皇王　来たれ　命飲み込む　災厄の災害　生きとし生ける者　全てに　滅びの水を」
「契約に従い　我に従え　光の王　来たれ　万物を照らす　天空の輝き　日輪を歩む者に　生命を　常世の全てに　生者の理を」

詠唱を終えた瞬間、二人は瞬動に入った。ベリアルの懐に入ったアキラと木乃香は己が発動体である指輪をベリアルの胴体に当て、完成させた魔法を解き放つ。

「破滅の津波！！」
「生者のせかい！！」

その瞬間、ベリアルとアキラと木乃香の姿は光に包まれた。眩い光に誰もが動きを止めてその光を見る。

近くで見ていたアリス達もまた、アキラと木乃香の魔法を見ていた。覚えて間もない上位古代語魔法の中でも最高位に属する魔法、制御や威力に関してはまだまだ甘いと思えるが、それでも上出来だと判断した。

光が収まると、アキラと木乃香の顔に勝利の笑みは無かった。逆に、絶望したかのような青褪めた表情をしている。

「そ、そんな・・・・・」

「ウチらの、切り札が・・・・・」

二人の視線の先、そこには無傷とは言えないが、それでも五体満足で、ダメージを殆ど受けていないと言うかのように平然としているベリアルの姿があった。

「見事だったぞ、今の魔法は・・・・・。これがヘルマンであれば倒せていただろうが・・・しかし、私を倒すにはまだまだ錬度が低かったな」

今度は、ベリアルの番だった。再びヘルマンの姿が消え、ゼロ距離魔法の余波でボロボロになっていた二人の鳩尾に拳を捩じ込んだ。

一瞬、呼吸が止まった二人は肺の中の空気と共に血を吐き出し、再び地面を転がる・・・前にベリアルが二人の頭を掴み、地面に叩き付け、更に腹部を思いっきり踏みつけた。

「「ガハァッ!?」」

地面を抉り、頭にダメージを負った為か、意識が朦朧としている。鳩尾を殴られ、踏みつけられた事によってまともに呼吸も出来ず、頭から血を流しているアキラと木乃香。

二人の状況を見てネギが助けに入ろうとしたが、それはヘルマンによって妨害され、他のクラスメートは相変わらず水の檻の中、絶体絶命とはこの事を言うのだと、奇しくも二人は同時に考えた。

「（ああ・・・・・ここで死んじゃうのかな。せっかくアリス先生に少しでも追いつけたと思ったのに・・・全然遠かった。私じゃ、侯爵級の悪魔には勝てないのか）」

「（ウチ、このまま死ぬんかなぁ・・・アリスさんと修行して、せっちゃんとも昔みたいにお話出来るようなったばかりやのに。悔しい、悔しいなぁ・・・・・・）」

ベリアルは二人にトドメを刺さんと両手で手刀を作り、爪を伸ばした。これが振り下ろされればアキラと木乃香の喉は抉られ、確実に死に至る。

死の恐怖、それがアキラと木乃香の目の前に迫った。静かに振り下ろされる死神の鎌は二人の命を奪わんと迫り来る。それが最後の光景になろうとしたその時だった。アキラと木乃香の視界の隅に、アリスの姿が映った。今にも飛び出しそうなアリスの姿を見た瞬間、二人の中から何かが生まれた。

「死ねない・・・・・・っ」

「死にたくない・・・・・・っ」

「「まだ、好きって言ってないのに、死ねない！！！」」

ベリアルの爪が振り下ろされた瞬間、爆発が起きた。アキラと木乃香の潜在魔力が一気に膨れ上がり、体内に収まりきらない魔力が

体外へと溢れたのだ。
　爆発によってベリアルはトドメを諦め、後退した。だが、その表情は判り難い筈なのに確かな焦りに染まっている。

「・・・・・馬鹿な」

　ベリアルの視線の先、そこには頭と口元から血を流しながらも、確かな足取りで一歩を踏み出すアキラと木乃香の姿があった。
　二人とも、ボロボロになった服からは素肌が覗き、下着すら隠し切れない程になっているのにも関わらず、それを気にする事無く己が武器を取った。
　アキラは２ｔの水を圧縮した刀、木乃香はアーティファクトである扇、それらは二人の魔力に共鳴するかのように振るえ、その周りを目には見えない精霊が歓喜しながら飛び回っている。

　二人の様子を見ていたアリスとエヴァンジェリンは珍しく心の底からの驚きに目を見張っていた。まさかあの二人にここまでの底力があるとは思ってもいなかったのだ。

「ク・・・ククク、アハハハハハ！！　傑作だ！！　まさかあの二人がこれ程の力を秘めていたとは！！　アリス！　貴様の弟子は見事だぞ！！　これなら私が弟子に欲しい位の逸材だ！！」
「あ、ああ・・・・・・本当に、見事なものだ」

　ベリアルと対峙するアキラと木乃香は念話で作戦を練っていた。
今のままではベリアルを倒す事など不可能、ならば如何するか・・・・・。

『こんな時、アリスさんやったら・・・どうするやろ？』
『そうだね、アリス先生なら・・・・・・あ』

『どうしたん？』

アキラは何かを思いついたかのように握っている水の刀を凝視した。

「試してみる価値は、あるよね」

作戦は決まったらしい。アキラの考えは直ぐに木乃香に伝わり、木乃香も成功率など無視してそれに決めてしまった。もう、後戻りはできない。

「ベリアスはん・・・少し、ウチと遊ぼうな」

木乃香が本来は治癒に使われる筈の扇を広げ、魔力コーティングを施していく。強度が並の鉄扇よりも高くなったのを確かめ、木乃香は瞬動に入った。

同時に消えたベリアルだが、今度はベリアルの爪に木乃香が一方的に切られるという事は無い。ベリアルの爪を木乃香の片方の扇が受け止め、もう片方の扇がベリアルの首目掛けて一閃される。

しかし、ベリアルもそれを読んでいたかのようにかわすと木乃香の腹部に膝蹴りを入れようとしたが、木乃香がそれに手を添えて受け止めると地面を蹴り上げ、膝蹴りを受け止めた手を軸にベリアルの頭上を飛び越えた。

「余所見はあかんよ？　余所見は、重大な事故の素や」

ベリアルは自分の頭上を飛び越えた木乃香を攻撃しようと目で追っていたが、それが不味かったのだ。既にベリアルの懐には木乃香の置き土産が浮遊している。

「開放」

ベリアルの前で固定されていた術式が開放された。戒めの光矢がベリアルを拘束し、一時的にだが完全に動きを封じられてしまったのだ。

「その拘束、ウチの魔力をぎょうさん注ぎ込んだ特性や・・・破るんは骨やで」

そして、同時にそれは残っていたアキラに最大の攻撃チャンスを与える隙になってしまう。

「高速詠唱、破滅の津波！　術式固定！！」

アキラは闇の魔法や術式武装の準備である放出系魔法の固定をした。だが、アキラに闇の魔法の素質は無いし、術式武装に耐えれる武器は持っていない。何をするつもりなのか全く持って不明だ。

固定された破滅の津波は水の刀に取り込まれた。一見術式武装に見えるが、全く違う。水の刀には一切の変化は見られない。

「私は一回に圧縮出来る水は２ｔが限界だ・・・・・でも、破滅の津波の術式を取り込んだ事で、この水の刀の中には４～５ｔの水が収められている。因みに、圧縮出来る量は２ｔが限界だけど、制御出来る水の量は５ｔなんだ」

正直、限界量ギリギリの為、制御するのに手一杯で、これを戦闘に使うなど不可能だが・・・・・。

「これ位なら可能だ！！」

瞬動に入り、その勢いのまま刀をベリアルの胸に突き刺した。

「ガアアッ！！」

「・・・・・・解」

瞬間、ベリアルに刺さっている刀が弾けた。５ｔ近くの水が体内から弾け、ベリアルは胸から上下に身体を分断されてしまうのだった。

「はあ、はあ、はあ、・・・・・・勝った」

「やったえ・・・ウチらの勝ちや」

魔力も体力も限界のため、木乃香とアキラは肩で息をしている。今日はもう戦うのは無理だろう。

「グガッ！　グブッ・・・・・・ま、まさか・・・私が負ける、とは」

胸から上だけになったベリアルが血を吐き出しながら自分を打ち負かした二人を見ていた。

「侯爵級だと驕りが過ぎたか・・・いや、貴様らが強かった・・・それだけの話か。小娘共・・・・・・いや、名前を聞かせてもらえるか？　お嬢さん方」

「・・・・・・大河内アキラ」

「近衛木乃香や」

ベリアルは木乃香とアキラを認めたのだ。強者として、自身を打ち倒した相手として名前を覚える価値があると。

「大河内アキラと近衛木乃香か・・・・・・その名、我が魂に刻んでおこう」

そう言い残して、ベリアルの姿は消滅してしまった。後に残された木乃香とアキラは漸く一息吐いたのか、その場に座り込んでしまい、夜空を見上げた。

「ウチら、強くなったんかなぁ」
「だとしたら、嬉しいかな・・・アリス先生に、少しでも追いつけたのなら」

二人の目標であるアリスの背中は、まだまだ遠い。しかし、今日、二人は確実にその背中に向かって、大きな一歩を歩みだし、ほんの少しだが、近づいた。

「もっとがんばらな、まだまだ強くなるんや」
「うん」

後の世、二代目・紅き翼に名を列ねる最強クラスの巫女の、始まりであった。今はまだ、その領域には程遠いけど、確実に、近づきつつある二人。

もっと強くなると、自分達が倒した悪魔、ベリアルにも誓いを立てるのであった。

三十一話　「最強への道程、巫女達の目指す場所」（後書き）

ヘルマン編、終了！　ヘルマン殆ど出てないけどね！

三十二話　「魔法使いというもの、学園祭準備開始」（前書き）

学園祭編、遂に開始です！！

三十二話　「魔法使いというもの、学園祭準備開始」

英雄と女王の子

三十二話

「魔法使いというもの、学園祭準備開始」

悪魔が侵入してきた翌日、アリスとエヴァンジェリンは学園長室に来ていた。理由は一つ、昨晩の悪魔が侵入してきた事でだ。

「学園長・・・昨晩の件ですが」

「ううむ、言いたい事はよく判るが、のう」

「でしたら、悪魔に、それも二体に侵入を許した責任、如何様に？」

アリスが問うているのは悪魔侵入の責任と、一般人である那波千鶴を巻き込んだ事に対して学園長・・・いや、関東魔法協会会長は如何取るつもりなのか、だ。麻帆良を預かる者として、最高責任者としてやるべき事が学園長にはあるのだ。

「流石に辞職しろとまで言いません。しかし、私も本国に報告する以上、それなりの態度を見せて頂かない事には」

今回の一件、アリスは本国から詳細を報告する様にと依頼を受けている。無視しても良かったのだが、アリスなりに思うところがあったので受けた次第だ。

「うむ、わかっとる。じゃがのぅ・・・・・・」

「おいジジィ、何を悩む事がある？」

「むう・・・」

学園長が悩んでいる理由は、ネギの報告にあった侵入してきた悪魔の一人、ヘルマンがネギの故郷を襲った悪魔の一人である事、更にネギが悪魔から聞いた侵入理由『ネギとアリスの調査』の事だ。

悪魔はネギとアリスが麻帆良に居るから侵入してきた。そういう事になってしまうのだが、だからこそ悩んでしまう。

ナギの跡取りとしてこれからの活躍に期待しているネギとアリス（アリスがナギの跡取りとして最有力候補だと今でも期待している）、この二人にこんな所で悪魔侵入の責任というレッテルを貼りたくない。二人には将来、立派な魔法使い（マギルステル・マギ）として輝かしい功績を残し、英雄の跡取りとして多くの人々を救う存在となって欲しい。それが学園長を含む、この学園の魔法先生及び魔法生徒の総意見だ。

「悪魔は、私とネギが狙いだった。それなら話は早い筈ですよ？」

アリスの言葉にハッと顔を上げる学園長、その言葉の意味を理解したが故だ。しかし、それは学園長の望む所ではない。

「いかん！　それではアリス君とネギ君に余計なレッテルを貼ることとなる。将来ある君達に、そのようなレッテルは相応しくなかろう」

「・・・・・甘い考えですね。私とネギがナギ・スプリングフィールドの子だから、余計なレッテルを貼りたくない。随分と頭にくる考えだ。私もネギも、既にアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子というレッテルをメガロメセンブリア元老院に貼られているのに。・・・・・もっとも、私はそれがレッテルだとは一度だって思ったことはありませんけど」

ＳＳ級の機密であるため、この事を知っている人間は限られてい

るが、それでもメガロメセンブリア元老院にとってはレッテルである事は変わらない。

「そういう事だ。それでもアリスとぼーやに責任問題を問う気が無いのなら、アリスが納得できる解答を用意しておくのだな」

後日、学園長からの解答は当日の警備担当者、担当責任者の1ヶ月謹慎、3ヶ月の減給、学園長の2ヶ月謹慎及び5ヶ月の減給だった。

甘いとは言えるが、アリスも納得したことにして本国に報告し、この問題は片付いたのだが、もう一つ、アリスには新たな問題が発生するのであった。

「兄さん！」

そう、ネギだ。ネギと明日菜が木乃香とアキラの強さを見てアリスに再び詰寄ってきたのだ。

「このかさんとアキラさん、どうやって強くなったの！？　僕も強くなりたい！　弟子にしろって言わないから、僕も鍛えて！」

「あのねネギ、私も木乃香ちゃんとアキラを鍛えるのに一杯一杯だから、これ以上の余裕は無い。弟子にしろと言わなくなったのは評価するけど、これ以上は定員オーバー」

これから更に二人の修行が激化するというのに、これ以上鍛える者を増やしたら誰かが疎かになってしまう。木乃香とアキラを疎かにする訳にもいかない。だからこそ、ネギを鍛えるのはエヴァンジェリンに完全に一任しているのだ。

「それに、ネギはエヴァンジェリンに鍛えてもらっているでしょう

？　彼女は最強の魔法使いだ、そんな人に鍛えてもらってるんだから贅沢言わない方が良いよ」

「でもエヴァちゃんが鍛えてるネギよりアリス先生が鍛えてるこのかとアキラちゃんの方がドンドン強くなってるんだから、アリス先生がネギを鍛えればネギももっと強くなれるじゃない！！」

「だから、これ以上は無理。ネギを鍛える事であの二人の修行が疎かになるのは不味い。私も人間だから、限界というものがあるんだよ？」

そもそも、アリスは弟子を取った経験はシルヴィアしか無かったのだ。今はシルヴィアもアリスから教えを請う必要が無くなったが、今度は一気に二人も鍛える事になって、アリスも流石に大変なのだ。だからネギを鍛えるのは不可能、アリスの限界も考えてくれと言いたい。

「ネギはエヴァンジェリンの弟子になった。それを私が横から手出しするのは失礼だからね、諦めてくれ」

魔法面はエヴァンジェリンが鍛えてくれるのだから、ネギの言う事は贅沢というもの。それに近接戦闘に関して、ネギは古菲から教わっている中国拳法をメインにしている以上、アリスの完全な専門外になってしまっている。アリスが教えれる事は何一つ無い。

結局、納得てないという表情ではあったが、ネギも明日菜も引き上げてくれた。流石に疲れたアリスは部屋に帰ると風呂に入って直ぐに眠ってしまう。明日から、またやらなければならない事が山積みなのだから、今はこうやって疲れを癒さなければならない。

「あ・・・明日から学園祭準備が始まる」

職員会議で聞いたことを思い出した溜息を吐いてしまった。また

忙しくなる事が目に見えてしまい、早々に眠って現実逃避をするアリスであった。

時は早々に流れ、麻帆良祭まで残り１５日になった。麻帆良学園全体が既にお祭りムードに包まれ、活気に溢れている。
アリスも此処最近の活気に溢れた麻帆良の雰囲気は好きだった。父の影響か、こういったお祭りの空気はどこか元気にしてくれる。

「そういえば、父さんも昔は麻帆良学園の祭りに来た事があるって言ってたな」

まだナギが１０歳の頃の話だ。その時の話を思い出して自然と頬が緩んでしまう。

「そろそろウチのクラスも出し物を決めないとなぁ。まだ何にも決めてないから、不味いね」

準備もあると言うのに、本番１５日前になった今でも出し物が決まっていないのは本気で不味い。

「まあ、定番なのは喫茶店やお化け屋敷なんだろうけど・・・・・・」

果たして如何なる事やら、楽しみで仕方ないアリスであった。

朝の朝礼も終わって、アリスとネギは３－Ａの教室に向かっていた。先ほどからネギは学園祭の事や、麻帆良に本格的に転校してきた小太郎の話をしている。

「でね？　小太郎君とも話してたんだけど・・・僕、魔法剣士になろうと思うんだ」
「へえ、中国拳法もやってるからもしかしたらと思ってたけど・・・うん、良いんじゃないかな」

父と、その二人の息子全員が魔法剣士になる、こういう事は結構ありうる事だ。両親が魔法使いだったら子も魔法使いに、両親共魔法剣士なら子も魔法剣士に、両親片方が魔法使いで、もう片方が魔法剣士ならオールラウンダーに、などというパターンはどこでも見られるし、そうならない事もある。

「父さんも私も魔法剣士で、ネギも魔法剣士になる、か・・・・・・魔法剣士親子だね」

母は魔法使いタイプだった為、アリスは魔法剣士だがオールラウンダータイプになった。だがそれでも魔法剣士に分類されるのだ、父と兄と弟、三人揃って魔法剣士というのは中々愉快の一言だろう。

「さて着いた。学園祭の出し物、何が良いか生徒の意見を聞かないとね」
「そうだね」

ガラリ、とドアを開けたネギとアリスの視界に、妙なモノが映った。メイド服を着た雪広あやか、朝倉和美、柿崎美砂、釘宮円、椎名桜子の五名である。

「・・・・・、何をやっている？」
「３－Ａの出し物がメイドカフェに決まりましたの」
「ウチの学校金儲けＯＫだからね。お小遣い稼ぐならこれだよ！」

確かに麻帆良学園の学園祭は金儲けを許可しているが、それでメイドカフェというのは如何なものかと思う。衣装を用意したのはあやからしく、本人はメイドカフェがどの様なものか知らないが、他の皆の熱意に絆されて用意したとの事だ。

「・・・・・・雪広、お前は一度秋葉原に行ってメイドカフェがどんなものか見て来い」

おそらく本場のメイドカフェを見たらあやかも学園祭でメイドカフェをやるなどと言わない筈だ。

「それからネギ！　お前は接待されているんじゃない！！　キャバクラか此処は！」

まったく何時の間にネギはソファーに座って接待されていたのか。

「ああ・・・・・本当に、忙しくなりそうだ」

他にコスプレしている生徒を横目に、アリスはこれから学園祭までの事を考えると頭が痛くなってきた。

とりあえず、新田先生が近くに来ている気配を感じたので、教室の隅に移動し、認識阻害の魔法を自身に掛けると影を使った転移魔法で屋上に逃げる事にしたアリスであった。

三十二話　「魔法使いというもの、学園祭準備開始」（後書き）

ここで読者さまからアンケートを取りたいと思います。
学園祭編でのアリスの立場について

?:ネギ達と協力して超の野望を阻止する。

?:超に協力してネギ達の前に立ちはだかる。

?:エヴァンジェリン同様、一切手出ししないで事の成り行きを静観する。

?:第三勢力となって戦う。

以上から選んでください。皆様の意見を反映させて今後の執筆に盛り込んでいこうと思いますので。

三十三話　「料理人さっちゃん」（前書き）

タカミチ出したの、初めてだ……。

三十三話　「料理人さっちゃん」

英雄と女王の子

三十三話

「料理人さっちゃん」

学園祭まで残り少なくなってきた。未だ３－Ａの出し物が決まらずに朝から頭を抱えているアリス、出勤しようと管理人室を出ようとした時、アキラが訪ねてきた。

「どうした？」

「あはようございます。アリス先生っていつもこんなに早いんだ・・・・・」

「ああ、うん。それで？」

「えっと・・・このかに言われて、今日は朝から一緒に行きたい所があるから来て欲しいって」

シルヴィアも一緒に、との事なので、急遽シルヴィアも連れてアリスはアキラの案内に従って通学路を歩く。

そして、着いた場所は通学路の傍らに止められた路面電車風の屋台。そのテラス席にネギと明日菜、刹那と木乃香が座っている。

「すごいですね・・・・・これが日本の屋台というものですか」

「いや、私も初めて見たから何とも言えないけど・・・・・・アキラ、これは？」

「驚きました？　これは学園祭準備期間中限定でオープンしている麻帆良名物、中華屋台“超包子”です」

働いているのは３－Ａの生徒、超鈴音、茶々丸、四葉五月、古菲、葉加瀬聡美の５人。随分と繁盛しているらしく、殆どの席が埋まっていた。

「あ、アリスさんや～」

木乃香がアリスとシルヴィア、アキラを見つけて笑顔を見せた。

「おはよう木乃香ちゃん、ネギ、神楽坂さん、桜咲」
「おはようさんや～」
「おはよう兄さん」
「おはようございます、アリス先生」
「・・・おはようございます」

まだ刹那はアリスに対して苦手意識を持っているのか、口調が固い気がする。もっとも、それも仕方が無いことだが、木乃香がそれに対して不満気な顔をする。

「せっちゃん、アリスさんの事まだ苦手なん？　あかんよ、ウチのお師匠様なんやえ～」
「も、申し訳ございません。それは理解しているのですが・・・・・・」

初対面がアレだったため、流石にアリスも気にしていない。まあ、事情を聞かされた木乃香はまったく納得していないのだが・・・・・・。

木乃香が確保してくれた席に着いたアリスとシルヴィア、アキラはメニューを開き、何を注文するか考えるが、アリスとシルヴィアの二人は、メニューがあまりにも本格的な事に驚き、その手頃価

格に大丈夫なのかと心配していた。

「わ、私が仕事で中国に行ったとき、そこのレストランで食事した事があるけど・・・・・そこと変わらない位、本格的だね」

中華の定番メニューから本場でしか食べられない筈のメニューまで幅広く書かれているメニュー、見た所、作っているのは五月だけの様だが、大丈夫なのだろうか？

「大丈夫、四葉さんは料理上手ですから」

アキラが自信満々に言うので、アリスは餡かけ炒飯を、シルヴィアは青椒肉絲を頼み、アキラも蟹玉スープを注文していた。

「へえ・・・・・これは、凄いな」

本場のプロの料理人にも匹敵する程の味だった。世界中のプロの料理人が作る料理を食べた経験があるアリスはそれなりに舌が肥えているため、それがよく判る。

「中学生でこれ程とは・・・将来はとんでもない料理人になるね」

確か五月の進路希望は麻帆良学園女子高等部卒業後に調理師専門学校と書かれていた。成る程確かに、この腕ならその選択も頷けるというもの。

「さて、食べ終わったしそろそろ学校に行こうか」

アリスはネギ達に断って先に学校に向かう。シルヴィアは食べに来ただけなので管理人室に戻り、アキラは木乃香たちと一緒に後か

ら学校に行くとの事。

朝のＨＲ、再び学園祭での出し物を決めるために話し合っていたのだが、中々決められずにいる。そんな中、椎名桜子が手を上げた。何かいい案があるのかと期待したアリスだったが、その期待は見事に打ち砕かれる。

「『ドキッ☆女だらけの水着大会・カフェ♪』がいいと思いまーす！」

クラス全員が崩れ落ちた。意味が解っていないネギと鳴滝風伽と雪広あやかは頭に疑問符が浮かんでいる。

「何なのよソレ！　意味がわかんないわよーっ！！」
「えー？　フツーに楽しそくない？　ポロリもあるよ」
「くないわよっ！！！」

明日菜の意見は最もだ。そもそもそんなの中学生がやって良い事ではない。

「「・・・それだ」」
「「ウソつけーっ」」

目を光らせる早乙女ハルナと明石裕奈に村上夏美と和泉亜子がツッコミを入れているのを尻目に、アリスは溜息を吐いてしまった。このままだとまた決まらずに一日が終わってしまいそうだ。

「じゃあじゃあ『女だらけの泥んこレスリング大会喫茶』！！」
「『ネコミミラゾクバー』！！」
「もう素直に『ノーパン喫茶』でいいんじゃないかしら？」

「「それだぁあああ！！」」

結局決まらずに騒ぎ出してしまった。そして昨日と同じように新田先生の気配を察知したので認識阻害の魔法を掛けて教室の隅に移動すると影を使った転移魔法で教室から消えるアリスであった。

「なっ・・・なな・・・何をやっとるかぁーーーー！！！　全員正座ーーッ！！！」

屋上に転移したアリスは、そこからでも聞こえる程の大声で怒鳴る新田先生の怒声に苦笑しつつ、アリスと同じように水を使った転移魔法でアリスの後ろに転移してきたアキラと木乃香の方に振り返った。

「何時になったら決まるんだろうね？」
「あはは・・・・・・」
「ネギ君がせっかくやる気出したのになぁ～」

そのまま、３－Ａは一時間目が潰れてしまう事になったので、アリスはアキラと木乃香と共に屋上でティータイムと洒落込む。

影からティーセットを取り出したアリスに、二人はその便利性に関心し、自分達にも出来ないかと相談するも、影を使う闇属性に適正の無い二人には無理だと判明して落ち込んだのだが、それはただの余談である。

放課後、帰る準備をしていたアリスに新田先生を含む麻帆良女子中等部３年生担当の教員全員が食事に誘ってきた。何でも皆で五月がやっている屋台に飲みに行く事になっているらしく、折角だからアリスとネギも誘おうとしたのだが、ネギは既に帰ってしまっているので、アリスだけを誘ったとの事。

「どうですかな？　折角ですしご一緒に」
「・・・そうですね、折角のお誘いですし、お言葉に甘えて」

そう言って荷物を纏めたアリスは席を立って新田先生達に続いて歩き出した。折角なので携帯でシルヴィアに連絡して屋台に来るよう言っておいた。こんな時にシルヴィアだけを仲間はずれにするのは気が引けるし、新田先生に話すと是非にと言ってくれたのだ。

屋台に着いてシルヴィアと合流したアリス達は早速カウンター席に座って大人たちは酒を、アリスはジュースを、そして食事をそれぞれが注文して料理が来るまでの間、雑談を楽しむ。

「しかし、以外ですね・・・新田先生が四葉さんをさっちゃんなんて呼ぶとは」
「ああ、あははは・・・いや私も学校ではちゃんと呼んでますがね。ここでは私は教師ではなく客ですからなぁ」

先ほど、店に来たとき新田先生は五月の事を“さっちゃん”と呼んだのだ。それを聞いたときアリスは驚愕して新田先生の顔を見たものだ。あの“鬼の新田”と呼ばれている新田先生が生徒をフランクな呼び方で呼んでいるという光景は本当に驚きだ。

「でも良いですね、フランクな新田先生というのも新鮮で」
「あははは、私も好きで厳しくしている訳ではありませんからなぁ・・・生徒の事を思えばこそ厳しくしなければならない、と自分に言い聞かせて教育をしていますから。もっとも、厳しい時には厳しく、それ以外では余り煩い事は無しに、使い分けが必要ですな」

本当に新田先生は教師の鑑だ。生徒には理解されずとも、彼のよ

うな人間がいてくれるというだけで生徒にとっては良いこと。
アリスも見習うべき事が多々あるが、新田先生は本当にお手本となる凄い人だと・・・そう思う。

その後、客が喧嘩していたのを五月が収めたり、後から来たタカミチが連れてきたネギが甘酒で酔って落ち込んでしまい、同じく良い感じに酔ってきた新田先生が励ましたり、微笑ましいエピソードもあったが、特に珍しい事があった訳でも無いので割愛する。
但し、久しぶりに会ったタカミチを新田先生達と別れた後に呼び出したアリスは彼から聞かされた事に愕然とする。

「頼まれていた事を調べてきたけど・・・アリス君の思ったとおり、墓守の宮殿に此処最近、誰一人近づけなくなっているみたいだ。各国の諜報員も帰って来ないみたいだし、これは近いうちに本格的な動きがあると見て間違い無いと思うよ」
「やっぱり・・・・・予想より動きを見せるのが早いと思ったら・・・これは覚悟しておいた方が良いかもしれないね。タカミチ、魔法世界にいるラカンに連絡しておいて、次に私が魔法世界に訪れた時が、二代目・紅き翼の集合の合図だと」
「わかった、明日にでも手紙を出しておくよ」
「それから京都の詠春さんにも、学園祭が終わったら月詠を一度帰すから、彼女に神鳴流の全てを伝授させてあげて欲しいと」
「了解だよ」

決戦の時は、刻々と近づいてきている。アリスは懐に入っている両親とのパクティオーカードに手を当てて夜空を見上げた。

「私も・・・・・また更に強くなる必要があるね」

三十三話　「料理人さっちゃん」（後書き）

これにて暫く更新ストップです。公務員試験を受けなければならないので、更新再開は早くても１０月になるかと思います。
続きは申し訳ございませんが、それまでお楽しみに。

三十四話　「幽霊生徒さよ」（前書き）

明後日には公務員試験なのに、何やってんのかな……。

三十四話　「幽霊生徒さよ」

英雄と女王の子

三十四話

「幽霊生徒さよ」

漸く学園祭での３－Ａの出し物がお化け屋敷に決まり、一安心した日の放課後、アリスは一人で日が暮れるまで職員室で仕事をしていた。

仕事も一段落してふと、アリスは何を思ったのか３－Ａの教室に向かい、既に誰も居なくなった教室に入る。

「おや？　まだ教室にいたんだね・・・相坂さん」

『あ、アリス先生・・・・・・お仕事お疲れ様です』

「うん」

アリスが何も無い所に話しかけている。いや、正確には確かに居る。肉体を持たず、魂のみの存在・・・・・・所謂幽霊という存在。

「今日は如何する？　折角だから私の部屋にでも来る？　シルヴィアもまたおいでって言ってたし」

『ホントですか！？　是非！！』

幽霊生徒、相坂さよ・・・・・・死後６０年ずっと麻帆良学園のこの教室に囚われている自縛霊？　とでも言えば良いのか。特に害も無さそうなので、アリスも時々こうやって管理人室に呼んで色々と話を聞いたりして、今では良い友人とも言える間柄だ。

夜になり、管理人室にはアリスとシルヴィア、月詠、木乃香、アキラ、さよが揃っていた。さよは無理だが全員シルヴィアが作った夕飯を食べており、その美味に太鼓判を押している。

「そうだ、相坂さん」

『なんですか？』

「６０年ぶりに肉体を得たいとは思わない？」

アリスの突然の問いに全員箸が止まった。アリスが何を言うのか気になるようだ。

「もし望むなら・・・・・もしかしたら相坂さんに新しい肉体を与える事が出来るかもしれない」

『本当ですか！？』

「うん、魔法の事は話してあるよね？　それで、まほネットの通販で最近、凄腕の錬金術師が作り上げたホムンクルスの素体が売られてるんだ」

素体であるため、そこからホムンクルスを完成させるのは買った人間になるが、完成すればそれは魂の入っていない肉体、器になる。後は死霊術の要領でさよの魂をホムンクルスの肉体に入れて擬似的な肉体と魂の繋がり、精神を構築すれば・・・・・。

『私の新しい体になるんですか？』

「そう、魂を定着させれば肉体は魂の情報を読み取って直ぐに見た目が魂のそれと同じになる。完全に新しい素体らしいよ」

しかも理論的には普通の人間とまったく変わらず、飲食が必要になるし老いもする。生理現象も当然あるから排泄もするし、子供を作る事も可能らしい。

「実は既に注文もしてあって、明後日辺りには届く予定なんだ。勿論断るなら素体は私の研究用に使うから良いけど・・・・・・如何する？」

『わ、私・・・・・また体を持って、もう・・・誰にも気付かれないような寂しい生活をしなくて、良いんですか？』

「勿論」

こうして、さよは新たな肉体を得る事が決まった。儀式の開始は素体が届く明後日の夜、素体の調整と、完成を終えてから行うので殆ど深夜になってしまう。だが、それまでの間に、あのような騒ぎが起きるとは、まだこの時、、誰も思わなかった。

ホムンクルスの素体が届く日、この日３－Ａは大騒ぎだった。何でも昨夜、学校に泊り込みでお化け屋敷の準備をしていた３－Ａの生徒がお化けを目撃し、その写真を収め、校内新聞に載っていたのだ。

３－Ａの教室に出没する幽霊を除霊討伐をする為に生徒の有志が募って超の作った除霊銃を持ち集まっていた。

「なあなあアキラちゃん、これちょうヤバない？」

「うん、さよちゃん・・・大丈夫かな」

写真の幽霊の正体がさよだと気付いた木乃香とアキラは冷や汗を流している。今夜、やっと新しい肉体を得る事が出来る友人、さよをこんな所で消滅させるのは困る。

素体をホムンクルスの肉体として完全に完成させる為に先に管理人室に帰ってしまったアリスに連絡しようとも思ったが、準備に忙しいだろうから呼べない。シルヴィアもその手伝いで不可能、月詠はどうかと思ったが、彼女だとやり過ぎてしまう恐れがあるので不

可能・・・・・八方塞だった。

「兎に角、皆に見つからない様さよちゃんを管理人室まで連れて行こう」

「せやね・・・こら、ウチらの腕の見せ所や」

教室の片隅、そこでこちらを伺っているさよに目を向け、この大人数の中から誰にも気付かれない様にさよを連れ出す。随分と難しい任務だが・・・やるしかない。

「あ、のどかのアーティファクトでさよちゃんと交信するみたいや」

見ればのどかがいどのえにっきを出してさよに語りかけている。そして・・・・・。

「悪霊です！　やっぱりこの人悪霊ですぅーーー！！」

やはりマスターピースとは言え、いどのえにっきの力でも幽霊の考えている事を完全には捉え切れなかったのだろう。のどかの叫びが３－Ａの生徒達を仰いで全員が騒ぎながらも除霊銃を構えだした。

「あかん、こらちょうヤバヤバや」

「うん、アデアット！」

教室が混乱したさよによって起こされたポルターガイストで滅茶苦茶になっている。その隙にアキラはアーティファクトを出すと教室のスプリンクラーの中の水を操ってスプリンクラーを破壊、教室を水浸しにした。

「な、何でスプリンクラーが！？」

誰の台詞かは判らないが、それを合図に全員教室の外に出る。だが、それが不味かったのだろう。さよまで外に出ており、教室の外に待機していた刹那と龍宮真名に追われていた。

「ホンマに不味いで！　せっちゃんは幽霊退治の専門やし、龍宮さんは魔眼持ちやって話や」

「確か、元マギステル・マギの従者だったんだっけ」

アリスが既に真名の素性を洗っていた。本名マナ・アルカナ、元・マギステル・マギの従者であり、四音階の組み鈴という魔法使いによるＮＧＯ組織に所属していた。強力な魔眼の持ち主、そして魔族と人間のハーフである事まで判明している。

「あの二人相手だと・・・さよちゃんが本当に消滅しちゃうね」

「急ごう！」

烏族のハーフと魔族のハーフ、二人とも強力な除霊手段を持つ者同士だ。このままではさよが本当に危ない。

幸い、さよを追って刹那と真名はクラスメートから思いっ切り離れてしまっているので、存分に魔法を使える。

「居た！」

「高速詠唱！　のみこむ津波！」

さよと刹那・真名コンビの間にのみこむ津波を放ってからアキラと木乃香は瞬動でさよの前に立ち、庇うように指輪を二人に向けた。

「そこまでやせっちゃん！」

「龍宮さんも、ここまでにして」

アキラと木乃香の周囲に水と光の矢が無数展開される。二人とも例え相手がクラスメートだろうと、幼馴染の親友だろうと、相手になる以上は一切の手加減無用、全力で持って叩き潰せとアリスに教えられている。それが戦いというモノで、戦場ではそれが当たり前の事だと。

だから二人は刹那と真名が相手だろうと、さよに手を出すなら容赦する気は無い。

「こ、このちゃん・・・・・・ウチは・・・」

案の定、刹那が動揺して夕凪を危うく落としかけた。木乃香に敵意を向けられ、魔法の射手を向けられた事にショックを受けているのだろう。だが、木乃香からすればそれは弱さであり、甘さだ。

逆に真名は若干驚いたものの、銃を落とす事もなく二人を見て肩を竦めた。随分と意外な状況に楽しんでいるかの様だ。

「さよちゃんの事は、アリスさんが考えとる。せやから此処は引いてや」

「それでも引かず、さよちゃんを除霊しようと言うのなら、私達が相手になるよ」

緊迫した空気が流れた。油断無く刹那と真名を睨む木乃香とアキラ、青褪めた表情で震えている刹那、面白そうに口元を歪めている真名。だが、唐突に真名が銃を下ろし、両手を頭の上に上げて降参のポーズを取った。

「降参だ。流石に私も二人を相手にするには報酬が少なすぎる」

おどける様に言う真名だが、その内心は冷や汗で一杯だ。正直、

二人を相手にして負けない自信はあるが、今の刹那が足手纏い意外の何者でもないので、足枷を填めた状態で戦って無事では済まないとまで考えていた。

「ほな、さよちゃん、アリスさんの所行こか？」
「アリス先生が待ってる」
『はい！』

アキラが展開した水を使った転移魔法で三人とも姿を消した。
後に残されたのは膝を着いて荒い息を吐いている刹那と、安堵の溜息を吐く真名、そして追いついて来たものの、既に事が終わってしまった為に状況を理解出来ないネギと和美、カモミールのみだった。

管理人室に転移したアキラ、木乃香、さよは直ぐにアリスが居るであろう研究室に向かった。
管理人室の一部屋を改造して作られたアリスの研究室では、現在アリスとシルヴィアが最終調整を終えたホムンクルスの素体を魔力素で満たされたバイオカプセルに入れてさよの到着を待っていた。

「来たね・・・・・・」

ドアを開けて入ってきた三人、これで漸く役者は揃った。

「待ってたよ・・・・・・早速だけど、始めよう」

入ってきたさよを手招きして素体の前に立たせる。バイオカプセルから取り出した素体を調整用ベッドの上に置いてシルヴィアに宝石を用意させた。

『これが私の体になるんですか？　なんだかのっぺらぼうみたいで・・・お人形みたいな感じです』

「まあ、最初はそう思うかもしれないけど・・・最初も言ったようにこれに相坂さんの魂が入れば素体が魂の情報を読み取って勝手に相坂さんの姿に変形する」

それからアリスは木乃香を呼び、シルヴィアは自分の補佐にアキラを呼んだ。

「木乃香ちゃんには魔力を貸して貰うよ。流石に私とシルヴィアだけでは魔力が足りないんだ」

極東最強の魔力を持つ木乃香の魔力も加われば十分足りる。

「それじゃあ、始めるよ・・・・・相坂さよの魂を触媒に、生きたホムンクルス生成儀式を」

“姫”を取り出したアリスは自身の親指を食い千切って血を流すと滴るソレを“姫”の刀身に一滴垂らす。

同じようにシルヴィアもナイフで親指の表面を切るとアリスから受け取った“姫”に血を一滴垂らし、木乃香、アキラもそれに続いて“姫”は再びアリスの手に渡る。

「シルヴィア、宝石を」

「はい」

シルヴィアが取り出した宝石をホムンクルスの素体の上に置いて“姫”の時と同じように四人が宝石に血を垂らした。

「相坂さん、素体の上に立って」

『はい』

さよが素体の上に移動したのを確認して詠唱を始める。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス・・・・・我、剣帝　宝石束ねし者の王　神毒鬼便の水を宿し命の石を持って　御霊と結び付かん」

シルヴィアが用意した宝石は、精神の安定を司るエメラルドだ。エメラルドを触媒に擬似的な精神を構築し、安定を量る。

素体の上に置かれたエメラルドが光り、宙に浮かぶと上下に繊維状の光が伸びて片方が素体に、もう片方がさよに伸びて繋がる。

「今だ！　相坂さん！　素体を自分の体だと強く意識して！！」

『は、はい！！』

ギュッと目を瞑って必死に祈るさよの姿が段々と光に包まれていく。同時にエメラルドは完全に繊維状になってしまう。そのまま繊維状のエメラルドが素体に吸い込まれ、引っ張られるようにさよの姿が素体の中へと消えていく。

変化は直ぐに起きた。素体が淡い緑色の光に包まれ、姿が完全に見えなくなって1分も経つと光が消え、ベッドの上には人形のようだった素体ではなく、長い銀色の髪の少女が眠っていた。

「・・・ん、んん・・・・・・」

少女が身じろぎしたという事は、成功したのだろう。ゆっくりと目を開けた少女の顔は、間違いなくさよだった。

「あ、あれ？　成功、したんですか？」

「見てみな・・・自分の“身体”を」

そう言われてさよが自分の身体に目を向けた。今までの様に透き通って向こう側が見えるという事のない実体の身体、裸の為か敏感に感じられる空気の感触、そして・・・・・・。

「・・・・・・あ」

胸に手を当てて気付いた。ドクン・・・ドクンという心臓の鼓動、血の通った肌の暖かさ、間違いなく今のさよは、身体を持っている。

「わ、私・・・・・・生きてる・・・生きてる!!」

６０年ぶりの肉体に感動して涙を流すさよの身体にタオルを掛けるシルヴィアは優しく、さよの頭を撫でている。それを見守るアリスも木乃香もアキラも、満面の笑みを浮かべて、そして新たな仲間の誕生を心から祝福するのであった。

三十四話　「幽霊生徒さよ」（後書き）

一応、復活のつもりですが、次話投稿はまだ少し掛かるかと思います。

三十五話　「明日菜がデート！？　叔母と弟の複雑な関係」（前書き）

今、思い返してみれば、私の小説内でのネギと明日菜の関係って、甥と叔母なんですよね……。

三十五話　「明日菜がデート！？　叔母と弟の複雑な関係」

英雄と女王の子

三十五話

「明日菜がデート！？　叔母と弟の複雑な関係」

学園祭も目前に迫ってきた。忙しくなってきたアリスだが、魔法を習い始めたさよの訓練も疎かにする事無く良くやっている。しかし、やはりアリスにも限界はある様で、身体には結構な疲労が溜まって来ていた。

「はあ・・・・・・疲れた」

思わず溜息と弱音が口から出てしまうが、これまでの日々はそれが許されるだけの価値があったとも言える。

「相坂さん・・・おっと、さよの方向性は見えたな」

さよの魔法適正は希少価値のあるものだった。アリスもかじった程度の知識しかないし、適正が無いから簡単な物しか使えないが、さよにはその適正があり、その方面に特化した才能を持っている。

「死霊術・・・・・・ネクロマンサーか」

魔法世界では希少価値の高い術であり、同時に畏怖の対象でもある禁断の魔法。霊や死体を操る非人道的でありながらも、戦場では無双を誇る究極の魔法だ。

「さよが私達の高みに来た場合、私では勝てないな」

死霊術ほど戦いや戦争に向いている魔法は無いだろう。一度戦場に出れば敵味方問わず、戦死した人間の死体や霊魂を操る事が出来るし、それで敵を殺せば更に操る事が出来る。敵を殺せば殺すほど、味方が殺されれば殺される程、戦力が増えていくのだ。アリスでも勝てる自信は無い。

最も、デメリットもある。死霊術は単独戦闘には余り向かないという事、光属性の魔法に対して絶望的なまでに相性が悪いという事だ。

「あくまで集団戦闘に特化した術だからこそ、彼女は私達、二代目・紅き翼に相応しい」

初代は分散して個対多を基本として戦っていたが、二代目はなるべく多対多で戦う事を基本としている一点突破のチームだ。

「一点突破の速攻勝負こそ我らが戦法であり、最強たる証だ」

その点で言えばさよは二代目・紅き翼の中でラカンと同等とも言える最強戦力だろう。現時点ではアリスはラカンに勝てない。そのラカンと集団戦闘限定とは言え同等クラスの戦力となりえるさよを引き込めたのは幸運だ。

「さあ、後はさよを実戦レベル・・・・・・いや、最強クラスまで成長させて、同時に私自身の戦力強化だ」

現在のアリスの実力では限界が見えてきた。だからこそ、アリスは自身を更に鍛え上げ、新たな力の模索と、現時点での実力の大幅アップを実行する。

アリスの決意があった日の夜、アリスは木乃香に呼ばれてシルヴィアと共に木乃香と明日菜、ネギの部屋へ来ていた。
木乃香の部屋には部屋の主である木乃香、明日菜、ネギとカモミール、それから最近は木乃香の傍でよく見るようになった刹那も居る。

「「ええー！？　ネギ（アスナさん）とデートしろってー！？」」

カモミールが放った一言が、ネギと明日菜の絶叫の原因となった。
何を言ったのか想像するのは容易いだろう。

「カモ君、突然なにを・・・もぷっ！」
「何でコイツとデートしなきゃなんないのよ！！」
「だからぁ、予行演習だっつーの、よこーえんしゅー」

果たしてデートの予行演習とは存在するのか、甚だ疑問だが、まあ二人とも異性と二人っきりで何処かに出かけるという経験は無いだろうから、良い練習にはなる・・・・・のだろうか。

「戦も色恋も要は慣れよ、“慣れ”。場数を踏めば緊張もなくなってタカミチを学際に誘うくらい、どーってことなくなるって寸法よ」

戦ではそれも正論だろうが、果たして色恋にそれが適応するのだろうか。アリスは恋愛というものをした事が無いし、興味も無かったので何とも言えないが、シルヴィアは如何思うのかと見てみれば・・・・・何やら木乃香と共に真剣に聞き及んでいる。

「・・・・・私、この場にいらなくないか？」

思わず刹那にそう問い掛けてみるが、彼女は苦笑しか返してくれなかった。

「でも、ええ考えかもな～。丁度、明日は休みなんやし」

確かに休みの上、天気予報では晴れとなっていたのでデート日和と言えなくは無いのかもしれない。だがしかし・・・・・・カモミールのプランには大きな欠点があった。

「それでも！　ネギ（ガキ）と街歩いてもデートの予行演習になんかなる訳ないじゃない！」

「確かになー、ネギ君やと高畑先生の代役には無理があるかな」

そう、ネギは１０歳であり、身長も明日菜と比べれば低すぎる。長身のタカミチの代役には無理があるし、アリスなら代役になれるがシルヴィアと木乃香が許さない。

「安心しな！　こんなこともあろうかと、まほネットで夢のマル秘アイテムを購入しといたぜ！」

カモミールがゴソゴソと袋から取り出したのはビンに入った赤と青、二種類の飴玉。

「ａｋ「ああ、“赤いあめ玉・青いあめ玉、年齢詐称薬”ね」・・・・・・オレッチのセリフ・・・ｏｒｚ」

アリスにセリフを取られて落ち込んだカモミールを無視して、アリスはその薬の説明を始めた。

「この薬は外見年齢を変える変身魔法を手軽に使える様にと開発された薬でね、このあめ玉を食べる事で外見年齢を調整出来る・・・・・最も、調整すると言っても肉体が変化するって訳じゃない。実体を持った幻術を身に纏うと思えば良いよ」

外見年齢を調整する変身魔法なら身近な例でエヴァンジェリンが使っていた魔法がそうだ。彼女は自分の魔法で変身して幼女の姿から大人の女性へと姿を変えることが出来るし、ネギとの戦いの時にも使用していた。

「まあ、ネギがこれを使って大人に変身すれば予行演習とやらも完璧だろうね」

「なあアリスさん、ホンマにこれ食べるだけで変身できるん？」

「ん・・・・・試してみる？　確か赤で大人になれる筈、青なら逆ね」

木乃香が試しにと、赤の薬を口に入れた。すると、ボンッという音と共に木乃香の姿が煙に包まれ、煙が晴れるとそこには凡そ１８歳位だろうか、色々と大きく成長した木乃香がそこに居た。

「ひゃ～？」

「へえ、流石は親子・・・木乃美さんと瓜二つ」

それはもう、本当に色々と・・・・・。

「なあなあ、アリスさんとシルヴィアさんも試してみぃな？」

「私も？」

「えっと、私もですか・・・・・？」

アリスとシルヴィアに赤と青の年齢詐称薬を手渡すアダルト木乃

香、渋々手にとってアリスは赤を、シルヴィアは青を口にした。瞬間、アリスとシルヴィアは木乃香の時と同じように煙に包まれ、晴れた後には変身は終わっていた。

「わ、二人とも変わったなぁ」

そこに居たのは、身長が高くなり、元々中性的な顔だったのが、完全に女顔になってしまったアリス（外見年齢２０歳）と、完全に幼女となり、着ていた服がずり落ちるのを必死に抑えるシルヴィア（外見年齢１０歳）だった。

「うわ・・・母さんそっくりになったな」

「奴隷だった頃を思い出してしまいますね・・・この姿は」

部屋にあった姿見で自分の姿を確認した二人はそれぞれの感想を述べた。

アリスは尊敬する母と瓜二つになった自分の顔に、男なのに女顔という複雑な感情と、母に似たという喜び、二つの感情が入り乱れ、シルヴィアはアリスと出会う前の、苦しい時代を思い出して若干表情を歪めている。

「えっと・・・“姫”はっと・・・・・・」

何となく影から“姫”を取り出して手に持った姿を見てみると、やはり幼き頃に見た“姫”を持つ母の姿を思い出させた。

「母さん・・・・・・」

もう何年も会っていない母を思い出して、唐突に寂しさを感じてしまう。この辺りは、アリスがまだ１７歳の子供だという証であり、

アリスの心の奥底に眠る本心だ。これではネギの事を言えないなと思いつつも、やはり兄弟なんだなと思う所以だとも思う。
父に会いたいと願うネギと、本心では母に会いたいと願うアリス、アリスとネギの似ている部分だろう。

翌日、１８歳頃の姿になったネギと明日菜がデートを行ったのだが、特に語られる事は無く。唯、何となくそれを遠見の魔法で見ていたアリスの心情は複雑だった。

「やっぱり違和感があるよね・・・・・・ネギとアスナ叔母さんがデートをするっていうのは」

そう、本人達は知らない事だが、ネギと明日菜の関係は本来、甥と叔母であり、こうしてデートをするというのは倫理的に不味い事なのだ。

「まあ・・・それでも」

二人が楽しそうにしているのなら、それでも良いのかもしれない。そう思う事にして、アリスは遠見の魔法を止め、エヴァンジェリンの別荘に向かった。
これから始まるのは、アリス自身の更なる戦力強化。エヴァンジェリン指導の下でアリスは更なる力を得るために、苛烈な修行を始めるのであった。

三十五話　「明日菜がデート！？　叔母と弟の複雑な関係」（後書き）

同時に設定の方も更新しておきました！

強さ早見表（前書き）

何だか、アリスの強さが見えないという意見が多いので、アリスを含めた登場人物の現時点での強さを表にしてみました。

強さ早見表

英雄と女王の子

強さ早見表

・最強クラス

【最上位】

エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル
ナギ・スプリングフィールド
ジャック・ラカン
アルビレオ・イマ
フィリウス・ゼクト
造物主

【強上位】

青山詠春
フェイト・アーウェルンクス
デュナミス
原作３１巻時点のネギ・スプリングフィールド

【上位】

原作３１巻時点の犬上小太郎
ガトウ・カグラ・ヴァンデンヴァーグ
アリス・スプリングフィールド
月詠

高畑・T・タカミチ
クルト・ゲーデル

【中位】
近衛近右衛門
シルヴィア・オーギス

【下位】
近衛詠春
龍宮真名（半魔開放時）

・準最強クラス
近衛木乃香
大河内アキラ
相坂さよ（集団戦限定）

・上級クラス
カゲタロウ
栞
環
調
焔
暦

・中級クラス
長瀬楓
アリアドネー魔法学園教員平均
龍宮真名（通常時）
アリアドネー魔法学園卒業生平均
桜咲刹那

古菲
犬上小太郎
ユエ・ファランドール

・下級クラス
麻帆良学園魔法先生平均
ネギ・スプリングフィールド
麻帆良学園魔法生徒平均
神楽坂明日菜

強さ早見表（後書き）

抜けてる人物がいたら教えてください。調べて追加しますので

三十六話　「前日祭！　始まる乙女のバトル」（前書き）

強さ早見表が不評ですね……、色々と見直してみます。

三十六話　「前日祭！　始まる乙女のバトル」

英雄と女王の子

三十六話

「前日祭！　始まる乙女のバトル」

遂に学園祭まで残り2日となった。３－Ａも作業スピードを上げてお化け屋敷を作っているが、このままだと間に合わない可能性も出てくる。

アリスはネギと一緒に様子を見に教室へ向かったのだが、それがいけなかったのだろう。途端に教室は歓迎ムード一杯で、作業がそっちのけになってしまった。果てには生徒達がネギに学園祭当日に自分が所属する部活の出し物を見に来るよう誘いを掛けていた。

「なあなあアリスさん、良かったらウチの占い研究会に来てな？」

「ああ、うん・・・・・それより、作業進めないと間に合わないよ？」

「せやね、ほな！」

木乃香が作業に戻り、アリスもそろそろ職員室に戻ろうと思ったのだが、今度はアキラが話しかけてきた。

「先生、良かったら水泳部のたこ焼き屋に来て？」

「えっと・・・まあ、時間があれば」

「うん」

アキラらしい、それだけ言って恥ずかしくなったのか直ぐに木乃香の作業の手伝いに行ってしまった。

「はあ・・・・・」
「アリス先生、お疲れですね」
「ああ、さよか」

今度はさよだった。ホムンクルスの肉体を得てから少ししして戸籍を作り直し、３－Ａに復学した彼女は今まで病気で休学していた事にしたのだ。

「私はまだ部活に入ってませんから、アリス先生を誘う所が無いですね」
「そっか・・・」
「あ、でも３－Ａには来て下さいね！　私、お化け役頑張りますから！！」

元お化けがお化け役とは皮肉だろうか？　まあ、本人がやる気みたいなので何も言わないが。

「勿論、自分が副担任しているクラスなんだし、必ず見に来るよ」
「はい！」

この後、アリスは和泉亜子たちバンドのコンサートや、エヴァンジェリンの囲碁・将棋部、茶々丸の茶道部にも誘われ、当日はかなり忙しくなる事が決定した。
スケジュール帳に書かれた学園祭当日の予定を見たスプリングフィールド兄弟は、その忙しさを改めて確認し、真っ白に燃え尽きるのであった。

「おーい！　ネギィー！　アリス兄ちゃん！　格闘大会もう締め切るらしいでー！　申し込みに行こうやー！」

男子中等部からわざわざ小太郎が走ってきた。手には学園祭で行われる格闘大会の申込用紙が三枚、小太郎とネギ、アリスの分だろう。

「格闘大会？」

「ん？　なんやアリス兄ちゃん、ネギから何もきいてへんの？」

「あ、ごめん兄さん・・・忘れてた」

「まあ、いいけど・・・・・・それで？」

何でも、学園祭で行われる格闘大会、優勝賞金が１０万円で、毎年麻帆良学園内部、外部から多くの強者が出場しているらしい。

ネギと小太郎は赤のあめ玉を食べて出場するつもりなので、アリスも一緒に如何か？　という事だ。

「へえ・・・・・・ま、良いよ。それなら早くエントリーしに行こうか」

アリスとネギ、小太郎は早速申し込みに向かう。途中で会ったエヴァンジェリンに成長したネギをナギに間違われたが、誤解が解けると彼女は面白そうだと言って自分も格闘大会に出場すると言って来た。・・・・・・彼女の対戦相手に同情するしかない。

学園祭前日、３－Ａは未だにお化け屋敷が完成しておらず、本日は徹夜で作業する事になった。

アリスはしずな先生に呼ばれ、世界樹前広場に向かっている。何でも魔法先生及び魔法生徒が会議を行う事になっているのだとか。

世界樹前広場に行くと既に魔法関係者が殆ど揃っていた。タカミチ、学園長、高音・Ｄ・グッドマン、佐倉愛衣、瀬流彦先生、明石

教授、葛葉刀子先生、ガンドルフィーニ先生、弐集院先生、神多羅木先生、シスターシャークティー、他数名だ。小太郎とシルヴィアも来ている。

「月詠は呼ばなかったんですか？」

「ふぉ？　お主まだ刹那くんに月詠くんを会わせておらんじゃろう？」

「・・・・・・あ」

忘れていた。木乃香達や自身の修行で完全に頭から忘却されていたのだろう。

「まあ、その内会わせるから良いか」

その後直ぐにネギと刹那も直ぐに来た。だが、ネギは此処に集まった人物達を見て何があるのか解っていない模様。

「学園長先生？　タカミチ？　兄さん？　あ、あのー、この方達は・・・・・・」

「うむ、ネギ君にはまだ紹介していなかったの・・・・・・ここに集まっとるのは、学園都市各地に散らばる小・中・高・大学に常時勤務する魔法先生・・・・・及び魔法生徒達じゃよ。全員ではないがの」

ネギには修行の為に魔法先生や魔法生徒の存在は教えていなかった。それを今回公にするという事は、学園長はネギが麻帆良学園魔法関係者を紹介するに値する魔法使いとして成長したと判断したのだろう。

「さて、今日わざわざ皆に集まってもらったのは他でもない。問題

が起きておる、解決の為に諸君の力を貸してもらいたい」

学園長の言う問題とは、生徒達の間で現在流行っている噂・・・世界樹伝説の事だ。学園祭最終日に世界樹の前で好きな人に告白すると上手く行くとか、願いが叶うなどと、そんな噂が流れている。

「私は唯の噂だと思ってたけど・・・・・・世界樹の魔力を考えると」

「うむ、アリス君の言うとおりじゃ・・・・・・マジで願いが叶ってしまうんじゃよ。２２年に一度じゃがな」

世界樹、正式名称“神木・蟠桃”と言い、魔法世界でも注目を受けている膨大な魔力を秘めた魔法の樹だ。

２２年に一度、蓄積された膨大過ぎる魔力が外に放出され、世界樹を中心とした六ヵ所に魔力溜まりを形成する。

何より危険なのはこの魔力、人の心に作用する働きがあり、人間の持つ本能から来る願い・・・性欲や子孫を残そうとする本能から来る気持ち、所謂恋心に最も強い効果を持つ。それこそ呪い級の力で、告白を成就させてしまうのだ。

「そこで、諸君には学園祭期間中、特に最終日の日没以降、生徒による世界樹伝説の実行――つまり、告白行為の阻止をしてもらいたい」

本来は来年の筈だった為、今年の学園祭は特に警戒する必要が無かったのだが、異常気象の影響を受けたのか１年早まってしまった。故にこうして緊急招集をして生徒の告白行為の阻止を依頼した。

「で、でも恋人になれちゃうならいいんじゃないですか？」

「あのねネギ・・・学園長の話を聞いてなかったの？　世界樹の力

は呪い級の力を発揮して人の恋心を操る。魔法学校で習っただろう？　人の心を操る魔法や魔法薬は禁止、使用及び作成は犯罪として取り締まっているって」

明日菜から聞いた話だが、ネギは麻帆良学園に来たばかりの頃、惚れ薬を作った事があるらしい。聞いた時は心底呆れてしまったが、アリスにとっては惚れ薬を含む人の心を操る薬は見慣れているし、聞き慣れている。

戦場では人心を操る薬は犯罪とは言え、普通に使われる事が多い。故にアリスはそういう薬や魔法が犯罪とは知っていても、戦争で使うのは有効的な代物だと思っている。

「マジでマズイのは学園祭最終日じゃが、今の段階からそれなりに影響は出始めておる。生徒達には悪いが、先に言った箇所及び世界樹前での告白が起きないよう見張っておいて欲しい」

本当ならこの召集もこれで終わる筈だった。だが、魔法生徒の一人、佐倉愛衣の一言で状況が動いた。

「誰かに見られてます」

「何？」

直ぐに動いたのは魔法先生の一人、黒いスーツを着たグラサンの男性、神多羅木先生だ。彼が得意とする風の無詠唱魔法でカマイタチを生み出し、上空に射出した。

直後に聞こえた機械が破壊される金属音、空を見上げるとバラバラになって散らばり、地面に落下してくる機械、見たところカメラの様だ。

「飛べ、影よ」

アリスはすぐさま己の影から使い魔を数体作成、この周囲に飛ばして視覚の共有を開始。それに気付いた学園長は他の魔法生徒が追跡するかという言葉に必要ないと答えていた。

「さて・・・・・たかが告白と思うなかれ！　コトは生徒達の青春に関わる大問題じゃ。但し魔法の使用にあたってはくれぐれも慎重に！　よろしく頼むぞ！！」

以上で会議は終了し、解散と共にこの広場全体に掛かっていた人払いの結界が解かれた。

「さて、私は寮に戻る。木乃香ちゃんやアキラに今回の話を伝えないといけないし」

アリスの従者達、シルヴィアは今回の招集に参加していたからいいが、来てない木乃香、アキラ、さよ、月詠に伝えないといけないのだ。

「シルヴィアは如何する？」

「あ、私はこの後少し・・・前日祭と言うのを見て周ろうかと思いまして」

「そっか・・・」

此処でシルヴィアと別れてアリスは寮に戻る為に瞬動でこの場を離れた。

寮に向かって歩いている最中だった。アリスは周囲から人の気配が消えた事に気付き、警戒をするが、近くにいる気配に心当たりがあって困惑する。

「何か用か？　・・・・・超鈴音」
「アイヤ・・・気付いていたカ、アリス先生」

建物の影から出てきたのは３－Ａの一人、超鈴音だ。

「何故お前が此処にいる？　私の使い魔が今もお前の後ろにいて、ネギと一緒にいるお前を見ているのだが」

因みに此処にはネギが居ない。しかしアリスの使い魔との視覚共有で見える映像には超の横にはネギと刹那、小太郎がいる。

「それは企業秘密ネ。それよりアリス先生に話があるガ・・・・・・いいカ？」
「話してみろ」
「私は今、とある計画を立てていル。その計画に先生も参加してくれるとうれしいネ」

計画の内容は話さなかった。参加するのであれば教えると言うが、信用できたものではない。

「どうカ？　アリス先生の夢の為にもなるとワタシは思てるネ」
「っ！　何を知っている・・・・・・？」

アリスの夢、それを知っている者は少ない。当然、超に教えた覚えは無い。

「それも協力してくれるなら教えるヨ」
「・・・・・断る」
「・・・そうカ」

若干残念そうな顔をした超だったが、直ぐにふてぶてしい笑顔を浮かべた。

「それじゃあワタシは帰るネ。アリス先生の夢の邪魔はしないから安心すると良いヨ・・・・・・再見！　・・・・・・アリス陛下」

そう言い残し、超は光と共に消えた。明らかに転移魔法ではないその光に驚いたが、それ以上に超が最後に言った言葉がアリスの耳に残り、呆然としてしまう。

「・・・・・・どういう事なんだ」

アリスの疑問は、近い内に解決する事になる。麻帆良学園の・・・・・・魔法使い全ての危機と共に。

三十六話　「前日祭！　始まる乙女のバトル」（後書き）

さあ、出てきたフラグ！　これでこの先の話に予想が出来る人は多いかも？

三十七話　「学園祭開催！」（前書き）

今回、月詠が可愛かったかも。

三十七話　「学園祭開催！」

英雄と女王の子

三十七話

「学園祭開催！」

『只今より、第７８回麻帆良祭を開催します！！』

アナウンスと共に、今年の麻帆良学園学園祭が開催した。一般入場も始まり、３日間の祭りが盛大に始まる。

「凄いな・・・・・・」

「ですね・・・・・・」

「こないに人いて、切れんのは残念や～」

アリスとシルヴィア、月詠は一般入場開始から然程時間が経っていないのにも関わらず、既に某鼠遊園地並みに賑わう道を見て呆然としていた。

「アリス様、過去のデータによると三日間の入場者数は約４０万人にもなるそうですよ」

「流石は、世界最大規模を誇る学園都市の学園祭だね」

因みに、仮装がＯＫらしいのでアリスは拳闘士の服と腰に下げた鞘に入っている“姫”を、シルヴィアは戦闘用の黒いドレスに魔法発動体の杖を、月詠はいつものゴシックロリータのドレスを着ている。

「さて、先ずは３－Ａに行こうか。アキラとさよも待ってるだろうし」
「ほんなら次はウチのクラスですえ～」
「その次に木乃香ちゃんの部活、アキラちゃんの部活ですね」

予定を決めていざ！　最初の目的地である３－Ａに向かった。
３－Ａの近くに来ると、何故か階段の方にまで続く長い行列が目に入った。随分と盛況なご様子で、副担任としては安心した。

「あ、見えた見えた」

教室に着くと、何故か椎名桜子と明石裕奈がお色気系のコスプレをしていて、お化け屋敷の看板の片隅には“ドキッ！　女だらけのお化け屋敷”という文字が。

「ちょっと待て」
「あ、アリス先生～！！」

アリスのツッコミの声が聞こえたのだろうか、桜子が手を振っている。

「椎名・・・・・あの看板とその格好は何だ？」
「えっとね～、クラスの皆で考えたんだけど、普通のお化け屋敷だと面白くないし、サービスコースとしてお客様一人につきコンパニオンの女の子が一人つくようにしたんだよ。タッチ一回５００円！」
「イメクラかっ！！」

何故１７歳のアリスがイメクラなんて知っているのか・・・・・・などというツッコミは無し。それはシルヴィアの心の中だけに留めておく事に。

「それよりほら！　もうネギ君も体験してるし、アリス先生も体験してってよ！」
「あ～・・・・・・シルヴィア、月詠、行くか？」
「・・・はい」
「楽しみやぁ～、５００円払わな」

タッチする気満々の月詠だった。

３－Ａのお化け屋敷は3つのコースから選べるようになっている。ゴシックホラー、日本の怪談、学校の怖い話、この三つから好きなコースを一つ選んで楽しめる。
それぞれのコースの入り口にはあやか、まき絵、アキラが立っており、あやかはゴシック系の服を、まき絵は和服、アキラは麻帆良学園女子中等部の旧制服を着ていた。

「あら、アリス先生。ようこそいらっしゃいました」
「ああ、雪広、と佐々木さん、アキラも」
「センセー！　どのコースにする？」
「・・・・・・」

アキラが期待の篭った目でアリスを見ていた。一応約束もあるのでアリスとシルヴィア、月詠はアキラの案内の下、学校の怖い話コースに入る。

「へえ」
「凄いですね、これは・・・・・・」
「広いなぁ～」
「うん、超さんの最新技術だって言ってた」

超の名前が出てアリスは一瞬表情を強張らせるが、本当に一瞬だったので気付いた者は居なかった。
その時だった。アリスの足がぐにゃっと何か柔らかい物を踏んだのは。

「ん？　・・・・・って学園長！？」
「あらあら・・・」
「死んどるなぁ」

よく見ると作り物だった。本当に良く出来ている物だ・・・・・・特に後頭部の辺りが。

「それに和泉さんと村上さんもか・・・・・・」

背後には体操服姿の亜子と夏美が頭に斧や鎌が刺さって血を流しながら倒れている。

「これは本人ですね・・・・・随分と手の込んだメイクです事」
「ん～、ホンモンの死体とはやっぱ違うな～」

随分、脅かし甲斐の無い客だ。冷静に置いてあるモノの分析をしている辺りが特に。

「先生、この先にはさよちゃんも居るよ」
「そうか・・・怖がってないと良いけど」

幽霊だった時からお化けが怖いと言っていた彼女の事だ。この雰囲気に中てられてビクビクしている姿が脳裏に過ぎった。

「そうだ、後で水泳部のたこ焼き屋にも行くよ」

「うん、待ってる」

最近、漸く敬語が抜けてきたアキラ、アリスもその方が親しみがあって嬉しい。アキラも最初こそ恥かしがっていたが、大分慣れた様子。

「本当はここで私の首が落ちた様に見せるんだけど、いらないよね？」

「ん？　まあ、そこの床にある仕掛けを見れば想像が付くしね」

「人一人分は入りそうな窪みですね」

床には丁度アキラが入りそうな窪みがあり、横には床の模様のシートが置いてある。

「後は窓の向こうに柿崎と釘宮、那波も居るな」

「天井には鳴滝さんと長瀬さんですね」

脅かし甲斐が本当に無さ過ぎる。まあ、三人とも悪魔との戦闘経験もあるし、月詠なんかは妖怪を飼い慣らしている位だから、この程度で驚けという方が無茶だ。

「それに、麻帆良には幽霊よりも怖い吸血鬼が居るしね」

「あははは・・・・・・」

その吸血鬼に心当たりがあり過ぎてアキラは乾いた笑いしか出てこなかった。

お化け屋敷の中でさよにも挨拶してからアリス達は次の目的地に向かった。

「月詠のクラスは確か2－Fだっけ？」
「せや、ウチのクラスはゴスロリ喫茶なんや～」
「ご、ゴスロリ喫茶・・・ですか」

また随分とマニア受けしそうな喫茶だこと。最も、月詠の好む服のセンスから大体は予想出来た事だが・・・・・。

「アリスはんとシルヴィアはんはお茶でも飲んでってな～、ウチはこれからクラスの手伝いやねん」
「そっか、頑張って」
「また後でね、月詠ちゃん」
「ほなな～」

シルヴィアに頭を撫でられて満面の笑みを浮かべた月詠は小走りでクラスメートの下に走って行った。
最近、シルヴィアと月詠は仲が良く、まるで姉妹の様な関係を築いているのだ。シルヴィアも月詠を本当の妹の様に可愛がっているし、月詠もシルヴィアを姉の様に慕っている。お互いに家族が居ない境遇同士、色々と馬が合うのだろう。

「月詠は、良い傾向だね」
「はい。最近は殺人衝動も減ってきて、偶に一緒に寝るんですが、朝起きた時に寝ぼけて私の事を“姉様”って呼んでくれるんですよ」
「そっか・・・・・」

本当に、良い傾向だ。戦闘になれば月詠は今までと変わらず狂気なまでの強さを発揮するが、日常生活では年相応の純粋な笑顔を見せる様になった。

「アリス様・・・もし月詠ちゃんが良いって言ってくれたら、私あ

の子を義理の妹として引き取ろうかと思うんです」
「へえ・・・うん、良い考えだと思う。月詠と本当に姉妹になれると良いね」
「はい！」

月詠のクラスを出た後、木乃香の占い屋、アキラのたこ焼き屋を回り、夕方には二人とも警備の仕事に入った。

警備の仕事中、突如世界樹が光り輝き、呪いが発動した気配を感じ取った。

「誰かが告白を成功させてしまった！？」
「場所は・・・・・オープンカフェテラスです」

即座に瞬動で屋根伝いに移動するアリスとシルヴィア、辿り着いた先で見たのは目がイッてしまったネギと戦う明日菜の姿、傍には何故か全裸になった高音と愛衣もいる。

「あの馬鹿！　呪いを受けてる！！」
「仕方ありませんね・・・・・魔法の射手・連弾　氷の３１矢」

シルヴィアが放った氷の矢３１本がネギの足元に着弾し、地面が凍る。それに足を取られたネギがバランスを崩した隙にアリスが瞬動でネギの背後へ移動、腰から“姫”を抜いて柄を首に打ちつけようとしたのだが、かわされてしまう。

「チッ、戦いの歌を発動中か・・・・・ならば同じく、“戦いの歌”！」

普段は戦いの葬送曲を使うアリスだが、戦いの歌を使えない訳で

はない。ネギ相手に戦いの葬送曲を使うのは勿体無いので、ここは戦いの歌にしたのだ。

「兄さん・・・兄さんも邪魔するんですか？　なら排除します」
「調子に乗るなよ小僧・・・・・貴様程度の雑魚が、私を排除出来るとでも言う気か？」

アリスにも最強クラスの魔法使いとしてのプライドがある。下級クラスのネギに排除するなどと言われて、頭に来ない筈も無い。

「高速詠唱　奈落の業火！　術式固定　黄昏の剣、魔法付与」

地獄の焔姫にした“姫”を構えたアリスに流石の明日菜も慌てた。

「ちょ、ちょっとアリス先生！　それは幾らなんでもやり過ぎよ！」
「普段なら私もそう思う・・・でもね、あの馬鹿は呪いの影響をモロに受けて障壁を最大に張ってるんだ。ネギ程度の障壁なら問題ないと言いたいけど、今は呪いのお蔭か魔力が世界樹からネギに供給されている」

世界樹の魔力で張られた障壁は、流石に術式武装無しでは突破できない。いや、出来ない事は無いが、己の切り札の一つをこんな馬鹿げた事で曝したくないのだ。

「恨むなら自分の未熟を恨めよネギ・・・・・悪いが身の無事は、保障しない」

瞬動に入ったアリスはネギの視界から消えた。背後から“姫”を横薙ぎに振って障壁を黒い炎で焼き尽くす。
背後にアリスが現れた事でネギが反応した。中国拳法の独特な動

きでアリスの懐に入って拳を入れようとしているのだが、残念ながらアリスとネギでは実力の差が絶望的に開いている。
結果、アリスに障壁を焼き尽くされたネギは無防備となり、拳を入れることも出来ないまま首筋に“姫”の柄を叩き込まれ、意識を失ってしまった。

「まったく・・・・・・一応、傷一つ付けなかったから、これで良い？」
「あ、うん・・・術式武装も障壁を破る為だって判ったし」
「この馬鹿が起きたら事情を説明してあげて、私とシルヴィアは警備の途中だから戻るんで」

高音と愛衣には直ぐに着替えてくるよう指示を出してアリスとシルヴィアはこの場を去った。
学園祭一日目から随分と忙しく、これが3日も続くのかと思うと心労が絶えないアリスは、将来禿げるのではないかと心配してしまった。とりあえず、管理人室に常備してある胃薬は増やすべきだという事が判明しただけ、収穫はあった・・・・・のだろうか？

三十七話　「学園祭開催！」（後書き）

次回からまほら武道会編に突入です！

三十八話　「武道会予選」（前書き）

今回は短いです。次回から本戦始まり！　トーナメント如何しようかなぁ……。

三十八話　「武道会予選」

そろそろ武道会の時間が迫ってきたので、前以て聞いておいた会場に向かったアリスと付き添いのシルヴィアだったが、会場入り口に張られている張り紙を見て呆気に取られた。

「会場変更・・・・・・？」

「龍宮神社なら此処から電車での移動になりますね」

会場変更とは何があったのだろうか？　会場を変更しなければならないほど参加人数がいるのか。しかし、聞いた話では麻帆良祭での賞金がでるイベントは１００万が当たり前で、１０万しか賞金が出ない武道会は随分とショボイものだとの事だ。会場変更を余儀なくされる程の参加人数が集まるとは思えない。

「とりあえず、行ってみるか」

「そうですね、月詠ちゃんにも連絡しておきます」

シルヴィアが月詠に会場変更の旨をメールで伝えた後直ぐに電車に乗り、二人は龍宮神社前で降りる。

龍宮神社前はかなりの人混みとなっており、見たところ全員武道会目的と思われた。

「たかが１０万程度の賞金に、此処まで賑わうものか？」

「他のイベントに出ればもっと多い賞金が出ますのに・・・・・・」

人が特に群がっている所に行って、そこに掲示されている張り紙を見ると、そこに書かれていたのは優勝賞金ＵＰという事、その金額一千万という額、参加者継続受付中という文字。

「一千万って・・・・・・そんな金額、何処から」

「ええーーっ！！　一千万！？」

「あらネギ君」

いつの間にかネギと小太郎、それと何故か綾瀬夕映が来ていた。

それは兎も角、周りの人間に話を聞くと、とある人物が複数の大会を買い取ってこの大会に纏めてしまったのだとか。おかげで２０年前まで麻帆良祭の目玉イベントとして注目されていた伝説の大会が復活したのだと。

「２０年前・・・・・・？　（父さんが昔出たって言う大会の事か？）」

昔、ナギが言っていた麻帆良祭の大会を思い出した。確かあの時、父は目玉イベントだったと言っていた気がする。

「あ、ネギ、アリス先生とシルヴィアさんも、こんなトコで何やってんの？」

「あ、みんあお疲れ様です」

向こうから明日菜と刹那、木乃香、アキラ、さよが歩いて来た。

自由時間が出来たので皆で見て周っていたらしい。

さっそくネギは武道大会の話をすると、やはり明日菜も驚き、優勝賞金の多さに目が眩んでいた。

「アスナさんも出てみたらどうですか？」

刹那も明日菜に出てみてはと進めるが、本人は迷っていた。

「ようこそ！！　麻帆良生徒及び部外者の皆様！！」

突如聞こえた和美の声、見れば社の方にマイクを持った和美が司会を務めているではないか。

「復活した“まほら武道会”へ！！　突然の告知に関わらずこれ程の人数が集まった事に感謝します！！　優勝賞金は一千万円！！伝統ある大会優勝の栄誉とこの賞金、見事その手に勝ち取ってください！！」

そして、現れるのは大会を買収して主催者となった人物、それは超鈴音だった。

「私が・・・・・この大会を買収して復活させた理由はただひとつネ。表の世界、裏の世界を問わず、この学園の最強を見たい・・・それだけネ」

この時点で妖しさ満点だが、この次の言葉が本気でマズイ。

「２０数年前まで、この大会は元々裏の世界の者達が力を競う伝統的大会だたヨ。しかし、主に個人用ビデオカメラなど記録機材の発達と普及により、使い手達は技の使用を自粛、大会自体も形骸化、規模は縮小の一途をたどた・・・・・だが私はここに最盛期の“まほら武道会”を復活させるネ！　飛び道具及び刃物の使用禁止！！　・・・そして呪文詠唱の禁止！！　この２点を守ればいかなる

技を使用してもＯＫネ！！」

刃物使用禁止は神鳴流剣士に、呪文詠唱禁止は魔法使いに言っていた。しかもこんな一般人が大勢居る中で、だ。

「マズイ・・・これが目的か！」

そしてアリスはこの言葉で超の目的が判ってしまった。確かにアリスの夢の邪魔にはならないだろう、しかしアリスの立場が危うくなる危険性も出てきた。

「さて・・・・・これは早めに麻帆良を出る準備をしておいた方が良いかもしれないな」

アリスが小声で言った事にシルヴィアも頷いた。

さて置き、詳細説明に入ってアリスやネギの周りでは色々な人物が集まってきた。長瀬楓、龍宮真名、古菲、三人とも出場するつもりらしい。

他にも最初から出場予定だったエヴァンジェリン、超の発言を聞いて不味いと思って出てきたのであろうタカミチも出場する事に。

「ああ、一つ・・・言い忘れてるコトがあったネ。この大会が形骸化する前、実質上最後の大会となった２５年前の優勝者・・・・・・学園にフラリと現れた異国の子供、“ナギ・スプリングフィールド”と名乗る当時１０歳の少年だった」

明らかにネギと、アリスを見て、超はそう言い残した。

ナギの名が出て、ネギは覚悟が決まった様だ。結果、この場に居るメンバーで大会出場するのは、アリス、ネギ、シルヴィア、小太郎、明日菜、刹那、エヴァンジェリン、楓、古、真名、アキラ、木

乃香、タカミチだ。

「事実上の決勝トーナメントメンバーだな」

一般人ではこの面子に勝てる人間は存在しないだろう。ていうか、居たら見てみたいものだ。

まほら武道会の予選会は２０名１組のバトルロワイヤル形式、Ａ～Ｈまでの組から２名ずつが選出され、本戦のトーナメントに進出出来る。

本戦は翌朝８時から始まり、今日中に本戦の組み合わせは決まる。

「さて、シルヴィアと木乃香ちゃん・・・二人は完全な後衛型の魔法使いだけど、まさか負けたりはしないよね？」

「勿論です。アリス様の従者として一般人に負けるなんて無様を曝しはしません」

「当然や、アリスさんに鍛えられてんねんから、負けるわけにいかんえ」

木乃香の隣でアキラも力強く頷いている。アキラは木刀を、木乃香は鉄扇を、シルヴィアは棒を持ち、それぞれ魔力で最大まで強化を施した。

「さて、私も・・・・・・」

アリスも影の中から木製の西洋剣を取り出し、同じように魔力で強化を施して表面を影でコーティングする。

大会Ａグループにはアリスとシルヴィアが、Ｂグループにネギ、Ｃグループは明日菜と刹那、Ｄグループは古と真名、Ｅグループに楓と小太郎、Ｆグループにはエヴァンジェリンとタカミチ、Ｇグル

ープにアキラと木乃香が別れ、それぞれ本戦に進出を果たした。

「明日・・・・・・果たして如何なるのやら」

他の本戦出場者の中には高音と愛衣も確認した。そして・・・・・・。

「こんな所に居たんだ・・・・・・アル」

アリスの視線の先に居るのは、頭から白いローブを被って顔を隠している男。一見、誰だか判らないが、感じられる魔力に覚えがある。

アリスの魔法技能の師匠の一人であり、初代・紅き翼の一人にして英雄、アルビレオ・イマその人であった。

三十八話　「武道会予選」（後書き）

そろそろ寝ないと連投しようと思ったけど、間に合わなかったｏｔｚ

三十九話　「本戦前」（前書き）

次回からは本戦です。間違いなく……。

三十九話　「本戦前」

三十九話
「本戦前」

本戦トーナメントの対戦順が決まった。
前半は第一試合・佐倉愛衣ＶＳ犬上小太郎、第二試合・長瀬楓ＶＳクウネル・サウンダース、第三試合・近衛木乃香ＶＳ大河内アキラ、第四試合・龍宮真名ＶＳ古菲。
後半の第五試合・アリス・スプリングフィールドＶＳ高音・Ｄ・グッドマン、第六試合・ネギスプリングフィールドＶＳタカミチ・Ｔ・高畑、第七試合・神楽坂明日菜ＶＳシルヴィア・オーギス、第八試合・エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルＶＳ桜咲刹那、以上の組み合わせとなった。

「このか、と・・・・・・」
「アキラちゃんと、や・・・・・・」

木乃香とアキラは互いに向き合った。お互いアリスの従者であり弟子、そしてアリスに好意を寄せるライバル同士でもあった。
今までは修行の中で戦う事のあった二人だが、それはあくまで修行の一環に過ぎない。今回の様に勝利を掛けて全力で戦う機会は一度も無かった。

「負けへんよ・・・・・・」
「私も・・・・・・勝たせてもらう」

二人とも闘志を燃やし、気が付けば互いの魔力が体から溢れ出し、オーラとなってぶつかっていた。

「私は一回戦に勝てばネギかタカミチと・・・・・・」

アリスの一回戦の相手は正直、眼中に無い。それよりもネギとタカミチの方が重要なのだ。

「ネギがタカミチに勝てるとは思わないけど・・・・・・出来れば一度ネギと全力で戦ってみたいものだ」

ネギがエヴァンジェリンに弟子入りしてからどれ程強くなれたのか、兄として、一人の魔法使いとして、興味がある。

「まあ、だからってタカミチに手を抜けなんて言わない。タカミチには全力でネギを潰すように言っておかないと」

本気ではないとは言え、全力のタカミチ相手に勝てないのなら、ネギにアリスと戦う資格は無い。仮に勝てたのなら、その時は・・・・。

「私も、全力でネギの相手になろう」

この時、ネギは背筋に悪寒が走ったのだが、それが何なのかに、気付く事は無かった。

あの後、３－Ａとタカミチ全員で一日目の打ち上げを行い、朝方の４時位まで騒いでいた。流石にタカミチは１時くらいで帰ってしまったが、生徒達とネギ、アリス、シルヴィアは最後まで打ち上げ

に参加していた。
そして現在、武道会に参加する面々はエヴァンジェリンの別荘の中に入って試合前の修行と休息をしている。

「さて、アリスは月詠を呼びに行ってるから・・・・・木乃香ちゃん！　桜咲！　ちょっと来て！」

呼ばれて来た二人を別荘と外を繋ぐ魔方陣の前まで連れて行く。
丁度その時、シルヴィアと月詠が転移してきた。

「なっ！？　貴様は月詠！？」
「どうも～、神鳴流です～。お久しゅう、刹那センパイ」

シルヴィアの隣にいる月詠を見て刹那が臨戦態勢になった。だが・・・・・。

「あ～月詠ちゃんや～。来たんやね」
「シルヴィアはんとアリスはんに呼ばれてな～、なんやお嬢さま武道会出るんやって？」
「えへへ、一回戦からアキラちゃんと戦うことになってしもたわ」

随分と仲の良さそうな木乃香と月詠に刹那が困惑する。一体如何いう事なのかとアリスを見ると、アリスは月詠の後ろに立って肩に手を置いて刹那の方に向き直る。

「紹介が遅れた。彼女は京都の一件から私の従者となった月詠だ。敵ではないから、そんなに警戒する必要は無いよ」
「し、しかし！　彼女は！！」
「そうだね・・・確かに一度は敵だった。でも、詠春さんからも頼まれてるし、既に彼女は二代目・紅き翼の一員、西と東を繋ぐ親善

大使でもある」

詠春の名前が出てくると刹那も強くは言えない。結局、月詠の事は完全にではないが認め、条件として木乃香に手を出したら容赦しないと約束を取り付ける事で納得してくれた。

海岸に戻って月詠が居る事に騒いだ人間は他にも居た。ネギと明日菜、この二人も月詠の登場に驚き、警戒と臨戦態勢に入ろうとするが、刹那の時と同様、アリスからの説明を受け、渋々納得した。

今はネギは小太郎に瞬動術を教わっていて、明日菜と刹那は剣の鍛錬、木乃香は瞑想、アキラは海に入って水とのシンクロ訓練をしている。

「さて、私とシルヴィア、月詠は如何しようか？」
「やる事は・・・・・無いですね」
「ウチは出えへんからなぁ」

こんな大勢の中でアリスは自身の修行をする気は無い。ならば何をしようかと思ったが、丁度エヴァンジェリンがネギに指輪型の魔法発動体をプレゼントしてアリスの所に歩いてきた。

「アリス、丁度良い所に居たな」
「ん？」
「いや何、前々から貴様に良い魔法を教えてやろうと思っていたからな、良い機会だ、今教えてやろう」
「良い魔法？」

エヴァンジェリンとアリスで被っている属性は闇、だが自慢じゃないが闇系の魔法はアリスも大半は使える。教えてもらう魔法なんて何があるのか。

「見ていろ・・・・・・断罪の剣！」

エヴァンジェリンの手刀にした右手から魔力で出来た剣が伸びる。エヴァンジェリンが好んで使う近接戦用魔法、断罪の剣だ。

「これが断罪の剣、貴様はまだ使えないだろう？」

「まあ、“姫”があったから必要ないと思ってたし」

「貴様の術式武装とも相性が良いだろうから、覚えておいて損は無いぞ」

断罪の剣と術式武装の相性が良い。それは初めて聞く事だが、何故彼女にそんな事が判るのだろうか。

「確かめたからな、それなりに強度のある武器は別荘に幾つか転がっているし、それらを使って私が術式武装を試してみたら断罪の剣が中々、良い効果を出した」

アリスの固有技法である術式武装を難無く使うエヴァンジェリンは、流石と言うべきだろう。最も、術式武装自体が元々彼女の編み出した闇の魔法を基に作り出した技法なのだから、出来ても可笑しくないのだが。

「ほれやってみろ。呪文は“来たれ罪人の闇　切り裂け”だ」

「ふむ・・・・・ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　来たれ罪人の闇　切り裂け！　断罪の剣！！」

指輪を填めた左手に断罪の剣が発生した。その精度を確認、流石にエヴァンジェリンほどの精度にはならなかったが、十分なものだ。

「これは、切り札とも相性が良さそうだ」

「ふむ、元々闇属性を持っていて、その修行もしていたからだろうな、初めてにしては中々の出来だ」

後は無詠唱で出来る程極め、更に無詠唱でも威力、精度が落ちないようにすれば完成だ。

「まあ、明日の試合で使う事は無いだろうが・・・・・・今後の事では、使う機会も多いだろう」

「助かるよ」

この後、エヴァンジェリンに誘われてアリスとシルヴィア、月詠はテラスで晩酌へと洒落込んだ。

武道会、本戦出場者全員が裏の人物だ。本気を出せないとは言え、間違いなく激戦となるのは間違い無い。そして何より、初代・紅き翼の一員が選手として参加している以上、一切気を抜く事が出来ない。

「まあ、アルに今の私の力を見てもらうのも・・・・・・良いかもしれないね」

嘗て、ナギと共にアリスに魔法を教えてくれた腹黒男、顔を思い出して何故か胸焼けしてしまった。

「とりあえず、今まで音沙汰無かった事については、顔面にラカンインパクトでもしておけば良いかな」

どうせ死なないだろうし、何より見たところ幻影体なのだからダメージは無いだろう。

「とりあえず、本戦で使う装備は木製の剣、それとえいゆうの籠手

で良いな」

夜、皆が寝静まった頃、アリスは本戦で使用する装備を確認する。木製の剣にアーティファクト、指輪型発動体とピアス型発動体、十分だろう。

「明日の二回戦からが楽しみだ」

既に自分の一回戦の対戦相手に興味は欠片も無いので、思いを馳せるのは二回戦からだ。

「タカミチと戦えるか、それとも・・・・・・」

何にしても、楽しみである事に変わりは無い。

三十九話　「本戦前」（後書き）

トーナメント表で苦労したけど、一部原作、一部オリジナルで構成しました。

四十話　「巫女対決、木乃香ＶＳアキラ」（前書き）

遂に武道会編！　小太郎と愛衣、楓とアルの試合は原作を参考にしてください。

四十話　「巫女対決、木乃香ＶＳアキラ」

英雄と女王の子

四十話

「巫女対決、木乃香ＶＳアキラ」

まほら武道会本戦、それは龍宮神社内の一角で行われる。

敷地としては都内、日本国内の神社としては破格な為、会場も十分すぎる程広く、２０年前まで武道会の会場として使用していた場所を改装して再び使用する事になった。

ステージとして使われるのはの周囲を水に囲まれた能舞台、場外及び水への落下は１０カウントで失格となるルールで、他にもダウン１０秒、気絶、ギブアップでも勝敗が決まる。もし試合時間の１５分以内に勝負が決まらなかった場合は観客のメール投票に判断を委ねるらしい。

会場に向かうアリス、シルヴィア、ネギ、明日菜、刹那、木乃香、アキラ、小太郎は会場の広さに圧倒されながら控え室に入った。

既に控え室にはタカミチを含め、本戦出場者全員が揃っており、誰もが闘志を燃やしている。

「おはようネギ君、アリス君」

「ああ、おはようタカミチ・・・随分と嬉しそうだね」

「うん、ネギ君の顔を見て少しね・・・・・・昨日とは随分と顔つきが違っているから嬉しいんだ。今日ようやくネギ君が初めて会った頃からどれだけ成長したかを見れるんだからね」

タカミチの本当に嬉しそうな表情を見て、ネギがゴクッと唾を飲み込んだ。一瞬だが気圧されたのだろうが、次には既に表情を引き

締め、真っ直ぐタカミチと目を合わせた。

「・・・タカミチ、僕、今日は頑張るよ。父さんに負けない為に・・・・・だからタカミチ、手加減はしないでね」

成る程確かに、アリスの目から見てもネギは良い表情になった。まだまだ一人前の“男”には程遠いが、間違いなく“男の子”の表情だ。

「二回戦の相手は私だ・・・・・相手がタカミチになるか、ネギになるか・・・楽しみにさせてもらうよ」

ならばアリスも、一人の男として、二人にそう宣言し、アキラと木乃香と雑談しているシルヴィアの下に向かった。

『只今より、まほら武道会第一試合に入らせていただきます！！』

遂に始まった一回戦、第一試合は小太郎と魔法生徒の一人である佐倉愛衣だ。

「ふぅん・・・実力は小太郎の方が断然上か」

見る価値も無い試合になりそうだ。本気でそう思うアリスだが、小太郎からちゃんと見とけと言われているので、渋々見守る事に。

『第一試合、Ｆｉｇｈｔ！！』

試合が始まり、愛衣がアーティファクトである箒を召喚した。だが小太郎が瞬動で懐に入り、左手を一気に振り上げ、その風圧で愛

衣は１０ｍくらい吹き飛ばされ、水の中に落下。１０カウントを取られ、第一試合は1分も掛からずに小太郎の勝利に終わった。

「やっぱり見る価値が無かったね」

続いて第二試合、クウネル・サウンダースと長瀬楓の試合だが・・・・・。

「まあ、長瀬も強いとは思うけど・・・・・相手がアルだからなぁ」

中級クラスの楓では最強クラスの最上位に属しているアルビレオ・イマに勝つのは無理というもの。特にアルは現在幻影体、まともにダメージを与えるにはこの大会のルール上不可能に近い。

結果、善戦したものの、アルお得意の重力魔法でＫＯ。二回戦第一試合は小太郎ＶＳアルに決定した。

そして注目の第三試合、木乃香とアキラの試合だ。二人ともステージに立ち、アキラは木刀を、木乃香は鉄扇を構えてメラメラ燃えていた。

「いくえ、アキラちゃん」

「負けないよ、このか」

『それでは第三試合、ｆｉｇｈｔ！！』

和美の合図と共に二人だ同時に瞬動で間合いを詰める。ぶつかるのは互いに魔力で強化した木刀と鉄扇、ぶつかるたびに衝撃波が生まれ、和美が慌てて場外に避難した。

「このか・・・・・ここ、良いフィールドだね」

「何や？　いきなり・・・・・っ！」
「気付いた？　此処には私の本来の獲物が沢山あるよ」

能舞台の周囲を囲うように存在する大量の水、此処はアキラの為に容易されたと言っても過言ではない程、アキラ有利のフィールドだ。

「おいで・・・私の可愛い妖精たち」

アキラの言霊とアーティファクトの力によって周囲の水が盛り上がり、水柱を作る。その全てが木乃香に襲い掛かり、水圧で木乃香を潰そうとする。

「甘いわ！」

だが、木乃香も伊達にアキラと共に修行していない。アキラの戦法は手に取るように判る、閉じていた鉄扇を開いて魔力の刃を水流に向けて飛ばした。

「激流閃！！」

飛ばした魔力が扇子の形になった。込められた魔力の量は木乃香の魔力から考えて破格、所謂業物と呼ばれる刀や剣よりも鋭い刃となって水流を切り裂き、能舞台に雨を降らせる。

だが、アキラは既に木乃香が水流の相手をしている間に木乃香の懐に入っていた。横薙ぎに表面を２ｔの水を圧縮してコーティングした木刀を振るう。

「ぐぅっ！？」

物理防御障壁を展開しているとは言っても、木刀にコーティングしている2tの水が出す圧倒的な水圧に破壊され、木乃香の腹部に命中する。
トラックに轢かれたかのような衝撃が木乃香の身体を駆け抜け、フィールドから飛び出て水の中に落下する。

「落ちたね、私の檻に！」

追い討ちを掛ける様にアキラは木乃香が落ちた水を操り、水中にいる木乃香に掛かる水圧を高くした。

『おおーっとぉ！！？　大河内アキラ選手の水を使った猛攻の前に、近衛木乃香選手は場外！！　いやしかし・・・このか大丈夫！？何か上がってこないんだけど！！？』

和美が上がってこない木乃香の心配をするが、審判としてカウントを取る。
だが、カウント6になった時にそれは起きた。木乃香が落ちた場所の水が突然沸騰し、一気に蒸発して水蒸気の煙を出して和美とアキラの視界を奪ったのだ。

『な、何が起きたぁ！？　突然水が蒸発して・・・・・・何も見えない！！』
「やるねこのか・・・・・水から出られないなら、自分を捕らえてる水を蒸発させれば良い。苦しいはずなのにソレを思いつくなんて」

アキラは直ぐ背後から殺気を感じて、咄嗟に木刀で振り向き様に切りかかる。案の定、そこには木乃香が居て、アキラの木刀を片方の鉄扇で受け止め、もう片方の鉄扇に魔力をチャージしていた。

「今度はこっちの番や」

魔力をチャージした鉄扇が開かれ、それを一閃、魔力の塊がアキラの腹部を殴りつけてステージの隅まで吹き飛ばした。

「グゥッ！　けほっ」

流石は極東一の魔力の持ち主、魔力による攻撃は全て並みの魔法使い一人分の魔力が込められている。ただの魔力の塊だというのにトンでもない威力だった。

「せいっ！！」
「っ！」

瞬動でアキラに近づいた木乃香が鉄扇を両方とも開いて舞の如く切りかかってくる。

咄嗟に木刀で弾いて後退しようとしたが、後ろは場外、逃げ場を求めて横に飛んだ。だが、木乃香はそれを追って魔法の射手を無詠唱で発動、５本の光の矢がアキラの上から降り注ぐ。

「水楯！！」

水の盾で光の矢を防ぎ、同く魔法の射手、氷の矢を同数無詠唱で放ち、兎に角木乃香から距離を取ろうとするが、木乃香の猛攻は続く。

「いくで！　月詠ちゃんから教わったウチの切り札！　神鳴流奥義！　斬空閃！！」

鉄扇から放たれた斬空閃、まさか木乃香が神鳴流を使うとは思わなかったアキラは虚を突かれ、まともにソレを受けてしまった。

「ぐっ・・・・・・まさか、このかも・・・月詠さんから教わってたなんてね」

「ウチも・・・・・・？　っ、まさか！」

「神鳴流奥義・・・斬岩剣！！」

アキラの振り下ろした木刀をかわした木乃香だったが、木刀はそのまま床を破壊して破片を木乃香に飛ばす。

飛んできた床の破片を弾きながら、木乃香は己の迂闊さに内心舌打ちした。月詠から神鳴流を教わっていたのは、何も木乃香だけじゃなかったのだ。

「迂闊やったなぁ、アキラちゃんが好んで使う武器を考えたら、予想できた事やったのに」

「でも、木乃香も凄いよ。神鳴流は獲物を選ばないってい聞いてたけど、まさか鉄扇で使うとは思わなかった」

「練習したからなぁ」

試合時間も残り少ない。そろそろ決めないとメール投票による決着という後味悪い結果になってしまう。それだけは絶対に勘弁願いたいので、互いに次の一撃に全てを込める事にした。

「水シンクロ・・・・・・水流装着」

「光の１矢、鉄扇装鎮」

再び水が水柱を作り、それがアキラへ伸びる。アキラの身体を覆った水は背中と木刀に集約して水の翼と木刀を核にした水の刀へ変化した。

木乃香は光の矢を1本発動、右の鉄扇に装鎮して投擲の構えに入る。当然、光の矢に込められた魔力はネギが普段使う雷の暴風に込めている魔力と同等だ。

「水流特攻！　爆水閃！！」
「光扇翔矢！！」

背中の水の翼が水流をジェットの様に飛ばし、瞬動と同時にソレが行われた結果、アキラの瞬動は縮地クラスのスピードになる。
方や木乃香は光の矢を装鎮した鉄扇を投擲、光の矢と一体化した鉄扇は一直線に瞬動中のアキラに迫る。
迫る光の鉄扇を迎撃する為にアキラは水の刀を鉄扇にぶつけた。膨大な魔力が込められた光の矢と一体化した鉄扇と縮地クラスのスピードで動いていたアキラの水の刀のぶつかりは激しい衝撃波と閃光を引き起こし、観客を含めた全員の視界が奪われた。
衝撃波と光が収まり、眩しさに瞑っていた目を開けると、ステージには木乃香の首筋に木刀を突きつけているびしょ濡れのアキラと、残った鉄扇を閉じてアキラの心臓部分に突きつけている木乃香の姿があった。

「・・・・・やるね、このか」
「アキラちゃんも、な」

お互い、柔らかい笑みを浮かべて相手を称え、そして・・・・・。

「くっ・・・・・あ」

アキラの身体がガクリと崩れ落ち、倒れてしまった。

『大河内選手ダウン！！　カウントを取ります！！』

和美のカウントを取る声が耳に届く。だが、木乃香は既に一杯一杯で声が耳に届いていないのか、じっとアキラを焦点の定まらぬ瞳で眺めていた。

「あ、アカン・・・・・・」

疲労から、木乃香の視界が暗転した。倒れる寸前、和美が木乃香の勝利を宣言する声と、好きな人の温もりを感じて、そのまま木乃香は意識を失うのだった。

四十話　「巫女対決、木乃香ＶＳアキラ」（後書き）

アキラと木乃香、どちらを勝たせるか悩みましたが、木乃香になりました！

四十一話　「英雄を追う、大きな背中と小さな背中」（前書き）

今回は殆どがアリス視点ですが、次回はちゃんとネギ視点から始まりますので。

四十一話　「英雄を追う、大きな背中と小さな背中」

英雄と女王の子

四十一話

「英雄を追う、大きな背中と小さな背中」

木乃香とアキラの試合、木乃香の勝利で終わった。

試合終了直後に倒れた木乃香も含め、現在医務室で眠っている。

「さて、次の次は私か・・・・・・ん？　桜咲、如何した？」

「アリス先生・・・・・・いえ、お嬢さまとアキラさんが神鳴流を使っていた事に驚きまして」

「ああ、近接戦の心得が欲しいって月詠に頼み込んでいたからね」

アリスが教えても良かったのだが、アリスの近接戦は我流、神鳴流も人に教えれる程極めている訳ではないから、月詠なら適任だと思い、アリスが彼女に押し付けたのだ。けっして面倒だった訳ではない。

「そうですか・・・・・・」

どうも刹那の様子が可笑しい、少し気になったのだが、その時会場から歓声が響いてきた。どうやら第四試合が終わったらしい。

「じゃ、私試合だから・・・二人を診てやってて」

「はい」

刹那と別れ、アリスは試合会場へ。ステージに上がると既に高音

がスタンバイしており、闘志をメラメラ燃やした瞳をアリスに向けていた。

「この日を待っていました、アリス先生！！　前は不覚を取りましたが、今日の私は前とは違いますよ！！」

「・・・・・・面倒」

思わず小声で呟いた。唯でさえ実力に差が大きく開いているというのに、高音はそれに気付いていない馬鹿なのか、それとも何か秘策でもあるのか。どっちでも良いが、さっさと終わらせたいアリスだった。

『それでは一回戦第五試合！　Ｆｉｇｈｔ！！』

「いきます。アリス先生は魔法剣士・・・・・・ならば私も近接戦闘でお相手せねばなりません。今こそお見せしましょう！　操影術近接戦闘最強奥義！！　“黒衣の夜想曲”！！」

ローブの下から出てきたのは影で出来た黒いドレスに身を包んだ高音と、その背後で影の触手を操る影人形。

「・・・・・・ダサ」

そして派手だ。やる気の無いアリスは木剣を構える事もせず、ただぼんやりと高音を眺めている。本来なら着けているえいゆうの籠手は無い、完全に手加減丸出しモードだ。

「はあ！！」

高音の気合と共に繰り出された無数の影の触手、だがアリスは適当に木剣を振ってその全てを薙ぎ払ってしまった。

「そ、そんな！？」

これには高音も驚き、まさか自分の渾身の攻撃が魔力や気での強化を一切していない唯の木剣の一振りで薙ぎ払われるなど思いもしなかった。

「はあ・・・・・・斬空閃・弐之太刀」

完成度が低い弐之太刀で十分と見たのか、斬空閃・弐之太刀で高音の背後にいる影人形を切り捨てた。

「しまっ！？」

「終わり」

影人形が消滅した事に焦った高音に瞬動で近づき、木剣を持っていない左手の手刀を首筋に打ち、高音の意識を奪った。

「おいおい・・・・・・」

高音が気絶した事で影のドレスが消え、彼女の裸体が露わになってしまった。仕方ないので着ていたローブを掛けて所謂お姫様抱っこで抱えあげると、そのままフィールドを立ち去る。

『アリス選手の勝利ぃー！！！』

和美がアリスの勝利を宣言する中、アリスは既に控え室に戻っており、高音を医務室に運んでいた。

一回戦第六試合はネギＶＳタカミチ、アリスは控え室でのんびりとステージを見ているタカミチに近づいた。

「やあ、アリス君」

「楽しそうだね・・・・・気持ちは解るけど、一つ言いたい・・・次の試合、全力でネギを潰すつもりで戦って」

「全力は出すけど・・・潰すのは・・・・・・」

潰すつもりでというのにタカミチは困惑していた。流石にタカミチも学園長程ネギに期待を持っている訳ではないが、憧れの人の息子を潰すという事には抵抗があるらしい。

「それぐらいの意気込みで戦うタカミチに勝てないなら、ネギに私と戦う資格は無いから」

「・・・そういう事か、判った。その代わり、もし僕が勝ったら、アリス君、君とも全力で戦うよ？」

「元よりそのつもり」

タカミチと拳を合わせてアリスは観客席に移動した。そこには既にシルヴィアと月詠、さよ、目が覚めて起き上がれる様になったのであろう木乃香とアキラも居た。

「あら、アリス様」

「ああ、見に来てたんだ」

「ネギ君がどんくらい強うなったか気になってなぁ」

シルヴィアの隣に座ってステージに目をやる。丁度始まる所らしく、ネギとタカミチがステージに向かって歩いている所だった。

「ネギ君と高畑先生か・・・・・普通に考えれば高畑先生が勝つ

かな？」
「ん～？　あの坊や、そこまで強うなさそうやし、先生の方が勝つんやないの～？」

アキラと木乃香、月詠とさよは二代目・紅き翼に正式に加盟した時に顔合わせとして同じくメンバーのタカミチの実力を見ている。相性でシルヴィアには敵わなかったが、実力そのものはシルヴィア以上、アリスと同程度はある。

「タカミチは魔法世界でＡＡの認定を受けてるけど、それは本人が本気を出してないからＡＡという認定なんだ。だからタカミチ自身は間違いなく最強クラスの実力者だよ」

いよいよネギとタカミチの試合が始まる。ステージの上でお互い向き合い、タカミチはお馴染みの両手をポケットに入れた構え、ネギは中国拳法の構えで共に戦闘態勢を取る。

「それでは第六試合～Ｆｉｇｈｔ！！」

合図と共にネギは両腕を顔の前でクロスし、戦いの歌で身体強化、更に風楯を前面に展開、そのまま瞬動に入ってタカミチに突っ込んだ。

タカミチは突っ込んでくるネギに向けて居合い拳、魔法世界では無音拳と呼ばれる技を三発飛ばした。その三発でネギの風楯は消し飛んだが、腕を顔の前でクロスさせて防御していたネギにダメージは無い。

タカミチの後ろで瞬動から抜けたネギはタカミチの気で強化した右ストレートをかわして一気に畳み掛ける。

「へえ、中々上手い」

「ですね、ネギ君とタカミチでは実力差が大きすぎますし、距離を置いては追い込まれてジリ貧になるだけです」

現在のネギは兎に角タカミチから離れないよう距離を詰め、攻撃の手を休ませず連打を打ち込む。流石のタカミチもこれには驚き、何とか反撃しようとするも、ネギの小柄な体格を生かした柔軟で素早い動きに全てかわされ、防戦一方に追い込まれていく。

「お、魔法の射手だ」

ネギが雷の矢3本を右腕に収束して拳をタカミチの腹部に叩き込んだ。雷華崩拳と命名されたソレは、ネギの新たな技、力となって初めて、日の目に曝された。

雷華崩拳をまともに受けたタカミチは観客席側まで吹き飛ばされた。だが、煙が晴れて現れたタカミチはダメージを感じさせないピンピンした姿で水上歩行しながら歩いていた。

「流石タカミチ、咄嗟に障壁を腹部に集中させてダメージを減らしたか」

やはりタカミチはネギとは実力も経験も違いすぎた。ネギの攻撃が決まる一瞬でネギの右腕に纏っている雷の矢を二本打ち消し、威力を激減させる。これが出来るかどうかは実力もそうだが、経験が大きく左右するのだ。

そして遂にネギはタカミチに蹴り飛ばされてしまい、距離を取ってしまった。これでネギはタカミチに近づく事は出来ない。タカミチの居合い拳が次々と炸裂し、今度はネギが防戦一方となってしまう。

「・・・・・決まったね」

「ネギ先生・・・・・・これは勝てないですね」

アリスもさよも、そしてシルヴィア達もタカミチの勝利を確信した。ネギが瞬動に入っても瞬動の弱点を突かれ、居合い拳の射程から離れようとしてもタカミチ自身も瞬動は当然出来るので、ネギの背後に回ったタカミチの距離居合い拳を受けてしまう。

「おや？　タカミチ・・・・・・使うのか」

「ネギ君、僕は今日、嬉しい事ばかりだよ。君との試合がこんなにも楽しいなんて・・・・・・流石、僕が憧れたナギの息子で、僕が認めるアリス君の弟だ」

タカミチは遂に、本当の本気の一部を見せる。タカミチの師匠が教えてくれた技法であり、タカミチが長い時間を掛けて習得した究極技法。

「右手に“魔力”・・・左手に“気”」

魔法世界でも使用者は少なく、難易度が馬鹿みたいに高い究極を許された技法であり、タカミチの切り札。

「合成！！！」

魔力と気の合一、名を“咸卦法”、魔力と気という相反する二つのエネルギーを合成させることで同調と拒絶の爆発的なエネルギーを身体の内と外に纏い、身体能力を爆発的に上げる。

「一発目はサービスだ・・・避けろ、ネギ君」

「・・・・・・っ！」

それは一瞬だった。タカミチがジャンプしたかと思ったその瞬間、ネギ目掛けて咸卦の気を纏った大砲の如き居合い拳が振り落とされ、床を大きく抉った。

ギリギリで避けたネギだったが、その余りの威力と速さに青褪め、荒い息を吐いて震えている。

「今の僕でも初代・紅き翼の人たちには全然届いていない。ネギ君、これくらいでへこたれていては、あの人達やアリス君を含む二代目・紅き翼と同じ舞台には立てないぞ」

英雄達の背中を追う大きな背中と小さな背中が今、本気のぶつかり合いを迎える。

～～～おまけ～～～

学園長が見回りで世界樹を見に来ていた時だった。何気なく見上げた世界樹の枝が一本、綺麗に切られて無くなっている。

「ふぉっ！？　ふぉ～～～～～～っ！！？」

……真相は如何に。

四十一話　「英雄を追う、大きな背中と小さな背中」（後書き）

この試合、原作よりタカミチは強敵です。

タカミチは原作とは違ってネギにナギを重ねて見ているという事はありません。

だからネギが強くなるのなら甘くなんてしない、厳しい所を見せます。

四十二話　「少年の決意」（前書き）

そう言えば原作で高音がタカミチは呪文詠唱が出来ないから“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になれないと言っていましたが、実際は違うんでしょうねぇ。

ちなみに私の小説内での理由は高音が言ったのは表向きの理由、本当の理由はちゃんと用意していますので。

四十二話　「少年の決意」

英雄と女王の子

四十二話

「少年の決意」

タカミチが咸卦法を発動してから状況は一方的になった。大砲の如き居合い拳がネギに襲い掛かり、ネギは避けるのに精一杯になる。

しかもタカミチは通常の居合い拳と併用して攻撃しているので死角は無く、ネギに逆転の手が無い。誰の目から見ても、これは詰んでいた。

そして、タカミチがネギの頭上に瞬動して叩き潰そうと居合い拳を振り下ろした。ネギは咄嗟に風花・風障壁を展開して防いだが、それは悪手だ。

「っ！　タカミチは!?」

「確かに風障壁は１０ｔトラックの衝突すら防ぎきる優秀な対物・物理防御魔法だが・・・・・その効果は一瞬、連続使用も不可能という弱点がある。今の状況ではその選択は悪手としか言えないよネギ君」

遂に咸卦の気を纏った居合い拳が完全にネギの腹部に突き刺さった。

ネギは態と下にバランスを崩して逃れたのだが、それもまた・・・悪手。振り下ろされた居合い拳がネギを床に叩きつけて、そのまま抉った床にめり込ませてしまった。

『こ、これは酷い！　ネギ選手虫の息!!　・・・ってゆーか、ち

ょっ・・・ネギ君大丈夫ー！！？』

タカミチの攻撃をまともに二発受ければ、ネギの現状は仕方ない事だ。意識も朦朧としており、起き上がる気力もない。

「・・・・・ネギ君・・・・・・これで終わりかい？　ネギ君。あきらめるのか？　君の想いは、そんなものか？」

タカミチの言葉がネギの耳に届く、ネギの脳裏に過ぎるのは幼き日に見た父の背中、常に自分の遥か先を歩く兄の背中。自分はその背中に追いつきたいから今まで頑張ってきた、エヴァンジェリンに弟子入りして鍛えてきた。

ここで負けてしまえば二回戦で待っているアリスと戦う事は出来ない。遠すぎる二つの背中に追いつく事なんて出来ない。

「（そうだ・・・・・・父さんなら、兄さんならこんな状況でも絶対に諦めたりしない。僕にはまだ魔法の射手も風障壁もある・・・・・まだ手は・・・ある！！）」

不屈の闘志を瞳に宿し、ネギは再び立ち上がった。既にボロボロで、身体に蓄積されたダメージと疲労から足はガクガクと震えているが、それでも確かに、自分の足で立ち上がった。

「そうだ・・・それで良いんだよネギ君。だけど、立ったからには覚悟を決めろよ・・・・・・僕も君を本気で潰すつもりで戦うぞ」

居合い拳の構えが深くなった。溜めの構え、連射性は落ちるが、一発一発の威力が倍増するタカミチの破壊重視の為の居合い拳だ。

対してネギは光の矢を9本展開、瞬動で突撃しながらタカミチに連撃しつつ、途中で光の矢9本を右手に封印する。

「それは、実戦向きじゃないぞ・・・ネギ君！」

目の前に居るネギに膝蹴りを叩き込んで浮き上がらせると、通常の居合い拳で少し前に吹き飛ばし、更に咸卦の気を込めた居合い拳を空中で体勢を整える事のできないネギに向けて放つ。

ギリギリで風楯を張って防御したネギだったが、そのまま水の中へ落下。だが、これこそネギの狙いだった事にタカミチは漸く気付いた。

「まさかここまで考えて・・・・・・」

ネギが水中から飛び出して来た。その周囲には雷の矢が9本、展開されている。

「（ネギ君、何を考えているんだ？　唯の魔法射手では僕に効果は無い・・・・・しかし、あの目・・・あれはナギと同じ、何かを思いついた時のナギと同じだ）」

流石はナギの息子だろうか、何か必勝の策を思いついた時の目が同じだとは。

「タカミチ！！　最後の勝負だ！！」

「（本当に、ナギに・・・・・そしてアリス君にそっくりだよ、君は）いいだろう！！　受けて立とう、その勝負！！　次が最後の一撃だ！！」

ネギが雷の矢9本を全身に纏い、瞬動でそのまま特攻してきた。タカミチも迎え撃つ様に彼の最大攻撃力を誇る居合い拳、豪殺居合い拳を放った。

豪殺居合い拳がネギに直撃する直前、ネギは前方に風花・風障壁を展開、豪殺居合い拳を打ち消しながら突っ込み、タカミチの腹部に体当たりした。

「があっ!!?　（・・・っ!!　う、上手い!!）」

豪殺居合い拳の弱点、放った直後に必ず隙が生まれるという所を狙ってネギは見事、タカミチに強烈な一撃を与えた。

両者の激突で発生した煙でタカミチは視界を奪われ、直ぐにネギの気配を探った。その結果・・・・・・。

「しまった!　後ｒ」

「風精の主」

ネギがタカミチの背後を取った。タカミチの背中に手を当て、封印していた光の矢９本を解放してタカミチに不適な笑みを見せている。

「（まさか・・・ここまで成長しているとは・・・・・・でもネギ君）」

「最大!!!　桜華崩拳!!!」

ネギの最大攻撃力を誇る近接技、桜華崩拳がタカミチにクリーンヒット。完全にダウンしたタカミチに、和美がカウントを取る。

しかし、カウントの途中でタカミチは上体を起こし、ネギに笑いかけた。

「凄いね・・・まさかネギ君がここまで出来る様になっていたなんて」

「た、タカミチ・・・・・・」

「この試合、僕の負けだ。でもね・・・・・・これで安心なんてしてはいけないよ」
「ど、如何いう事？」
「今の試合でよく判った・・・ネギ君、君は次のアリス君との試合で、現実を知る事になる」

現実を知る・・・どういう事なのだろうか。確かにアリスはネギなんかより遥かに強い、だがネギはタカミチに勝てた。自分とタカミチとの実力差は理解しているつもりだし、それでもネギは全力で戦い、その果てにタカミチに勝った。
そして次の対戦相手であるアリスは試合では術式武装を封じられているので、タカミチの時と同様、たとえ実力差があろうとも、諦めなければ勝機はあるのではないか、ネギはそう思っていた。

「ネギ君・・・アリス君と戦って、知るべきだ。世界を・・・」

そこまで言ってタカミチは後ろに倒れた。この瞬間、一回戦第六試合の勝者がネギに決定した・・・・・。

タカミチとネギの試合が終わり、アリス達は控え室のアリスに宛がわれた部屋に来ていた。

「どうですか？　アリス様、ネギ君は」
「・・・・・まだまだだ。あれではタカミチに勝ったのではなく、タカミチに勝たせてもらったと言った方が適切だろう」
「せやねぇ。ネギくん、もうちょい頑張れたんとちゃうやろか？」

アリス達にしてみればネギの戦い方はあまりに雑だ。タカミチもそれは思っているだろうから、態々ネギを勝たせたのだろう。

「私と戦わせる事でネギに現実を見せる・・・・・まあ、最近は実力も上がって、少しは自分に自信が持てる様になったみたいだし、丁度良い機会だろう」

ここに来る途中でネギの様子を遠目に伺ったが、ネギはタカミチに勝たせてもらった事に気付かず、試合に勝ったという事に浮かれて明日菜たちと大騒ぎしていた。そのネギの瞳に宿っているのは自分への確かな自信と、タカミチに認められた事への嬉しさ。

だが、アリスはタカミチ程甘くはない。アリスに認められるには、恐らく今のネギでは不可能だ。アリスは兄として、一人の魔法使いとして、今のままのネギでは認める訳にはいかない。まだまだ成長が足りていない。

「アリス先生・・・もう一つ、気になる事があるよ」
「気になる事？」

アキラが見せたのはノートパソコン、その画面に映っているのはまほら武道会の映像と、その感想掲示板だ。

「あや～、なんや魔法っちゅー言葉が仰山出とりますな～」
「本当ですね～」

覗きこんだ月詠とさよが呑気な事を言っているが、これは魔法使いにとって一大事だ。

「これで完全に確信した。超の目的はこれで間違いない」
「どうします？」
「・・・・・どうもしない」

直ぐに興味を失ったアリスはパソコンを閉じてしまった。

良いのだろうか？　という視線を向けてくる木乃香とアキラだが、アリスの考えている事を理解して納得。

「確かに私の夢の邪魔にはならないのだろう・・・なら私が如何こうする筋合いは無い」

麻帆良学園の魔法生徒や魔法先生は焦って超を止めようとするだろう、アリスにも協力を求めてくるだろう。しかし・・・・・・。

「今回、私とシルヴィアは中立、アキラと木乃香、さよには必要とあらば戦いに参加してもらって、少しでも戦いの経験を積んでもらう事になる。月詠は好きにして良いよ、どうせ切れるのは機械だけだと思うし、つまらないかもしれないけど」

「ほんなら参加せぇへんよ～、シルヴィアはんと一緒におる～」

またシルヴィアに頭を撫でられてご満悦の月詠、その姿が可愛らしく見えたのか木乃香が月詠を構いたがっていた。

そんな光景を尻目に、アリスの思考は既に次の試合の事に移っていた。ネギとの戦い、如何戦うか、それは・・・・・・試合前のネギ次第だ。

四十二話　「少年の決意」（後書き）

次は明日菜ＶＳシルヴィアの試合です。
どんな戦いになるのか、楽しみにしてて下さい。

四十三話　「黄昏と宝石」（前書き）

最近、サブタイトル考えるのが面倒になってきた……。

四十三話　「黄昏と宝石」

英雄と女王の子

四十三話

「黄昏と宝石」

一回戦第六試合がネギの勝利に決まり、続いて第七試合が始まる。シルヴィアＶＳ明日菜、どちらもナギ・スプリングフィールドの息子の最初の従者となった者、スプリングフィールドの従者二人が今、激突する。

「行ってこいシルヴィア、相手は素人になってしまったとは言え、私の叔母だ。さっきアルが彼女に何かを囁いていたから、もしかしたらアレが使える様になっているかもしれない」

「アリス様の叔母様が使えるもの・・・・・アレですか、わかりました」

アリスがナギから聞いた明日菜の力の一つ、完全魔法無効化以外の力はシルヴィアにとっては相性が非常に悪い。

元々、シルヴィアは完全後衛型の魔法使いだ。近接戦技能は低いし、そもそも近接戦闘手段を持ち合わせていない。故にこの武道会では如何にして戦うのか、それが読めない人物でもある。

「行って参ります」

ステージの上にはローブを身に纏い、いつもの宝石が付いた身の丈ほどある杖を持ったシルヴィアと、何故かメイド服を着て、アーティファクトであるハリセンを持った明日菜が向き合っている。

「明日菜ちゃん・・・どうしてメイド服？」
「朝倉が・・・・・・」

落ち込んでいる明日菜を慰めたい気もするが、今は試合、気を引き締めてシルヴィアは杖を構えた。

『それでは第七試合・・・・・・Ｆｉｇｈｔ！！』

試合が始まり、明日菜は先手必勝とばかりにシルヴィアに突っ込んだ。その身に纏っている気は間違いなくタカミチと同じ、咸卦法だ。密度はタカミチのソレに及ばないが、その効果は本物、明日菜の持ち前の運動神経にプラスされた身体強化によって、常人を遥かに超えたスピードを叩き出す。

「やはり・・・・・ですが、タカミチ相手ならまだしも、素人相手なら脅威足りえませんよ」

シルヴィアは瞬動で避けると明日菜の足に杖を絡ませて転倒させた。

「あぐっ！」
「一つ、良い事を教えて差し上げましょう・・・・・私には近接戦闘技能は無いと思われているみたいですが、後衛の魔法使いでも近接戦技能を有するのは基本です。今時、後衛型魔法使いも近接戦技能習得は必須項目ですよ？」

そう言ったシルヴィアの杖は氷の槍と化した。金剛石を思わせる見事な氷の槍、流石に穂先は尖っておらず、丸くなっている。

「本来は穂先を尖らせるのですが、今回はルールがルールですので・・・・・我が近接戦用兵装、宝氷槍：ランス・オブ・ジュエルです」

戦いの歌を発動させたシルヴィアは瞬動で明日菜の後ろに移動した。だが明日菜も瞬動の動きに目が追いついており、後ろにシルヴィアが現れた瞬間、振り返ってハリセンを一閃するが、シルヴィアの槍に阻まれ、更には槍の長さを利用した回転に明日菜は後退を余儀なくされる。

「後退は得策ではありませよ・・・・・特に槍を持つ相手には相手の間合いに入る様なものです」

明日菜が後退したのを追うようにシルヴィアの槍が襲い掛かる。連続突き、突きの連撃が明日菜に突き刺さろうとしているが、明日菜は紙一重で避け、何とか再び懐に入ろうと試みるが、突きの嵐に隙は無く、中々間合いに入れない。

「槍の真骨頂は突き、ですが槍は突くだけが能ではありません」

突然、明日菜の持つハリセンが弾き飛ばされた。シルヴィアが槍でハリセンを薙ぎ払ったのだ。

「まずっ！？」

素手になってしまった明日菜に畳み掛けるかの様なシルヴィアの怒涛の連撃に明日菜は防戦一方、そして遂に明日菜は咸卦法が切れてしまい、身体能力が元に戻ってしまった。

「うそ！？」

それに慌てたのは本人で、直ぐにもう一度咸卦法をやろうとしたが、その様な事、シルヴィアが許す筈も無く。
シルヴィアは明日菜に咸卦法を使わせる間も無く攻撃を続ける。その鋭さは途切れることなく、明日菜に襲い掛かり、素手の上に咸卦法も消えた彼女には防御するのも避けるのも難しくなった。

「きゃあああああ！！」

全身に突きを受け、明日菜は息も絶え絶え、明らかにダメージが大き過ぎた。

「私を卑怯と罵りますか？　咸卦法が消え、再び使う暇を与えない私に、正々堂々と戦う気は無いのかと」
「そ、それは・・・・・・」

卑怯だと、言いたい。だが、明日菜の中のナニカがそれは違うと言っていた。そんな事、卑怯になりえない。むしろ戦いに卑怯なんて存在しない、と・・・・・・。

「よく判っているみたいですね・・・・・・良いでしょう、特別にハリセンを拾うチャンスだけは与えましょう。素手の相手に武器を使って攻撃するのは卑怯だと、先ほどから外野が煩いので」

素直にハリセンを拾った明日菜はもう一度構える。正直、勝てる気がしない、近接戦は苦手だと以前聞いたことがあるが、それでも今の明日菜なんかでは手も足も出ない。明らかな格上の存在を目の前に、何故か明日菜は恐怖以外の別の感情で震えた。

「行きます！！」

「良い表情です。ネギ君より寧ろ貴女の方が戦い甲斐がありそうで、嬉しいですよ！！」

ハリセンと槍がぶつかる。ここで明日菜は脳裏に一つ、疑問が浮かんだ。シルヴィアの槍は魔法で作った物、ならば何故、明日菜の能力で消えないのか。

「その疑問、答えてあげましょうか？」

振り下ろされたハリセンを弾きながらシルヴィアは明日菜の思っていた疑問に、心を読んだかのように返答した。

「この槍、ランス・オブ・ジュエルは確かに魔法で作りました。しかし、この氷は既に大気中の水分を凍らせた本物の氷です。作る過程なら貴女の能力で消す事も出来たでしょうが、既に物質としての結果が出ているこの槍は、魔法ではない」

魔法ではないのだから、完全魔法無効化能力で消せるはずが無い。例えば、冷凍庫の中から氷を出して、それを明日菜の魔法無効化で消せるかと言えば、魔法でもないのに、それは不可能。同じ原理だ。唯の氷は、魔法無効化では消せないのだ、

「まあ、貴女のハリセンとぶつかるだけでランス・オブ・ジュエルに纏わせた魔力はかき消されているんですがね」

氷が溶けないように魔力でコーティングしているのだが、明日菜のハリセンや、身体に当たる度にコーティングが打ち消されてしまう。消えては掛けて、また消えては掛けては、結構面倒なのだ。

「そろそろ試合時間終了も近づいてきましたね」

ならばもう、勝負を決めるべきだろう。
シルヴィアは再び瞬動、明日菜の後ろに回りこむと、明日菜が振り返った瞬間にもう一度瞬動、それを繰り返し、ある程度明日菜の頭が混乱した所で姿勢を低くし、全力で足を薙ぎ払った。

「きゃっ！？」

ドシンッという音と共に明日菜は尻餅を着き、痛みを堪えてシルヴィアの方を見ようとしたら、目の前に槍の丸い穂先が突きつけられた。

「・・・・・まいりました」
「・・・中々楽しめました」
『明日菜選手降参ー！！　シルヴィア選手の勝利ーーーっ！！！』

一回戦、第七試合はシルヴィアの勝利に決まった。
シルヴィアは明日菜に手を差し出して立ち上がらせると、氷の槍を解いて基の杖に戻す。

「明日菜ちゃん、貴女はこれからもっと成長すると思います。咸卦法も使いこなせる様になればもしかしたら、貴女は最強クラスの人間になれるかもしれませんね」
「ほ、ホントですか？」
「ええ、でも先ずは・・・瞬動を覚えるのが先ですね。頑張ってね？」
「は～い・・・・・・」

明確な目標が出来た。今は兎に角、瞬動をマスターする事から始めようと、明日菜は今後の修行スケジュールを組み立て始めるので

あった。

一回戦最後の試合、エヴァンジェリンＶＳ刹那の試合はエヴァンジェリンの幻燈空間（ファンタズマゴリア）で行われ、刹那は剣を捨てて人並みの幸せを送るか、今までと変わらず、剣を持って木乃香を守る道を選ぶかを問われた。

既に木乃香は刹那に守られずとも良い程に強くなったが、刹那にとって剣は自分と木乃香を繋ぐ絆も同然。

結果、刹那は木乃香との絆を守り、エヴァンジェリンに見事勝利した。

そして、遂に二回戦が・・・・・始まろうとしていた。

二回戦

第一試合、犬上小太郎ＶＳクウネル・サウンダース

第二試合、近衛木乃香ＶＳ古菲（古菲、左腕前腕骨折のため棄権で木乃香の不戦勝）

第三試合、アリス・スプリングフィールドＶＳネギ・スプリングフィールド

第四試合、シルヴィア・オーギスＶＳ桜咲刹那。

四十三話　「黄昏と宝石」（後書き）

明日からしばらくバイトが続くなぁ……、書く暇があるかどうか

四十四話　「兄弟対決、アリスＶＳネギ」（前書き）

今回、ネギはかなり酷い目に遭います。ネギファンの方はご注意ください……ネギ嫌いな人は喜ぶかも？

四十四話　「兄弟対決、アリスＶＳネギ」

英雄と女王の子

四十四話

「兄弟対決、アリスＶＳネギ」

二回戦、第一試合の犬上小太郎ＶＳクウネル・サウンダースの戦いは、小太郎の善戦空しく、圧倒的な実力差と、強力な重力魔法によって敗北。小太郎は楓に見守られながら、初めて女の前で涙を流すのだった。

そして、不戦勝となった木乃香の第二試合を飛ばし、続くは第三試合。今までの試合で最も注目を受けている兄弟対決だ。

『さあ！　続いて行われる二回戦第三試合の組み合わせは・・・・・・兄弟対決!!　アリス・スプリングフィールド選手ＶＳネギ・スプリングフィールド選手!!!』

和美の言葉に会場は歓声に包まれた。その中、ステージには既にアリスとネギが向かい合っており、ネギはエヴァンジェリンから貰った指輪を填め、杖を持っている。対するアリスはえいゆうの籠手を両手に、ピアスと指輪も装備、更に予選会と一回戦で使用した木剣を持っていた。

「兄さん」

「・・・ん？」

「この試合・・・僕、兄さんに勝つつもりで戦う。だから兄さんも、本気で来て」

随分と生意気な事を言う。実力差は解っている筈、だがそれでも勝つつもりで戦うという事は秘策でもあるという事か、それともタカミチとの試合みたく、諦めなければ勝てる確率も出てくるとでも思っているのか。・・・・・・まあ、もっとも。

「いいだろう・・・・・全力で叩き潰す」

アリスはタカミチみたくネギを勝てやるつもりは一切無い。だが、折角タカミチに勝たせてもらったのだ、全力で相手をし、その上で叩き潰させてもらうだけだ。

『それでは二回戦第三試合・・・・・Ｆｉｇｈｔ！！』

最初に動いたのはネギだった。瞬動でアリスの背後に移動し、風の矢を三本、杖の先端に集めてアリスの背中を突こうとする。

だが、アリスは振り返る事無く木剣を盾に杖を受け止め、“入り”が認識できない程の極められた瞬動でアリスの姿がネギの視界から消えた。

「ど、どこ！？」

「ここだ」

「っ！？」

背後からアリスの声が聞こえ、慌てて振り返ろうとしたが、腹部にとんでもない衝撃を受け、胃液を吐き散らしながらステージの隅まで吹き飛ばされてしまった。

ネギの腹部に魔力で強化した蹴りを入れたアリスはネギに休む間を与えず、ステージの隅まで飛んでいったネギに瞬動で近づくと、ネギの身体が床に落ちる前に上空へ蹴り上げた。

「がっ！？」

背中に入った蹴りで背骨が折れそうな痛みを訴えるが、ネギはそれ所ではない。虚空瞬動で追いかけてきたアリスがネギの顔面を鷲掴み、その手に大量の気を集めた。

「ラカン直伝、ゼロ距離ラカン・インパクト！！！」

大爆発が起きた。ネギの顔面で大量の気が大爆発を起こし、戦いの歌を発動していなければネギの頭は無くなっていたであろう衝撃が襲い掛かり、床に真っ直ぐ叩き落された。

更に、床に落ちたネギに追い討ちを掛ける様にアリスは空中で左拳を握り、再び気を集める。

「更にラカン直伝、羅漢・適当に左パンチ！！！！」

床に叩きつけられ、ダメージで動きが鈍りつつも何とか起き上がろうとしていたネギに上空から巨大な気の拳が振り下ろされた。その余波でステージ全体が罅割れ、大量の水飛沫が客席に降りかかって悲鳴が上がったが、試合には関係無いだろう。

アリスが床に着地して、巨大な拳型に凹んだ床に近づくと、ネギが全身をボロボロにし、頭から血を流しながらも立ち上がろうとしているのが見えた。

「ふーん、まだ起きるか・・・・・・」

「ま、だまだ・・・僕は、戦え、るよ・・・・・・・」

なら良し、それでなくてはアリスも面白くない。

改めて、魔力で強化した木剣を構えてネギが立ち上がるのを待った。

「っ！」

再び瞬動でアリスの真横に移動したネギは杖を用いた棒術で攻撃してくるが、アリスの木剣に弾かれ、流され、受け止められ、中々アリスに攻撃が当たらない。何度か瞬動で移動しながら全方向でやっているが、アリスはネギの瞬動を完全に肉眼で追っている為、意味が無い。

「“入り”も“抜き”もまだまだ未熟、それだと相手に目で追ってくれと言っている様なものだ」

ネギが瞬動中にアリスも瞬動に入り、瞬動から抜けたネギの後ろに抜けたアリスはその背中に木剣を叩き込んだ。

「あああああっ！！」

唯の木剣の筈なのに、何故かネギの背中は切れ、血が吹き出て観客の悲鳴を誘う。

「唯の木剣だと思って油断したか・・・・・・甘い、唯の木剣でも、心・技・体が揃った時、本物の剣の様に対象を切る事も可能だ」

これは東洋剣術、西洋剣術問わず、全ての剣術で可能な事。事実、木乃香の父、詠春も木刀で妖怪を切り捨てた事があるのだ。

「・・・・・・」

背中を切られた事でネギが顔を青褪めてアリスを見上げる。兄の鋭い眼光に、先ほどまでとは違い、恐怖を覚えたのかゆっくりと後

ずさるのを自覚した。

「どうしたネギ・・・・・・まさか、この程度で負けを認めるつもりか？　なら期待外れだな・・・所詮はその程度、父さんの背中を追い掛けようなんて夢物語もいいところだ」

アリスの手の上に何かが現れた。明らかな魔法の雷光・・・・・・ネギが使う雷の矢ではない、千の雷を固定したものだ。

「詠唱魔法は禁止だからね・・・・・・無詠唱の千の雷だ。ネギ、お前は私が“姫”を使わなければ術式武装が出来ないと思っているらしいが、当てが外れたな」

固定した千の雷をえいゆうの籠手に取り込んだ。途端に両手の籠手が雷を纏い、空気を焦がす。

「是、“雷拳・千撃手”」

術式武装を行う条件は頑丈な武器もしくは魔法発動体である杖を用いる事。当然、アーティファクトはその条件に当てはまる。武器型のアーティファクトというのは得てして頑丈な物が多いのだ。

『おおっとおおお!!?　アリス選手のグローブ？　が突然電気を流し始めた!!　スタンガンか何かか!?』

和美が煩いのが気になるが、構うことなくアリスはネギの襟首を掴み上げ、その腹部に雷を纏った拳を叩き込む。

「あああああああああっ!!!!!?」

腹部に焼けるような痛みと、そこから全身に奔る電流に四肢が痙攣する。
続けてアリスが何度もネギの腹部、胸、肩、頬に拳を叩き込むと、ネギの意識はドンドン遠くなっていく。既に危険域に来ているネギの身体、和美は流石に不味いと思ったのかアリスを止め、既に意識を失いながらも全身を痙攣させるネギを見て慌ててドクターストップを掛けた。

『こ、この試合、ネギ選手戦闘続行不可能によりアリス選手の勝利!!!』

歓声は・・・沸かなかった。観客の誰もがネギの惨状を見て顔を青褪め、言葉も出ない。ネギの関係者も揃って同じ有様で、アリスの関係者とエヴァンジェリンだけが冷静に、そして確かにアリスの勝利を喜んでいた。

すぐさま医務室に運ばれたネギは待機していた医療班によって治療が行われた。身体の表面的な傷は木乃香のアーティファクトで癒しているので、命に別状は無いが、まだ意識が戻らない。
ネギが医務室に運ばれて直ぐに、明日菜たちネギの従者及びネギを慕う魔法を知ってしまった生徒達、それから高音と愛衣、小太郎も駆けつけ、医務室の前のベンチに座って瞑想していたアリス、本を読む木乃香とアキラ、雑談をしている月詠とシルヴィアを見つけた。

「ちょっとアリス先生!!　アンタやり過ぎよ!!!　ネギが死んじゃうかも知れなかったのよ!!?」

明日菜が怒りに身を震わせてアリスに掴みかかった。後ろではのどかと夕映、付き添いの早乙女ハルナがアリスを非難の目で睨んで

いる。

「やり過ぎ？　あの程度で？」

「あの程度！？　死ぬ一歩手前まで追い込んでおいてあの程度って何よ！？」

「死なない程度に手加減はした・・・アレで死んだとしたら、それは唯単に弱いからだ」

別に四肢を失った訳ではない、意識を失っているとは言え、木乃香のアーティファクトで傷自体は完治しているのだから、何を怒る必要があるのか。

「あんた・・・それでもネギのお兄さんな訳！！？　何で弟にあんな酷い事が出来るのよ！！」

「ギャーギャー煩いぞ、神楽坂明日菜」

突然、エヴァンジェリンが通路の奥から歩いてきて明日菜を睨んだ。その顔は不機嫌だという事を隠そうともしていない。

「あ、エヴァちゃんも何か言ってやってよ！　ネギはエヴァちゃんの弟子なんだから、ネギをあんな目に遭わせたアリス先生に何かさ！！」

「黙れ素人が・・・・・アリスは別に、責められるような事など何一つしていない」

「な、にを・・・・・」

言っているのか、と言おうとしたが、その先が告げられなかった。エヴァンジェリンの殺意が混じった鋭い眼光を光らせて明日菜を睨んだからだ。

「ボウヤがこの先歩もうとしている道は、今回アリスがやった事よりも更に酷く、醜い事が日常茶飯事で起こり得る世界だ。あの程度の事で一々喚くな小娘が」
「で、でもネギはまだ１０歳の子供で・・・・・・」
「関係無いし、言い訳にすらならん。私達が生きる世界には、年齢も性別も、そんなものが言い訳になるような甘い状況など存在しない。誰にも等しく死が待っており、老若男女が平等に命を落とす」

子供だから酷い怪我をするような事は無い。そんな甘い世界の筈がないし、それを何度も教えている筈なのに、明日菜たちはそれを理解しようとしない。いい加減エヴァンジェリンもアリスも嫌気が差してくる。

「これ以上喚くなら、こちらの世界に関わるな・・・・・・耳障りだ」

エヴァンジェリンが去り際に放った言葉は、明日菜たちの心に、大きな衝撃を与え、そしてショックのあまり言葉を失くすのに十分なものとなった。

四十四話　「兄弟対決、アリスＶＳネギ」（後書き）

という事で、ネギは二回戦敗退となりました。元々勝ち目なんて存在していなかったので、当然と言えば当然ですね。

マガジンの今週号見ましたが、タカミチ……強ぇ。

四十五話　「神鳴流と宝石の槍」（前書き）

今回は短いですね……最近、ネタが不足してきたかも

四十五話　「神鳴流と宝石の槍」

英雄と女王の子

四十五話

「神鳴流と宝石の槍」

アリスＶＳネギの試合で半壊してしまったステージが修復されている間、アリスは一人、神社の本殿屋根に上がって修理の様子を眺めていた。

「ここに居ましたか・・・・・・アリス君」

「久しぶり・・・・・・アル」

アリスの後ろに現れたのは深いローブで顔を隠した人物、クウネル・サウンダースことアルビレオ・イマだった。

アルはアリスの後ろに立って同じ様にステージの修復を眺めながら、ゆっくりとアリスの隣に足を向ける。

「残念ですね、今回ナギの遺言をネギ君に果たせなかったのは」

「やっぱり・・・参加理由はそれだったんだ」

「ええ、でもまあ・・・・・・今回はナギのもう一つの遺言・・・アリス君、あなたに向けてナギが残した遺言を決勝であなたに届ける事にしますよ」

「・・・・・・」

アルのアーティファクト、イノチノシヘンに残されたナギの遺言はネギ宛のとアリス宛の二種類。どちらもネギがまだアリカのお腹の中に居た頃に用意した物らしい。

「それで・・・・・・どうですか？　最近の様子は」
「・・・その事で一つ、アルにお願いしたい事があるんだ」
「お聞きしましょう」
「昔は断ったけど・・・・・・私に、重力魔法を教えて欲しい」

アルが得意とする重力魔法、昔はアルが教えてあげようかと言った時、魔法剣士としてのスタイルで戦うと決めていたアリスは使う事も無いだろうと思って断った。
しかし、今は少しでも力が欲しいアリスは情けないと思いつつも、重力魔法を教えて欲しいと頼む。その表情は、何処か焦っているように見えるのは、恐らく気のせいではないのだろう。

「構いませんよ。元々重力魔法は貴方にお教えしようと思っていましたし、力が伸び悩んでおられるご様子ですしね」

そう、此処最近アリスは自分の実力を更に上げようとしているのだが、中々思うようにいかず伸び悩んでいた。
既に魔法剣士として、戦い方も戦術も何もかもが完成していたアリスに、更なる力となると難しい問題だ。

「ただ・・・・・・たとえ重力魔法を覚えたからと言って、貴方の力が更なるものになるとは言えませんよ？」
「構わない・・・そこからどうやって私の戦術に取り込むかは自力で解決させるから」

そろそろ終わるステージの修復を眺めていたアリスの目は、いつの間にか雲一つ無い快晴空に向けられていた。

ステージの修理も終わり、二回戦第四試合が始まろうとしていた。

対戦組み合わせはシルヴィアＶＳ刹那、戦う前から勝敗が見えているアリスには興味が湧かない試合だった。

「シルヴィア、面倒だから時間掛けないで直ぐに終わらせて良いよ」
「はあ・・・・・まあ、近接戦が苦手な私でも彼女には余裕で勝てますし、かしこまりました」

始まる第四試合、ステージに立つのはメイド服にデッキブラシを持った刹那と、黒いワンピースタイプのドレスにローブを纏い、宝石の付いた愛用の杖を持ったシルヴィア。

「あの・・・シルヴィアさん」
「なんでしょう？」
「アリス先生の従者である貴女にこんな事を言うのは何ですが・・・・・私はアリス先生が苦手です」

初対面がアレなだけに、刹那はずっとアリスに苦手意識を持っていた。一時は敵対心すら抱いていたほどだから余計に、刹那は今でもアリスが苦手で、あまり進んで話をしたいとは思えない。

「ですが、剣士としての力量は寧ろ尊敬しています。神鳴流も使え、私では身分の違いで使えない弐の太刀すら使うアリス先生には見習うべき所が多々ある・・・・・そんなアリス先生の従者であるシルヴィアさんもまた、私には尊敬の対象です」

だから・・・・・。と一度切って、刹那はデッキブラシを構えた。

「この試合・・・私の出せる全力でもって、挑ませていただきます！」

試合が始まった。一瞬でランス・オブ・ジュエルを作ったシルヴィアと刹那が同時に瞬動に入り、デッキブラシとランス・オブ・ジュエルがぶつかった。

方や神鳴流剣士の気で強化されたデッキブラシ、方や魔法で作り、氷そのものを魔力で強化した槍、どちらも武器としては一級品であり、勝敗を決めるのはその担い手の技量だ。

「貴女相手に、出し惜しみはしません・・・衆目で、なんて言い訳ですから」

そう言って刹那が構えたのは明らかな神鳴流の構え。

「神鳴流奥義・・・・・斬岩剣!!」

勢い良く振り下ろされたデッキブラシは、シルヴィアの身体を両断せんとばかりに迫り来る。だが、シルヴィアは冷静にランス・オブ・ジュエルで弾き返し、円を描くような流れる自然の軌跡で横薙ぎの一撃を刹那の脇腹に叩き込んだ。

「がはぁっ!?」

かなり強烈な一撃が入って一瞬だが刹那の呼吸が止まる。更に追撃としてシルヴィアは神速の連続突きを刹那の体に突き刺し（穂先は潰してあるので刺さりはしない）、確実にダメージを与えていく。

突きの嵐の中、刹那はデッキブラシを持っていない左手に気を集めて突きの中の隙を見つけ、そこに活路を見出した。

「斬空掌・散!!」

飛ぶ手刀の斬撃がシルヴィアを後退させた。いくつかは弾いたりかわしたりしたが、若干掠ったのかシルヴィアの右肩に血が滲んでいる。

「まあ・・・・・まさか、僅かでも掠らせるとは」

油断していたつもりは無かったのだが、やはり心の何処かで油断していたのだろう。そして刹那はそのシルヴィアの油断に見事付け入る事が出来た。

「見事、ですね・・・・・エヴァンジェリンとの戦いで何かを得た、そう見るべきでしょうか？」

確かに刹那の瞳は以前とは比べ物にならない程、良い色、輝き、意思を感じられる。

「貴女はこれからもっと強くなりますよ・・・・・このまま努力を怠らなければ、今の木乃香ちゃんやアキラちゃん位なら、半年以内に届くでしょうね」

「いえ・・・そんな・・・・・」

刹那本人は否定しているが、シルヴィアの言葉は確かだ。何時の間にか観客席に戻っていたアリスも、同じ事を考えている位だから、刹那はもう少し自分に自信を持った方が良い。刹那に足りないのはソレなのだから。

「ですが今は・・・・・まだ私には届かない。それは、理解出来ているみたいですね」

「・・・はい」

「そうですか・・・では」

シルヴィアが今までに無い構えを見せる。穂先を下に、腰を落として魔力がランス・オブ・ジュエルに通った。

「これで、決めます」

瞬動、刹那のそれより遥かに完成度の高いそれは刹那がシルヴィアを見失うには十分だった。

一瞬、刹那は目の前にシルヴィアが現れて慌てて迎撃しようとしたその瞬間、刹那の背中に衝撃が走った。

見れば刹那の目の前に居たシルヴィアは霧のように掻き消え、背後にはランス・オブ・ジュエルを刹那の背中に突き入れているシルヴィアが居た。

「開放」

シルヴィアのその言葉と共に、ランス・オブ・ジュエルの穂先から捕縛用の魔法の矢、戒めの風が放たれて刹那を縛り上げた。

「続けますか？」

「・・・・・・いえ、私の・・・負けです」

ランス・オブ・ジュエルの穂先を刹那の首筋に添えて尋ねるシルヴィアに、刹那は潔く自身の敗北を宣言した。

こうして、二回戦は終わりを迎えて次の準決勝の組み合わせが決まった。

準決勝第一試合、クウネル・サウンダースＶＳ近衛木乃香。第二試合、アリス・スプリングフィールドＶＳシルヴィア・オーギス。

激闘の準決勝は、まもなく始まる。

四十五話　「神鳴流と宝石の槍」（後書き）

次回は誰が予想したかアルと木乃香の試合！

四十六話　「２０年前の英雄と英雄の娘」（前書き）

準決勝が始まりました！　もうすぐ武道会も終わりですね

四十六話　「２０年前の英雄と英雄の娘」

四十六話
「２０年前の英雄と英雄の娘」

遂に武道会も準決勝、その一回戦はクウネル・サウンダースと近衛木乃香の対戦。
２０年前、初代・紅き翼の一員として大戦を戦った英雄と、同じく初代の一員にして英雄の一人娘で、二代目・紅き翼の一員として迎えられた二人の戦い。それがどれ程の激闘となるかは、想像も出来ない。

『さあ！　まほら武道会も遂に準決勝戦！！　その初戦を戦う二人はこちら！！！』

既にステージに立つアルと木乃香に歓声が沸いた。

『古菲選手の棄権によって準決勝まで上がってきました近衛木乃香選手！！　一回戦では大河内アキラ選手との戦いで素晴らしい戦いを見せてくれましたが、今度はどの様な戦いを見せてくれるのでしょう！？』

既に鉄扇に魔力を通して強化を終えている木乃香、服装は一回戦で着ていた巫女服から陰陽師のそれに変わっていた。

『方や底知れぬ強さを見せ付けるクウネル選手！！顔が見えないフードが今では不気味だ！！　さあ、どんな試合を見せてくれるのか

！？』

相変わらずフードの下で不敵な笑みを浮かべるアルだが、その笑みの裏には嘗ての戦友の娘と戦う事が出来るという状況に歓喜が渦巻いていた。

「貴女がこのかさんですか・・・・・成る程、見た目こそ母君に瓜二つですが、その瞳に宿るものは・・・詠春とまったく同じですね」

「当然や・・・ウチは、青山詠春の娘なんやから」

木乃香が構えた。アルは相変わらず唯立っているだけの体勢だが、一切の隙が存在していない。

『それでは準決勝第一試合・・・・・・Ｆｉｇｈｔ！！』

瞬間、木乃香に重力魔法が襲い掛かった。頭から押し潰す様に強烈な重圧が木乃香の全身に掛かる。最大出力で戦いの歌を発動していなければそのまま潰れたトマトになっていたであろうソレに耐えながら、木乃香は瞬動に入った。但し、それは普通の瞬動ではない。木乃香が自力で開発した新たな瞬動術、魔力と共に火系の魔法を使い、足の裏に爆発を起こして行う瞬動、名を“爆縮瞬動”という。

「せいっ！！」

爆縮瞬動によって押し潰さんと圧しかかってくる重力場から抜け出た木乃香は鉄扇を開いて日本刀以上の切れ味になったソレでアルに切りかかる。

だが、幻影体のアルの身体にその刃は当たる事無く、すり抜けてしまう。その瞬間にアルの打撃が木乃香の右肩に入った。

「あぐっ！」

痛みに思わず右手に持っていた鉄扇を落としてしまった。これで木乃香に残っている武器は左手の鉄扇のみ、格上の相手に武器の一つを失ったという状況は不味い。

直ぐに木乃香は光の矢を7本展開しながら後退し、その途中で光の矢全てを放って牽制する。しかし7本の光の矢は全て弾かれてしまい、膠着状態になってしまう。

「なるほど、その歳で中々の腕前です。アリス君が鍛えたとは言え・・・・・才能なのでしょうね」

木乃香の潜在能力と本来の才能は治癒にあるが、流石はサムライマスターの娘、戦闘における才能も十分持ち合わせている。

「本来なら、貴女相手には私のアーティファクトを使うつもりだったのですが・・・・・気が変わりました。私自身の力でもって、お相手しましょう」

「っ！」

今大会、初めてアルが自分から動いた。瞬間移動で木乃香の後ろに移動し、その右肩に手を置くと変化は起きた。

ゴキリッ！　と、嫌な音を立てて木乃香の右腕がぶらりと重力に従って垂れた。その肩は、明らかに脱臼している。

「あ、あああ、あああああああああああああっ！！！！？」

骨折よりも脱臼の方が痛みは大きい、右肩から来る熱を持ったかのような痛みが木乃香の判断力を奪う。

更に、追い討ちを掛ける様に木乃香の右肩にアルが拳を入れる。唯でさえ激痛を発する右肩に、更に打撃を与えられ、木乃香は吹き飛んだ後、その場でのた打ち回った。

「あああああっ・・・・・・ぐぅぅぅぅっ・・・う、あぁ」

傷を負う痛みには慣れたつもりだった。日々の鍛錬で、最近参加するようになった夜の警備で、ベリアルとの戦いで、怪我は幾度となくしている。だが、その中で脱臼したという経験は無い。それが裏目に出てしまった。

「痛い・・・いたい・・・・・・でも、これがこの世界で、当たり前に感じる痛みなんや・・・こんくらいで、泣き言を言うてたら、アリスさんの従者なんて・・・・・・言えへんのや！！」

木乃香は殺傷性の無い魔法の矢を態と自身の右肩にぶつける。再びゴキンッ！　という音が響き、木乃香の右肩は元に戻っていた。

「驚きました・・・・・・まさか貴女の様な穏やかな気性の方が、そのような荒業で脱臼を直すとは」

「なんも可笑しない・・・・・・ウチはアリスさんの、アリス・スプリングフィールドのパートナーなんや。これは強がりでも何でもない、ウチの意地と誇りや！！」

木乃香の身体を光が覆う、元々治癒と光の属性に適正を持っていた木乃香ならこの現象も頷ける。ネギが興奮した時に風が身体の周囲を渦巻くのと同じ現象だ。

「見せたる・・・ウチの新しい切り札、本当ならこないな所で使いとうなかったんやけど。使わな敵わんのやったら、使うしかあらへ

んやろ」

木乃香の右手に光が集まり、光の剣を構成する。その見た目はエヴァンジェリンの得意とする断罪の剣のソレだが、まったくの別物だ。

「贖罪の剣！！」

贖罪の剣、断罪の剣と同系の魔法であり、光属性の近接戦用魔法。アリスがエヴァンジェリンに断罪の剣を教えてもらっているのを見て密かに習得した木乃香の近接戦闘用の切り札。

「成る程・・・・・使われている魔力は流石に極東一の魔力の持ち主、破格の量ですね」

流石のアルも、木乃香の贖罪の剣を受ければ幻影体と言えどダメージは免れない。それどころか幻影自体が消滅しかねない。

「良いでしょう、私も全力でお相手させていただきますよ・・・・・近衛木乃香さん」

木乃香が爆縮瞬動に入った。同時にアルは重力魔法を発動、自分の周囲の重力場を木星並の重力が掛かるようにして更に重力球を４つ、作り出した。

先ほどまでとは明らかに桁が違う重力の中、木乃香は爆縮瞬動の若干衰えたスピードの中でアルの懐を目指す。降りかかってきた重力球を贖罪の剣で切り裂き、後一歩でアルに贖罪の剣が届くという所まで来た。しかし・・・・・。

「・・・・・いややわぁ・・・こないな所で限界やなんて」

「いえいえ、貴女は良く戦いました。私は貴女の戦いを賞賛させていただきますよ」
「なんも嬉しないわ・・・・・・嫌な人や、ほんまに」

後一歩が届かなかった。贖罪の剣の切っ先はアルの腹部の数ｃｍ手前で停止、木乃香は口の淵から一筋の血を流して、その場に倒れた。

「あの重力の中をあれ程のスピードで動けば、当然内臓に負担が掛かります。正直自爆特攻とも取れなくはないですが・・・・・私が咄嗟に重力場の重力を更に倍以上にしていなければ、私の負けでした。近衛木乃香さん・・・貴女は間違いなく、私たちの領域に届いていた。間違いなくアリス君のパートナーとして、胸を張れる魔法使いでしたよ」

こうして、準決勝第一試合の勝者はクウネル・サウンダースに決まった。

木乃香の武道会は、準決勝の舞台で幕を閉じる。だが、収穫はあった。木乃香はアルとの試合の時、間違いなく最強クラスに足を踏み入れていたのだ。まだまだ下位の段階とは言え、それは紛れも無く木乃香の成果だった。

医務室に運ばれた木乃香は月詠が用意していた治癒の符で治療され、残りは目を覚ました木乃香自身が治療魔法を使って癒した。

見舞いに来ていた人達を外に出して一人、試合の最後まで左手に握られていた鉄扇を眺めていた。ボロボロになり、重力魔法の影響なのか所々が歪んでしまい、最早使い物にならなくなってしまったソレは、エヴァンジェリンが木乃香に一人前の魔法使いとして認められた時に贈られた物だ。

「入るよ、木乃香ちゃん」
「あ、アリスさん・・・・・・次試合やろ？」
「木乃香ちゃんとアルの試合でまたボロボロになったステージの修理があるから、少し余裕があるよ」

ベッドの横に備え付けてあるパイプ椅子に座ったアリスはベッドの上に置いてある鉄扇に目を向けた。

「ボロボロだね・・・・・・」
「あははは・・・エヴァちゃんに怒られるかなぁ」
「いや・・・むしろ彼女なら、ここまで無残な姿になるまで木乃香ちゃんの手から離れなかったコレに賛辞の言葉を贈るかもね」
「せやったら、ええなぁ・・・・・・」

ふと、アリスは木乃香の顔を見る。木乃香はいつもの様に笑顔だが、何故かアリスにはそれが笑顔には見えない。

「ねえ、木乃香ちゃん」
「なんや？」
「・・・泣いて、良いよ？」
「っ・・・何で、そんな事を？」

木乃香の笑顔が、一瞬だが揺れた。その一瞬に見えた表情は、間違いなく泣いていた。

「木乃香ちゃんにとって・・・全力の戦いでの、初めての敗北だ。アキラや私たちじゃない・・・他人との全力の戦いでの敗北、悔しいって思わない方が無理だよ」

アリスもそうだった。初めて負けた時は悔しくて、惨めで、人に

見られない所に隠れて声を押し殺して泣いた。

「私の前でまで・・・我慢しないで、私は、木乃香ちゃんの“パートナー”でしょ？」

パートナー、その言葉が引き金となり、木乃香の瞳から一筋の涙が流れ、それが次から次へと流れて、溢れ出す。

「アリスさん・・・・・・」

「・・・うん？」

「ウチ・・・・・悔しい。アリスさんの、パートナーって・・・大見得切って、そんで負、けて・・・・・・う、ぐ」

止まらない涙を何度も拭いながら、木乃香は胸の内を語りだす。アリスは黙って木乃香の頭を抱かかえ、自身の胸に押し付けてやると、それで決壊してしまった。

「悔しい、悔しいよぉ！！　実力の、差なんて・・・初め、から判ってたんよ。でも！　それでも悔しい！　ウチはアリスさんのパートナーやって、アリスさん近くに、少しでも近づけた、って・・・そう思ってたのに！！」

「大丈夫・・・・・・木乃香ちゃんは、確りと私に追いついて来てる。この先、もっと強くなれるから・・・・・・だから、今は思いっきり泣いても・・・良いよ」

「う、ううぅ・・・・・・うあああああああああああああっ！！！！！！」

今は、思いっきり泣くと良い。人は、流した涙の数だけ、強くなれる。木乃香もまた、この涙が糧となり、更に強くなれるのだ。

アリスは唯、自分の胸で泣き続ける少女を抱きしめて、その涙を

胸に秘める。アリスもまた、木乃香の涙が自分を強くしてくれると、漠然とだが、そう思って・・・・・・。

四十六話　「２０年前の英雄と英雄の娘」（後書き）

木乃香、最強クラスに到達！
そして流した涙が、更に木乃香を強くする……。

四十七話　「主従の絆」（前書き）

今回はアリスとシルヴィアの過去が少し出てきます。

四十七話　「主従の絆」

英雄と女王の子

四十七話

「主従の絆」

武道会準決勝二回戦、主従対決となったこの試合は観客から好評を受ける事は無かった。方やシルヴィアは見た目も美人なので受けは良いが、アリスは前のネギとの試合の事もあり、観客全員が今度も何か酷い事をシルヴィアにするのではと思っている。

そして現在、ステージの上に立つアリスとシルヴィアは木剣と杖を構えて向かい合っている。

「まさか、シルヴィアと戦う日が来るなんてね」

「私としては、アリス様に手を上げるという事態は避けたかったのですが・・・・・如何してでしょう？　今、アリス様と戦えるというこの状況を喜んでいる私が居ます」

思えば、アリスとシルヴィアが稽古以外で戦った記憶は無い。アリスとシルヴィアは常に戦場で背中を預け合うパートナー、相棒だった。こうして向かい合って武器を向け合うなどという事は一度だって無かったのだ。

「・・・シルヴィア！　どれだけ強くなったのか、私に見せてみろ！！」

「望む所です！　貴方様に拾われてから今日まで、貴方様と共に戦ってきた私の力、今こそお見せします！！」

互いにパートナーだからこそ、楽しみなのかもしれない、嬉しいのかもしれない。こうして向かい合って戦う事が無かったからこそ、今この状況が最高の舞台に思えてならない。

『それでは準決勝第二試合・・・・・Ｆｉｇｈｔ！！』

アリスの魔力で最大強化が施された木剣とシルヴィアの魔力で最大強化されたランス・オブ・ジュエルがぶつかった。その衝撃だけで衝撃波が発生、周囲にある観客席の屋根に罅を入れた。

「せいっ！！」
「はああっ！！」

アリスの剣閃とシルヴィアの神速の突きが何度も衝撃波を起こし、ステージ、観客席、社が次々とボロボロになっていく。
アリスの木剣がシルヴィアの脇腹を打撃し、シルヴィアのランス・オブ・ジュエルがアリスの右胸を打つ。お互いに常人では目で追いきれない連撃を繰り広げ、相手の連撃を避け、弾き、時として避けきれず弾ききれずに受ける攻防。二人の表情は真剣だが、何処か楽しそうに見えて、喜びに満ちている様に見えてしまうのは、誰が見ても気のせいではない。

「神鳴流奥義、百烈桜花斬！！」

無数の花弁がステージに舞う、その全てが刃となってシルヴィアを切り裂こうと襲い掛かるが、シルヴィアもアリスが使う神鳴流など見慣れたもの、ランス・オブ・ジュエルを頭上で回転させる。

「コキュートス・フィールド！！」

シルヴィアが冷気の筒に包まれ、切り裂こうと襲い掛かった花弁を全て凍らせて防御する。だが、コキュートス・フィールドの弱点、使用中はその場を一切動く事ができないという点を狙い、アリスが瞬動でシルヴィアの背後へ。

「神鳴流奥義！　斬空閃・弐の太刀！！」

精度自体は極度に低い技だが、防御を抜けてシルヴィアにダメージを与えるくらいなら出来る。斬空閃・弐の太刀が冷気の防御を抜けてシルヴィアに届く。しかし、精度が低い所為かどうしてもその斬撃はシルヴィアの皮膚に痣を作る程度に収まる。それでも衝撃自体は殺せなかったのかコキュートス・フィールドは解け、シルヴィアは後ろに吹き飛ばされた。

後ろに飛びながらもシルヴィアはダメージに怯まず無詠唱で展開した氷の矢を１１本用意、アリスに牽制として放ちながら態勢を整えて木乃香の爆縮瞬動同様、シルヴィア自身が考案した新たな瞬動、風系の魔法を使って足の裏で大型台風並みの風を作り凝縮、それを一気に開放して行う嵐襲瞬動を発動。爆縮瞬動並とは言えないが、それでも普通の瞬動よりも速いそれでアリスの後ろを取る。

「甘い！　百花繚乱！！」

乱撃、百花繚乱がシルヴィアの突きを弾き、続けて来た薙ぎ払いをも弾いてシルヴィアにダメージを与える。だがシルヴィアもアリスには届いていないと言え、最強クラスに名を列ねる一人、連撃の合間を縫ってランス・オブ・ジュエルによる神速の突きをアリスの腹部に入れた。

「グッ・・・・・くぅ、流石・・・シルヴィア・・・・・本当に強くなった。初めて会ったあの日からもう９年、９年でここまで

強くなるなんてね」

思い出すのは9年前、まだ二代目・紅き翼が結成される前のメンバー探しをしていた頃。既にラカンを見つけ出して仲間にした後、そのまま魔法世界を周って旅をしていた時だった。

ネギが生まれて一年、父と母が行方知れずになってからのアリスは魔法使いとして修行しながらも、幾つか魔法使いとしての仕事をしながらネカネとネギの生活費を稼ぎつつ、目的の為に仲間を探していた。

ある日、偶然訪れた旧オスティア跡地で野宿をしていたアリスは視線を感じて振り返った。そこに居たのはアリスより何歳か年上であろう少女、ボロボロの服とガリガリに痩せた手足、汚れた顔は元の美少女であったであろう面影を隠している。

「君、は・・・・・・？」
「・・・・・・っ」

アリスに話しかけられ、少女はビクッと身体を震わせるて逃げようとするが、瞬動で少女の前に移動してきたアリスに驚き、その場で尻もちついてしまう。

「ねえ、君は・・・・・・誰？」
「・・・・・・シルヴィア」
「シルヴィア？」

少女の名前だろう、そう納得してアリスは話しかけようとしたが、突然響いた音にタイミングを逃してしまった。音の出所を探ると、目の前のシルヴィアと名乗った少女がお腹を抑えて頬を染めている。

「えと・・・・・お腹、空いてるの？」
「・・・・・・何日もご飯、食べてない」

見たところ孤児か何かなのだろう。今の時代の魔法世界では別に珍しい事ではない。
食べ物に余裕もあるのでアリスはシルヴィアを誘って焚き火の前に戻ると、焼いていた肉を一つシルヴィアに差し出した。

「はい、良かったら食べて」
「・・・・・良い、の？」
「勿論！」

恐る恐る肉に手を伸ばして受け取ったシルヴィアは一口、そして直ぐに夢中になって食べだす。それほど空腹だったのだろう。

「あ、私、まだ名乗ってなかったね。私はアリス、アリス・スプリングフィールドだよ」
「・・・・・サウザンドマスターの、親戚？」
「あ、うん・・・息子なんだ」

流石は大戦の英雄、孤児でも知っている程の有名人だ。

「シルヴィアは、孤児なの？」
「うん・・・・・私は、オスティア難民。私が赤ん坊の頃にオスティアが崩壊して、ずっとお母さんと一緒に居たんだけど」

何処かの奴隷として働いていた母は、仕事をしながらシルヴィアを育ててくれた。しかし、一年前にシルヴィアの母は過労が祟って急死、働く宛ても無く、こうして孤児として宿無し生活をしてきた

らしい。

「働く宛てが無いって・・・・・君、魔法は使えないの？　魔力は凄いのに」

「お母さんも、私の魔力は凄いって言ってた・・・・・でも私、才能無いから・・・全然魔法が上手くならない」

生まれつき呪文詠唱が出来ないという訳ではない。ただ才能が無くて上達しないだけ、膨大な魔力も宝の持ち腐れだ。

「そっか・・・・・オスティア難民、かぁ・・・それじゃあ、シルヴィアは私の母さんの事、恨んでるかな？」

「？」

「私の母さん、ウェスペルタティア王国最後の女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアなんだ」

「アリカ様・・・？　でもアリカ様は処刑されたってお母さんが言ってた」

そう、世間ではアリカ女王は処刑された事になっている。しかし、それはメガロメセンブリア元老院が作り上げた架空の情報だ。

「父さんがね、処刑される寸前で母さんを助け出して、それで私が生まれたんだ」

「そう・・・・・」

アリカ女王は王国を滅ぼしたという事で多くの人間に畏怖の象徴とされている。オスティア難民も自分達が難民となり、奴隷となる原因となったアリカを憎んでいる者はいるだろう。

「私は、アリカ様を恨んでない」

「本当に？」
「オスティアが落ちた時、私は赤ん坊だったし、お母さんもアリカ様を恨んでなかった。アリカ様は国民に優しかったお方だって、だから私もアリカ様を恨んではいけないって言われた」

そう、アリカは恨まれているだろうが、同時に多くの者に今でも慕われている。国民全てに分け隔てなく接し、多くの民に愛されていた。

「良かった・・・・・・」

食事も終わり、シルヴィアは立ち去ろうと立ち上がった所でアリスがシルヴィアの腕を掴んだ。何事かとシルヴィアがアリスの方を見ると、アリスは何か真剣な顔をしている。

「ねえ、良かったら私と一緒に来ない？」
「・・・え？」
「私ね、今、旅をしながら仲間を集めてるんだ。大戦時に父さんが結成していた紅き翼、その二代目を作る為に」
「・・・・・何で、私？」
「父さんと母さん、今は行方不明だけど・・・・・私はいつか会いに行くって決めてる。だからシルヴィアに、母さんと会わせてあげたいんだ」

しかし、先ほどもシルヴィア自身が言っていたが、シルヴィアには才能が無くて魔法が下手だ。サウザンドマスターの息子であるアリスはシルヴィアの予想だが凄腕の魔法使いなのだろう。そんな人物の仲間に、自分がなれる訳が無い。

「だったら、私が魔法を教えてあげる。私もまだ修行中だけど・・・

・・・一緒に強くなろう？　私と一緒に、背中を預け合って戦える様に」
「で、も・・・・・・」
「ね？　私、シルヴィアに仲間になって欲しいんだ！」
「あ、う・・・うぅ」

少し強引だが、シルヴィアの中では葛藤が生まれていた。此処までシルヴィアを欲してくれる人間なんて初めてで、今までは魔法の才能が無くて必要とされず、精々性的な意味で求められる位だ。勿論、性的な意味で求められるのは嫌だったから、今でもシルヴィアの魔法使いとしての部分を欲しがってくれる者は皆無、そこにアリスが現れて心が揺れた。

「良い、の？　私なんかが、サウザンドマスターの息子である貴方の、仲間になって・・・・・・」
「勿論！　一緒に強くなろうよシルヴィア！！」
「あ・・・う・・・・・・うん」

遂に頷いた。シルヴィアが仲間になる事を了承してくれた事に喜んだアリスはシルヴィアに抱きつき、全身を使って喜びを表している。

シルヴィアも、アリスに抱きつかれて温もりを感じ、そしてアリスの優しさに触れて少しだが、口元が緩んでいた。

「これからよろしく！　シルヴィア！」
「うん・・・・・・よろしく、アリス・・・様」

昔を思い出していたアリスは目の前でランス・オブ・ジュエルを突き出してきたシルヴィアに慌て、直ぐに瞬動で距離を取った。

「どうされました？　戦いの最中に呆けるなど、アリス様らしくもありませんよ？」
「いや・・・・・・シルヴィアに初めて会った時の事を思い出してね」
「そうですか・・・・・・早いですね、あれからもう９年ですか」
シルヴィアも思い出したのか、随分と懐かしそうな顔をしている。
「そうだね、９年・・・・・・お互い、随分と変わったよ。色々と」
「ええ、でも・・・変わらない事もあります。私は初めて貴方にお会いしたあの日から今日まで、そしてこれからも、貴方のパートナーである事は、変わりません」
「そうか・・・・・本当に、強くなったね、シルヴィア」
「貴方の隣に立って戦える様に、努力しましたから。才無きこの身を鍛え、ここまで来ました」
だから、シルヴィアは今、９年間の全てをこの試合に込めている。
「行きますよアリス様・・・・・・貴方にお会いしてからの９年の全て、この一撃に込めます！！」
「・・・ああ、来い！　私も、シルヴィアと共に鍛えてきた全てを込めて迎え撃つ！！」
体勢を深く沈め、ランス・オブ・ジュエルを腰に構えたシルヴィアと、木剣を中段に構え、魔力が身体から溢れ出して紫電を奔らせるアリス。
数瞬の静寂が会場を支配し、観客の誰かが一滴の汗を地面に落としたその瞬間、アリスとシルヴィアは駆け出した。瞬動を使わず、魔法を一切使用しない唯の突きと斬撃、至ってシンプルだが、そこ

に込められたモノは大きい。
大きな衝撃波の後に、お互い背を向け合って立ち位置が入れ替わった二人、先に倒れたのは・・・・・・シルヴィアだった。

『シルヴィア選手ダウン！　カウントを・・・・・・』
「必要ない・・・・・・もう、気を失っている」

見ると、シルヴィアは意識を失っていた。だが、その顔は苦痛など一切無い、穏やかなもので、どこか喜びに満ちている様だった。

「シルヴィア・・・・・・良い一撃だった。もし私が剣を叩き込むのが数瞬でも遅れていれば、私が負けていたよ・・・・・・本当に、強くなったね」

気を失っているシルヴィアを抱き上げ、アリスはステージを去る。その際、和美のアリスの勝利を宣言する声が聞こえたが、今のアリスには関係無かった。唯、９年間ずっと背中を守ってくれていた頼もしいパートナーの額に、口付けをして、静かに立ち去るのだった。

四十七話　「主従の絆」（後書き）

次回、遂に決勝戦です。

四十八話　「決勝！　最強の父と息子」（前書き）

遂に決勝！

四十八話　「決勝！　最強の父と息子」

英雄と女王の子

四十八話

「決勝！　最強の父と息子」

シルヴィアを医務室に寝かしつけた後、アリスは一人控え室で瞑想をしていた。思う事はシルヴィアとの試合、そしてシルヴィアとの出会いから今まで、そして・・・・・この後の試合。

「兄さん・・・・・」

「ネギ・・・起きてたのか」

「・・・うん」

アリスの後ろから話しかけてきたのはネギ、既にアリスとの試合のダメージも癒え、傷も完治しているのか元気そうだ。

「聞きたいんだけど・・・・・兄さんは、従者であるシルヴィアさんと戦う事に、抵抗は無かったの？」

「・・・無かったな、あるとしたら喜びだった。彼女と初めて出会った9年前から今日まで、シルヴィアはどれだけ強くなったのか、実際に戦って知る事が出来た。それが本当に嬉しかった」

これがネギには理解できなかった。ネギの最初の従者とは明日菜だ、故にネギにとっては明日菜と戦う様なもの。それも修行ではなく、全力でお互いに勝利を掛けての戦い、それが嬉しい、喜びだと言うのは不謹慎に思えてならない。

「ネギ、お前の考えは甘い・・・・・・子供の考えだ。今回の事に関しては裏だから表だからとかは関係無い。お前も、もう少し成長すれば、理解出来る日も来るさ」

今回の事は完全に大人と子供の差だ。だからネギが理解出来なくと仕方が無いが、これだけは言っておく。

「あれは私とシルヴィアにとって大切な戦いだった。だから関係の無いネギは口出し無用だ」

アリスとシルヴィアの9年間の全てをぶつけ合った聖戦、何人にも汚される訳にはいかない。

「ああ、そうだ。ネギ・・・・・・杖を貸して欲しい、決勝戦で、必要になるだろうから」

突然のアリスの頼みに、ネギは困惑するが、何かあるのだろうと思い持っていた父の杖を差し出す。

「これ・・・如何するの？」

「そうだね・・・・・・ネギ、決勝戦はきっとネギにとっても大切なものになるから、十分に見ておけば良い。答えは、そこで見せるから」

ステージ及び観客席の修理が終わって遂に決勝戦、アリス・スプリングフィールドＶＳクウネル・サウンダース、初代と二代目の紅き翼同士の戦いは裏の関係者からすれば今までに無い壮絶な戦いになるであろうと予測できる。特にエヴァンジェリンはこの試合、始まる前から既に楽しみで仕方が無いという顔をしていて、試合が始

まる今、観客席の中でも最前列に場所を取って確りと見学をするつもりだ。

『さあ！　遂にまほら武道会も決勝戦！！　対戦するのは・・・・・・圧倒的な剣技と拳で勝ち進んできた隠れた武道家先生のアリス・スプリングフィールド選手と、謎の力で相手を圧倒してきたこれまた謎のフード男ことクウネル・サウンダース選手！！』

ステージの上に立つアリスとアル、お互いに特に構える事なく相手を見ている。

『なお、この決勝戦について開催者から変更事項を説明してもらいます』

和美が手を向けた先にいたのは予想通り超だ。いつも通り不敵な笑みを浮かべて観客席を見渡している。

「今回！　決勝戦では大会の最初に言ったルールの注意事項にあった禁止項目を全て解禁するネ。決勝を戦う二人には存分な戦いを期待すル！」

それはつまり、銃火器、刃物、呪文詠唱全ての禁止が解け、使用可能になるという事だ。

「なるほど・・・・・・是非も無い」

アリスは影の中から“姫”を取り出し、構えた。既に両手にはえいゆうの籠手を装備、念の為もう一つのアーティファクトになるカードは懐に忍ばせてある。アリス、フル装備だ。

「良かったですねアリス君・・・禁止事項解禁で貴方の本当の戦いが出来ますよ」
「ああ」
「これで私も、心置きなくナギの遺言を貴方に果たせる・・・・・・」

アルが取り出したのは紛れも無くパクティオーカード、ナギを主としたアルのアーティファクトは・・・・・・。

「アデアット」

無数の本がアルの周囲を螺旋する。アルビレオ・イマのアーティファクト、イノチノシヘンはマスターピースに属する。いどのえにっき同様、危険であり、反則みたいなアーティファクトだ。

『それでは・・・・・まほら武道会決勝戦！　アリス・スプリングフィールド選手ＶＳクウネル・サウンダース選手・・・・・・Ｆｉｇｈｔ！！』

始まった瞬間、アルは数ある本の中から一冊を手に取り、持っていた栞を開いたページに挟んで閉じた。

「始めますよアリス君・・・・・準備は良いですか？　貴方達兄弟の、最強の父と戦う覚悟は」
「・・・いつでも」

アルが挟んだ栞を一気に引き抜く。次の瞬間、アルの身体が光り輝き辺りを照らす。光が収まった後、アルが居た場所には・・・・・・ナギの姿があった。

「よお・・・・・・随分とでっかくなったが、お前は・・・アリスだな？」
「・・・・・・うん、父さん」

思わず涙が出そうになった。アルのアーティファクトによる幻のような存在だとしても、そこにいたのは確かに父だったのだから。

「ここは・・・・・成る程、まほら武道会か。アルのヤロー良い演出してんなぁ」
「アルは最高の演出家だからね・・・父さんだって、よく知ってるでしょ？」
「違いねぇ！」

親子して笑った。お互い、あの腹黒変体男の事は熟知しているからこそ、笑いがこみ上げてきたのだ。

「ま、あんまし時間もねえし・・・・・見せてもらうぜアリス、お前がそこまで成長して、どれだけ俺に近づけたのかな」

構えを取る父に、アリスはネギから借りて影の中に仕舞っていた杖を取り出し、ナギに投げ渡した。飛んできたソレをキャッチしたナギは数瞬だけ呆然として、次にはニッと笑みを浮かべながら構えなおす。

「いくよ・・・私の全てを、父さんに見せる！！　多重高速詠唱！！　千の雷！　奈落の業火！　術式固定！　黄昏の剣、魔法付与！」

既に戦いの葬送曲は無詠唱で発動している。残るは術式武装のみだが、ナギは攻撃してこないのかと思って見てみれば、アリスが何をやるのか楽しみに待っている様だ。

「術式付与完了、是、“焔雷の獄姫”！！」

激しい雷を纏った黒い炎の剣となった“姫”を構え、アリスは瞬動に入る。ナギも同じく瞬動に入って攻防が始まった。・・・・・・いや、正確にはアリスの猛攻が全てかわされている。

「ほらほら！　その魔法はすげぇけどよ・・・当たらなきゃ、意味ねぇぜ！！」

虚空瞬動でアリスの真上を取ったナギが無詠唱の雷の投擲４本を展開、そのままアリスに向けて射出した。

真下にいたアリスは飛来する雷の投擲が当たる直前で瞬動に入り、途中で虚空瞬動に切り替えるという離れ業を遣って退け、そのままナギとの空中戦に突入する。

振るわれた“姫”をナギが杖で止め、拳を放ち、拳はアリスが受け止めて地面に投げつける。

「甘ぇ！！　来たれ虚構の雷　薙ぎ払え！！」

落下途中で詠唱を済ませたナギは再び虚空瞬動に入り、アリスの背後を取った。

「しまっ・・・！」
「遅いぜ！　雷の斧！！」
「っがあああ！！」

完全に直撃した雷の斧がアリスの身体を焦がし、アリスはステージに落下した。しかし、アリスの着ているローブは魔法攻撃を軽減してくれる筈・・・・・なのだが。

「（軽減されてない！？　相変わらず出鱈目だ！！）」

幼い頃から直接見て知っていたつもりなのだが、改めて父の出鱈目ぶりを目の当たりにした。まさかローブの耐魔力を突き破ってダメージを与えてくるなんて、ラカンみたいだ。いや、如何レベルなのは今更なのだが・・・・・・。

「魔法の射手！　闇の７７矢！　雷の７７矢！！　高速詠唱！　雷の投擲！！」

合計１５４本の魔法の矢と5本の雷の投擲を同時にナギへ向けて放つが、驚くことにナギは真正面から魔法に突っ込んできた。

「こんだけ弾幕があるとな！　逆に避けねえ方が簡単に突破できらぁ！！」

最早、言葉も無い。本当に真正面から突撃して無傷で魔法の弾幕を抜けてくるなんて・・・・・・。呆れる以外ないのだが、同時にアリスは嬉しくなった。

自分の知っている、憧れていた父の強さは、確かにこれだと。その強さを、実際に戦って目の当たりにしているのだという事が、本当に嬉しい。

「神鳴流奥義！　百烈桜花斬・焔雷！！」

アリス特性、神鳴流術式武装ヴァージョン。無数の炎の花弁が紫電を放ちながらナギに襲い掛かる。

「詠春もよく使ってた技だなこりゃ・・・・・・そういやアリスは

詠春からも剣を教わってたっけ」

冷静に呟きながらナギは襲い掛かってくる炎の花弁を避けつつ、ガリガリと頭を掻いた。そして何か思いついたのだろう、ニヤッと不敵な笑みを浮かべて杖を構える。

「あ～っと・・・・・呪文忘れちまった。まあ、無詠唱で良いか！　風花・風塵乱舞！！」

良いか、所の騒ぎではない。無詠唱であるにも関わらず、ナギの風花・風塵乱舞は炎の花弁を全てかき消し、風が止まない内から虚空瞬動でアリスに突っ込んできた。

「強くなったじゃねぇかアリス！　だが、まだまだそんなんじゃ、俺達の領域（ところ）には届かねぇぜ！！」

確かに、アリスは最強クラスの上位だ。だが、そんなもの、ナギ達最上級クラスと比べればまだまだというレベル。しかし、それでもナギは父として、息子が自分達の領域（ところ）に迫りつつある事に歓喜していた。

「一か八か！！　神鳴流奥義！　斬魔剣・弐の太刀！！」

正直、アリスの神鳴流の技に警戒して常時展開している障壁の強度を上げた父に届かせるにはこれしか無い。

今までで、成功したのは月詠との戦いの時の一回だけ。それ以前も、それ以降も一度だって充分な精度で放てた試しが無い斬魔剣・弐の太刀だが、何故かこの時、アリスは不思議と成功する気がしていた。

「お、おおっ！？」

事実、アリスの斬魔剣・弐の太刀は成功した。確かに本職と比べれば精度は雲泥の差だが、ナギに届かせるには充分な出来だった。

ナギの障壁を抜けた斬撃はそのままナギに襲い掛かり、ナギが避けてなければそのまま首を刎ねていた。もっとも、ナギの頬には小さいながらも切り傷が刻まれ、そこから血が流れた。

「へえ・・・・・まさか、傷を付けられるとはな。流石は、俺の息子だぜ！」

何故か嬉しそうに笑い、そして杖に魔力を迸らせた。すると杖が雷のハルバートに変わり、それを振りかぶったナギはソレを思いっきり振り落とした。

上空にいるナギとステージに立つアリスの間に閃光が奔り、次の瞬間、轟音と共に爆発した。ステージは完全に罅割れ、煙に包まれて何も見えなくなっている。和美は既に試合が始まった時から非難していたので無事だったが、周囲は凄い事になっている。

観客席の屋根は完全に砕け落ち、客達は避難しながらステージ周辺にある大量の水を被り、全身びしょ濡れに。社も数ヶ月は修理しなければならないであろうレベルで破壊され、会場周辺はボロボロになってしまった。

「あ～・・・・・やり過ぎたか？」

今更遅いが、ナギは周辺の惨状を見て冷や汗をたらりと流した。もっとも、このナギは幻なので弁償するのは自分ではないと割り切って未だ煙に包まれているステージを見下ろした。

「めんどくせぇ・・・・・ほれ」

杖を一振り、それだけで煙は霧散され、巨大なクレーターの中で全身から血を流しながらも立っているアリスの姿を確認した。よく見ると持っていた剣が一本増え、“姫”と“きしのあかし”の二刀流になっている。

「あ、ぶな・・・・・・きしのあかし出してなかったら粉々に砕け散ってたね・・・身体が」

きしのあかしの能力の一つには身体強度を底上げするというものがある。戦いの葬送曲で強化している上から更に強化された身体は、ナギの一撃に何とか耐え切れたが、体力がゴッソリと持っていかれた。

「ほぉ・・・随分ボロボロだが、立ってるな」
「正直・・・立ってるので精一杯だけど、ね」

ステージの上に降りてきたナギが感心したようにアリスを見た。転がっていた杖を回収して再びアリスに向けると、アリスも同じように“姫”を構える。

「俺はまだまだやりてぇ所だけどよ・・・・・・お前もそろそろ限界だろう？　だから最後の一撃だ。偉大なるお父様の一撃、しかと目に焼き付けな」
「なら父さんも見るべきだよ・・・・・・その偉大なるお父様の息子の、一撃を」
「おもしれえ!!　いくぜぇオラァ!!!」

相変わらず、千の雷はアンチョコ無しでは詠唱出来ないので無詠唱になるが、それを放つ。アリスも同時に、千の雷を高速詠唱で放

った。

「「千の雷!!」」

既に観客は避難済み、一般人の目を気にすることなく放たれた二つの千の雷はぶつかった瞬間、ナギのソレがアリスのソレをブチ破った。完全にナギの方が威力も何もかもが上だったのだ。

そして、千の雷がアリスに命中する直前、ナギが魔力を霧散させて千の雷を消した。後に残されたのはまだまだ余力のあるナギと、魔力も底を尽き、体力も気力もスッカラカンになってふらふらしているアリスだった。

「まだまだ届かねぇみてぇだな。だが、それでも充分だ。お前はこれから更に強くなれるぜ！　何せこの俺様、サウザンドマスターの息子なんだからな!!」

「だと、良いなぁ・・・・・・ああ、私の負けだよ・・・父さん」

バタンっと後ろに倒れたアリスにナギが近づいた。強くなった息子の姿を、消える前に目に焼き付けておきたかったのだろう。

「アリス、お前は小手先の手段に拘りすぎだぜ。本当に強くなりてぇんなら見つけな、お前の誰にも真似できないお前だけの最強の魔法って奴をな」

「私だけの・・・・・最強の、魔法？」

「そうだ、お前は誰の息子だ？」

「それは父さんと・・・・・・」

そこでナギが何を言いたいのか理解出来て、言葉を止めると改めて言い直す。

「ナギ・スプリングフィールドとアリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子だよ」
「なら、もう何もいう事は無ぇ・・・今よりもっと強くなって、本物の俺とアリカに、会いに行けよ」
「勿論！」

そして、それが限界だったのか、アリスはゆっくりと意識を失うのだった。最後に、和美のアルの勝利を告げる声と、エヴァンジェリンがナギの名を叫ぶ声が聞こえたが、それを気にする余裕も無く、アリスの意識は暗転した。

四十八話　「決勝！　最強の父と息子」（後書き）

次回から本格的に超との戦いが進み始めるかと思います。
アンケートの結果、アリスの立ち位置はエヴァンジェリン同様の中立傍観。ネギパーティーには参加しませんが、木乃香とアキラ、さよだけ戦う事になると思います。

四十九話　「一時の休息」（前書き）

今回はタカミチと明日菜のデートの話ですが、特に語る必要は無いので適当に流しました。

四十九話　「一時の休息」

英雄と女王の子

四十九話

「一時の休息」

まほら武道会が終わり、決勝で倒れたアリスも木乃香に治療してもらって全快した。流石に魔力はまだ完全には戻っていないが、それも一日休めば戻るので、武道会が終わったアリスは完全に休息モードだ。

二日目後半の麻帆良祭、アリスはシルヴィアと月詠の三人で見て周っていた。武道会の疲れもあるが、アリスもシルヴィアも体力自体は回復しているので、元気に二人を引っ張りまわす月詠にも何とか付いて行っている。

「あぁ・・・・・・アリスはんもシルヴィアはんも、ほんまに強かったわぁ～・・・二人の試合見てて、ゾクゾクしたわぁ」

アリスとシルヴィアの試合を思い出した月詠が頬を赤らめ、欲情の表情でうっとりしている。それに頬を引きつらせているアリスは隣でやきそばを頬張っているシルヴィアに視線を向けた。

シルヴィアは夢中になってやきそばを食べながら、月詠の様子を伺って苦笑するだけ、何も言ってはくれなかった。

「あ～・・・・・少し疲れたね。シルヴィア、月詠、良かったら喫茶店にでも入って休まない？」

「あ、はい。私は構いませんよ？　少し喉も渇きましたし」

やきそば食べて、飲み物買わなかったのだから当然だ。

「ん～？　ええよ～」

月詠も了解してくれたので、近くにある喫茶店に入って二階席に向かう。すると、そこにはネギと明日菜、木乃香、高音と愛衣、シスター服を着た春日美空と褐色肌の幼女が居た。

「おや？　随分賑やかだと思ったら・・・・・・」

「あ、兄さんとシルヴィアさん・・・それに、月詠・・・さん」

相変わらず、ネギは月詠が苦手らしい。修学旅行の時に敵だったから仕方が無い事だが、いい加減慣れて欲しいものだ。

「それで？　何を騒いでるの？」

「えっと・・・それが」

何でも明日菜がタカミチにデートに誘われたとか、それで明日菜は大騒ぎ。何を着ていくかとか、色々とテンパっているのだ。

「へえ・・・・・・タカミチとね」

「彼・・・・・・年下趣味でしたっけ？」

「赤くなっとるお姫様も可愛ええなぁ～」

タカミチには色々と言いたい事が出来たが、それは一先ず置いておく事にした。後でからかっておこうと思ったのは内緒だ。

「あ、アリスさん、良かったらウチとデートせえへん？」

「あのね木乃香ちゃん・・・・・・」

少し呆れてしまった。木乃香がアリスの様子に頬を膨らませたが、直ぐに笑顔になり、会話に参加しようと誘ってくる。明日菜の相談に乗って欲しいそうだ。

「そうだ兄さん！　高音さんも立派な魔法使い（マギステル・マギ）目指してるんだって！！」

「へ～・・・・・ホント、最近の魔法使いは物好きが多いね」

「なっ！　如何いう事です！？　私たち魔法使いは誰だって目指すべきものでしょう！！　アリス先生とて、サウザンドマスターの息子で、二代目サウザンドマスター候補と呼ばれているのですから、目指しているのではないのですか！？」

そう言えばアリスが魔法先生や魔法生徒の前で立派な魔法使い（マギステル・マギ）や二代目サウザンドマスターになる気は無いと言った時、彼女は気絶していた。

「私はサウザンドマスターの名を継ぐ気なんて無い。そんなものネギにでもくれてやるよ。立派な魔法使い（マギステル・マギ）だって、好き好んでメガロメセンブリア元老院の手駒になろうなんて思わない」

大部分の魔法使いは知らない事だが、立派な魔法使い（マギステル・マギ）とはメガロメセンブリア元老院の直属の配下に与えられる称号だ。ナギ達、初代・紅き翼は特例、英雄であるが故のプロパガンダと言った方が良い。

「如何いう事ですの！？」

「もう少し視野を広げて世界を見る事だね・・・・・・立派な魔法使い（マギステル・マギ）の本当の意味を理解しない事には、所詮はあのクソ爺共の捨て駒扱いだ」

それだけ言って会話を打ち切った。喚いている高音を無視してアリスは明日菜に向き直る。

「それで神楽坂さん、タカミチとデートだっけ？　タカミチの好みはロングの髪をストレートに下ろした女性だから、髪下ろして髪飾りはバッグにでも結んでみたら如何かな？」

「そ、そうなの？　ふむ・・・・・・」

アリスの助言に明日菜が着ていく服やバッグ等のファッションを思案する。木乃香も相談に乗るので、まあ失敗は無いだろう。

「でも考えてみるとスゴイですよねー、“あの”高畑先生とデートなんてー・・・」

ふと、愛衣がそのような事を呟いた。まあ、言いたい事は理解出来る。タカミチとデート出来るなんて普通は大変名誉な事だし、彼のファンクラブに知れたら明日菜の明日は保障出来ない。

「ソレどういう意味ですか？」

「だって高畑先生って大戦期にサウザンドマスター達、初代・紅き翼に同行していて、現在は二代目・紅き翼の一人として魔法世界ではスゴイ有名じゃないですか」

「え・・・・・っ！？　そうなんですか？」

そう、タカミチは大戦期から魔法世界では有名だった。当時の初代・紅き翼の少年探偵であり、ガトウ・カグラ・ヴァンデンヴァーグの弟子でもあったから、その当時の少年少女からは憧れの対象だった。

「タカミチが・・・・・で、でも父さん達や兄さん達ってそんなに有名なんですねー」
「当たり前です。あなた、彼の息子で、アリス先生の弟なのに何も知らないんですね」

まあ、ネギはそんな事を知るよりも魔法の勉強を最優先していたので、魔法世界の情報や魔法使いと一般人の常識を知らない事が多々ある。

「サウザンドマスターとその仲間達のパーティー、“悠久の風”の“初代・紅き翼”と言えば、その活躍は魔法世界に知れ渡っています。アリス先生とその仲間達のパーティーである“二代目・紅き翼”は初代を受け継ぐ集団で、今現在多くの活躍を見せている超有名人達です。高畑先生は初代から二代目までずっと参加していますから、それで随分と人気がありますよ」

魔法世界ではタカミチは勿論、アリスもシルヴィアも、ラカンも雑誌の表紙を飾った事がある。それぐらい有名なのだ。アリスとシルヴィアは若者から、タカミチとラカンは中年層から人気がある。

「あれ？　でもアリスさんとシルヴィアさん、高畑先生はマギステル・マギちゃうよなぁ・・・アリスさんとシルヴィアさんはなる気が無いゆうんは知っとるけど、高畑先生はどうなん？」
「高畑先生は呪文が使えないので、立派な魔法使い（マギステル・マギ）の資格はないんです」
「ええっ！？　何よソレー！！」

愛衣の言っている理由は表向きの理由なのだが、タカミチも立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる気は無いから、アリスと同じ理由なのだ。

「まあ、魔法関係の事は如何でも良いでしょう。神楽坂さんは純粋にタカミチとのデートを楽しんでおいで。タカミチ、魔法世界では結構モテモテだけど、本人は女性とデートなんてした事無いから、結構初心な所もあるし。だから神楽坂さんはタカミチの初デートの相手になるよ」

「た、高畑先生の初デートの相手・・・・・・で、でもしずな先生は!?　高畑先生ってしずな先生と・・・」

「あ～・・・・・・」

その事はタカミチから聞いてなかった。しずな先生も魔法先生だから、よくタカミチは彼女と一緒に仕事の話をしていたりするらしいが、その辺は如何なのだろうか。

残っていた紅茶を飲み干してアリスは席を立った。それに続いてシルヴィアと月詠、それから付いて来るつもりなのか木乃香も立ち上がる。

「ま、まあ・・・しずな先生の事は置いておいて、神楽坂さんはタカミチと楽しめば良いと思うよ。わ、私もしずな先生の事はよく知らないし」

逃げた。流石に苦しくなったのかアリスはさっさと立ち去る事にした。背後で明日菜の叫びが聞こえたが、完全に聞こえなかったフリをしてアリス達は喫茶店を後にする。

「なあなあアリスさん、アスナの後追けてみいひん?」

「デバガメですよ、木乃香ちゃん?」

「ええやん、ウチはアスナの親友なんやし・・・ちょう心配やねん」

結局、明日菜が着替えてタカミチとの待ち合わせ場所に向かうの

を、アリスとシルヴィア、月詠、木乃香、それから何故かネギと高音、愛衣の7人で尾行する事になってしまった。

明日菜とタカミチのデートは意外と順調だった。明日菜は普段のパワフルさが嘘のように大人しく、それでも何処か抜けているのは変わらないが、タカミチもそんな明日菜の様子に笑顔を絶やさない。

「・・・・・・（でもタカミチ、それは感傷だよ）」

タカミチの考えている事が手に取るように解る。明日菜の過去の事、そしてタカミチの師、ガトウの事、それが明日菜と一緒に居るタカミチの笑顔の裏に隠された想いだ。

結局、夜のパレードを見て明日菜はタカミチの告白をしたものの、振られてしまい。一人残されたタカミチの所にアリスも一人で向かった。

アリスが瞬動でタカミチの横に立ったとき、同時にアルも現れた。

「振っちゃいましたねぇー、タカミチ君」

「・・・・・・お久しぶりです、アル。それと、怪我はもう大丈夫そうだね、アリス君」

タカミチが煙草を咥えて何を思っているのかは、簡単に理解出来る。

「もったいない、大層な逆玉なのに」

「よしてくださいよ」

まあ、確かに明日菜と結婚するというのは逆玉と言えなくも無いだろう。元・王女の身分だった彼女だから当然だ。

「タカミチ、自分が人に愛される資格は無いって・・・・・昔から言っているけど、そんなに悔しいの？　ガトウさんを助けられなかった自分が、アスナ叔母さんに人の死を見せてしまった自分が、そんなに許せない？」

「・・・・・そうだね、あの時、僕にもっと力があれば、師匠を死なせなくて済んだのかもしれない。アスナ君に、人の死を経験させて、あんな涙を流させなくて良かったのかもしれないのに」

だから明日菜の記憶を封印した。ガトウの事も、嘗ての身分の事も、全てを忘れさせて、ただの普通の女の子にした。

「タカミチ君、見た目はオッサンになりましたが・・・・・その辺はまだ、子供のままですねぇ」

「はは・・・そうですね。僕はまだまだ子供なのかもしれません・・・・・いつまでも過去の事に囚われて、自分の幸せというものを忌避してしまう」

自分自身の幸せ、ずっとタカミチが忌避してきたモノであり、そして心の奥底では最も求めているモノ、タカミチは少し、難しく考え過ぎるのかもしれない。

「タカミチ・・・・・もう少し、楽観的に考える癖を付けるべきだよ。今のままじゃ、タカミチは・・・・・ガトウさんに、父さん達にも届かない」

「そうですね、ナギもラカンも、ゼクトも私も結構楽観的な人間でしたし、あの中で堅物だったのは詠春とガトウ位でしたか・・・最も、あの二人とて今のタカミチ君ほど堅物ではありませんでしたよ」

「ええ、理解してます。僕はまだまだあの人たちには届かない・・・駄目だなぁ、もう少し柔軟に生きなきゃ」

麻帆良祭二日目の夜は、こうして更けてゆく。男三人はタカミチに会議の連絡が入るまでのんびり、賑やかなパレードを眺めて過ごすのだった。

四十九話　「一時の休息」（後書き）

次回は原作ではネギが未来へ飛ばされますが、アリスにカシオペアを使わせる予定は無いので一気に話が進みます。

五十話　「急展開」（前書き）

魔法バレした未来は飛ばしました。アリスはカシオペアを使わないので書く意味が無いですし、代わりに未来からネギ達が帰ってきたとして書きます。

五十話　「急展開」

英雄と女王の子

五十話

「急展開」

麻帆良祭最終日の朝、アリスと、その従者達（シルヴィア、木乃香、アキラ、月詠、さよ）は学園長室に呼ばれていた。何でも刹那が超鈴音の事で話があるとの事だが・・・・・・。

「なんと・・・・・これは本当かね？」

刹那に手渡された報告書、それを見た学園長は驚愕の声を上げた。勿論、コピーを呼んでいたアリス達と魔法先生の一人、神鳴流剣士の葛葉刀子も同じ気持ちだ。

超鈴音の目的、それは世界樹の膨大過ぎる魔力を用いて世界中に強制認識魔法を発動、全世界の人間に魔法の存在を公にするというものだ。

「刀子君、アリス君・・・・・・どう思うね？」

「は、・・・・・俄かには信じられませんが・・・刹那がここまで言うのですから」

「それに、確かに可能であると言えますからね・・・・・・世界樹の魔力は正直、人間には計り知れない程の量です。そんな膨大な魔力で強制認識魔法を使えば、全世界に魔法を認識させるのも容易いでしょう」

報告書にもあるが、刹那を含め、ネギ達は一度、超の罠に嵌り未

来へと飛ばされてしまったらしい。超はタイムマシンを持っており、それによって刹那たちを未来へ飛ばしたとか。

未来の世界では既に麻帆良学園の魔法先生は超に敗れ、アリスは従者達を連れて逃亡、強制認識魔法によって全ての人間が魔法を認識していたのだ。

「ネットの方をもう一度調べて見ます」

「うむ」

「後は超の身辺調査も必要かもしれませんね。寮の部屋、研究室、その他・・・・・・色々と調べる所は在るかと、寮の部屋は管理人権限で許可しますよ？」

「うむ、こちらで手配しておこう」

後は魔法先生の仕事だ、アリス達の出る幕は無いので立ち去ろうかと思ったのだが、そこで刹那と一緒に来ていたカモミールがとんでもない事を言い出した。

「あんた達に任せたらダメな事は歴史が証明済みなんだぜ？　ここは俺っち達に任せとけって。ついてはこれを用意してもらいてぇ」

カモミールが手渡した紙に書かれていたのは量産型の対非生命型魔力駆動体特殊魔導具リストだ。しかも本国のクラウナダ異界国境魔法騎士団の第１７倉庫に大量に死蔵されている物ばかり、よくもまあこれだけの情報を集めて来れたものだ。

「ふうん・・・ま、確かにこれなら転移魔法空輸便で郵送すれば夕方には間に合うかな？　学園長の力なら、本国とそれ位の交渉も容易いだろうし」

「そういう事だぜアリスの旦那！　それで学園長よぉ、これを最低１０００セット・・・・・・いや、できたら２５００セット頼むぜ。

なぁに、世界に魔法がバレる事に比べたら簡単なこったろ？」

言葉も無い・・・・・・カモミールは２５００セットもこの魔導具を用意して一般人も巻き込んだ盛大なゲームをやろうと言っているのだ。

「面白い事になりそうだ・・・・・・」

カモミールと学園長の話し合いを眺めながら、アリスは何処か他人事の様に呟く。それはまるで自分は関係無いと言わんばかりであった。

刹那とカモミールが立ち去って数刻後、麻帆良学園にある教会の大聖堂に学園長を始めとする麻帆良学園にいる殆どの魔法先生、魔法生徒が集まっていた。勿論、アリスと従者達も一緒に来ている。

「全世界に対する強制認識魔法・・・・・・そんな事が可能なのか」

「侮っていたな・・・学園長、この情報源は何処から？」

「情報源はどうでもよろしい、何としてもこの計画を阻止せねばならん！」

会議の内容は至って簡単、今回の事を学園祭のイベントと称して一般生徒や客達に参加させて戦力とし、超の目的である全世界への強制認識魔法行使を阻止するというもの。戦いには魔法先生や魔法生徒をヒーローユニットという名目で参加させるというものだった。

勿論、一般人への安全は確実に措置されるし、何より麻帆良の人間は何気に能力の高い人間が多い、充分な戦力になってくれる。

「この・・・６体の巨大生体兵器というのは？」

「どうやら学園地下に石化封印されていた無名の鬼神を科学の力で

使役するつもりのようです。巨大魔法陣生成の魔力増幅装置として使うものと思われます。これが出てきたら生徒は下がらせるべきでしょう」

「しかしどうするつもりだ？　学園結界の中では高位の魔物・妖怪の類は動けんハズだが・・・」

その学園結界も科学の力で如何にかするつもりなのだろう。所詮は科学の力で張られている結界だ、同じ科学の力で如何にか出来ない道理は無い。

「いずれにせよ、これ程の計画を進める超君の力を侮る事はできん。本国からの応援も間に合わんじゃろう、心してかかるがよい。超君の計画を阻止できなくば世界が変わる！　諸君、全力でこの作戦にあたってくれ！」

『ハッ！』

「アリス君とシルヴィア君たちも、よろしく頼むぞい？」

「・・・・・それなんですが」

アリスの制止にこの場にいる全員が視線を集めた。

「私とシルヴィア、月詠は今回、エヴァンジェリン同様に事態を静観させていただきます」

「むお！？　な、何を言っておるのじゃ！！　このような危機に冗談はやめとくれ！」

「いえ、冗談ではありません。今回、私は一切、手出しはしません・・・・・代わりと言ってはなんですが、シルヴィアと月詠以外の従者を全員参加させますので」

元々、アリスとシルヴィアは麻帆良学園の正式な魔法先生という訳ではない。アリスはあくまで二代目・紅き翼のリーダー、シルヴ

ィアはそのメンバー、麻帆良学園には期間限定で雇われたに過ぎない。今回の作戦に参加する義理は無いのだ。

「し、しかしのう・・・・・・アリス君とシルヴィア君が参加してくれるだけで戦力が変わってくるし、勝率も上がるのじゃが・・・」

「知った事ではありません・・・もし私とシルヴィアを参加させたいのなら二代目・紅き翼への正式な依頼として、ヘラス帝国に通してください」

現在、アリス達二代目・紅き翼への依頼はヘラス帝国とアリアドネーからしか受け付けてない。メガロメセンブリア元老院の下位組織である麻帆良学に雇われたのだって、ネギが居たから受けただけで、特別なのだ。そして雇われた時の内容に、麻帆良学園の危機に助けるというものは含まれてない。

「ぬう・・・・・・」

正直、ヘラス帝国へ連絡している時間は無い上に、元々メガロメセンブリアとヘラス帝国は上層部の方でいがみ合っていると言っても過言ではない。表向きは平和締結関係にあっても、元老院の上層部はヘラスを嫌っているし、ヘラス帝国も同じだろう。昔から仲が悪かったのだ、故にメガロの下位組織たる麻帆良学園から依頼を通しても上層部が受け付けてくれない可能性が高い。

「まあ、木乃香ちゃん達も充分強いし、戦力としては申し分無いと思うよ？　皆ここにいる誰よりも強いのは確かだし」

学園長とタカミチ、アリス、シルヴィア、月詠を除いての話だが、確かに木乃香たちは魔法先生や魔法生徒の誰よりも強いのは間違いない。アキラとさよは準最強クラスだし、木乃香など最強クラスの

下位に至った。戦力としては申し分ない所かお釣りが来てもいい位だ。

「わかった・・・・・元々これは我々麻帆良学園の問題、外部の者であるアリス君とシルヴィア君、月詠君に頼るのは筋違いじゃったな」

大半の魔法先生や魔法生徒が異を唱えるが、アリスは無視、学園長は一睨みで黙らせた。

「愚かモン！！　そもそも今回の事、我らの失態ぞ！　それの尻拭いに外部の者を頼ろうなど、恥を知れ！！」

学園長の一喝で誰もが口を閉ざした。流石は引退したとは言え、嘗ての極東最強の魔法使いであり、全盛期は初代・紅き翼にも引けを取らない程の実力者と言われていただけはある。

「それじゃあ木乃香ちゃん、アキラ、さよ・・・今回の事、心して掛かるんだよ？」
「はいな！」
「頑張る！」
「初めての実戦ですー」

三人とも気合充分、それぞれ既に武装は準備されているので、直ぐにでも戦える。

「それと・・・今回の戦いが、二代目・紅き翼への加入試験だ。合格すれば三人は晴れて二代目・紅き翼の一員になれる、頑張って」
「三人が仲間になれるのを楽しみにしていますよ」
「うちもや～」

余計に気合が入る言葉だった。今までは仮の加入だったが、今回合格を貰えれば正式なメンバーになれる。俄然やる気が出てきた三人は闘志をメラメラ燃やしている。

麻帆良学園始まって以来の大決戦は目前に迫っている。超との最終決戦まで後、僅か・・・・・・。

五十話　「急展開」（後書き）

次回、戦いが始まります。ネギパーティーとアリスパーティーのメンバー達がそれぞれ戦い、活躍します。

五十一話　「火星軍団ＶＳ麻帆良魔法騎士団」（前書き）

本当に遅れて申し訳ございませんでした！！

五十一話　「火星軍団ＶＳ麻帆良魔法騎士団」

英雄と女王の子

五十一話

「火星軍団ＶＳ麻帆良魔法騎士団」

いよいよ超との戦いが迫ってきた。雪広コンツェルン主催のサバイバルゲームを利用した今回の作戦、麻帆良学園の魔法関係者とネギパーティーが準備を進め、それぞれの配置も決定している。

更に本国から届いたアイテムを一般客に配り終え、ゲームの詳細説明も既に終わっているので、後は開始時間を待つばかりだ。

「一般人の相手は魔力駆動型のロボットか・・・・・・それ以外の強敵には魔法先生を当てると、途中で絶対に現れるであろう超には学園長の事だ、ネギをぶつけようと考えているんだろうな」

麻帆良学園上空で昔、魔法世界で買った飛行魔法内蔵型絨毯に寝そべっているアリスは眼下の様子を眺めながら露店で買ったおでんを食べていた。

「お、良い出汁を使ってるなぁ・・・美味しい」

ホクホク顔で大根を頬張るアリスの後ろにシルヴィアと月詠が現れた。二人の両手には大量の食べ物や飲み物が抱えられている。

「アリスはん～買うて来たえ～」

「今日は無礼講との事ですので、特別にお酒も買っておきました」

「ありがとう、そろそろエヴァンジェリンも来る頃だと思うから準

備してて」

実は今日、此処で超との戦いを見物するにあたってエヴァンジェリンを誘っていた。一緒に食事したり酒飲んだりしながら見物しないかと聞いた所、二つ返事で乗ってくれたのだ。

「それにしても・・・ネギ君は魔力切れで寝込んでいるとは・・・・・」

「あかんなぁ、こないな肝心な時にダウンやなんて、この先見込み無しやわ～」

この時代に戻ってくる為に魔力を使い果たしたとは言っていたが、普段から魔力切れになった時に備えて魔力補充手段を用意していないと言うのは如何かと思う。

シルヴィアとアリスは普段から魔力切れになった時に備え、補充用の宝石を持ち歩いている。何時如何なる時に必要となるか判らない以上、備えあれば憂い無しと言うやつだ。勿論、熟練の魔法使いなら誰だって似たような事をしている。宝石じゃないにしろ、何かしらの魔力補充手段を用意しているのだ。

「待たせたなアリス・・・別荘から秘蔵の酒も持って来たぞ」

話している内にエヴァンジェリンがやって来た。傍らにはチャチャゼロも浮いており、二人（？）とも大量の酒瓶を抱えている。

「ほう、随分と買い込んでいるな。ツマミも充分という事か・・・ククク」

早速エヴァンジェリンはアリスの影に勝手に手を突っ込んでコップを取り出し（何故入っている事を知っているのかは謎、何故入っ

ているのかも謎）、持って来た酒を注いでアリスとシルヴィア、チャチャゼロに手渡して自分も飲み始めた。

「エヴァは～ん、ウチのは～？」
「ん？　貴様はまだ中学生だろうが」
「アリスはんも飲んではるえ～？」
「アリスは別だ。男はこれくらいの歳になれば誰だって飲むのは今の時代当たり前だ」
「ぶぅ～」

不貞腐れた月詠は買って来たジュースを開け、がぶ飲みを始めた。それを横目にアリスはおでんの他にも焼きそばやお好み焼きを開けてツマミにしながら注がれた酒を飲み始める。中々美味い酒だった。

「そろそろ始まるね」
「うむ、ガキ共がどれだけ抵抗するのか、見物だな」

アリスとエヴァンジェリンの眼下には大量に現れたロボット、田中さんと戦う一般人たちが居る。

「さて、木乃香ちゃん達はどこまでやるかな？」
「ボーヤ達も、だな」

戦いが始まり、一般人が戦う中、木乃香とアキラ、さよは適当な建物の屋根に上って敵勢の様子を伺っていた。

「あのビームに当たると服が脱げるんだ・・・・・・」
「嫌やなぁ」
「ですね～」

木乃香たちはロボット軍団の進行状況を確認し、出る機会を探る。そして見つけた絶好のポイントが丁度三箇所、それぞれに分かれて行動する事となった。

【木乃香】

アキラとさよの二人と別れて木乃香一人、瞬動で駆けつけた場所はクラスメートの柿崎美砂、椎名桜子、釘宮円の三人が居る場所だった。三人とも現れた巨神兵に唖然としており、その一瞬を狙われて極太脱げビームを受ける直前、木乃香が三人の前に移動して最大出力の魔法障壁を展開する。

極東最大の魔力の持ち主が張った障壁は、如何な巨神兵と言えど霊格はスクナより圧倒的に劣っている為、貫く事は出来なかった。

「お返しや！　光の戦槍！！」

展開された光の槍６本が巨神兵に襲い掛かる。膨大な魔力の恩恵で明らかに上位古代語魔法クラスの破壊力と貫通力を秘めた光の戦槍は巨神兵の装甲や霊的防御を紙の様に貫いて背後にいた巨大ロボットごと内側から爆破した。

「まだ多いなぁ・・・・・ほんなら広域殲滅いくえ！！　高速詠唱　贖罪の光！！」

木乃香の指輪から放たれた眩い光、それが辺り一面を覆いつくした。全てが真っ白の光の世界で何かの破壊音だけが響く、そして光が収まって誰もがようやく目を開けられる様になった時、既にゲーム参加者達が脅威に感じていた巨大ロボット達は鉄屑へと変わっていた。

「あや・・・・・ちょう、やり過ぎてもうた?」

巨大ロボットだけでなく田中さん達までバラバラになっていたのを見て木乃香が冷や汗を流した。これではゲーム参加者達の分が無くなってしまう。

「ま、ええかなぁ・・・・・他んトコ行こ」

次の獲物求めて木乃香は瞬動で移動する。後に残されたのは残骸と化したロボット達と、それを呆然と眺める一般参加者達だけだった。

【アキラ】

アキラはアーティファクトで作り出した愛刀、水の太刀を握って目の前の巨神兵を眺めていた。後ろには一般参加者達も居る、彼らを守るのに巨神兵を破壊する必要があるのだが・・・・・。

「どうしよう・・・・・」

巨神兵を破壊出来るだけの威力を持つ魔法は使えるが、場所が悪かった。アキラの足元にいるのは無邪気にじゃれ付く小等部の子供達、どうやら参加者らしく、ヒーローユニットとして現れたアキラを正義の味方とか思っているのだろう。カッコいいだの、綺麗だの聞こえてくる。

「・・・うん、仕方ないよね」

ジャンプしてから虚空瞬動で離れて適当な屋根の上に飛び移る。そしてアキラに向けて極太脱げビームを撃って来た巨神兵に対して

冷静に水の太刀を振るう。発生した巨大な水の刃が脱げビームを切り裂いて霧散させる中、アキラは再び虚空瞬動で巨神兵に近づくと詠唱を開始した。

「ネイ・ネル・プート・ネプチューン・・・契約に従い　我に従え
水の皇王　来たれ　いのち飲み込む災厄の災害　生きとし生ける者　全てに滅びの水を」

巨神兵の前に制止して足場を作るとその上に乗る。そして詠唱が終わっていつでも放てる魔法、それを放つ為に指輪を眼前に向けて構えた。

「破滅の津波！！」

発生した巨大な津波がアキラの眼前に居た巨神兵を含め、全ての敵を飲み込んでいく。荒れ狂う水の中で敵は全て、例外なく破壊され尽くし、津波が消えた後には敵の姿は一切存在していなかった。

「うん、上出来」

結果に満足したのかアキラは少し誇らしげな顔をして次の場所へ向かった。早くしないと木乃香やさよに獲物を取られてしまうのだ。

【さよ】

木乃香、アキラとは別に、さよは別の意味で壮絶だった。既に移動を終えて眼下に広がる敵の群れを見下ろしながら懐から一枚のカードを取り出す。

カードに描かれているのは紫陽花色の着物を着たさよが右手に剣を持ち、左手に鏡を持っている絵、そしてその首には勾玉と思しき飾りが掛けられていた。

「アデアット！」

これがさよがアリスと仮契約して生まれたアーティファクト、その名も・・・・・・。

「神々の神器！！」

剣の銘は草薙の剣、鏡は八咫鏡、首に掛けられている勾玉は八尺瓊勾玉、日本の三種の神器と呼ばれる究極の神造兵装の模造品だ。

しかし、たとえ模造品と言えどもこのアーティファクト、明日菜のハマノツルギと同じくグランドピースに数えられる究極のマジックアイテムだ。その力は間違いなく一級品、特に死霊術を使う人間にとっては確実に。

「開け冥界の門　現世に舞い戻れ　輪廻を彷徨う無念の憎悪たちよ」

さよの言霊に反応し、大気が揺れた。そして現れたのは異質な扉、くすんだ灰色の無骨な扉には人骨が所々埋め込まれているのが目に見える。

「さあさ御出でなさい・・・・・無念の内に死した亡者の魂」

ゆっくりと開かれた扉から出てきたのは魂、いや幽霊とでも言おうか。だがその実、幽霊などと言う生易しい存在ではない。出てきた数、およそ数十程度だが、その全てが生前に無念な死を遂げた怨霊の類だ。

「さあ、貴方達の無念を晴らせる丁度良い存在が私の眼下に・・・・・人間以外なら好きなだけ“お喰べ”」

始まったのは一方的な虐殺、ロボット軍団は一体たりとも残さず質量を持った怨霊によって食い千切られ、巨神兵は霊格の差から殆どを弾いていたが、突然目の前に現れたさよが右手に持った草薙の剣の一振りで跡形も無く消滅した。

「草薙の剣は冥界の門を開く鍵であるのと同時に、破邪の剣でもあります。この矛盾を孕んだ草薙の一振りは魔であろうが神であろうが例外なく天敵となるんです」

ご丁寧に説明をしたが、聞いている者は先ほどさよが消滅させてしまったので、意味は無い。

「アリス先生との仮契約で手に入れたネクロマンサーとして最強のアーティファクト、次に亡者の餌食になりたいのは誰ですか？」

可愛い笑顔で言うが、見る者が見れば間違いなく、恐怖に取り付かれてしまう事間違いなしであった。

五十一話　「火星軍団ＶＳ麻帆良魔法騎士団」（後書き）

いや～、ゲームの魔力は凄い！　暫く執筆をサボってしまうとは…
…（言い訳）

五十二話　「超の正体、アリスの暗躍」（前書き）

今回は短いです。

五十二話　「超の正体、アリスの暗躍」

英雄と女王の子

五十二話

「超の正体、アリスの暗躍」

木乃香、アキラ、さよが戦っているのを見物しながらアリスはコップに入ったワインに口を付けた。その顔は満足そうで、三人の戦いぶりがアリスのお気に召したのだろう。

「楽しそうネ、アリス先生」

「っ、超鈴音か・・・」

構えようとしたシルヴィアと月詠を制してアリスはコップをもう一つ取り出しエヴァンジェリンに渡した。エヴァンジェリンも心得ているのか適当なジュースを注いで超に渡す。

「謝々ネ。それにしてもコノカさん達は凄いヨ、まさか巨神兵も倒してしまうとはネ」

超の視線の先には今もロボット軍団を圧倒的な力で破壊し続けている木乃香たちの姿。

「まあ、一応あれが試験だから頑張ってるんだろうね」

「そうカ、それで？　アリス先生は出るのカ？」

「さあ？　如何だろうね」

今のところ出る気は無いアリスだが、果たして如何なる事か。

「それより聞かせてもらおうか？　未来人」
「ほう、やはりバレてたカ。それで何用ネ、アリス陛下」
「それだ、私を陛下と呼ぶという事は・・・・・・」
「詳しくは言わないヨ、唯ワタシは国民だとだけ言っておくネ」

二人の会話、アリスの夢を知る者にしか理解出来ない内容だった。当然、この場に居るのはアリスの夢を知る者だけなので、理解出来ない者はいない。

「私は、夢を叶えたのか」
「伝承でワタシも聞いてるヨ、陛下は当時、本当に伝説の人になたテ」
「伝説・・・ね、私の夢がそこまで大きくなるのか」

実感は無い。まだ計画段階の夢だから当然なのだが、その結果を知る者から端的に聞いても同じだった。

「アリス陛下は後に合計１０人以上の子宝にも恵まれるヨ、幸せな生涯だたと、崩御直前に言ていたと伝承に残てるネ」

随分と恥かしい事を言ってくれた。アリスもシルヴィアも真っ赤になる中、エヴァンジェリンは大笑いしている。

「おや、エヴァンジェリンも笑えないヨ？　あなたはアリス陛下の妾の一人ネ、不老不死であるが故に王室相談役もやてるヨ」
「わ、私が妾だと！？」

この瞬間、シルヴィアがエヴァンジェリンに殺気を送った。流石のエヴァンジェリンも理由が理由なだけにシルヴィアの殺気に真っ

青になってしまう。

「更にはアリス陛下の子供、孫、曾孫、玄孫、みんなエヴァンジェリンが世話をしていたネ、暇人は伊達じゃない！　とまで言ていたヨ」

暇人、確かにそうなのだろう、だが未来のエヴァンジェリンは如何やら超も本人に聞いていたらしいが、毎日満足な生活を送っているらしい。

「そう、か・・・・・未来の私はそんなに毎日を満足しているのか」

感慨深げに呟いたエヴァンジェリンはコップに残っていた日本酒を飲み干し、新しく注いだ。その瞳は何処を見ているのかは定かではないが、どこか未来を想い、楽しみな、そんな表情をしていた。

「そうだ超鈴音、一つ頼みがある」

「取引カ？」

「そうだ、私は一切の手出しをしないのだから対価を貰いたい」

「成る程・・・なら事が終わたらワタシのラボに行くといいヨ、ハカセに頼んであるからそこで対価を貰うヨロシ」

取引成立、アリスは空になったコップに新しくワインを注いで見物に戻り、超はカシオペアを使ってその場から消えた。

「対価の内容、聞かなくて宜しかったのですか？」

「ん？　まあ、彼女の事だ、未来に関係ある何かを残しているだろうからね」

「それにしても～、アリスはんもやるなぁ」

「・・・・・何が？」
「子供１０人以上やって～」

随分と頑張った未来のアリス、誰との子なのか、それとも誰々との間に出来た子なのか。エヴァンジェリンが妾の一人と言っていたから妾は少なくとも二人以上居る事になる。子供も一人の女性だけから生まれた訳ではないだろう。

「何か納得いかないね」
「ええんちゃう～？　浮気は男の甲斐性やって聞いたえ～」
「誰からだ」

さて、そろそろ下は佳境になってきていた。たった今、巨神兵の一体が認識魔法の魔方陣形成の為の基点一つを抑えた。

「お、一つ落ちたか・・・・・・」
「みたいだね、少し劣勢かな？」
「アリス、貴様はどちらに賭ける？」
「さあ、どちらかな？」

アリスもエヴァンジェリンも、旧世界に魔法がバレようと興味が無い。

「そうだな、どっちが勝っても、我らには関係ない事だったな」
「事態の帰結には興味が無い様じゃな」

いつの間にか学園長が絨毯の上に立っていた。転移魔法でも使ったのか。

「じじいか・・・旧世界に魔法がばれようがばれなかろうが、私に

は興味がない」
「同じく、私にとって重要なのは魔法世界なので、もしもの時は逃亡しますので」
「本当に良いのか？　超君の計画が成功すれば可愛い弟子や弟と、二度と会えなくなってしまうが・・・・・・」

果てしなく如何でもいい事だ。エヴァンジェリンにとってはネギがこれで負けるのであればソレまでの器だったと言うだけの事、アリスも同じ、事、魔法に関して兄弟の情など持ち合わせていない。
アリスは新しくコップを取り出して焼酎を注ぐと学園長に手渡した。

「お、すまんのぅ・・・・・ふぉ？　これは中々、良い酒じゃ」
「通販で買ったんですが、中々美味しかったので持ってきました」
「ふむ、後でそのサイトのアドレスを教えとくれんか？　わしも自分で買いたくなったわい」
「勿論」

アリスの視線の先にある光景は、タカミチが超に敗北し、黒い球体に包まれ完全に消えてしまう所だった。

五十二話　「超の正体、アリスの暗躍」（後書き）

次回か、その次辺りで超対決編も終わりになるかと……。

五十三話　「驚愕、超の本当の切り札」（前書き）

超が原作と大きく違う点が出てきます。

五十三話　「驚愕、超の本当の切り札」

英雄と女王の子

五十三話

「驚愕、超の本当の切り札」

事態は大きく動いていた。超鈴音のラスボス宣言、同時期に復活したネギが空へ上がり、迫り来る時間跳躍弾と茶々丸コピーを退けながら真っ直ぐ超のいる飛行船に向かっていた。

途中で危機に陥るも、小太郎、明日菜、刹那、残った魔法先生や生徒の助けもあって何とか飛行船に辿り着いた。

「ぼうやが超鈴音の所に着いたな」

「うん・・・・・さて、何処まで戦えるのかな」

ネギと超、魔法対科学はどちらに軍配は上がるのか。

「順当に行けば勝つのは超鈴音だ・・・・・残念だがぼうやでは奴には勝てん」

「そう、順当に行けばそうなる」

「ふぉ！？　ず、随分と落ち着いておるが、それはちと不味いぞい！」

現在のネギと超の近接戦闘は同レベル、ネギには魔法というアドバンテージもあるが、回復したばかりで魔力は万全ではない。だが超の使う科学には底は無いだろう・・・・・そして何より。

「魔法は、ネギだけのアドバンテージではない」

直ぐには気付けなかったが、超の身体・・・・・・随分と物騒な刻印が刻まれている。現代には無い術式だったが、軽く解析すればそれがどの様な効果を齎すのかは想像できる。

「如何いう事かの？」

「なんだジジイ、気付かないのか？　まあいい、見てれば判る事だ」

飛行船の上では何とも奇怪な戦いが行われていた。お互いにカシオペアを使った時間跳躍を駆使しての攻防、何度も二人の姿が消えては現れ、相手の背後を取る。瞬動とは違うその応酬は魔法使いから見れば異様とも取れなくはない。

「中々面白い戦いだな」

「だね・・・・・・シルヴィアは如何？　あの戦い」

「どちらも異様な光景ですが・・・・・・近接戦闘は確かに高いレベルで遣り合ってますね。まだまだどちらもアリス様には遠く及びませんが」

激しい戦いの末、遂にネギは超の背後からの攻撃に成功した。しかもそれで超の背中に取り付けられていたカシオペアは大破、もう超は時間跳躍は使えないだろう。

だが、たとえ時間跳躍という手段を失っても超は戦いを終わらせなかった。どれだけ持っているのか大量の時間跳躍弾を放ち、時には両肩に備え付けていた無線式小型レーザー兵器を射出してネギを追い詰めようとする。が、流石に昔と比べて実力も上がってきたネギにはそのような小細工は通用しない。

故に、超は切り札を切った。一瞬の静寂の後、超の体から大量の魔力が放出され、体には刻まれた刻印が浮かび上がっている。

「むお！？　イカン！！　っ！？」
「邪魔をするなよジジイ」
「あれはネギの戦い、学園長は静観を決め込んだ以上、手出し無用です」

超の切り札に漸く気付いた学園長が慌てて出ようとしたが、エヴァンジェリンの断罪の剣、アリスの“姫”、シルヴィアのランス・オブ・ジュエル、月詠の小太刀がそれを阻んだ。最早学園長に手出しは不可能、ネギは一人で未来の魔法使いと戦う事になった。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル！！　契約に従い　我に従え　炎の覇王　来たれ浄化の炎　燃え盛る大剣」
「呪文！？　まさか・・・・・・！！」
「ワタシが魔法を使えるとオカシイカ？　ワタシはネギ坊主とアリス先生、サウザンドマスターの子孫ヨ？」

そう、可笑しい筈が無い。ナギとネギ、アリスの血を引くというのなら魔法が使えない筈が無いのだ。事実、超から感じられる魔力はネギやアリスに匹敵する。

「ほとばしれよ　ソドムを焼きし火と硫黄　罪ありし者を　死の塵に！！」

超の詠唱が完了した。今からネギが詠唱を始めても間に合わないので全力で障壁を展開した。利口な選択だろう。

「燃える天空！！」

直前に全力の障壁を張ったお蔭だろう。ネギは比較的小ダメージ

で済んだが、上級の上位古代語魔法を防ぐのに魔力をかなり消費した筈だ。もはやネギに、余力は無いのだが、それは超も同じだ。たった一発の燃える天空で息を切らしているのは刻印が身体に与える負担が大きいからだ。

「ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル！！」

召喚された火蜥蜴27柱、そして風精・戦の乙女17柱が激突、更には空中での近接戦の応酬が続く。

ネギは超の刻印の危険さに気付いて使用を止めるよう呼びかけるが、甘い。今更、超が言葉で止まる筈も無いのに言葉で止めようとする等、愚の骨頂。

そして、超は何処に持っていたのか、取り出したガントレットを両手に装着する。

「よく持たせるネ・・・・・・ネギ坊主、流石は我がご先祖様ヨ。しかし、ネギ坊主はワタシには勝てないヨ・・・・・・何故なら・・・ラスト・テイル・マイ・マジックスキル・マギステル！！　契約に従い　我に従え　炎の覇王　来たれ　浄化の炎　燃え盛る大剣　ほとばしれよ　ソドムを焼きし火と硫黄　罪ありし者を　死の塵に！！！」

余りに早い詠唱、ネギも慌てて障壁を張ろうとするが、その次の光景に驚いた。

「術式固定！！　よく見ておくネ、我がガントレット、ダイダロスの使い方を！　ダイダロス、魔法付与！！」

「そ、それは！！？」

ネギも見覚えのある技法、それは兄が使う固有技法であり、密か

にネギが使ってみたいと思っていた最強の技法。

「術式付与完了・・・是“天拳の爆焔”」

術式武装、アリスオリジナルの技法であり、アリスのみが使えるアリスを最強たらしめんとする武装であった。

「なぜ・・・・・超さんが、兄さんの術式武装を・・・・・・」

「簡単ネ、ワタシの出身地は、これを最強技法として伝え、次世代に受け継がせているからヨ・・・当然、ワタシも魔法の師から教わり、受け継いだネ」

だが、未来で受け継がれているアリスの技法は術式武装だけではない。

「それより、障壁を張らなくていいのカ？」

「え？」

「高速詠唱！　燃える天空！！」

やはり受け継がれていたアリスの高速詠唱、それにより燃える天空を無詠唱と同じスピードで放った。

慌ててネギは障壁を張ったが、遅すぎる。大ダメージを受けて落下するネギの体、それを追って超がネギの懐に入り、燃え盛る両拳を叩き込む。

「がっ！　あああああああ！！」

腹部に燃え上がる様な熱と痛みが奔り、連撃を決められてしまって完全に意識を手放してしまった。

「終わりネ・・・・・・ネギ坊主」

落下するネギを刹那がキャッチしたのを確認した超は飛行船に戻ろうとした。その時・・・・・。

「ほんなら次は」
「私たちの相手を」
「してください」

超の背後に現れたのは三人、木乃香、アキラ、さよだった。それぞれアーティファクトや水の太刀を持ち、構えている。

「おや？　アリス先生は手出ししないハズだガ？」
「せやね・・・・・・でも」
「私たちはそんな約束してない」
「だから私たちは超さんのお相手をさせてもらいます」

アキラの周囲には大量の水が渦巻き、木乃香の周りには光の粒子が漂う。そしてさよの周囲では可視化された怨霊が憎悪の目を超に向けている。

「面白いネ、良い・・・・・・実に良いヨ！　アキラさんとさよさんは準最強、木乃香さんに至っては最強クラス！！　ワタシを止めようと言うのならこれ位無ければ面白くないナ！！」

消そうとしていた術式武装をより一層燃え上がらせた超、それを見てアキラは周囲に渦巻いていた水を水の太刀に吸収させて水の密度を高め、木乃香は少し後方に下がって遠距離戦の態勢に、さよは左手の八咫鏡を盾の様に構え、右手の草薙の剣を構えて周囲の怨霊に魔力を流した。

「さあ来るがいい！　木乃香様！　アキラ様！　さよ様！　ワタシの願い、止められるなら止めて見せるヨ！！」

ネギの敗北と共に超の勝利で終わろうとしていたが、新たな挑戦者として木乃香たちの挑戦が始まる。未来を賭けた戦いの二回戦、勝利の女神が微笑むのは果たしてどちらか・・・・・・。

五十三話　「驚愕、超の本当の切り札」（後書き）

次回、超との戦いにけ決着が着きます。

特別番外編【竜華零様とのコラボ】（前書き）

魔法先生ネギま～とある妹の転生物語～を書いている竜華零さんとの短編コラボです。
この話は本編とは何の関係も無い……と、思います。

特別番外編【竜華零様とのコラボ】

英雄と女王の子

特別番外編

【竜華零様とのコラボ】

「アリスの妹、平行世界からの来訪者」

修学旅行が終わり、学園祭も近づいてきたある日の事だった。日曜なのでアリスは一人、朝から散歩に出かけていたのだが、世界樹の付近で妙な魔力を感じたのだ。

気になって近くに行って見ると、世界樹の前に空間の歪みができていた。そしてその歪みに人一人が通れそうな穴が出来上がり、穴の中から１０歳位の女の子が出てきた。

「一体・・・・・・何が」

女の子が出てきて直ぐに穴は消え、歪みも正常に戻ってしまった。残ったのは気を失っている女の子、見た目は白い髪で自分や母によく似ている。

「このままには、しておけないか・・・・・・」

女の子を抱き上げ（俗に言うお姫様抱っこ）、管理人室に急いだ。アリスが管理人室に着くと、直ぐに扉を開けてシルヴィア達を呼んだのだが・・・・・・。

「何故、私はランス・オブ・ジュエルを突き付けられているのかな？」

アリスに呼ばれて出てきたシルヴィアは、女の子の姿を見て何故かランス・オブ・ジュエルを作ってアリスに突きつけたのだ。

「アリス様・・・まさか貴方が、誘拐なんて・・・・・・」
「ちょっと待て!!　どうしてそうなる!?」

何かアリスを殺して自分も、とか言い出したので、慌てて事情を説明する。この時ほど、自分の命の危険を感じた事は無かった。

「空間の歪みに穴、そこから出てきた女の子ですか・・・・・・」
「うん、外傷とかは無かったから、唯気を失っているだけだと思う。空いてる部屋に布団を用意してもらえるかな?」
「はい」

用意の為にシルヴィアが空き部屋に向かうのを見届けて、アリスは一旦女の子をソファーに寝かせる。そして影の中から毛布を取り出そうとした時だった、女の子が目を覚ましたのだ。

「ん・・・こ、こは・・・・・・?」

目を開けた事で判った。女の子の瞳は右目が赤、左目が青のオッドアイ、しかも両目とも魔力を感じる。

「ここは麻帆良学園女子中等部の女子寮管理人室だよ」
「麻帆良の・・・?　じゃあ、失敗したんですね」

失敗とは、何の事だろうか。両目の事、女の子自身の魔力から考えても彼女が魔法使いなのは間違いないだろうが、魔法の実験でもしていたのだろうか。

「私はアリス、アリス・スプリングフィールドだ。君の名前を、聞かせてもらえるかな？」
「スプリングフィールド！？　え、あの・・・私も、そのスプリングフィールドなんです。アリア・スプリングフィールド」
「如何いう・・・事だ？」

アリスの記憶ではスプリングフィールドの姓を持つのは自分とネギ、それとネカネ、ネカネの両親と父だけだ。

「君の両親の名前、判るかな？」
「えっと・・・お父様はナギ・スプリングフィールド、お母様はアリカ・アナルキア・エンテオフュシアです」
「・・・・・おいおい、私もそうなんだけど。父さんはナギ・スプリングフィールド、母さんはアリカ・アナルキア・エンテオフュシアだ」

お互いに吃驚、同じ両親を持つ身でありながら、お互いの存在など知らない。

「君は、目が覚める前は何をしていたのかな？」
「えっと、確か・・・・・・」

何でも、魔法具の実験をしていたらしい。平行世界から魔力を持ってきて斬撃を放つ事の出来る魔法具なのだが、始めての試みだったので実験していたのだが、それが暴走してしまい、気が付けば此処に居た。

「平行世界から魔力を持ってくる魔法具なんて、聞いたこと無かったな・・・・・・」

「あ、それは私の作った魔法具だからです。私、魔法を使えないから魔法具を作って使うんです」

両目の事も教えてもらった。両目とも魔眼で、魔法を使おうとしたら精霊を吸収してしまい、魔法が発動しないのだと。

そしてそれを補う為に多くの魔法具を作り、戦う時などはそれを使用するのだと。

「成る程・・・・・・何となく理解できた。アリアちゃん、で良いかな？」

「あ、はい」

「ありがとう、アリアちゃんが使った並行世界から魔力を持ってくるという魔法具、その暴走でアリアちゃんは平行世界に飛ばされてしまったんじゃないかな？」

「平行世界に・・・」

つまり、アリアが住んでいた世界とアリスが住んでいる世界は平行世界、同じ両親を持つのもその為だ。

「平行世界と言えど、同じ両親から生まれたならアリアちゃんは私の妹という事になるかな？」

「妹？　あの、アリス様は・・・・・・今、お幾つですか？」

「私？　今は１７になったかな」

「じゃあ、兄様ですね。私は１０歳ですから」

兄様・・・、アリスの胸にその言葉が響いた。昔から妹が欲しいと思っていたし、妹みたいな存在のネカネは歳が近い。だからアリア位の歳の妹が欲しかった。

「ってアレ？　ネギと同じ歳だ・・・・・・そっちにはネギって居

るの？」
「はい。ネギ兄様はちゃんといますよ。私は双子の妹になるんです」
「ああ、成る程・・・・・もしかしたら私とアリアちゃんは平行世界の同一存在になるのかな？」
「？」

男と女、ネギの兄と妹、年齢、その差はあれど、アリアとアリスには共通点が幾つか。母から生まれたネギの兄弟妹で、名前も似てる、顔も似てる。可能性が無いとは言えないかもしれない。

「あの、アリス兄様・・・」
「ん？　どうしたの？」
「そ、その・・・・・すいません」

その時、アリアのお腹から可愛らしい音が鳴った。アリアは顔を真っ赤に染めて俯き、それでアリスは納得した。

「お腹空いてる？　なら今、何か作ってあげるよ」
「い、良いんですか？」
「平行世界とはいえ、兄妹なんだから遠慮なんてしないで」
「兄妹・・・・・」

随分と遠慮深い子だ。これ位の歳の子なら甘えても可笑しくないのに、それをしない。いくら魔法という裏の世界に関わっているとは言え、日常で甘えが許されないなんて事は無いのに。

「ああ、そうだ。シルヴィアー！　ちょっと！！」
「？　シルヴィア・・・・・？」
「如何されました？　アリス様・・・・・あら」

奥からシルヴィアが来た。布団を用意させていたけど、必要無くなったので此方に呼んだ。

「アリアちゃん、彼女は私の従者で、シルヴィア・オーギスだ」
「シルヴィア・オーギスと申します」
「あ、アリア・スプリングフィールドです！」
「・・・・・・え？」

アリアの姓に疑問を持ったシルヴィアがアリスの方を向いた。一応、説明したら納得してくれて、アリスが料理している間の相手をしてくれる事に。

「それではアリアちゃん、アリス様が料理している間、私がお話のお相手をしますね」
「はい、あの・・・シルヴィアさんは、アリス兄様の従者って」
「はい、オスティア難民だった私はアリス様に拾われて・・・・・・従者にして頂いたんです」

シルヴィアはアリスと初めて会った時の事、そしてそれからの修行の日々、アリスが結成した二代目・紅き翼の事を話した。
アリアもアリスの色んな話を聞いて、随分と楽しそうにしている。

「それで、アリス様は現在は“黄昏の王”という二つ名を持っているんですよ。メガロメセンブリア元老院は頑なに“二代目・サウザンドマスター”と呼びますけどね」
「へえ・・・メガロメセンブリア嫌いは私と同じですね。シルヴィアさんは何て呼ばれているんですか？」
「私は“最強を補佐する最強の補佐”と呼ばれてます」
「わぁ・・・！」

アリスとシルヴィアが最強クラスに属している事は聞いた。だからその二つ名も納得できる。

「凄いですね！　アリス兄様もシルヴィアさんも」

「いえ・・・私は元々、才能無き身でしたが、ここまで来れたのも努力の賜物です」

「でも、努力の結果が最強クラスですよね？　充分凄いことですよ！」

「出来たよー」

丁度、アリスがキッチンから出てきた。持っているお盆には三人分のオムライスが乗っていて、デミグラスソースの美味しそうな匂いが食欲をそそる。

「シルヴィア、月詠やさよはいらないんだっけ？」

「はい、お二人は夕方まで街に買い物へ行ってますし、昼食も向こうで食べてくるとの事です」

「月詠、さよ・・・・・？　って、神鳴流の月詠さんと、３－Ａの幽霊の相坂さよさん!?」

「ああ、話してなかったね。私の従者はシルヴィアだけじゃないんだ・・・月詠とさよ、それから木乃香ちゃんとアキラ、えっと・・・近衛木乃香と大河内アキラも従者なんだ」

従者になった経緯、それとそれからの事も聞かされたアリア。

一般人を巻き込むのを良しとしない彼女は難しい顔をしていたが、元々アリスも同じ考えを持っており、事故みたいなものだった事、後で事情を説明して弟子入りさせた事、何よりアリスが責任を感じている事もあって納得した。

「さ、話も良いけど食べよ？　アリアちゃんもお腹空いてるでしょ

？」

「はい・・・・・・」

テーブルの前に座ったアリスとシルヴィアの目の前にオムライスが置かれた。見た目は本当にお店に出てくる物みたいで、とても素人の作った物とは思えなかった。

「さ、食べようか・・・・・・いただきます」

「いただきます」

「い、いただきます・・・」

一口食べて、アリアは何故か心が温かくなった。味は本当に美味しい、だがそれ以上に何かがアリアの心を満たしていくのを感じる。初めて食べる肉親の手料理、両親は生まれた時から居なかったし、ネギもアリアの為に料理をしてくれた事が無かったアリアにとって、これが肉親の作ってくれた初めての料理だった。

気が付けば、アリアの両目からは涙が流れて、それがドンドン溢れて止まらなくなる。

「アリアちゃん・・・・・・」

何となく、事情を察したアリスは食事の手を止め、立ち上がってアリアの横に移動するとアリアを抱きしめた。

泣いている妹がそこに居る。なら、せめて兄として、出来る事と言えばこれしか思い浮かばなかった。

「アリス・・・兄様・・・・・・う、うぅ・・・」

涙を堪えようとするアリアの頭に手を置き、その白い髪に滑らせる様な優しい手付きで撫でてあげると、アリアは決壊したように涙

を流し、アリスの胸で泣き出してしまった。
　初めて感じる肉親の温もり、平行世界の壁はあれど、初めて感じた家族の温かさにアリアは涙する。両親も兄(ネギ)も、アリアをこうやって抱きしめてくれたことは無い。だからアリアは、何処か諦めていても、心の奥底では求めていた。そしてアリスは、それを満たしてくれる。それが嬉しかったのだ。

「ご、ごめんなさい！　アリス兄様・・・・・・その」
「言ったでしょ？　兄妹なんだから、遠慮なんてしないで・・・・・・せめて此処に居る間は、私に甘えてくれて良いから」

　すっかり冷めてしまったオムライスを食べながら、アリアは頬を赤く染めてアリスに謝っていた。だがアリスは気にもしていないし、寧ろアリアが胸の内に溜め込んでいたモノを全て涙として流しきってくれた事の方が嬉しかった。

「アリス様・・・アリアちゃんの事ですが」
「ああ、うん・・・・・・こうして出会えた事は嬉しいけど、何時までもこの世界にって訳にはいかないよね」
「はい・・・私も、向こうに帰らないとエヴァさんが心配します」
「エヴァさん？」

　アリアは現在エヴァンジェリンと一緒に住んでいるらしい。話を聞く限りだと、何だかエヴァンジェリンがアリアの父親の様に思えてならないのだが・・・・・・。

「そっか・・・・・・所でこっちに来た原因の魔法具って、今持ってる？」
「はい・・えっと、これです」

食べ終えた食器をシルヴィアが片付け、綺麗になったテーブルの上に置かれた魔法具を見る。宝石で出来た剣、といった感じの魔法具だが、内に秘める魔力は桁違いだった。

「凄い魔力だ・・・・・宝石で出来た剣というのも珍しいけど、何か意味でもあるの？」

「あ、えっと・・・とある物語に出てくる老人の持っている物を真似てみたんです」

「ほう・・・・・でも暴走を起こしたって事は、多分未完成なのかな」

確かに秘めた魔力は凄まじいが、制御系が甘いのか魔力に一体感を感じない。結構出鱈目な状態で魔力が渦巻いている。

「制御する為の宝石が足りない・・・・・そんな感じがします」

「シルヴィア、解る？」

「はい、これでも宝石は得意分野ですし・・・漠然とですが、詳しく調べてみれば多分、2～3日で必要な宝石が何かも判るかと」

ならば解析はシルヴィアに任せた方が良いだろう。アリアも頷いたので魔法具はシルヴィアに預ける事になった。

「さて、私はそろそろ出かけないといけないんだけど・・・・・アリアちゃん来る？」

「え？　何処へ・・・・・」

「こっちの、エヴァンジェリンの所さ」

エヴァンジェリンのログハウス近くの木の影からアリスとアリアが出てきた。アリスがエヴァンジェリンの家に来る時の恒例となっ

た移動だ。

「凄いですねアリス兄様・・・影を使った転移魔法を使えるなんて」
「ん・・・まあ、重宝してるよ、便利だし」

エヴァンジェリンの家に入ると、家主と従者は既にダイオラマ魔法球にいるのだろう、姿が見えなかった。

「私の世界と同じですね」
「変わらない？」
「はい、エヴァさんと茶々丸さん、チャチャゼロさん、さよさん、スクナさん・・・・・・さよさんとスクナさんはこっちではこの家にいませんけど・・・何も変わっていません」
「そっか・・・」

話しながらも、二人は地下へ降りて魔法球の前に来た。引いてある魔方陣に乗って中に入ると目の前にエヴァンジェリンが立っていた。

「遅いぞアリス！　何をや、って・・・・・・何だその小娘は」

相も変わらず、先に魔法球の中に入っておきながら後から来たアリスに文句を言うエヴァンジェリンだったが、アリスの横に居るアリアを見て険しい顔になった。

「ああ、彼女はアリアちゃん・・・・・・私の妹だよ」
「アリア・スプリングフィールドです・・・えっと、エヴァさん」
「はぁ？　妹って、アリス、貴様の兄弟はぼうやだけじゃなかったのか？」
「えっとね・・・・・・」

アリアの事、平行世界の事も含めて説明した。それからアリアが平行世界ではエヴァンジェリンの従者だという事も本人から聞かされる。

「ふむ、平行世界か・・・・・概念は理解出来るが、本当に魔法具なんかでそんな魔法使いでも出来ない芸当を可能にするのか？」
「私もそう思うけど、信じなきゃ説明出来ない事もあるしね」

アリアが持っているパクティオーカード、そこの主の所に書かれている名前は間違いなくエヴァンジェリンの名前だ。これを見せられて信じないと言うのも無理な話だ。

「カードは本物・・・間違いは無いだろうが・・・・・ふむ、興味深い」

何やら思案を始めようとしているエヴァンジェリンだが、流石にそれはアリスも困るので、早速用事を済ませることにした。

「それより、模擬戦するんでしょ？」
「ん？　おお、そうだったな」
「模擬戦、ですか？」

本日、アリスはエヴァンジェリンと1対1の模擬戦をする約束をしていた。別荘内ではエヴァンジェリンも外よりは魔法も使えるが、流石にアリスに勝つことは出来ない。それでも時々こうしてアリスとエヴァンジェリンは模擬戦をしているのだ。実戦の勘を失わないようにという意味も込めて。

「茶々丸、この小娘・・・・・アリアだったか？　アリアを連れ

て安全な所で見ていろ」
「はい、マスター・・・マスターがズタボロになる所を、いつもの様に観察させて頂きます」
「貴様は一々一言多いな！！」

エヴァンジェリンがギャーギャー言っているのをスルーした茶々丸はアリアを連れて岸辺のパラソルまで移動、アリスとエヴァンジェリンも海岸で向き合うとそれぞれ“姫”と断罪の剣を構える。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス！！」
「リク・ラク・ラ・ラク・ライラック！！」

同時に始動キーを唱えながら、“姫”と断罪の剣がぶつかる。衝撃波を起こしながらも二人は直ぐに上空へ上がり、高速起動をしながら詠唱し、剣を交える。

「雷の斧！！」
「氷神の戦槌！！」

アリスの雷の斧がエヴァンジェリンの氷神の戦槌を真っ二つに破壊し、その間をアリスが虚空瞬動で駆け抜ける。
エヴァンジェリンも同じように二つに切り裂かれた氷塊の間を飛び、アリスに肉薄する。

「多重高速詠唱！　千の雷！　奈落の業火！！　術式固定！　黄昏の剣　魔法付与！！　術式付与完了　是“焔雷の獄姫”！！」

雷纏し黒い炎の剣となった“姫”と断罪の剣がぶつかり、衝撃波と蒸気が発生した。

「リク・ラク・ラ・ラク・ライラック!!　契約に従い我に従え　氷の女王　来たれとこしえのやみ　えいえんのひょうが!!」
「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス!!　契約に従い我に従え　高殿の王　来たれ巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆!!」

互いに距離を取り、指輪と爪、それぞれの発動体に魔法を収束させる。

「全ての命ある者に　永久の牢獄を　其は苦しみ也!!」
「百重千重と重なりて　走れよ稲妻!!」

呪文が終わり完成した魔法、後は放つだけとなったのだが、二人は放たずに再び接近、断罪の剣と“姫”をぶつけた。
そして何度目かの剣と剣の交わりの後、それは起きた。

「こおるせかい!!」
「千の雷!!」

遅延魔法で溜めておいた魔法を近距離からお互いに放つ。千の雷とこおるせかい、二つの広域殲滅型上位古代語魔法が近距離でぶつかる。あまりに危険な行為だが、二人は当然の様に行い、今、大爆発が起きた。

「マスター!!」
「兄様!!」

爆煙の中、茶々丸とアリアが二人の安否を心配するが、無用だった。煙の中から未だに“姫”と断罪の剣を交える二人が出てきたのだから。

「そろそろ限界なんじゃないか？　闇の福音」
「そっちこそ、ダメージは大きいのではないか？　黄昏の王」

結局、二人の決着は日暮れ、アリスがエヴァンジェリンの首筋に“姫”を添えたことで着いた。
模擬戦（と言うか実戦にしか見えなかったが）が終わり、アリスは心配の余りに瞳に涙を溜めてローブの裾を掴むアリアを宥め、エヴァンジェリンはボロボロになった服を着替えていた。

「でも凄いですねアリス兄様は」
「凄いって・・・ああ、アリアちゃんは魔法が・・・・・・」
「何だ、アリアはナギの娘なのに魔法が使えんのか」

アリアの魔眼の話になる。魔眼の能力によって自分の魔法すら吸収してしまうので魔法が発動しないのだ。
だが、アリアにはそれとは別に、魔法を使用する手段があった。
平行世界、アリアの世界のエヴァンジェリンとの仮契約で現れたアーティファクト“千の魔法”は、登録した魔法を使用する事が出来るらしい。

「へえ・・・・・そうだ。アリアちゃん、良かったら私の術式武装を覚えてみない？」
「術式武装・・・・・・ああ、アリス兄様が使っていたあのカッコいい魔法ですよね？」

幸い、アリアが見せてくれた魔法具の中にはアリスの“姫”には劣るも、ネギの持っている杖よりも強度の高い武器があったので、それで術式武装は可能だろう。

「それじゃあ、まずは千の魔法に魔法を幾つか登録しておこうか・・

・・・エヴァンジェリンの魔法は向こうに帰ってからでも大丈夫だから、とりあえず私のを」

アリスの魔法、千の雷や雷の斧、雷の投擲、轟く雷帝、雷の暴風、奈落の業火、燃える天空と、アリスが術式武装に主に使う魔法を登録、更にアリアが魔法具の中から一本の剣を取り出して構えた。

「じゃあ、先ずは一番簡単なやつから・・・高速詠唱　奈落の業火！」

アリスも“姫”を持って奈落の業火を固定する。

「アリアちゃんもやってみて、魔法を発動して固定させる。その辺は千の魔法でも可能な筈だから」

「はい！　えっと・・・『千の魔法』Ｎｏ．６０！　来たれ深淵の闇　燃え盛る大剣　我を焼け　彼を焼け　そはただ焼き尽くす者！　奈落の業火！！　術式固定！」

アリアの手にもアリス同様、奈落の業火が固定された。

「そうそう・・・それで持ってる武器に取り込ませると・・・こうなる」

「えっと、こうですか？」

アリスが“姫”に奈落の業火を取り込ませて“地獄の焔姫”にしたのを見て、アリアも同じように奈落の業火を剣に取り込ませると見事な術式武装になった。

「お見事！　少し構成とか制御系とかが甘いけど、この辺は練習あるのみだね。慣れれば呼吸するみたいに術式武装が出来るよ」

「凄い・・・千の魔法の登録魔法が増えただけじゃなくて、術式武装まで・・・・・・ありがとうございます！　アリス兄様！！」

暫くアリアの術式武装の練習に付き合っていると、別荘内にシルヴィアが月詠を連れて来た。

「お待たせしましたアリス様・・・準備が整いましたので、此方で暫く解析を進めようと思います」

シルヴィアの手にはアリアの持っていた宝石の剣と、シルヴィアが長年魔力を溜め続けた宝石を入れたケースが。

「それで月詠は？」
「うちはアリスはんの妹はんを見になぁ～」

月詠の視線の先には月詠の姿を見て驚いているアリアのが。話に聞いていても、何処か信じられなかったのだろう。月詠がアリスの従者という事が。

「ほんでアリスはん、妹はんの名前は何なん？」
「ああ、アリアだよ」
「アリア・スプリングフィールドです」
「よろしゅうな～」

ニコニコと笑顔で握手する月詠、その笑顔に邪悪さを感じなかったアリアは呆気に取られる。

「あの・・・・・アリス兄様？」
「ああ、月詠の事？　彼女は前みたいな邪悪さは無いよ・・・・・・戦闘時以外は。シルヴィアがよく一緒に居てね、姉妹みたいに接し

ていたのもあって、今じゃ随分と丸くなったものだよ」

シルヴィアが直ぐに解析を始めるとの事で、城に向かった。月詠も手伝うのかシルヴィアに付いて行ったので、自然と浜辺にはアリスとアリアしか居なくなった。エヴァンジェリンと茶々丸は既に城に行ってしまった。

「如何する？　もう少し練習する？」
「あ、いえ・・・・・・アリス兄様、宜しければお父様とお母様の事、聞かせてください」
「父さんと母さんの？　・・・いいけど」

流石に浜辺は寒いのでバルコニーに向かった。バルコニーにあるチェアーに座り、アリスが紅茶を入れて二人で飲みながら、話を始めた。

「父さんと母さんの事か・・・・・・何を聞きたい？」
「如何いう人たちだったのかなぁと・・・会った事が無いので」
「そうか・・・・・そうだなぁ、父さんは良くも悪くも規格外の人で、昔の話だけど私に魔法を教えてくれていた時に、千の雷と雷の投擲を教えてくれた時にね・・・」

千の雷で遠くの山を消滅させたり、雷の投擲で地面を掘った結果、何故か温泉が湧き出た時の話をした時、アリアは随分と呆れていた。我が父ながら、本当に規格外もいい所だとはアリスも思う。

「母さんは父さんとは逆、常識人だったよ・・・・・・躾とかは厳しかったけど、でも優しい人だった」

マナーや作法などを教えてる時のアリカは本当に厳しい、しかし

それ以外の時のアリカは本当に親馬鹿というか、過保護というか、アリスの事を本当に可愛がっていた。

「それで父さんも母さんも、いつも喧嘩してたなぁ」

思い出すのは喧嘩ばかりの両親、でも全然怖いと思ったことは無かった。

「如何してですか？」

「簡単だよ、父さんも母さんもお互いに憎くて喧嘩してたんじゃない。寧ろお互いを信頼し、愛し合っていたからこそ、喧嘩していた・・・・・あれは一種のコミュニケーションかな、愛情表現とも言う」

確かに喧嘩していた。だが喧嘩している時以外の両親は、見ていられないほどのバカップルで、常に新婚の様なイチャつきぶりだった。

「そして何より・・・・・父さんも母さんも、私の事を心の底から愛してくれた」

今でも覚えてる。初めて父が教えてくれた魔法に成功した時、アリスの頭を撫でて満面の笑みで「よくやった！」と言ってくれた父の笑顔と手の温もり。

初めてマナー、礼儀作法の勉強で母が納得のいく結果を出した時、アリカが優しくアリスの頭を撫でてくれた。その時の母の温かさと、優しい笑顔が自分の心を満たしてくれるあの気持ち。

「だから私は父さんと母さんにもう一度会いたい。母さんの汚名を晴らして、父さんと母さんにもう一度、今度は隠れることなく青空

の下で、笑ってもらいたいんだ」

だから、それを邪魔する者、敵となる者に容赦はしない。必要ないと判断したモノは即、切り捨てる。父と母の為なら悪にだってなる覚悟が、アリスにはある。世界を敵に回そうと、アリスは自分の目的の為ならその尽くを打ち滅ぼすと決めているのだ。

「凄いですねアリス兄様は・・・・・・本当に」
「そうかな・・・・・・ただのマザコン、ファザコンなだけだよ」
「いえ、たとえそうでも・・・アリス兄様の想いは気高く、尊いものだと思います」

少し照れたのか、アリスは頬を染めて紅茶に口を付けた。アリアもアリスが照れているのに気付いたのか小さく笑っている。

「私、アリス兄様に会えて良かったです」
「・・・・・・何でか、聞いても良い？」
「アリス兄様のお話を聞いて、私も自分の目的に対する気持ちが一層強くなりましたから」
「そっか・・・・・・頑張ってね」
「はい！」

ポットの紅茶を全て飲み干した頃にはそらは暗くなり、夜になっていた。

「明日は如何する？　外に出れば1～2時間位でシルヴィアの作業も終わると思うけど」
「んぅ～、アリス兄様は如何するんですか？」
「外はまだ日曜のままだから、暇だよ」
「それなら、アリス兄様とお買い物がしたいです！」

「買い物ね・・・判った」

こうして、アリア来訪の別荘内最初の夜が過ぎて行った。因みに寝るときはアリスとアリア、同じベッドで眠ったそうだ。アリアを抱き枕に、アリスはぐっすり、アリアもアリスの服を掴んでスヤスヤと、心地よい寝顔の二人は、やはり兄妹というべきか、よく似ていた。

朝、アリスが目を覚ますとアリアはまだ寝ていた。年相応の、あどけない愛くるしい寝顔は、アリスには天使の様に見えた。

「いかん・・・・・少しおかしくなったな」

頭を振って変な感情を吹き飛ばすと寝ているアリアを起こさない様にベッドから降り、部屋に備えてあるキッチンに立った。

「冷蔵庫は・・・・・お、流石は茶々丸の姉妹、ちゃんと中身の入れ替えはしてるみたいだね」

中から適当な食材を取り出したアリスは早速調理を始めた。メニューは朝に優しくコンソメスープとポテトサラダ、トーストに、アリアが好きだというイチゴのジャムだ。

「んぅ・・・・・あえ？　あぃすにぃさま・・・・・」

ふと声が聞こえて、そちらを向くとアリアが眠そうな眼をこしこし擦りながらひょこひょことアリス求めて歩いていた。

「アリアちゃん、こっち」

「えぅ・・・・・にぃさ・・・ぁ・・・・・」

「朝は弱いのかな～？　アリアちゃん」

手ぬぐいで手を拭いてアリアを抱き上げるアリス、何故か兄というより父のような感覚だ。

「さぁ、もう朝食も出来上がるから、顔を洗って来ようね」

「あい～・・・・・・」

フラフラと洗面所に向かう様は、何処か心配だが、アリスは手早くテーブルの上に朝食を用意した。その頃には完全に目を覚ましたアリアが真っ赤な顔で戻ってきて、アリスの顔を見るなり頭から煙を上げそうな位、真っ赤に染まり、俯く。

「あはは・・・・・ほら、アリアちゃん・・・朝食、食べよう？　アリアちゃんの好きなイチゴのジャムも用意したから」

「イチゴジャムですか・・・？」

「そ、別荘内で育ててるイチゴだけを使ったジャムでね、大粒のイチゴの実が入ってて美味しいよ」

「・・・楽しみです！」

本当にイチゴが好きなのだと思う。アリスはアリアが椅子に座ったのを確認すると自分も座る、席はアリアの目の前だ。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます、アリス兄様」

アリスの料理は相変わらず美味しく、アリアも満足してくれた。特に家族と一緒の食事で、そして家族が作ってくれた食事というのが大きかったのだろう、アリアは終始笑顔だった。

朝食も終わり、アリスとアリアは一度エヴァンジェリンの別荘から出る。先に管理人室に転移してからアリスはスーツに着替え、財布を持って改めて二人は麻帆良商店街に向かった。

商店街に着いて、まず最初に向かったのは洋服店、アリアは別荘内とは言え丸一日同じ服なので、着替えたいと言うので服を買いに来たのだ。

「これなんて如何でしょうか？」

「うん、良いと思う」

アリアが持って来たのは白いノースリーブに赤と黒のチェックが入ったミニスカート、それと黒いニーハイソックスだ。

「試着してみる？　気に入ったならそのまま着て購入しちゃおう」

「はい！」

試着してみるとやはり似合っていた。少しお淑やかな感じもするが、アリア自身がそんな雰囲気も持っているので違和感が無い。

「よし、そのまま着て行こうか。会計してくるよ」

店員を呼んで値札を切ってもらうと、その値札をレジに持っていって会計を済ませる。

「行こうか」

「次は何処に行きますか？」

「そうだね・・・・・適当にウインドウショッピングでもする？」

「いいですね！　行きましょう！」

洋服屋を出てぶらぶらと商店街を歩くアリスとアリア兄妹、手を

繋いで仲良く歩くその光景はとても自然で、本当に仲の良い兄妹にしか見えなかった。

「・・・あ」

「ん？　如何したの？」

途中、アリアが何かを見つけたのか立ち止まり、ある一点を凝視していた。

「狸のぬいぐるみ・・・・・・？」

「あ、いえ・・・以前、茶々丸さんが知人に貰ったって言うたぬきの着グルミパジャマを思い出しまして」

「・・・・・・着たの？」

「・・・・・・はい」

想像してみた。アリアが狸の着グルミパジャマで寝ている姿・・・・・・何故か胸にグッと来るものがある。

「え、と・・・・・・あのぬいぐるみ、欲しい？」

「あ、いえ！　服を買ってもらっただけでも申し訳ないのに、これ以上は・・・・・・」

「・・・・・・ちょっと待ってて」

アリスはアリアが何か言う前に手を離し、店の中に入ってしまった。数分経ってアリスは戻ってきたが、その手にはアリアが見ていた狸のぬいぐるみがある。

「はい・・・申し訳ないとか、そういうのは無しだよ。言ったでしょ？　兄妹なんだから遠慮なんていらない、もっと甘えてくれて良いって」

「あ、ありがとう、ございます・・・・・・アリス兄様、これ・・・向こうで宝物にします！」

ぬいぐるみを抱きしめて笑顔でアリスを見上げるアリア、本当に嬉しそうで、その笑顔を見れただけでアリスも満足だ。

「さて・・・・・夕食も食べ終わったけど、そろそろシルヴィアの解析も終わったかな」

「そうですね・・・・・・」

少しお洒落なレストランで夕食を済ませた二人は世界樹の前に来ていた。ここはアリスが最初にアリアを見つけた場所でもある。

「アリス様・・・・・・」

「ああ、シルヴィア・・・終わった？」

「はい」

何時の間に来たのか、シルヴィアが件の宝石の剣を持ってアリス達の後ろに立っていた。

「一応の解析は終え、足りなかった宝石は私の手持ちの物で補って何とか・・・・・後は持ち主であるアリアちゃんが帰るべき世界への道を作り出すだけです」

「そっか・・・・・ここでお別れ、か」

「・・・・・・」

シルヴィアに手渡された宝石の剣を右手に握り、左手にアリスに買ってもらったぬいぐるみを抱きしめながらアリアは・・・・・泣いていた。

「アリアちゃん・・・・・・」
「ご、ごめ、なさい・・・・・・解ってるんです。グス、私、は・・・この世界の、人間じゃ、ありませんから・・・・・・アリス兄様とも、必ずお別れしないといけないって」
「うん」

黙ってアリスはアリアを抱きしめた。別れを惜しむ妹の涙で胸を濡らしながらアリスも、一筋の涙を流す。

「アリアちゃん・・・」
「・・・・・・はい」
「またね」
「え？」
「また何時の日か・・・きっと会おう。平行世界の壁なんて関係無い、必ず、会おう。今度は私が、アリアちゃんの世界に行って、その時はよろしくね？」
「・・・・・・アリス、兄様」

それから暫く、アリアは泣き続けた。たとえ約束をしても、平行世界の壁は如何する事も出来ない。だから、これが今生の別れになってしまう。だから、アリアは泣き続ける、・・・・・・初めて肉親の温もりを与えてくれた優しい兄の胸の中で。

「アリス兄様・・・・・・もう、大丈夫です」
「本当に？」
「はい」
「そっか・・・・・・」

アリアはアリスから離れて世界樹の幹の近くまで歩き、そして立ち止まると宝石の剣を一振り、それだけで空間に歪みが出来、穴が

開いた。

「それじゃあ・・・・・・アリス兄様、シルヴィアさん、お元気で」
「うん、アリアちゃんも・・・・・・元気で」
「また、お会いしましょうね」

アリアが穴の中に入ると、その穴は完全に閉じてしまい、アリアは完全にこの世界から立ち去ってしまった。

「アリス様・・・・・・」
「・・・・・帰ろう、明日からまた、学園祭の出し物を決めないといけないから」

シルヴィアはアリスの顔を見て、静かに後ろへ移動して無言で付いて行った。
空に浮かぶ夕日を眺めるアリスの瞳には、大粒の涙が浮かんでおり、アリスが歩くたびに、一粒一粒、頬を伝って、地面に落ちるのだった。

特別番外編【竜華零様とのコラボ】（後書き）

コラボにご参加下さった竜華零さんには本当に感謝してます。おかげでこんな作品が出来ました。
また、アリアのキャラは如何でしたでしょう？　少し自信がありませんので、竜華零さんの方でここはこうした方がアリアらしいという所が御座いましたら教えてください。

五十四話　「未来を掛けた戦いの果て」（前書き）

ようやく学園祭編修了～！

英雄と女王の子

五十四話　「未来を掛けた戦いの果て」

五十四話

「未来を賭けた戦いの果て」

先に動いたのはアキラだった。水の太刀を構えて虚空瞬動を使い、一気に超の眼前まで移動すると高密度に圧縮された水を全て開放しながらの斬撃を放つ。通常、この一撃を受ければ斬撃によって切られ、追い討ちを掛ける様に２ｔを超える水に飲まれ、水圧に潰されてしまう。

しかし、超は近接戦闘に関してはスペシャリストだ。背中のブースターと虚空瞬動で苦痛を堪えながらではあるが、難なく回避した。しかし、超が回避した先には迫り来る２００本以上の光の矢、炎の矢が見えた。

「多重詠唱カ！！」

木乃香の魔法だと当たりを付け、直撃コースの矢だけを両手の術式武装を施したガントレットで弾く。だが、その矢の中に紛れる様に怨霊の姿が見えて焦った。

「さよ様の怨霊の矢だナ！」

流石に怨霊の矢が命中したら即死に繋がる所か魂を冥界に縛られてしまいかねない。もう一度虚空瞬動で矢の嵐の中を掻い潜りながら離脱する。

木乃香の上を取った超は一気に急降下して攻撃しようと思ったの

だが、視界の隅にさよを見つけ、そしてその光景に唖然とする。
さよは超が回避した光や炎、怨霊の矢を左手に持つ鏡に吸収させていたのだ。そしてその全てのエネルギーが鏡の前に纏められてチャージされる。

「鏡反術式・壱の型・・・・・呪怨魔砲!!」

魔法のエネルギーに加え、怨霊まで吸収して、更に周囲の怨霊を上乗せしたその砲撃、呪怨魔砲は一直線に超に迫った。
回避しようと再び虚空瞬動を使おうとした超だが・・・・・・。

「させない! 戒めの水 水の9矢!!」

アキラの放った戒めの水によって拘束され、身動きが取れなくなってしまう。

「くっ・・・あ、がああああああああああああああああ!!!!!!!」

歯を食い縛って額に脂汗を浮かべながら展開した魔法障壁ごと、超は呪怨魔砲に飲み込まれた。

「やった?」
「どうでしょう? 直前に障壁を張ったみたいですから・・・・・・」
「油断、出来へんな・・・」

此処に来るまでに随分と魔力を消費してきた三人、これで決着が着いてなければ少しキツイのだが・・・・・・。
煙が漸く晴れた。そして、その煙の向こうにはボロボロになり、

遠隔操作式のレーザー兵器を失い、障壁を支えていたのであろう左手をブラリと下ろし、残った右手を何とか構えている超の姿があった。

「ハァ・・・ハァ、ハァ、ハァ・・・ッ、ガハッ！　く、ぅ・・・・・・流石に、やってくれるヨ。最強クラスには届かないワタシでは、これが限界という訳カ」

だがそれでも超は残った右手の術式武装に全魔力を流し、最後の足掻きとばかりに術式武装に使われていた魔法を開放した。

「術式武装開放　燃える天空！！」

本来、術式武装を解けば使われていた魔法は霧散するのだが、今回の様に術式武装に使われていた魔法を開放する事で、遅延魔法の様な事が出来るのだ。

開放された燃える天空が木乃香たちに迫ったが、超は忘れている。さよは魔法を反射する事が出来る事を。

「反射術式・弐の型・・・・・・術式鏡反撃」

燃える天空が全てさよの鏡に吸い込まれ、そっくりそのまま超に跳ね返ってきた。もはや障壁を張るのが精一杯だった超は、障壁を張るも・・・・・・途中で意識を失って落下するのであった。

木乃香たちの戦いを見届けていたアリスはゆっくりと立ち上がり、飛行魔法を使って飛行船の上まで移動した。

アリスの行動が何なのかを理解しているシルヴィアやエヴァンジェリン達は何も言わなかったが、学園長だけが、アリスの行動に疑

問の声を上げている。

「アリス君は何を・・・・・・・」

「黙ってみていろジジイ、これからアリスの本当の力の一端を見れるのだからな」

アリスが飛行船の上に着くと丁度、強制認識魔法が発動した。だがアリスは慌てる事なく目を瞑り、自身の内からとある力を発現させる。

次にアリスが目を開いた時、アリスの瞳の色が変わっていた。右目が緑に、左目が青のオッドアイ、それは母であるアリカや、叔母である明日菜と同じ目だった。

「王家の魔力・・・・・・展開、術式選択」

アリスの“姫”の先端に普通の魔力とは何かが違う魔力が収束していく。ゆっくりと、静かにアリスは“姫”を大きく振り上げ、呪文を紡いだ。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス・・・・・・契約に従い　我に従え　造物の神　来たれ　黄昏の彼方より出でし　王者の象徴　拒絶と破魔の力重なりて　集え　王の叫び!!」

魔力が確かな形を成した。しかし、ソレは魔法と呼ぶには些かおかしい。何故なら普通の魔法とは違って精霊の気配を感じないのだから。

「黄昏の咆哮!!」

アリスの姿を見て不味いと思ったのか既に葉加瀬は飛行ユニット

を使って飛行船を脱出している。ならば遠慮は要らないと、アリスは“姫”を思いっきり振り下ろした。

振り下ろした“姫”から無色の砲撃が飛行船と、発動した強制認識魔法を貫き、飛行船は爆発、そして強制認識魔法は無効化されて術式そのものが掻き消されてしまった。

「はあ・・・・・はあ・・・はあ、はあ・・・・・・ぐっ、初めて使ったけど、キツイなぁ・・・・・・王家の魔法は」

いつの間にかアリスの両目はいつもの色に戻っており、視線の先には超をキャッチして驚愕の目でアリスを見上げている木乃香たちが居た。

「まあ、木乃香ちゃん達は・・・合格かな」

アリスは木乃香たちにＯＫサインを送り、それを見た彼女たちは、その意味をゆっくりと理解し、喜びの声を上げた。

ゲームは麻帆良魔法騎士団の勝利で終わり、参加者全員が打ち上げパーティーをする中、ネギは超を見つけた。

超は言っていた。もうこの時代にいる理由が無い、だから元の時代に帰ると・・・・・・。

「超さん・・・・・本当に、行ってしまうんですか？」

「ああ、ワタシの全てだた計画も、コノカさん達に潰されてしまった。もう、ココに用はない」

超の意思は固かった。何も言えなくなったネギはどうしても聞きたかった事を、超に尋ねる。

「二つ、聞きたい事が・・・・・・」
「なんダ？」
「超さんの全身に施された呪文処理の事と、超さんが使った兄さんの術式武装の事です」
「・・・・・・」
「あの処理は・・・超さんが自分でやったものじゃないですよね？」

超は答えない。だが、それが答えだとはネギも理解している・・・・・超の全身に施された呪文処理は、誰かが超に施した物だと。
そして、同時にあの処理がどの様なものかも理解していた。術者の肉体と魂を喰らって、その代償として力を得る狂気の所業、まともな人間であれば自分だろうが他人だろうが、施そうとは思うまい。

「超さん、あなたの過去に何があったんですか？　その“何か”が・・・あなたにこんな計画を実行させた理由なんですか？」
「フフ・・・・・未来の事は話せないネ、術式武装の事も同じ、あれはアリス先生の事にも関わるから、ネギ坊主には絶対に話せないヨ」
「超さんッ！」

所詮、誰かの過去を知ることで誰かの事を理解出来る筈が無い。それは傲慢とも言えるだろうし、何より超の過去は、歴史の教科書を紐解くか、ニュースを聞けば凡そは想像できる。
人間という生き物の社会に、闇は付き物。ましてや裏社会の事となれば普通にありえる事ばかりだ。

「それにネギ坊主、お前はワタシに負けた・・・なら、ワタシがネギ坊主に全てを話す義理は無いハズヨ？」

もう、何も話す事は無いと言って超が取り出したのはカシオペアの弐号機、そのまま未来に帰ろうとしているのを見て、ネギは瞬動で近づき、カシオペアを掴んで止めた。

「・・・ダメです。超さん」
「・・・・・ムム、今の瞬動はスバラシイネ。縮地レベルヨ」
「ごまかさないでください！！」

超の視線の先には古菲、五月、葉加瀬、茶々丸が居た。皆、超がこの時代で出会い、または作り、共に時間を過ごした掛け替えの無い友たちと娘。

「全てだなんて・・・嘘ですよ。儚い夢だなんて、そんな筈がありません・・・・・超さん、僕と一緒に“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”を目指しませんか？　同じ時代を生きる人間として、この時代を生きる人間として一緒に未来を変えていくのなら、僕が誰にも文句は言わせません」

いつの間にか、ネギの従者達も集まってきており、アリスや、その従者たちも来ていた。

「・・・・・断るネ」
「何故ですか！？」
「言たハズヨ、ネギ坊主はワタシに負けた。ならワタシがネギ坊主の言う事を聞く必要は無い・・・・・それに、ワタシは“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”が嫌いネ。故郷は初代国王からしてそれに嫌悪していたヨ、ワタシも、そして国民もまた・・・同じなのダ。だから帰るネ」

再び、超のカシオペアが起動して、超の身体と、何故か用意して

あった超の荷物が空に展開された魔方陣に向かって上っていく。

「ネギ坊主・・・・・・一つだけ忠告するヨ、闇に気をつける事ダ・・・・・・でないと、後悔することになるからナ」

ネギに忠告だけ残し、次に超は五月の方を向いた。

「五月、超包子を頼む。全て任せたネ」

そして超は葉加瀬と茶々丸にも言うべき言葉を残し、ライバルとも親友とも言えた古菲に笑みを向けた。

「古!!　いつかまた、手合わせするネ!!」

「・・・ッ、うむ!!　必ず!!」

最後に超はアリスとシルヴィア、木乃香、アキラ、さよ、月詠の方に目を向け、穏やかな笑みを浮かべる。

「（ご存命の頃のあなた方にお会いできて、光栄たヨ・・・・・・アリス陛下、王妃様、他の皆様方）・・・・・・さらばだクラスの友たち!　また会おう!!」

そう言い残し、今度こそ、本当に超はこの時代を去った。

後に残されたのは、先ほどと変わらない夜空だけ。ネギは何を思うのか、そしてアリスは・・・・・・未来の民に、祝福を祈るのだった。

五十四話　「未来を掛けた戦いの果て」（後書き）

やっと……やっと次から修行編に！！　そしてそれが終われば魔法世界編！！　物語が大きく動き出す！！

五十五話　「英雄主催のお茶会」（前書き）

修行編スタート！

五十五話　「英雄主催のお茶会」

英雄と女王の子

五十五話

「英雄主催のお茶会」

まほら祭振り替え休日二日目、アリスは従者たちを連れて朝から図書館島地下にあるアルビレオ・イマの住処に来ていた。門番の竜はアリスがアルから貰った招待状を見せたら道を空けてくれて、巨大な扉を開けて奥に進むと滝に囲まれた庭園に辿り着いた。

庭園には既にアルと、何故かエヴァンジェリンとチャチャゼロも居た。紅茶を用意して、エヴァンジェリンは既に飲み始めている。

「おや、アリス君たちですか・・・お早いですね」

「早く来ないと何されるか判らないからね・・・アルの場合」

正論だ。彼の性格を熟知している人間ならアル主催のお茶会に遅刻など死んでもしようとはしないだろう。

「心外ですねぇ。おや？　アリス君、リボン変えました？」

「アルに学園祭で会った時も同じリボンだったと思うけど・・・・・・」

「いえ、それ以前の貴方も遠見の魔法で見てましたから」

「あっそ・・・・・・」

アリスが三つ編みの先に結んでいる赤いリボン、金糸で翼の刺繍が描かれたリボンからは魔力を感じる。

「大切な子から貰った・・・・・・大事なリボンだよ。一応、魔法具でもあるかな」
「へえ・・・・・・成る程、確かに魔法具ですね。しかも、貴方にピッタリの」
アリスはリボンを一撫でしてから空いている椅子に座り、シルヴィアが淹れてくれたお茶を一口飲む。随分と美味しいし、香りも良いので、多分高級なものなのだろう。
「それで？　私に話って何なの？」
「その事ですが・・・アリス君、貴方の夢の事をエヴァンジェリンから聞きました」
「そう・・・・・・」
「勝手に話してしまったが、良かっただろう？」
「まあ、アルならね。エヴァンジェリンが話しても大丈夫と判断した人間なら信用するよ」
実際、アルはそういう面では信用できる。
「やはり、アリカ様の為・・・・・・ですか？」
「そうだね、それもある・・・けど、それだけじゃなくなったんだ」
「と、言いますと？」
「シルヴィアの事・・・・・・彼女の出生と、私と出会うまでの事もあって、余計にね」
アルとエヴァンジェリンはまだシルヴィアの出生の秘密を知らなかったので話す事にした。同時に、アキラ、さよ、木乃香も知らなかったので、丁度良い。
「成る程、確かにオスティア難民の現状はどうやっても打開できま

せんし・・・・・その為の」
「そう、既に向こうでも賛同者、協力者も得ている。後は邪魔者を排除して実行に移すだけ」
「二代目・紅き翼もその為の組織ですか？」
「簡単に言えばその通り、全ては夢の為の下地になる」

アリスの夢を聞き終わり、アルは何やら考え込んでいる。木乃香たちも、少し考えているが、直ぐに顔を上げてアリスと視線を合わせた。

「アリスさん、ウチ・・・協力するえ。アリスはんの夢は多くの人を救える・・・・・沢山の人の助けになる尊いものや」
「私も頑張る、アリス先生の夢は、今を苦しんでいる人たちの為にも、絶対に叶えなきゃいけない」
「私もそう思います、沢山の人を助けるというのもありますけど・・・・・私も、アリス先生のお母さんの事は絶対に何とかしないとって思いますから」

木乃香たちはアリスの夢を支持してくれて、協力もしてくれると言ってくれた。後はアルだが・・・・・。

「一つ、向こうの協力者は誰ですか？」
「テオドラ様、セラスさん、リカードさん、それから旧オスティア難民の大多数です」
「という事は・・・時が来たらヘラス帝国、アリアドネー、メガロメセンブリア元老院の反上層部、そして嘗てのオスティアの民が一同の結集するという事ですか」

随分と豪勢な布陣に苦笑を浮かべるアルだが、刹那、アルの重力魔法がアリスを押し潰そうとした。

ギリギリで回避したアリスは飛び出そうとしたシルヴィア、月詠を手で制し、相変わらず紅茶を飲み続けている。

「成る程・・・・・覚悟も充分という事ですか。判りました、私も協力します。詠春の方にも私から協力要請をしておきますか？」

「いや、それは月詠にやらせる。彼女は明後日から一度、京都に戻ってもらう予定だから」

「・・・成る程、サムライマスターから神鳴流の全てを彼女に教えてもらうという事ですか」

青山家出身の詠春に宗家の業の全てを月詠に伝授してもらう。以前、電話で頼んで了承を？ぎ取ったので、後は月詠が向こうへ行くだけだ。

「ん？　どうやらぼーや達が来たらしいな」

宙に浮く球体状の椅子に座って紅茶を飲んでいたエヴァンジェリンがふと扉の方へ視線を向けた。すると、扉が開かれ、中からネギと明日菜、刹那の三人が入ってくる。

「ようこそ私のお茶会へ、お待ちしておりましたよ」

「遅かったな」

ネギ達を出迎えるアルとエヴァンジェリン、アリスは話に花を咲かせる木乃香やシルヴィアたちを眺めながら紅茶片手に父との仮契約の証であるパクティオーカードを取り出して何となく扇いでいた。

「あのクウネ・・・・・いえ、アルビレオさん・・・」

「ネギ君！！！」

「はっはひ！？」

「私の事はクウネル・サウンダースと呼んで欲しいと言った筈です」
「は、はあ・・・・・・」

アホらしいやり取りに呆れながらアリスは何となくテーブルの上に乗っているお茶菓子とは別に、絶対紅茶とは合わないだろうチキンを見る。・・・・・何となく、あの名前の由来を理解してしまい、見るんじゃなかったと後悔した。

「ふん、くだらん・・・何なんだアル、その気の抜ける名前は」
「・・・・・・」
「おいアル！　アルビレオ・イマ！　聞いてるのか!?　おい!!」
「・・・・・・」
「・・・・・・クウネル」
「何でしょうキティ？」
「その名で呼ぶなと何度言わせる!!」

エヴァンジェリンがアルの襟掴んでキレている。よほどその名で呼ばれたくないのか・・・。

「落ち着けキティ」
「可愛らしい名前じゃありませんか？　キティ」
「ぬがあああああ!!!!　アリス！　アル!!　貴様らあああ!!!　その名で呼ぶなと言っているだろうがあああああああ!!!!!」
「だって・・・」
「ねえ・・・」
「「キティって呼んだ時のエヴァンジェリンの反応が面白いし」」
「ムキャアアアアアアアア!!!!!!!!」

いい感じにエヴァンジェリンが壊れた所でお茶会再開、アリスは

椅子に座りなおして新しく紅茶を淹れ直す。
アリスとアルに弄られたエヴァンジェリンはソファーの上でグッタリとしていたが、誰も気にしないことにした。寧ろ、今の彼女に話しかけた者は問答無用で氷漬けにされそうで怖い。

「それでネギ、今回の事件は如何だった？」
「・・・え？」
「アレだけの事があったんだ、何か得る所はあったんじゃないのか？」
「・・・・・・・」

アリスのネギへの問いかけにエヴァンジェリンが興味を持ったのか起き上がり、耳を傾ける。明日菜と刹那も心配そうにネギに視線を向けた。

「確かにネギは超に負けた。だけど、負けたからこそ、得るものもある。ただ勝てば良い、勝てなかったから何も無い。それでは戦う者として失格だ・・・・・・で？　ネギはあの戦いで何を得た？」
「僕は、まだまだ弱いって事を実感した。それと、自分がどんな場所に・・・どんなモノの上に立っているかを知ったよ」

いや、ネギは超に言われる前から知っていた事だ。エヴァンジェリンに言われて、それを考えていたのだから。

「キレイなままではいられない。いや、そもそも最初から魔法使い（僕達）はキレイなどである筈がない・・・」
「・・・・・フ、超鈴音は上出来だったな。お前のような真っ直ぐで才能ある前途有望だが世界を知らぬ若者（ガキ）には、“それ”を思い知らせるのが最も難しい」

エヴァンジェリンの言葉が響き渡る。同時にネギの胸に大きく届いた。

「自分が世界最強と、思う無かれ・・・・・自分より強い人間なんて世の中沢山いる。父さんは別格だけど、世界とはそういうものだ。そして、キレイであるはずが無いのは魔法使いに限った事ではない・・・・・この世の森羅万象全ては、鏡の表と裏のようなものだ。善があれば同時に悪もある。善は時として悪となり、悪は時として善となる。この世の誰もが善であり、誰もが悪だ。それは、この世の誰一人として逃れる事の出来ない真理」

アリスの言葉にエヴァンジェリンも賛同する。エヴァンジェリンは己を誇りある悪と称しているが、それには理由もある。自分は決して正義ではないが、やってきた事が必ずしも悪であるとは思っていない。だが、自分は結局は悪に属する存在だと認めているからこそ、自分の行いに悪としての誇りを持ち、外道にならない様に戒めているのだ。

悪と外道は同義ではない。悪と正義は同義だが、外道は全く異なるもの。正義からも、そして悪からも外れた道を歩む存在を外道と呼ぶ。

「アリス君、結構ネギ君を導いていませんか？　中々の策士ですね」

「そんな事をした覚えは無いよ。アレはエヴァンジェリンがネギに教えてきた事、私はネギに関しては一切関知してない」

「そうでしたか・・・・・意外、とは言えないですね。貴方の性格なら」

この辺りに、アルはアリスとネギが兄弟だと思わせる何かを感じ取った。

「しかし、これがエヴァンジェリンの指導の賜物となると、流石ですね。真面目な少年をここまで導くとは・・・・・やはり師は悪人に限る・・・見事です。英雄の息子の片割れも、ゆくゆくは悪の大魔法使い・・・いや、闇の福音の後継者候補という訳ですか？」

「ぬ？　私としてはそんなつもりは無かったのだがな・・・・・・やはり弟子を取るというのは不慣れだ。どうしても私の考えでしか教える事が出来ん」

以外だった。エヴァンジェリンは弟子であるネギにそれなりに入れ込んでいると思っていたが、随分とアリスに近い考えを持って接しているようだ。

「それでネギ君、その認識に立ち、これから如何するのです？」

「えっ・・・ハ、ハイッ！　いえ、その・・・だ、だからこそやっぱり、立派な魔法使い（マギステル・マギ）を目指そうと・・・・・・超さんの計画を阻止する事は、僕には出来ませんでした。だからこそ、僕は更なる高みを目指さなきゃいけないと思いました。あの敗北で立ち止まらず、更に前に進み続けないと・・・ですから、父さんの事とはまた別にちゃんと立派な魔法使いになって、僕に出来る限り色々な人の力になれたらと思います」

結局、ネギは何一つ解っていない。それがアリス達とエヴァンジェリンの結論だった。それではメガロメセンブリア元老院の狙い通りの結末しか迎えない。

「そうですか・・・・・・ネギ君、どうです？　私の弟子になってみませんか？」

アルの爆弾発言、エヴァンジェリンが紅茶を吹いた。

一応、アルもネギを心配しての言葉なのだが、どうにも彼の場合、

それだけではない様な気がするのは気のせいではないのだろう。

「アル・・・何を考えてる？」

「いえいえ、エヴァンジェリンは氷系の使い手ですし、ネギ君は風系・・・・・ならオーソドックスに使える私が教えたほうが良いと思いまして」

本当に喰えない男だ。相変わらずの胡散臭い笑顔の裏で、ネギをメガロメセンブリアから守ろうという考えが伺える。

弟子云々の話は置いておいて、ネギは本題を出してきた。

「それであの・・・クウネルさん、今日ここをお訪ねした本題なんですが・・・・・父さんは・・・」

「ええ・・・彼は、今も生きています。私とアリス君が保障しましょう」

一瞬の静寂の後、明日菜の声で歓喜の空気が場を包んだ。

「やったじゃん！　ネギ！」

「は、はい！　そ、それで父さんは今どこに・・・」

「残念だけどネギ、私もアルも・・・父さんが生きている事は判っていても、何処に居るかまでは判らない」

「え・・・・・」

「じゃ、じゃあ何で生きているってわかるのよ？」

「それは・・・・・」

アルが懐をゴソゴソと探り、取り出した物、それはアリスが今ネギ達に見せた物と同じくパクティオーカードだった。

「パクティオーカード？」

「このカードとアルのカードは父さんとのカードだ」
「私とアリス君のカードは生きている。これが彼の生存証拠です。ちなみに・・・・・・カードが死ぬとこうなります」
アルが更に取り出したのは数枚のパクティオーカード、全てナギとのカードとは違って螺旋に浮かぶ本の絵が消えている。
「っていうか、アリス先生のカードってシルヴィアさんとのカードじゃなかったの？」
「確かにシルヴィアとは仮契約してるけど、主は私・・・・・・このカードがシルヴィアとのだと言った覚えは無いよ」
そもそも、カードに描かれたアリスはシルヴィアと出会った頃より幼い。
「あ、あの！　何か父さんの手掛かりとかは・・・・・・！？」
「残念ながら今の私に何も・・・・・・しかし、どうしても彼の事を知りたいのなら、お勧めはしませんが、英国はウェールズに戻ると良いでしょう」
「ウェールズ？」
「あそこには魔法世界・・・ムンドゥス・マギクスへの扉があります」
魔法世界、確かにナギの事も何か判るかもしれないが、アルも言うとおり今のネギにはお勧めできない。
あの世界は半端な覚悟、半端な実力で通用するほど、甘い世界ではない。寧ろ魔法使いの本国というだけあって血みどろの日常が当たり前になってしまう世界なのだ。
「な、何よこの風は！？」

明日菜が何やら騒いでいた。見ればネギを中心に突風が吹き荒れ渦巻いている。ネギから魔力が洩れ出ているのだろうが、興奮しすぎだ。

アリスは紅茶と、お茶菓子を確保して自分の傍に寄せると結界を張って風を防ぎ、シルヴィア達も同じ事をしている。

「よしっ、じゃあいってきます！！　・・・へぶぅ！？」

「アホか貴様！！　行くってどこへ行くか解ってるのか！？」

「え・・・そ、それは」

「ネギ、魔法世界に１０歳のネギがいきなり行くって言っても簡単には行けない。それに、今のネギでは魔法世界に行っても直ぐに死ぬのがオチだ」

「魔法世界は決して甘くない、こちらの世界と同じ感覚で行けば待っているのは・・・死だけだ」

「そうよ！　アリス先生とエヴァちゃんの言うとおり！　だいたいクラスの皆を放っとくつもりなの！？　先生でしょっ、期末もあんのよ馬鹿！」

そういう事だ。ネギが教師をしている現在の状況で、簡単に向こうへ行く時間など作れる筈が無い。今の生徒が卒業するか、それとも夏休みなどの長期休みが無い限り、ネギに時間は無い。

「あ、あの・・・クウネルさん、じゃあせめて、今日は父さんの昔話を・・・・・・」

「いいですよ、私に話せる事でしたら。アリス君も知らない事を話してあげましょう・・・おや？」

他のネギの従者が来た。何故か早乙女ハルナと長谷川千雨が居るが、大方魔法がばれてしまったのだろう。そしてネギと仮契約をし

た・・・・・、相変わらず秘匿意識の薄い弟だこと。
もっとも、ネギの従者ではない楓と古、小太郎と茶々丸も来ているので、アリスは我関せずとばかりに何杯目か忘れた紅茶のおかわりを淹れるのだった。

「ねえシルヴィア」
「はい」
「夏休み、魔法世界に行く事になる・・・・・今まで以上、修行に身を入れないといけない」
「どこまでもお付き合いします。私も、今のままの実力に甘んじているつもりはございません」
「うん・・・木乃香ちゃんたちもね」

五十五話　「英雄主催のお茶会」（後書き）

次回から少しオリジナルストーリーになります。ネギと、そのパーティーは出番が無いと思われます。

五十六話　「修行開始、更なる高みを目指して」（前書き）

今回から修行開始です。アリスパーティーがメインですので、ネギパーティーは暫く、殆ど出番が無いかと。

五十六話　「修行開始、更なる高みを目指して」

英雄と女王の子

五十六話

「修行開始、更なる高みを目指して」

学園祭の振り替え休日も終わり、普通に学校も始まった。だが、アリスは学校が始まっても姿を見せる事は無かった。

アリスの従者である木乃香、アキラ、さよは一応、学校には来ているが、放課後になれば直ぐに下校し、真っ直ぐ何処かに向かっている。

アリスはアルとのお茶会からずっと、学校にも行く事無くシルヴィアと共にエヴァンジェリンの別荘に来ている。月詠は既に京都に戻っているので、アリスとシルヴィアの二人だけで昼間は別荘を使い、夜は従者たちとエヴァンジェリンも交えて修行をしていた。

「アリス様・・・もう一発、行きますよ」

「ああ、来い」

別荘内の砂浜で、杖を構えたシルヴィアがアリスに向けて氷の矢を放つ。対するアリスは“姫”を片手にしているが、構える事無く、両目をオッドアイにして王家の魔力をコントロールしようとしていた。

「・・・・・っ、グッ！」

だが、コントロールして望みどおりの結果を出そうとしても、中々上手く行かず、ギリギリの所で氷の矢を弾くことになった。

「ダメでしたか」
「ああ・・・・・ダメだ。アスナ叔母さんみたいに王家の魔力を全身に巡らせて魔法無効化する事が出来ない」

元々、明日菜は生まれつき王家の魔力を常に全身に纏っている体質だ。だが、アリスと母のアリカは王家の魔力を魔法として使う事が出来る。

明日菜は王家の魔力を常に身に纏う代わりに魔法として使う事が出来ず、アリカとアリスは王家の魔力を常に身に纏う事が出来ない。

だが、元々王家の魔力は常に身に纏う事も出来て、更に魔法として使う事が出来て初めて使いこなしたと言える代物だと文献には載っている。アリスはそれをやろうとしているのだ。

「やはり、今まで王家の魔力を通常の魔法に上乗せする程度にしか使っておらず、王家の魔法を使ったのはこの前が初めて・・・・・更にそれを常に身に纏える様にするには、苦労するか」

元々、アリスは王家の魔力に関してアリカ程の才能や魔力量は無い。それはアリスの血に王家のもの以外の血が流れているからだ。

「でも・・・・・魔法世界に行く日まで時間が無い。少なくても、王家の魔力を完全にコントロール出来る様にはならないと」
「協力は惜しみません」
「すまない・・・シルヴィアにも修行はあるというのに」
「私は、アリス様の従者・・・アリス様の為に何かをするのは、私の存在意義でもあります。貴方様に拾われたこの命、全てはアリス様の為に」
「・・・ありがとう」

暫く、お互いに無言だった。だが、何も言わず同時に“姫”とランス・オブ・ジュエルを構えた二人は一瞬で姿が消える。

この後、木乃香たちが来るまでずっと、アリスとシルヴィアは激しい空中戦を繰り広げ、滅茶苦茶になったビーチを見てお怒りになったエヴァンジェリンの説教を受ける羽目になるのだった。

「まったく何を考えている！！　私は別荘の使用許可を出したが、ここまで滅茶苦茶にしろとは言っていないぞ！！」

「いや、すまない・・・・・つい、シルヴィアとの模擬戦に熱くなりすぎた」

「私も、年甲斐も無くはしゃぎ過ぎてしまったみたいで・・・」

二人でエヴァンジェリンの前に正座しているアリスとシルヴィア、木乃香たちはそれを苦笑して眺めながら、アキラは海に入って今まで以上の量の水のコントロール訓練に入り、さよはアリスが以前アメリカで入手したというネクロノミコン新訳の日本語訳した本を読み始め、木乃香は鉄扇を広げながら魔力を放出して舞を始めるのだった。

「ほう・・・アキラめ、以前と比べて随分な量の水と同調出来る様になったな」

「うん、木乃香ちゃんも舞を始めたのが良かったのかな？　集中力が始める前と比べ物にならない。お蔭で魔力放出量とその最大量のコントロールにも、一切のムラが無い」

前のアキラなら操れる水の量は２ｔが限界だった。しかし、今のアキラなら４～５ｔは可能だろう。まだまだ修行を続ければ１０ｔは余裕かもしれない。

木乃香は以前から懸念していた事だが、魔力が大きすぎるが故に魔力放出量にムラが大きかった。だが、集中力を鍛えるという名目

で、実戦でも役に立つ舞を始めさせると、少しずつ放出される魔力が均一になってきていた。

「だが、一番恐ろしいのは・・・・・・・」

「うん・・・・・・」

アリスとエヴァンジェリンが恐る恐る目を向けた先、ネクロノミコン新訳を読むさよが居るのだが・・・・・・気のせいか、周囲を漂う浮遊霊の数が日に日に増えている気がする。

「やはり戦場に立った場合、一番恐ろしい存在になるのはさよだな」

「使う魔法やアーティファクトが凄いからね」

一度戦場にさよが立てば、周囲に漂う戦死者の霊や、周辺に転がる遺体を操って死者の軍勢を作り上げる事が出来る。

死者の軍勢は決して倒れる事無く、敵を殺せば殺すほど軍勢は勢力を増していくという凶悪性を兼ね揃えているのだ。それこそ死霊術師（ネクロマンサー）の本領、対軍戦においては敵無しと言わしめる存在の所以だ。

「さてアリス・・・・・・貴様は自力の底上げをしたいのであったな？」

「ああ・・・・・・魔法や気は一切無し、純粋な体術のみでの底上げをする」

「そうか・・・・・・ならば掛かって来い！」

アリスは“姫”を構え、エヴァンジェリンも鉄扇を構えた。お互いに魔力や気による身体強化及び武器強化は一切していない、純粋な武術のみの戦いだ。

「参る！！」

「来い！　若造！！」

こうして、別荘内の一日は過ぎ去っていく。
アキラ、木乃香、さよは各自のトレーニング、シルヴィアは宝石に魔力を注入したり新たな宝石に術式を刻み込んだり、アリスはエヴァンジェリンと共に自力の底上げ。
これから先、濃い一日が続く事となる、これはその第一歩であった。

別荘内で一日が過ぎ、アリスは一度外に出た。外に出たのはアリス一人だけで、他のメンバーは皆、まだ別荘内に残っている。

「さて・・・・・アルは何の用なのやら」

アリスが向かった先、それはアルビレオ・イマの住処だ。先日、手紙がアリスの部屋に届いており、アリス一人で来て欲しいと書かれていた。
面倒なので影の中に沈んだアリスは、一気に図書館島地下の竜の影に転移して、アルから届いた手紙を竜に見せる事で中に入った

「アル～？　来たけど・・・・・・」
「いらっしゃいアリス君・・・・・・お待ちしておりましたよ」

相変わらず、何を考えているのか判らない笑顔でアルが出迎えてくれた。紅茶とお茶菓子が用意されている事から、恐らく長くなるのだろうと予想する。

「それで、何の為に私を呼んだの？　重力魔法を教えてもらうのは来週からじゃなかった？」

「ええ、それは来週の予定です。今日お呼びしたのは別件でして・・・」

そう言ってアルが取り出したのは何の変哲も無い唯のパクティオーカードだ。

「イノチノシヘンが如何かした？」

「アリス君・・・これからお話するのは、貴方にとってとても大事な事・・・・・・そして、貴方の将来を確実に定める事になるであろう事です」

「・・・・・・」

話を始める前にアルは一口、紅茶を飲む。アリスも同じように一口・・・・・・正直、まだ何もしていないのに喉がカラカラに乾いている気がする。

「それでは・・・・・・お話しましょう」

「・・・」

「アリス君は私のアーティファクト、イノチノシヘンについてはご存知でしたよね？」

「それは勿論」

様々な人物の人生、記録、記憶を溜め込み、時にはそれを利用して自身がその人物になる事が出来るマスターピースのアーティファクト、そう記憶している。

「そして、イノチノシヘンで私はナギの遺言を使い、ナギの姿で貴方と戦いました」

「・・・それで？」

「実はもう一・・・・・・ナギは貴方とネギ君、二人に遺言を残し

ていましたが・・・貴方にだけ遺言を残した方がいらっしゃるんですよ」
「っ！」
残した“方”、“いらっしゃる”、などと、アルが丁寧な言葉で語る人物など、アリスはテオドラ皇女と、その他には一人しか知らない。
「・・・・・か、母さん」
「そうです。アリカ様・・・あの方が、貴方宛の遺言をイノチノシヘンに残しておられます」
「それを、私に？」
黙って頷いたアルだったが、その表情は険しい。
「これを見れば、貴方は将来を・・・夢を、諦めるか、実行するか、その二択を定めなければならなくなるでしょう・・・・・この先、二度とその決断を取り消す事は出来ないと思います」
「・・・・・・」
「如何します？　もう少し待ってからでも、私は構いません」
「・・・いや、今ここで・・・・・見るよ。会わせて？　母さんに」
「・・・・・本当に良いのですね？」
最後の確認として、アルが真剣な面持ちでアリスに尋ねるが、アリスの決意は変わらなかった。
「判りました・・・・・アデアット」
アルの周囲に無数の本が螺旋を描きながら浮かび、その中から一

冊の本がアルの手に渡った。

「・・・・・・母さん」

五十六話　「修行開始、更なる高みを目指して」（後書き）

次回は・・・アリス、母と会う。です！

五十七話　「母の愛、王はまだまだ子供」（前書き）

アリカ…久しぶりに書いたから難しい。

五十七話　「母の愛、王はまだまだ子供」

英雄と女王の子

五十七話

「母の愛、王はまだまだ子供」

アルが手に取った本に栞を挟み、一気に引き抜いた時、アリスの視界は光に包まれた。

思わず目を閉じてしまったアリスだったが、光が消え、アルが今までいた所に懐かしい気配を感じた。

「アリス、目を開けぬか」

「・・・・・かあ、さん」

目を開けたアリスの視界に飛び込んできたのは、忘れもしない。大切な、本当に大切な母の姿だった。

「私の感覚ではまだ、アリスは幼子なのだが・・・・・そうか、随分と大きくなったな」

「あ、えと・・・・・母さん」

「うん？　何だ？　母に何か申したい事でもあるのか？」

「・・・・・ご、ごめん！　その」

言いたい事は沢山あった。なのに言葉が出てこないで、代わりに涙が止め処なく溢れて頬を伝う。何度拭っても次から次へと流れる涙を、いつの間にか近づいてきたアリカが、そっと指で拭った。

「ほれ、男が涙を見せるものではないぞ。泣き止んで、その立派な

姿を、私に見せてくれ」
「う、ぐ・・・母さん・・・・・・私」
「うむ、大方、今まで私に会えなんだろう？　良い、思う存分、私の胸で泣くと良い。そして、ちゃんと成長した姿を、見せてくれ」

たまらず母の胸に飛び込んだアリスは、数年ぶりに大泣きした。
ずっと会いたかった。いつか会いに行くと誓っていても、幼き日に離れ離れになった母に、アリスはまだ甘えたかったという想いがあった。子供っぽいという自覚はある、しかしこれは理屈ではないのだ。

「母さん、私・・・17歳になったよ」
「そうか・・・・・大きくなったなぁ。うむ、私とナギの息子だから男前なのは当然じゃな」

泣き止み、少し離れたアリスの姿を上から下まで、じっくりと眺めたアリカは、アリスの頭に手を置き、ゆっくりと撫でた。
既に自分の背を追い越してしまった息子の頭の位置は、随分と高くなってしまったが、アリカにとって息子の頭を撫でるのに身長差など関係ない。

「あの、母さん・・・・・・流石に子ども扱いは、恥かしいというか」
「馬鹿者、私からすればアリスは幾つになろうと、私の子供だ」
「あ、う・・・・・・」

何も言えなくなった。アリカの言った事は、アリスが求めていた言葉でもあり、何より、その言葉の中に揺ぎ無い、アリスへの確かな愛情を感じたから。

「・・・母さん」
「何だ？」
「母さんに、聞いてもらいたい事、沢山あるんだけど・・・・・・一番、聞いて欲しい事があるんだ」
「・・・申してみよ」
「私の、夢の事なんだけど・・・・・・」

アリスは、自身の夢を、これから先に計画している事を話し始める。アリカはアリスが話している間は何も言わず、ただアリスの話を聞いていた。

「・・・・・そうか、私の為に・・・その様な事を」
「・・・うん、母さんは・・・・・・怒るかな？」
「当たり前だ、息子が危険な事、無謀な事をしようとしているのに、それを怒らぬ母が何処にいようか！」
「だよね」
「だが・・・・・・」

最初こそアリカは怒った。だが、すぐに穏やかな表情になり、両手でアリスの頬を包む。

「同時に、嬉しかったぞ。アリスが、私の為にそこまでしようとしてくれて・・・・・・母として、心から嬉しく思う」
「うん」
「何を言っても、諦めるつもりは無いのだな？」
「うん、もう母さんの事だけじゃ無くなった。背負うモノが大きくなったから・・・・・・」
「・・・・・・成る程、私の息子というだけの事はあるな」

アリカは、アリスの中に王の資質を見た。王家の者として、恥か

しくない確かな覚悟と決意、それがアリスの瞳の奥に見て取れる。

「ならばアリス・・・・・・母として、本当は危険な事はして欲しくないが、元ウェスペルタティア王国女王として、我が国の民の未来を・・・そなたに託す」

アリスは影から“姫”を出して床に刺すと、跪いて頭を足れる。そして、母にではなく、嘗ての女王に、宣言した。

「確かに託されました・・・・・・この身を賭してでも、必ずや」

「こら！　民の未来を託すとは言ったが、そなたは必ず生きて夢を実現させよ。私は嘗ての女王として、そして母として、何よりもそなたの無事を祈っておる」

「・・・うん、ありがとう。母さん」

立ち上がったアリスの手にある“姫”を見たアリカが、少々驚いた顔になった。このアリカの感覚ではまだ“姫”はアリスに授けていないのだろう。

「何と、“姫”をそなたに授けたのか私は」

「うん、母さんの感覚でこれから生まれるネギは父さんの杖を貰ってるよ」

「そうか・・・やはり男の子が生まれ、ネギという名になったか・・・・・それにナギの杖を」

感慨深げに呟くアリカの瞳には穏やかな光が宿っている。

愛する息子と、まだ見ぬもう一人の息子、どちらもアリカにとっては大切な存在なのだ。

「ただ・・・・・・場合によっては私は、ネギと敵対する可能性も、

無くは無い」
「・・・そうか、本当は兄弟で争って欲しくは無いが・・・・・・
私たちの世界、特に私たち王族に、兄弟だからという情は、時として役に立たないのも事実だ。私には、それを止める事は出来ん」

だから・・・と、アリカは言葉を止め、もう一度、アリスの頬を両手で包み込み、互いの額をくっ付けた。

「後悔しない様、自分の出来る事を精一杯、全力でやるのだぞ・・・・・・我が最愛の息子」
「・・・・・・はい、母さん」

アリカの身体が光りだした。そろそろお別れ、という事なのだろう。

「母さん！」
「アリス！　この時代の私に・・・必ず会うのだぞ！　そして、その元気に成長した姿を、見せて安心させてやるのだ！！」
「母さん！！」

激しい光がアリスの視界を奪った。数瞬の静寂の後、光が止んでアリスが目を開けると、アリカの立っていた所にはアルがいた。

「・・・・・・アル」
「何でしょう？」
「・・・・・・力を貸してくれ」
「それは、夢の為に？」
「ああ・・・・・・私は、誓ったから・・・母さんに」

絶対に夢を叶え、アリカとナギに会いに行く。たとえ厳しい道程

であろうと、今回のアリカとの偽りの再会で貰った言葉を胸に、突き進むのみ。

「ならば、ラカンも居る事ですし・・・私も二代目・紅き翼に入りましょう」

「・・・良いの？」

「私も、アリカ様の事は何とかしたい・・・・・・ナギと彼女が、隠れることなく笑い合っていられる日常を作るのは、彼らの友人である私の義務です」

アルはイノチノシヘンをカードに戻し、それをアリスに掲げて跪いた。

「私の翼・・・・・・アリス君、あなたに授けましょう」

「・・・・・・ああ、確かに授かった。我らの翼と共に、行こう」

アリスは姫をアルの顔の横に突きつけ、アルの二代目・紅き翼への加入を承認しするのだった。

夜、アリスは管理人室の屋根の上で寝そべり、星空を眺めていた。思い出すのはアルのアーティファクトで再会した母の姿、記憶のそれと何一つ変わらない、母の笑顔、手の温もり・・・・・・。

「良い夜だな・・・アリス」

「エヴァンジェリン・・・・・・」

「母とは会えたか？」

「・・・知ってたか」

苦笑しながら起き上がったアリスは、真横に座っているエヴァン

ジェリンの顔を眺めた。
夜風に吹かれて金色の髪が静かに流れ、月の光に照らされた顔は女神の如き美しさだった。

「それで？　母に会って、夢への意思はどうなった？」
「・・・より一層、強くなった。私はどんな犠牲を払ってでも、夢を叶えて母さんと父さんに会いに行く」
「クク・・・・・そうか」

エヴァンジェリンは星空を眺めながら何となく手を伸ばし、その小さな手を眺めつつ瞳だけをアリスに向ける。

「アルも貴様に協力する事にしたか・・・・・」
「ああ・・・・・エヴァンジェリン」
「む？」
「取引だ・・・・・登校地獄の呪いを解呪する手筈が整った。解呪する代わりに二代目・紅き翼に入って欲しい」

随分と突拍子も無い事を言い出した。そしてその取引内容にエヴァンジェリンは驚かされる。

「随分と簡単に言う・・・・・いや、成る程・・・それで私に協力を求めると？　正気か？」
「ああ、勿論だ」
「フン・・・・・私は元とはいえ賞金首だ。闇の福音・・・今尚、悪の大魔法使いとして、魔法世界で有名だぞ？」
「関係無いさ・・・・・私は正義とか悪とか、そんなくだらないモノに拘る気は無い」
「そうだったな・・・貴様は、あの馬鹿の息子なんだったな」

ナギと同じ瞳を見せるアリスに、エヴァンジェリンは不覚にも頬を若干赤らめてしまったが、直ぐに気を取り直して立ち上がった。

「アリス・・・いや、アリス・スプリングフィールド、私を配下にするというのは、どれ程大きな事か・・・理解しているな？」

「当然」

アリスも立ち上がり、真正面からエヴァンジェリンを見つめる。

「ならば仮契約だ。相互契約で互いに誓いを立てる。私は二代目・紅き翼に入り、この先の貴様と同じ道を歩む事を」

「私はエヴァンジェリンの呪いを解き、エヴァンジェリンに自由の暮らしを保障する」

アリスは懐から宝石を一つ取り出して魔力で砕くと、宝石の破片が仮契約の陣になった。

「これからよろしく頼むぞ？　我が主にして僕よ」

「こちらこそ、よろしく・・・我が従者にして主よ」

口付けを交わした二人、魔方陣が輝いて４枚のカードが生まれた。

「これで私はアリスの従者であり、主だ」

「私はエヴァンジェリン・・・エヴァの従者であり主」

「「お互い、誓いの印としてこのカードを持つ」」

アリスはエヴァの絵が描かれたマスターカードとアリスの絵が描かれたコピーカードを、エヴァはアリスの絵が描かれたマスターカードとエヴァの絵が描かれたコピーカードを手に取った。

「安心しろ・・・二代目・紅き翼に私が入るのだ。貴様の夢、必ず叶うに決まっている」
「ああ、君は最強の魔法使いだものね」
星空が、新たな主従を祝福してくれている・・・・・・そんな気がする夜だった。

五十七話　「母の愛、王はまだまだ子供」（後書き）

二代目・紅き翼のメンバーが初代以上に豪勢かも……。

アリス、シルヴィア、ラカン、木乃香、アキラ、さよ、月詠、アル、タカミチ、エヴァ、（自動的に）茶々丸、チャチャゼロ……最強じゃん！！

次回、超が言っていたアリスへの報酬が登場します。

五十八話　「新たな仲間？　翼の生えた究極ガイノイド」（前書き）

新キャラ登場！　……大丈夫かな？　私…。

五十八話　「新たな仲間？　翼の生えた究極ガイノイド」

英雄と女王の子

五十八話

「新たな仲間？　翼の生えた究極ガイノイド」

アリスがエヴァと仮契約した翌日、アリス達とエヴァ、茶々丸、チャチャゼロはエヴァの家に集まっていた。

「それじゃあ、エヴァの呪いを解く」

「・・・頼む」

アリスの瞳が一瞬でオッドアイに変わり、エヴァの頭に手を置いて王家の魔力をエヴァに流す。

「成る程・・・・・大量の呪いの精霊が随分と絡み合って、複雑な術式を構築してる・・・・・いや、出鱈目と言った方が正しいのか？」

「あの馬鹿は膨大な魔力で出鱈目な呪文を唱えていたからな・・・・・」

それでだろう。だが、この程度の精霊は、王家の魔力にとって問題ではない。

「エヴァの身体に纏わりついている精霊全てを、打ち消す！」

その瞬間、無色の光がエヴァを包み、不可視の精霊達が掻き消された。同時に、エヴァに掛かっていた登校地獄の呪いは完全に消え

去り、エヴァを縛るのは学園結界のみとなった。

「これで登校地獄の呪いは解けた・・・・・学園外に出れば結界の効果は消えて魔力も戻るだろう」

「・・・・・うむ、確かに呪いは解けた様だ」

エヴァは何度か身体を見て、手を握ったり開いたりを繰り返し、呪いの存在が消えているのを確認した。

「・・・感謝するぞアリス、私はこれで・・・自由だ」

「うん」

「安心しろ、約束は果たす・・・・・二代目・紅き翼、入ってやろうじゃないか」

「マスターの呪いを解いていただき、感謝します。アリス先生」

「ケケケ、コレデ俺モありすノ仲間カ？」

アリスは影からローブを二つ、取り出してエヴァと茶々丸に渡す。ローブには紅い翼の刺繍が入っており、ローブそのものも強力な防御魔法が掛けられているのが判った。

「これは？」

「私達、二代目・紅き翼の証・・・このローブを纏った者は二代目・紅き翼だという事になる」

翼の刺繍に使っている糸は宝石を魔法で繊維状にした物を使っている。更に刺繍を入れる際にはアリスの魔力が込められているので、偽者と本物の区別はしやすい。

「ふん、良い生地を使っているな」

「後でチャチャゼロ用のも作って持ってくるよ」

「頼ムゼ」

改めて、二代目・紅き翼のメンバーがエヴァの前に並び、己が魔法発動体を持ってエヴァを歓迎する。

「タカミチと月詠、アル、ラカンが居ないけど・・・これが私達、二代目・紅き翼のメンバーだ」
“宝石姫”こと、シルヴィア・オーギスです」
“癒しの巫女”こと、近衛木乃香やえ」
“水の支配者”こと、大河内アキラだよ」
“死者の主”こと、相坂さよです」
「そしてリーダーの私、“黄昏の王”アリス・スプリングフィールドだ」

そしてここに、新たなメンバーが入る。

“闇の福音”エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」
“福音の従者”絡操茶々丸です」
“殺人人形（キリングドール）”チャチャゼロ、ダ」

この場にいるチャチャゼロ以外の全員が、同じローブを身に纏っている。新たなメンバーを加えた二代目・紅き翼は、これから大きく動き出すのだ。

夏休みの前日、アリスは麻帆良大学にあるという超のラボに来ていた。今は葉加瀬が受け継いでいる為、機材などはそのままになっているので、超が言っていたアリスへの報酬の話をしたら葉加瀬は案内してくれた。

「これです」

葉加瀬に連れられて来たのはカードキーが無ければ入る事の出来ない扉の奥、その中に入って明かりを点けると、ソレはあった。

「これは・・・茶々丸？」

「正確には茶々丸の技術を応用して、更に超さんが未来の技術力の全てを使って作り上げ、魔法と科学の融合の果てに生まれた究極のガイノイドです」

メンテナンスベッドの上で眠る彼女の顔は確かに茶々丸に似ている気がしないでもない。だが、よく見れば確かに顔つきは殆ど違うし、茶々丸とは違って間接や、その他色々な所が人間とまったく変わらない作りになっている。

イヤーカバーも小型化され、随分とコンパクトになっているので、一見、人間と大差無い様にも思えたが、彼女が人間ではないと思わせるのは、背中にある一対の薄桃色掛かった翼だろう。

「背中の翼はブースター及び推進装置、反重力場発生装置を兼ねている優れもので、飛行スピードは最速でマッハ１０は出せる計算となっています」

他にも茶々丸よりも高性能になっている所が多く、瞬動、虚空瞬動も可能になっているという事だ。

「茶々丸にも、今度この子に使っている人口皮膚や人口筋肉を使ったバージョンアップもする予定でして、何日かはこの子のデータ収集に協力して頂けると嬉しいんですけど」

「それは構わないけど・・・・・・この子が、私への報酬？」

「はい、超さんが、この子はアリス先生の役に立つ存在、未来での

重要なファクターを占めているとの事です」
「そう・・・・・・」

ベッドの上に眠る彼女の額に手を置く、触り心地は本当に人間みたいで驚いた。

「あ、そのまま・・・この子は茶々丸とは違ってゼンマイで魔力供給をする仕様にはなっていないんです。目覚めさせるにはアリス先生の魔力をそのまま額か、若しくは胸に直接触って送ってください」

流石に胸には触れないので、額に手を置いたまま言われた通り魔力を送った。するとベッドに備え付けられていたメーターのゲージが０からＭＡＸになり、コンピュータの起動音が響いてくる。

「魔力識別開始・・・主、アリス・スプリングフィールド様の魔力と確認・・・・・魔力充電完了、ＴＨ－０４α起動します」

目を開けた彼女はゆっくりと起き上がる。腰まであるだろう長い桃色の髪が流れる様に動き、裸のままシーツを掛けた格好のまま、アリスの前に立った。

「おはようございますハカセ、初めましてマスター・・・ＴＨ－０４αと申します」
「おはようアルファ、調子は如何？」
「各部異常はありません」
「おい葉加瀬、せめて何か着させてやれ」

何故か麻帆良学園女子中等部の制服を来て、髪を二つに分けて後ろに垂らし、髪自体は赤いリボンで結んだアルファ、そのままアリスに向かって頭を下げた。

「改めまして、初めまして・・・・・・マスター」
「あ、ああ・・・・・・よろしく、アルファ？」
「アルファは仮名です・・・よろしければ新しいお名前をいただけると…その……」
「そ、そう・・・・・・なら、ペルシクムっていうのは如何かな？　ラテン語で桃っていう意味なんだけど」
「ペルシクム・・・・・・了解しました。名称設定、機体番号ＴＨ－０４α、名称ペルシクムを再設定します」

アルファ改めペルシクム、アリスが彼女の髪と翼の色から付けた名だが、本人は気に入った？　様子。

「早速なんですけどアリス先生、アルファ・・・・・・ペルシクムとドール契約を結んでもらえますか？」
「ドール契約って言っても・・・私は人形遣いじゃないから、やり方は知らないんだけど・・・・・・」
「それでしたら以前、エヴァンジェリンさんが茶々丸と行った時のデータがありますから、それを見ながら」
「・・・わかった」

渡されたペルシクムの仕様書と共に、ドール契約のデータに目を通す。幸い難しい事は無かったので、今すぐにでも可能だ。

「・・・で？　この擬似血液として水銀を使っているってのは・・・・・・」
「水銀は魔力を通しやすい物質ですから、これを胸にある擬似心臓を中心に全身へポンプみたいに供給する事で魔力が全身隅々まで行き渡らせやすくしてあるんです」

そんな所まで人間みたいに作っているのかと感心すれば良いのか、水銀を使っている事に恐怖すれば良いのか、判断に迷う所だ。

「傷を負ったら大惨事だな」

「ですので人工皮膚は破れにくい素材を使ってます」

怖々しながらドール契約の準備を整えたアリスはペルシクムとドール契約を行う。

無事契約を終えたアリスは仕様書を影の中に仕舞い、研究室を後にしようとしたのだが・・・・・・。

「あ、アリス先生、一つだけ」

「ん？」

「この子の武装、大量にあって・・・・・・明日にでもアリス先生の部屋に送っておきます。影の中にでも入れておいて下さい」

「了解」

今度こそペルシクムを連れてラボを後にしたアリスは、ペルシクムに学園内を案内する事にした。

「ペルシクム、これが外の世界だ」

「・・・・・・データにはあります。ですが・・・自分の目で見るというのは、データで見るよりずっと良いものですね」

「だろう？　でも、これから私はこんな平和とはかけ離れた世界に行く・・・付いて来るのか？」

「はい…マスター……マスターは、私が、お守りします」

まるでシルヴィアみたいな事を言う。仕様書には人格データにはシルヴィアのデータを使っているので、性格も似ているのだと書いてあった。

「ならば着いて来い・・・お前に、私の夢の行く末を見せてやる」
「はい……」
この日、初めて起動したペルシクムは、最初の笑顔を見せるのだった。

五十八話　「新たな仲間？　翼の生えた究極ガイノイド」（後書き）

新キャラ：ＴＨ－０４α・ペルシクム

超が茶々丸の技術を応用し、更には未来から持って来た科学技術の全てを注ぎ込んで作り上げた究極のガイノイド。
設計上、茶々丸のスペックを大幅に超えていて、並の魔法使いでは勝つ事は不可能というデータが出ている。

イメージはそらのおとしもののイカロス

五十九話　「夏休み始まる」（前書き）

短い上に作者自身、何を書いたのか理解してないというオチ……ｏｒｔ

五十九話　「夏休み始まる」

英雄と女王の子

五十九話

「夏休み始まる」

ペルシクムが起動し、従者達に紹介した時、従者達は大層驚いていたが、超からの報酬が彼女だと説明すると、その科学力に感心すると同時に、新たな仲間として歓迎してくれた。

「あの、マスター・・・・・・・」

「どうした？」

「いえ、その・・・・・・私は、この家で何をすれば・・・」

「ああ・・・・・・とりあえず家事全般を任せても良いかな？」

「かしこまりました」

幸い、茶々丸から料理などの家事全般のデータはインストールされているので問題無い。ペルシクムはエヴァの家から貰ってきたメイド服に着替えて夕飯作りを始めたペルシクムの手際は中々だった。

「さて、明日から夏休みか・・・・・・」

テストも終わった。通知表はネギが作った。アリスがやる事は何も無い。

「明日から集中的に修行を開始して・・・・・・・８月には魔法世界に行く」

確かエヴァが別荘の増築をしたと言っていた。その中にはアリス達、二代目・紅き翼専用の場所も用意してあるとか。

「何にしても・・・明日からだな」

夏休みに入り、アリス達は本格的に修行を開始した。

アリスは神鳴流と王家の魔力を集中的に、アルの所にも通って重力魔法の習得を。シルヴィアは宝石関係を更に磨き、木乃香、アキラ、さよは兎に角、実力を高める為に　エヴァに揉まれていた。

ペルシクムも自身の武装のチェックと試運転をしており、いつでも戦える準備を整えていた。

「アリス、散歩に付き合え」

そんな修行漬けの日々のとある日、アリスはエヴァに誘われて散歩に行く事になった。王家の魔力に行き詰っていたので、丁度良い気分転換になるだろうと誘いに乗ったのだが・・・・・。

「そう言えばアリス、ボーヤが別荘内で随分と頑張っているみたいだぞ？」

「へえ・・・まあ、魔法世界に行くって言ってるんだし、頑張らなければ愚かとしか言えないんだけど・・・・・・ん？」

「どうした？　・・・・・・ああ」

早速後悔した。向こうから走って来るのは明日菜、早乙女ハルナ、長瀬楓、古菲の四人。何やら厄介事を持って来そうな予感がする。

「何？　ネギま部（仮）？　・・・何だそのヌケた名前は」

「焼き鳥でも食べる部活？」

そんな部活動があるなら是非入ってみたいものだ。

「ネギのお父さんの大魔法使いナギさんを捜すためのクラブよ！決して焼き鳥食べる為の部活じゃないわ！！」

「意義アリ！　ネーミングに納得いかないわ！」

「焼き鳥食べたいアル！」

要するに、部活立ち上げて麻帆良ならではの多額の部費を予算としてせしめてウェールズに行こうという魂胆らしい。

顧問としてネギ、部長には明日菜が着いて、アリスには副顧問、エヴァには名誉顧問をして欲しいのだとか。

「悪いけど、私は忙しいから・・・そんなくだらない事に付き合ってる暇は無い」

「なっ！？　くだらない！？　くだらないって何よ！！　ナギさんはアリス先生のお父さんでもあるんでしょ！？　なら捜すのに協力くらいしてくれても良いじゃない！！」

「私は私で、やる事がある・・・・・お前達に頼らずとも父さんと母さんを捜す手筈は整えてある。二代目・紅き翼を舐めるな」

そもそも、アリスには従者達全員が揃ってウェールズに行っても問題ない位の資産がある。寧ろ、その程度の金は端金だと言える程の資産だ。

「それに私達は魔法世界に遊びに行くわけじゃない。二代目・紅き翼としての仕事で行くんだ」

「なら、私たちも二代目・紅き翼に入れてよ！　それなら！」

「却下」

「だから何で！？」

「資格が無い。お前たち程度の実力では入る資格は皆無だ」

最低でも準最強クラス以上の実力でなければ、二代目・紅き翼に入る資格は無い。

「エヴァは如何する？」

「ん？　まあ、なってやっても構わん。その代わり、条件だ」

「条件？」

「私達、二代目・紅き翼の邪魔だけはするなよ？」

「・・・って、エヴァちゃん入ったの！？」

「当たり前だ。私は最強の魔法使いだぞ？」

関係ない気もするが、エヴァの実力は確かに二代目・紅き翼に入る条件を満たしている。というより充分すぎる程だ。

「まあ、これは些細な問題だな。それで？　貴様らの目的は私の別荘・・・だな」

「そうなのよ！　出来ればエヴァちゃんの別荘を部室に使えればと思って」

「別に構わんが・・・ぼーやも今、別荘にいるからな・・・・・・但し、立ち入り禁止区域には入るなよ？」

「へ？」

アリスとエヴァは明日菜たちを連れてダイオラマ魔法球の所に来た。そこにあったのは元からあるビーチの魔法球の他に、城が中に入った魔法球を中心とした砂漠、山岳、ジャングル、雪山を含む南極の四つが繋がった巨大な魔法球だった。

「わー・・・何コレ、どうしたの？」

「ぼーやの修行用と、アリス達の修行用にな・・・そのジャングルエリアは立ち入り禁止区域になっている。特別なパスを持った人間しか行けない仕組みになっているから問題無いが、一応言っておく」

中に入ると、そこは中央に位置するレーベンスシュルト城のある熱帯ジャングルエリアだった。

「ようこそレーベンスシュルト城へ。四方の転移用魔法陣から修行場へ移動できます。但し、ジャングルエリアへの魔法陣は二代目・紅き翼専用エリアとなっております。特別なパスを持っていないと転移できません」

茶々丸のご丁寧な説明もそこそこに、明日菜たちは今までとは違う別荘に、はしゃいでいた。

アリスは早速ジャングルエリアへ向かう為にいつも使っているローブから二代目・紅き翼のローブに換えて魔法陣の上に立った。

「それじゃエヴァ、茶々丸、私は先に行ってるから・・・一段落したらこっちに来いよ」

「ああ、ガキ共を案内して少ししたら行くさ」

フッ・・・と笑みを浮かべてアリスはジャングルエリアに転移した。

ジャングルエリアでは既に来ていた従者達が修行をしているらしく、所々で戦闘の音が聞こえてくる。

「これは・・・珍しい、木乃香ちゃんとシルヴィア、アキラとチャチャゼロが戦ってるのか」

いつもは木乃香とアキラが戦い、その間はシルヴィアは宝石の調

整、チャチャゼロは武器を磨いているのだが・・・・・・。

「まあ、良い経験になるから・・・いいか」

アリスは早速“姫”を取り出して両目をオッドアイに変える。

「武器に王家の魔力を纏わせる事は出来る様になった・・・身体にも、一部だけなら魔法無効化状態に出来るだけ上達している」

だが、まだ足りない。アリスは背後に降りてきたペルシクムの方に振り返り、微笑みかけた。

「マスター・・・いらしてたんですね」

「ああ、丁度良い・・・・・ペルシクム、お前の武器に魔法の射手を発射できる物があったよな？」

「はい・・・ルナティークですね」

「悪いが王家の魔力の修行に、付き合ってもらうよ」

「了解しました」

ペルシクムの翠色の瞳が深紅に染まり、背中の翼を広げる。その翼の先端、羽の一本一本から属性の違う魔法の射手が発射された。超特性、半永久追尾式内蔵型魔法の射手“ルナティーク”だ。

「ぬん！」

アリスは“姫”に王家の魔力を纏わせて魔法の射手に一閃、それだけで魔法の射手は掻き消されてしまう。

「よし、この調子でドンドン行くぞ！」

「はい、マスター・・・」

今頃エヴァは未だ魔法の世界に対して夢を見ている愚か者達、そしてその世界に足を踏み入れる覚悟と言う名の戯言をほざいた明日菜に現実を見せている事だろう。

アリスはそんな事を考えながら、只管王家の魔力をコントロールする修行に励み、出会って間が浅いペルシクムとの交流を楽しむのであった。

五十九話　「夏休み始まる」（後書き）

次回は、アリスの従者とネギの従者の認識の差が出る予定です。
……上手く書けるかなぁ？

二代目・紅き翼メンバー表（前書き）

本編の続きが行き詰ってしまったので、気分転換に載せます。

二代目・紅き翼メンバー表

二代目・紅き翼メンバー

リーダー

名前：アリス・スプリングフィールド

年齢：１７歳

二つ名：黄昏の王

属性：闇、雷、火

クラス：最強クラス上位

メンバー

名前：ジャック・ラカン

年齢：？

二つ名：千の刃

属性：魔法使いではないので無し

クラス：最強クラス最上位

名前：シルヴィア・オーギス

年齢：２１歳

二つ名：最強を補佐する最強の補佐、宝石姫

属性：氷、光、風

クラス：最強クラス中位

名前：近衛木乃香

年齢：１４歳

二つ名：癒しの巫女

属性：癒し、風、光、火

クラス：最強クラス下位

名前：大河内アキラ

年齢：１５歳

二つ名：水の女神

属性：水、氷

クラス：最強クラス下位

名前：相坂さよ

年齢：偽造した戸籍上は１５歳（生前から数えると７５歳くらい）

二つ名：死者の主

属性：闇、死（死霊術師の属性は死）

クラス：最強クラス下位

名前：月詠

年齢：１３歳

二つ名：二代目・サムライマスター（予定）

属性：魔法使いではないので無し

クラス：最強クラス中位

名前：高畑・T・タカミチ

年齢：戸籍上は３０歳

二つ名：神速の拳

属性：魔法が使えないので無し

クラス：最強クラス上位

アルビレオ・イマ

年齢：？

二つ名：重力使い

属性：地

クラス：最強クラス最上位

名前：ペルシクム・スプリングフィールド

年齢：０歳

二つ名：空の女王

属性：ガイノイドなので無し

クラス：最低でも最強クラスの下位は確実に、実際は中位～上位ほど

名前：エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル

年齢：６００歳以上

二つ名：闇の福音

属性：闇、氷

クラス：最強クラス最上位

名前：絡操茶々丸

年齢：２歳

二つ名：福音の従者

属性：ガイノイドなので無し

クラス：準最強クラス（エヴァの封印が解けたため）

名前：チャチャゼロ

年齢：６００歳以上

二つ名：殺人人形

属性：人形なので無し

クラス：最強クラス上位（エヴァの封印が解けたため）

二代目・紅き翼メンバー表（後書き）

これは次回の六十話時点での段階です。
いくつかオリジナル設定も加わってますが、ご容赦ください。

六十話　「無意味の模擬戦、認識と覚悟の差」（前書き）

なんだか、書きたいと思っていた内容にならなかった気がする……。

六十話　「無意味の模擬戦、認識と覚悟の差」

英雄と女王の子

六十話

「無意味の模擬戦、認識と覚悟の差」

修行も随分と進んだある日、エヴァの提案でアリスの従者とネギの従者だけで模擬戦をする事になった。

アリスとしては無意味且つ無価値な模擬戦だと思ったのだが、ネギの従者たち・・・・・特に戦闘系の従者がやる気満々なため、少し揉んでやった方が良い様な気がしたので、渋々了承した。

「それでは、アリスの従者、近衛木乃香、大河内アキラ、相坂さよ、ペルシクム。ぼーやの従者、神楽坂明日菜、桜咲刹那、長瀬楓、古菲の模擬戦を始める」

レーベンスシュルト城のある亜熱帯ジャングルゾーンにある広場で向かい合うアリスとネギの従者達、少し離れた所にはアリス、シルヴィア、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ、ネギ、夕映、のどか、ハルナ、和美、千雨、小太郎が観戦している。

「始め！」

エヴァの合図で最初に動いたのは刹那と古菲だった。刹那はさよに、古菲はアキラに向かって夕凪と拳を構えて瞬動に入り、続いて明日菜と楓が木乃香とペルシクムに向かって大剣になったハマノツルギと大型十字手裏剣を構え、瞬動に入った。

「甘いです！」

さよの意識を刈り取ろうと峰打ちで首筋を狙った刹那の一閃はさよのアーティファクト、草薙の剣によって弾かれ、悪寒を感じた刹那は一度離脱する。すると刹那が今まで居た所に怨霊の矢が数十本飛来し、地面にぶつかる前に方向転換して刹那に向かってきた。

「追尾式か！」

だが、神鳴流には飛び道具は効かない。全ての矢を叩き落すつもりで夕凪を振るったのだが、それが普通の魔法の矢なら良かった。しかし、さよが使ったのは怨霊の矢、叩き落した矢から怨霊の怨みや呪詛の声と共に、霊魂が刹那を取り囲んできた。

「くっ・・・だが、神鳴流は退魔の剣、この程度の怨霊など全て退けてくれる！！　斬魔剣！」

斬魔剣が怨霊を切り裂き、刹那は瞬動でさよに再び近づこうとしたのだが・・・・・・、既にさよが刹那の背後に立っていた。

「っ！　気配が・・・」

「奇遇ですねぇ、私の草薙の剣も、破邪と破魔の剣なんですよ～」

穏やかな笑み、その筈なのだが何故か、背筋にゾクリと悪寒が奔った。

「斬魔一閃」

さよが草薙の剣を一閃させる。放たれた斬撃が刹那の背中を切り裂くが、その痛みだけではなく、“桜咲刹那”という存在の根幹・・

・魂をも切り裂いたかのような痛みを感じた。

「ぐぅっあああああ！！！」

「刹那さん、烏族とのハーフなんですよね？　つまり、半分は妖怪の血を引いている・・・・・斬魔一閃の効果はちゃんと効く筈ですよ～」

刹那の神鳴流はさよの死霊術の天敵になり、さよの草薙の剣は刹那の天敵になる。天敵同士の戦いは、若干、長引きそうだ。

アキラと古菲の戦いも白熱していた。古菲の打撃はアキラの水の壁で防がれ、アキラの水の太刀からの斬撃や周囲からの水の刃の嵐は小柄な古菲が尽くを容易く回避してしまう。

「素早いね・・・・・・でも」

アキラが水の太刀を握っていない左手を開いたまま眼前に翳し、一気に握り締める。すると古菲の周囲３６０度全てと、頭上一杯に激流が押し寄せてきて、回避不能の水の檻を作り出した。

「水檻縮爆」

全周囲から押し寄せてきた水流に古菲は回避する事も出来ず飲み込まれてしまった。高圧の水の中、息も出来ない檻に囚われ、息苦しさと内蔵が潰れそうになる苦痛でもがき苦しむ。

「どうする？　降参・・・する？」

このまま降参しないのなら意識を失った時点で水の檻を解くが、降参ならそれで開放するが・・・・・。

「グボッ！　ガボッ！！」

だが、古菲の闘志はまだ死んでいない。全身に気を巡らせ、水圧で重くなった腕を強引に振り上げて気そのものを大爆発させた。以前、まほら武道会でアリスが使ったラカン・インパクトを見てから密かに習得したらしい。

「驚いた・・・気を爆発させて水の檻を内側から破壊するなんて」

しかし、そうでなければ面白くないのも事実。本来、争いが嫌いなアキラだが、アリスとの修行を続けて来た結果、争い嫌いは無くなっていないまでも、戦う時は戦う相手に敬意を持ち、お互いに楽しむ事を覚えた。特に、こういう試合においては尚更だ。

「アキラ・・・強いアル！　ワタシはこんな強い相手を求めてたアルよ」

「そう、良かった・・・じゃあ、まだまだ行くよ？」

「望む所アル！」

さよと刹那同様、こちらも長引きそうな勢いだった。

明日菜と木乃香の戦いは随分と質素だった。木乃香が炎の矢と光の矢を多重詠唱で放ち、それが咸卦法を身に纏った明日菜に着弾する前に掻き消され、明日菜の大振りな斬撃は木乃香には当たらない。

「アスナー、何や大振りし過ぎとちゃうの？　避け易いやん」

「アンタこそ！　あたしに魔法なんて効かないの知ってるでしょ？」

「あ～、すまんなぁ、アレお遊びや」

「はあ？」

木乃香も王家の魔力についてはアリスから聞いて熟知している。そして後衛の魔法使いタイプである木乃香にとって最悪の相性である事も・・・・・・。故に、木乃香は対策を考えていた。相手が魔法無効化能力者だった場合の対策、木乃香一人で対峙した時の戦い方をずっと考えてきた。

「悪いけど・・・・・・ちょうとだけ、本気出させてもらうえ」

アリスに貰ったオリハルコン製の扇を広げ、指輪に魔力を通す。

「リム・リル・リック・リプシオール！　契約に従い　我に従え
光の女王　来たれ　闇を照らす　英知の輝き　原始の世に生まれし
人の奇跡　」

木乃香の詠唱を聞いて明日菜が瞬動に入って詠唱妨害をしようとするが、甘い。木乃香は浮遊魔法を使って明日菜の真上を取り、更に高度を取った。

魔法が使えない明日菜に、空へ上がる術は無い。ならば地上から木乃香の魔法を掻き消す為にハマノツルギを構えた。

「常世の輝き！！」
「無極而太極斬！！」

木乃香の常世の輝きは明日菜が放った無極而太極斬によって消滅してしまったが、明日菜がそこで喜んでしまったのが運の尽き。木乃香は既に明日菜の背後に立っていた。

「しまっ！？」
「油断大敵や、堪忍な？　せいっ！！」

オリハルコンの扇が明日菜の首筋に叩き込まれた。その一撃で明日菜は意識を刈り取られ、この瞬間、木乃香の勝利が決定するのだった。

「ほんなら、他のみんなを手伝いに行こうか」

一人でも片付いたなら一対一で戦う必要など無い。卑怯と罵る者は唯の愚か者か、弱者だ。

「でもその前に・・・アスナを運んどこ。あ、でも・・・もう皆も終わるなぁ」

一番激しい戦闘をしているのは、楓とペルシクムだった。ペルシクム上空からルナティークを発射して、楓は回避するも、半永久に追尾してくる矢を回避し続けなければならず、気を使って何発か叩き落しているが、如何せん数が多すぎた。

「忍者相手に近接戦は危険と判断・・・・・超長距離砲弓“シリウス”起動」

ペルシクムが半身を前に構え、左手を前に掲げると、その手から黒い炎に包まれた弓が現れた。

「術式選択・・・タイプA、術式“雷”をダウンロード、雷の投擲・・・シリウスにインストール」

弓に添えた右手に術式の光が走り、雷の投擲が弓に番えられる。未だにルナティークの追尾を受けて回避に精一杯、だが、弓に雷の

投擲を番えたペルシクムの姿を見たとき、その表情は焦りから驚愕に彩られた。

「シリウス、術式“雷の投擲”発射！」

放たれた雷の投擲、楓に迫る途中で形状が矢に変わり、更に6本の矢に増える。その分、矢自体が短くなったが、一発一発の威力は劣らずに加速した。

「ニン！」

迫り来るルナティークの矢とシリウスの矢をかわす為、楓は分身の術で分身し、分身全てに矢が命中、楓本体は無事だった。

「分身・・・・・・では改めて、ルナティーク発射！」

今度は先ほどの倍以上の矢が翼から放たれ、更にシリウスを構えた。

「その素早さ、奪わせてもらいます・・・術式選択、タイプE・・・術式、こおる大地をダウンロード」

冷気を纏った氷の矢がシリウスに番えられ、楓・・・・・・・・ではなく楓が立っている地面を狙う。

「こおる大地・・・シリウスにインストール・・・・・・・・シリウス、術式“こおる大地”発射！」

放たれた氷の矢、それは真っ直ぐ地面へと進み、楓の方向へ転換する事もなく地面に突き刺さった。

すると、矢が刺さった箇所を中心に地面が凍り始め、今までルナティークを避け、時には影分身で消していた楓だったが、足元が凍りだしたので一端飛び上がったのだが・・・・・・。

「逃がしません」

地面が凍り、更に氷が楓を追って来た。慌てて虚空瞬動に入った楓だったが、それはペルシクムの思うツボだ。既に楓を補足しているペルシクムはシリウスを消し、右手に光の粒子が集まって出来た剣・・・“アストレイア”を構えて楓に向かって虚空瞬動に入った。

「終わりです」

「む、う・・・・・・参ったでござる」

翼の加速も加わった虚空瞬動は縮地のスピードを超えていた。楓は逃げ切れずに捕まり、首筋にアストレイアを添えられた為、降参する事にした。

さよと刹那の戦いはまだ続く、夕凪と草薙の剣が交差し、気と怨霊がぶつかっては弾けて周囲に小規模のクレーターを作る。

「くそっ！　（このままでは埒が空かない！　こうなれば・・・・・・）神鳴流奥義！！　雷光剣！！」

刹那が放った雷光剣の雷がさよの頭上に落ちる。だが・・・さよはこれを待っていたのだ。

「待ってましたよ！　吸収！！」

雷はさよに落ちた。だが、それはさよの頭上ではなく、さよの左手に装着されている鏡・・・・八咫鏡に吸収され、さよに決定的な一撃を許してしまう事になる。

「そ、そんな!?」

「いきますよ～、鏡反術式、弐の型・・・怨霊呪弾!!」

放たれた怨霊の込められし弾丸。神鳴流には飛び道具は効かない。その為、切るか避けるかする事は出来る。しかし、切れば込められた怨霊が襲い掛かってくるだろうし、避けるにしても数が多すぎる。

「あ、因みに～・・・避けても意味は無いですよ？　だって・・・・・聞こえませんか？　亡者の呪詛の声が」

迫り来る弾丸から、この世の全てを呪わんとばかりの怨叉の声、呪詛の声が聞こえてくる。しかも、その声を聞いているだけで刹那の意識は気を抜けば闇に沈む。だが、遂に弾丸は刹那の周囲に落ちた。

「外した？」

「いいえ？　だって・・・これは中てる為の技じゃありませんから」

怨霊呪弾、その真の効果は対象の周囲に着弾させ、怨霊の結界を作る事だ。

「怨呼瘴縛壁!!」

刹那の周囲に着弾した弾丸から怨霊が溢れ出て、刹那を怨霊の群れが取り囲んだ。

「更に！　草薙の剣のもう一つの力！」

冥界の門を開く鍵でありながら破魔と破邪の剣という矛盾の剣、そのもう一つの力は霊・・・・・生霊だろうが怨霊だろうが、霊に分類されるモノ全てを操るのに特化した剣である。

「奏でよ・・・・・死霊の宴」

さよが舞うのは唯の剣舞、しかし・・・草薙の剣を振る度に空気を切り裂く音が嫌に耳に響いた。

「御出でなさい・・・・・冥界の門、開け」

さよの後ろに現れた冥界の門、その扉が開かれ、草薙の剣の放つ空気を切り裂く音に釣られて大量の霊が湧き出してきた。

「この草薙の剣が放つ空気を切り裂く音には・・・特殊な音波が込められてまして、まあ、霊を誘き寄せる・・・霊の大好きな音、とでも言うのでしょうか？」

最悪だった。斬魔剣を使っても怨霊の障壁は一瞬だけ切り裂かれるだけで、直ぐに穴は塞がってしまう。

「どうします？　これだけの怨霊がいたら・・・・・草薙の剣、最強の奥義を放てますけど」

その場合、刹那さんは暫く昏睡状態ですけどね。と笑うさよが余りに恐ろしく、遂に刹那は降参するのだった。

アキラと古菲の戦いは、そろそろ終わろうとしていた。

アキラは水の太刀を持ち、息一つ乱れず悠然と立っているのに対して、古菲はボロボロで、立っているのもやっとと言うぐらい疲弊している。

「水に衝撃は通りにくいよ・・・・・・音でもない限り、水は打撃を吸収してしまう。クーフェイ、負けを・・・認めて欲しい」
「ま、まだまだこれからネ。やっと面白くなってきた所アルよ」

満身創痍の身体で瞬動に入ったが、その動き、入り、全てが試合開始時よりも落ちている。抜きもアキラに目で追われているので完全に捉えられ、水の太刀を腹部に叩き込まれてしまった。

「グフッ！　・・・・・・アイヤー、きついアル」

今の一撃で立つ力も無くなったのだろう、座り込んだまま、それでも拳を構える古菲は、正に武人だった。

「ごめん、私から負けを認めて欲しいって言ったのは侮辱になるね・・・・・・だから」
「あっ！」
「もう、眠って」

古菲の全身を水に包み、水を振動させる事で擬似的な超音波振動を作り出した。古菲は最後にアキラに対して最大の敬意を払い、そのまま意識が反転するのだった。

「・・・ふぅ」

意識を失った古菲をアリス達の所に連れて行くと、木乃香たち他のメンバーも集まっていた。どうやら皆終わったらしい。

「ふん、思ったとおりアリスの従者が勝ったか。どうだ？　ぼーや、それにガキ共、貴様らがこれから行こうとしている世界はこれに近い人間が時々出てくる世界だ。絶対に出てこないなんて事は有り得ん。自分達の実力不足がよく判っただろう？」

気を失っていた者たちが目を覚まし、休む間もなくエヴァの説教が始まった。

「で、でもあたし達はアリス先生に鍛えてもらってないし・・・・・・」

「まあ、確かにそうだろうがな・・・・・だがな、甘えるなよ小娘。こいつらはアリスに鍛えられたからという理由だけで強くなったのではない！」

それは、認識の違い。明日菜たちはまだ、何処か魔法の世界を甘く見ている所がある。ネギの過去を見ても、死者が出ていた訳ではないので、死ぬ事があると本気で信じていないのだ。

だが、木乃香たちはアリスの記憶から、アリスが辿ってきた戦場の記憶を見ている。弱者は死ぬ、弱肉強食の世界を見せられ、自分たちが弱いままこの世界に関われば、アリスの記憶にあった戦場という名の地獄に転がる死体の仲間入りをすると理解したのだ。

死にたくないから強くなった。アリスの役に立ちたいという想いと同時に、死に対する恐怖を持って鍛えてきたのだ。

「貴様らも、死にたくないなら強くなれ・・・・・・魔法世界は、弱ければ死ぬ世界だ」

「で、でも・・・あたし達、別に戦いに行く訳じゃ・・・・・・確かに危ない事もあるだろうから修行してるけど・・・別に死ぬほどの危険なんて」

「魔法世界の事を知らんガキの戯言だ！　（もっとも、こいつは忘れている・・・の、間違いなのだろうが）」

エヴァの言葉に、戦いというものを知る楓と古菲は表情を硬くした。今のままではダメだと、悟ったのだ。

刹那も、守ると決めている木乃香が自分より強いという事に焦りが見えてきた。今のままではダメだ。木乃香より強くなって、木乃香を守れる様にならないといけない、と・・・・・・。

「あ、あの師匠（マスター）・・・・・僕達は首都のグラゴニスに行くだけですし、あそこの治安はそんな悪いものじゃ・・・」

「黙ってろぼーや・・・正直な話を言わせて貰うなら、貴様とて実力不足なのだぞ？　この私が鍛えているというのに、何故そこまで楽観視していられる？　その甘えが貴様の成長を阻害している事にいい加減に気づけ愚か者！！」

エヴァに怒鳴られて涙目になるネギ、この辺は全然成長していない。怒られれば、嫌な事があれば直ぐに泣く。泣けば許されてた魔法学校時代とは違うのだと、エヴァに教えられていても、ずっと周りの大人に甘やかされてきたネギの根性は、エヴァでも治すのは至難だった。

「フン・・・アリス、本当は私とお前の模擬戦でもコイツ等に見せてやろうと思っていたが・・・興ざめだ。来い、シルヴィア達もだ・・・・・折角だから私が直々に貴様等を鍛えてやる」

「へえ・・・・・面白いね」

世界最強の魔法使いに鍛えられる。アリスにとって、そしてアリスと同じように更なるレベルアップを目指しているシルヴィア達にとって、それは願っても無い事だ。

「ガキ共、もう少し考えるのだな・・・・・・魔法世界に行くまでに、自分達に足りないモノを」

エヴァの捨て台詞は、少女達の心に響いた。何だかんだ言って、彼女たちに隠れた優しさを見せるエヴァは・・・・・・ツンデレだ。

「ネギ・・・強くなる事は簡単な事じゃない。だけど、お前も彼女達も、まだまだ強くなる余地は充分ある。我武者羅にやれとは言わない。でも、ここで修行している間に・・・今以上に強くなれ」

「兄さん・・・・・・」

アリスはネギの頭を一撫でしてから瞬動で歩き去ったエヴァを追った。

残されたネギは、久しぶりにアリスに撫でられた頭に触れ、そして改めて決意した。今も遠い父の背中と、同じくらい遠い兄の背中、いつか必ず追いつくと・・・・・・。

「何よエヴァちゃんったら・・・・・・アリス先生もだけど、いつも大袈裟な事ばっか言ってあたし達の事を脅かしてさ」

「アスナさん・・・・・・師匠(マスター)や兄さんの言っている事は、嘘じゃないと思います。特に兄さんは、昔から仕事に・・・戦場に行っていたって、ネカネお姉ちゃんに聞きましたから。死ぬ危険性の多い仕事ばかりして、ネカネお姉ちゃんは兄さんをいつも心配してました。大怪我して帰ってきた時なんか、兄さんが死ぬんじゃないかって、泣きながら治療してましたから」

「経験者は語るって事・・・・・・？」

「はい・・・」

明日菜は改めて、もう見えないアリスとエヴァの去っていった先

を見つめた。

「なら、強くなってやろうじゃない・・・・・・エヴァちゃんもアリス先生も吃驚するくらい、強く！　やるわよネギ！」

「ハイ！！」

この日以降、より一層修行に励むネギとネギパーティーが別荘内で見られる。それを良い傾向だとアリスは眺めながら、その瞳の奥には・・・・・・冷たい感情の光が宿っていた。

六十話　「無意味の模擬戦、認識と覚悟の差」（後書き）

次回は夏祭り！　アリスパーティーも少し休暇です。

六十一話　「夏祭り、一時の休息」（前書き）

アリスの意外な弱点が出てきます。

六十一話　「夏祭り、一時の休息」

英雄と女王の子

六十一話

「夏祭り、一時の休暇」

ネギま部（仮）は学園に正式に認可された。英国文化研究倶楽部という名前での正式な認可なので、一応は部費も出る。巨大学園なので、部費も普通の学校の部費とは比較にならないほど多額なので、部員全員がウェールズに行くのに充分すぎる程の余裕がある。

そして同時に、ネギのパーティーに正式な名前が付いた。ナギ達、初代・紅き翼。アリス達、二代目・紅き翼に綾かって白き翼という名前だ。

「アリス様・・・此方を」

「ん・・・・・ああ、詠春さんからの手紙か」

ネギたち白き翼が騒いでいるのを横目に、アリスはシルヴィアから手渡された手紙に目を通す。内容は月詠の事、詠春指導の下、月詠の実力は格段に上がり、青山宗家でしか教えていない弐の太刀も月詠が何故か元から使えたもの以外の全てを教え、現在は最終調整をしている所らしい。

「早ければ一週間もあれば帰ってくる、か・・・・・・出発はネギ達と重なりそうだな」

「はい。その事で学園長からアリス様に依頼が入っていますが・・・・・」

「却下。夏休みに入った以上、これからは私は麻帆良学園の教師で

はなく、二代目・紅き翼のリーダーとして活動する。余計な依頼は全て却下する」

どうせ、魔法世界でネギのサポートをして欲しいといった所だろう。だが、そんな無駄な時間はアリスには無い。向こうでは本格的に目的に向けて動かなければならないのだから。

「シルヴィア、タカミチに連絡しておいて・・・・・近い内、旧世界にいる二代目・紅き翼で会議をするって」

「かしこまりました」

シルヴィアが差し出した学園長からの依頼が書かれた紙を破り捨てたアリスは屋上から校舎に通じている扉に目を向けた。

扉の向こうには先ほどから感じていた二人の気配が無い。遠ざかっている・・・・・というか幼稚な隠密行動とやらで走り去っていったのを感じる。

「気付いていたか？」

「ん？　ああ・・・・・まあ、私には直接関係無い事だ」

エヴァが意味深な笑みを浮かべてアリスの横に立ったが、アリスは表情を変える事無く詠春からの手紙を読み返していた。

「ああそうだ・・・エヴァは如何する？」

「む？」

「魔法世界・・・・・行く？」

「ふむ・・・・・貴様のやる事を傍で見るのも一驚、か・・・ぼーやの今後の動向も気になるところだ」

ならエヴァも魔法世界行きが決まった。茶々丸とチャチャゼロも

同時に魔法世界行きが決まり、アリスは今後の予定を纏め上げるのだった。

アリスとシルヴィア、ペルシクムは管理人室に戻ってきていた。木乃香、アキラ、さよは今晩あるという夏祭りの用意をしてから来るとの事なので、今は三人だけしか居ない。

シルヴィアとペルシクムも夏祭りの為に浴衣に着替えると言って二人で衣装室に入っていったので、アリスはリビングで一人、紅茶片手にパソコンを弄っている。

「まほネット・・・あまり良い代物は無いか。殆どが私や木乃香ちゃんの魔力に耐えられる物じゃない」

アリスが暇つぶしに見ていたのは、まほネットの通販ページだ。魔法具の欄を見ていたのだが、大半がアリスの満足出来る物ではなかった。これなら自作した方が良い物を作れると思う位には。

「あの子の魔法具も凄かったな・・・・・・流石に私もあれだけの魔法具は作れない」

何を思い出したのかアリスは三つ編みの先にある赤いリボンを撫でながら、優しい笑みを浮かべた。

「良いリボンだ・・・・・魔法具としても、最高位の物だし・・・あの子のお蔭で先の戦いに希望が見えてきた」

次に思い浮かべたのは宿敵の無表情、フェイト・アーウェルンクスの顔だった。未だにアリスの上を行くであろう実力だが、勝算が無い訳ではない。

「全ては魔法世界で、だ・・・」

と、その時、衣装室の扉が開いて浴衣に着替えたシルヴィアとペルシクムが出てきた。

紺色の生地に花火の刺繍をあしらった浴衣を着たシルヴィアの長い髪は結い上げられており、普段は見れないうなじが色っぽい。

空色の生地にスイカの刺繍をあしらった浴衣のペルシクムは髪を結い上げていないが、儚げな雰囲気が浴衣とマッチしていて可愛らしく映る。

「・・・・・あ、あの、アリス様？　如何でしょうか？」

「・・・・・・マスター」

「え、あ、ああ・・・・・うん、よく似合ってる。綺麗だよ、二人とも」

二人揃って頬を赤らめて照れる姿も本当に可愛らしい。本当によく似合っている。

アリスは特に着替える気も無いので、いつもの様にスーツ姿でシルヴィアとペルシクムと共に少し時間を潰し、夜になって管理人室を出た。

夏祭り会場は随分と賑わっていた。まほら祭ほどの賑わいは無いものの、充分な人だかりが出来ている。

「結構来てる人多いな・・・」

「はぐれはしませんが、気をつけないとバラバラになってしまいますね」

三人揃ってバラバラにならない様歩きながら木乃香たちとの待ち合わせ場所に向かう。

待ち合わせ場所には既に木乃香、アキラ、さよが揃っており、三

人とも浴衣に身を包んでいた。木乃香とアキラは白い花柄の浴衣で、木乃香は頭の左右をリボンで結っていて、アキラは普段のポニーテールを下ろして艶のある長い黒髪のストレートだ。さよは紺色無地の浴衣で、シンプルだが、持ち前の昔の人間の雰囲気がマッチしてる。

「あ、アリスさんや～」
「でも、スーツ・・・・・・？」
「シルヴィアさんとペルシクムさん綺麗です～」

三人ともアリス達の所に駆けて来た。普段とはまた違う服装に笑顔、実際の年齢以上の魅力を感じるのは気の所為ではないのだろう。

「アリスさん、あかんえ～？　折角のお祭りやのに、何でスーツなん？」
「いや、浴衣持ってないし・・・スーツが一番落ち着く」

と言うより、アリスは戦闘服以外、スーツしか持ってない。私服など一着も無いし、買った事も無いのだ。

「アリス先生、ネギ先生達も来てるみたいだよ？」
「へえ・・・私たちと同じ息抜きかな？　見て周ってたら会うかもね」
「せっちゃんも来とるんやな～」

白き翼のメンバーは何だかんだ言って、騒がしい面子が揃っている。一際騒がしい所に行けば間違いなく誰かしら見つかるだろう。

「さて、日本の祭りは初めてだ。三人とも、案内を頼むよ」

アリスとシルヴィアは日本の祭りは初めて、ペルシクムはデータでは持っていても、生まれたてなのもあって来るのは初めての経験だ。

「ん～・・・・・うちのお勧めはわたあめやね。甘くて美味しいんよ」

「私は、カキ氷・・・今日は暑いから、丁度良いかも」

「私は～・・・・・やきそば、でしょうか？」

三人がお勧めする物を買い歩き、祭りならではの味を楽しむ。わたあめの甘さ、カキ氷の冷たさ、やきそばの香ばしさ、全てがまほら祭の時に食べた物と、何処か違うと感じてしまう。

更に射的や型抜き、輪投げや金魚掬い等のゲームも体験し、人生初の日本の祭りを存分に楽しんだアリスとシルヴィア、ペルシクムは大変満足、木乃香たちも楽しんでくれているみたいで、充実した時間と言えた。

「はや～、シルヴィアさん射的上手いなぁ」

「そうですか？　少し集中すれば、結構当たるものですが・・・・・」

「ペルシクムさんも型抜き、上手だ・・・綺麗に抜いたよね」

「いえ・・・」

アリスの前方を歩くシルヴィアとペルシクムは木乃香とアキラの褒め言葉に頬を染めて照れているのが見て取れる。シルヴィアは射的で取ったぬいぐるみを抱いているし、ペルシクムも型抜きの賞品で貰ったスイカのクッションを大事そうに抱えて、二人とも満更でも無さそうだ。

「アリス先生、どれも不器用でしたね～。以外でした、アリス先生

にも苦手なものがあったなんて」
「あ、あははは・・・・・いや、難しくてね」

アリスはシルヴィアやペルシクムとは違い、ゲーム全てが惨敗だった。
射的をすれば賞品ではなく、何故か店の親父さんを撃ってしまい、型抜きは開始1分で型が粉々になってしまった。随分と不器用な所を見られ、流石のアリスも恥かしそうだ。

「さよは凄いな・・・金魚すくいで店の親父さんが泣いて謝るほど取ってたし」

そう、さよは金魚すくいで次々と金魚をすくい、逆に店の商品である金魚が無くなりそうになった親父に泣き付かれてしまったのだ。

「生前から金魚すくいは得意でしたから」

結局、さよが持っている透明な袋に入っている金魚は2匹、さよがこれだけで良いと言ったときの親父さんの表情は、忘れないだろう。

「あ、アリスさん、そろそろ花火始まるえ」
「お、ジャパニーズ花火か、楽しみだね」

皆揃って見やすいだろう高台まで移動すると、丁度花火が始まる所だった。
夜空を照らしながら輝く色とりどりの花火、それを見上げながらアリス達は心中に様々な想いを持っていた。

「（父さん、母さん・・・・・今度は、一緒に見に来たいね）」

「（また、来年もアリス様と共に・・・・・・生きて）」
「（マスター達と、また来年も・・・・・・）」

そしてアリスに恋する三人の少女達も、同じ様に・・・花火を見ながら、横目でアリスの横顔を見つめていた。

「（いつか、必ず伝えるえ・・・・・・うちの気持ち）」
「（来年も、アリス先生と・・・皆と一緒に）」
「（新しい人生をくれたアリス先生、そして友達になってくださった皆さんと、来年も）」

それぞれの想いを胸に、こうして夏祭りは終わりを迎えた。
短くも、心に残る一日は過ぎ去り、また明日から修行の日々が始まる。だが、それは最後の調整も入るので更に過激になっていくだろう。
だが、この時はまだ知りもしなかった。イギリスからやって来る台風の存在に・・・・・・誰一人。

六十一話　「夏祭り、一時の休息」（後書き）

次回は、“彼女”がイギリスから来日！

六十二話　「修行じゃないの？　海へ旅行！！」（前書き）

遂にイギリスから彼女が来日です。

六十二話　「修行じゃないの？　海へ旅行！！」

英雄と女王の子

六十二話

「修行じゃないの？　海へ旅行！！」

ネギま部（仮）が魔法世界へ行く前の最後の合宿で海に行く事になった。同時にアリス達も誘われており、最初はアリスが難色を示していたが、木乃香たちが行きたいと言うので、渋々了承、エヴァと茶々丸、チャチャゼロは留守番をし、アリスとその従者達が揃って海へ行く事になったのだ。

「騒がしい・・・・・」

アリスが先を走りながら大声で騒ぐネギを眺めながら、炎天下の熱にイライラしている。修行の時間を減らされたのもあって、随分と不機嫌なご様子。

「シルヴィア、私がここに居る意味・・・ある？」

「一応、引率者は私ですが・・・・・アリス様は副担任として、同じく引率者になるかと」

「あそこで騒いでるのも引率者になるんだけど？」

指差した先には相変わらず騒いでるネギ。今、明日菜も加わって騒がしさも倍増だ。

「私は海に着いたら寝るぞ」

「・・・・・アリス様の御心のままに」

流石に言葉が出てこなかったのか、シルヴィアは視線を逸らした。
シルヴィアも少しは思っていたのだろう、騒がしい、と・・・・・・。

海に着いて早速ネギや小太郎、中学生組みは全員水着に着替えて海に飛び込んだ。それを眺めながらアリスは水着と、上半身パーカーを着てパラソルの下で寝ていた。・・・不貞寝とも言う。
シルヴィアは黒いビキニの水着を着てアリスの隣でオイルを塗っていて、ペルシクムはピンクのセパレートビキニを着てシルヴィアのオイル塗りを手伝っていた。

「マスターは泳がないのでしょうか？」
「アリス様、何だかんだ言ってお疲れですから・・・・・・此処の所、修行漬けの毎日で休んでる所なんて見たことありませんし。休ませて差し上げましょう」
「・・・はい」

アリスは夏休みに入ってからずっと、月曜は王家の魔力のコントロール、火曜は戦闘訓練、水曜は神鳴流の修行、木は王家の魔法の修行、金曜と土曜はアルの所で重力魔法の修行、日曜はエヴァと全力での戦闘、と・・・それを毎日、一日中やっているので、休んでいる日、時間が一切無かったのだ。

「一応、アリス様の周りには防音結界を張っておきましたから・・・ゆっくり休める筈です」
「・・・わかりました」

アリスを見れば、完全に熟睡しているので、そのまま寝かせておく事にした。

夢、夢を見ていた・・・・・・。幼き頃のアリスが、尊敬する父と母と、三人で暮らしていた頃の夢。

夢の中でアリスは父に手を繋がれ、母が王家の魔力を使う所を見ていた。迫り来るナギが適当に放った魔法の射手を、腕に纏った王家の魔力で一つ一つ掻き消していく様を、腕に王家の魔力を纏った時の滑らかな流れを。

「良いかアリス・・・・・・王家の魔力とは無の力、故に王家の魔法は無属性に当たる。無の力がどの様なモノかを理解した時、コントロールは格段に上達する」

「無・・・・・・？」

「おいおいアリカ、アリスにゃちょっと難しすぎねぇか？　つか、王家の魔力を教えるのだって早すぎる気ぃするしよ」

途端にアリスの手に父の手の温もりが感じられなくなり、見上げてみれば父の姿は空を舞っていた。・・・・・・頬に紅葉が浮かんでいたのは見間違いではないのだろう。

「アリスに王家の魔力があるのに気付いたのはお主だろう！　早急に教えねば危険だという事くらい、理解出来よう！」

「てっててて・・・・・・いや、そうだけどよ・・・ってか、何すんだこのアマァ！！」

「煩いぞ！　兎に角、アリスには王家の魔力を早々に教えておく必要がある」

「んにゃろ・・・・・・はあ・・・、わぁったよ。好きにしな」

アリカは引き続き王家の魔力のコントロールを実演するのかと思いきや、アリスに歩み寄り、しゃがんで目線の高さを合わせると、

アリスの頬を両手で包み込んだ。

「良いか・・・・・・王家の魔力は無の力、それを如何使うかによって、無という言葉の意味に大きな違いが出てくる。その意味、アリスは自分の力で見つけるのだ」

「僕が・・・・・・？」

「そうだ・・・何、お前なら出来る。私とナギの息子なのだから、出来ぬ筈がない」

ふと、頭を撫でられる感触があったので見上げると、ナギがアリスの頭を撫でていた。

「出来るよな？　俺様の息子が、こんな事が出来ねぇなんて、言わねぇよな」

「・・・うん！　僕はとーさんとかーさんの子供だから！　絶対に出来るよ！！」

「ああ、頑張るのだぞ」

「頑張れよ」

急に、二人の顔が遠くなった。

アリスはこれが夢の終わりだと気付き、ゆっくりと目を閉じて・・・・・もう一度開けると夕暮れの空と、ビーチパラソルが見えた。

「・・・・・無の、力・・・か」

遠い記憶にあるアリカの言葉、無の力と、その意味・・・・・・、アリスはまだ、その答えを見つけていなかった。

目が覚めて起き上がったアリスは自分の周りに掛けられている防

音結界を王家の魔力で掻き消し、立ち上がると同時に妙な魔力を感じた。

・・・・・いや、寧ろ妙なと言うより、感じた事があり、そして本来なら此処には居ない筈の人間の魔力だった。

「何しに来たんだ？　アンナの奴」

周りには既に一般海水客も居ないので、構わずに瞬動に入ったアリスは少し離れた岩場に来た。

見れば岩場にはのどかと夕映、それに下にある海岸にはネギと明日菜、そして何故か燃える海面の中を歩く炎の様な髪の少女・・・・・。

「おいおい・・・・・・」

そこに居たのはネギの幼馴染で、アリスにとっては妹分の様な存在の少女・・・・・アンナ・ココロウァ、通称アーニャだった。

「おーい！　アンナ！！」

「？　・・・あ、アリスお兄さん！！？」

アーニャとネギ、明日菜の所へ歩み寄ると、アーニャがアリスの前に立って勢い良く頭を下げた。

「お、お久しぶりです！　アリスお兄さん！」

「久しぶり、そんな畏まらなくて良いから、いつも通りで」

「あ、うん！　久しぶりアリスお兄さん！」

何故ロンドンで占い師をやっている筈の彼女が此処に居るのか、疑問は尽きないが、とりあえずは、折角はるばる日本へと来たのだ。

無下にする訳にも行くまい。

「折角だ、私たちが泊まる宿に来たら良い。アンナの分の宿泊費は私が出そう」

「え、その・・・・・・私はネギを連れ戻しに」

「・・・・・・まあ、その話も宿でしよう。お腹、空いてるだろう？」

「・・・はぁい」

日本の料理と言えば刺身やてんぷらを想像しているのだろう。実際、宿の夕飯はそれなので、丁度良い。

「アーニャ・・・相変わらず兄さんのいう事は素直に聞くんだ」

「なんて言うか、アーニャちゃんってアリス先生の妹みたい・・・・・」

実際、ウェールズの村が悪魔に襲われて以来、幼かったネギとアーニャの面倒を見ていたのはネカネとアリスだ。そう思われても仕方ないだろう。

「アリス様、如何されまし・・・・・・あら、アーニャちゃん？来てたんですね」

「あ、シルヴィアさん！　お久しぶりです！」

「あれ!?　アーニャってシルヴィアさんと会った事あったっけ？」

宿に向かって歩いていると、アリスが寝ていた場所に居い事に気付き、心配して探していたシルヴィアと合流した。

シルヴィアを見るなり、アーニャは駆け寄って挨拶したが、二人が知り合いだという事にネギが驚く。

「はあ？　アンタ何言ってんのよ。シルヴィアさんは時々アリスお兄さんと一緒にメルディアナに来てたじゃない」
「え？　僕、知らないよ、そんな事・・・」
「・・・ああ、そう言えばネギ、アリスお兄さんとシルヴィアさんが来てた時はいつも禁書庫に居たもんね」

仕事が旧世界の時はいつもアリスとシルヴィアはメルディアナに立ち寄っていたのだが、毎回アーニャには会ったが、ネギには会えなかったのを覚えている。

「あのねネギ、よく聞きなさい！　アリスお兄さんとシルヴィアさんは私達魔法使いの間では知らない人が居ない程の超有名人よ！？　しかも、その主従のコンビネーションは抜群で、戦争で劣勢の軍に二人が参加しただけで戦況を大きく引っくり返す程、パートナーという言葉の理想系とも言える二人なんだから！」

そんな風に言われていたのかと、少し恥かしくなるアリスとシルヴィアだが、長い時間を共に戦い抜いてきたからこその関係であり、コンビネーションなのだ。そこに自慢する事は無いし、誰もが辿り着ける境地だ。

「アンナ、ちょっと黙ろうか・・・・・・少し、恥かしいから」
「う、・・・ごめんなさい」

別に気にしてないので、落ち込んだアーニャの頭を撫でたアリスは見えてきた宿に目を向けた。和風の旅館で、修学旅行の時に泊まったホテル程ではないが、それでも充分大きな旅館だった。

「いい所だね」
「ええ・・・ゆっくり温泉というのも、良いかもしれませんね」

考えてみればシルヴィアは修学旅行の二日目から日本に来て、その時もゆっくり温泉に入っている時間は無かった。今回はシルヴィアにとって初めての温泉という事になるだろう。

「楽しむと良い・・・温泉は、日本が誇る最高の文化だ」

「はい・・・本当、楽しみです」

海でゆっくりと眠ったアリスは気力も充分、後は温泉に入ってのんびりと過ごすのも悪くないと思えるだけの精神的余裕も出てきた。

折角、海に来ているのだ。明日は存分に海を楽しもうと心に誓うアリスと、温泉を心の底から楽しみにしているシルヴィアは、魔法使いではなく、唯の人であった。

六十二話　「修行じゃないの？　海へ旅行！！」（後書き）

もう少ししたら、魔法世界編に入る。……物語が大きく動き出すのも近い。

六十三話　「本契約とは」（前書き）

今回、少しだけ性格が変わる方がいらっしゃるかも？

六十三話　「本契約とは」

英雄と女王の子

六十三話

「本契約とは」

イギリスからネギの幼馴染、アンナ・ユーリエウナ・ココロウァこと、アーニャが来日した。

海へ旅行に来ていたアリスやネギ達一向は旅館に連れて来たアーニャを生徒たちに紹介して夕食の席に着くのだが、ネギとアーニャだけ別室で食べる事になったので、アリスと従者以外は全員様子を見に行ってしまった。

そもそも、アリスたち二代目・紅き翼は別に予約を取っているので、食事の場所は元々別の所だ。部屋もネギ達とは少し離れている。

「アリス様は行かれないので？」

「あの子はネギの客だからね。ネギを連れ戻しに来たって言ってたし、少しネギと話し合いも必要だろう」

生徒達も、流石にネギとアーニャの邪魔はするまい。そう思ってアリスは行かなかったし、何より夕食に出てきた和食が美味しかったので、こちらに集中したかったのだ。

「木乃香ちゃんが作る和食も美味しいけど、こういう所で食べるのも中々・・・」

「プロが作っとるんよ？　ウチが作るんはお母様に教わった家庭料理くらいや」

一緒にせんといて、と言いながら笑う木乃香に苦笑しつつ、アリスは同じく和食を得意料理としている少女に目を向けた。

「さよも和食が得意だったよね？」

「はい、こんなに豪華な物は作れませんけど、今度何か作りますよ？」

「楽しみにしてるよ」

アキラは二人とは逆に、洋食の方が得意で、アリスやシルヴィアから色々と教わっている。元々料理の腕はあったアキラだが、二人から教わる内にレパートリーも増え、腕前も上がっているから、寮のルームメイトにも満足されているらしい。

「でも、アリス先生が教えてくれるイギリス料理は困る・・・・・・如何してあんなに大雑把なのか、少し疑問だよ？」

「イギリス伝統料理はねぇ・・・・・・仕方ないさ」

元々イギリス伝統の料理は大雑把な物が多く、他国の人間からは不味いという意見も多数あるくらいだ。

「明日は先生も泳ぐんですか？」

「ん？　・・・そのつもり。折角だから、修行を忘れて遊ぶのもアリかなってね」

さよの質問に答えながら、アリスは刺身を口に運ぶ。・・・山葵の辛さが絶妙だった。

「ほんなら、明日はアリスさんとも遊べるんやね～」

「楽しみ」

明日の事を思いながら、アリス達は楽しい夕食を続けた。ネギたちが何やら騒がしくなって居る事に気付いていながら、それをスルーしつつ、本当に楽しく、のんびりとした時間だった。

夕食も終わり、アリスは一人で露天風呂に来ていた。修学旅行のときの温泉とは違って混浴ではないので、一人湯船に浸かりながら星空を眺めていた。

「いい・・・湯だ。誰かが言っていた風呂は命の洗濯というのは、本当だなぁ」

イギリス人は風呂嫌いだというが、アリスはそれに当て嵌まらない。ネギは典型的な風呂嫌いだが、アリスは風呂が大好きだ。戦いや修行の疲れを風呂で癒す事が多かった為か、アリスはイギリス人でありながら風呂に入る事を避けたりしない。

「やっぱり・・・・・・日本の温泉は、格別だねぇ」

昔から、日本に来たときは必ず温泉に入っていたアリスは、温泉好きであり、温泉マニアでもある。何気に日本各地の名湯という名湯に行っては浸かっているのだから、相当だろう。

「何か女湯の方が騒がしいけど・・・」

折角、風流というものを味わっていたというのに、女湯の騒がしさが台無しにしている。

「まあ、旅行で羽目を外しているのだろうし・・・大目に見るか」

影から取り出したお猪口に、同じく取り出した徳利の中身・・・

エヴァの所からくすねて来た日本酒を注いだ。

「これもまた、日本が誇る文化ってね」

「その通りだ。よく判っているではないか」

「・・・・・・何故ここに？」

お猪口の中身を飲み干した所で、背後に現れたエヴァの方を振り向くアリス。

エヴァは何故か幻術で大人の姿になっており、その裸体を隠す事もしないで当然のようにアリスの影に手を突っ込んで取り出したお猪口に酒を注いで飲んでいた。

「影を使った転移魔法で一瞬だ。それに、貴様とこうして裸の付き合いをするというのも、中々乙なものだろう？」

「あ～・・・・・・せめてタオルで隠すくらいしたら良いのに」

「それは貴様も同じだ」

それでもタオルで隠す事をしない二人、酒を飲みながらアリスは男湯の方に人払いの結界を張ってエヴァのお猪口に酒を注ぐ。

「おっと・・・ふむ、何故私の酒を貴様が持っているのかは、聞かないでおいてやる。お蔭で良い気持ちの良い酒を飲めたのだからな」

「それは有難い。結構失敬したからね」

流石に怒られた。適当な数を貰ってエヴァの影に入れてからアリスはお猪口を傾けようとしたのだが、中が空だったので、エヴァが注いでくれた。

「アリス、貴様は今夜は一人か？」

「ん？　そうだけど・・・・・・」

「ならば話がある。誰も部屋に近づけるなよ」

その後、特に話をすることも無く、徳利の中をみ干した二人は風呂から上がり、エヴァは転移で消え、アリスは脱衣所に入るのだった。

深夜、アリスは一人で部屋にいたが、アリスの影からエヴァが出てきたので部屋備え付けのお茶を出して座布団の上に座る。

エヴァは何故か浴衣姿で、アリスの向かいに座るとアリスにパクティオーカードを出す様に言う。

「突然、何？」

「いいから出せ」

何がしたいのか判らないが、とりあえず言われた通りにカードを出したアリス。

シルヴィア、木乃香、アキラ、さよ、月詠、エヴァ、従者のカード六枚と、ナギ、アリカ、エヴァが主のカード三枚をテーブルに並べた。

「ふむ・・・・・・貴様は」

「・・・・・・ん？」

お茶を口にしながら耳を傾けるアリス。だが、そのお茶は飲み込まれる事は無かった、

「誰と本契約を結ぶつもりだ？」

「っ！？　ブフゥッ！！」

「汚っ！？」

突然の事にお茶をエヴァに掛けてしまった。だが、そんな事を気にしている余裕など無い。

「ゴホッ、ゴホッ・・・・・・な、何を言い出すんだ！」

「その前に謝らんか！！」

「すまん」

断罪の剣を突きつけられたので、素直に謝ったアリスは改めてエヴァを見つめた。

「貴様も来年は１８になる。早い者ならそろそろ本契約する相手を見つけていても可笑しくは無い時期だろう？　本契約は仮契約をしている相手からしか結ぶ事が出来ない上、たった一人しか相手を選べないのだから、気になってな」

本契約は仮契約とは違い、人生でたった一度しか出来ない。たとえ立場が主だろうと従者だろうと、本契約という儀式を行う事が出来るのは一度のみ。そしてその相手は当然、一人しか選ぶ事が出来ないのだ。

「貴様の本命、そろそろ聞いておこうと思ってな・・・超鈴音が言っていた妃様というのが誰になるのか、気になったのだ」

魔法使いが結婚をする場合、相手と本契約を結ぶ場合が多かった。最も、今の時代はそれほど多い訳ではないが、魔法世界ではまだ多い方だ。

「何より、貴様には・・・貴様の従者にはこの先、必ず必要になるだろう。仮契約ではない、本契約によって現れるアーティファクト・・・・・・グレートグランドマスターピースのアーティファクトは」

グレートグランドマスターピース、それは明日菜のアーティファクト、ハマノツルギが属するグランドピースを更に上回る最上位の究極無比の最強アーティファクトのランクだ。
その力は絶対的で、噂によればソレは神話の再現とも言われている。当然、その数は少なく、記録として残っている数は１０にも満たない。

「待て、本契約で確実にグレートグランドマスターピースが出るとは限らないよ。良くてグランドピース、平均的なのはマスターピースがいい所だ」
「馬鹿か貴様は・・・さよや木乃香のアーティファクトを見てみろ。さよはグランドピース、木乃香はハイパーピースのアーティファクトを出現させている。貴様を主とするだけでそれほどの代物を出せるのだ、本契約でグレートグランドマスターピースが出ないとも限らんだろうが」

エヴァのアーティファクトもマスターピースだった。アリスを主とした場合、本契約で神話の再現とも言えるグレートグランドマスターピースが出ないとも言えないだろう。それだけのポテンシャルを持っているのだ。

「それで？　話を戻すが、誰と本契約を結ぶつもりでいる？」
「・・・それは・・・・・・」

アリスが見つめる五枚のカード、その内のエヴァと月詠のカード以外に目を向けた。

「まだ、分からない。いや、それ以前に、私の一存で決めて良い事ではない」

「む、まあ・・・確かにな」

お互いに人生で一度しか無い儀式となるのだ。片方の一方的な決定で行うなど、絶対に許されない事だ。

「そうか・・・・・・なら、今日はこの話題はもういい」

「この話題“は”？」

「そうだ。今日は貴様を誘いに来た」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

何を言っているのだろう、と思った時には大人モードになったエヴァに押し倒されていた。

「って、服だけ大きさ変わってないよ！？」

幼女モードのままの浴衣を着ている大人モードのエヴァ。当然、サイズが絶望的に合わないので、色んな所がはみ出ている。

「シルヴィア相手に慣れているのだろう？　ならば何を躊躇う？」

「いや、それは・・・・・・」

「将来は私も貴様の妾になるらしいからな、今のうちにこういう事に慣れておきたいだけだ・・・・・・何より、私自身が、貴様に好意を微かながらにでも持っているからな」

最初はナギの息子としてしか見ていなかったエヴァだが、アリスという人間を見ている内に心に巣食う闇に興味を持ち、その夢に興味と微かな期待を持ち、取引ではあったが仮契約をしてとうとうエヴァはアリスに惹かれてしまった。

随分と年下の小僧でしかない筈の少年に、６００年を生きる吸血鬼は生涯で二度目の恋をしたのだ。

「想いに応えてくれとは言わん・・・・・ならばせめて、私という存在を、貴様に縛りつけて欲しい。いつかは死別する貴様と、思い出を長く残したい」
「・・・エヴァ」

そうだ、アリスは人間で、エヴァは不老不死の吸血鬼。いつかはアリスも年老いて死ぬ事になるか、戦いの中で命を落とすかもしれない。
だが、エヴァは死ぬ事は無い。アリスや、他の皆が死んだ後も生き続けるのだ。

「わかった・・・ならばせめて幻術は解け。幻術姿のお前を抱いても、嬉しくは無い」
「っ・・・ふ、ふん、ロリコンめ」
「エヴァの本当の姿を抱けるなら、それでも構わんよ」

そう言って、アリスは王家の魔力でエヴァの幻術を消し、本来の姿に戻ったエヴァを押し倒して唇を重ねるのだった。
それから3時間、アリスの部屋から物音が消える事は無かったのだが、全くの余談だろう。

六十三話　「本契約とは」（後書き）

アーティファクトのオリジナル設定が出てきました！

下から通常のノーマルピース。少し強いスーパーピース。強力な能力を有するハイパーピース。稀少な能力を持つ強力なマスターピース。稀少かつ危険な能力を有するグランドピース。世界最高位の危険性と稀少性を持ち、更には神話の再現とも言われる事があるグレートグランドマスターピース。

実はグランドピースとグレートグランドマスターピースの間には更にグレートマスターピースという分類のアーティファクトもあり、此方は稀少かつ危険、そして神話には届かないまでも、伝説の再現とも言われるアーティファクトで、神話と伝説の違いは神の力に等しいか、英雄の力に等しいかの違いです。

六十四話　「アーニャにばれた！？　アリスとネギの大量仮契約」（前書き）

3分の2が戦いです。タイトル意味無ぇ……。

六十四話　「アーニャにばれた!?　アリスとネギの大量仮契約」

英雄と女王の子

六十四話

「アーニャにばれた!?　アリスとネギの大量仮契約」

海への旅行も終わり、アリス達とネギ達は再び修行の毎日に戻った。

結局、アリスは海で思う存分遊んだので、修行のストレスなど完全に吹っ飛んだ。お蔭で麻帆良に戻ってからの修行は随分と捗っている。

今日はアリス達は専用スペースでの修行はお休み、変わりにレーベンスシュルト城のあるエリアでの修行成果確認を行っていた。

「行くえ、アリスさん!!」

「・・・・・・!」

アリスと木乃香、互いに浮遊術で飛行しながら、時に虚空瞬動を交えた高速機動戦を行っている。

アリスは得意の近接戦を行う為に木乃香に接近しようとするが、木乃香の放つ大量の魔法の射手に阻まれ、中々近づけずにいた。

「リム・リル・リック・リプシオール!!　契約に従い　我に従え　光の女王　来たれ　闇を照らす　英知の輝き　原始の世に生まれし　人の奇跡!!」

「高速詠唱!」

アリスは“姫”を、木乃香は指輪を構え、互いに向け合った。そ

して・・・・・・。

「常世の輝き！！」

「轟く雷帝！！」

白い光と雷がぶつかり、激しい衝撃波を生む。周囲の空気は震え、眼下に広がる森は木々が次々と消滅していく中、アリスが虚空瞬動で木乃香の後ろを取った。

「っ！」

気配を感じ取ったのか、木乃香は咄嗟に振り返り際にオリハルコン製の扇で“姫”を弾き、虚空瞬動で距離を取ろうとしたが、アリスが同じように虚空瞬動で追って来た。

「なら、これや！」

木乃香が放った扇の斬撃に魔力が上乗せされ、飛んできた。

飛来した斬撃をアリスは“姫”で弾こうとしたが、木乃香の魔力の大きさが優位に運んだのか、膨大過ぎる魔力を込められている為、通常状態の“姫”では弾ききれず、軌道をずらす事で精一杯になってしまった。

「多重・高速詠唱！　贖罪の剣、光の戦槍！！」

木乃香の右手が扇を核に光の剣を作り出し、更に光の槍が６本、彼女の周囲に展開され、その全てがアリスに向けて発射された。

「降雷・雷華流壁！！」

アリスが展開した雷の防壁が光の槍を全て防ぎきり、その間にアリスと木乃香は“姫”と贖罪の剣を激しくぶつけ合い、木乃香が再び距離を取ろうとタイミングを計っていた時だった。

アリスは自ら距離を取り、それによって木乃香は更に距離を取って自身の得意とするポジションに入る事が出来た。

「・・・っ！　来るんやな、今までウチや、アキラちゃん、さよちゃんとの模擬戦で、アリスさんは使こたこと無かったけど、遂に認めてもらえた・・・・・術式武装を使う相手として」

そう、今までアリスは木乃香たちとの模擬戦、それも一対一での模擬戦の時に術式武装を使った事は無い。それは三人とも、そこまでの実力に達していなかったというのもあり、三人が当面の目標としていたのは一対一の模擬戦でアリスに術式武装を使わせる事だった。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス」
「リム・リル・リック・リプシオール」

だが、アリスが術式武装を使うのを待つつもりは無い。素直にそれを待つのは愚かだと教わっていたし、戦場ではそれが命取りになるのだという事を、ずっと頭に叩き込まれているのだから。

「契約に従い　我に従え　炎の覇王　来たれ　浄化の炎　燃え盛る大剣」
「来たれ炎精　光の精　太陽より注ぎ　焼き尽くせ　熱き輝き」

アリスの詠唱と木乃香の詠唱、上位古代語魔法を唱えるアリスよりも中級魔法を唱える木乃香の方が早い。

「ほとばしれよ　ソドムを焼きし　火と硫黄　罪ありし者を　死の塵に」
「灼熱の白光！！」
高温の熱を帯びた白い光の砲撃が詠唱中のアリスに迫る。だが・・・・・。
「雷の暴風！！」
「なっ！？　多重無詠唱！？」
普通の詠唱と同時に無詠唱魔法を使う技法、多重無詠唱という最近アリスが開発した新技法を使い、詠唱中の魔法とは別に、無詠唱の雷の暴風を放って灼熱の白光にぶつけた。
流石に詠唱を行った灼熱の光を相手に、同ランクの魔法とは言え、無詠唱の雷の暴風では威力が劣り、拮抗は一瞬、直ぐに雷の暴風が圧され始める。
しかし、その一瞬だけでアリスには充分だ。
「是、“天焔の炎姫”」
地獄の焔姫とは違う、赤い炎の剣となった“姫”が雷の暴風を突き破って迫ってきた灼熱の白光を切り裂き、更に驚きの光景を見せた。
「吸収」
切り裂いた灼熱の白光を天焔の炎姫が取り込んだのだ。
「是、“白焔の輝姫”」

取り込まれた灼熱の白光は、先に取り込まれていた燃える天空と融合して、そのまま術式武装となって“姫”を覆っていた赤い炎を白い炎に変え、眩い光を放った。

「な、何や・・・アリスさんも人が悪いなぁ・・・・・・完成しとったんか」

「ああ、完成したよ・・・太陰剣・・・・・・悪いね、木乃香ちゃんで実験する事になって」

「あはは・・・・・・こら、あかんなぁ」

太陰剣、原型が闇の魔法である術式武装に改良の余地ありと見たエヴァが語った闇の魔法の究極の形、それを試行錯誤と研究の果てに完成させたのが術式武装・太陰剣だ。

相手の魔法、気、それらの攻撃を吸収して自身の力に変えるという能力を術式武装で再現した新たな力、同じように相手の魔法や気を吸収して術式武装に加えたり、ブーストに使ったりする術式武装の究極形。

「せやけど」

木乃香は贖罪の剣を構えて虚空爆縮瞬動という空中用の爆縮瞬動術を用いてアリスに接近、攻撃をされる前に贖罪の剣を振る。

しかし、アリスの“姫”を持っていない左手、そこには何も無い。だが、そこから発生している相転移の力を秘めた剣・・・・・・断罪の剣が贖罪の剣を受け止めていた。

「二刀連撃！　斬空閃・弐の太刀・白炎！！」

危険を感じて咄嗟に離れた木乃香を追わず、アリスは“姫”と断罪の剣での斬空閃・弐の太刀の連撃が炎を纏った魔力の斬撃となっ

て木乃香を襲った。
　障壁をすり抜けてきた斬撃が木乃香を切り裂こうとする。だが、木乃香も伊達にアリス達から戦闘を学んでいない。贖罪の剣と、もう片方の手にあるオリハルコンの扇で放った斬空閃の連撃で相殺し、光の射手を１９本展開、再びアリスに向けて放とうとしたが・・・・・。

「あ・・・・・」
「チェックメイト」

　既にアリスは木乃香の後ろで術式武装を解除した“姫”を首筋に添えていた。

　アリスと木乃香の模擬戦が終わり、二人がエヴァ達の所に戻ると、模擬戦前には居た筈のネギとアーニャが居なくなっていた。・・・・・ついでにのどかと夕映も居ないのだが、二人の事は眼中に無い。

「あれ？　ネギとアンナは・・・・・む？」

　何処に行ったのかと周辺を見渡してみれば、別荘の入り口である魔法陣の方から魔力を感じた。身体強化系の魔法を使った時の魔力だが、数は二つ・・・・・反応からネギとアーニャだと判った。

「行ってみるか」

　木乃香たちに一言断ってからアリスは瞬動でその場所に向かう。
　そこで見たものは、何故か身体強化を行ってネギに拳を振るうアーニャと、同じく戦いの歌を使って拳を受け止めているネギの姿だった。

「何やってる？」
「あ、兄さん！？」
「アリスお兄さん！！　聞いてよ！　ネギったら６人の女の子と仮契約してるのよ！？　どんだけスケコマシになったのよコイツ！！」

胸が痛いアリスだった。麻帆良に来てからアリスの従者もシルヴィア一人から随分と増えてしまったのだから。

「あ～・・・・・・ごめん、私もシルヴィア一人じゃなくなった」
「・・・・・・は？」
「麻帆良に来てから５人と仮契約、一体とドール契約してる」

だからこそ、アーニャの言葉がグサッと来てしまったアリスは、引きつった笑みを浮かべる事しか出来ない。

「あ、アリスお兄さんはまともな人だと、思ってたのにぃ～・・・・・・」
「何と言うか・・・ごめん」

先ほどまで木乃香と激闘していた人物とは思えない位の情けなさだ。

「でも、アンナ・・・ネギは私達の村の事・・・忘れてなんかいないよ」
「・・・え？」
「そうだよ、僕が今、皆と修行してるのは・・・父さんを探し出すためだ」

ネギは変わっていない。確かにそうだ・・・・・・今でも甘えた考えを持ち、覚悟も出来ていない未熟者だが、一つだけ、確かな覚

悟を持っている。

「僕が前に進むのは、あの雪の日の夜に決着を着けるため。それに・・・僕が今、何故ここにこうしているのか、その意味と理由を知りたいんだ。だから・・・・・・」

「認めてやれ・・・ネギは、アンナの知るネギと、何一つ変わってなんかいないって」

「・・・・・・」

「私も、変わってない。私は私の夢の為に、私が目指すべき到達点に向かって、今もずっと走り続けている。立ち止まる姿は、絶対に見せたりしないよ」

もう二度と、旧世界で仮契約はしない。旧世界で随分とのんびりし過ぎていたから、だからアリスは歩いていた今から、再び走り出そうとしている。

「わ、わかったわよ・・・・・・ネギは、確かに変わってない。アリスお兄さんも・・・全然変わらない。今ので理解出来たから」

そうして、アーニャも納得してくれたので、魔法世界に行くことを伝えたネギだったが、何故かアーニャも来るかと聞いてしまった。

アリスは内心呆れてしまったが、アーニャが行くと言っているので、如何したものかと溜息を溢す。これでアリスが背負うであろう罪は、一つ増えるのだった。

六十四話　「アーニャにばれた！？　アリスとネギの大量仮契約」（後書き）

次回は月詠合流！　そして遂に……イギリスへ向けて出発！！

六十五話　「二代目・紅き翼」（前書き）

白き翼の一人が、とあるフラグを立てます。

六十五話　「二代目・紅き翼」

英雄と女王の子

六十五話

「二代目・紅き翼」

8月11日、イギリス行き前日になって月詠は帰ってきた。

「ただいまやぁ、アリスは～ん、シルヴィアは～ん」

「ああ、おかえり」

「おかえりなさい、月詠ちゃん」

帰ってきた月詠は、行く前と何も変わっていない様に見える。だが、その実、実力が見て判る程、格段に上がっていた。

「強くなったみたいだね」

「何おっしゃいますの～？　アリスはんもシルヴィアはんも、ウチが京都行く前と比べて、格段に強うなっとるやないですか～」

お互い、強くなった主従は再び手を握り、そしてその絆が更に固く結ばれるのだった。

麻帆良学園に戻ったアリス達はエヴァの別荘には向かわず、図書館島に向かっていた。正確には図書館島の地下、最下層にあるアルの住処だが。

「戻ってきて直ぐで悪いが、これから二代目・紅き翼の会議がある。これからの動きを、如何するか決めるためにね」

最後の扉を開くと、その場所には既にアル、タカミチ、木乃香、アキラ、さよ、ペルシクム、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロ、旧世界にいる二代目・紅き翼の人間が揃っていた。

「お待たせ、凶剣士・月詠が揃った。これより会議を始める」

アリス達も用意された椅子に座ると、一枚の資料を影から取り出し、シルヴィアに配らせた。

「今配った資料には、明日からの簡単なスケジュールと、魔法世界での行動指針を書いている。それに伴い、それぞれの役割を分担する」

先ずは魔法世界で積極的に動き、最前線で動く事になる人間から。

「これは私とシルヴィア、ペルシクムと月詠の四人で行う。最前線に立つ上で、重要なポジションになるからね」

次に、魔法世界での情報集め、及び旧オスティア難民の指揮を執る人間。これはメガロメセンブリア元老院に対する抑止にもなる存在だ。

「タカミチ、私達と少し送れて来てくれ。その後でラカンと密かに連絡を取って動いてもらう」

「わかったよ。図らずしも、師匠と同じ役目とは、有難いね」

それから、アリス達を援護し、時にアリス達の影となって動く隠密部隊として・・・・・。

「木乃香ちゃん、アキラ、さよの三人を当てる」
「意外に、重要なポジションやね」
「頑張る」
「隠密なら死霊術の本懐です！」

それから、此処、麻帆良の地下にあるゲートに繋がる廃棄されたゲート、旧オスティアのゲート探しをするのは。

「エヴァ、茶々丸、チャチャゼロに頼む」
「ふむ、任された」
「お任せください」
「ケケケ、地味ダガ、カマワネェーゼ」

そして、残ったアルはと言うと・・・・・。

「アルには旧世界に残って、ゲートが繋がり次第、動いてもらう。詠春さんと協力して旧世界のメガロメセンブリア元老院の配下を全て調べ上げて、リストアップしておいてくれ」
「ええ、任されましょう」

これで役割は決まった。後は、実際に事を起こしてからの話だ。

「事を起こすのは、完全なる世界が本格的に動き出したらだ。それまでは派手な動きは控え、本番に備えて力を蓄える」

魔法世界でも修行を怠らない。本番までは限界まで力を高め、時が来たら全力を尽くして戦い、そして・・・・・。

「私は、私の夢を実現させる・・・・・皆、力を貸してくれ」

皆、頷いて武器を、拳を、仮契約カードを掲げた。アリスも“姫”を掲げ、宣言する。

「明日より我等、二代目・紅き翼は結成以来最大の戦いに備えて行動する！　皆、力の限り戦い、そして・・・・・未来を勝ち取るぞ！！」

『おおおっ！！！』

タカミチは世界中の魔法協会に完全なる世界の情報を集めに行くため、会議終了と共に麻帆良を発った。

アルも準備があるという事で地下に篭り、アリス達は別荘に移動、旅立ち前の最後の仕上げを行いに来たのだが、アリスを呼び止める声が聞こえ、アリスが目を向けると、そこには・・・・・・。

「宮崎さん・・・？」

のどかが立っていた。

アリスとのどかは人目につかない所に移動して、何故か設置してあるベンチに座る。のどかがアリスに話、というより頼みがあるとの事なのだが。

「それで、頼み事って？」

「あ、はいー・・・・・その、アリス先生・・・私に、瞬動を教えてください」

「瞬動？」

突然何を言うのかと思えば、瞬動を教えて欲しいとは・・・・・・。別にアリスでなくとも良いのではないのかと思うが、のどかなりに理由があるらしい。

「私は、戦う力なんてありません・・・・・・魔法も、初心者用の物だけしか使えませんし、戦いが怖いです」
「・・・・・・」
「で、でも・・・私はネギ先生のパートナーで、アーティファクトを使えば相手の心を読んで対策を取る事ができます」

そう、それがのどかの力であり、ネギ達、白き翼の強みでもある。

「そ、それで・・・・・・気が付いたんです。私、こんな力があるから、ね、狙われやすいって・・・・・・」
「そうだね、戦う上で、宮崎さんの力に気が付けば真っ先に狙うのは当然だ」
「私、そうなった時に、自分の身を守る術が無いんです・・・・・・魔法が使えないから、防御なんて出来ない。だから、考えたんです・・・防御できないなら、回避に専念すれば良いって」
「それで、瞬動？」
「はいー・・・」

確かに、良い方法だろう。瞬動なら、魔法を使えなくとも覚える事は出来る。実際にタカミチは魔法を使えないが瞬動も虚空瞬動も会得しているのだから。

「でもさ・・・それ、私に教わらなくても良いんじゃない？」

そう、別にのどかが教わる相手はアリスでなくともいい筈だ。ネギ、小太郎、楓、古、刹那、明日菜、白き翼で瞬動が使える人間はこれだけいるのだから。

「そ、そのー・・・・・・小太郎君と楓さんとくーふぇは気を使っ

た瞬動を使いますし、ネギ先生はアリス先生と比べて瞬動は未熟だと思ったんです。明日菜さんは人にモノを教えるとか苦手そうですしー」

だから、魔力を使った瞬動をアリスに教えて欲しい。そういう事だった。

「ふむ・・・・・良いよ」

「ほ、本当ですか！？」

「弟子にしてくれっていうのなら断るけど、瞬動だけ教えて欲しいなら、別に構わない」

生き残る為に瞬動を覚えたい、そういう気概を気に入ったアリスは瞬動を教える事に了承した。何より、のどかに対する認識を改めたのだ。

「（白き翼の中で唯一、この先の危険を視野に入れている人間だ。これは彼女に対する評価を改めるべきだな・・・・・同時に、要警戒対象としても）」

のどかはこの先、色んな意味で強くなるだろう。力による強さではない、戦う者としての意識が、認識が、覚悟が強い存在になる。戦いでは、一番生き残る確立の高いタイプの人間になるだろう。

「じゃあ、早速今からやろうか・・・別荘内だから時間は充分ある」

「はい！」

こうして、外で朝になるまでの時間、アリスとのどかは別荘に篭ってずっと瞬動の練習をしているのであった。

そして時は８月１２日、遂に二代目・紅き翼と白き翼がイギリスに発つ日が来た。
成田空港国際便の搭乗口には既に全員が揃っており、アリスは麻帆良学園の事を思い出していた。

「この先、平和な時に訪れる事は二度と無いだろうね・・・・・・・もう、私は麻帆良学園の教師ではない」

既に辞表は郵送してある。学園が引きとめようとするだろうから郵送にしたが、正解だったのだろう。

「・・・・・・さらば麻帆良、二度と訪れる事の無い、楽しかった地よ」

麻帆良で過ごした日々は、本当に楽しかった。だからこそ余計に、その記憶と思い出を切り捨てるのは用意だ。
エヴァが此処に居る事に驚いているネギ達を眺めながら、アリスは父と母との仮契約カードを取り出して、窓から見える空に目を向けた。

「待っていて、父さん、母さん・・・・・・・私は、もう直ぐ会いに行くよ」

搭乗の時間となり、飛行機に乗り込んだアリス達、一同は揃ってイギリス、ウェールズに飛ぶ。
この先に待ち受けているのは生死を簡単に左右する戦いの地、戦いの運命。最後の時に訪れるのは、果たしてアリスの夢の実現か、それとも・・・・・・・。

六十五話　「二代目・紅き翼」（後書き）

これにて修行編終了！！
次回からウェールズですが、魔法世界編のスタートです！！

六十六話　「もう一人のスプリングフィールド」（前書き）

魔法世界編スタート！！

六十六話　「もう一人のスプリングフィールド」

英雄と女王の子

六十六話

「もう一人のスプリングフィールド」

イギリス、ヒースロー国際空港に到着してからアリス達とネギ達は別行動になった。

ネギ達はロンドンの観光をしつつ、汽車でウェールズに向かい、アリス達は観光する事無く転移魔法でウェールズまで移動する。

「うわ～・・・・・！　ここがネギ君の育った場所なん？」

「そう、正確にはネギが５歳から１０歳までの頃の故郷になるね」

アリスにとっては故郷とは言えないが、ネギにとってはそうなるだろう。

「さて、人を待たせてある。急ごう」

街の方に行くと、入り口の所に人が立っていた。アリスと同じ金髪の女性で、何処と無く明日菜に似た女性。

「アリス兄さん！　お帰りなさい！！」

「ああ、ネカネ・・・ただいま」

ネカネ・スプリングフィールド、アリスとネギの従兄妹で、ネギにとっては姉のような存在、アリスにとっては同い年だが、アリスの方が誕生日が早いので、妹みたいな存在だ。

そして、今現在、戸籍上の生存を確認されている、アリスとネギ、メルディアナ魔法学園校長と続く、四人目のスプリングフィールドだ。

「お久しぶりですね、ネカネさん」
「まあ、シルヴィアさんも、お久しぶりです！　アリス兄さんがいつもお世話になって・・・・・・」
「いえ、私はアリス様の従者ですから・・・こちらの方がいつも」

シルヴィアとネカネの挨拶もそこそこに、アリスは連れて来た従者を紹介する事にした。ネカネに手紙では教えているが、実際に会わせるのは初めてだ。

「それとネカネ、私の新しい従者たち」
「近衛木乃香です。よろしくや」
「大河内アキラです、えっと・・・よろしくお願いします」
「相坂さよです～、よろしくおねがいします」

この三人がネカネに送った手紙で唯一教えた従者、後はネカネも知らない人間、というか教えるには少し問題があった人物達だ。

「それと・・・」
「どうも～月詠どす～」
「マスターの従者、ペルシクムです」
「闇の福音こと、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルだ」
「絡操茶々丸です」
「ケケケ、チャチャゼロダ、アリスニ似テルジャネーカ」

月詠とペルシクムは兎も角、エヴァは不味かったのか、ネカネの顔色が一気に青褪めた。

「や、闇の福音って・・・・・・６００万ドルの賞金首の・・・」
「あ～・・・一応、彼女も私の従者になって、今は二代目・紅き翼の一員」

そこまで聞いてネカネの身体がフラ～っと後ろに倒れそうになり、慌ててアリスが抱き止めるが、完全に気を失っていた。

「相変わらず、だね・・・」

結局、ネカネをアリスが抱き上げてメルディアナの街にあるネカネの家に運ぶ事となった。
ネカネの家に着いて直ぐに彼女をベッドに寝かせると、アリスはネカネの事をシルヴィア達に任せると、エヴァと木乃香を連れてメルディアナ魔法学園に向かった。
本当はエヴァを連れて行くのは不味いのだが、エヴァはナギに倒された事になっているし、顔を知っている者も殆ど居ないので問題は特に無いと判断した。

「ここがぼーやの学んだ魔法学園か」
「結構、広いんやなぁ」
「まあ、魔法学園は旧世界だろうと魔法世界だろうと、皆同じだけどね・・・。さて、校長室はっと・・・・・・」

アリス達が向かったのは校長室、アリスやネギ、ネカネにとっての祖父が居る場所だ。

「あ、在った、此処だ」

ノックをして中に入ると、色黒の老人が立っていた。白いローブ

に身を包んだ長い白髪の老人、ナギやネカネの父の父、そしてイギリス最強の魔法使いだ。

「おおう、久しぶりじゃなアリス・・・随分と強くなった」

「久しぶり、お祖父さん・・・元気そうで何よりだよ」

校長は久しぶりの孫の顔に笑みを浮かべながら歩み寄ってきた。やはり孫は可愛いものなのだろうか。

「む？　そちらのお嬢さん方は・・・・・・」

「ああ、私の従者で」

「近衛木乃香です」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウェルだ」

「何と、コノエモンの孫娘と闇の福音とはの・・・・・・流石はナギの息子じゃわい」

エヴァの名を聞いても特に驚いた様子も、警戒した様子も見せずに笑う校長に、アリスは相変わらずだと苦笑し、木乃香もエヴァも、彼の懐の広さに呆然としていた。

「して？　イギリスに戻ってきた訳は・・・とうとう動くのかの？　前々から言うておった夢とやらに向けて」

「流石・・・・・・その通り、明日には魔法世界に行くよ」

「そうか・・・・・・随分と慌しいが、これもお主の道じゃ、ワシは何も言えん。じゃが、祖父としてこれだけは言わせとくれ・・・・・・必ず生きて、またワシに会いに来るのじゃぞ？　夢枕にでも立ったら上位古代語魔法をお見舞いしてくれる」

「うん、わかった」

祖父より早く死んでくれるな、そう言っているのだ。優しいのか、

過激なのか、流石はナギの父と言うだけの事はあると、エヴァは思ったそうな。

「後でネギも来ると思うよ。汽車で向かってるから少し掛かると思うけど、昼くらいには来るんじゃない？」

「そうか・・・ネギも、行くのじゃな」

「うん。あれも随分と成長しているから、楽しみにしてて」

「そうか・・・・・・」

もう一人の孫、ネギの事を想ってか、更に笑みが深くなる校長に罪悪感を持ちながら、アリスは表面上の笑みを浮かべる。だが、その笑みの裏に木乃香とエヴァは気付いており、二人ともそっと、アリスの手を取って握り締めるのだった。

校長への挨拶も終わり、アリス達はネカネの家に戻ったが、何故かネカネやシルヴィア達だけでなく、ネギ達白き翼も居た。いや、それは別におかしくないのだが、何故３－Ａの生徒の大半が着ているのか、それが問題だった。

「まあ、雪広が居る時点で予想は出来るけど・・・・・・」

大方、実家の財力でもって来たのだろうが、実家の財力を此処まで自由に使う子供というのは何と言うか、親御さんが哀れだと思う。

「許されるのは子供の内、家を継げばそんなことしていられなくなるけど」

最も、最早アリスには関係の無い話だ。あやかは既にアリスにとっては生徒でもない、何の関係も無い赤の他人だ。

「さて、魔法世界に付いて来そうなのは・・・明石裕奈、佐々木まき絵、位か」

他の人間より少し魔力が高い二人をリストアップする。裕奈は明石教授の娘だから当然、魔力も高いのは頷けるが、まき絵は偶然魔力が高かった一般人だろう。アキラと同じパターンだ。

「付いて来なければそれでいいが・・・・・もし付いて来たら、その時は」

精々、捨て駒として役に立ってもらうだけだ。

そして、翌朝・・・・・アリス達、二代目・紅き翼はネギ達が起きるより前、早朝から家を出た。が、ネカネが何故か起きており、見送りに出てきた。

「行ってらっしゃい、アリス兄さん」

「ネカネ・・・・・ああ、今度はいつ会えるか判らないけど、また」

アリスが魔法世界に行く度に泣きそうな顔で見送るのは変わっていなかった。

何となく、それが嬉しかったアリスはネカネの頭を撫で、そして二代目・紅き翼のローブを翻してゲートまで歩き出した。

「必ず、帰ってきてください！！」

「・・・・・ああ、必ず生きてまた」

後ろから聞こえてくるネカネの声に呟きながら、アリスは前を歩く従者達を見る。

全員、アリスと同じローブを纏い、悠然と歩くその姿を視界に納めて、一度瞳を閉じた。

「・・・・・・」

そして、目を開けた時には、アリスの瞳から一切の温かさが消え、冷たい光を宿す。

もう、そこにはアリス・スプリングフィールドは居らず、黄昏の王としてのアリスしか、存在していなかった。

六十六話　「もう一人のスプリングフィールド」（後書き）

次回から、魔法世界に入ります。

そしていきなり現れるアリスの最大の敵！！

六十七話　「魔法世界、宿敵との遭遇」（前書き）

遂に魔法世界に来ました！！

六十七話　「魔法世界、宿敵との遭遇」

英雄と女王の子

六十七話

「魔法世界、宿敵との遭遇」

霧を抜け、ゲートに着いたアリス達は、ゲートが開くまで時間があるので朝食にする事となった。ネカネが前日の夜に用意してくれた弁当を広げ、平らげる頃には人も集まり始めていた。

「今日は随分と少ないんだね・・・」

「ええ、いつもは結構な人がいたんですが」

アリスとシルヴィア、このゲートの利用回数が最も多い二人が集まってきた魔法使い達を眺めながら、その少なさに若干驚いた。普通の人から見れば多いのだろうが、見慣れた人間からすると少ない方だ。

「お、ネギ達も着いたか」

だが、まだゲートが開くまで1時間以上もある。アリスは広げているシートに横になってミュージックプレーヤーのイヤホンを耳に掛けると、適当な音楽を聴きながら仮眠を取った。

アリスが目を覚ました頃には、既に残り十数分まで迫っていたので、シートを仕舞い、第一サークルに移動、ゲートが開くのを待つ。

「・・・・・・気付いているな？」

「ええ・・・」

「居るな、最強クラスの人間が」

アリスとシルヴィア、エヴァが周囲に警戒を広げ、それに気付いた木乃香たちも既に警戒していた。

「お嬢さま・・・？」

「せっちゃん、気ぃつけや・・・やばいの居るえ」

「っ！　し、しかし・・・私の三重の危険感知の術法には何の反応もありませんが・・・・・・・」

「せっちゃん、実力差を考えや・・・最強クラスの人間が、格下相手に気付かれる様な事、せぇへんやろ？」

グサっという音が刹那から聞こえた気がするが、特に問題ではないので、木乃香は引き続き警戒を続ける。

この場ではもう荒事は出来ないので、恐らく事を構えるとしたら魔法世界に移ってからだ。いつでもアリスの影から武器や仮契約カードを取り出せる様にアリスの近くに寄った。

「時間だ」

鐘の音が響き、５回目の音が止むのと同時に地面が光りだした。膨大な魔力がゲート全体を包み、上空へ向けて集まりだす。

「白き翼が煩いな・・・」

「チッ、ガキ共が・・・」

特にハルナや古、小太郎が煩い。本気で観光旅行にでも来ているつもりなのだろうか。

「開いた」

ゲート上空に五重の巨大魔法陣が展開され、その中央に地面からの光が貫通した。更に眩い光が視界を包み、完全に視界が真っ白になるのと同時に、ゲートに集まった人間全員が旧世界から消え去る。

光が収まった時、旧世界のゲートには誰一人、存在していないのであった。

光が収まり、アリス達が目を開けると、そこは建物の中・・・、メガロメセンブリアのゲートポート内だった。

アリスは直ぐに全員を連れ、入国手続きに向かった。ネギと刹那も入国手続きに向かい、カウンターで入国書類にサインをする。

「ん？　ネギ・・・杖とか預けてたんだ」

「え・・・？　うん、マクギネスさんにメガロメセンブリア内は武器の携帯に許可が必要って聞いたから」

アリス達はヘラス帝国経由で許可書は発行されているので預けていないが、学園長も許可書の発行くらいはしておけば良かったのではないだろうか。一応、麻帆良はメガロメセンブリア元老院の下位組織なのだから、それぐらいは可能だっただろうに。

「あ、あの・・・失礼ですが、二代目・紅き翼のアリス・スプリングフィールド様ですよね？　・・・握手をお願い出来るでしょうか？」

「ん？　ああ、どうぞ」

「光栄です。お父様は私の憧れでしたが、アリス様も私達の憧れの的で・・・・・私たち、アリス・スプリングフィールドファンクラブの会員なんです」

「あ、それってメガロでも居たんだ・・・」

ファンクラブの存在は知っていたが、まさかメガロにもファンクラブの会員が居たとは思わなかった。

「ね、ネギ先生！　アリス先生！　大変よ！　ゲートに密航者が・・・あなた達の生徒よ！！」

やはり来た。と、アリスは内心呆れていた。見に行ってみれば、予想通り、まき絵、裕奈、亜子の三人が居て、何故かカッパを来て泣きべそかいていた。

「マクギネス・・・アレはもう私の生徒ではない。この世界に来た以上、既に一般人ではなくなった」

「し、しかし、それでは・・・・・・」

「構わないだろう？　自業自得なんだ・・・密入国者として逮捕してしまえ」

流石にマクギネスは友人の娘が居るとなると、そのまま犯罪者として逮捕というのは心苦しいのだろう。アリスからすれば甘い考え、くだらない感傷だ。

「アレ等の事はあなたとネギに任せる。アキラの友人も居るが、この世界ではそんなもの、役に立たないという事を思い知る良い機会だ」

そう言い放って立ち去ろうとした時だった。背筋を走る悪寒、そして微かに感じる敵意と、殺気・・・・・・。

「っ！　シルヴィア！！　エヴァ！！」

「っ、みんな構えて！！」

「来るぞ！！」

アリスは影から全員の武器、仮契約カードを放出して、それぞれが受け取ると、直ぐに警戒、戦闘の構えを取った。

「マクギネス！　完全なる世界だ！　居るぞ！！」
「そ、そんな！？」
「早く！　警備兵に通達急げ！！」
「わ、わかりました！」

“姫”を一瞬で焔雷の獄姫にして全周囲に意識を飛ばすと・・・・・見つけた。間違いなく、アリスの宿敵、完全なる世界の幹部が二名。

「フェイト・アーウェルンクス！　デュナミス！」

石の槍が見えた。それがネギに向かって投擲され、その身体を貫こうとしているが、アリスが瞬動でネギの前に移動して、飛来した石の槍を切り裂いた。

「兄さん！？」
「さっさと逃げろ！　邪魔だ！！　そこのガキ共も連れて行け！！」

最早、嘗ての生徒を名前で呼ぶ事も無い。ガキ共と一括りで纏め、邪魔だと激を飛ばした。

「久しぶりだねアリス君、二代目・紅き翼・・・それにネギ君と神明流剣士と犬上小太郎、その仲間達」

更に飛来した雷を障壁で防ぐが、近くに居た警備兵は一瞬で絶命する。

雷が落ちた後の煙の中を歩いて来るのは、忘れもしない。フェイト・アーウェルンクスと、ネギ達は初見だが、アリスはよく知っている。

デュナミス、墓所の主の二人もフェイトの後ろに控えていた。

「勢ぞろいか・・・貴様御自慢の従者は如何した？」

「彼女達は今は居ないよ・・・それにしても、君は随分と力をつけたみたいだ・・・・・・まさか、完全に気配を消していた僕に気付いて、更にはあの一撃を切り伏せるなんてね」

フェイトは真っ直ぐアリスを見ている。アリスの後ろにいるネギや、白き翼のメンバーには一切目を向けていない所を見ると、眼中には無いのだろう。

「しかし困ったね。僕たちは此処に用があるんだけど、二代目・紅き翼がいるんでは、少々不味い」

その言葉でシルヴィアと月詠が飛び出した。

ランス・オブ・ジュエルを構えるシルヴィアと、小太刀二刀のアーティファクトを構える月詠をデュナミスが応戦し、同じく飛び出したアリスとエヴァをフェイトが相手をする。

「へえ、闇の福音も仲間にしているなんて、流石だね」

「ふん、人形ごときが、この最強の魔法使いを相手に勝てるつもりか？」

「まさか、僕では君には勝てないけど・・・これくらいは出来る」

黒い石で出来た剣を無数、翼のように周囲に展開したフェイトはエヴァとアリスに向けて瞬動に入る。

移動しながら石の剣で切りかかってくるが、アリスの“姫”とエ

ヴァの断罪の剣の前には鈍ら同然、半数を破壊されてしまうが、フェイトに焦りの表情は無い。
飛び上がりながら前方に展開した数十本の黒い石の杭がアリスとエヴァ、ゲートポートにいる全員に向けて発射された。

「ネギ達は・・・！」

今丁度、明日菜が封印箱を殴って杖や武器などを取り出した所だった。だが、それでは間に合わない。

「仕方ない！　術式武装解除！　王家の魔力、展開！！」

焔雷の獄姫を解除して両目がオッドアイに変化したアリスは、王家の魔力を姫に纏わせて上段に構える。

「全てを掻き消せ！！　無極而大極斬！！」

明日菜が得意とする魔法無効化の斬撃、明日菜と同じ王家の魔力を持つアリスに、出来ない道理は無い。
斬撃が杭を全て掻き消したが、その一撃で“姫”に纏わせた王家の魔力は尽きてしまう。そして、更なる魔力を感じて上を見上げて絶望した。
フェイトの魔法の一つ、冥府の石柱が既に迫ってきていたのだ。

「エヴァ・・・アレ、破壊出来る？」
「時間が足りんな・・・」
「私も高速詠唱でも間に合わないと思います」
「切るのに時間掛かりそうやなぁ」

当然、アキラや木乃香、さよでも無理、ペルシクムや茶々丸でも

時間や火力が足りない。チャチャゼロは論外だ。

「仕方ない・・・木乃香ちゃん！　アキラ！　さよ！　ペルシクム！　こっちに！！」

アリスの傍に全員が来たのを確認し、次にネギ達を見る。未だに混乱しているのか、間に合いそうに無かった。

「まさか、こんなに早く切り捨てる事になるなんてね」

アリスとエヴァ、二人掛かりでの転移魔法を発動、冥府の石柱がゲートポートを直撃する直前に、転移する事に成功するのだった。

六十七話　「魔法世界、宿敵との遭遇」（後書き）

え～……アリスはゲートポート破壊現場から逃走、ネギ達はあの後、原作通りフェイト達によって強制転移、世界中に散らばりました。

アリス、ネギに全部押し付けます。面倒ごとをｗｗ

六十八話　「ヘラス帝国のジャジャ馬姫」（前書き）

これから暫くはオリジナルの展開が始まります。
ネギ達は時々出てくる位ですかね？

六十八話　「ヘラス帝国のジャジャ馬姫」

英雄と女王の子

六十八話

「ヘラス帝国のジャジャ馬姫」

ゲートポートから何度か転移を繰り返してアリス達はヘラス帝国に来ていた。

ヘラスに来て直ぐ王城に向かい、門番に二代目・紅き翼のローブを見せると快く中に入れてくれた。

「少々お待ちを、只今テオドラ殿下を呼んでまいります」

貴賓室に案内されたアリス達に紅茶と茶菓子を用意したメイドは、頭を下げて退出する。アリス達はヘラス帝国の紅茶を楽しみながら、皇女テオドラが来るのを待った。

「ほう、亜人の国の紅茶も中々・・・良い茶葉を使っているではないか」

待っている間、紅茶の味に太鼓判を押しているエヴァを微笑ましげに眺めながら、扉の向こうに気配を感じたアリスは立ち上がる。

扉が開かれ、中に入ってきたのは褐色肌の女性・・・このヘラス帝国皇女のテオドラだ。

「久しいのアリス、よく来た」

「お久しぶりでございます。テオドラ様・・・」

「よいよい、もう少し気楽にせい。まったく相変わらずの堅物の様

じゃの・・・アリカの息子と言うだけの事はある」

テオドラ皇女はアリスの母であるアリカの友人だ。当然、アリスが幼い頃から知っているし、今も随分と世話になっている。

「しかし・・・暫く見ん内に二代目は随分と増えたのう。お？　シルヴィアもおったか、久しいな」

「はい、御壮健そうで何よりです」

「うむ、それに・・・ほう、主は闇の福音か・・・本当に二代目のメンバーは面白い」

「ふん、私だけではない。そこにいる近衛木乃香はサムライマスターの娘だ」

「何と！　青山詠春の！！」

ナギとアリカの息子であるアリス、詠春の娘である木乃香、そして闇の福音のエヴァ、中々の大物揃いにテオドラは面白そうに笑う。更に此処に英雄ラカンとアルビレオ・イマ、タカミチも入るのだから、本当に凄いメンバーだ。

「して、ここに来たのはメガロメセンブリアのゲートポート事件についてじゃな？」

「はい、あそこには私たちも居たのですが・・・完全なる世界を相手に足枷が多く、逃げるので精一杯で、あの後の事を把握していないのです」

「ふむ・・・結論から言うと、旧世界と此方のゲートは完全に破壊され、橋が完全に消滅した」

やはりそうだったかと、アリスは顔を顰めた。タカミチが遅れて来る事になっていたが、これでは来る事など出来ない。

「それとな、ゲートポート破壊の犯人が事件当時の映像付きで指名手配されておる」

テオドラが取り出した手配書にはネギ達、白き翼の面々が写っていた。この辺はアリスの予想通りだ。

「成る程、これを見る限り・・・まだメガロメセンブリア元老院には完全なる世界の構成員が紛れているみたいですね」

「やはりこのネギという少年はアリスの関係者か？」

「ええ、弟です」

「ほう、アリカに第二子がおったとは、驚いたのう」

ケラケラ笑ったテオドラだったが、直ぐに顔を引き締めて手配書の中から、一人の写真を指差した。

「この娘、黄昏の姫巫女じゃな？」

指差した写真に写っていたのは、神楽坂明日菜だ。

「・・・ええ、間違いなくアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアです」

「そうか・・・生きておったのじゃな」

「旧世界で、記憶を消した上で学生をしていました」

「・・・・・こちらに来ないで、そのまま唯の少女として生きておれば、幸せじゃっただろうに」

確かに、そうなのだろう。黄昏の姫巫女は完全なる世界にしろ、ヘラス帝国にしろ、メガロメセンブリアにしろ、アリアドネーにしろ、大変重要な人物だ。

２０年前の大戦を知る者は誰もがその危険性と、重要性を知って

いる。旧世界で何も知らず、普通の少女と変わらない人生を送っていれば、どれ程幸せだっただろうか。

「アリス、お主の計画にはアスナ姫の存在は重要か？」
「・・・そうですね、私でも代わりが出来るように修行はしてますが、いざという時は必要になるかと」
「最も、最終的に必要なのはアリカ、か・・・・・・」

計画、それは最終的にはアリスの夢に繋がるが、その前段階の計画だ。この魔法世界の運命を左右する大きな計画、アリスはヘラス帝国と協力して完全なる世界、メガロメセンブリア元老院とは違う計画を立てているのだ。

「して、これから如何する？」
「ええ、この後はグラニクスに行ってラカンと合流する予定です」
「おお！　ジャックとか！　ならばジャックに伝えといてくれぬか？　たまには妾の所に顔くらい見せよ。とな」
「ええ、確かに伝えておきます」

テオドラに見送られて王城を出たアリス達は此処で分かれる事になる。

エヴァと茶々丸、チャチャゼロは予定通り廃都オスティアに向かい、アリスとシルヴィア、ペルシクム、月詠はグラニクスへ、木乃香、アキラ、さよの三人はアリスに頼まれごとをされているので新オスティアへ行く事になる。

「それじゃあ、ここで一時お別れだ」
「ああ、元気でな」
「アリスさん、無茶はしたらあかんよ？」

影を使った転移魔法で去るエヴァ達と、水を使った転移魔法で去る木乃香達、それを見送ったアリスはシルヴィア達と共にヘラス帝国の空港へ向かった。

空港に着いたアリス達の目の前にあるのは、一隻の船・・・・・・龍樹をモチーフにした形の紅い船で、二代目・紅き翼の母艦でもある。ボディに金色で翼が描かれているのは、これが二代目・紅き翼の船だという証だ。

「マスター・・・これは船というより、戦艦では？」

「見た目は船だよ」

そう、見た目は船なのだから良いだろう。たとえ擬態を解けば一国を滅ぼせるだけの武装を装備していようと、見た目が船ならばそれで良し。

「私達のこれからの行動はこの“クリムゾン”を拠点にする」

アリスが魔法世界で行動する時はいつも利用していたクリムゾン、今日からは世界の命運を掛けた戦いの中を航海する重要な存在となる。

紅いボディが太陽光に照らされて輝くその姿は、主であるアリスを、そして新たなメンバーを歓迎しているかのようだった。

クリムゾンの中に入ったアリス達は艦橋に入り、操舵席に座っている人物に声を掛けた。

「久しぶりだな、クレイ」

「ん？　おお！　アリス様でねぇか！　なんだ、来てたんですかい？」

操舵席に座っていた男性は白い肌に茶色の髪を短髪にしている。
名はクレイ・ヴォードン、元はウェスペルタティアの民で、オスティア難民だったのをアリスが拾い、ヘラス帝国で生活を保障されていたのだが、今ではアリスも頼りとするクリムゾン操舵士をしている。

「ああ、悪いけど直ぐに発進してくれ、新しいメンバーは後で紹介するから、とりあえずグラニクスへ」
「よっしゃ！　任せといてくだせぇ！」

威勢良く席に座って操縦桿を握ったクレイはクリムゾンのエンジンを点火させてゆっくりと発進させる。

「んじゃあ・・・クリムゾン、発進だぁ！！」

空へと飛び上がったクリムゾンは一路、グラニクスに向かう。

「アリスはん、ウチ眠うなってもうたわ・・・・・・此処って休める所はあれへんの？」
「ああ、船室に案内するよ」

操縦はクレイに任せ、アリス達は艦橋を出た。
艦内はそれなりに広く、船室も一人一室は当たるだけの数があり、アリス用の部屋とシルヴィア用の部屋、クレイ用の部屋、ラカン用の部屋、タカミチ用の部屋と用意してあるが、まだまだ余裕があった。

「えっと、じゃあこの部屋と、隣の部屋、空き部屋だから月詠とペルシクムで使って」
「ここがウチの部屋やねぇ～」

「ありがたく、使わせていただきます・・・」

持って来た荷物を部屋に入れて、中を自分の使いやすいように改造する事も出来るので、暫くは出てこないだろう。

シルヴィアも持って来た宝石の整理をしたいと言って部屋に篭ったので、アリスは木乃香やエヴァ達の部屋割りを決める為に空き部屋を回って扉のネームプレートに名前を書き込んでいく。

「さて、ラカンと合流出来ても・・・タカミチがこっちに来れないのは、結構痛いな」

魔法世界に入ってからの誤算、それはタカミチを後から来るようにした事だ。一緒に来ていれば良かったのだが、後からの合流にしてしまったお陰で、タカミチは魔法世界には来れない。

「タカミチ抜きでか・・・最悪だな」

正直、ガトウの弟子だったタカミチの諜報能力は高い、それを頼りにしている所が大きい分、かなりの痛手となってしまった。

「タカミチが抜けた穴を、如何にかして埋める必要があるけど・・・・」

そこで頭に浮かんだのは、一人の少女の姿。白き翼のメンバーで、アリスが唯一評価している人間だ。

「彼女を、見つけるか・・・何とか彼女を味方に付けて、タカミチの代わりになれば」

彼女の能力は、正直欲しい所だ。最初は役に立たないと眼中に無

かった存在だが、魔法世界に来る前に見せた姿勢は、アリス的には、是非とも欲しい人材と言える。

「ラカンと合流してからの行動指針も、これで決まったな」

ラカンと合流次第、アリス達は人捜しをする事になった。

探す対象は唯一人、白き翼の読心術師、宮崎のどかだ。

六十八話　「ヘラス帝国のジャジャ馬姫」（後書き）

のどか、いつの間にかアリスに目を付けられてます。
何気にのどかって魔法世界では活躍してますからねぇ。

六十九話　「最後のメンバー、英雄ラカン」（前書き）

二代目・紅き翼最後の一人、本編初登場！！

六十九話　「最後のメンバー、英雄ラカン」

六十九話
「最後のメンバー、英雄ラカン」

グラニクスに着いたアリス達、直ぐに二代目・紅き翼の最後のメンバーが住んでいる場所に向かった。
街から少し離れた所にある砂漠に囲まれたオアシス、湖を中心に立てられた家こそが、最後の一人にして大戦の英雄が住む場所だ。

「楽しみやわぁ～、伝説の英雄・・・強いんやろなぁ」

何故か小太刀二刀を持った月詠がゾクゾクしている。直ぐにでも切りかかりそうな勢いだ。

「さて・・・・・ラカン！！　来たよ！！」

もっとも、アリスも大概だろう。挨拶と同時に雷の斧を家に向けて放つ辺り、随分と過激な関係なのだろう。

「ぬぴょぉおおおおおおう！？」

屋根を突き破って落ちた雷の斧が、家の中に居た人物に命中したのだろう。何かとんでもなくアホな悲鳴が響き渡ったが、気にする事なくアリスは扉を開ける。
だが、扉を開いた瞬間、拳がアリスの顔面を捉え、突然殴られたアリスは派手に吹き飛んで近くの木に激突した。

「アリスてめぇ！！　毎回毎回、随分な挨拶してくれんじゃねぇかコラァ！！！」
「あ、アリス様ぁ！？」
「あや～・・・・・・」

家の中から出てきたのは、所々が煤けた褐色肌で筋肉質なヘラス族の男性・・・・・・。

「行くって手紙だしてるのに迎えを忘れるお前が悪いんだろうが！この筋肉馬鹿が！！」
「んだとぅ！？」
「おやめなさいラカン！　アリス様も！！」

シルヴィアの一喝でやっと口論をやめたアリスとヘラス族の男性・・・ラカン。
そう、この男性こそが二代目・紅き翼の最後の一人であり、初代・紅き翼のメンバーだった英雄、ジャック・ラカンだ。

「チッ、それで？　随分と早かったじゃねぇか・・・・・・何かあったのか？」
「ん、実は・・・・・・」

アリスが語ったのはゲートポート襲撃事件の事、それから新たに増えた二代目・紅き翼のメンバーの事。そして、タカミチの事と、これからの事だ。

「成る程な・・・・・タカミチはこっちにこれねぇって事か。ちと不味いんじゃねぇか？　アイツの諜報力は正直、オレも当てにしてたんだぜ？」

「ああ、だから代わりを用意しようと思う」
「代わりだぁ？」

アリスが取り出したのは手配書、白き翼が写った手配書だ。テオドラにコピーを貰って持って来たのだ。

「この子・・・名前は宮崎のどかって言うんだけど。アーティファクトにいどのえにっきを持っている」
「いどのえにっき!?　おいおい、マスターピースのアーティファクトに選ばれたってのか、この何の変哲も無さそうな嬢ちゃんが」
「旧世界の、普通の中学生だったんだけど・・・縁があってね。少しだけ修行を見ていたんだ・・・中々の人材だよ、こっちに来る時も、危険を視野に入れて私に瞬動の教えを乞うてきた。元一般人にしては中々の危機感だ」

その言葉にラカンが感心したように口笛を鳴らした。アリスが評価する位だ、随分と肝の据わった人物なのだと、予想は出来る。

「つまり、このかって嬢ちゃんをタカミチの代わりにするって事だな？　だがよ・・・初心者に諜報なんて出来るとは思えねぇぜ？」
「だろうね、私もそこまで期待はしてない」
「・・・ほう？」
「肝心なのは彼女のアーティファクトさ・・・・・・相手の心を読めるって事は、隠し事も直ぐに読み取れるって事だ」

諜報は無理でも、のどかの使い道はいくらでもある。

「随分と腹黒い事を考えているみたいだが・・・気ぃつけろよ。てめぇの考えは王族としては間違ってねぇが、結構危ない橋だぜ」

「重々承知してる。夢を叶える為なら私は正義にも悪にもなるさ・・・・・鬼でも悪魔でも、好きな様に呼ばれても構わない」

手段は問わない。たとえ何と言われようと、アリスは立ち止まる事は許されないのだから。

ラカンとの合流も済んだ。後はアリス達も本格的に動かなければならないだろう。

「ラカン、ラカンには遊撃に回ってもらいたい」
「遊撃だぁ？」
「そう、それともう一つ・・・多分だけど、私の弟・・・ネギと会う機会もある筈だ」
「ほうほう、ナギとアリカのもう一人の息子か」
「もし、ネギに会ったなら・・・鍛えてやって」
「ん？　良いのか？」

アリスの計画はラカンも知ってる。その計画にネギの存在は必要では無い筈なのに、何故ネギを鍛える必要があるのか。

「アレには、完全なる世界とメガロメセンブリア元老院を引っ掻き回してもらいたいんだ。この二つの組織の目をネギに向けさせて、その隙に私達は大きく動く」
「その為には、計画終了まで死なない様、強くなってもらうってか？」
「そうなる」

つまりは囮だ。ネギ達を囮に使うから、計画が終了するまで死なない様に鍛えろと言っているのだ。

囮が途中で死んでしまっては、アリス達の計画にも支障をきたす

可能性が出てくる。だから死なない様に強くなってもらわないと困る。

「へっ、目的の為には弟も利用するか・・・・・・あまり好みじゃねぇぜ？」

「まあ、ラカンはそう言うと思うけど・・・・・・正直、そんな事を言ってられない事態になるかもしれないんだ」

「・・・何？」

出しっぱなしになっている手配書、それをペルシクムが指差した。

ラカンはペルシクムが指差した写真に目を向けると・・・・・・驚愕で目を見開く。そこに写っていたのは、ラカン自身、忘れもしない。

「おいおい・・・何で姫子ちゃんがここに居んだよ」

「今は、ネギの従者だ」

「不味い所の騒ぎじゃねぇぜ！　てめぇの弟は何て子を連れてきちまったんだ！！」

写真に写っていたのは神楽坂明日菜、黄昏の姫巫女だ。

完全なる世界にとって、最後のピースが自ら歩いてきた様なものだ。その危険性、重大性が嫌でも理解出来たラカンは、久しぶりに冷や汗を流していた。

「理解出来た？」

「ああ・・・・・・こりゃ、手段を選んでる余裕は無ぇな、確かに・・・・・・」

「グレートグランドマスターキーが奴等の手にある以上・・・計画は急がねばならない。手段の倫理性なんて二の次だ」

正直な所、旧世界に居た時にアリスが止めていれば良かったのだが、記憶を封印されている彼女には何を言っても無駄だっただろうし、何より、学園長の監視があったので、それ所ではなかった。

「計画を発動するに当たって、ラカンには聞いておきたい事がある」
「姫子ちゃんの事だろう？」
「うん、叔母さんの記憶・・・解いた方が良いと思うんだけど」
「・・・・・それは、オレに一任してくれねぇか。直接会って、判断してぇ」
「・・・・・わかった。この事については全部、ラカンに任せるよ」

普段は馬鹿だが、こういう所の判断を誤る事は無いと信頼しているからこそ、ラカンに任せることにした。
後は、アリス達もアリス達で動くだけだ。

「そうだラカン、テオドラ様から伝言・・・偶には顔を見せに来いだってさ」
「ああん？　何だ、アイツんとこ寄って来たのか・・・面倒くせぇな」

口ではそう言うが、満更でもなさそうなラカンを見て笑うアリス達。後の事はラカンに任せ、アリス達は再びクリムゾンに乗り込んだ。

「・・・・・あ」
「月詠？　如何かした？」
「ラカンはんと試合うの忘れとったわ～・・・あ～ん、折角の強い人がぁ～」
「・・・・・、今度また会うから、それまで我慢ね」

「ほんならアリスはん、代わりに試合ってくれるんどすなぁ？」

結局、近くの岩場に降りて月詠が満足するまで試合をする事になったが、まあ余談だろう。

アリス達は一路、次の目的地であるアリアドネーに向けて進路を取り、道中、のどか捜しも平行して行うのであった。

六十九話　「最後のメンバー、英雄ラカン」（後書き）

次回はアリス達は登場しません。
舞台を移して新オスティアに向かった木乃香たちが主役です。

七十話　「未来の中心」（前書き）

今回のサブタイトル…実はフラグです。

七十話　「未来の中心」

英雄と女王の子

七十話

「未来の中心」

新オスティア国際空港に降り立った木乃香、アキラ、さよの三人は先ず、自分達の寝泊りする場所を決める事から始めた。

幸い、アリスから高級リゾートエリアの一級ホテルの宿泊チケットと、数ヶ月は滞在可能なだけの費用を貰っているので、空港から更に移動する事半日、リゾートエリアに着いた三人は直ぐにチケットに載っているホテルにチェックインする事ができた。

「それにしても、アリスさんは凄いなぁ」

「うん、このローブを見せて本物だって判っただけでロイヤルスウィートに泊まれるなんて」

リゾートエリア最高級のホテルの、最高級の部屋であるロイヤルスウィートは当然、一泊するだけでも旧世界のサラリーマンの一生分の収入よりも高い金額を取られる。

だが、二代目・紅き翼の知名度は凄いもので、ローブが本物だと判っただけで宿泊費は半額になり、数ヶ月の滞在も可能になったのだ。

「凄いですね～、お風呂なんて最上階だから露天風呂まであります よ～」

風呂を見てきたさよが、その凄さに感激しながら一番風呂に入る

と意気込んでいた。目的を忘れてはいないが、まだまだ１４、１５歳の少女達だ（約一名、６０歳を超えているが）・・・・・少しばかり高級なホテルの部屋に感激していたとしても罰は当たるまい。

「ねえ木乃香、この後の予定・・・確認しよ？」
「せやね・・・さよちゃん、ちょい来てやぁ」

風呂にはしゃぐさよが戻ってきてソファーに座った所で、アキラが部屋に備え付けられていた紅茶・・・オスティア名物のオスティアンティーを淹れて、それを飲みながらアリスから貰った資料を並べる。

「まず、このオスティアで気をつけなければならないのは・・・」
「これですねぇ・・・オスティアの総督、メガロメセンブリア元老院のクルト・ゲーデル」
「せや、初代の裏切り者ってアリスさんも言うてた人やえ」

資料に写った写真には、眼鏡の男性・・・・・クルトが写っている。備考欄には初代・紅き翼の一人で、青山詠春の弟子、神鳴流の使い手と書いてあった。

「お父様の弟子やったんなら、弐の太刀は使えるやろな」

魔法障壁は先ず、役に立たないだろうし、さよの使役する霊も天敵だ。

「一先ず、アリス先生に言われているオスティア難民の人と接触・・・さよちゃんには本来の不可視霊を使ってのオスティア全域の偵察をお願い」

街中では二代目・紅き翼のローブは目立ちすぎるから、一応持って来た普通のローブを着用する事にして、アリスの仲間だという証明はローブ以外の証である指輪を使う事になった。
この指輪、魔法発動体としては使えないが、装飾されているルビーに魔力を通すと翼の紋章が浮かび上がる仕組みになっているのだ。これがローブを使えない時の、または紛失した時の為の二代目・紅き翼の証明になる。

「ほな、さよちゃんには偵察を、アキラちゃんはピンヘ村と中心市街の東南側を、ウチは中心市街の北西側とナイーカ村を周るって感じでええね？」
「はい～」
「わかった」

新オスティアはメガロメセンブリアから移住してきた人間が多いが、旧オスティアの民も少なくない。アリスの伝は此処でも随分と広まっているらしいので、アリスに頼まれている根回しには、苦労する事もそんなに無いだろう。

「ほな・・・・・動くのは明日からにして、今日は高級ホテルを思う存分満喫するえ！！」
「「おおー！！」」

流石は高級ホテルだ。資料を片付けて開いたホテルの案内図を見る限り、一生お目に掛かれないのではという程の施設があった。
ホテル自体は８０階建て、各階には転移魔法陣で一瞬で移動出来るので、見て周るのに時間が掛かる事もない。
レストラン、カフェ、バー、マッサージ施設、大浴場、宴会場、ゲームコーナー、エステコーナー等々、一つの施設でも最高級の御持て成しを用意しており一つ一つのスペース自体も木乃香の実家程

の大きさだ。

「ウチは此処に行くわ・・・エステで綺麗になって、アリスさんをメロメロにしたる！」

「私はプールに行こうかな・・・凄く広いから、泳ぎ応えがありそうだ」

「私は早速大浴場に行ってきますよ～」

因みに、それぞれの施設は有料なのだが、ロイヤルスウィートの宿泊者に関しては特別パスが発行されており、無料で施設の利用が出来る。

「ほな！」

「うん！」

「はい！」

「「「楽しもう！！」」」

この日、新オスティアの高級リゾートエリアにある最高級ホテルでは、三人の少女の笑顔が絶える事が無かったらしい。

前日は思う存分遊んだ三人娘だが、翌朝には既に年相応の少女の顔から、現在の魔法世界屈指の最強集団、二代目・紅き翼のメンバーに相応しい引き締まった表情になっていた。

「ほな、さよちゃんはホテル待機での偵察、頼むな」

「はい、木乃香さんとアキラさんも気をつけてくださいね」

「大丈夫、ちょっとした事でも対応出来る様に、修行してきたから」

ローブを羽織り、ホテルを出た木乃香とアキラは旧世界で言うと

ころのバス停で分れる。
　中心市街へ向かい、そこからナイーカ村へ向かう木乃香と、このまま真っ直ぐピンヘ村へ向かうアキラは乗る便が違うのだ。

「アキラちゃん、気いつけてな」
「うん、木乃香も・・・」

　たとえ新オスティア内とは言え、此処はメガロメセンブリアの領地、総督府にはクルト・ゲーデルも居るのだ。油断は絶対に出来ない。

「ほな」
「うん」

　お互いに初めての発動体である指輪を填めた拳をぶつけ、分かれた。次に会うのは今夜とは言え、既に敵地・・・長い一日になると、そう思った。

　オスティア総督府の総督執務室にて、一人の男性が書類に目を通していたが、扉を叩く音で顔を上げ、入室を許可する。
　中に入ってきたのは甲冑を着込んだ騎士で、兜で顔が見えないが、男性の部下だと判ると机の下で抜きかけていた野太刀を再び鞘に収めた。

「ゲーデル総督、報告したい事が一つ」
「何でしょう?」

　男・・・クルト・ゲーデルは書類にサインをしながら続きを諭す。

「昨日、リゾートエリアに二代目・紅き翼の人間が現れたとの事です」
「・・・・・ほう？」
「目撃されたのは少女三人、エリア一のホテルにチェックインしたのですが、その時に二代目・紅き翼のローブを見せ、それが本物だとホテル側が確認したらしく・・・」
「少女三人ですか・・・聞いた事がありませんねぇ」

クルトはデスクの引き出しから二代目・紅き翼のメンバーの写真を取り出した。写っているのはアリス、シルヴィア、ラカン、タカミチの四人だ。

「新人という事、ですかね？」
「でしょうね・・・確かアリス・スプリングフィールドは一年ほど、旧世界に居たと聞いてますので、向こうで新たに迎え入れたのでしょう」

そして、同時にある確信を得た。それはアリスが魔法世界に来ているという確信であり、クルトにとっては重要な駒が揃ったという歓喜が湧き上がる。

「近い内にアリス君はオスティアに来るでしょうね・・・ならば盛大に歓迎するのが我々の礼儀でしょう・・・・・そう、近い未来、我等の同士となるアリス君に対する・・・礼儀にね」

クルトは騎士に現在オスティアに来ている少女三人・・・木乃香、アキラ、さよの写真を用意しておく様に指示を出し、自身は再び仕事に戻った。

最も、その表情は気持ち悪いほどの歓喜に満ちて、いやらしい笑顔が浮かんでいたのだが、騎士が退出した今、それを知る者はいな

ไว้

七十話　「未来の中心」（後書き）

次回は廃都オスティアに向かったエヴァ達が中心になります。

七十一話　「王家の跡地、吸血鬼の思い出」（前書き）

エヴァ、強化フラグｗｗ

七十一話　「王家の跡地、吸血鬼の思い出」

英雄と女王の子

七十一話

「王家の跡地、吸血鬼の思い出」

新オスティアから２５キロ地点、嘗ての王都があった廃都市・・・廃都オスティア。霧に包まれ、嘗ての巨大都市郡は今や魔獣蠢くダンジョンと化している。

その危険地帯に降り立ったのは世界最強の魔法使い、闇の福音ことエヴァンジェリン、従者の茶々丸とチャチャゼロだ。

「ほう・・・随分な荒れ具合だな」

「マスター・・・周辺を検索してみましたが、どうやら魔獣以外は存在していないみたいです」

「そうかそうか・・・ならば唯のゲート捜索に退屈はしなくて済みそうだ」

魔獣程度に後れを取るようなエヴァではない。寧ろ退屈な時間を過ごさずに済みそうで、若干だがご機嫌だ。

「楽しそうですね、マスター・・・」

「ケケケ、オレモ早ク魔獣ヲ切リ刻ミテェゼ」

生まれて６００年以上、初めて訪れた魔法世界だが、中々如何して・・・楽しませてくれる所だと歓喜したエヴァは、手始めに背後から襲いかかってきた魔獣の首を、振り向き様に断罪の剣で切り落とした。

「ああ、これだ・・・やはり私の人生はこうでなければ面白くない！」

魔獣の返り血は、エヴァ達に降り注ぐ前に氷って地面に落ちる。倒れた魔獣の身体に目も向けずにエヴァ一向は奥へ進んだ。これから襲い掛かるであろう魔獣達を楽しみにしながら、更なるレベルアップも考えて。

「待っていろアリス、貴様の望み通り、ゲートは捜してやる・・・・・・そしてついでだ、私自身も更に強くなって貴様に会いに行こうではないか！！」

昼間からハイテンションなエヴァだったが、夜になると疲れてきたのか元気だが元のテンションに戻っていた。

「しかし・・・私たちだけが野宿か」

アリス達は船、木乃香達はホテルで寝泊りすると聞いているだけに、不条理だと嘆くエヴァだったが、幸い野宿には慣れているので問題は無い。無い、のだが・・・・・・。

「アリスめ・・・次に会ったらフカフカのベッドで寝かせてくれないと氷の彫刻にしてくれる」

焚き火に拾ってきた枝を投げ入れながら、影の中から取り出した干し肉を焼いた物を食べる。適当に塩を振って味付けたのだが、中々の美味だった。

「む、美味いなこの肉・・・何の肉だ？　アリスから貰った物だが・

・・・・・」
「データ照合・・・・・・魔法世界原生生物のオオトカゲの肉です」
「ブフゥ！！」
「ケケケケ」

オオトカゲとは言うが、その大きさ、見た目はドラゴンのソレだ。

「と、トカゲの肉だと！？　な、な、なんて物を食わせるんだ！！」
「しかしマスター、アリス先生から受け取った肉はトカゲの肉以外ですと、蛇の肉、ドラゴンの肉、グリズリーの肉だけですが・・・」
「ゲテモノ以外に無いのか！？」

唯一まともなのはグリズリーの肉くらいだろうか。兎に角、手持ちの肉は全てゲテモノの肉だけだという事実に項垂れるエヴァだったが、こんな状況だ、贅沢など言っていられないと理解しているから我慢して食べる。

「あ、マスター・・・」
「今度は何だ！？」
「いえ、実はアリス先生から鶏肉を貰っていたのを忘れてました」
「焼く前に言わんかぁ！！」

但し、その鶏肉も実は魔法世界に生息する魔鳥の肉で・・・所謂ゲテモノだった。

ゲテモノの肉で腹を満たした翌朝、今日も今日とてゲート探しの続きをしているエヴァ達、ついでに立ち寄った嘗ての中心市街跡を見て周っていた。

「見事に廃墟だな」
「生命反応、一切感知されません」
「マモノノソウクツダナ、コリャア」

様々な建物があるが、全て崩れたり、風化していたり、とてもではないが人が住めるような場所ではない。
だが、確かにその光景は人の営みがあったという証拠であり、アリスの母がどれほどの苦渋の決断をしてこの光景を作り出したのかが、容易に読み取れた。

「だが、そんなアリカ女王の決断すら利用するメガロメセンブリア元老院は、屑だな」

足元に落ちていたクマのぬいぐるみを拾い、埃を払ってやる。
所々が解れて、布も傷んでいるが・・・人形遣い（ドールマスター）たるエヴァの手に掛かれば、直ぐに直せる。

「ふん・・・・・何故だろうな、こんな気持ち・・・昔に捨て去ったと思っていたのだが」

適当な木の根に座って影から本格的な裁縫セットを取り出したエヴァはクマのぬいぐるみの修繕を始めた。

「・・・・・クマのぬいぐるみ、か」

修繕しているぬいぐるみを見ながら、エヴァは６００年前の事を思い出していた。
まだ人間の少女だった頃、屋敷で両親やメイド達に囲まれて幸せだった頃の事だ。何歳だったかは忘れたが、いつかの誕生日に両親がプレゼントしてくれたぬいぐるみがクマだった。

随分と喜んで、はしゃいで、毎日そのぬいぐるみを抱いていた。
夜寝る時も、常にそのぬいぐるみを抱きしめていたが、そのぬいぐるみは屋敷を焼いた時に一緒に燃えた筈だ。

「・・・・・お父様、お母様」

修繕を終えたぬいぐるみを抱きしめると、何故か脳裏に優しい父と母の顔が浮かんで、頭を撫でてくれた父の大きな手の感触を思い出して、思わず頭に手を添えてしまう。

「・・・・・私の様な思いをする人間を、これ以上生み出さない。アリス・・・お前の仲間になって私が私に誓った決意だ・・・・・・お前の夢、それが私の誓いに繋がるのなら、必ず・・・・・・」

クマのぬいぐるみを抱きしめ、エヴァは立ち上がる。
ぬいぐるみを胸に抱きながら歩き出したエヴァの瞳は、何故だろうか・・・・・今まで見せたことのない優しい光が宿り、見た目相応の雰囲気が感じられた。

「茶々丸、チャチャゼロ、行くぞ・・・ゲート、必ず見つけ出す」
「イエス、マスター」
「ナンダ、ゴシュジン・・・ムカシニモドッタノカ・・・・・・アリス、コレデサイキョウダナ」

感じられる雰囲気、瞳の奥にある感情は優しい。だが、それは見る者が見れば顔を青褪め、相対しただけで逃げ出そうとするほど、恐ろしいという感情に支配されるだろう。
怒りや憎悪を向けられるよりも恐ろしい、優しい眼差しで殺される事、その何と残酷な事か・・・・・・、それを目の当たりにするのは、果たして完全なる世界か、それともメガロメセンブリア元老

院か、それは誰にもわからない。

その頃、世界各地に飛ばされたネギ達白き翼は、それぞれが生き延びる為に力を磨き、仲間の捜索を続けている。

白き翼のリーダーたるネギは、合流した長谷川千雨、犬上小太郎、朝倉和美と共に協力し合い、奴隷となった和泉亜子と村上夏美を救出する為にネギと小太郎が拳闘士となり、一ヵ月後に行われるオスティア大会を目指すのだった。

「おい、ネギ先生・・・一つ聞きてぇんだがよ」
「何ですか？　千雨さん」
「アリス先生を、本当に捜すのか？」
「はい、兄さん達がゲートポートで僕達を置いて行った理由を聞きたいですし、何より・・・・・嫌な予感がするんです、兄さんを見つけて、話し合わないといけない気がして」

ネギが魔法世界に来てからアリスの事を考える度に感じていた嫌な予感、思い違いであれば良いのだが、血の成せる業か、ネギの予感は結構当たるのだ。

「アリス兄ちゃんか・・・・・確かに、な。俺等が賞金首になって、アリス兄ちゃん達が賞金首になっていないのは、何やキナ臭いわ」

それだけなら二代目・紅き翼の知名度を考えれば納得できるだろうが、生憎、小太郎も感じているのだ、ネギと同じ予感を。

「なら仲間の捜索と同時に、アリス先生の調査もしておこうかな」

和美の提案、アリスの捜索もするが、ここらでアリスを含めた二代目・紅き翼の調査をしておこうというもの。

ネギと小太郎が嫌な予感がすると言うのだ、調査しておいて損はないだろう。そう思って和美は魔法世界に来てから築いたパイプを利用する事を考える。

「お願いします朝倉さん、僕と小太郎君は大会の事で忙しいから、任せてしまう事になりますが・・・」

「問題なし！　任せときなって、あたしも何か引っかかるんだよねぇ。だから丁度良いって」

こうして、二代目・紅き翼と白き翼は、お互い知らないうちに大きな溝が構築されていくのだった。アリス達の思惑、ネギ達の予感。この先、この二つが交わる時、真実が明かされるのだろうか。

七十一話　「王家の跡地、吸血鬼の思い出」（後書き）

次回はアリスに視点を戻します。
のどかが登場！　物語は大きく動き出そうとしてます。

七十二話　「思惑が隠された優しい嘘」（前書き）

のどかが登場、アリスが黒いです。

七十二話　「思惑が隠された優しい嘘」

英雄と女王の子

七十二話

「思惑が隠された優しい嘘」

独立魔法学術都市国家アリアドネー、その中でも魔法騎士団を育成する学園は魔法世界でも有名で、総長であるセラス総長は２０年前の大戦時にアリアドネー魔法騎士団の一人として戦った人物で、その魔法の実力は初代・紅き翼に届かないまでも、並の魔法使いでは歯が立たない程に高い。

「久しぶりねアリス君・・・元気そうで何よりだわ」

「ええ、セラス総長もお元気そうで」

そして、セラスの執務室で彼女と対談するのはアリス、セラスが憧れるナギの息子だ。

「父さんから貰ったっていうサイン、まだ飾ってたんですね」

「ええ、あの人は今でも私の憧れですからね」

雑談はこの辺にして、アリスは影から資料を取り出し、セラスの前に差し出す。

「手配書・・・ですね。それも最近の、私のところに来たのと同じですか」

「恐らく同じですね・・・こっちは私がそれぞれの写真に名前を書いておいたものです」

セラスは渡された名前入り資料を手にとって一人一人の名前と顔を確認していく。だが、二人の名前と顔を見てその動きは止まった。

そこに書かれていた名前は、ネギ・スプリングフィールド、アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの二つ。

「この男の子は貴方の弟？」

「ええ、現在１０歳の弟です」

「そしてこの女の子は・・・黄昏の姫巫女・・・・・・旧世界に逃げたって聞いてたけど、何故戻ってきてしまったの・・・」

アスナが魔法世界に来ている、その事実に頭を抑えて項垂れてしまった。

「アリアドネーの隠密魔法部隊、それを使ってアスナ叔母さんを探し出し、監視してもらう事は出来ますか？」

「出来なくはないけど・・・・・・そうね、確かに事態は四の五の言っていられない事だもの。出し惜しみなんてしていられないわ」

特に完全なる世界の野望は、セラス達の種族も大きな意味合いを持っている。正直、出し惜しみなんてしていたら、待っているのは死だけ。

アリアドネーが誇る魔法騎士団とは別に、学術都市の上層部しか知らない極秘部隊、アリアドネー隠密魔法部隊を動かすのも、吝かではないだろう。

因みに、アリアドネー隠密魔法部隊とは、アリアドネーの卒業生の中でも、隠密行動に向いている者を集めて作り出した極秘部隊で、その任務は名の通り、隠密行動・・・・・・スパイ活動や暗殺、諜報まで広く手掛けている部隊だ。所謂、国の裏の部隊というもので、何処にでもあるであろう裏の存在だ。

「では、お願い出来ますか？」
「ええ、内容は黄昏の姫巫女の捜索、護衛で良いのね？」
「それで・・・私は私で動かなければならないので」
「了解よ・・・・・それと、一つ耳に入れておいて欲しい事があるのよ」
「？」

セラスが最初から張っている防音結界と人払いの結界を更に６重に張り、アリスに顔を寄せて小声で言った事、それはメガロメセンブリア元老院の事だ。

「リカードから連絡があったのよ・・・・・・メガロのジジイ共がアリス君達が魔法世界に来た事に気付いたって・・・多分、何かしらのアクションがある筈よ」

メガロメセンブリア元老院の上層部、２０年前の大戦からずっとその椅子に座り続ける老人達で、アリスを自分達の傀儡にする事を目論んでいる。勿論、最終的に思うとおりに行かなければアリカの面影を残すアリスを処分してネギを傀儡にする事も考えているらしい。

「わかりました・・・一応、気をつけておきます」

執務室を出たアリスは直ぐに影を使った転移魔法でクリムゾンに戻った。

クリムゾンに戻ったアリスは直ぐに発進するようクレイに言いに艦橋へ向かい、中に入るとクレイから通信が入っているという旨を伝えられる。

「誰から？」
「ヘラス帝国のテオドラ様からでさぁ」
「ん」

通信を開くと、テオドラの顔がスクリーンに映る。

「テオドラ様、何かありましたか？」
『うむ、部下からの報告があっての・・・何でも最近とあるトレジャーハンターグループに１４歳くらいの娘が仲間入りしたという事じゃが・・・・・・』
「特徴とかは判ります？」
『髪は短いらしい、ただ前髪だけは目が隠れるくらい長いという事らしいがの・・・髪の色は黒じゃ』

ビンゴ、そんな特徴的な髪型の少女など、宮崎のどか以外に居る筈がない。

「ありがとうございます。間違いなく私が探している少女ですね」
『何、これから妾も顔写真を確認しておくが、何かあったらまた連絡するゆえ・・・またの』

通信を切り、そのトレジャーハンターが現在いる地点の座標を送られて来た地図で確認する。
アリアドネーからは少し離れた冒険者の街を拠点にして活動しているらしく、クリムゾンの飛行速度なら半日で着く。

「よし、クレイ・・・この街に進路を取ってくれ」
「よしきた！　任せてくだせぇ！！」

クリムゾンが発進し、アリスは自室に戻ってきた。

ずっと着用していたスーツを脱ぎ捨て、クローゼットの中から拳闘士の服を取り出して着替える。更に腕に影から取り出した腕輪を着け、腰にベルトを巻くと、鞘に収められた“姫”を差した。

「宮崎さんか・・・・・果たして、使えるか」

トレジャーハンターをやっているのなら、丁度良いのだが、問題となるのは彼女のネギに対する想いだ。それが邪魔になる可能性が極めて高い事も、アリスは考慮していた。

だが、いどのえにっきを使うのどかに下手な真似は危険だ。ならば如何するか、それを考えると方法は一つしか無いのだ。

「精神誘導をして・・・抱き込むか」

他のトレジャーハンター仲間とやらも一緒に行動した方が警戒もされないだろうし、他に方法が無ければ、これを採用、実行する事にした。

「悪いね宮崎さん・・・君のネギへの想い、利用させてもらうよ」

冒険者の街に着いたアリス達は近くにクリムゾンを止めて酒場に向かった。

酒場では丁度のどか達が冒険から帰ってきたばかりで、発掘してきた宝物を山分けしている最中だった。

「宮崎さん！」

「え・・・・・あ、アリス先生！？」

突然呼ばれて呆然としていたのどかだったが、アリスの姿を見た

途端に驚き、そして安堵の表情を浮かべる。

「よ、良かったですー、アリス先生・・・無事だったんですねー」

「うん、宮崎さんも無事で・・・本当に良かった」

のどかにトレジャーハンター仲間を紹介された。

リーダーのクレイグ・コールドウェル、そしてその他の仲間で女性が二人、アイシャ・コリエルとリン・ガランド、残る男性がクリスティン・ダンチェッカー、４人ともこの辺のトレジャーハンターの間では結構有名な凄腕集団だ。

「私の生徒が世話になった、アリス・スプリングフィールドという・・・よろしく」

「あ、アリス・スプリングフィールド!?　あの二代目・紅き翼のリーダーの!?」

「ま、マジかよ・・・あ、さ・・・サインください!!」

クリスティンとアイシャ、リンの三人からサインを頼まれたアリスは素直にサインを書き、後ろでシルヴィアにサインを頼んでいるクレイグに少しだけ目を向け、直ぐにのどかを向き直った。

「宮崎さん・・・他に誰かを見つけた?」

「い、いえー・・・・・・アリス先生は誰か見つけましたかー?」

「二代目・紅き翼全員とは一緒だけど・・・ネギ達はまだ見つかってない。宮崎さんが最初だよ」

「そうですかー・・・・・・」

落ち込んだのどかだったが、アリスがのどかの頭に手を置いて、優しく撫でると、最初こそビクッとなったが、直ぐにアリスを見上げ、不安そうな顔を向ける。

「宮崎さん・・・頼みがあるんだ」
「頼み・・・ですか？」
「そう・・・宮崎さんはトレジャーハンターをやっているから色んな人間と会う事があると思う」

そこで、のどかにはアリス達との連絡手段を与えるので、のどかにはなるべく多くの人間の心を読んで、その内容を逐一アリス達に報告して欲しいと頼む。

「ネギを探す上で、何か役に立つ情報も紛れているかもしれないから、出来れば協力して欲しい」
「ネギ先生を・・・・・・」
「そう、ネギを探す上で・・・私が宮崎さんに頼む事は全てが役に立つんだ」
「アリス先生が・・・私に・・・・・・・」

アリスを見るのどかの目から段々と光が消えていく。だが、クレイグ達にはアリスが壁となっているので、そんなのどかの様子は見えないので、気付かれる事はない。

「宮崎さんが私にする事、その全てがネギ達を捜すのに・・・必要な事で、宮崎さんにしか出来ない大切な事なんだ」
「はいー・・・・・」

アリスが行ったのは簡単な暗示だ。最初だから簡単な暗示だけだが、これから何度ものどかの所を訪れて暗示を深めていく、一種の洗脳だ。

この先、のどかを抱き込むのは更に暗示を深くしてから、のどかのアリスに対する壁が暗示によって消え去った時、アリスはのどか

を抱き込み、白き翼に対する決定的なカードにする。

「さて、私達はこれから色々と行かなければならない所がある・・・クレイグと言ったか？　悪いけどもう暫くは宮崎さんの事、お願いするよ」

「任せてくださいよ！　ノドカ嬢ちゃんはもう俺達の仲間ですからね」

「頼む」

のどかに決定的な種を植え付け、アリスは去っていく。

アリスが去った後、のどかがアリスを見送る瞳の奥には、アリスに対する信頼の他に・・・・・・微かな艶が芽生えようとしているのだった。

七十二話　「思惑が隠された優しい嘘」（後書き）

次回は木乃香達か、エヴァ達、どちらかになります。
もう少ししたらオスティアで全員集合ですね。

七十三話　「英雄を裏切りし者」（前書き）

勿論クルトのことですよ？

七十三話　「英雄を裏切りし者」

英雄と女王の子

七十三話

「英雄を裏切りし者」

木乃香達がオスティアに入ってから半月が経った。嘗てのオスティア難民にも順調に根回しが進み、来るべき日に備えて準備に入る段階まで来ていた。

今日もいつもの様にそれぞれの役割を分け、オスティア全域に散る筈だったのだが、さよがそれを止めてしまった。

「どうかしたんか？」

「それが～・・・」

さよが語ったのはオスティア総督府の事、総督のクルト・ゲーデルがさよ達の事に気付いて、そして今、その周りを嗅ぎ回っているのだと言う。

「そら不味いなぁ・・・確かに下手に動き回らん方がええわ」

「うん、幸い・・・もう私たちが動かなくても何とかなる段階には入ったし・・・大人しくしているのが吉」

幸いにも、もう直ぐオスティア終戦記念祭が行われる。その祭でアリス達と合流する事になっているので、それまでは大人しくしている事にした。

そして翌朝、木乃香達の下に通信が入る。エヴァからだった。

「エヴァちゃん！　どやった？　ゲート・・・見つけたんか？」
『いや、中々広い上に・・・どうも最近は周囲がキナ臭くてな。一度お前達と合流する』
「そうなんか・・・せやったらホテルにはウチから言うとく、アタナシアって名前出せばウチらの部屋に案内してもらえる様にしとくえ」
『頼む』

木乃香はアキラ達に一言断り、フロントに行くと、宿泊人数の追加の旨を伝え、その分の費用を支払った。

「失礼・・・二代目・紅き翼の近衛木乃香さん、ですね？」
「あんた誰や？　ウチは知らん人から名前呼ばれても、不快にしかならへんねんけど？」

ホテルのロビーから木乃香に声を掛けたのはまだネギ位か少し上くらいの少年だった。着ているスーツにはメガロメセンブリア元老院の一員で、オスティア総督府の人間だという証であるバッチを付けている。

「失礼、私はオスティア総督府の者で、カイトと申します。実は、オスティア総督であるクルト氏からの依頼を届けに参ったのですが・・・」
「ほかほか・・・・・・なら、答えは一つ、帰りや」
「・・・何故でしょうか？」
「悪いけど、ウチら二代目・紅き翼に依頼したいんやったらヘラス帝国を通してもらわなアカン」

木乃香を唯の小娘だと侮ったのだろう。だが、それは大きな間違いだ。木乃香は間違いなく青山詠春の娘、その眼力、意思の強さは

父譲りだ。

「しかし、事は急を要する事です。どうか聞き入れてもらえませんか？」

「くどいで・・・ヘラスに通してから出直してきぃ」

立ち去ろうとした木乃香だったが、カイト少年の後ろに尋常ではない実力者の気配を感じ、慌てて振り返る。

「おや、師匠の娘というのは伊達ではないご様子で」

「・・・アンタの事は聞いとるよ。お父様の弟子で、初代・紅き翼の裏切り者・・・クルト・ゲーデル総督」

「おやおや、裏切り者とは心外ですねぇ」

ニコニコと、一般の人が見れば爽やかな笑顔を浮かべるクルトだが、木乃香にはその笑顔が何よりも気持ち悪かった。信用できない、胡散臭い笑顔にしか見えないのだ。

「ほんで、オスティアの総督はんが何の用や？　その坊やにも言うたけど、ウチらに依頼したいんやったらヘラス帝国を通してからにしぃや」

「いえいえ、私がここに来たのは依頼の話をする為ではありませんよ。是非とも師匠の娘である貴女とお話をしたいと思いましてね」

「顔洗って出直してきぃや、せめて吐き気するその顔がイケメンにでもなったら、考える事だけはしたるえ」

勿論、考える“だけ”だが。

「これは手厳しいですね・・・しかし良いのですか？　私としては本位ではないのですが、このままでは貴女のお仲間に真祖のお嬢様

が居る事を上に報告しなければならなくなりますが・・・・・・」
「下手な脅しやな・・・あんまりウチらを舐めん方がええよ。どんな立場になろうと、ウチらのやる事は変わらんし、好きにしたらええやん」
「おや、これでもダメですか・・・・・・仕方がありません。今日の所は引き上げますか・・・・・・それではまた。アリス君によろしくお伝えください」

カイト少年を連れ、ホテルから立ち去ったクルトに忌々しげな顔を向ける木乃香だったが、突然振り返り様に懐から取り出した扇を一閃、足元に落ちてきた符を拾い上げて握り締める。

「セコイ手を使うなぁ・・・アリスさんが嫌う理由もよう解るわ」

初めて会ったが、この一回で木乃香もクルトが嫌いになった。本来、人を嫌うというような気性とは無縁の木乃香だが、その木乃香が嫌うほど、クルトは人間性が合わなかったのだろう。

「こら荒れるやろな・・・終戦記念祭が終わった後が、一番の戦いになりそうや」

また来るような事を言い残していたが、もう来る事は無いだろう。次に会うときは、恐らくは戦いの場、その時はアリス達も揃っているだろうから、恐らくは戦いになる。

「あかんなぁ、ウチ・・・こないに好戦的な性格やなかったのに」

クルトだけは、木乃香自身の手で引導を渡してやりたいと思ってしまった。アリスが殺したがっているが、何故か、この役割を譲りたくないと思う。

「あかんあかん、エヴァちゃんも来るんや・・・いつものウチに戻らんと」

転移魔法陣の上に乗りながら、木乃香はいつもの笑みを無理やり浮かべ、ポケットから手鏡を取り出して自身の顔を見る。・・・・・浮かべた筈の笑顔は、どう見ても浮かんでいなかった。

夕方ごろにエヴァ達が木乃香の部屋に来た。

何故かエヴァはクマのぬいぐるみを抱いていたが、本人が拾ったと言っていたのと、ぬいぐるみを抱くエヴァの雰囲気が今までとは違う事に気付いて何も言わなかった。

「来る途中でアリスから連絡があった。宮崎のどかを見つけ、情報収集を頼む事に成功したらしい」

「へぇ～、本屋さんですか～」

「意外・・・ネギ君の事が好きな宮崎らしくない気がする」

エヴァはアリスがのどかの精神誘導を行い、少しでも情報を集める様仕向けた事を説明したが、その方法は木乃香達にはあまり好評ではなかった模様で、少し不満気だ。

「精神誘導って、アリスさん・・・ちょうやり過ぎとちゃうん？」

「ですねぇ・・・なんていうか、アリス先生らしくありませんね～」

「何か、急ぎすぎてる気がする」

アリスが何を考えてるのか読めず、不安に駆られる木乃香達だったが、それでもアリスの事だ、何とかするに違いないと強引に納得することにして、話題はオスティア終戦記念祭の事に移る。

「これもアリスから聞いた話だ・・・どうもぼーやは拳闘大会に出場する為にオスティアに来るらしい」

目的は賞金の１００万ドラクマ、それで奴隷にされている和泉亜子と村上夏美を救出するつもりらしい。

「亜子、奴隷になってたんだ・・・」

亜子の親友であるアキラが呆然と呟いていたが、ネギの性格を熟知しているからこそ楽だ。ネギの事だから、絶対に奴隷から救い上げるだろう。ならば亜子の事はネギに任せ、アリスからのもう一つの報告に入った。

「ゲートは見つからなかったが、アリスがヘラスの皇女に聞いた所によると王宮の中央付近にあるらしい。道理で見つからなかった訳だ。ゲート探しは一時中断になり、私達は本格的に計画へ移る事になる」

終戦記念祭ではアリスの盟友であるヘラス帝国のテオドラ、アリアドネーのセラス、メガロメセンブリア元老院議員のリカードも来る事になっている。

間違いなくクルト・ゲーデルも動くだろうから、計画の第二段階の発動はその時、第三段階は完全なる世界が動いてからになる。

「第一段階である根回しはお前達のお蔭で随分と進んでいる。第二段階に入る頃には終わっているだろう」

「さよちゃんが偵察してくれてたから、ウチとアキラちゃんも動きやすかったわ」

「うん、流石は幽霊使い」

「えへへ～」

木乃香とアキラに褒められて照れるさよを微笑ましげに見ていたエヴァだったが、直ぐに顔を引き締め、立ち上がった。

「アリスの到着は祭の当日だ。それまでに出来る限りの事をしておこう・・・茶々丸、お前は電子精霊を利用して電子面での調査だ」

「了解」

「さよ、引き続き偵察を頼む。総督府に少しでも動きがあれば直ぐに教えろ・・・些細な事でも構わん」

「はい！」

「木乃香とアキラは明日から中心市街だけでいい。第二段階に入る為の準備を整えておけ」

「了解や」

「わかった」

エヴァとチャチャゼロは木乃香とアキラの護衛として付いて行く。認識阻害様のネコミミと眼鏡を用意したエヴァは、何か言いたげな木乃香に気が付き、訝しげな顔を向けた。

「・・・何だ」

「いや、エヴァちゃんネコミミなんやね・・・・・・うん、似合ってるえ、キティちゃん」

「きっ・・・貴様もキティって呼ぶのかぁあああああ！！」

飛び掛ってきたエヴァをヒラリと避け、木乃香はテラスに出た。

「アリスさん・・・・・・あかんえ、急ぎすぎたら・・・ウチ、心配や」

いつの間にか日が落ち、暗くなっていた空を眺めながら、木乃香はアリスとの仮契約の証であるパクティオーカードを胸に抱いた。

この日、全員女子という事で全員で部屋の露天風呂に入り、思う存分身体の洗いっこをした彼女達は、夜遅くまで姦しくじゃれ合っていたらしい。

七十三話　「英雄を裏切りし者」（後書き）

少し早い気もしますが、次回はアリス達と木乃香達が合流！
オスティア終戦記念祭が始まります。

七十四話　「オスティア終戦記念祭」（前書き）

アリス達とラカンが木乃香達と合流！

七十四話　「オスティア終戦記念祭」

英雄と女王の子

七十四話

「オスティア終戦記念祭」

オスティア終戦記念祭当日、オスティア中心市街は魔法世界各地からの観光客で溢れ、正にお祭り騒ぎだった。いや、中心市街だけではない、ピンヘ村、ナイーカ村、オスティア荷上げ漁港、自然公園、総督府、国際空港、リゾートホテルエリア、オスティア全域が祭で賑わっているのだ。

お祭であるため、アリス達と合流する事になっている新オスティア国際空港は随分と賑わっている。主にオスティアに訪れた観光客が中心で、この人ごみからアリスを見つけるのは苦労すると思われていたが、空港に一隻の船が入った時、観光客だけでなく、空港職員達までもが騒然となった。

空港に入ってきたのは一隻の紅い船、龍樹を模したその船は魔法世界の人間なら知らない者は居ない程、有名な船で、名はクリムゾン・・・・・二代目・紅き翼の所有する船だ。

「あれがアリスさんの言うてた船なんか・・・・・」

クリムゾンを見るのは初めての木乃香達は、遠目だがその船体を見て驚いた。

巧妙に認識阻害の魔法を掛けられているが、その阻害の奥には無数の重火器が搭載され、正に戦艦と言うに相応しい姿だった。

クリムゾンから降り、空港内に入ってきた姿に、空港にいる人間全員がざわめく。アリスを筆頭にシルヴィア、月詠、ペルシクムと、

二代目・紅き翼のローブを纏って威風堂々、王者を思わせる姿勢で歩くアリス達の姿に感激している。

「アリスさん！」

木乃香の声に誰もが視線を向けた。その視線を気にすることなく木乃香、アキラ、さよ、エヴァ、茶々丸、チャチャゼロはアリス達と同じローブを身に纏い、歩み寄る。

「木乃香ちゃん、皆・・・・・・任務ご苦労だった」

「ええよそんな事・・・ウチら全員、アリスさんが無事に合流してくれた事が何よりも嬉しいんやえ」

その言葉に微笑んだアリスは再び歩き出す。木乃香達もそれに続き歩き出し、二代目・紅き翼は、全員集合とはならなかったが、新たなメンバーを加えたその姿を魔法世界で公の下にするのだった。

アリス達は空港から出て直ぐに転移魔法でリゾートホテルエリアに来ていた。

アリス達もオスティア滞在中は木乃香達が泊まっているホテルの宿泊する予定で、部屋も木乃香が予約してある。

「それにしてもアリスさんの知名度は凄いなぁ・・・アリスさんが泊まる言うただけでウチら二代目・紅き翼の宿泊費が四分の一になってもうたえ」

アリスがホテルに入った途端、ホテル内は歓声に包まれ、宿泊する旨を伝えると木乃香達の宿泊費まで更に安くなってしまったのだ。

アリスの魔法世界での知名度、人気、それらの凄さが見て判る瞬

間だった。実際、ホテルの職員、果ては支配人までアリスにサインを頼み込んだ位だ。

「さて、そろそろ真面目な話をしよう。ラカンから連絡があった・・・ネギ達と共に今さっき、オスティアに入ったらしい」

今、ラカンはネギ達と行動している。ネギと共にいるのは小太郎、千雨、和美、亜子、夏美の五人、何やらアリスの事を調査しているらしいが、ネギ達で調べられる事など高が知れている。

「さよ、お前の方からもアリスに報告があるのだろう?」
「あ、はい～・・・先ほど偵察させている幽霊から連絡が入ったんですけど、アスナさん、刹那さん、楓さんもオスティア入りしたらしいです～」
「ああ、それならセラス総長からも聞いてる。そっか、もうオスティアに入ったんだ・・・・・・」

必要なカードはほぼ揃った。のどかに対する暗示も随分と深いところまで進んでいるし、アリスの計画は順調だと言える。

「これからラカンやネギ達に会いに行く・・・木乃香ちゃん、エヴァ、シルヴィア、付いて来て」

中心市街の酒場で会う事になっている。ラカンやアリス達がよく利用している所なので転移するのも楽だが、折角の祭だ、歩いて行く事となった。

「ラカンはんかぁ、お父様のお友達やったんやってなぁ」
「そうだ、そしてナギと互角の実力者でもある」

アリスの後ろを木乃香と金髪の猫耳幼女が歩く、随分とシュールな光景に思えるが、アリス自身は特に気にしていないが、隣を歩くシルヴィアが少し恥かしそうにしていた。

「アリス様、恐らくは私達がネギ君たちを置いて逃げた事を追求されると思われますが・・・」

「知った事ではない。私達、二代目・紅き翼が白き翼と魔法世界でも共に行動するとは一言だって行った覚えは無いからね」

文句を言われる筋合いは無い。魔法世界に一歩でも足を踏み入れた以上、自身の身は自身の手、力で守らねばならない。それが出来ないのであれば魔法世界に来なければ良かったのだから。

「着いた」

酒場に着いた。中に入ると中央の大きな席にラカンたちは腰掛けている。

「ん？　おお！　アリスとシルヴィア！　こっちだ！！」

「・・・え？」

ラカンがアリス達に気付いて大声で呼んだ。いい迷惑だが、アリスは認識阻害用の眼鏡を掛けたままラカン達の座る席に向かった。

「久しぶりだなネギ、神楽坂さん、桜咲、長瀬」

「あ、アリス先生・・・！　よくもまああたし達の前に顔を出せたわね！！　ゲートポートであたし達を見捨てて逃げておきながら！！」

早速アスナがアリスの襟を掴んで怒鳴りつけてきた。見れば刹那

と楓も非難の視線をアリスに向けている。

「・・・汚い手で私に触れるなよ、お尋ね者風情が」

掴んでいるアスナの手を捻り、床に叩き付けた。余りにも早い動きにアスナも魔法世界に来てから実力を上げたというのに、意識が追いつく事が出来なかったのだ。

「私は一言だって白き翼と一緒に行動するなんて言った覚えは無い。勝手に仲間面するな」

ネギやアスナ達が見たことも無い程の冷たい視線を向けられ、反論の言葉は封じられる。今のアリスは、最早ネギ達の知るアリスではないのだ。

「ラカン、明日にでもリゾートエリアのロイヤルオスティアンホテルに来て、会議するから」

「おう」

それだけ伝えると、アリス達も座って注文をする事にした。流石に酒場に来て何も頼まないというのは気が引ける。

「私はピンヘワインを」

「ではカクテル・・・オスティアンブルーをお願いします」

「私はそうだな・・・アリスと同じでいい。ピンヘワインを頼む」

「ウチはピンヘ葡萄ジュースにするえ」

ラカンは既にオスティアンエールを頼んで、もう飲んでいる。

ネギ達もアリス達が来る前に飲み物を頼んでいるので、後はアリス達の飲み物が来るのを待つだけだ。

「お嬢様・・・ご無事だった様で、何よりです」
「うん、ウチも安心したわ・・・せっちゃんもアスナも元気そうで」
「このかは今まで何してたの？」
「ウチはアキラちゃんとさよちゃんと一緒にずっとオスティアにおったんよ。祭の準備とか手伝ってたんやえ」

事実だ。根回しをしながら、木乃香達は終戦記念祭の準備を手伝ったりしていた。

「あの師匠（マスター）・・・その」
「ふん、その腕を見れば解る。会得したらしいな」
「は、はい！」

ネギとエヴァはラカンから聞いたネギの新たな力の話をしている。エヴァに関する事で、ラカンが教えたとなれば、心当たりは一つしかない。昔、アリスもラカンから教えてもらい、そこから術式武装を作り上げたのだから。

「それで？　アリスとシルヴィアはあれから何してたんだ？」
「ああ、それは後で話す。ネギ達の居る所では話せる事ではない」
「ただ、此処で話せる事としたら・・・祭は近いという事だけですね」
「そうか・・・祭は近いか」

祭は近い、それを聞いてラカンも理解出来た。
二代目・紅き翼にとっての最大の祭、それは計画の発動とそれからの戦いを意味する。

「それからセラス総長に聞いたんだが、リカードさんからの伝言・・

・メガロメセンブリア元老院がそろそろ動くらしい」
「丁度良い時期、か・・・奴等が動くとしたらそろそろだと思っていたが、お前がこっちに来たのが決定的になったみたいだな」
「虫唾が走る話です。アリス様を利用しようなどと・・・身の程知らずも甚だしい！　高が老害の分際で、アリス様を思うように利用しようなど、何十世紀も早いというのに」

シルヴィアはこの話を聞いてからメガロメセンブリア元老院の話題になる度に不機嫌になるようになった。
アリスを崇拝している節のあるシルヴィアらしい事だが、それはシルヴィアに限った話ではない。魔法世界にいる二代目・紅き翼のメンバー、それとテオドラやセラス、リカードも憤慨しているのだ。

「一応、ラカンも気をつけて・・・母さんの時の事があるから、ラカンも結構恨み買ってるし」
「へ！　オレ様に向かって気をつけてたぁ大きく出たな。このオレ様がメガロの雑魚共に如何こうされるとでも思ってるのかぁ？」
「いや、それは無い。ラカンに言いたかったのは、やり過ぎないでって事」

相手を再起不能になるまでやり過ぎるなと言ったのだ。別に再起不能になろうが死のうが構わないが、相手がラカンだと気の毒だ。ラカンが馬鹿なだけに、馬鹿な攻撃で死んだり再起不能になったりしたら、流石に哀れだろう。

「やり過ぎていいのは計画発動以後だろ？　判ってるっての」

そういう事だ。計画が発動すれば好きなだけ大暴れ出来るのだから、それまでは我慢してもらう。

「さて、飲み物も来た事だし・・・ラカン」
「おう！」
「「乾杯！」」

この先の大きな祭を前にして、アリスとラカンは乾杯した。それは、勝利へ向けての祝前杯として、未来の勝利を信じての乾杯だった。

七十四話　「オスティア終戦記念祭」（後書き）

次回は、グレートパル様号が出る予定です。

七十五話　「のどか、まさかの助け」（前書き）

のどかを助けたのは原作ではネギですが…さよがアリス側なので、のどかのピンチを知る事が出来ませんでした。
後すいません、グレートパル様号のこと、完全に忘れてました。まあ、その内出てくるでしょう。気がついたらもう出てると思いますので、それまでは・・・・・・。

七十五話　「のどか、まさかの助け」

英雄と女王の子

七十五話

「のどか、まさかの助け」

オスティア終戦記念祭2日目、木乃香達が泊まっている部屋の隣、アリス達が泊まる部屋にラカンを加えた二代目・紅き翼のメンバー全員が集まっていた。

「それじゃあ、ラカンも来た事だし、ラカンと初めて会うメンバーも居るから自己紹介をお願い」

「おう、ジャック・ラカンだ。初代から紅き翼に所属している、よろしく頼むわ」

ラカンの事はアリスから聞いて知っている木乃香達だったが、実際に会って解る事がある。ラカンの実力は今の笑ってる姿を見ていても肌で感じるのだ・・・・・明からに自分達とは次元が違う、アリスよりも強いという事が。

「ウチは近衛木乃香や、青山詠春の娘やえ」

「ほお!?　木乃美嬢ちゃんに似てるとは思ってたが、やっぱり詠春の娘のこのかちゃんだったのか！　こら吃驚だなぁ、あの堅物からこんな可愛い子が生まれるんだ!?」

明らかに母親の血が濃いからだろう。

「大河内アキラです・・・えっと、元一般人」

「ほぉ・・・元一般人にしては魔力はシルヴィアに劣るも中々じゃねぇか。それにスタイルも良い！　別嬪さんだな！」

ラカンの視線が胸元に向いているのに気付いてアキラは頬を赤らめて両腕で胸を押さえた。同時にシルヴィアの肘打ちがラカンの米神に炸裂する。

「相坂さよです～、元幽霊です」

「人間にしちゃあ何か違う気がしてたが、成る程な・・・その身体、ホムンクルスか」

見ただけで判る辺り、ラカンは本当にバグキャラだと思う。アリスでも知らなければ今のさよがホムンクルスだとは判らないだろう。

「んで、久しぶりだなエヴァンジェリン」

「ああ、麻帆良ではアルにも会ったし、貴様等初代・紅き翼の連中はやはり殺しても死なない奴ばかりだな」

事実、初代の人間で死亡が確認されているのはガトウとゼクトだけ。ナギは公式には死んでいるが、アルとラカン、アリスの仮契約カードが死んでいない以上、生きているのは確実だ。

「当たり前だぜ！　オレたちゃ２０年前の戦争を勝ち抜いてきたんだぜ？　タダじゃ死にゃあしねぇよ」

本当にタダじゃ死にそうに無い人間ばかりで困る。唯一まともなのは詠春くらいなのだろうが、彼もまた初代の人間、衰えたとは言っても充分バグな人だ。木刀で大岩を豆腐を切るかのように真っ二つにする辺り。

「それじゃあ、そろそろ始めようか・・・・・・これからの行動について」

これからの行動、オスティア終戦記念祭終了後、もしくはその前に動くであろう完全なる世界とメガロメセンブリア元老院に対するモノだ。

「クルトの性格を考えるのなら、恐らくパーティーみたいなモノは開かれるだろうな・・・当然、オレ達全員とネギ達全員を招待して」

それが恐らくはトリガーとなるだろう。どちらが先に動くかによって、取るべき行動は変わってくる。

「完全なる世界が動き出したら、大暴れするよ。手加減の必要は無い・・・存分に叩き潰す」

「メガロメセンブリア元老院が動き出した場合は私達は完全に裏に潜る必要がありますね」

完全なる世界が先に動けば大暴れして、メガロメセンブリアが混乱している内に叩く。メガロメセンブリア元老院が先に動けば隠れ、互いに疲労した所を圧倒的な火力で叩き潰す。両方とも単純だが、一番現実的な戦法だろう。

「それと、今朝方に宮崎さんから連絡が入った。明日にはオスティアに着くらしい」

まるでそれが本題と言わんばかりに静まり返った。

正直、アリスがのどかにした事を、木乃香達は強引に納得する事にしたが、心の奥では未だに納得出来ていないのだ。

「アリスさん・・・やっぱのどかの事、やり過ぎとちゃうの？　確かに戦略や言われたら納得出来へん事もないえ。でも、アリスさんはのどかの恋心まで利用した・・・それは人としてやったらアカン事とちゃうか？」

「・・・言いたい事は私も理解出来る。確かに人の恋心を利用するというのは褒められたやり方じゃないと思うよ。しかしね・・・私の夢は、もはや私一人だけの夢じゃなくなってるんだ。私の背中には父さんと母さん、ウェスペルタティア王国の民、多くの未来が掛かっているんだ・・・私が背負っているモノは大きい・・・事態が火急を要する事になっている以上、手段を選んでいたら負けるんだ」

アリスの言う事も理解出来るし、アリスが背負っているモノの重さ、重要性も解る。だが、それでもやって良い事と悪い事の区別が出来ない様な人間では無い筈だ。

「アリスさん、せやったら約束して・・・のどか、いつかはちゃんと自由の身にして、そしてそれまで・・・絶対に酷い事させへんといて」

「・・・約束は出来ない。が、考慮しよう・・・・・・」

無事に自由の身になれるかは今後次第だろう。途中で再起不能の重症を負ったり、死んだりした場合は、その限りではない。

翌朝、アリスはホテルの部屋で目を覚まし、隣で寝ているシルヴィアとエヴァを起こさない様にベッドから降り、床に散らばっていた服を拾い上げるとシャワー室に入った。

「・・・・・・ん？」

シャワーを浴びている最中に通信が入った。開いてみると、相手はのどかだった。

「どうした？」

『アリス先生！　助けてください！　い、今オスティアの近くまで来てるんですが、賞金稼ぎに追われててー！！』

「わかった」

シャワーの線を閉め、脱衣所に戻るとタオルではなく魔法で身体を乾かして直ぐに着替えた。

一階まで降りる時間も無いので、窓まで走ったアリスは、迷い無く開けた窓から飛び降り、浮遊魔法を発動、虚空瞬動を併用しながらのどかが居るポイントまで飛び去った。

オスティアから西５０キロの地点、のどかとトレジャーハンター仲間達は黒い猟犬という賞金稼ぎのグループに追われていた。

黒い猟犬は魔法世界でもそれなりに名が知られている賞金稼ぎ達で、実力も相当な物だ。既にアイシャが囚われ、リンも苦戦、アイシャを助けようとしたクリスとクレイグは応戦しようとするも、相手は魔族だったらしく、抵抗らしい抵抗も出来ずに敗れてしまった。

「ど、どうしようー・・・私一人じゃ・・・いくらアーティファクトがあっても、瞬動しか出来ないんじゃ・・・ど、どうすればー・・・・」

アリスに連絡してはいるが、いつ到着するかは判らない。アイシャが囚われている上に、リンは重症を押して戦っているから苦戦していて、クリスとクレイグは魔族相手に防戦一方・・・いや、殆ど嬲り殺し状態だ。

「ひっ・・・！」

そのとき、のどかの目の前に黒い猟犬の一人が現れ、その細い首を掴み持ち上げる。

「その娘がターゲットか・・・」
「間違いない、白き翼のミヤザキノドカだ」
「こっちも終わったぞ」
「こっちもだ・・・グククク、相手にもならん」

リン、クリス、クレイグも囚われてしまっていた。傷が多すぎて、ダメージが大きすぎて動く事も出来ないらしい。

「ゴ・・・ゴメン、ノドカ、あ・・・あんたを守れな・・・かっ・・・」

黒い猟犬はのどかだけが目的らしく、のどかを餌と呼んでそれ以外は始末するつもりらしい。当然、始末するという事はクリスとクレイグは殺され、アイシャとリンはこの先、女としての地獄しか待っていない。

「（だ、ダメだ・・・このままじゃみんなやられちゃう・・・・・・あきらめたらダメだ、アリス先生にも言われてる。絶望的な状況でも、諦めなければ活路は見出せるって・・・何か、私にできることを・・・私に、出来ること・・・！！）あ、・・・我、汝の真名を問う（アナタノオナマエナンデスカ）！！」

のどかの切り札、魔法世界でトレジャーハンターとして活動していて手に入れた魔法具、鬼神の童謡の力で黒い猟犬たちの名を暴く。

リーダーの自称、黄昏のザイツェフことチコ☆タンを始めとして、

全員の名を暴き、更にいどのえにっきに繋いでいる文字を読み上げる魔法具、読み上げ耳でいどのえにっきを見ること無く、のどかの頭に黒い猟犬たちの思考が入ってきた。・・・・・内容は約一名を除いてほのぼのとしたモノだったので、見た目のギャップから随分と拍子抜けしたが。

「わ、私が餌ってどーゆーことなんですか？　メインってどーゆー意味ですか？」

直ぐに思考が入ってきた。のどかを餌として白き翼のメンバーを誘き出すという作戦、罠も既に張られているという事だ。

だが、その事を口にしてしまったのは失策だ。のどかが読心術師だという事がバレテしまい、逃げ出したが、瞬動を駆使しての逃走空しく、再び囚われてしまった。

「っ！（先生ーっ！）」

「私の教え子が随分と世話になっているな」

もうダメだと諦めかけた時、のどかを拘束していた触手が全て切り裂かれ、服を半ば破られていたのどかにローブが掛けられる。

「な、何だ貴様！」

「へえ、黒い猟犬か・・・魔族の相手は久しぶりかな」

長い金髪を三つ編みに結い、先を金糸で翼の刺繍が施された赤いリボンで結んだ紅い拳闘士服の男性・・・アリスが“姫”を片手に不敵な笑みを黒い猟犬たちに向けていた。

「お、お前は！　二代目・紅き翼のアリス・スプリングフィールド！！？」

「な、何でこんな所に!?」

アリスは黒い猟犬たちの動揺を無視して懐から転移魔法符を取り出して見せる。

「これ、アンタの懐にあったけど・・・罠のポイントって此処で良いのかな?」

「な!・・・な、無い!? いつの間に!?」

「悪いけど、この地面一帯を覆っている大軍用魔法地雷は破壊させてもらった・・・・・・さあ、あの世への片道切符、遠慮せずに受け取れ!!」

“姫”がノーアクションで焔雷の獄姫になり、アリスの姿が消えた。

「き、消えた・・・?」

「ガァッ!!?」

「っ! 何っ!?」

いつの間にか獣人の男がアリスに背後から“姫”で腹を貫かれていた。黒い炎で焼かれる傷口から体内に雷が走り、痙攣しながら倒れてしまう。

「早いっ!」

「お前達が遅いだけだ」

「グェッ!」

空いている左手でチコ☆タンの首を掴んだアリスは鳩尾に爪先を入れると、その足を軸に瞬動に入り、触手を使っていた黒服・・・パイオ・ツゥの右肩から腰の左までを切り裂いて真っ二つにした。

「こ、これが黄昏の王・・・僕達が適う相手じゃ・・・」

一瞬で砂蟲を消し炭にしたアリスは最後の相手、魔族のモルボルグランに“姫”を突きつけた。

「本気で来い・・・久しぶりに魔族と戦えるんだ・・・少しは楽しみたい」

「くっ・・・・・・このぉ!!」

モルボルグランが大量の骨を刃としてアリスに切りかかるが、その全てが切り落とされ、胸の中心に“姫”が突き刺さる。そして・・・・・。

「開放・・・獄焔雷」

姫が纏っていた雷の奔る黒い炎がモルボルグランの全身を包む。だが、気が弱いと言っても彼は魔族だ。全身を奔る熱と痛みを堪えながら最後の足掻きとばかりに渾身の拳をアリスに叩き込もうとした。

「成る程・・・良い一撃だ。だけど、残念だったな」

その拳はアリスの拳によって砕かれてしまった。

「あ、アリス先生ー・・・殺しちゃったんですかー・・・?」

「・・・いや、殺してはいない。殺しても良かったけど、黒い猟犬の噂は知っていたからね。ちょっと頼みたい事が出来た」

黒い猟犬は魔法世界の賞金稼ぎの中では上位に食い込む程の実力

者揃いだ。その実力を見込んで依頼したい事がある。

「取り合えず、私の転移魔法で彼等と、宮崎さんの仲間たちも私が泊まってるホテルに移動しようか」

その前にアリスはのどかの仲間達を治療魔法で癒していく。流石にダメージが大き過ぎるので、治療は早い方が良い。

「す、すみませんねアリス様・・・俺達がのどか嬢ちゃんを守るって誓ったのに」

「気にする事は無い・・・相手が悪かっただけだ」

服の損傷が激しいのどかとアイシャには影から取り出した予備のローブ（普通のやつ）を着せて、治療していく。

「よし終わり」

「ありがとうございます・・・ごめんねノドカ、守りきれなくて」

「い、いえー・・・アイシャさんも無事で良かったですー」

「そろそろ転移するよ？　悪いけどクリスとクレイグは黒い猟犬たちを此処まで運んでくれる？」

「「へい！」」

全員アリスの周りに集まったのを確認し、アリスは転移魔法を発動。アリスの影が大きく伸び、全員の足元を覆うと、皆その影に沈み始めた。

「ああ、ホテルってロイヤルオスティアンホテルだから、楽しみにしててくれ」

「あの高級ホテル！？」

「わお！」

「凄いですね・・・」
「くぅっ！　生きてて良かったぁ！！」

魔法世界で最も高級なホテルなので、有名なのだが・・・トレジャーハンターではとてもではないが泊まるなど出来ない所だ。
そんな所の部屋・・・それもロイヤルスウィートに入れると知ってテンションが上昇するクレイグ達、それを眺めながらアリスは少しだけ微笑んで完全に影に沈む。
後に残されたのは、確かにあった戦いの痕跡と、人影が無くなった事で訪れた静寂のみだった・・・・・。

七十五話　「のどか、まさかの助け」（後書き）

次回から遂にナギ・スプリングフィールド杯が開催！
まあ、アリスには関係無いので、おそらくは原作通りに奴が現れるのかな？

七十六話　「三度目」（前書き）

三度目の登場！　フェイト・アーウェルンクスです。

七十六話　「三度目」

英雄と女王の子

七十六話
「三度目」

のどか達を連れてホテルの部屋に転移してきたアリスを出迎えたのはシルヴィアや木乃香達従者だ。
既にシルヴィアが紅茶を淹れて準備しており、黒い猟犬たちは適当に縛って木乃香が治療している。

「スゲェ・・・シルヴィア・オーギスにジャック・ラカンも居る・・・目の前に二代目・紅き翼のメンバーがこんなに揃っている光景が」

クレイグが感動の余りに涙を流して感動している。早速クリスと一緒にラカンからサインを貰ってホクホクと満足気な表情を浮かべ、シルヴィアが淹れてくれた紅茶を飲んでいる。

「先ずはトレジャーハンターの皆には宮崎さんを此処まで連れてきて貰った事に感謝します。報酬を用意しておいたので、後でシルヴィアから受け取ってください」

アリスが今回用意した報酬は５００万ドラクマ、流石に断ろうとしたクレイグ達だったが、アリスからはのどかの先生としてのほんの気持ちだと言われて、受け取らざるを得なかった。

「それともう一つ、悪いのだけどオスティアに居る間も宮崎さんの事を守ってもらえるかな？」

「それは構いませんが・・・何かあるんで？」
「それは黒い猟犬達が・・・ああ、目が覚めたみたいだね」

見れば黒い猟犬のメンバー全員、目が覚めたみたいで、今は拘束されているが、その拘束をアリスが解いて他の皆と同じように紅茶を用意した。

「それで、チコ☆タン？　だったか・・・」
「い、いや旦那・・・せめて黄昏のザイツェフと呼んでくれませんかねぇ？」
「ならザイツェフ、君達黒い猟犬に依頼したい事がある」

内容はクレイグ達と協力してオスティアにいる間ののどかの護衛だ。報酬は前金として２００万ドラクマ、成功報酬として３００万ドラクマだ。

「クレイグ達は納得いかないかもしれないけど、今回ばかりは不味いんでね。完全なる世界は知ってるね？」
「まあ、２０年前の大戦の黒幕でしたからね」
「その残党が完全なる世界を復活させて、恐らく終戦記念祭終了直後か、その前に動き出すかもしれない。宮崎さんのアーティファクトは強力だから狙われる危険性が高いんだ・・・少しでも守ってくれる人間は多い方が良い」

トレジャーハンターのチームでも実力が高いと好評のクレイグ達と、賞金稼ぎの中でも上位に食い込む実績を持つ黒い猟犬が守ってくれるのなら心強い。

「そういう事ですか・・・わかりました」
「俺たちも報酬が貰えるのなら文句はありませんぜ」

「ありがとう。それと宮崎さんにはネギと合流してもらう、オスティアに居るから後で会いに行くと良い」
「本当ですか！？」
のどかにはネギ達とこれまで通りに行動してもらい、クレイグ達と黒い猟犬達は影ながらに守ってもらう。一番効率が良い方法なのだ、アリス的にも。
「それじゃあ、話はこれ位かな・・・後はシルヴィアからお金貰って、終戦記念祭を楽しむと良い」
「そうさせてもらいますよ、予想外の収入もありましたから、存分に遊べそうです」
シルヴィアから小切手を貰ったクレイグ達と黒い猟犬達はのどかを連れて退室した。ラカンもこの後ネギに会う事になっているとの事で、のどか達と一緒に出て行き、アリスは一人でベランダに出て祭の様子を眺めていた。
「嫌な気配がオスティアにあるな・・・・・・居るのだな、奴が」
今朝から感じている感覚、首筋を奔るチリチリ刺すような感覚は間違え様も無い。フェイト・アーウェルンクスがオスティアに来ている。
「もしかしたら、計画を早めに進める必要があるかもしれないな」
本当に魔法世界に来てから余裕が無い。こうなる事も考えていたが、如何してこうも嫌な方向に事態が急転していくのか。
「・・・・・・っ」

ギュッと握った拳からは、気付かない内に血が流れていて、ベランダの床に小さな血溜まりを作るのだった。

翌日、ナギ・スプリングフィールド杯も開催し、早速ネギと小太郎ペアが勝ち進んでいた。

アリスはラカンに用意してもらったＶＩＰ席でそれを観戦していたが、興味が無くなったので会場から出ると、試合を終えたネギ（大人ｖｅｒ）と遭遇する。

「ネギか・・・」

「兄さん、来てたんだ」

「ああ、それより会場出て早く元の姿に戻れ・・・お前が私と同じ視線の所に頭があると落ち着かない」

どうにも変な気分になる。１０歳の弟が自分と身長が殆ど変わらないというのは、結構複雑だ。

「あ、うん・・・兄さん、この後暇なら一緒にお昼でも如何？」

「・・・そうだな」

会場を出て子供の姿に戻ったネギと共に適当な出店で饅頭を買い、祭の様子を眺めながら並んで食べる。

「ねえ兄さん・・・ラカンさんから聞いたんだけど、アスナさんの事、知ってた？」

「彼女が黄昏の姫巫女だという事？」

「やっぱり知ってたんだ・・・」

「彼女が小さい頃に会った事、あるからね」

最も、アリスが小さい頃の事なので殆ど覚えていないが、アスナの事は知らない筈が無い。

「タカミチや学園長、詠春さん、クウネルさん・・・みんな知ってたの？」

「当然、知ってたさ・・・タカミチと詠春さん、アルは初代・紅き翼の人間だ。知らない筈が無い・・・学園長は立場上、知っていても可笑しくは無い」

ネギは何かを考え込んでいるみたいだが、その表情は穏やかだ。

「うん、それでもアスナさんはアスナさんだ・・・ちょっとおこりんぼでらんぼーでアホっぽいけど、いつも強くてまっすぐな、カッコイイお姉さん・・・僕の大切なパートナーなんだ」

「・・・・・なら守ってやれ、それがパートナーの責務だ」

「うん・・・・・守るぞ!!　アスナさんも皆も!　きっとそれはラカンさんだけじゃなく、父さんの願いでもあったはずだ・・・この旅で父さんの行方は掴めなかったけど、それがわかっただけでも・・・」

その瞬間、アリスとネギの背中を確かな殺気が奔った。

「「っ！」」

慌てて周囲に気配を巡らせると、見つけた。アリスとネギの後ろ、人ごみに紛れてフェイト・アーウェルンクスが此方を見ている。

「き、さま・・・いつの間に！」

「フェイト・・・アーウェルンクス！」

「・・・・・フ」

瞬間、アスナと刹那、シルヴィアと木乃香が瞬動でアリスとネギの周りに現れた。４人とも武器やカードを構えている。

「刹那さん、アスナさん！！」

「シルヴィア、木乃香ちゃん・・・悪いけど様子を見よう。周りに人が多い」

殺気立つアスナと刹那とは正反対に、シルヴィアと木乃香は構えはするものの、アリスの背後に控えて様子を伺う事にした。

フェイトがこちらに歩み寄ってきたが、それでもアスナと刹那は更に殺気だって構えるがシルヴィアと木乃香は一挙一動を観察する。

「ネギ君とアリス君、それにアリス君の従者の方が冷静だね、女剣士にお姫様・・・剣も魔法具も出さないのが得策だ、女剣士とお姫様はお尋ね者・・・騒ぎを起こせば捕まるのは君達だよ」

それと刹那が考えていた一撃でフェイトを仕留めるというのは不可能だ。実力が違いすぎるので、仕留める前に殺されるだろう。

「フェイト・アーウェルンクス・・・今日はご自慢の従者達を忍ばせているみたいだな」

「やっぱり気付いたんだ・・・流石だね」

「お生憎様ですね、彼女達程度・・・アリス様や私達が気付かない筈がありませんよ」

「せやね、あんたの従者にしては実力、低いんとちゃうの？」

図星なのだろう、無表情なのに苦笑するという器用な事をしたフェイトはアリス達をお茶に誘ってきた。

「今日は僕も戦いに来た訳じゃない。ネギ君に平和的な話し合いによる取引をしに来たんだ・・・勿論、アリス君にもね」
「戯言を・・・奢りじゃなければ行かないぞ」
「お金持ちなのにズルイ事を言うね君は・・・まあ、良いよ。お茶くらいなら僕が奢る」

フェイトの案内で、近くの喫茶店に入ったアリス達は・・・この後の展開に考えを巡らせつつも、ホテルに待機している従者達に連絡を入れる。
この話し合いが、この先の戦いを大きく左右するであろう事は、アリスもシルヴィアも・・・既に気が付いていた。

七十六話　「三度目」（後書き）

次回は珈琲派のフェイトとミルクティー派のネギ、ストレートティー派のアリスが激突！

七十七話　「味覚対決のち、全力全開」（前書き）

連投！

七十七話　「味覚対決のち、全力全開」

英雄と女王の子

七十七話

「味覚対決のち、全力全開」

喫茶店の案内された席にはアリスとネギ、フェイトが座っている。シルヴィアと木乃香、アスナ、刹那は座らずに己が主の後ろに控えて、フェイトの一挙一動を見逃さない様に観察するらしい。

注文して運ばれてきたのはフェイトのオスティアンブレンドコーヒーとアリスとネギのオスティアンティーだ。

「やれやれ、いきなりミルクかい？」

「・・・何？」

運ばれてきたオスティアンティーにいきなりミルクを入れたネギにフェイトと、何故かアリスまで呆れていた。

「ネギ・・・香り高き銘茶と名高いオスティアンティーに、いきなりミルクって・・・・・・」

「まるで子供だね・・・ミルクティー、何でもミルクティー、これだから英国人（ブリティッシュ）は」

アリスはオスティアンティーをストレートで飲んでいる。銘茶と名高い香りを楽しみながら、その風味を味わっている。

「アリス君は判っているね・・・紅茶はやはりストレートで飲むのが一番だという事を」

「当然だ。ミルクでは紅茶の味がミルクの甘みで紛れてしまう」
「まあ、僕は圧倒的に珈琲派だから、その辺は如何でも良いけど・・・コーヒーは精神を覚醒させる。日に7杯は飲むね」
「へえ、よくそんな無粋な泥水を日に7杯も胃に流し込めるね」

ネギは無粋と言うが、アリスも珈琲は飲む。珈琲は珈琲で中々良い所もあるのだ。

「ミルクティーよりは良いと思うけどね」
「ああ、私もミルクティーを飲むくらいなら珈琲を飲む」
「兄さんと君は何もわかっていない。ミルクティーは紅茶の完璧（パーフェクト）な飲み方だよ」
「冗談だろ？　ネギ、ミルクティーなんかを完璧（パーフェクト）なんて、それは紅茶に対する冒涜だ」
「僕も紅茶は飲むけど、ミルクティーは飲みたいと思わないね。レモンティーをアイスで飲むよ」

その瞬間、アリスが切れた。

「レモンティーだと!?　馬鹿を言うなよフェイト・アーウェルンクス!!　レモンは紅茶の大事な風味を壊す！　そんなもの、認める訳にはいかない!!!」
「兄さんの言うとおりだ、君・・・舌は大丈夫？」
「驚いたね、味覚馬鹿の英国人（ブリティッシュ）に舌の心配をされるなんて・・・・・・それにアリス君、レモンが紅茶の風味を壊すとは心外だね、紅茶の風味とレモンの風味が合わさるレモンティーは一度飲めば良さが解るのに」

一触即発の空気がアリス達のテーブルに渦巻いていた。理由が飲み物の飲み方というのが何とも表現し難いのだが、何となく嫌な理

由だ。

「・・・君は、かつてこの世界を混乱に陥れた・・・僕と兄さんの父さんが戦った“敵”の生き残りで、その目的は世界の破滅!!敵だと認識する理由は充分だ」

「・・・フン、浅い理解だ。話にもならない・・・アリス君は如何なんだい？　考えてみれば君達が僕達と敵対する理由、聞いた事無いよね？」

「・・・・・私の夢を叶える為には、貴様等は邪魔だ。だから滅ぼす・・・それだけで充分だ」

「へえ・・・成る程、単純明快・・・実に良いね。そういう理由は僕好みだよ・・・その辺は君、父親ソックリだね」

ネギの浅い理解による敵対理由と、アリスの単純明快な敵対理由、フェイトの興味を引くのはアリスの方になるのも当然だろう。

「アリス君の理由については解った。でもね、ネギ君の理由についてはどうなのかな？」

「何？」

「僕や僕達と敵対するという事は君が君達の父達の意思を継ぎ、世界の守護者となる選択を取る事を意味する。まさに“偉大なる魔法使い（マギステル・マギ）”の仕事だよ。対して君はどうだい？世界を救う英雄？　父の意思を継ぐ運命の子？」

どれも違う、今のネギの立場はそんなモノではない。

「違うね、二代目・紅き翼のリーダーとして昔から活動し、確かな覚悟と意思を持って戦うアリス君とは違い、２０人の生徒・友人の夏休みの安全を預かる麻帆良学園の教師だ」

そう、ネギは魔法学校を卒業したばかりで、今は魔法使いとなるための修行として麻帆良学園で教師をやっている魔法使い見習い。
対するアリスは幼い頃から戦場に立ち、二代目・紅き翼のリーダーとして魔法世界、旧世界問わず活躍する魔法使いだ。更に言うのなら、ネギ達は知らないがアリスは既に麻帆良学園に辞表を提出しているので、既に教師ではない。

「それの何処がおかしい？　君が僕達の現実への帰還を邪魔するなら僕達は戦う」
「そこだよ。そこが大きな誤解だ」

ネギの誤解、それはフェイト達が狙ってネギ達の前に現れたのでは無いという事だ。京都の時も、ゲートポートの時も、フェイトが現れたのは不慮の事故のようなもの。フェイトの作戦に偶々ネギがいたに過ぎない。

「つまり、貴様はネギ達が旧世界に帰るのを邪魔する気は無いという事で良いのか？」
「そうだね、逆にネギ君には無事に帰って欲しいと願っているくらいだ」

だからこその取引、ネギには旧世界への無事の帰還を約束する。
アリスには先ほどの問答で既に取引が意味無いという事を理解したので無しだ。

「その見返りに、お姫様を渡してもらおう。どうだい？」

その瞬間、アリスがテーブルを蹴り上げた。

「おや？　予想はしてたけど、まさか本当に君が怒るなんてね」

「やはりそれが狙いだったか・・・フェイト・アーウェルンクス！！」
「答えは否だ・・・フェイト！」

落ちてきたテーブルを指先で受け止めたアリスは、そのままテーブルを下ろして再び紅茶を飲んだ。

「アリス君、君は何となく理解出来るから良いよ。でもネギ君、君は多くの者を救う為に少ないもの、小さなものを切り捨てる。この決断ができない者にリーダーの資格があるとは思えないね。アリス君は出来る事だよ？　兄弟で如何してここまで違うのかな」
「アス・・・彼女は小さいものなんかじゃない！！」
「ネギはまだまだ甘ちゃんでお坊ちゃんだ。私と一緒にするな」
「やれやれ、アリス君の爪の垢を煎じて飲むべきだよネギ君・・・いいだろう、そんな君に最大譲歩のＢ案を用意してある」

Ｂ案、それはアスナの事は諦める。ネギ達も無事に旧世界に帰れるようにするから、フェイト達のやる事は全部黙って無視してくれれば良いというもの。
だが、アリスはそんな言葉の裏を読んでいた。恐らくアスナの事は諦めるつもりは無いのだろう、彼等の計画にはアスナの存在は必要不可欠で、何処かで攫うつもりでいる筈だ。

「つまり・・・僕にこの“世界”と僕の“仲間”・・・どちらかを選べということか？」
「その通り・・・別に構わないだろう？　僕達と戦うのはアリス君なんだ、君は僕達の事を気にする事なく仲間たちと共に旧世界に帰る事が出来る」

迷っている。ネギは完全に迷っていたが、アリスも内心焦ってい

た。アリスの計画を発動させる為にはネギ達という囮が必要だ。
　ここでネギがフェイトの条件を呑んだらアリスの計画に支障を来たす恐れがあるのだが、ここでアリスがそれを口にする訳にはいかないので、ネギを信じるしかない。

「・・・・・僕は、今後一切・・・君達に・・・・・・手を・・・出さ」

　そこまで言った時だった。アリスが手を出そうかと思ったのだが、アスナがハリセン状にしたハマノツルギでネギとフェイトの横っ面を殴り、追い討ちを掛ける様にネギの頭にチョップを落とした。

「こぉんの・・・バカネギ!!　さっきから黙って聞いてれば何よあんたはッ!!　こんなネチネチとアリス先生とネギを比べるような言い方するガキのペースに嵌っちゃって全然ダメじゃない!!!　こんな奴のいう事なんか聞く必要ないわよ!!　全部アリス先生に任せて無視して全員無事に帰るですって!?」

　アスナもネギも、魔法世界に来てから世話になった人たちが沢山いる。それを守るのをアリスに任せてのこのこと帰るなど、出来ないのだ。

「全然、一切、一秒も、迷う必要なし!!　こんなわけわかんないこと言うバカの・・・言いなりになる必要なんか絶対にないのよ!!　違う!!?」
「・・・へえ」
「・・・っでもアスナさん!　ここでそいつの要求を呑まなければ、その目の前にいる人達とアスナさん達に危害が及ぶと脅しているんですよ!?」
「大丈夫!!」

何が大丈夫なのか、さっぱり解らないが、取り合えずアリスが危惧していた事態にはなりそうにないので、一安心だろう。
それにネギもアスナの言葉で決意が決まったらしい。

「で？　ネギ君？」
「ああフェイト、僕は兄さんにばかり頼っていられない。答えは否だ」
「では、交渉は決裂だね」

その瞬間、石の槍が刹那を貫こうとしたが、既に抜刀していた夕凪で切り落として回避していた刹那はアーティファクトを射出しようとしたのだが、木乃香が動いていた。

「せいっ！」

投擲した扇が先ほどからポケットに入れられたままだったフェイトの右手に命中して、中に入っていた魔法具を弾き飛ばした。

「やれやれ、神楽坂明日菜・・・君にはいつも肝心な所で邪魔をされるようだね・・・だけど、礼を言うよ。こんなチャチな作戦、失敗してよかった。未熟とは言え罠に落として彼の息子の自由意志を奪うなんてつまらない。これで僕達は晴れて世界をかけた敵同士・・・アリス君とネギ君、二人とも僕の敵になるという望みが叶った」

一瞬で背後に回ったアリスが振り下ろした、焔雷の獄姫となった“姫”をかわしたフェイトに更にネギがローブで視界を塞いでの拳に冷静に対処して、その拳の上に乗ったフェイトは上空へ飛び上がる。

「ヴィシュタル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　おお地の底に眠る
死者の宮殿よ　我らの下に姿を現せ　冥府の石柱」

上空に上がりながら詠唱するフェイトを追い、ネギとアリスも飛び上がった。

ネギは石柱の上を駆けながら奈落の業火を固定させ、それを自身の肉体に取り込み、術式兵装・獄炎煉我を完成させる。

だが、それよりも早くアリスは虚空瞬動と浮遊術でフェイトの下に辿り着き、横薙ぎに“姫”を振るい、更には“姫”を握っていない左手に固定していた魔法を開放した。

「雷の斧！！」

“姫”を片手で受け止めたフェイトだったが雷の斧を予想外だったのかまともに受けてしまう。更に後ろからネギの拳が背中に入り、石柱に激突してしまった。

「くっ・・・成る程、ネギ君はつまらない選択をしたものだと思ったが、中々如何して・・・良い威力だよ。アリス君も、随分と腕を上げた」

見た所、アリスの攻撃は効いているみたいだが、ネギの攻撃は殆どノーダメージの様だ。

「戦いの最中にお喋りとは余裕だな」

「っ！」

アリスの構え、フェイトには見覚えがあった。それは初代・紅き翼のサムライマスター、青山詠春が使った技・・・。

「斬魔剣・弐の太刀・焔雷!!」

飛んできた雷纏った炎の斬撃はフェイトの魔法障壁をすり抜けてフェイト本人に迫る。流石に避けるのは簡単なので瞬動でかわしたが、その後ろには既にアリスが構えていた。

「しまっ!」

「二連!!」

もう一度、振り下ろされた“姫”はフェイトの左腕を切り落とし、その瞬間、懐に入ったネギの肘打ちが腹部に入った。

「ぐ・・・サムライマスターの切り札を習得しているとは・・・・・・それに今の一撃、闇の魔法の力だけではない・・・」

「呆っとしてる暇は無い!!」

アリスの声がフェイトの上から聞こえてきた。見ればアリスが一枚のカードを左手に、構えていた。

「来たれ（アデアット）!」

現れたアーティファクトは剣でも籠手でもない。アリスの頭に乗った虹色の王冠は、ネギも含めて誰一人、全く知らない新しいアーティファクトだった。

「王者の定め!!」

王者の定め、それが新しいアーティファクトの名前だ。そしてその能力は・・・・・・。

「多重無詠唱！！　雷の投擲、炎の鎌、氷神の戦槌、光の戦斧、水の槍、風の剣軍、闇の槍、石の槍！！！！」

現れたのは無数の属性の魔法、ほぼ全属性の魔法を使ったアリスだが、これは本来おかしい。

本来魔法というのは自身の得意な属性でなければ殆ど精度が悪かったり、発動しなかったりするのだが、アリスが今行った魔法は全て、アリスが苦手とする属性の魔法までもが発動し、その精度は衰えていない。

「それが・・・そのアーティファクトの能力か」

魔法全てがフェイトに向けて発射された。避けようとしたフェイトだったが、ネギが更にフェイトに攻撃してきて、それ所ではない。

石柱に叩きつけられたフェイトに追い討ちを掛ける様に無数の魔法が降り注ぎ、石柱は粉々に砕け散るのだった。

七十七話　「味覚対決のち、全力全開」（後書き）

次回はアリスとネギ対フェイトの他に、シルヴィアと木乃香も活躍！　…だと思う。

七十八話　「フェイトの真の名」（前書き）

今回の戦いの主役はアリスとネギ、シルヴィア、木乃香です。

七十八話　「フェイトの真の名」

英雄と女王の子

七十八話

「フェイトの真の名」

アリスとネギ、フェイトの戦いが始まって直ぐ、木乃香とシルヴィアは別れた。シルヴィアはアリスのサポートの為に残り、木乃香は近くで起きた爆発から気配を辿り、空を移動するのどかとハルナ、千雨を発見、更にそれを追うバイオリンを持った女性を視界に入れた。

「あれやな」

その女性は間違いなくフェイトの従者という奴だろう、そう思い、木乃香は浮遊術で空に上がると、バイオリンを持った女性・・・調の前に出る。

「っ！　・・・貴女はアリス・スプリングフィールドの従者の・・・旧世界の姫君」

「ウチのクラスメートが世話になったなぁ・・・せやけど、あんまオイタが過ぎると、ウチも説教せなあかんくなるえ」

「・・・旧世界の姫君ごときが私に？　面白い冗談ですね」

自身の実力に自信でもあるのか、調はアーティファクトであるバイオリンを構えた。

木乃香もそれを静かに眺めながら、オリハルコン製の扇を両手に持ち、それを開きながら後ろに移動してきたのどか達に激を飛ばす。

「ここはウチが抑えるから！　三人とも早う逃げや！　邪魔や！！」

調がバイオリンを弾き、その効果である衝撃が木乃香を襲うが、木乃香は全身に掛かる衝撃を片手の扇を一振りしただけで弾き飛ばした。

それだけでなく、弾き飛ばされた衝撃はそのまま調に襲い掛かり、爆発を起こして地面に叩き付けた。

「多重高速詠唱！　光の戦斧　炎の鎌！！」

光の戦斧と炎の鎌が調に向かって振り下ろされる。確実に殺せるだけの威力と魔力が込められたそれは、調に直撃する前に、かわされる。

「油断しました・・・まさか旧世界の姫君が此処までやるとは・・・・・しかし、それでも貴女は私に勝てない」

「アンタ、大した事ないんやな・・・相手との実力差も図れへんやったら、底が知れてるえ」

その瞬間、バイオリンの下手な音が響き渡り、木乃香の姿も虚空瞬動によって消え、更なる激闘が始まった。

アリスのサポートの為に残ったシルヴィアは杖を構え、アリスが破壊した石柱の破片を魔法の射手で更に細かく砕いていた。

正直、アリスと共に戦いたいのだが、今はアリスと共に戦っているのはネギだ。足手纏い（ネギ）がいる状況で普段どおりのコンビネーションを図る自信はあるのだが、ネギの実力が中途半端に高い所為でそれも難しいのだ。

「歯がゆいですね・・・」

川の方に戦闘地点を変更したアリス達を追って行ったアスナと刹那に合流したい所だが、後ろに現れた存在の為に、それも不可能となったのが何より歯痒い。

「貴方が此処に現れるというのも珍しいですね・・・デュナミス」

「シルヴィア・オーギス・・・アリス・スプリングフィールドの右腕とも呼ばれる貴様は、ここで退場してもらおう」

影を槍の様にして飛ばしてきた。その全てを魔法の射手とランス・オブ・ジュエルで叩き落したシルヴィアは後方に瞬動で移動しながら詠唱を始め、更にアーティファクトを呼び出す。

「セイ・セイヴ・リオ・セイクリット　来たれ氷精　光の精　集い来たりて　照らせ　輝きの嵐」

瞬動から抜けた瞬間、魔法は完成した。

「常洸の吹雪!!」

ネギやアリスの雷の暴風、エヴァの闇の吹雪、木乃香の太陽の輝きや灼熱の白光と同系の魔法、光り輝く吹雪を放つ常洸の吹雪が真っ直ぐデュナミスに襲い掛かった。

だが、デュナミスはその場から動く事無く影のシールドで常洸の吹雪を防ぎきり、影の刃を吹雪の中に奔らせる。

常識はずれの行動に虚を突かれたシルヴィアは自身の魔法の中から迫り来る影の刃を右手のランス・オブ・ジュエルで弾きながら、左手の宝石の主をデュナミスに向け、宝石の中に刻まれたルーンに

魔力を込めた。

「開放！　贖罪の剣！！」

木乃香に教わって覚えた魔法を宝石の主に付いている宝石にルーンで刻んでおいたのだ。

これが宝石の主の効果、シルヴィアが得意とする宝石魔法を最大限に発揮できる杖で、杖に付いている宝石に予め決められた魔法のルーンを刻む事で詠唱する事無く、唯ルーンに魔力を流すだけで魔法を発動出来るマスターピースのアーティファクトだ。

発動した贖罪の剣は宝石の主を軸に光の剣を発生させ、それがデュナミスに伸びた。影のシールドに一度は止められるも、その影を貫いてデュナミスに突き刺さった。

「グォッ！　く、光であるが故に影を掻き消すか・・・厄介な」

「私の属性は氷と光と風・・・貴方が得意とする影には天敵とも言えるでしょう」

たとえシルヴィアとデュナミスの実力に差があろうと、属性的な有利で勝つ。それがシルヴィアがアリスに教わり、そして今まで実戦して生き残ってきた方法だ。その為に自身の属性を徹底的に鍛え上げ、今日まで来れたのだから。

「非才の身で、よもやこれ程の・・・・・やはり貴様はミヤザキノドカ同様、危険な存在だ」

のどかはその能力故、シルヴィアはその弛まぬ努力の末に磨き上げた実力と、更に先にあるであろう可能性故、デュナミスは危険と判断する。

「良かろう・・・私も全力で貴様を殺す！」
「掛かってきなさい・・・私も全力で貴方を殺す！」

「多重高速詠唱！　雷の斧、水の槍、光の戦斧！！」

川に戦いの場を移したアリス達、アリスの放つ無数の属性の魔法や、ネギの攻撃、それを迎え撃つフェイトの攻撃と、激しい魔法近接戦闘で水柱が絶えず立つ中、アリスはフェイトの曼荼羅の様な魔法障壁を砕く為に未だ未完成の切り札を切った。
アリスの両目がオッドアイに変わり、王家の魔力を全身に纏うのだが、やはり未完成であるが故に安定せず、恐らくは完全に魔法を無効化出来るのは一度が限界だろう。
だが、今の状況ではそれで充分だ。えいゆうの籠手を出して両腕に装備したアリスは一気にフェイトとの間を詰めて障壁を殴った。

「っ！　その力・・・お姫様の」
「おおおおおおおおおお！！！！！！」

障壁は完全に掻き消され、アリスの両目は再び通常の状態に戻るが、千載一遇のチャンス・・・これを見逃す訳にはいかない。
同時にネギも動いた。何故アリスがアスナと同じ事が出来たのかは判らないが、フェイトの障壁が消えたのなら、チャンスだと思って動く。
アリスとネギ、兄弟揃って最大の一撃をと考え、一気にフェイトに迫る。

「焔雷裂斬刺！！」
「桜華崩拳！！」

アリスの斬撃がフェイトの右肩から左腰にかけて入り、腹部にはネギの打撃が直撃した。倒した・・・そう思ったのだが、見ればそのフェイトは水になって崩れ、アリスの左肩に石の槍が突き刺さり、ネギは腹部を殴られて吹き飛び、石の壁にぶつかった衝撃で術式兵装が解けてしまった。

「がっ！　ぐぅ・・・・・・しまったっ」

「術式兵装が・・・」

アリスの術式武装も解けてしまった。ネギは態勢を整えようにも腹部への一撃が内蔵にダメージを与えているのか意識が朦朧として、アリスも石の槍が貫通して大量に出血している為、膝を着いてしまい立ち上がれない。

「驚いたよアリス君・・・まさかお姫様と同じ事をするなんて・・・ネギ君も良い一撃だったけど、でもこの程度なのかな？　違うだろう？　全てはここからだ」

その時、フェイトの背後に瞬動で現れた人物が二人、犬上小太郎と、木乃香に助けられて彼と合流したのどかだった。

「我　汝の真名を問う（アナタノオナマエナンデスカ）！！」

のどかの切り札たる鬼神の童謡の力が発揮された。のどかの右手人差し指に装備された鬼神の童謡が光り、遂にフェイトの真の名を暴く。

「・・・・・・君は」

のどかの存在と、そしてその魔法具が何なのかに気付いたフェイ

トは振り向き様に首を刎ねようと腕を振ったが、間一髪、小太郎と共にのどかは影に沈んで転移してしまった。
流石に不味いと見たフェイトはアリスとネギをその場に放置して水の転移魔法で二人の追跡に向かう。
アリスとネギは直ぐに追う為、何とか立ち上がるとアリスの治癒魔法で簡単な傷やダメージを癒し、フェイトの魔力を追って瞬動に入るのだった。

七十八話　「フェイトの真の名」（後書き）

シルヴィアのアーティファクトの能力判明！　そしてマスターピースである事も判明しました。

次回は原作で言う所のラカンの昔語りです。

七十九話　「戦いの後、敵の正体」（前書き）

すいません、昔語りは次回に延長です。

七十九話　「戦いの後、敵の正体」

英雄と女王の子

七十九話

「戦いの後、敵の正体」

フェイトの真の名を暴いて逃走したのどかと小太郎は、何度か転移を繰り返して離れた建物の影から出てきた。

「17箇所も転移したし、追ってはこれん筈や。そっちの首尾はどうや？」

「大丈夫みたい、あの子の本名がこれで・・・」

「よし！　危険を冒してギリギリまで接近した甲斐あったな」

フェイトの本名が出た。“テルティウム”というラテン語で3番目という意味の言葉だ。

「大収穫やな！　ほな俺はネギとアリス兄ちゃんの助太刀に戻る。この狗つけとくから、あんたは隠れて！」

「待って小太郎くん、私も行くよ。少し離れた所からあの子の思考を・・・」

「何!?　アカン、そら危険や！　成果はもう充分・・・」

「やはり君は危険な存在だったようだね」

小太郎とのどかしか居ない筈の路地裏に第三者の声が響いた。

見れば通りの方にはフェイトが発動体の指輪を填めた指を向け、詠唱をしている。

「石化の邪眼」
「どきぃ！！」

発動された石化魔法、小太郎は咄嗟にのどかを押し退けて魔法の前に出る。気による障壁のお蔭で完全石化は防げたが、小太郎の身体の半分は石化してしまう。
のどかはその光景を見て怯みそうになったが、それでも気持ちを奮い立たせると、フェイトの目的を聞き出そうとする。
だが、フェイト相手にそれは遅すぎる行動だった。既にフェイトはのどかの目の前に居て、掌をのどかの顔面を覆うように翳しているのだから。

「永久石化」

魔法が発動しようとした瞬間、フェイトの腕が切り落とされた。
フェイトとのどかの足元には“姫”を振り下ろした状態で更に態勢を整えて“姫”を振り上げようとしているオッドアイになったアリスの姿があった。

「っ！」
「はぁあああああっ！！！」

両腕を失ったフェイトに防ぐ術は無い。新しく雷の暴風を取り込んで術式兵装を纏ったネギまで合流してしまい、更に言えば発動体も失っているので魔法を使う事も出来ないので、今のままではフェイトはアリスとネギに勝てない。
なら如何するか、瞬動で斬撃をかわしたフェイトは若干だが焦りを覚えている。

「成る程、アリス君の転移魔法で追って来たのか・・・やはりアリ

ス君は天才なんだろうね。僕の後を追って転移出来る程の転移魔法の完成度、流石だよ」

正直な所、転移魔法も出来ないネギに落胆したフェイトだが、そんな暇は無い。不意に身体を横にずらせば上からアスナがハマノツルギを振り下ろしてきた。

「神楽坂明日菜か・・・」
「アスナさん！」
「安心してネギ！　街の人たちは無事よ！　あの柱は私が全部消しといたわ、この私がね！」
「は、はい・・・」
「刹那さんは何か炎を使う奴と戦ってるけど、多分大丈夫！」

そして更に、フェイトを囲む様に大量の剣が降ってきてネギとアスナの前にラカンと木乃香も振ってきた。

「おぃーーース、オレも交ぜろや」
「ウチを除け者にせんといてや」

どうやら調には余裕で勝ったのだろう。木乃香の身体には傷一つ無いのがその証拠だろう。

「さぁていっちょやるか・・・ん？　てめぇは」

ラカンがフェイトの顔を見て何かに気付いた。アリスからは散々聞かされて来たが、実際のフェイトを見て何か思い当たる節でもあったのだろう。

「成る程、新世界最強の傭兵剣士に二代目・紅き翼のリーダー、成

長著しい英雄の息子、さらに新旧両世界のお姫様とは・・・両腕を失った今の僕には流石に分が悪い」

その時、フェイトの後ろにシルヴィアと戦っている筈のデュナミスが現れた。漆黒のローブは所々がボロボロだったり凍っていたり、流石に戦闘の激しさは物語っているのだが、本人はピンピンしている模様。

「ではアリス君、ネギ君・・・今日の所はこれで、次を楽しみにしているよ」

デュナミスと共に影に沈むフェイトを逃がすまいとアリスは無詠唱の雷の斧を叩き込んだのだが、既に転移した後で、雷の斧は地面を破壊するだけに終わってしまった。

「チッ・・・逃がしたか」

“姫”を鞘に収めてアリスは小太郎の石化治療を行っていた木乃香の方を向いた。彼女と一緒に居た筈のシルヴィアは何処に行ったのか気になる。

「木乃香ちゃん、シルヴィアは？」

「シルヴィアさん？　そういや来とらんなぁ・・・」

「・・・デュナミスのローブが凍っていた、もしかしてシルヴィアと？」

急いでアリスはシルヴィアの魔力を探りながら捜しに出た。

幸い、シルヴィアの魔力は直ぐに見つかったので、其処に行って見ると、シルヴィアは全身傷だらけで、決して少なくはない血溜まりの中に倒れていた。

「シルヴィア！！」

慌ててシルヴィアの下に瞬動で移動し、抱き起こす。気を失っているだけで、命に別状は無さそうだが、全身の小さな傷とは別に、右脇腹の刺し傷が深い。

「残りの魔力では完全治癒は無理か・・・仕方ない」

残った魔力で一番大きい右脇腹の刺し傷を治癒する。アリスの治癒魔法の技量、残り魔力では出血を止めて、傷を表面的に塞ぐ程度しか出来ないが、今の状態よりはマシだろう。

「シルヴィア・・・・・・デュナミスと一人で戦うなんて、なんて無茶な事を」

しかし、それでも・・・・・・格上相手に生きていてくれた事が、何よりも嬉しい。

「よく生きててくれた・・・頑張ったな」

直ぐにホテルに運び、木乃香の治療を受けさせるべきなのだが、今は・・・ただ労いの意味を込めてアリスは己が最強の従者を抱きしめるのであった。

二代目・紅き翼と白き翼は一時的に合流していた。

クリムゾンと、白き翼の船・・・ハルナが中古で購入したグレートパル様号でオスティアから少し離れた所にある浮遊岩の上に逃げてきているのだ。

「えー・・・という訳で、僕たち“白き翼”は本日、午後1時を以って、世界滅亡を企む謎の組織、“完全なる世界”残党と戦う事になってしまいました！！」

何やらネギの発言に呑気に拍手している白き翼の面々に呆れ返るアリス達、完全なる世界を甘く見ているのか、唯の阿呆か・・・おそらく後者だろう。

「アリスさん、ええの？」
「構わないよ・・・自ら囮になってくれるんだ。精々利用させてもらうだけだ」

元々そのつもりだったのだし、白き翼（エサ）がやる気をだしているのなら大歓迎だ。

話は更に進んでいた。刹那が取り出したのはフェイトが持っていた魔法具、鵬法璽という強制契約のアイテムだ。

このアイテムは魔法世界でも高額の代物で、魔法具としては超一級品、封印級の契約魔法具なのだ。一度交わした契約を魂にまで刻み付けて縛り付ける事で、契約を絶対遵守させるという場合によっては危険なアイテムでもある。

「随分なアイテムを持ち出してきたものだ・・・あの場でネギがフェイト・アーウェルンクスの言葉に頷いていれば、お前は父さんの跡を追う事も、仲間達を奴等から守る事も出来なくなっていた」
「・・・！」

故に、アスナはよくやったと言うべきなのだろう。だが、本題はそれではない。

今回の本題はのどかの活躍によって得た最大の情報だ。フェイト

の真の名、その目的、全てのどかが手に入れた情報だ。
　フェイトの真の名、それはテルティウム・・・ラテン語で3番という意味を持つ言葉であり、同時にそれは3番以外にも存在するという事を裏付けているのだが、白き翼のメンバーで、それに気付いた者は居なかった。

「フン、それよりもっと面白い話があるんじゃねーのか？　お嬢ちゃん」
「は、はい、えーと・・・実はー」

　のどかが取り出したのは石化されたいどのえにっき・・・内容はフェイトの目的の一部だ。随分とラブリーな内容なのは目を瞑るとして、フェイトの目的・・・いや、作戦だろう、それが箇条書きで記されていて、かなり正確に書かれていた。
　途中、次のページを小太郎がナイフで慎重に開こうとしたのに、アスナが強引に開いて粉々にしてしまうなどのハプニングがあったが、それをテープで復元し、内容をネギが確認した所、ネギは顔面蒼白にして言葉を失っていた。

「ラカン・・・あれは気付いたと見て良いのかな？」
「ああ・・・１０年前にナギが姿を消した理由、書いてあったんだろう」
「だろうね」
「ふむ・・・・・うーっし！　お前等、此処まで来ちまったら仕方ねぇな。俺様とアリスも、少しネタバレしてやろう」

　アリスの仕方ないと苦笑しながら、影からラカンお手製の映画テープを取り出した。何故アリスの影に入っていたのかは聞かないでもらいたい。

「ま、オレもアリスもあまり気は進まねーが、マジでお前達がやり合うってんなら、奴等の正体くらい話しておいてやらねーとな・・・二代目・紅き翼だけが知ってるってのも不公平だろう」

アリスがフェイト達の正体を知っているという事に一悶着あったが、アリスの一睨みで黙らせた。

最近、と言うより魔法世界に来てからのアリスは正直、ネギ達の知らない雰囲気を纏っていて、眼光も見たことが無いくらい鋭く冷たいから、誰も勝てないのだ。

「これはラカンが作った映画だ。２０年前の大戦の事・・・それも初代・紅き翼の戦いの内容が入っている」

「制作費はネギ少年の給料から引かれる！！」

「ちょっとーっ！？」

作ったのは何年も前なのに、何を言っているのか・・・・・・。

アリスはそう思いながらも無言で映写機にテープをセットした。

「映像スタート！」

これから流れるのは、アリスとネギの父、ナギ率いる初代・紅き翼の戦記。この映画を見て、ネギ達は何を掴むのか、そしてアリスがずっと心の奥底でネギに対して抱いていた負の感情の意味、それに気付き、理解するのかは、映画が終わってからの話だ。

七十九話　「戦いの後、敵の正体」（後書き）

じ、次回こそは昔語りですので、お楽しみに！！

八十話　「２０年前の大戦」（前書き）

今回は語りだけなので、殆ど面白みは無いかと。

八十話　「２０年前の大戦」

英雄と女王の子

八十話

「２０年前の大戦」

　完全なる世界と戦う事を決めた白き翼たち、彼女達に完全なる世界の正体を教える事を決意したラカンとアリスは、２０年前の大戦の映画を見せる事となった。

　始まったのはラカンとナギ達の出会いの始まり、ラカンがまだ唯の傭兵剣士だった頃、当時の初代・紅き翼のメンバー、ナギ・スプリングフィールド、青山詠春、フィリウス・ゼクト、アルビレオ・イマの四人の討伐依頼を受けた所だ。

　ラカンが四人に喧嘩を売った時、丁度食事時だったらしく、それを滅茶苦茶にした詠春と戦い、お色気作戦によって敗れた詠春の次にナギと戦ってラカンが敗れた。

「詠春さん・・・この頃からお色気弱いんだな」

「あ～、ちょっと恥かしいわぁ・・・お父様ったら」

　初めてこの映画を見た木乃香は父の醜態に恥かしそうにしていた。当然だろう、父がまさかあんなアホな理由でラカンに負けたのだから、娘として恥かしいに決まっている。

　最も、詠春は剣技に関しては初代の中で最強だった。エロに弱く、詰めが甘いのと生真面目という辺りが刹那と同じ弱点なのだが。

「じゃ、まあ少し早送りでいってやるか・・・戦が始まったのはナギが１３の頃だ。こっちじゃ１２、１３でも力がありゃ戦いには出

れるからな」

はじめは辺境の些細な争いから、やがては確固たる意思をもって帝国は侵攻を始めた。オスティアを奪還する為に帝国はアルギュレー・シルチス亜大陸侵攻を開始、大規模転移魔法の実戦投入によってグレートブリッジを陥落せしめるのだった。

連合にとって王手にも等しい一手を打たれて、風前の灯かと思われたのだが、辺境に追いやられていた初代・紅き翼が前線に復帰によって、グレートブリッジ奪還作戦は成功、戦況を大逆転させたのだ。

「まあ、当時のメンバーを考えれば当然だろうね」
「兄さん・・・当時のメンバーの事、知ってるの？」
「まあね、青山詠春と言えばサムライマスターの異名を持ち、その圧倒的な剣技によって敵を切り伏せ、ラカンは見ての通りバグだし、アルも重力魔法という強力な手札を持っている。ゼクトさんは父さんの師匠だったから当然強い、父さんは言わずもがなだ」

この頃にナギにはファンクラブも出来、新たにガトウとタカミチが仲間に加わった。

連合の調査員だったガトウのお蔭で戦争の裏に潜む組織、完全なる世界の存在を知り、メガロメセンブリア元老院議員のマクギル議員と出会い、協力者としてナギ達に紹介されたのが、アリスとネギの母、ウェスペルタティア王国王女のアリカ・アナルキア・エンテオフュシアだった。

「・・・・・・（母さん）」
「（あれがアリスさんのお母様なんやなぁ・・・綺麗な人や）」

アリカが初代・紅き翼に助けを求めてきたのは自らが調停役とな

って戦争を終わらせる為だった。帝国と連合、二つの巨大勢力に挟まれて翻弄され続けてきたウェスペルタティア王国の王女だからこそ、民の為にも早く戦争を終わらせたかったと、アリスは母から聞いた事がある。

当時ナギ達は完全なる世界を国際マフィアや死の商人・・・戦争をして儲かる人間が作った組織だと思っていたのだが、真の正体は謎のままだった。

そこで初代・紅き翼は休暇中に完全なる世界の内偵を開始、詠春とアル、ゼクトとタカミチ、ガトウが調査を進め、ラカンはバカンス、ナギはアリカの世話をしていた。

そして遂に、ガトウが完全なる世界の真相に迫るファイルを手に入れる事に成功、完全なる世界との関連の疑いが出た大物の資料・・・それは当時のメガロメセンブリアの執政官、メガロのナンバー2の人間だったのだ。

「そして父さんがアリカ王女と共に街で大暴れ、お蔭で執政官の疑いの証拠を見つけた訳だけど・・・・・ホント、父さんのやる事っていつもむちゃくちゃだ」

実際、ナギは詠春に怒られている。

ナギが見つけた証拠があれば戦争は終わる。そう思い、アリカは帝国第三皇女・・・テオドラと接触する為にヘラス帝国に向かった。

ナギ達もマクギル議員に連絡し、法務官を呼んで執政官を弾劾する事になったのだが、少し遅かった・・・・・。

ナギ達がマクギル議員に会いに行ったとき、マクギル議員は既に暗殺されており、彼に変装していたアーウェルンクスの罠に嵌り、反逆者として連合を追われる身となったのだ。

「うぃーす、じゃトイレ休憩ー」

「えええ!?　良い所なのに!!」

ラカンのトイレ休憩という事で、映画は一時終了。アリスは手摺に腰掛けていつの間にか夜になっていた空を眺めていた。

「兄さん・・・あの、アリカ王女って、その・・・・・・」
「・・・・・・ネギ」
「な、何!?」
「今は一人になりたいんだ・・・向こうへ行っててくれ」
「あ、うん・・・」

ネギがアスナ達の方に歩いていくのを気配で確認したアリスは、懐からナギとアリカ、二人との仮契約カードを取り出した。

「父さん、母さん・・・・・・会いたい」

休憩が終わり、映画の続きが始まった。
最初に始まったのはナギ達がアリカと、一緒に囚われていたヘラス帝国第三皇女のテオドラ救出のシーン。そこから二人を隠れ家に案内して、現状を説明している。

「この頃には連合、帝国、ウェスペルタティア、世界の全てがオレ達の敵になっていたからなぁ」

だが、アリカは勝利を確信していた。何故ならナギと、ナギの初代・紅き翼は無敵だと知っているから、彼等なら世界を救えると信じているから。
ナギはこのとき、自身の杖と翼をアリカに預けると誓いを立て、戦争の勝利を誓ったのだ。

「これが切欠、父さん達は反撃を開始したんだ。敵味方の判別などの難しい事は頭脳労働担当のアル、アリカ姫、テオドラ様、ガトウさん、タカミチが行い、父さん達肉体労働担当は敵だと判明した奴を潰していった」

その中で味方を増やし、敵を倒して外堀を埋めていく。６ヶ月の死闘の末、遂にナギ達は完全なる世界の本拠地を突き止めた。

世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部、“墓守り人の宮殿”こそが完全なる世界の本拠地であり、最終決戦の地となるのだ。

ナギ達は最後の戦いに帝国、連合、アリアドネー混成部隊と共に赴き、決戦には間に合わなかったガトウ、テオドラ、アリカ、タカミチを除き、全戦力でもって最後の戦いを始めた。

「この戦いで完全なる世界の幹部の殆どが死亡、父さんもアーウェルンクスに勝った」

映像にはアーウェルンクスの首を絞めて持ち上げているナギの姿が、その後ろには戦闘を終えてナギに追いついてきたラカン、アル、詠春、ゼクトの姿もある。

だが、アーウェルンクスの後ろから攻撃があり、正体不明の魔法がアーウェルンクスとナギを貫いた。

現れたのは完全なる世界の首領、造物主、始まりの魔法使いとも呼ばれている存在、その存在の魔法によってラカンは両腕を失い、アルも詠春も重症、ゼクトもナギも大怪我を負ってしまう。

「ま、待って下さい！　敵の親玉って・・・フェイトの上にそんな奴がまだ？」

「安心しな、こいつはもういねぇ」

「じゃないと２０年前の大戦は終わってない」

アルが言うには造物主にはこの世界で誰も勝てないとの事だった。
だが、ナギはアルの残った魔力で傷を癒し、一番傷が浅いゼクトと共に造物主と戦い倒す事は不可能の筈の奴に勝ってしまった。
その後、始まってしまった世界の始まりと終わりの魔法はリカード、テオドラ、アリカが指揮する艦隊によって止められ、世界は救われたのだ。
世界の大危機は回避され、世界を混乱に陥れた完全なる世界とその首領が倒された事で初代・紅き翼は魔法世界に知らぬ者なき英雄となり、世界は平和になった。

「・・・って訳だ」
「すげぇっ！！」
「マジ英雄じゃん、おっさん達！　世界救ってるし！」

呑気な物だ。本当にこれで世界が救われ、誰もが悲しまないハッピーエンドを迎えたと思っているのだから。この中でこれがハッピーエンドではないという事に気付いているのは千雨くらいだろう。
彼女はそれだけの頭脳と、考察力がある。
アリスはそれを冷めた目で眺めながらシルヴィアの様子を伺った。
考えてみれば、この後の出来事でシルヴィアは故郷を失ったのだから。

「シルヴィア、大丈夫か？」
「・・・はい、あの子達は何も知らないから笑っているのですし・・・私が怒るのも筋違いですよ」
「・・・・・・そっか」

シルヴィアは少し一人になりたいと言ってクリムゾンに戻ったので、アリスは木乃香の横に立ったのだが、何故かハルナと和美に詰寄られた。

「アリス先生！　ナギさんとアリカ姫ってデキてたの！？」
「おっさん教えてくれなくってさぁ！」
「・・・・・・秘密、教える義理は無い」

唯一、アリスとネギの両親、ナギとアリカに直接育てられたアリスなら知っているのかと思って質問してきたのだろうが、アリスがこの二人に教えてやる義理は存在しない。

「木乃香ちゃん、私はクリムゾンに戻ってる・・・疲れた」
「あ、わかった～、アキラちゃん達には伝えとくなぁ」
「お願い」

クリムゾンに飛び乗って船内に入ると、いつの間にかエヴァが扉の影に立っていた。

「エヴァ・・・」
「ちょっとな・・・ガキ共のお気楽思考に嫌気が差した」
「私もシルヴィアも同じ」
「だろうな」

エヴァは２０年前の戦争の事、その後の事も全て知っている。だからシルヴィアの想いも理解出来るのだろう。同時にアリスの心中も、同じように理解出来る。

「ぼーやは母親に気付きそうだな・・・いや、アレは確信は出来ないが、予想は出来ると言う所か」
「あれで確信出来ない時点で殺してやりたいけど」
「教えてやらないのか？」
「ラカンに止められてる」

アリカの事はネギが一人前になるまで話さないでくれとラカンに言われている。更に言えばメガロメセンブリア元老院がアリカの事をネギに話すのを良しとしていない為、下手に話すと面倒な事になるのだ。

「・・・どうだ？　シルヴィアも誘って私の部屋で飲むか？」
「・・・ああ、そうしよう」

その晩、エヴァの部屋からアリスとシルヴィア、エヴァの三人が出てくる事は無く、部屋から明かりが消えたのは深夜遅くなっての事であった。

八十話　「２０年前の大戦」（後書き）

次回はネギの新たな従者と温泉の話…かな？

八十一話　「二代目・紅き翼と白き翼の溝」（前書き）

温泉の話ですが、温泉らしくない話です。

八十一話　「二代目・紅き翼と白き翼の溝」

英雄と女王の子

八十一話

「二代目・紅き翼と白き翼の溝」

現在、グレートパル様号の中では長瀬楓とネギの仮契約が行われている。

完全なる世界と戦う事になった今、持てる手札を増やすのに仮契約は持って来いの手段であるので、メリットは大きい。

「しかしアレだな、アリスの旦那と仮契約してる何人かにも兄貴と仮契約してもらえれば助かるんだが」

カモのぼやきは無駄な事だ。シルヴィアも木乃香もアキラも、さよ、月詠、エヴァ・・・誰一人としてアリス以外と仮契約するなんて言わないし、する気も無いのだから。

それは兎も角、ネギとの仮契約で現れた楓のアーティファクトは天狗之隠蓑という隠密系アーティファクトで、その高い隠密性からハイパーピースに位置されている。

次に古との仮契約となる筈だったのだが、古が何やら恥かしがって結局保留となってしまった。

「ところで朝倉さん、兄さんの事を調査するって前に言ってましたけど、何か判りました?」

「あ、うん少しね・・・ちょっと白き翼のメンバー全員集めれるかな?」

「それなら拙者のアーティファクトの中で話した方がいいでござる

な、聞かれる心配も無いでござる」

その直ぐ後、白き翼のメンバー全員を呼んで天狗之隠蓑の中に入った。中は広々としていて、草原の中にキッチン月の家まであったのは驚きだ。

「それで朝倉さん、聞かせてもらえますか？　兄さんの事を調査した結果を」

「うん、じゃあ先ずはアリス先生の人脈ね。結構苦労したけど、でも全部出せたよ・・・それも大物をね」

「大物、ですか？」

「うん、アリス先生個人でも、二代目・紅き翼でも共通しての人脈は凄いよ。ヘラス帝国の第三皇女、映画にも出てきたテオドラ殿下、アリアドネー総長のセラス、メガロメセンブリア上院議員のリカード、共通するのはこの面々」

どれも魔法世界ではＶＩＰの存在だ。そんな人達とのパイプを持っている事に驚きだが、それだけではピースとしては足りない。

「それと２０年前に今の廃都オスティアに住んでいた人達全員とも交流があるみたい」

これもナギという英雄の息子なのだから当然と言えば当然とも言えるが・・・何かが足りないとネギは思う。

「それから、次にアリス先生の目的なんだけど・・・これは全然判らなかった。一応調査はしてみたんだけど、どれも漠然としていて」

「どんなモノがあったんですか？」

「世界を救う、とか・・・完全なる世界の残党を殲滅する、とか・・・メガロメセンブリア元老院に喧嘩を売るつもり、とか・・・多分

デマもあるんだろうけど」

だが、それでネギの中で何かが繋がる。アリスが執拗に完全なる世界を・・・フェイトを目の仇にする理由、ナギの敵だったからというだけではないと思っていたが、アリスがフェイトに言った敵対する理由を思い出して何かが繋がったのだ。

「兄さんの目的・・・もしかして完全なる世界を倒して世界を救う事なのかな、それで父さんの意思を継いで、メガロメセンブリア元老院の事はたぶん、完全なる世界の構成員が紛れているのかもしれないから、それで喧嘩を売るのかも」

だが、それなら何故白き翼と協力してくれないのか、戦力は多いに越した事は無いのに、ネギ達だって完全なる世界と戦う意思は明確になったし、覚悟もあるのに。

「そうなんだよね～、アリス先生があたしらを必要としてないっていうのならそれまでだけど、あたし達だって魔法世界に来てから修羅場を潜り抜けてきたし、ネギ君だって剣闘士として戦って実力も上げたっていうのに、それでも協力するって言わないのはね～」

和美のいう事は最もだと白き翼のメンバー全員が思う。特にネギはアリスの従者の中には自分の生徒もいるのだから、アリスだけに任せる訳にはいかないという思いもある。

木乃香とアキラ、さよがアリスの下に以上、これはネギの問題でもあるというのがネギの見解だ。

「兎に角、もう少し調べておくよ」

「お願いします。それと刹那さんとアスナさん、木乃香さんにそれとなく僕達に協力して欲しいという事を伝えてもらえますか？」

「任せなさい！」
「わかりました」

アキラには亜子にお願いするとして、後はさよだが・・・さよには和美に頼む事にした。調査などで忙しいとは思うが、この中でさよと一番仲が良いのは和美なのだ。

「問題はシルヴィアさんとアリス先生、エヴァちゃんよねぇ」

アスナが言うのは頑なにネギ達の協力を拒む三人、エヴァに関してはネギから頼む事になっている。弟子のネギから言えば師匠であるエヴァも無下には出来ないだろうという考えから、ネギが頼む事になったのだ。
月詠は何と言うか、何を考えているのか解らないし、ラカンは頼めば法外な金を要求されそうだし、ペルシクムはアリスに絶対服従だから無駄だ。

「それじゃあ、完全なる世界との戦いと、アリス先生の調査、そして協力要請がんばるわよ！！」

アスナの号令に全員が気合を入れて返事したが、ネギだけは表情が優れなかった。何となくだが、アリスは絶対にネギ達に協力してくれないという事を確信していて、同時にその事に対する不満と、不信感が拭えずにいるのだ。

終戦記念祭で盛り上がる新オスティア、その観光名所と言えば２０年前の大戦で落ちてしまった旧オスティアの遺跡群だろう。
だが、新オスティアの観光名所は遺跡群だけではない。大闘技場付属の大公衆浴場・・・温泉はオスティアに来たら一度は入らなく

てはという程の名湯で、老若男女幅広い世代から人気の温泉なのだ。
この温泉に来ていた二代目・紅き翼のメンバーと白き翼のメンバーは、黒い猟犬のメンバーや、クレイグ達も一緒に温泉を楽しんでいる。

「ねえこのか・・・このかからもアリス先生に言ってくれない？あたし達も完全なる世界と戦う決意をしたんだから、協力くらいしてって」
「そうですね、私も出来ればアリス先生たちが協力してくれれば心強いですし、お嬢様が一緒であれば護衛もしやすいですから」
「ん～、悪いなぁ・・・そら無理や、ウチらもアスナ達と協力する気ぃあらへんし、こういう言い方したないけど、アスナ達の実力程度やと、まだまだウチらの足手纏いや」

アスナ達は確かに魔法世界に来てから実力を上げた。アスナや刹那など準最強クラスに手が届くのではという位にはなっただろう。だがそれでも、準最強クラスと最強クラスの下位ではまだまだ絶望的な差がある。
そして二代目・紅き翼のメンバーは全員が最強クラスに属しているのだから、アスナ達程度では本当に足手纏いでしかないのだ。

「このか・・・あんた本気でそう思ってるの？　流石にアタシも怒るわよ？」
「本気や、今回の事に関しては友達やから、幼馴染やからって簡単に頷くわけにはいかん。ウチら二代目・紅き翼だけの問題やないんよ」

アリスの夢と、それに関わる大勢の人の未来が掛かっているのだ。不安定要素はなるべく入れたくないし、足手纏いを積極的に引き入れるのは論外だ。

「この先、ウチらとアスナ達は道を違える事になるかもしれん、そうならないかもしれん、せやけどこれだけは言うとくえ・・・・・・もう、昔には戻れんのや」

もう昔に・・・・・・友達として、親友として笑い合っていた楽しい日々には戻れない。これだけは言っておきたかった。

「このか・・・」

「このちゃん・・・」

「勿論、今でも二人の事は親友やって思っとる・・・・・・せやけど、それだけや。もう昔みたいに笑い合う日は、来ないんや」

この先、木乃香も、アキラもさよも、人を殺す日が来るだろう。それは覚悟しているし、こうなる道を選んだ事に後悔は無い。

だが、だからこそ、もう楽しかった日々には戻れない、戻ってはいけないと、木乃香達は思っているのだ。

「・・・はぁ、ええ湯やね」

話はそれだけだと、木乃香は肩まで湯に浸かり、その心地よさをかみ締め、何か言いたげにしていながらも、何も言えなくなったアスナと刹那を精一杯無視するのであった。

木乃香達とは別の場所、一緒に風呂に浸かっていたアキラとさよは和美に詰寄られていた。和美はこの二人ならアリスの事を何か話してくれるのでは、協力を頼めるのではと思っている。３－Ａでも比較的大人しい二人だからこそ、可能だと思っていたのだ。

「でさでさぁ、二人は何か知らない？　アリス先生の目的」
「ごめん朝倉、話す事は無いんだ」
「朝倉さん達が知る必要は無いですから」
「でもさぁ、折角共通の敵と戦うんだし、協力し合った方が良いじゃん？　その為にはお互いに秘密は無しの方がやりやすいし」
「協力はしない。それがアリス先生の結論であり、私達の・・・二代目・紅き翼の結論だから」

和美は二代目・紅き翼と白き翼が協力する事を前提に話をしているが、それこそが間違いなのだという事に気付いていない。
そもそも二代目・紅き翼は白き翼とは協力しないと言っているのに、何故ここまで執拗に協力を求めてくるのか、それが理解出来ないアキラとさよ、少しうんざりしてきた。

「じゃあ、一つ聞くけど・・・アリス先生は何であんなに魔法世界のＶＩＰにパイプを持ってるのさ？　唯の父の知り合いってだけじゃ少し納得出来ないんだよねぇ。何か企んでない？」
「・・・・・ナギさんの知り合いだからっていうのは正解、後は朝倉には関係無いよ」
「それに、企むって言い方は私、好きじゃありません。アリス先生の事を知った風な口で語って欲しくないです」

アリスの目的を話さずに理解してもらうのは不可能だという事は解っている。だが、それでも白き翼には話せない・・・アリスが不確定要素と考えている白き翼には絶対に。

「ごめん朝倉・・・少し静かに湯に浸かりたいから、向こうに行ってて」
「え～・・・まあ、今日の所は諦めるか」

朝倉和美、要注意人物だと思う。だからさよはこっそりと不可視の霊を和美に憑け、監視をする事にした。

もしかしたら、彼女の行動如何ではアリスの、二代目・紅き翼の計画に支障が出るかもしれない。和美にはそれだけの行動力があるという事を、学園で学んだのだから。

八十一話　「二代目・紅き翼と白き翼の溝」（後書き）

パイオ・ツゥ…ごめんなさい。私には彼女のキャラを文章に出すほどの技量がありませんでした！！

八十二話　「ラカンの決意、拳闘士大会のバグ」（前書き）

アリスとラカンが中心の話です。

八十二話　「ラカンの決意、拳闘士大会のバグ」

英雄と女王の子

八十二話

「ラカンの決意、剣闘士大会のバグ」

二代目・紅き翼と白き翼の活動は大きく別れる事となった。

白き翼はネギと小太郎が拳闘士大会に、アスナとのどか、千雨がそのサポートを、楓、刹那、和美、古、ハルナが旧オスティアのゲート探索に出て、それぞれの出来る事をしている。

対する二代目・紅き翼は木乃香をリーダーとするアキラ、さよのチームが旧オスティアの民への対応を、エヴァをリーダーとする茶々丸、チャチャゼロのチームはメガロメセンブリア元老院に恨みを持つ賞金首との接触を、アリスをリーダーとするシルヴィア、月詠、ペルシクムのチームはテオドラ、ヘラス、リカードとの連日秘密会議とラカンと共に大会の視察をしていた。

この日もアリスはラカンと共に大会の視察をしている。シルヴィア達はこの先の決戦に備えて宝石を買いに行っている。宝石を使うシルヴィアとペルシクムには、消耗品である宝石の補充は必須なのだ。

「今日もネギと小太郎の勝ちか」

「ああ・・・フン、勝ったんだったら笑顔の一つも見せろや」

試合に勝利しても笑顔一つ見せないネギを見て、ラカンが皮肉を言っているが、アリスとしてはまだ物足りないという表情をしていた。

「まさかラカン、あの程度で満足していないよね？」
「ああ？　当たりめぇだ、このオレ様が鍛えてんのに、あの程度の実力で満足出来るかよ」

確かにネギの術式兵装・・・奈落の業火を取り込んだ獄炎煉我のパワーや防御力も、雷の暴風を取り込んだ疾風迅雷のスピードも、中々だと言える。
だが所詮は中々というだけ、脅威に感じる事も、魅力に思う事も無い。あれでフェイトと・・・完全なる世界と戦うというのは無謀を通り越して自殺でしかない。

「まあ、見てな。オレ様に良い考えがあるからよ」
「これはこれは・・・拳闘大会、影の出資者が揃って顔を見せるとは珍しい・・・」
「ん？」
「む？」

突然割り込んできた声に振り返ってみれば、侍女を引き連れたテオドラ殿下が居るではないか。

「おお！　久しぶりだな！　じゃじゃ馬第三皇女じゃねーか、オイ」
「なっ、貴様！」
「殿下に無礼であろう！」
「良いのです、下がりなさい」
「し、しかしテオドラ殿下」
「命令です」
「ハ、ハッ！」

侍女の二人が去ったのを確認した途端に、今まで引き締まっていたテオドラの表情があどけない笑顔に変わった。

「ジャック～！　アハハハ！　久しぶりじゃな、この筋肉ダルマ！　何故顔を見せん！　アリスに頼んだ伝言を聞いておろう！！」
「オイオイ、三十路の女が会って早々ソレか・・・」
「ヘラスの族は長命だから三十代の女は人間換算でまだ十代じゃ！　ミソジ言うな！　お前もそうじゃろうが！！」

いや、十代でも肩車で飛びついてくる女は居ないのだが・・・・・。

「ラカン、そろそろテオドラ様の婿になったら？」
「んなっ！？」
「おお！　それは良い！　どうじゃ？　ジャック、妾の婿になれば贅沢し放題じゃぞ？」
「なるか！　アリスも余計な事言ってんじゃねぇ！！」
「ハハハ、これはとんでもない所を見てしまいましたな」
「あん？」

突然聞こえてきた野太い声、入り口の方を見れば、リカードとセラスの二人が入ってきていた。

「よぉ、伝説の英雄にお転婆姫、未来の王様」
「こんにちはリカードさん、セラスさん」
「何だ何だ、てめぇら揃い踏みじゃねぇか・・・・・いや、でも、てめぇらがこうして裏で仲良くしてるのバレるとマズイんじゃねぇの？」
「つれないこと言うなよラカン、俺たちゃ戦友だろ？　折角の再会に難しい事はなしだぜ」
「それに連日私とリカードさん、セラスさん、テオドラ様は会議で顔を会わせてるから、今更だよ」

アリスとの連日会議でも、今のこの場でも、防衛対策は万全にしてあるし、二人が入ってきた瞬間にアリスが張った強力な認識阻害と人払いの結界のお蔭で、人が来る事は無い。

「ったく、元老院議員とか肩凝ってよ、むいてねぇんだ。あの頃が懐かしいぜ」

「このおっさん、どの面下げて向いてないとか。ホホホホホ」

全くだ、元老意議員の中でも名議員とまで呼ばれる程の手腕を発揮しているリカードが向いていないなど、他の議員に失礼だろう。

「ワハハハ！　まあ飲もうぜ！　おらアリスも飲め飲め！　試合を肴に飲むぞ！」

「そうじゃ飲め飲め！」

「ハイハイ十代のお子様はジュースな」

「あああ！　何するのじゃ筋肉ダルマ！！」

ラカンが取り上げたテオドラの酒をアリスが奪い返して、皆にネギの試合のＶＴＲを見ながら飲み始めた。

当然、話題になるのはネギの事、当然の流れだ。

「こやつか、今話題の偽ナギ・・・アリスの弟のネギとやらは」

「ええ、テオドラ様から見て如何ですか？」

「うむ、実力は確かじゃな・・・じゃが」

「ああ、お転婆姫の言うとおりだぜ、ラカンが鍛えてるのもあって、無駄が多いな」

拳闘に詳しいテオドラと、白兵戦の鬼教官と呼ばれたリカードの評価は厳しい。実力は確かだが、それだけだ。

２０年前の大戦を知る者の見解としては、今のネギでは２０年前の大戦に参加していたとして、兵士としては強い方に部類されるだろうが、所詮はその程度・・・戦争を終わらせられるだけの力は無い。

「ところでよアリス、お前の弟って１０歳だったよな？　明らかにお前と同い年くらいにしか見えねぇんだが・・・」
「ああ、あれです。年齢詐称薬・・・あれ使ってるんですよ」
「成る程、それなら納得だ」

だがまあ、拳闘大会出場者のレベルはどれも低い。ネギと小太郎程度の実力でも一応はトップクラスなのだから優勝は間違い無いだろう。
殆ど出来レースの様になってしまったため、テオドラ達が些か退屈になってしまうのも無理からぬ事だ。

「つまらん、これではアリスの弟で優勝は決まりじゃな・・・」
「ええ、このまま行けばそうでしょうけど・・・ラカン」
「ああ、優勝がアイツで決まりってのはわかんねぇぞ？」
「ん？　なんでじゃ？」

そう、このまま行けば確かにネギと小太郎の優勝で決まるだろう。だが、ネギと小太郎が決勝で当たる相手は簡単には勝てない相手なのだ。・・・・・何故なら。

「アリスに頼まれたのもあるが・・・オレもちょっと本気でアイツに興味が出てきてなぁ。さっきこの大会にエントリーしてきたとこだ」
「そういう事です。私は流石に興味が無いので出ませんが、ラカンが参加する事になりましたから、ネギ達の優勝は、殆ど不可能にな

りましたよ」

しかし、それでは今度はラカンの優勝で決まってしまう。それではどうしても面白くはならない、だからアリスはテオドラ達に頼み事をする。

「リカードさん、ネギと小太郎の近接戦教導をしてもらえますか？」
「お？　ラカンと戦う為に鍛えてやれってか？　おもしれぇ！！」
「セラスさん、ネギが最近、千の雷を覚えようとしています。それの完成を手伝ってやってください」
「あらあら、ナギと貴方の得意としている魔法をあの坊やも覚えるの？　楽しみね」
「テオドラ様は全体のサポートをお願いします」
「うむ、任せておけ」

但し、この事は各国機関、政府関係者には秘密。そしてアリスが頼んだという事はネギ達に絶対に隠しておく事を厳密させた。

「ああ、楽しみだ・・・・・・順調にネギ（エサ）が強くなっていく、私の計画の成就がより確実になっていく」

お手洗いと断って貴賓室から出たアリスはテラスからオスティアの街を眺めながら口元を歪めて嗤っている。
それを後ろの柱の影から気配を消して見ていたシルヴィアと木乃香は・・・・・悲しそうな、痛々しい表情でアリスの暴走を止められない無力な自分を嘆くのであった。

八十二話　「ラカンの決意、拳闘士大会のバグ」（後書き）

もうそろそろしたらアリスは決定的な挫折、というか……焦りすぎたが故の残酷な結果を見ることになるかも？

八十三話　「木乃香の哀」（前書き）

今回は短いです。まだ体調がよろしくないので。

八十三話　「木乃香の哀」

英雄と女王の子

八十三話

「木乃香の哀」

ナギ・スプリングフィールド杯の本戦トーナメントが決まった。ラカンが裏から手を加えたのか、ネギとラカンが当たるのは決勝になる組み合わせだ。

アリスはトーナメント表を見終えると踵を返してホテルに戻った。決勝まで見る必要は無いし、興味も無い。情報はのどかから入ってくるから特に問題は無いので、別の事に集中したいのだ。

「朝倉が私の事を嗅ぎ回っているとの事だしな」

のどかから入った情報の中には和美がアリスの事を探っているというものがあった。問題ないと言い切れない和美の行動力と諜報力は学園で経験済みだ。

だから警戒する。事、諜報において和美は危険分子であり、不安材料にもなる。場合によっては始末する事も念頭に置いて行動しなければならない。

「その場合、完全に白き翼とは敵対関係になるだろうがな」

所詮は雑魚の集団、お気楽極まりない素人の集まりだ。魔法世界に来てからちょっと実力を上げた程度で、アリス達の足元にも及ばないが、事と次第によっては計画に支障を来たす可能性もある。

「まあ、一先ず様子見で、泳がせておくか」

情報の中にはダミーも紛れている。直ぐに問題になる事でもないので、この問題を打ち切って別の事を考え始めた。

先日の戦いで実感した自分とフェイトとの間にある実力の差、壁・・・京都での戦い以降、修行をして実力を上げたとは言え、まだまだフェイトには届いていないという事を実感したアリスは、更なるレベルアップを考えていたのだ。

「だが、これ以上のレベルアップとなると・・・・・・」

正直、難しいと言わざるを得ない。魔法、神鳴流、ラカンシリーズ、どれもこれ以上のレベルアップとなると難しい所まで来てしまったし、王家の魔力くらいしか残っているものは無い。だがそれでもフェイトに勝てるかと問われればＮＯとしか言えない。

「私の持ち味・・・術式武装、それと・・・いや、王者の定めを使えば更に幅が広がる・・・ん？」

そこで気付いた。アリスは王者の定めを使えば全属性の魔法が使える、そして以前セラスに頼んで入らせてもらったアリアドネーの禁書庫で見た書物の内容を思い出す。

「私の切り札はまだ残されているが・・・・・・そうだ、アレなら」

出来るかは判らない。だが、やらないよりはマシだ。もう既にアリスに残された選択肢はそれしか思い浮かばないのだから、それが難しい事だろうと、やるしかない。

「早速セラスさんに頼んで禁書庫に入る許可を貰って、アリアドネ

ーに向かうか」

やる事は決まった。膳は急げとアリスはセラスが滞在しているホテルに転移するのであった。

木乃香はアキラとさよを連れてオスティア祭を見て周っていた。本当ならいつも通りの根回しをしている時間なのだが、それも一段落着いたので、余った時間を利用して祭を見て周ろうという事になったのだ。

「木乃香・・・元気無い？」
「あ・・・うん、ちょいな」
「アリス先生の事ですか？」

アリスの事はアキラもさよも気に掛けていた。魔法世界に来てからのアリスの焦りは見れば判るし、やっている事がアリスらしくない・・・・・いや、アリスならあんな手段を取らなくても計画は遂行出来る筈なのだ。

「アリスさん、のどかの恋心を利用して、ネギ君たちを捨て駒として見とる。確かに戦略的に正しいのは理解しとるし、戦場で正しいも悪いも、正々堂々とか汚いやり方とか、そないなもん存在しないのは重々承知や・・・・・でも、アリスさんはやらんでもええ事までして、気付かない内に自分の首絞めとるんやないかって思うんよ」

あのままでは、いつかアリスは大きな間違いを犯すか、やって来た事のツケが回ってくる。それでアリスが死ぬなんて事になったら、そう考えるだけで怖くなる。

「アリス先生の背負っているモノ・・・大きいから、焦るのは私も解る。でも、今のアリス先生は・・・夢を目指しているんじゃない気がする」
「はい・・・なんて言うか、敵を倒す事・・・目の前に立ちふさがる敵をいかにして倒すのかという事しか考えていないですよね」

アリス本人は気付いていないだろうが、アリスの従者達はそれに気付いている。だが、気付いていても如何する事もできない。
何故なら、アリスのやっている事は手段としては外道なのだろうが、効率が良いからだ。今のアリスの精神状況では何を言っても届かないのは承知済みだ。

「アリス先生が納得出来る方法が思い浮かばない・・・それが歯痒い」
「やっぱり、私達も経験という面では不足しているんですよね」
「・・・・・・」

そう、アリスの戦略を否定して、新しい戦略を立てられる程、木乃香たちには経験が無い。
シルヴィアやエヴァなら可能かもしれないが、事戦略という面ではエヴァもシルヴィアもアリスに劣る。寧ろアリスの戦略眼、戦略立案スキルが異常なのだ。流石はアリカに知識面での指導を幼い頃から叩き込まれていただけの事はある。

「エヴァちゃんは、当面は様子見だ言うてた・・・せやから、ウチらもその通りにするえ。せやけど、本当に不味い思うたら直ぐにアリスさん止める覚悟をしといた方がええ」
「うん、アリス先生には私達が大好きなアリス先生のままで夢を叶えて欲しいから」

「その為なら、アリス先生におしおきするぐらいしますよ！」

だが、この時は知らなかった。

この時にアリスを止めていれば、あんな惨劇は起こらなかったし、あんなに悲しい想いをする事もなかったのだから・・・・・。

だが、それは所詮未来の出来事、この時の木乃香たちが、それを知る術も無く・・・来るべき未来は変わらず、悲劇と惨劇の扉は、ゆっくり、だが確実に音を立てて開かれようとしているのだった。

八十三話　「木乃香の哀」（後書き）

次回は拳闘大会決勝です！　原作と大差無いので、基本アリス視点になるかと。

八十四話　「ラカン対ネギ、仕込み完了の知らせ」（前書き）

決勝戦始まりました！　……一話で終わらなかった。

八十四話　「ラカン対ネギ、仕込み完了の知らせ」

英雄と女王の子

八十四話

「ラカン対ネギ、仕込み完了の知らせ」

遂にナギ・スプリングフィールド杯決勝戦の日がやってきた。大闘技場は決勝戦を前に模擬合戦開催形態に変形し、中央アリーナ部分の直径３００ｍの広さになる。

更に、観客席には連合艦艦載砲すら防ぐ魔法障壁によって守られているので、観客への安全は保障されている。・・・・・・ラカンやアリス、エヴァなら簡単に破壊出来るのだが。

会場の最大収容人数は１２万人、他にもＶＩＰルームも多数有している闘技場の観戦席は既に満員で、会場前の巨大スクリーンの前にも試合を今か今かと待ち望んでいる人々で賑わっていた。

「相変わらず、凄い規模だ」

大会関係者専用のＶＩＰルームで、ガラス越しにアリーナを見下ろしていたアリスは、この会場を作る為にラカンがどれだけの出資をしたのかが伺えて苦笑してしまった。

最も、その出資にはアリスも関わっているので、心中複雑なのだが・・・・・・。

「セラスさんの報告では、ネギは千の雷を習得したらしいね」

「ああ、しかも私のコピーからの報告では、随分と面白い事を考えていたらしいぞ？」

アリスがいるＶＩＰルームにはラカンを除いた魔法世界に居る二代目・紅き翼のメンバーが全員揃っていた。
ガラス越しに見る者、部屋に備え付けられたスクリーンで見る者と分かれ、シルヴィアが入れてくれたオスティアンティーを飲みながら優雅な観戦タイムに突入している。

「さて、ネギは英雄という壁を前に・・・どう出る？　どう戦う？」
「ぼーやの持ち味であるスピード、それだけではあのバグには勝てん・・・どの様に戦うのか」

だが試合開始時間を１５分過ぎてもネギと小太郎は姿を見せなかった。既にラカンと、そのパートナーとして試合に挑む事になったカゲタロウもスタンバイしているというのに、ネギと小太郎はまだ選手室にも姿を現さないというのだ。

「ぼーやの事だ、臆病風に吹かれたという事はあるまい」
「大方ギリギリまで対策を練っていたか、修行していたのだろう」

恐らくその通りなのだろう。漸く現れた二人は何やら走っていた・・・結構急ぎ気味に。

「来たな・・・」
「ああ・・・見せてもらうぞネギ、お前がどれだけ強くなったのか」

試合開始と共に、ネギは仮契約でもしたのかアーティファクトを出した。現れたアーティファクトは手帳、そしてそれを使うのかと思えば、後ろに下げて千の雷の呪文を唱え始めた。

「あのアーティファクト、何だ？」
「さあて、能力を見ない事には判断出来ないな」

恐らくは呪文の強化・倍増系アーティファクトなのだろうと予想した。アーティファクトを出してそれを使わずに呪文を唱えた所を見るに、それ以外考えられないのだ。

当然、ラカンもそう思ったのだろう、力比べとばかりにカゲタロウが注意を逸らした隙に飛び上がり、アーティファクトであるハルバートに大量の気を込めた。

「やば・・・・・・対衝撃・耐圧・対物理障壁最大展開！！」

急ぎアリス達が居るＶＩＰルームに障壁を展開した。アリス、エヴァ、シルヴィア、木乃香、膨大な魔力を持つ四人による最大出力の障壁を張った直後、ラカンが振り下ろしたハルバートがアリーナの床を抉り、大爆発と閃光、爆音が闘技場全体を包み、数瞬遅れて衝撃と爆風が観客と闘技場の外を警備していた船や警備員を襲う。

「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・なあアリス」
「・・・・・・何？」
「私たちは全力で障壁を張ったよな？」
「ウチも普通より仰山魔力込めたえ」
「私もです」
「私もだ」
「・・・ならなんで障壁が消し飛んだ！？」

・・・・・・バグだから。

未だに煙が晴れないアリーナ、所々の床が抉れる中、割れ破片の

上に二つの人影が見えた。
ネギと小太郎だ。それもネギの手にはアスナのアーティファクトであるハマノツルギが握られている。

「ハマノツルギだと!?　馬鹿な!!　何故ぼーやが持っている!?」
「・・・まさか」

まだ確証は持てない。だがアリスの脳裏には一つの名前が浮かび上がった。

「動くか」

ネギと小太郎が動いた。牽制に放たれたラカンの無数の剣はハマノツルギの一閃で掻き消され、振り下ろされたソレを受け止めたラカンの剣すらバターのように切り落としてしまった。

「本物だな・・・本物のハマノツルギだ」
「だがぼーやが何故あれを?」

すると、ネギは“去れ（アベアット）”と言ってハマノツルギを消した。代わりに手に握られていたのはカードではなく、先ほどの手帳、開かれた中にはネギが持つ従者達のマスターカードが入っていた。
新しく選ばれたカードは刹那のカード、それをアスナのカードが収められていたところに変わりに収めて“来たれ（アデアット）”と言うと、今度は刹那のアーティファクトである匕首・十六串呂が現れた。

「成る程、自らの従者のアーティファクトを自在に使用出来るアー

ティファクトか・・・ぼーやらしい物だな」
「ああ・・・千の絆、書物でしか見たことは無いけど、マスターピースとグランドピース、どちらに属するのか未だに定められていない激レアのアーティファクトだ」

従者のアーティファクトによっては危険性、性能が上下する不安定なアーティファクトであり、従者の中にマスターピースやグランドピースのアーティファクトを持つ者がいたら間違いなく強力になる性能は、ネギにはピッタリだろう。

そして戦いは剣無しの拳勝負となった。剣より素手の方が強いラカン相手に、ネギは如何勝負するのかが見ものだ。

ネギは遅延呪文で腕に封印していた千の雷を開放・固定し、それを掌握する。ネギの新たな術式兵装、千の雷を取り込んだ“雷天大壮”を身に纏い、激しい攻防を繰り広げる小太郎とカゲタロウを他所に、ラカンと相対し睨み合いに入った・・・・・次の瞬間、ネギの拳がラカンの顔面に入り、大きく吹き飛ばした。

「・・・アリス、見えたか？」
「・・・いや、気が付いたらラカンが吹っ飛んでいた」
「成る程、千の雷を掌握した術式兵装・・・その武器はスピードという事か」

まさか、アリスはおろかエヴァですら目視出来ないスピードとは恐れ入る。

その後もネギはラカンも追いつけないスピードで動き回り、ラカンの攻撃は一切当たらず、ネギの攻撃が英雄という存在を追い込んでいった。

「成る程な・・・雷化とは恐れ入る」
「目が慣れてきたとは言え、それでも見えないが・・・理解出来た。

雷のスピードで瞬動を行っているのか」

術者自らを雷化する雷天大壮の付加効果・・・雷のスピード、１５０ｋｍ／ｓで動く瞬動・・・名の通り雷速瞬動、先のアーティファクトに続くネギの第２の切り札と言った所だろう。

更には自らを完全雷化する事で特攻を仕掛ける千磐破雷の威力は、ラカンが気合防御をしていなければ消し炭になっていただろう破壊力を秘めている。

「そしてトドメのゼロ距離での雷の暴風か・・・」

「ぼーやにしては中々の戦いっぷりではないか・・・・・・だが」

「ああ、これでラカンは本気になった」

小太郎の一撃でダウンしたカゲタロウと、同じく起き上がらないラカンだが、二人の全身から滲み出てきた殺気は間違いない。

「ほら、ね・・・」

カウント１９でラカンとカゲタロウは起き上がった。しかもラカンはまるでダメージが無かったかのように真っ直ぐ立っている。そして・・・会場一杯にラカンの笑い声が響き、それが収まった瞬間、会場一杯を強烈な殺気と気の圧力が支配した。

「始まる・・・ラカンの本気が」

「ぼーや、伝説の英雄の本気を相手に、どこまで戦えるのかな？」

「「見せてもらおう」」

そして、ネギが再び千の雷を取り込んだ瞬間、その懐にラカンの拳が突き刺さるのだった。

八十四話　「ラカン対ネギ、仕込み完了の知らせ」（後書き）

次回はラカン対ネギの決着です。
ああ、もう直ぐだ。もう直ぐ最高の魅せ場が……。

八十五話　「ネギの切り札、アリスに届くのか」（前書き）

やっとナギ・スプリングフィールド杯が終わった……。

八十五話　「ネギの切り札、アリスに届くのか」

英雄と女王の子

八十五話

「ネギの切り札、アリスに届くのか」

ラカンが本気になった。それはネギと小太郎の勝率が更に下がった事を意味する。

ネギと小太郎では意識する事も出来ないスピードでネギの懐に入って拳を入れたラカンと、いつの間にか小太郎の死角から影の槍を突き刺すカゲタロウは、先ほどまでの比ではない。

雷速瞬動で離脱したネギだったが、やはりいつの間にかネギの真横に移動していたラカンの拳が振り下ろされ、間一髪で避けたネギが再び雷速瞬動で移動すれば、やはりラカンはいつの間にかネギの後ろに居た。

「詰んだな・・・」

「ああ、最早ネギに勝てる術は無い」

ネギの後ろに回ったラカンは、振り向いたネギの腹部に手を当て、強力な圧力を掛けながら腹部中心にネギの身体を回転させて投げた。

この攻撃でネギの内蔵はかなりのダメージを負った事になる。それでもめげずに雷速瞬動を繰り返してラカンを攻撃するが、今度はラカンに攻撃は当たらず、全てを弾かれてしまう。何故なら、ネギの雷速瞬動は木乃香の爆縮瞬動より早いという利点があっても、移動先に先行放電というご丁寧な印を作っている。

「そう、それでは」

「カウンターの餌食になる」

瞬動中のネギの顔面にラカンの掌底が入り、ラカンの腕力とプラスでネギのスピードによる絶望的な破壊力を持ってネギは脳を揺さぶられ、宙を舞った。

「あれ？　ラカン・・・いつの間に新しいワザを？」

ラカンが放った全身から放つ気の光線、エターナル・ネギ・フィーバーというネギの新必殺技を考えていたラカンが編み出した。本人曰く、適当に考えたワザ・・・らしい。

エターナル・ネギ・フィーバーは宙を舞うネギを飲み込み、観客席のシールドにぶつかって爆発した。

「お？」

だが、ネギはギリギリでハマノツルギを出して無事だった。そう、エターナル・ネギ・フィーバーに対しては無事だった。後ろに移動していたラカンの拳がネギの胸を捉えアリーナに叩き付けられてしまう。

「ふん、無様だな・・・所詮ぼーやでは英雄相手では、この程度か」

「ああ、内蔵はグチャグチャでダメージも大きい、出血も・・・吐血したか」

立ち上がろうとしたネギが大量の血を吐いた。もう試合を続行するのは不可能だろうし、よしんば立ち上がったとしても、まともに動ける筈が無い。

「そろそろ帰るか？　千の雷の術式兵装は中々の見物だったが、そ

れだけだ。ぼーやはまだまだ私達最強クラスには届いていない事が判った」

それもそうだ。と、ガラスに背を向けて立ち去ろうとしたアリスだったが、会場の歓声が聞こえて振り返った。

アリーナを見てみれば、ネギは立ち上がっていた。足元を血だらけにして、全身血まみれになりながらも、確かに立ち上がっていた。

「ほう・・・」

「成る程な、ぼーやもナギの息子であり、アリス・・・お前の弟という事か」

小太郎も立ち上がっていた。二人とも血塗れで、ボロボロで、満身創痍の状態だが、その瞳には戦意が先ほど以上に燃え上がっている。

「まだ何か考えている様だな」

「ああ、あの目は何かを狙っている・・・・・・さて、一体何を見せてくれるのか」

ネギが何かを渡したのと同時に小太郎が突っ込んだ。カゲタロウの千の影精で作られた千の槍の中、小太郎はネギから渡された物・・・千の絆を構え、ネギがアデアットと言うのと同時に、小太郎は千の槍に飲み込まれた。

だが、小太郎は獣化の奥義、狗音影装で完全獣化し、その口にはハマノツルギが咥えられて、影の槍全てを掻き消したのだ。

「おお、もふもふだな」

「いやエヴァ・・・そこは完全獣化を評価しようよ」

小太郎の歳で完全獣化を完璧に操っているのは凄いことだ。狗族は成人しなければ完全獣化しても獣の本能に意識を飲まれて暴走してしまうのが常識だ。

しかし、小太郎な確りと自分の意識、自我を以ってカゲタロウに突っ込み、その身体にハマノツルギを突き刺した。

更には、身動きが取れなくなったカゲタロウをそのままに、小太郎はラカンに突進し、恐らくは時間稼ぎだろう、ラカンに攻撃の暇を与える事なく攻め続ける。

「中々の戦いをするではないか、あの狗」

「しかしそれもラカンが相手では・・・ね」

そう、ラカンに一度攻撃を許してしまったのが間違いだ。今度は小太郎が攻撃をする間もなくラカンが攻め続け、胴体の中心に剣が突き刺さった。

「む？」

「お？」

だが、小太郎の役割は此処まで、ネギの準備が整ったようだ。

ネギは千の雷を二つ固定して、両方とも掌握した。千の雷の二重装填による術式兵装・・・その名は“雷天大壮2”、その様子から見るに・・・・・・。

「常時雷化、と言った所か」

「ああ、今のネギは通常の雷天大壮の時とは違って、常時雷化・・・雷の上位精霊のような状態になっている」

少しの睨み合い、数瞬の刹那とも言える時間の静寂が会場を支配して、次の瞬間、ネギの肘打ちがラカンの身体の中心を捉えた。

吹き飛ぶラカンを追う様に雷速瞬動に入ったネギの見えぬ攻撃が次々とラカンに突き刺さる。常時雷化の付加効果によって瞬間的に雷化する先の弱点を克服して、更には思考加速、身体軌道加速まで付加されているネギは正に雷の化身。

そしてカウンターで潰されない為の対策として雷速機動での近接格闘、ノーリスクのヒットアンドアウェイを捨て、徹底的にインファイトを選んだ作戦は、ラカンの一撃を受ければ即アウトなのにも関わらず、それを選んだネギの覚悟・・・・・・ハイリスクの先にある勝利を選んだその考えは、素直にアリスは評価した、

「だけど、ネギの選択は悪くないけど・・・・・・」

「火力不足だ・・・速度では拮抗できても、ぼーやの拳では極限の気で練り込まれ、鍛え抜かれたラカンの肉体を突破できん」

アレだけの攻撃を受けてもラカンは倒れない。流石は“死なない男”、“不死身バカ”、“つかあのおっさん剣が刺さんねーんだけどマジで”と呼ばれるだけの事はある。

ネギの雷天大壮2は確かに脅威のスピードを誇っているが、決定的な火力、決め手を不足している。これでは勝てない。

「ぬ？」

「小太郎め・・・中々やる」

ラカンにしては珍しく・・・って事も無いのだが、罠に掛かった。ラカンの足元・・・ラカン自身の影がラカンの足を押さえ、身動きを封じている。

そんな芸当ができるのは小太郎位だろう。事実、小太郎は膝立ちではあるが起き上がって、ラカンに向けて手を伸ばしている。

その隙にネギはラカンから大きく距離を取りいつの間に用意していたのか、両腕に封じていた魔法を開放した。千の雷と雷の投擲・・

・その二つを放つのかと思われたのだが、ネギは二つの魔法を融合させてしまった。

「おい、アリスの術式混合ではないか？」

「ネギは術式統合とか言ってるけど、確かに同じモノだな・・・・・・教えた覚えはないんだけど」

これはネギがアリスの術式混合を見て、自分なりにアレンジして作り上げた魔法、千の雷と雷の投擲の融合魔法・・・雷神槍『巨神ころし』、通常の雷の投擲を大きく超える形、大きさの槍をネギは構えた。

「今更、力比べとも思えんが・・・」

「何かあるな・・・あのインファイトの時の動き、何かを仕込んでいた」

ラカンが右拳に尋常ならぬ量の気を収束させていく、ラカン最大最強のワザ・・・ラカン・インパクトだ。

放たれた極太のラカン・インパクトは真っ直ぐネギに向かう。しかしネギは巨神ころしを投げない。それどころか巨神ころしを構えていない左腕を伸ばして・・・・・・。

「なっ！？」

「あの陣は！？」

ネギの足元に展開された魔法陣、それはアリスが新たな切り札として以前“姫”に刻んだ陣、敵弾吸収陣だったのだ。所々が違うのは、ネギ流の敵弾吸収陣だからだろうが、構成は間違いなくアリスのソレと同じ。

「あの構成、私の太陰剣の陣と違うのは私のは魔法を吸収して術式武装に変換する為のモノ、それに対しネギのは魔法だろうが気だろうが吸収してしまう為の陣だ」

その通り、ネギはラカン・インパクトを受け止め、掌握する事で自身の肉体にラカンのパワーを上乗せしてしまった。

そのままラカンの懐に飛び込み、ラカンのパワーでもって全力の拳を入れる。流石のラカンも自身のパワーを相手にノーダメージと言うわけにはいかず、口から血が出てきた。

ネギは効いているのを確信して追い討ちの拳をラカンの顎下に叩き込み、完全雷化するとラカンの懐に突進、ラカンのパワーが上乗せされた雷華崩拳を叩き込み、最後に巨神ころしを突き刺して雷を落とした。

「うわ・・・闘技場の障壁が消し飛んだ」

「ぼーやも存外、滅茶苦茶に育ったものだ・・・」

巨神ころしから千の雷が抜け、唯の雷の投擲になってしまったが、それがラカンに突き刺さったまま動かない。

これで決まった。ネギが勝ったと観客も、そしてネギも油断したその時だった。ネギの頬に拳が入り、吹き飛ばされてしまったのだ。

「いや、敵の生死も確認しないで気を抜くのは致命的なミスだけど・・・・あれはラカンじゃなかったら誰だって死んでるよ」

アリスでも流石にあれを受けては生きている自信が無い。

「とことんバグだな奴は」

だが、これでネギは扉を開けた。遂にネギはアリス達と同じ舞台

に立ったのだ・・・・・・最強クラスという地位に、ネギは辿り着いた。

「・・・・・・ふ」

アリスは始まった殴り合いに少しだけ穏やかな笑みを浮かべ、直ぐに冷酷な瞳に戻ると、窓に背を向けた。・・・これ以上見る必要は無いとばかりに。

「行こう、皆・・・・・・役者は揃った。祭はもうすぐ始まる」

二代目・紅き翼全員が頷く、そしてそれぞれ立ち上がると試合に未練は無いとばかりに部屋を立ち去った。

「・・・そう、役者は全て・・・ね」

八十五話　「ネギの切り札、アリスに届くのか」（後書き）

次回は遂に！　アリスの前に現れますよ変態眼鏡が！！

八十六話　「アリアドネーの若者、そして現われた裏切り者」（前書き）

ちょっと手抜きになったかも……。

八十六話　「アリアドネーの若者、そして現われた裏切り者」

英雄と女王の子

八十六話

「アリアドネーの若者、そして現れた裏切り者」

ナギ・スプリングフィールド杯が終わった翌日の事だ。

アリスがホテルの部屋で一人紅茶片手に音楽を聴きながら読書という優雅な一時を楽しんでいた時、のどかから通信が入った。

「宮崎さん・・・どうしたの？」

『ハルナたちがゲートの場所を見つけたみたいですー。それとその場所からアーニャちゃんと夕映と思われる反応も』

「そう・・・」

綾瀬夕映はアリアドネー戦乙女騎士団にいるという情報は得ているので、その反応がアーニャなのは間違いないが、夕映という事はない。ならば誰なのか・・・・・・流石に情報が少ないからわからなかった。

「ほかには？」

『白き翼の基本方針も決まりましたー、極力戦闘を避けて、アーニャちゃんと夕映を救出して速やかにゲートポートに、再起動して旧世界に帰還することになりましたー』

作戦の開始時間は３０時間後、そういう事になったらしいが、恐らくネギの作戦通りに事が進む事は無いだろう。

アリスの予想が正しければ３０時間以内にメガロメセンブリア元

老院が動く筈だ。ネギと、恐らくはアリスにも接触を図ってくる。
そして、そうなれば間違いなく動く筈だ・・・・・・完全なる世界が。

「・・・・・外で飲むか」

部屋の中であれこれ考えていても仕方が無いので、アリスは中心市街に向かった。前の騒ぎで出入り禁止を受けた喫茶店の他にも良い店は知っているのだ。

中央市街、大闘技場近くにある喫茶店でアリスは紅茶片手にテーブルに従者達のカードを並べて物思いに耽っていた。
以前エヴァに言われた本契約の相手、それを選ぶ時が来るかもしれない。だが、アリスの一存で決めて良い事ではないし、確実にグレートグランドマスターピースが出るとも限らない。確実性の無い手段を作戦に組み込むのはアリスとしては宜しくないので、如何した物か。

「・・・ん？」
「あれ？　兄さん？」

カードを懐に戻した所で顔を上げると、ネギとアスナ、のどか、それにアリアドネーの学生と思しき少女三人と、アリアドネーの制服を着た夕映が居た。

「兄さん、こんな所で何を？」
「アフタヌーンティーの時間だ」

片手に持っていたティーカップを掲げつつ、アリスはホテルの部屋で読んでいた本を取り出した。この後読もうと思って持って来た

のだ。

「あ、貴方様は!?　二代目・紅き翼のアリス・スプリングフィールド様!!」
「・・・君は?」
「わ、わわわ、私、アリアドネー戦乙女騎士団候補生のエミリィ・セブンシープと申します!　アリス・スプリングフィールドファンクラブの会員番号７８番です!!」

そう言えばそんなモノもあったなと、思わず苦笑してしまった。
見ればエミリィの後ろの二人・・・ベアトリスという黒髪の少女とコレットという褐色肌の獣人少女も本物のアリスを目の前に目を輝かせている。

「それでネギ達は何をしに?」
「あ、そうだ兄さん!　夕映さんが見つかったんだ!　ほら!!」
「ふぅん・・・・・・それで?」
「それでって・・・」
「私には関係無い事なんだけど」

夕映が見つかったから何なのか、アリスにそんな事言っても、アリス自身が夕映に興味の欠片も無いので如何でも良い。所詮は路片の小石程度の存在に過ぎない夕映にアリスが感心を持つ筈も無いのだ。
結局、ネギ達はアリスの後ろのテーブルで話をする事になった。
夕映が記憶喪失になった事、夕映もアリアドネー騎士団オスティア警備兵の一人である事、そして夕映はネギの仮契約者の一人である事など、最も仮契約の事については一悶着あったが割合する。

「そこの・・・エミリィだっけ?　セブンシープ家のお嬢さん・・・

ネギを犯罪者って言ってるけど、コレ・・・一応私の弟なんだけど？」

「え？　え、・・・え、っと、という事は彼はアリス様と同じ・・・・・」

「そう、サウザンドマスターの息子」

「え、えええええええええっむぐっ！！」

大声を出したエミリィの口をコレットが抑えた。流石にここで大声を出すと他の客の迷惑になってしまうし、アリスとしても助かった。それなりに行き着けの店である此処まで出入り禁止になったら、結構凹むのだ。

「・・・・・おや、これはこれは、誰かと思えばアリアドネーの名門、セブンシープ家のお嬢様ではありませんか」

突然聞こえてきた声、其方に目を向けると・・・ＭＭ兵を引き連れた眼鏡の男性、クルトが歩いてきていた。

「おや・・・？　それにそちらの少年は・・・？　どこかで見たような覚えがありますが・・・」

「相変わらず演技が上手いものだな・・・・・クルト・ゲーデル」

「おや、何方かと思えば・・・アリス君もいらしたのですか」

「・・・気安く呼ぶな、裏切り者が」

相も変わらずふてぶてしい笑みを浮かべるクルトだが、もう一度ネギの顔を見て何かを考え込む姿勢を見せた。

「さきほども言いましたが、そこの少年・・・何処かで見た覚えがあるんですよねぇ・・・・・さて、どこで見たのか・・・いや待てよ、確か重犯罪賞金首の国際手配書で・・・？　いやいや、違い

ますね」

本当に演技が上手すぎて、返ってわざとらしく見えるのだから、これはある意味才能とでも呼ぶべきなのか。

「ああ！　そうか思い出しました！　なんと君はアリス君の弟であり、世界を救った、かの大英雄のご子息ではありませんか！　いや、この地ではこう言い換えた方がいいでしょうか・・・・・・かつて自らの国と民を滅ぼした魔女、災厄の女王・・・アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの遺児・・・と！」

この瞬間、アリスの中で何かが切れた。それはもう盛大に、ぶっとい何かがブツンッ！　という音を立てて。

「・・・おや？　これは意外ですねネギ君、これほどの衝撃の事実を告げられてたじろぎもしないとは・・・アリス君からでも聞きました？」

「・・・いえ、兄さんからはそういう話を聞いた事はありません。でも、推測はしていました。だから・・・驚きません」

「ほぉ・・・１０歳の少年が叫びだすでもなく、泣き喚くでもなく、冷静ですね。これは君に対する評価を少々改めねばいけないようだ」

「・・・・・・そこまでにしておけよクルト・ゲーデル、母さんを侮辱した以上・・・生きて帰れると思うな！」

いつの間にかアリスが席を立っており、右手に焔雷の獄姫になった“姫”を持ち、両手をえいゆうの籠手で覆い、頭には王者の定めを乗せて、“姫”をクルトに向けて突き出していた。

「おや？　アリス君・・・まさかメガロメセンブリアを敵に回す御つもりで？　これは二代目・紅き翼を犯罪者として手配する事にな

りますが・・・」
「だから如何した？　その程度で脅しになる筈が無い事は木乃香ちゃんで確認済みだろうが」
「既に知っておりましたか・・・」
「そこまでよアリス君、落ち着きなさい！・・・ゲーデル総督もです、総督にはその少年を逮捕する権利は無いわ」

今度はセラスが出てきた。ご丁寧に後ろには多くのアリアドネー騎士団を控えている。
クルトには偽ナギの正体がバレているので、ネギがクルトに危害を加えようとしたら、間違いなく逮捕されるだろうが、アリスに関してはクルトでも手出しはできない。

「クルト・ゲーデル、貴様の言いたい事は理解出来ている。大方、ネギの実力に目を付け、貴様達メガロメセンブリアの計画に組み込もうとしているのだろう？」
「おやおや、先に言われてしまいましたか・・・しかし、アリス君、それを何処で知ったのですか？　特級の機密事項なのですが・・・・」
「お生憎様だな、私は貴様などとは違って友達が多いんだ」
「おや・・・痛いところを突かれましたね」

計画に組み込もうとしている。それを聞いてネギの中で溜まっていたモノが爆発する。唯でさえクルトの態度、話に疑念を持っていたのに、それが此処で妖しさ抜群の話を聞かされて、黙っているはずが無い。

「なんなんですか貴方・・・一体何者なんですか！！」

ネギを中心に魔力が溢れて突風を起こす。それによって飛んだ小

石がクルトの頬に当たり、これでクルトは正当防衛を主張出来る立場となった。

「おやおや、予想もしていない所で正当防衛が成立しましたね。これは私が実力を行使しても問題ないという事だ・・・アリス君も既にやる気のご様子ですしね・・・・・・丁重におもてなししなさい」

クルトがそう言った瞬間、彼の背後に控えていたＭＭ兵が武器を構えて突撃してきた。

「雑魚の集まりが・・・」

アリスが瞬動に入った瞬間、ネギも雷天大壮を纏い、雷速瞬動に入った。半分はネギが一撃でノックアウトしたが、それは気絶で済んだので幸せな方だろう。

しかし、もう半分・・・アリスはネギと同じように一撃だった。だが、その一撃は全員を苦しめる結果となる。

ある者は鎧の上から右肺を貫かれ、術式武装の炎で傷口が焼かれて出血しなかったが、呼吸困難になり、またある者は手足を切断され、達磨状態で転がる事になった。

「私はまだ手出ししていなかったから、私は正当防衛だ・・・・・・よもや異論はあるまいな？　クルト・ゲーデル」

クルトは斬魔剣・弐の太刀でネギの右肩に深手を負わせた所だった。そして、迫ってくるアスナ達の服を消し飛ばして、更に斬空閃でネギと同じようにアスナの右肩を切ってからアリスの方を見る。

「おやおや・・・これは困りましたねぇ。ウチも人手不足なんですから、再起不能者を出されては困るのですが・・・・・・」

「おめでとう」
「皮肉ですか・・・」
「皮肉のついでに相手してやるよ・・・英雄を裏切った貴様が、私の相手になるとは思えないが」

野太刀を構えたクルトと、“姫”を構えたアリス、互いに瞬動に入ろうとしたその時だった。その場に煙幕が撒かれ、現れた刹那がネギとアスナ、のどかを回収した。
アリスもやる気を削がれたのか、術式武装を消して鞘に“姫”を収めると影の中に沈む。

「本格的に計画を早める必要がある・・・・・・まさか、本当に偽者だったとは」

先ほど見た光景、前々からおかしいとは思っていたが、此処で完全に確信した。それはアリスの計画において大変重要で、不味い状況になった事を意味している為、緊急会議を開く必要があるのだ。

「本当に、魔法世界に来てから余裕が無いっ！」

八十六話　「アリアドネーの若者、そして現われた裏切り者」（後書き）

次回は舞踏会前日！　ラカンの見様見真似の斬魔剣・弐の太刀（原作で言う今日はお嬢様と初チュウ記念日スペシャル）を披露！！

さて、木乃香と刹那…如何しよう？　仮契約させるかさせまいか。

八十七話　「舞踏会前、ドレスは女の勝負服？」（前書き）

今回は特に書く事が無いです。お陰で短くなってしまいました…。

八十七話　「舞踏会前、ドレスは女の勝負服？」

八十七話
「舞踏会前、ドレスは女の勝負服？」

喫茶店から帰ってきたアリスは二代目・紅き翼のメンバーを集めた。先ほどポケットに入っていた手紙に気付き、それがクルトからだと判ったので、直ぐに会議をする事になったのだ。

「さて、中身は招待状の様だが・・・・・・」

全員集まってから中を開けてみると、中には舞踏会の招待状が入っていた。今夜オスティア総督府で行う舞踏会に二代目・紅き翼のメンバー全員を招待するというものだった。

「舞踏会だと？　随分と呑気な男の様だなクルト・ゲーデルという男は」
「妖しさ満点やなぁ」

エヴァと木乃香の言うとおり、クルトだって完全なる世界の事は判っている筈なのに、舞踏会をするなど呑気としか言えないし、妖しい事請け合いだ。

「アリス先生、これ行くの？」
「ああ、行こうと思う・・・恐らく、これでメガロメセンブリア元老院か、もしくは完全なる世界が動く筈だ」

オスティア総督府の舞踏会、間違いなく各国のお偉い方やセレブが出席するはずだ。どちらの陣営も、これを逃さない手は無いだろう。

「という事は、私達ってドレス着るんですかぁ？」
「ドレスどすか～・・・あんま動き難いんは嫌やわ～」

ドレスに関しては既にトレジャーハンターのアイシャの所に届けられているらしい。何故アイシャの所なのかは疑問だが、全員で白き翼の所に向かう事になった。

白き翼の所に着くと、何故か庭でラカンが刹那の夕凪を構え、その反対側では障壁を展開したネギが立っていた。

「おうアリスか・・・そういやお前も出来たよな？　斬魔剣・弐の太刀」
「ん・・・まだ未完成だけど、凡そは」
「ならお前もやれ、坊主の障壁を突破すれば良い」
「・・・ふむ」

腰から“姫”を抜いて構えた。そして気を“姫”に込めて、神鳴流の構えに。

「行くぜオラァ！！　ざんっ！　まっ！　けぇえええええん！！！！！　弐の太刀ぇあああああああああああああああ」
「斬魔剣・弐の太刀！！」
「ウチもやぁ～二刀連撃、斬魔剣・弐の太刀～」

何故か月詠も参加した。合計４つの斬魔剣・弐の太刀がネギの障壁を抜けて、ネギの頭上を通り越して建物の後ろを浮いていた浮遊岩に命中、真っ二つどころか粉々に砕いてしまった。

「やっぱり、本番の時みたいにいかないか」
「ああ？　充分じゃねぇか」
「ウチもそう思いますえ？　アリスはん、完全にモノにしとるやないん？」

何やらネギの額から血が吹き出てしまったが、それをスルーしてアリスは自身の斬魔剣・弐の太刀が思った様な精度になら無かった事に不満を抱いていた。

「術式武装しているときは上手く行くんだよね・・・」

そう、最近わかった事なのだが、斬魔剣を含む弐の太刀は術式武装をしている時は上手く行くのだ。そうでないときの精度は半分も無い。

「どうだ？　参考になったろ？」
「いえ、正直凄すぎて何がなんだか・・・」
「ま、掠り傷で済んで何よりだったぜ」
「いえ、今までで一番死ぬかと思いました・・・４つも飛んできて、あと数ｃｍずれてたら頭部が無くなっていたかと・・・・・・」

ラカンがネギの傷を見ながら笑っているが、ネギはそれ所ではない。ラカンとアリスに加え、月詠も入れた斬魔剣・弐の太刀が迫ってきた時は、正直生きた心地がしなかった。

「さて、ネギ達の所にも来ていたでしょ？　クルト・ゲーデルからの招待状」
「あ、うん・・・所で、この人って何者なの？」
「こいつはオスティアの総督で、昔は父さん達・・・初代・紅き翼

の身内だった男だ」

クルト・ゲーデルはタカミチと同じ戦災孤児で、タカミチとは違って魔法が使えないという事は無かった。

何でも出来る器用な男で、詠春から神鳴流を教わっていたのだ。

元々見様見真似で技を盗んでいた天才で、詠春に弟子入りしてからは目を見張るほどの成長を見せた。

だが、クルトは戦後、初代・紅き翼と袂を分かちＭＭへと渡る。

“あなた達のやり方では世界を救えない”と言って政治の道を目指し、現在はオスティアの総督となった。

「オレももう１０年以上顔を合わせてねぇ。奴が今、何を考えているのかはわからねぇな」

「ラカン、奴の考えなんて如何でもいい・・・・・・奴は初代・紅き翼の裏切り者、それで充分だ」

話はこれで終わり、女性人はドレス選びに向かった。ネギと小太郎もタキシードを選びに行っているので、今は居ない。

因みにアリスはタキシードをレンタルする気は無いので、シルヴィアを連れて街に買いに行った。ついでにシルヴィアのドレスも買ったので、今夜はこれを着ていく事になる。

「アリス様・・・・・・今夜ですね」

「ああ・・・今夜、間違いなく動く、計画の発動も、な」

「はい・・・」

祭の様子を眺めながら、アリスは不意にシルヴィアの胸に顔を埋めた。

突然の事に驚いたシルヴィアだったが、直ぐに微笑んでアリスの頭をゆっくりと撫で始め、アリスが何か言うのを待つ。

「長年・・・この日を待っていた」
「・・・・・・はい」
「ずっと、この日の為に戦ってきた」
「・・・はい」
「私は・・・今夜の戦いで、全てにケリをつける」
「はい」
「共に戦ってくれるか？」
「元よりそのつもりです。我が身、我が命、我が力の全てを・・・貴方様の為に」

それだけ言って、シルヴィアはアリスの頭を抱きしめた。
出会ったあの日からずっと、共に戦い、共に過ごしてきた親愛なる主であり、いつも無茶ばかりしてきた、目の離せない弟の様な存在であるアリスの為に、シルヴィアは存在してきたのだから。

皆のところに戻ると、アリスの所に木乃香が走ってきた。それも、和風ドレスを着た姿でだ。

「どやどや？　これ、似合うとる？」
「うん、凄く綺麗だよ・・・木乃香ちゃん」
「えへへ～、でもまだ、ええなぁ思うてるのあるんやえ？　これはさよちゃんとお揃いや」
「へぇ、さよはそのタイプに決めたの？」
「そうなんよ、今夜楽しみにしたってな？」
「うん、木乃香ちゃんのドレスも楽しみにしてるよ」

アリスのタキシードも楽しみにしていると言って木乃香は試着室に戻ってしまった。

シルヴィアも買って来たドレスの準備をすると言って別室に入ってしまったので、アリスはベランダに出た。
相変わらず賑わう祭の様子を眺めながら、何となく“姫”を抜いて目の前に掲げる。

「ずっと、お前と戦ってきたな・・・・・今夜も、頼む。今までで一番激しい戦いになるだろうから、ね」

取り出した油布で刀身を磨き、もう一度掲げると、太陽光に照らされた黄昏色の刀身がキラキラと輝きを増した。

「アッチは完成してないけど、アレの封印を解く時が来たんだな」

昔使って以来、不用意に使う事を戒めてきたアリスの術式武装最大の魔法、あまりに相性が良すぎて、当時の未熟だった時は制御する事が出来なかった程、強力な奥の手。

「今の私なら・・・制御出来る筈だ・・・頼むぞ、“姫”」

アリスの声に答えるかの様に、“姫”の刀身が一瞬だけキラリと光った。
それに満足したアリスは鞘に戻して買って来たタキシードの開封を始める。そろそろ着て準備をしないといけない時間になってしまったのに気付き、少し焦っているのは、アリスだけの秘密になる

八十七話　「舞踏会前、ドレスは女の勝負服？」（後書き）

次回は舞踏会！　そしてアリスとラカンが……。

八十八話　「アリスの夢、ラカンの言葉」（前書き）

遂に、遂に！！　アリスの夢が公開されました！！
超がアリスを陛下と呼んでいた理由もここで明らかに！！

八十八話　「アリスの夢、ラカンの言葉」

英雄と女王の子

八十八話

「アリスの夢、ラカンの言葉」

夜、オスティア総督府にて舞踏会が始まった。

二代目・紅き翼と白き翼メンバー全員ドレスやタキシードに身を包み、着飾っている。唯、何故か刹那だけスーツだったのが、女性陣の不評を買っているのだが。

刹那曰く、自分は木乃香の護衛だから動きやすいようにこの格好にしたとのことだが、正直言うと木乃香には刹那の護衛は必要無いのだが、刹那にとって木乃香の護衛という立場は捨てられないのだ。

「アリスさん、タキシード似合うてるなぁ」

「木乃香ちゃんも、白いドレス良く似合ってるよ」

最も、木乃香の白いドレスの下・・・太股の所にオリハルコン扇子を隠しているので、この状態でも臨戦態勢は整っていた。逞しくなったというか、凛々しいというか・・・・・。

シルヴィアは薄水色のドレスに杖を隠す所が無いのでアリスの影の中に仕舞っている、月詠の小太刀も同様だ。

「月詠のドレスはレースが多いな」

「ええやろ～、このドレス一目惚れしたんどすえ～」

普段着がゴスロリドレスなので、月詠らしいドレスだが、良く似合っていた。

「さて、ラカン・・・・・・」
「ああ・・・悪ぃな、お前の獲物なんだろうが、先にオレが行ってくるぜ」

そう言って、ラカンはネギに思いっきり蹴りを入れた。
間一髪で避けたネギを追撃を入れたラカンの拳もネギは受け流したのだが、ラカンの拳圧が向こうにある建物に直撃して爆発する。

「うむ」
「うむ、じゃないですよっ！？　何やってるんですかぁあっ！！？」
「フ・・・術式装填なしでオレの蹴りと拳を避けたじゃねぇか・・・自分ですげぇと思わねぇか？」

そう、今ネギは術式兵装なしでラカンの攻撃を避けて見せた。それがネギの成長の証であり、闇の魔法の影響によって引き出す力も加速度的に大きくなっているのだ。
勿論、それだけ負担も大きくなっているのだが、ラカンの見立てでは後三回程度の本格戦闘は問題ないとの事だ。

「うむ、マジでオレが教える事はもうねぇな。免許皆伝だ！　ラカン3級をやろう」
「いりません」
「まあ、何だ・・・何にせよお前はもう、力を手にした一人前の男だ」

ラカンがネギの実力を認めた瞬間だった。そして同時にアリスがネギを使える駒として認めた瞬間でもある。

「つーわけで、オレちょっとトイレ」

アリスはラカンがトイレと言った瞬間にその場を離れた。
ラカンもそれを視界の隅に収めて、ネギに言い残した事を言う。

「そうそう、お前とアリスの母親な、アリカで間違いねぇから」
「えっ・・・」
「ほんで、ありゃいい女だった。オレもちょい惚れてたぜ」

トイレに行く前に軽く言ったラカンだが、ネギとしては大事な話だからこそ、こんな軽く言われては困る。

「ああ、お前ら先に行っててていいぜ、何しろ小じゃなく“大”。」

見事な笑顔だった。眩い笑顔で下品な事を言った。照れ隠しとも思えるが、ラカンなりの心遣いなのだ。

ラカンがネギ達と別れて目的の場所に向かう途中、通路の壁に寄りかかるアリスの前で足を止める。

「ラカン・・・」
「よおアリス・・・ちょっくら、行ってくるぜ」
「気をつけて」
「ああ・・・・・・そうだ、アリス」
「？」

アリスの前を通り過ぎて足を止めると、真剣な顔で振り返った。

「お前の夢、もう一度聞かせてくれるか？」
「突然何を・・・」
「頼む」

「・・・・・・」

真っ直ぐアリスの目を見るラカンに、何を感じたのかアリスは肩を竦めて口を開く。

「完全なる世界と、メガロメセンブリア元老院の膿を滅ぼして・・・母さんの名誉を回復させて、私はウェスペルタティア王国を再建する」

「・・・ああ、そうだ。お前の肩にはそれだけ大きな夢と、多くの人の未来が掛かっている。だけどな・・・・・・見失うなよ」

「・・・え？」

「見失うな・・・これが、お前の師匠の一人だったオレから弟子であるお前への、最後の言葉だ」

「ラ、カン・・・？」

「んじゃあな・・・我が愛弟子よ」

アリスが止める間も無く、ラカンは走り去ってしまった。

残されたアリスは、何故かその背中が遠く・・・・・・そして、何故か涙が溢れそうになるのだった。

舞踏会会場、そこに入った瞬間からアリスは沢山の女性に囲まれた。

二代目・紅き翼のリーダーとして魔法世界では知らぬ者無しと言われる程の有名人であり、ナギとアリカという美形二人から生まれたアリスもまた美形である事に変わりは無く、ファンクラブも会員数１０００人を超える人気なのだ。

「あっと・・・その」

「アリス様！　是非サインを！！」

「宜しければご一緒にダンスなど！」

「握手してください！！」
「罵ってください！」

何かおかしいのも混じっているが、サインや握手に応えながら、仲間を捜していたアリスの目に、木乃香の姿が映った。
刹那が傍らに控えており、シルヴィアやさよ、月詠と談笑している。

「ちょっとごめんなさい」

女性陣や報道陣を掻き分けて木乃香達の所に向かったアリス、それに気付いたシルヴィアや木乃香も笑顔で手を振っていた。

「相変わらず人気ですねアリス様は」
「ホンマになぁ、入った瞬間から囲まれとったんとちゃうの？」
「大当たり・・・」

因みにシルヴィアもアリスと同じくらい有名なので、アリスとシルヴィアが揃っているだけで周りがキャーキャー煩い。
更には木乃香と月詠も以前、二代目・紅き翼として顔見せしているので、それなりに有名になっていたりする。

「さて、ダンスが始まるけど・・・シルヴィア、踊る？」
「あ、いえ・・・ここで月詠ちゃんとお喋りしてますから」
「ほんならアリスさん・・・ウチと、踊ってくれますか？」

シルヴィアは月詠と話しているのでダンスを断った。それを見て木乃香がアリスをダンスに誘う。頬を赤く染め、真剣な面持ちでアリスを見つめる彼女に、アリスも微笑んで手を差し出す。

「それでは、お嬢様・・・お手を拝借」
「はい、よろしくおねがいします」

アリスが差し出した手を取った木乃香、二人揃って会場中央に歩いていくと、曲に合わせて踊り始めた。
アリスはダンスの心得はアリカから教わっていたので問題ないが、木乃香は何処で習ったのか、見事アリスに合わせた動きで華麗なダンスを踊れている。

「ダンス、何処で習ったの？」
「小学生の頃おじいちゃんに言われてダンススクール通ってた事があるんよ。こっちに来てからはシルヴィアさんに少し習ってな」

納得、シルヴィアもダンスはアリスから習っているから、人に教えるくらい上達しているし、幼い頃にダンススクールに通っていたのなら、筋が良いのも頷ける。
他の場所ではネギとアスナ、小太郎と夏美がダンスを踊っていた。魔法世界の女王の子であるアリスと旧世界の、関西呪術協会の姫君である木乃香、アリスと同じ女王の子であるネギと女王の妹で姫君のアスナ、中々の絵になっていた。

「なあアリスさん・・・戦いが終わったら、ウチ・・・アリスさんに言いたい事があるんよ」
「言いたい事？」
「うん、全部が終わったら・・・聞いてくれる？」
「・・・わかった、楽しみにしてるよ」

だけど、今は唯・・・二人っきりの時間を楽しみたい。アリスと木乃香は音楽が終わるまで、優雅に踊り続けるのであった。

八十八話　「アリスの夢、ラカンの言葉」（後書き）

次回は原作で言う所の仮契約ですね。
実はエヴァが前々から考えていた事があります。

八十九話　「茶々丸とペルシクムの魂」（前書き）

今回は仮契約の話ですね、タイトル通りです。

八十九話　「茶々丸とペルシクムの魂」

英雄と女王の子

八十九話

「茶々丸とペルシクムの魂」

ダンスが終わって、アリスはテラスに出ていた。先ほどの木乃香とのダンスの事を思い出して何故か火照る頬を誤魔化す意味も込めてシャンパンを口にしたのだが、いつの間にか横に立っていたペルシクムと茶々丸に気付いて思わず噴出しそうになる。

「（気付かなかった……）どうした？」

「マスター・・・・・・その」

「アリス様、マスターがお話があるそうです」

「エヴァが・・・？」

顔を真っ赤にして俯くペルシクムに疑問を持ちつつ、何処か頬が赤い茶々丸につれられ、ペルシクムと共にテラスを移動する。

移動した所は同じテラスなのだが、先ほどの所とは違って花火がよく見える絶好のスポットだった。

「来たかアリス・・・」

「エヴァ、如何かした？」

「ああ、貴様にやってもらいたい事があってな」

やってもらいたい事、それが何なのかを聞く前に、アリスはエヴァの足元にある魔法陣を見つけた。それも、仮契約用の魔法陣だ。

「エヴァ、その陣・・・」
「ああ、貴様にはこの場で仮契約をしてもらいたい・・・茶々丸と、ついでだ、ペルシクムともな」
「・・・・・・は？」

何故、此処で茶々丸とペルシクムの二人と仮契約という話になるのか、茶々丸はエヴァと、ペルシクムはアリスとドール契約をしている。今更仮契約をする意味があるのだろうかと疑問に思っていたが、一つ理由が頭に浮かんだ。

「アーティファクト？」
「そうだ・・・嫌な予感がしてな、こちらの手札は多いに越した事は無い」
「なら茶々丸はエヴァと仮契約したら良いんじゃ？」
「それでも良いのだがな・・・茶々丸はお前が良いのだとさ」

何故？　という顔を茶々丸に向けると、ペルシクム同様に頬を赤く染め、頭から煙を噴いていた。

「兎に角だ・・・やれ」
「ああ、うん・・・わかった」

仮契約用魔法陣の上に立ったアリスだったが、そこでふと思い出した。ペルシクムもだが、茶々丸もガイノイド・・・人間ではない筈だ。仮契約など出来るのか。

「ガイノイドと仮契約って出来るの？」
「問題はあるまい。アレは魂の契約だ・・・魂を持つ者なら仮契約をするのに種族は問わん。ガイノイドと言えど、魂はあるだろうさ」

と言うより、茶々丸とペルシクムに魂が無いなど認めない。二人はガイノイドという魂無き人形などと思いたくないのだ。

「そうだね・・・わかった、じゃあ先ずはペルシクム、おいで？」
「はい・・・マスター」

おずおずと陣の上に移動したペルシクムは、真っ赤な顔を俯けていたが、意を決して上げると、真っ直ぐアリスの顔を見た。

「マスター・・・ずっと、お慕いしてます・・・どうか、いつまでも」
「ああ、これからも頼りにさせてもらうよ・・・我が従者」

アリスとペルシクムの唇が重なった。だが、直ぐに契約は成立しない。光り始めた陣は、どんどん光を小さくしていき、消えそうになったが、アリスは自身の魔力を陣に注ぎ込むと、意識をペルシクムに・・・ペルシクムの内側に向ける。彼女の魂・・・それを見つける為に。

「随分と長いな・・・」

エヴァがそう呟いた時だ、光が収束して一気に弾けた。そして唇を離した二人の間にカードが二枚舞い降りてくる。
巨大な白亜の機械を背中に機械から伸びるアームを構えるペルシクムの姿が写ったカード・・・仮契約成立の瞬間だった。

「あ・・・仮契約、できたんですか？」
「ああ、これからも宜しくな」
「はい・・・マイ・マスター」

涙を溢しながら、赤らめた頬をそのままに微笑むペルシクム、その笑顔は正に心からの笑顔、そんな彼女に魂が無いなどという事はありえないという証明だった。

「よし、次は茶々丸だ」
「それではマスター、行って参ります」
「何処に行くつもりだ貴様は」
「アリス様・・・どうか、お願いします」

今度は茶々丸が陣の上に立った。同時に光りだす陣、アリスは茶々丸の頬に手を添え、唇を重ねた。
先ほどのペルシクムの時と同じように茶々丸の内側に意識を向け、彼女の魂を見つける。見つけた魂に仮契約の精霊の道を作り出し、固定して精霊を通す。

「ペルシクムと同じやり方だからな、今度はスムーズにいったか」

光が消え、二人が唇を離した時、二人の間にカードが二枚舞い降りる。ネコミミを着けた茶々丸が猫型の銃を持って微笑む絵のカード、契約成立だ。

「何だ茶々丸のこのファンシーなカードは・・・ペルシクムの様にSFみたいなカードではないのか？」
「いえマスター・・・これは、超が作ったアーティファクトです」
「・・・何？」
「私のもそうです・・・超が残したデータによると、超が未来で作り出したアーティファクトらしいです」

茶々丸とペルシクム、二人のアーティファクトは現代には存在しない。未来のアーティファクトというイレギュラー、これが吉と出

るか凶と出るかはこれから次第、とりあえず茶々丸とペルシクムはカードから詳細なデータを引き出し、アーティファクトの能力を把握する事にしたらしい。

「アリス、貴様はこれから如何する？　クルト・ゲーデルはまだアクションを起こしてこないみたいだが・・・」
「ああ、そうだな・・・」

先ほどから大きな魔力と気がぶつかり合っているのを感じる。間違いなくフェイトとラカンだろう、それが心配と言えば心配だが、今はアリスにもやるべき事があるから、加勢に行くことは出来ない。

「少し腹ごしらえでもするよ」
「・・・ふん、私も付き合うぞ。旧オスティア探索では貴様の所為でまともな物を食えんかったからな」

ゲテモノ肉の事を言っているのだろう。食い物の恨みは恐ろしいと言うが、エヴァもその例に洩れず、未だに怒っているらしい。

「ハハハハハ！！　とりあえずは会場の料理を食い尽くしてくれるわぁ！！」
「・・・程ほどにね」

何処に持っていたのか、フォークとナイフを両手にテーブルへ突撃するエヴァに苦笑しながら、アリスも取り皿を持ってテーブルに移動した。・・・・・実は結構お腹が空いていたのだ。

エヴァが満腹になってご機嫌になった頃、アリスも大分お腹が膨れて満足した時だった。
クルトがいつも傍に置いている少年、カイトがアリスと、そして

丁度近くにいたネギに声を掛けてきたのは。

「ナギ様、アリス様・・・クルト・ゲーデル総督が特別室でお待ちです。ナギ様とアリス様、それぞれ同行者は三名ずつまで許可されています」

来た。遂にこの時が来たのだ。

アリスは同行者三名が許可されているという事なので、誰を連れて行くかを決める為に、二代目・紅き翼のメンバー全員を集めた。

「先ず、一人目はシルヴィア」
「はい」
「二人目は・・・ペルシクム」
「了解」
「三人目は、木乃香ちゃんで」
「はいな」

それと茶々丸にはペルシクムと回線を開いて、常に特別室での事を映像化してエヴァ達に報告してもらう。

エヴァにはアリス達が特別室に行っている間の指揮と、臨時のリーダー代理を頼む事になった。

「アキラは周囲の警戒・・・大気中の水分で索敵は出来る様になった？」
「大丈夫・・・やります」
「さよとチャチャゼロはいざという時の突撃要員で」
「はい！」
「ケケケ」
「それじゃあ、頼む」

二代目・紅き翼は決まった。そして白き翼も決まったらしい、ネギの同行者はのどか、和美、千雨になったのを見るに、情報戦を得意とするメンバーを集めたのだろう。

アリスとしてはのどかを同行者に入れていたのはありがたい。思わぬところで伏兵を用意出来た事になるのだから。

「じゃあ、行くぞ！」

アリスの掛け声と共に、木乃香、シルヴィア、ペルシクムは歩き出した。

これから始まる。本当の意味で長い戦いと、アリスの夢への歩みが・・・・・。だが、これがアリスにとっての悲劇の幕開けになるとは、この時、思いもしなかった。

この人選の結果訪れる悲劇、それは最早回避不能、必然の未来として、歯車が動き出したのだった。

八十九話　「茶々丸とペルシクムの魂」（後書き）

次回はクルトによる昔語り、になる筈です。

魔法世界編突入記念スーパーコラボ！（前書き）

え～……大変お待たせしました。

参加してくださった竜華零さん、ウルフガイさん、旅のマテリア売りさん、秋代さん、水竜さん、霊華@アカガミさん、本当にありがとうございました！

それぞれの方のキャラが違和感があったら教えてください！　修正しますので。

魔法世界編突入記念スーパーコラボ！

英雄と女王の子
魔法世界編突入記念
スーパーコラボ

魔法世界にあるヘラス帝国、その国内には二代目・紅き翼の秘密基地の一つが存在している。
その秘密基地に現在、アリスはシルヴィアと二人で来ていた。一緒に行動しているペルシクムと月詠は一時的に別行動・・・というよりテオドラの護衛として何日か別行動を余儀なくされたのだ。

「テオドラ様の仕事の都合か・・・・・いきなりヘラスに戻って来いと言われた時は何事かと思ったけど」
「流石に私とアリス様が表立って護衛をする訳にはいきませんでしたし、月詠ちゃんとペルシクムが一緒で良かったですね」

まだ月詠とペルシクムが二代目・紅き翼のメンバーだという事は魔法世界で公表していないので、有名すぎるアリスとシルヴィアが護衛をするより良いという事で二人が護衛をする事となったのだ。
そしてアリスとシルヴィアは二人の護衛の仕事が終わるまで暇なので、クリムゾンに戻らずにヘラス帝国内にある二代目・紅き翼の秘密基地に来ていたのだ。暫くは此処で寝食をするつもりでいる。

「そういえばシルヴィア、さっきから磨いてるソレ・・・・・」
「あ、はい。前にアリアちゃんが来た時に解析して、それを基に作った宝石剣のレプリカです・・・機能は試してみましたが、確かに平行世界から魔力を持ってくる事が出来ました・・・・・1～2

回が限度ですけどね、レプリカですし」

戦力としては使えませんというシルヴィア、どうやら平行世界から魔力を持ってこれる確立も低いらしく、１０回やって1回成功するかしないからしい。

「という事は・・・アリアちゃんにもう一度会える確立は低いな」
「ええ、正直・・・アリアちゃんは魔眼を使って座標を固定してましたから」

誰が来るかは判らないし、こっちから行こうにも座標が判らないから何処の世界に行くかも不明、元々天文学的確立で会えた妹だ。もう一度会えたらとは思うが、所詮は夢物語。

「・・・なあシルヴィア？」
「・・・はい」
「宝石剣、起動させた？」
「いえ・・・」
「なら何で光ってる！？」
「知りません！？」

シルヴィアの手にある宝石剣が突然輝きだした。虹色の光を放つソレを押さえ込もうとしたが、放出される魔力が大きすぎて、思わず手放してしまった。

シルヴィアの手から落ちた宝石剣は床を転がり、部屋の中央まで転がった時、そこに空間の裂け目が出来た。それは奇しくも嘗てアリアが出て来た時と同じ穴だ。

「誰か、出てくるのか・・・・・・？」

その呟きが果たして関係あるのか、空間の穴が突然増えた。合計６つの穴が生まれ、その穴それぞれから見覚えのある少女と、その他に金髪の女性、巫女服の女性、茶髪の少年、焦げ茶色の髪の男性、黒髪の男性、合計６人が出てきた。

原因は不明だが全員気絶している。

「彼等は・・・・・・って、アリアちゃん！？」

「ん、あ・・・れ？　アリス、兄様・・・？」

「ああ、アリスだよ・・・久しぶりだね」

「あ、アリス兄様ぁ！！」

アリスに抱き起こされ、それで目が覚めたアリアがアリスの姿を確認すると、その胸に抱きついてきた。

当然、アリスも抱きついてきたアリアを抱きしめて、その久しぶりの温もりを噛み締める。

「アリアちゃん、ちょっと周りを見てくれる？」

「周り・・・？　あれ？」

「アリアちゃん、彼等はアリアちゃんの世界の方ですか？」

シルヴィアの問いにアリアは首を振って違うと答える。だが、その中の一人にアリアは見覚えがあったのか、アリスから離れて金髪の女性の下に駆け寄った。

「あ、お師様（マスター）！」

「お師様（マスター）？」

「はい、この方は前に私がまた平行世界に転移してしまった時に色々と魔法具の事を教えてくれた方なんです。真祖の吸血鬼で、カスミ・ヴェネーラさん」

「ん、く・・・ここは？」

「お師様（マスター）！」

そのカスミが目を覚ました。ゆっくりを起き上がって、辺りを見渡して状況を把握しようとした時、アリアが視界に入って驚いていた。

「アリアか・・・ここは、お前の世界、か？」
「いえ、ここはアリス兄様の世界です」
「アリス？　・・・・・貴様がアリスか？」
「ええ、私はアリス・スプリングフィールド・・・何処か身体に異常はありませんか？」
「む、特には」

なら良かった。本格的な自己紹介は他の人達が起きてからにするとして、今回の事態、何が下人なのか突き止めなければならない。

「まあ、それは他の人を起こしてから、かな・・・シルヴィア、手伝って」
「はい」

その後、シルヴィアと共に他の人達も起こした。
全員の目が覚めて、身体に異常が無い事を確認した後はリビングに移動、シルヴィアはキッチンで紅茶の準備をしている。

「さて、改めて自己紹介をしようか・・・先ずは私から、アリス・スプリングフィールド、英雄ナギの息子で、現在は二代目・紅き翼のリーダーをしている」

次はアリアだ。アリスとカスミに挟まれる形で座っているので、一応順番的にアリアか、若しくはアリスのもう片方の隣に座ってい

る巫女服の女性になるのだが、アリアが先に名乗る事に。

「アリア・スプリングフィールドです。アリス兄様と同じで英雄ナギの娘、麻帆良学園で教師をしてます」

次はアリアの隣のカスミ。

「カスミ・ヴェネーラだ。真祖の吸血鬼で、麻帆良学園女子中等部在籍だ」

真祖の吸血鬼という所でざわめきが起きたが、直ぐに次に移る。
次は茶髪の少年だ。

「澄川蛍です。えっと、麻帆良学園の小等部に在籍してます」

何となく不幸体質な気配を感じさせる少年だが、それはここで言う必要も無い。次は黒髪の男性だ。

「緋乃宮昴です。大戦中は紅き翼の一人として戦ってました」

紅き翼の一人というのは驚いた。アリスとアリアにとって紅き翼とは父がリーダーをしていたチームであり、アリスにしてみれば先輩だからだ。
気を取り直して次は茶髪の男性、犬耳を見る限り、小太郎と同じ狗族か、人間の気配も混じっているからハーフと言った所か。

「アリウス・ウィンダート、英雄ラカンの弟子で、ヘラス帝国皇女のテオドラの旦那だ」

何となくラカンに近い空気を感じたのはその為か、それもテオド

ラの旦那とは恐れ入った。アリスにとってはちょっと不味いのではと思う事が無きにしも非ず。

「最後は私ね、星川志穂よ。エヴァンジェリンの従者で、麻帆良の龍宮神社で巫女の仕事をしてるわ」

最後の一人、星川志穂。エヴァンジェリンの従者という点は驚いたが、見ただけで判る。彼女は相当な実力者で、瞳には過酷な人生を強いられてきた者特有の色を感じさせたのだから。

「えっと、あと今キッチンにいるのは私の従者でシルヴィア・オーギス、二代目・紅き翼の一員で、宝石魔法の使い手だ」

「よろしくお願いします」

キッチンから顔を出して挨拶したシルヴィアは直ぐに支度に取り掛かった。もうお湯は沸いているので、暖めたカップに注ぐだけだ。淹れ終った紅茶をそれぞれに配り終えたシルヴィアは椅子に座らず、アリスの後ろに控える。こういう場ではシルヴィアは決まってアリスの従者として後ろに控える様にしているのだ。

「さて、自己紹介も終わった所で、今回全員が別々の平行世界から来たという事らしいから、その原因を調べたいと思う」

取り出したのはアリスの持つシルヴィアが作った宝石剣レプリカ、同じくカスミが作ったらしい宝石剣レプリカ、アリアが持つ宝石剣オリジナル、それぞれをテーブルの上に置いて、話を進めた。

「平行世界を渡った理由は宝石剣で間違い無いと思う。ただ、それだとこの世界に来るのはアリアちゃんとカスミさんだけの筈・・・じゃあ何故、宝石剣を持たないほかの皆が来たのか・・・カスミさ

んは何か心当たりある？」
「そうだな・・・唯の共鳴、とも言えなくは無い。だがそれだとやはり来るのは私とアリアだけの筈だ」
「あの・・・」
そこで声を上げたのは志穂、何やら思うところがあるのか。
「問題となったのはアリスさんとカスミさんの宝石剣がレプリカなのが原因の一つではないのかしら？」
「どういう事だ？」
問うてきたのはアリウス、少し専門的な事なので、理解ができなかったのだ。
「レプリカという事は、必ずオリジナルよりも劣化している所が出てくるわ。若しくはオリジナルにはあるのに、レプリカには存在しない機能などもね」
「成る程、私も専門外ですから詳しい事までは理解できませんが、そのレプリカ二つとオリジナルが共鳴した事が原因なのでは、という事ですか？」
昴の答えは成る程、的を射ている。オリジナル同士が共鳴した場合なら問題は無いだろう、同じ機能のみしか存在せず、どちらかにしかない能力というものも存在しないだろう。
だが、オリジナルとレプリカではどうか・・・・・・レプリカはどうしても何処かしら能力が劣化したりするもの、そこに問題が発生したのかもしれない。
「オリジナルとレプリカ二つの共鳴によって平行世界間の壁が乱れ、他の世界にも次元の裂け目を作ってしまった・・・」

「でも結構確立の低い現象ですよね？　・・・僕はもう不幸体質ではないし、そんな事に合う事は無いと思うのに」

何となく、理解してしまった気がするのは何故だろう。蛍は不幸体質は無いというが、何となく魂のレベルで不幸が身に付いている気がする。確かに体質的な不幸は無いだろう、だが何故か魂に不幸が憑いて回っている気がするのだ。

「と、とりあえず、疑問は解消だ。レプリカとオリジナルの共鳴によって異常が発生、天文学的確率で起きた平行世界各所で次元の裂け目が発生、それに皆が飲み込まれたという事だ」

蛍が何となく哀れで、それを打ち消す意味も込めてアリスは締めくくった。

原因も判明したので、今は皆で紅茶片手に談笑している。それぞれの世界での事、自身の力の事など。

「へえ、志穂さんは炎と雷を・・・私も魔法の属性は雷と炎なんだ、闇もあるけどね」

「そう、興味あるわアリスさんの魔法・・・何が使えるのかしら？」

「奈落の業火とか千の雷とかかな、それをこの“姫”に闇の魔法の要領で取り込んだ術式武装をメインにしてる」

「あら、マスターの闇の魔法を応用？　流石ね」

アリスは同じ炎と雷の属性を持つ志穂と話が合い、それなりに楽しく話をしている。

シルヴィアはアリアとカスミの二人と一緒に宝石剣の話をしているらしく、結構熱くなっているのだが、宝石関係は流石にアリスも少しかじった程度しか知識が無いので、何を話しているのか理解不

能。

「そういえばアリス君、君は紅き翼の二代目のリーダーなんだよね？」

「昴さん・・・ええ、初代の紅き翼に所属していたって事は、昴さんの後輩、になるんですかね？」

「そうですね、どうですか？　二代目の活動は」

「初代は昴さんも知っているのなら、ラカンの事は知ってますよね。ラカンもメンバーなので、色々と苦労している所はありますよ」

「おう？　師匠は二代目にも所属してんのか」

そう言えばラカンはアリウスの師匠だと言っていた。気になるのだろう。

「ええ、ラカンは私にとっても師匠の一人でして、最初は私とシルヴィアとラカンの三人から始めたんです」

「へえ、じゃあ俺たちは同じ師を持つ兄弟弟子って事か」

「ですね」

ふと、アリスはアリアのティーカップか空になっているのに気付いて、置いてあるポットの紅茶を注いであげた。

それに気付いたアリアは満面の笑みを浮かべ、アリスの腕を取る。

「アリス兄様！　一緒にお話しましょう？」

「うん、はい紅茶」

「ありがとうございます！　・・・あ、そのリボン」

「ああ、いつもこれを使ってるんだ。アリアちゃんがくれた大切なリボンだからね」

アリスの三つ編みの先にある紅いリボンに気付いたアリアが感激

に頬を赤らめた。いつも使っているという事に心から喜んでいる。

「そう言えばアリスだったな、シルヴィアから聞いたが、エヴァがお前の従者になったとは本当か？」

「ええ、相互契約で仮契約してますよ」

「ほう、どんなアーティファクトが出た？」

「これです・・・アデアット」

王者の定め、エヴァとの仮契約で出てきたアリスの第三のアーティファクト、全属性の魔法を満遍なく使える様になるマスターピースのアーティファクトだ。

「全属性の魔法をか・・・」

「アリス兄様、これ・・・解析してみたいんですけど、良いですか？」

「？　うん・・・」

王者の定めをアリアに渡し、アリスは昴と話をしている蛍に声を掛けた。

「蛍くん、紅茶のおかわりは？」

「あ、はい。いただきます」

「うん、・・・？　蛍くん、魔眼持ち？」

「えっと、そうです」

アリアも魔眼を持っているので、直ぐに気付いた。なんでも人体や大気にある魔力を見て、操る事が出来て、更には精霊も見ることが出来るらしい。

「それは凄いな・・・精霊を見ることが出来るというのは魔法使い

にとっては凄いアドバンテージになる」
「そうなんですか？」
「うん、精霊の姿が見えるという事は、精霊にとっては大変嬉しい事になるらしい。精霊は自身の姿が見える者に対して普通の魔法使いよりも友好的になるんだ」

つまり、普通の魔法使いよりも魔法の上達も、精度も格段に上という事だ。魔法使いにとって精霊は無くてはならない存在で、その精霊と友好的になれれば、当然ながら魔法は強力になる。

「ねえ、アリスさん・・・その」
「ん？　志穂さん、どうかした？」
「ちょっと、ね」

志穂が何か言いたげにしていたので、アリスは席を立って志穂と共に廊下に出た。誰かに聞かれたくない様な雰囲気を持っていたので、こうしたのだが、志穂にはあり難かった。

「アリスさんって、幼い頃から実戦に出て戦って、凄いわよね」
「そうでもないよ、北斗七星だっけ？　その一員として戦ってきた君とは比べるまでもない」
「・・・貴方なら、話してもいいかしら」

志穂の過去、とある組織の実験によって生まれ、同じように生まれた他の９９９人の子供達と殺し合いを強いられ、生き残った一人である事。

元の世界から新たな世界に飛ばされてからも監禁され、実験体として試験管生活をしてきた暗い過去、それを聞かされたアリスだったが、同情はしなかった。

「同情、しないのね」
「しないよ。同情して君の過去が変わるわけではないし、君も同情されることを望まないでしょ？　志穂さんはそんな過去を背負って、でも今を懸命に、幸せになろうと生きている。それで充分じゃないかな・・・過去より今を、そして未来を生きようとしている人間は、それだけで美しいと思う」
「う、うつく、し・・・・・・っ！」

突然顔を赤くした志穂だったが、ゴホンっと咳をしてから目尻に涙を浮かべて頭を下げた。

「ありがとう・・・私の過去を受け入れてくれて、同情しないで、今の私を認めてくれて」
「頭を上げて・・・お礼を言われる事じゃないし、私が照れる」
「クスッ」

リビングに戻ると、何故かジト目でアリスを見るアリアが居た。

「えっと・・・どうしたの？」
「アリス兄様・・・何してたんですか？」
「何って・・・」

周りを見ると、アリウスはニヤニヤとニヤケているだけで、蛍は顔を真っ赤にして、昴は苦笑している。
カスミは興味ないのか我、関せずとばかりに紅茶を飲んでいて、シルヴィアは呆れていた。

「アリス様・・・少しは乙女心というものを、理解してくださいね」
「は？」

前々からシルヴィアに言われている事だが、なぜ今ここでその言葉が出てくるのか理解出来ないアリス、何気に志穂とアリアの間で火花が散っているのだが、それに気付いた様子は無い。

「妹チェック・・・入れておきます」
「妹チェックって・・・」

何なのか聞こうと思ったのだが、何故かアリアの雰囲気が怖くて聞けないアリスであった。

昼食はアリスが作ったオムライスを食べ、今は秘密基地の庭に出て来ていた。魔法世界が初めてという人もいるので、折角だから庭の中とは言え魔法世界というものを見せる為だ。

「これが魔法世界・・・アリス兄様はこの世界で戦っているのですね」
「凄い・・・」
「・・・・・・」

魔法世界を始めて見た面々は驚きで開いた口が塞がらなかった。空飛ぶ船や、浮遊岩、旧世界とは違う少し違う空や大気中の魔力素の濃さ、何もかもが新鮮なのだろう。

「さてアリアちゃん、前に送った“姫”レプリカを出して？」
「？　はい」

アリアの手首にあるブレスレットが一瞬輝き、次の瞬間にはアリアの手に“姫”レプリカが握られていた。

「ん、宝石剣の魔力は魔法世界の魔力素の濃さで旧世界より早く充電も終わる・・・だからもう直ぐ皆とはお別れだから、最後にアリアちゃんの術式武装を見ておきたかったんだ」
「・・・わかりました！　アデアット！」

アリアのアーティファクト、千の魔法が現れ、アリアは奈落の業火を発動。奈落の業火を固定して“姫”レプリカに取り込んだ。

「是、“地獄の焔姫”」
「うん、精度も展開スピードも大分上達したね」

するとアリスは腰から“姫”を抜き、ノーモーション、ノータイムで地獄の焔姫にした。その鮮やかな展開にアリアは感心し、初めて術式武装を見たメンバーは術式武装に興味を示していた。

「後は今の私みたいなノーモーション・ノータイムでの術式武装が出来る様になるだけだね、それから他の魔法でも術式武装を出来る様になれば上々だ」
「はい、頑張ります！」

そこでアリウスがアーティファクトである斧を振り上げ、アリスに切りかかってきた。

「っ！」
「っと・・・成る程、随分な代物じゃねぇの。術式武装ったか？剣自体が精霊みたいなもんか？」
「ちょっと違うかな、精霊化したんじゃなくて、そうだね・・・これは奈落の業火を取り込んだから、剣自体の強度が上がり、炎の付加効果を持ったってだけだよ」

ついでに炎の加護も付属されている。

「うん、アリスさんの剣、確かに精霊じゃない・・・魔力は凄い勢いで剣の内部で渦巻いているけど」

蛍が魔眼で解析した結果を口にした。その内容が余りに凄く、蛍自身も呆然としている。

「なるほど、ナギの息子というのは伊達ではありませんね。才能は確かに受け継いでいる様です」

ナギを知る昴もアリスの才能に関心している。術式武装もそうだが、アリウスが切りかかってきたのにも冷静に受け止め、更には攻撃を仕掛ける為の構えも取っていた事に気付いているのだ。

「ねえアリスさん、私も出来るかしら・・・その術式武装」

「志穂さんも？　うぅむ、相応の武装が無いと出来ないんだよね・・・でも志穂さんなら私と同じ属性だし、私が使う・・・」

するとアリスの地獄の焔姫に千の雷が取り込まれ、焔雷の獄姫になった。

「この焔雷の獄姫と同じ事が出来るかもね・・・術式武装に拘らなくても、似たような事を能力で出来るんじゃないかな？」

「そうね・・・少し考えてみるわ」

今度はカスミだ。カスミはアリスの“姫”を近くに来て眺め、術式武装の構成を解析し始めた。

「成る程な・・・闇の魔法が原型というのも頷ける。しかも剣に刻

まれているのは太陰道か？」
「ええ、よく判りましたね。魔力で刻んだものだから、普通は見えないんですが」
「舐めるな、これでも真祖の吸血鬼として永い時を生きてきたのだからな」

成る程とも思う。更にはエヴァと一緒に過ごしてきたので、これくらい見れば判るのだろう。闇の魔法はエヴァの固有技法なのだから。

「アリス様、充電が終わったみたいです」
「そっか・・・やっぱり早いね」

もうお別れの時間が来てしまった。
帰る方法はアリアがオリジナル宝石剣とレプリカ宝石剣を共鳴ではなく連動させる事で出力を上げて、更に魔眼でそれぞれの世界への道を開き、それぞれ次元の裂け目に入るだけだ。

「じゃあ、俺から先に帰るぜ」
「アリウスさん・・・わかりました。向こうでテオドラ様とお幸せに」
「おう、ありがとうよ・・・楽しかったぜアリス、また会えるのを楽しみにしてる」
「はい」

アリスとアリウスはガッシリと握手をして、平行世界の兄弟弟子のこれからを祈りあった。
アリウスが裂け目に入った時、アリアがアリウスの世界へ座標を固定させ、アリウスは完全に消えてしまった。

「次は僕が行きます」
「蛍くん・・・えっと、気をつけてね？」
「はい！　アリスさんも頑張ってくださいね！」
「うん、元気で」

蛍が裂け目に入って消えた。次はカスミが帰る番らしい。

「それではな。中々楽しかった・・・それにシルヴィアには貴史にプレゼントする指輪まで用意してもらって、悪いな」
「いえいえ、折角ダイヤモンドの一番良い物をつけたんです頑張ってくださいね」
「ああ、勿論だ！」

カスミは最後にアリアの頭を一撫でして裂け目に入っていった。

「では次は私が行きますよ」
「昴さん・・・」
「頑張ってくださいねアリス君、先輩として、後輩のこれからの頑張りを応援させてもらいますよ」
「・・・お元気で」

昴も帰って行った。次は志穂だろう、だが志穂は何故か涙を流していた。

「志穂さん？」
「ご、ごめんね・・・でも、折角、私の過去を受け入れてくれる人に出会えたのにって思うと」
「・・・・・家族と、幸せにね」
「ええ・・・ありがとう、アリスさん」

名残惜しくもあったが、志穂は裂け目の中に入っていった。
そして、最後はアリア・・・だが、アリスの服の裾を掴んで俯いている。

「アリアちゃん・・・・・元気でね。今度は、私は夢を叶えて、会いに行くよ」
「グスッ、アリス、兄様・・・ぜったい、生きて夢を叶えてくださいい、ね？　生きて、会いに来てくださいね？」
「うん、必ず、会いに行くよ・・・我が最愛の妹・・・・・・アリア」
「っ！　はい！　絶対！　また！　待ってますから！！」

最後にそう言い残して、アリアも裂け目に入り、裂け目は閉じてしまった。

「・・・・・楽しかったね」
「はい」

玄関に気配を感じた。どうやら月詠とペルシクムが帰って来たらしい。

「さあ、行こう・・・皆も頑張ってるんだ。私たちも頑張らないとね」
「そうですね」

この日、アリスは掛け替えの無い友たちを得た。遠く離れた世界に住んでいるとは言え、性別や年齢が違うとは言え、彼等、彼女らは、アリスの掛け替えの無い友である事に、違いは無い。

「また、いつか・・・きっと」

会える日を信じて、アリスは先を歩くシルヴィアを追いかけるのであった。

魔法世界編突入記念スーパーコラボ！（後書き）

やはり無謀だったかな……話が単調すぎる。

参加してくださった方々には改めて御礼申し上げます！　おかげさまで自身の力量が判りましたし、大変楽しく書く事ができました！

それから、コラボを上げるのが大変遅れてしまい、申し訳御座いませんでした！

まえがきにも書きましたが、キャラの違和感などがありましたら、どんどん教えてください。ここはこのキャラならこう言うなど、教えてくだされればすぐに修正しますので！

九十話　「闇の限界」（前書き）

クルトとの対話が始まります。

九十話　「闇の限界」

英雄と女王の子

九十話
「闇の限界」

アリス、シルヴィア、木乃香、ペルシクムとネギ、のどか、和美、千雨の6人はカイトの案内で大きな扉の前まで連れられて来た。
この扉の奥にクルト・ゲーデルが居て、これからアリスの予想が正しければ6年前のネギとアリスの故郷を悪魔が襲撃した事件の真相と、ナギとアリカのことが語られるはずだ。

「楽しいお仲間達ですね」
「え・・・？」
「いえ・・・あの村の悲劇から出発したあなたが、あのような友人達を手にしていることを、少し羨ましく思いまして」

恐らくカイトも過去、何らかの要因で家族や故郷を失っているのだろう。だからネギが羨ましい、同じような過去を持ちながら、ネギは友に囲まれて、楽しく過ごしているのが・・・・・。

「アリス様も、良いお仲間を得たご様子で・・・中々頭の固い方もいらっしゃるご様子ですが」
「メガロメセンブリアの狗風情に、愛想良くする必要は欠片も存在しないと教えているからな」

とことんメガロメセンブリア元老院を嫌っているアリスに苦笑するカイトだが、アリスにはそれすら癪に障った。

「ヘラヘラとうっとしいガキだな・・・次に私の目の前で目障りな笑みを浮かべたら、その首から上・・・消し炭になると思え」
「本当に、メガロメセンブリアが嫌いなのですね・・・僕には理解出来ません。総督のお話で、少しでも関係改善出来ることを祈っておりますよ」

扉がゆっくりと開かれた。中に入ると、そこは炎の海だった・・・・・・いや、焼かれた建物が映像として部屋一杯に映し出されている。

「ようこそ私の特別室へ・・・アリス・スプリングフィールド君、ネギ・スプリングフィールド君」

目の前にはクルトが爽やかで邪悪な笑みを浮かべて立っていた。周囲には炎に包まれた建物や、石化された人の映像・・・これはアリスにも・・・いや、ここに来た全員が見覚えのある光景だった。
6年前のネギとアリスの故郷の事件の映像、アリスとネギは実際に体験し出来事で、他のメンバーは嘗てネギの記憶を見たときに見知っている。

「随分と豪勢な映像を見せてくれるな・・・下衆男」
「おや、フルネームでも呼んでくれなくなりましたか」
「貴様に人の名は勿体無いからな・・・人類に対する冒涜だ」

恐らくはメガロメセンブリア元老院で保管してあった映像を持って来たのだろう。相変わらず姑息な手段に手が込んでいる嫌な男だ。

「どうやって・・・？　どこからこんな映像を？」
「どこからだと思います？」

「白々しい・・・」

だがネギに対しては有効な手段だろう。ネギの心には6年前からずっと、この光景が焼きついて離れないでいる。この光景が心の闇としてずっとネギを蝕み続けてきたのだから。

「いやなに、主題をはっきりさせておこうかと思いましてね。アリス君には我々への理解の為、ネギ君には・・・君が本当にしりたがっていた答えを」

「僕が知りたがっていた・・・本当の答え？」

「そう、君が本当に知りたかった答えは何です？　A“魔法世界の秘密”？　それともB“悪の秘密組織の目的”？　それともC“母の生き様”？　いやいやそれともD“父の行方”？」

どれも違う。ネギが本当に、心の奥底から知りたいと思っていた本当の答えは、6年前の雪の日かたずっと、ネギがずっと捜し求めていた“真の敵”とは・・・・・・。

ネギが心から求めていたのは“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になる事ではない。“真の敵”への復讐、復讐心こそがネギの心の闇の正体であり、ネギの行動原理だ。

“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になる為ではない、ネギが今まで鍛えてきた本当の理由は、自覚出来ないほどの奥底で燻る復讐の炎が突き動かすが故なのだ。

そして、ネギが本当に敵とすべき相手がなんなのか・・・それはフェイト・アーウェルンクスでも、麻族でも、始まりの魔法使いでも、完全なる世界でもない。

「いい加減に教えてやったらどうなんだ？　貴様の話は一々長くなるからムカつくのだが」

「アリス君もせっかちですねぇ・・・まあ良いでしょう。ネギ君、

真実をお話しましょう・・・幼い君をこんな目に遭わせた真犯人は・・・・・我々です。すなわち、メガロメセンブリア元老院」

少し調べたらすぐに判った事だった。6年前の事件の真相をアリスが調べてみた所、簡単に真犯人に辿り着いた。

メガロメセンブリア元老院の過激派が、ネギやアリスを傀儡にして、自分達の手駒にする為に力を身に付けさせて、メガロメセンブリア元老院が決めた“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になってもらう為に起こした事件だった。

「我々が全ての黒幕です・・・尤も、アリス君は5年前には真相に辿り着いていたみたいですし、ネギ君も頭がイイですからね、当然この程度の可能性は考慮に」

入れていたでしょう。と言う前にクルトはネギに下顎を殴られて吹き飛ばされてしまった。

ネギの両手の甲にある闇の魔法拾得者に浮かぶ紋様が強く輝き、瞳からは理性の色が消えている。怒りで我を忘れ、爆発した復讐心が闇の魔法によって増幅されてしまい、暴走を始めたのだ。

「はあ・・・手間を掛けさせる・・・・・・シルヴィア」

「はい」

シルヴィアは懐から宝石を一つ取り出し、魔族化をしようとしていたネギに向けて放り投げた。

「開放、こおる大地」

瞬動に入ろうとしていたネギの足元に落ちた宝石がシルヴィアの開放という言葉で割れ、一瞬でネギの足と一緒に床を凍らせた。

「木乃香ちゃん、ペルシクム」
「はいな、魔法の射手・連弾　光の５７矢」
「ルナティーク、発射」

木乃香の魔法とペルシクムのルナティークがネギに直撃し、完全に動きを止めた。それと同時に映像では幼いネギを潰そうとした魔族の腕をナギが受け止めている所になっていた。

「ネギ先生ッ！！」
「ネギ君！！　騙されちゃだめ！　これは罠だよ！！」
「ネギ先生、負けないでくださいーッ！！　先生はこんな事の為にここに来たんですか！？　こんなの違うッ！　こんなの夕映や・・・皆や、わ・・・私が大好きな先生じゃないですーッ！！　だから先生・・・ッ！」

のどかの言葉が通じたのか、ネギの瞳に理性の色が戻った。それから千雨の強烈ビンタと説教、映像に映るナギの姿を見た。
幼いアリスとネギに声を掛けるナギの姿がネギを正気に戻してくれた。

「それで？　あんたはこれで満足か？　この程度の寸劇を見たくてこんな真似をしたんじゃないだろう？」
「なっ！？　ちょっとアリス先生！　寸劇って・・・っ！」

和美の抗議は無視した。

「貴様の本当の目的を話してやれ・・・貴様が目論む魔法世界の救済策とやらを」
「本当に・・・貴方はどこでそれを知ったのでしょうね」

「教える義理は存在しない」
「機密を知られていて義理が存在しないというのはおかしな話ですよ？」
「貴様等メガロメセンブリアに義理なんて必要無い。そんな価値も無いだろう」

結局、クルトはネギの闇の魔法を利用した方法での奇策は捨て、正攻法に出る事にしたらしい。部屋の映像が変わり、宇宙空間の映像と、その中央に映る惑星・・・魔法世界の映像を見せる。

「それではアリス君のご要望もありますので・・・最大限ぶっちゃけて簡潔に解説いたしましょう」

映像は惑星の中に入り、メガロメセンブリアの首都の映像に移り、そして空に浮かぶ無数の船の映像へと変わった。

「純潔の魔法使い市民５０００万人と、魔法世界最大の軍事力を擁する超巨大魔法都市国家メガロメセンブリア・・・その最高機関であるＭＭ元老院、これは我々の敵です。滅んだとされる始まりの魔法使い、これも我々人間の敵。その意思を継ぐフェイト・アーウェルンクス等も同様、今最も危険な敵でしょう・・・亜人達の帝国ヘラス、アリス君は随分と友好的なご様子ですが、残念ながら彼等も障害の一つでしかありません・・・・・如何です？　シンプルでしょう・・・つまり」
「その尽くを打ち倒す為にネギには力を貸してもらいたい。私達、二代目・紅き翼にもヘラスとの友好を切って貴様に協力してもらいたい・・・か？　この滅び行く世界から全ての“人間”・・・６７００万人の全同胞を救い出す為に」
「本当に、君はどこで情報を・・・」

呆れるクルトだが、アリスには関係ない。それに木乃香とペルシクムは気が付いている、この計画にある裏・・・シルヴィアが救済対象になっていないという事に。
その事に気付いた二人はクルトを目の仇のごとく睨みつけた。

九十話　「闇の限界」（後書き）

次回はナギがアリカにプロポーズした所ですかね？

九十一話　「父と母」（前書き）

前のラカンが見せた大戦映像の時と同じです。

九十一話　「父と母」

英雄と女王の子

九十一話
「父と母」

クルトが計画している内容、それは魔法世界にいる６７００万人の人間を救い出すという事・・・だがそれはおかしいという事など、頭の良いネギなら直ぐに気付くはずだ。
それに、その計画の裏、それは・・・・・・。

「クルト・ゲーデル、言い忘れてないか？　６年前の事件、あれに貴様は関与していないと」
「おや？　知っていたのですか」
「あれは過激派の仕業だというのは調べた。その過激派に、貴様の名は無い」
「そうですね、ですがネギ君が殴る相手もいなくなってしまいますし、この後でネギ君は好きなだけ私を殴り殺してもいいのですよ？」
「私が切り殺してやろうか？」
「怖いですねぇ」

肩を竦めるクルトだったが、割れた眼鏡がずれているのに気付いて直すと、周囲の映像に目を向けた。

「やっと本題か」
「ええ、これ以上は時間の無駄というものです」
「いったい、何が・・・・・・？」

映像は墓守人の宮殿でナギが始まりの魔法使いを倒したシーンに変わっていた。２０年前の大戦の最後の映像から始まったという事は、当然・・・アリスの一番気に入らないシーンと、大切なシーンが映っているという事だ。

「まあ、アリス君は別にしても、ネギ君は今の私が言葉でいくら言っても簡単には頭を縦に振らないでしょう。そこで・・・こんなものを用意しました。私の理解する君とアリス君の・・・“父と母の物語”です」

映像はナギと始まりの魔法使いとの戦いから始まった。激闘の末、傷だらけになりながらも勝利を収めたナギは英雄となり、そして同時に王女から女王となったアリカの対話に移る。

「うわ・・・・・流石は母さんだ・・・父さんをあんなに簡単に」
「に、兄さん・・・母さんと父さんって、あんなだったの？　いつも・・・・・・」
「む、う・・・・・凡そは、な」

流石のアリスも苦笑しか出来ない映像だった。アリカの王家の魔力を込めた平手がナギの頬を直撃し、錐揉み回転しながら吹き飛ばされる映像、それが何発も入るものだからナギの左右の頬は赤く腫れ上がり、鼻血も流れている。

最後には膝がナギの頬を直撃し、更に拳が脳天に突き刺さって吹き飛んでしまう。思わず苦笑どころか噴出してしまったアリス、何となくこの映像の二人が懐かしくなってしまった。

「私が幼い頃も、父さんと母さんはこんなだったなぁ」
「アリスさん、それ笑い事ちゃうて」

そして場面は空中王都オスティアの崩落に移る。アリカが直接指揮指揮をして、魔力消失現象が起きる中、多くの船を回して王都に残る市民を救って回っていた。

だが、船では救い切れない所も出てきて、遂にアリカは直接王都に降りて島ごと不時着させる手段に出た。ナギの言葉も聞き入れず、一人で向かってしまったのだ。

「母から聞いていた限りでの事しか知りませんが・・・本当にアリカ様は、ご立派なお方ですね」

「マスターの母君ですから・・・マスターと良く似ていらっしゃいます」

こうして、空中王都オスティアは地図上から消え、二ヵ月後にアリカはメガロメセンブリアの策略によって逮捕、即座に二年後の処刑が決定されて幽閉された。

アリカはその後、災厄の女王と呼ばれる様になり、戦争の責任を押し付けられて味方となる者は一人もいなくなってしまったのだ。

アリカが幽閉されている二年の間、ナギはずっと“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”として、アリカの約束通り多くの人を救ってきた。只、アリカとの約束を守る為だけに、ずっと只管・・・・・救い続けた。

「ネギ・・・今だから言う。父さんは望んで英雄になった訳でも、“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”になった訳でもない。母さんとの約束を守るため・・・ただそれだけの為に、頑張ってきたんだ。決してお前が思っていた理由で人を助けていた訳ではない」

「・・・うん、これを見て解った。父さんは、母さんの為に・・・ただそれだけの為に、ひたすら・・・・・」

だが、クルトはそんなナギの行動を認めなかった。理解出来なか

った。その結果が初代・紅き翼を見限って、メガロメセンブリア元老院議員となって、今、オスティア総督という立場になったのだ。
そして遂にアリカの処刑日、処刑場所はケルベラス渓谷・・・谷底に魔獣が蠢き、そこでは魔法が一切使えなくなる死の谷だ。
この処刑方法は古くからある魔法世界で最も残虐非道なやり方で、アリカをこの方法で処刑する事により魔法世界にメガロメセンブリアに対する恐怖政治を敷こうとしているのだ。

「ケルベラス渓谷・・・私は一度見に行った事があるんだ」
「兄さん・・・？」
「正直・・・・・色んな意味で見ていられなかった」

アリカが処刑台から飛び降り、魔獣に食われてしまった。
メガロメセンブリア元老院議員達もこれで終わったと気を抜いたその時、警備騎士の一人が鎧を弾き飛ばした。中から現れたのは・・・ラカン、その他にも詠春、アル、ガトウも現れ、谷底では魔獣に食われた筈のアリカがナギの腕に抱かかえられていた。
谷の上ではラカン達が警備兵達を蹴散らし、谷底ではナギがアリカを抱えたまま魔獣の群れから逃げて、遂に谷底からの脱出に成功した。・・・・・告白しながら。
谷から出て杖の上に乗ったナギは、そのまま空中でアリカの気持ちを聞き、キスをして、プロポーズをする。

「・・・ねえ、兄さん」
「・・・何だ？」
「色んな意味で見ていられなかったっていう意味、解った気がする」
「・・・だろ？」

だが、それでもクルトは納得していなかった。
確かに、アリカは助ける事が出来たが、アリカの名誉も、メガロ

メセンブリア元老院の虚偽と不正も正される事も解決する事も出来ないだろう。
　タカミチが言った、アリカの名誉も元老院の虚偽や不正も、全てを正すのは自分達の仕事だと。そしてこれからの世代の人間の仕事だと・・・。

「父さん・・・母・・・さん」
「はあ・・・・・・やっぱり両親のプロポーズシーンは、恥かしいな」

　感動で涙するネギとは違い、アリスはナギのプロポーズと、それを受けるアリカのシーンで気恥かしくなり、少し赤面していた。
　ただ・・・・・・アリス的にはクルトまで泣いているのは我慢ならない。

「おい・・・・・・貴様、この映画・・・貴様が幼い頃の私にもインタビューして作ったやつだな？」
「ええ、アリカ様やナギ達・・・それに幼い頃のあなたにもインタビューしましたね」
「・・・随分と正確に作ったものだ・・・・・・ムカつく位にな」
「・・・・・・クルトさん」

　アリスとクルトの会話に割り込む様に、のどかがいどのえにっきを持ってクルトへ問い掛けてきた。

「あなたはアリカ様を好きだったんですね？」
「は？」
「・・・何だと？」
「・・・あ、やっぱり」
「クルト・ゲーデルぅうううううう！！！！　貴様あああああ

！！！！」

「ちょっ！　大きなお世話です！　っていうかアリス君も落ち着いてください！！　流石の私も不倫覚悟でアリカ様に告白などしませんから！！」

「当たり前だあああああ！！！！」

“姫”を振り回すアリスをシルヴィアとペルシクムが必死に取り押さえていた。その後ろで木乃香が苦笑してハンマーを取り出し、アリスの後頭部を殴る事で何とか落ち着いた。

「ちょい落ち着きなやアリスさん・・・」

「ごめん・・・あの変態眼鏡が不届きな事を言い出すものでつい・・・・・」

「気持ちは解らんでもないんやけど・・・」

結局、クルトの狙いはこの映画を見せる事でメガロメセンブリア元老院の悪逆非道を伝え、ネギを味方に引き入れる事だった。

アリスは既にメガロメセンブリアに対して友好的ではないので、後でどうとでも出来ると踏んでいるのか、今はネギの勧誘に集中する事にしている。

ナギとアリカの意思を継ぎ、世界を救う為に戦う。そのために協力して、共に戦おうと言う。肝心な所を一切話さずに。

「それでは先ず始めにアリス君から聞いても宜しいですか？　ネギ君は決断まで少し掛かりそうですし」

「悩むまでも無い・・・断る」

「ほう・・・それでは両親の意思を継ぐ気は無い、と？」

「何を言っている？　意思なんて両親と別れた時から継いでいる・・・だが、その為に戦うのに、貴様などの手は借りないと言っているんだ。私は私達二代目・紅き翼のやり方で戦い、母さんの名誉を回

復させるし、メガロメセンブリア元老院を滅ぼしてくれる」
「そのやり方、お聞きしたいものですねぇ。それ次第では協力できるかもしれないのに」
「話すつもりは無い。貴様のやり方も、私が否定してやる」
「っ！　・・・そうですか」

一瞬、クルトの表情が憤怒の感情で歪んだ気がしたが、すぐにいつもの胡散臭い笑顔に戻った。
後はネギの決断だ。それ次第では、アリスの今後の計画に修正を入れるか、そのまま行くかが決まる。

「時間です。答えを聞きましょう・・・私の仲間になるか、否か」

九十一話　「父と母」（後書き）

次回はクルト対ネギとアリスです！

九十二話　「クルトとの敵対」（前書き）

クルト戦です。

九十二話　「クルトとの敵対」

英雄と女王の子

九十二話

「クルトとの敵対」

クルトの仲間になるか、否か。ネギは決断を迫られた。兄であるアリスは既に拒否しているが、ネギには決めかねている事があるのだ。それが引っかかり、答えを出すのを迷ってしまう。

「・・・・・わかりました。仲間になります」

ようやく決断した。クルトの仲間になると宣言したネギだが、その真意はのどかが読み取っており、クルトがネギに注視している隙にアリスにいどのえにっきの内容を見せてきた。

「・・・・・（なるほど）」

中々考えている弟に、少し感心した。生真面目なネギが、いつの間にこんな狡い手を使う様になったのか・・・なんにしても、良い傾向で在る事に変わりは無い。

「その代わり、僕の仲間には手を出さないと約束してください。それに、僕達の指名手配の解除も」

「もちろんです！　強制証文で契約しましょう、安いものだ!!君がお兄さんとは違って理解のある方で助かりますよ。ただし・・・今後あなたには魔法世界で活躍して頂くことになります。できればこのまま残って頂けると手間が省けますが・・・」

クルトすら欺くネギの話術、伊達にアリカの血を引いていないという事だろう。
あくまでネギの最終目的は自分も含めた全員での無事帰還、その意思は全く崩れていない。

「・・・一度、麻帆良学園には帰らせて頂けませんか？」
「いいでしょう！　別れは大切です。その時間を奪うほど私も非道ではありませんよ。懸命な判断です、流石は、かのナギとアリカ様の子」

ネギは早速デスクに連れてこられ、用意された文章にサインを求められた。
この書類にサインをした後、ネギは“二代目・千の呪文の男（サウザンド・マスター）”という称号が与えられ、英雄ナギの息子として魔法世界の各国有力者に紹介される。

「さあ、サインを・・・ネギ君」
「・・・そうだクルトさん、一つ基本的なコトを質問させてもらっても良いですか？　兄さんは何も教えてくれませんでしたし、仲間になるんですからいいでしょう？」
「・・・・・ほう、いいでしょう。私もアリス君ほど強情ではありませんからね、なんなりと」

一々ムカつく会話だと思うアリス達、二代目・紅き翼側だが、我慢だ。折角ネギが面白い事を企んでいるのだから、それを壊すわけにはいかない。

「あなたの、目的です」
「目的・・・？　それはこうして君と、本当ならアリス君も仲間に・

・・」

「いえ、違います。あなたの本当の目的ですよ・・・・・・確か、世界を救う、と言いましたね」

「・・・なるほど、その件ですか！」

既にアリスは知っている事、クルトとしては何故アリスがそれを知っているのかが疑問だったが、普通ならネギの様に知らないのが当たり前なのだ。

折角なのでアリスの答え合わせにもなるし、仲間になるネギに聞かせようと“この世界の真実”を語ろうとした。

「その、この世界の真実が・・・この魔法世界、すなわち・・・“火星に築かれた人造異界”の“崩壊の危機”・・・ということですね？」

「魔法世界とは火星の大地を触媒にして始まりの魔法使いが作り上げた異界・・・それが限界を迎えて崩壊しようとしている。それがこの世界の真実だ」

「・・・なっ！？」

やはりネギも真実に辿り着いていた。超の存在、偶然見ることがあった魔法世界の世界図と、火星の地形に覚えのある村上夏美の存在によって、ネギは答えに辿り着く事ができたのだ。

アリス自身は色々と魔法世界の上層部にパイプもあるので、１０歳になる頃には既にこの真実に辿り着いていた。

ネギが真実に辿り着き、そしてアリスもこの真実を知っていた事に動揺したクルトの表情に、先ほどまで浮かんでいた余裕が消えている。

「ならばアリス君！　そこまで判っていて何故！　危機に瀕しているこの世界を救う為に協力しないのです！？　父と母の意志を継ぐ

と言っているのだったら、あなたの方法とやらを聞かせてもらいたいものですね！」
「私が協力しない理由・・・ネギ、答えてみろ」
「うん、クルトさん・・・僕の質問はここからですよ。先ほど、兄さんが言っていましたが、あなたの計画は、この世界の危機について、６７００万人の全同胞を救い出す・・・と仰いましたね？　何故、“全員を助ける”と言わなかったのです？」
「ぬ・・・」

魔法世界に住む人間種の総人口は約５億人、亜人種を含めれば１２億人にもなる。クルトの計画で救おうとしている６７００万人というのはメガロメセンブリアの人間のみの人数だ。

「クルト・ゲーデル・・・貴様の計画はメガロメセンブリアの人間しか助けないというものだ。そして、その中にシルヴィアは入っていない・・・・・・理由は解るさ。でもな・・・私は貴様が見捨てようとした６７００万人意外の人達も救う為の計画を立てている！　だから貴様とは相容れない！！」
「・・・戯言を！　そのような方法など存在しない！　それはこの世界の真相を知るアリス君！　君なら理解している筈だ！！」
「存在しないと誰が決めた！　最初から諦めているから貴様は父さん達の行動も理解出来なかった！　未だに母さんの名誉も回復させられない！　父さんと母さんが守ろうとした魔法世界の人間全てを救えないんだ！！」
「残念ですがクルトさん・・・僕はあなたに協力できません。一時的にも父さん達の仲間であった筈のあなたが、簡単に諦めている以上、絶対に」
「言わせておけば、何も知らないガキ共がペラペラと・・・・・・ッ！！」

クルトの表情は完全に怒りで歪んだ。
傍らに立て掛けていた野太刀を抜刀して、全身から気がユラユラと立ち上っていた。

「言葉でなら、何とでも言えます・・・君達には現実を知っていただきましょう」

アリスは“姫”を抜いて焔雷の獄姫にすると、両目をオッドアイに変え、その後ろでシルヴィアと木乃香も杖や扇を構えて、ペルシクムは戦闘モードに移行して、のどか達に戦闘の被害が行かない様に防御フィールドのアイアスを展開した。
ネギも闇の魔法で千の雷を取り込み、雷天大壮になると、非戦闘員であるのどか達を後ろに下がらせ、ペルシクムの後ろに移動させる。

「はああ！！」

瞬動に入ったアリスは“姫”を振りかぶり、斬魔剣・弐の太刀を放とうとしていたクルトの刀を受け止めた。更に瞬動中に出したえいゆうの籠手を纏う左拳を腹に叩き込んで気を爆発させた。

「ゼロ距離ラカン・インパクト！！！」

ゼロ距離の気の爆発を受けたクルトは血を吐き散らしながら吹き飛び、その先に雷速瞬動で移動していたネギの千躰分身、千躰雷囮結界に囲まれる。

「くっ・・・斬魔剣・弐の太刀！！　百花繚乱！！」

斬魔剣・弐の太刀を使った百花繚乱が千躰分身したネギ全てを切

り裂いたが、その中に本物のネギはいない。

「甘いですねクルト・ゲーデル・・・高速詠唱、氷神の戦槌!!」
「ぐぉっ!?」

頭上から落ちてきた氷の戦槌を瞬動でなんとか避けたが、それすら読んでいたアリスと、その隣にいる木乃香が追撃をかけた。

「木乃香ちゃん!」
「はいな!」
「「ダブル! 斬空閃!!」」

アリスの雷纏った炎の斬空閃と、木乃香の斬空閃がクルトに迫り、木乃香の斬空閃だけは同じ斬空閃で相殺されたのだが、アリスの斬空閃は逆にクルトの斬空閃を掻き消して直撃した。
ザックリと切られた脇腹は炎に焼かれ、出血はしなかったが雷が体内に流されてしまった事で、全身が麻痺してしまったクルトに、ネギが突進して押し倒し、右腕に装着した雷の投擲の穂先を眼前に突きつける事で戦いは終結した。

「・・・見事です・・・ネギ君もアリス君も・・・二代目・紅き翼の皆さんも」
「帰らせて頂きます。母の話には感謝しますが、僕は・・・あなたの仲間にはなりません!」
「それでいいのですか、ネギ君? 君の復讐を果たすには、私の仲間になるのが・・・」
「僕にはもう仲間がいます。それに僕は・・・復讐を目的にしたことなんて一度もありません」
「・・・そうでしょうか?」

その時、ネギの身体に異変が起きた。先ほどと同じ闇の魔法の暴走が始まり、再びネギの身体と魂を蝕み始めたのだ。

「自分を偽るのはいけませんよ。君がどう思おうと、君をこれまで支え高めてきたのはソレだ」

そうだ。いくらネギが口では復讐を求めた事は無いと言っても、無意識で求めているソレに、気付く筈が無い。自身の心の闇を認めなければ、闇の魔法はドンドン術者を蝕み、闇に堕とそうとする・・・今のネギがそれだ。

「ネギ君、アリス君・・・君たちではやはり無理だ。君たちでは世界を救うのは不可能・・・君たちはナギでも出来なかった事を、後を継いで行おうとしている。ですが、ナギは失敗した！　何故なら世界は未だ危機のまま！　そんな彼のやり方を継いでも、世界を救うなど出来はしない！！」

「黙れクルト・ゲーデル、誰が父さんのやり方を継ぐなんて言った？　私は意志を継いだんだ・・・やり方は継いだ覚えなどない。魔法世界を救うのは私なりのやり方だ！　私は父さんではない！　父さんの意思を、私のやり方で継ぐ！　ただそれだけだ！！」

「ハッ！　ネギ君はその有様で、足手纏いも多いこの状況でどうやって！？　いくら君でも、私のこの幻想空間から出る事もできないというのに！」

甘い、クルトは忘れている。アリスはラカン（バグ）の弟子でもあり、ここには総督府のセキュリティだろうが突破できるだけのハッキング能力を持ったネギの従者、長谷川千雨もいるのだ。

「長谷川！」

「準備完了だぜ！　アリス先生！」

「ここだ！！」

千雨に指差された場所を“姫”で突き刺したアリスは、そのままソコを基点に部屋全体に王家の魔力を流し込んだ。

「馬鹿な！　それはアリカ様と同じ・・・！」

実を言うと、のどかを通じて千雨に頼んでおいたのだ。この部屋の幻想空間の基点を探し出しておく様にと。

幻想空間はアリスの王家の魔力によって消滅し、ドーム状の部屋に変わった。これが元の特別室の光景なのだろう。

「流石ですマスター・・・古さん、さよさん、今です」

「らじゃアル！」

「いきますよ～！」

天井の一部が罅割れ、古のアーティファクト、神珍鉄自在棍が巨大化して現われ、クルトを直撃して壁に叩き付けた。

そして追い討ちで怨霊の矢９９本と、巨大な力の塊・・・咸卦法を纏った無音拳、豪殺居合い拳がクルトの顔面を捉え、もう一度壁に叩きつける。

「あ・・・た、タカミチ！！」

「・・・・・何だ、こっちに来れたんだ」

「ああ、久しぶりだねアリス君、ネギ君」

白いスーツの髭ダンディ、二代目・紅き翼での中距離戦ナンバー１の実力を持つタカミチが、古とさよを傍らに現われた。

「行きなさいネギ君、アリス君・・・ここは僕が」

「任せて、いいんだね？」
「ああ、勿論だとも！」
「タカ、ミチ・・・で、でも！」
「大丈夫、映画でも見ただろう？　彼とは旧友さ、心配するな」

ならば安心だ。ここはタカミチに任せて、アリス達は他のメンバーたちと合流する為に移動を開始した。
ただ、その前にのどかが、手柄を上げる。

「クルト・ゲーデルさん！　もう一つ質問です！！　さっきクルトさんとアリスさんが話していた事・・・“全ての人を助けられない理由”・・・この世界の最後の秘密、最後の１ピースを教えてください！！」

大手柄だった。クルトが持つこの世界の最後の秘密をいどのえにっきで手に入れた。内容はアリスも知っている事だが、後で詳しい資料を貰おうと決め、特別室から立ち去った。
残されたタカミチとクルト、方や余裕の笑みを浮かべ、方や先ほどの戦闘でボロボロになり、憎悪の表情を浮かべている。

「どうしたクルト、若いの相手にボコボコじゃないか」
「黙れっ・・・タカミチ！」

嘗ての、初代・紅き翼の少年探偵、タカミチとクルト・・・互いに立場が変わった今、この親友たちは激突する。

九十二話　「クルトとの敵対」（後書き）

次回はついに！　完全なる世界も動きます！！

九十三話　「動き出した世界」（前書き）

今回、遂に……！

九十三話　「動き出した世界」

英雄と女王の子

九十三話

「動き出した世界」

舞踏会会場の外、屋上の庭では待機していた二代目・紅き翼のメンバーと白き翼のメンバーが集まっていた。

ネギとクルトの交渉が決裂した今、逃げる為の準備をしていた。

だが、その背後から多くのＭＭ兵が集まってきて、武器を構えて包囲する。

「賞金首であるお前たちを拘束する。並びに二代目・紅き翼はメガロメセンブリア元老院に対する敵対行為を確認、今までの功績は全て抹消の上で国際指名手配する事を決定した！　全員武器とカードを捨てろ！！」

武器を突きつけてくるＭＭ兵たちに本来一般人である裕奈やまき絵、亜子が慌てるが、白き翼も、二代目・紅き翼も、誰一人として焦っていなかった。

「ふん・・・小僧ども、その程度の戦力で良いのか？」

「馬鹿を言うなよ小娘！　我々はＭＭ兵の中でも精鋭揃いだ、いくら魔法世界で現最強を名乗る貴様らでも、この数相手に勝ち目は無い！！」

「・・・・・やれやれ、舐められたものだな、この闇の福音も」

「闇の・・・福音だ、と？」

漆黒のドレスを纏ったエヴァンジェリンは傍らに茶々丸、チャチャゼロ、アキラ、月詠を控えて一枚のカードを取り出した。

「アデアット！　星の吸血姫！！　フハハハハハハ！！　よく聞け！　我が名はエヴァンジェリン！　世界最強の魔法使い、闇の福音ことエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルだ！！」

「ヴァンパイア・エヴァンジェリンだと！？　何故二代目・紅き翼に闇の福音が！！？」

漆黒のドレスが消え、代わりに純白のドレスを身に纏ったエヴァンジェリン。この純白のドレスこそがエヴァンジェリンがアリスとの仮契約で得たアーティファクト、星の吸血姫だ。

「良いことを教えてやろう・・・このアーティファクトはマスターピースであるが、その能力はたった一つしかない。だが、その能力こそがマスターピースと呼ばれる所以である事を見せてやろう！！」

純白のドレスが光り輝き、エヴァンジェリンの魔力が膨大に膨れ上がった。

「我がアーティファクトの能力、それこそ！」

「星から魔力を吸い上げ、自身の魔力として行使できるというものです」

「ちゃ、茶々丸ーーーー！！！！　貴様、私が言おうとしたセリフを横取りするなぁあああああ！！！」

何とも言えない空気になった。星の魔力を吸い上げて自身の魔力として行使するという能力に驚愕するよりも、エヴァと茶々丸のやり取りに対する呆れの方が大きかったのだ。

そんな事をしている内にグレートパル様号が自動操縦で到着した。

それですぐに構えを取ったＭＭ兵達だったが、それはエヴァ達二代目・紅き翼にしてみれば遅すぎる。

「こおる大地！！」

「魔法の射手・連弾　水の５５５矢！！」

エヴァのこおる大地でＭＭ兵達の足元が凍り、アキラの水の矢が鎧を破壊していく。

同時に飛び出した月詠とチャチャゼロがそれぞれの得物を持って兵士達を切り捨てて行き、血飛沫が飛び散った。

「ケケケケ、ミナゴロシダゼ！！」

「うふふふ～、やっと人切れるんや～、アリスはんに付いて来てよかったわぁ・・・アハハハ！！」

チャチャゼロと月詠に切られた者は次々とその命を散らしていく。流石に殺人は許容できなかったのか、刹那や楓がエヴァに止めるよう言おうとしたのだが。

「これは私達の戦い方だ。貴様等に如何こう言われる筋合いはない！」

切りかかってくる兵士の首を普段のものより魔力が大量に込められた断罪の剣で切り落としながら、エヴァは白き翼にさっさと逃げるように言う。これ以上は流石に足手纏いだと判断して、邪魔だから消えろと言ったのだ。

「ぬ？」

「エヴァちゃん、アレ・・・」

エヴァもアキラも気付いた。グレートパル様号を包囲しようとしたメガロメセンブリアの戦艦を突然現われた黒くて巨大な触手が捕らえ、絞め潰していったのだ。

「あれは・・・」

「検索完了・・・２０年前の大戦で完全なる世界が使っていた影人形です」

「デュナミスとかいう奴の作った玩具か！」

黒い魔族型の巨人、これも影人形なのだろう。その巨大な手によって叩き壊された足場は簡単に崩れ、白き翼のメンバーは分断され、エヴァ達もエヴァ、茶々丸、アキラと、月詠、チャチャゼロの二つに分断されてしまう。

「クソが！　アキラ！　動けるか？」

「うん！」

「茶々丸はペルシクムに連絡だ！　すぐに合流すると！」

「了解」

一先ずは月詠とチャチャゼロコンビと合流するのが先だ。現われた骨の人形を両手に構えた断罪の剣で切り裂きながら、エヴァはアキラと茶々丸と共に駆け出した。

特別室から出たアリス達とネギ達、駆け出そうにもネギが闇の魔法に侵食されかけた影響で走ることが出来ない為、急ぎ足ではあるが、歩いて移動する事になった。

「クソ、転移魔法が使えないか・・・」

「ダメですね、私の風での転移も発動しません」

最初は転移魔法で移動しようとも考えたのだが、転移魔法が使えなくなっていた。何か原因があるのだろうが、今はそれを考えている余裕は無い。先ほどから建物の揺れや、外の悲鳴が途切れる事なく続いているのだから。

「マスター、茶々丸姉さんから連絡です。奴等が動き出し、影人形が現われたと」
「奴の作品か」
「はい、向こうも分断されてしまったらしく、すぐに合流するとの事です」
「わかった、とりあえず合流ポイントへ行こう」

となると、ネギ達とはここでお別れだ。恐らく、これが兄弟としての会話はこれが最後だと、アリスはネギに声を掛けた。

「ネギ、お前は白き翼の合流ポイントに行け・・・私達とはここでお別れだ」
「に、いさん・・・？」
「お前はお前の道を行け・・・これが、お前の兄としての最後の言葉だ・・・・・・兄らしい事、全然してやれなくて、ごめんな」
「兄さん・・・」
「それじゃあ、な！」

アリスとシルヴィア、木乃香、さよ、ペルシクムの五人はネギ達と別れ、別の道を走る。だが、その途中で天井が崩れ、アリスとシルヴィア、木乃香の三人と、ペルシクムとさよの二人に分断され、天井の破片で通路を塞がれて合流出来なくなってしまった。

「さよ！　ペルシクム！」
「マスター、先に行ってください。私とさよさんは、別の道から合

流します」

見れば床が罅割れている。これ以上この場にいたら危ない、破片を破壊して合流する事は不可能だ。

「さよちゃん！　ペルシクムさん！　後で必ず！　死んだらあかんえ！！？」

「大丈夫です！　絶対に生きて会いましょうね～！」

「アリス様、木乃香ちゃん、もう此処も限界です、行きましょう！」

アリス達がその場を立ち去った数瞬後、床は崩れて遥か下の地面に落下するのであった。

アリス達三人は通路を走り、とにかく前に進み、仲間との合流ポイントを目指す。途中で破片などが落ちてくるが、どれも小さな物なので破壊しながら走った。

だが、少し開けた場所に着くと、そこには大量の影人形が待ち構えており、その内の一体は黒い鍵のような杖を持っていた。

「あれは！？　クッ！」

あれがあるという事はシルヴィアの魔法は一切効果が無い。アリスと木乃香は“姫”と扇をそれぞれ構え、影人形に突っ込んだ。

シルヴィアも流石に自身の魔法では駄目だと理解しているので、ランス・オブ・ジュエルで薙ぎ払いながら何とか攻撃を避け続けている。

「何とか全部倒したか・・・・・・それに」

影人形を全滅させたアリスと木乃香、アリスの手には一体の影人

形が持っていた鍵のような杖が握られている。
それを自身の影の中に入れたアリスはすぐに移動しようと走り出そうとする。この時、アリスは何か焦っていたのかもしれない。分断された仲間達、影人形が持ち出してきた鍵のような杖、そこから導き出される答えが何を意味するのかを理解して、思考が周囲に向いていなかった。

「アリス様っ！！！」

だから気付かなかった。アリスや木乃香の背後で、床から現われた影人形が、その傍らにアリスが手に入れたのと同じ杖を持って砲撃をしてきた事に。

「しまっ！？」

瞬動では間に合わない。王家の魔力を身に纏うのも間に合うようなタイミングではない。迫り来る白い光がアリスの視界を占めた時、一つの影が間に割り込んだ。

「シルヴィアーーーっ！！！！！！！！！」

これが代償、焦りすぎたが故に訪れたツケ。
アリスの目の前で、シルヴィアが白い光に貫かれて、ゆっくりと床に倒れるのだった。

九十三話　「動き出した世界」（後書き）

え～…賛否両論になるかと思いますが、っていうか否の方が圧倒的に多いかと思いますが、実はこれ、前々から決まっていた事なんです。ですので、今更設定を変える事は出来ません。変えたらこの後のストーリーも丸ごと変えて、新しく考え直さなくてはいけなくなり、完結まで更に時間が掛かってしまうので。

九十四話　「暴走、決意」（前書き）

皆さんご想像の通り、アリスの暴走です。
同時にアリスの新魔法披露！　こんな形ですが…。

九十四話　「暴走、決意」

「シルヴィアーーーっ！！！」

目の前でシルヴィアがゆっくりと倒れた。
影人形はすぐに木乃香が始末して周囲に結界を張ったので、しばらくこの部屋は安全だろう。今はアリスに抱き起こされたシルヴィアだ。

「シルヴィア！　シルヴィア！！」
「あ、りす・・・さま・・・」
「シルヴィア！　消えるな！　消えないでくれ！！」

シルヴィアの腹部からドンドン身体が消え始めている。それを見たアリスは自身の力ではどうする事も出来ない事に苛立ち、消えようとしているシルヴィアに涙を流した。

「ごめ・・・なさ・・・・・・ど、か・・・夢・・・・・・かなえ、て・・・・・・」
「待て！　駄目だ・・・消えちゃだめだ！！」

シルヴィアの胸の辺りまでが消えた。ドンドン消えるのが進み、もう頭も消えるだろう。

「必ず、かなえ、て・・・・・・アリス、さま・・・・・・」

完全に、シルヴィアの頭も消えた・・・・・。残されたのは静寂と、涙を流すアリスと木乃香の二人のみ。

「・・・・・」

「アリスさん・・・？」

突如、アリスの身体から黒い魔力のオーラが噴出した。それがゆらゆら揺らいで、結界に罅を入れる。

「多重詠唱・・・・・ボルグ・ボルクス・ボルメテウス・・・・・」

「アリスさん？」

「契約に従い　我に従え　高殿の王　来たれ　巨神を滅ぼす　燃え立つ雷挺　百重千重と重なりて　走れよ稲妻／契約に従い　我に従え　炎の覇王　来たれ　浄化の炎　燃え盛る大剣　ソドムを焼きし火と硫黄　罪在りし者を　死の塵に／契約に従い　我に従え　闇の女王　来たれ　終焉を司りし　夜の支配者　絶望と憎しみを喰らいて　覆い尽くせ　嘆きの闇」

三つの魔法の詠唱が同時に唱えられた。千の雷と燃える天空、そしてもう一つは初めて聞く呪文だった。

「千の雷、燃える天空、闇の抱擁・・・術式混合固定・・・黄昏の剣、魔法付与・・・・・術式付与完了・・・是・・・・・“嘆きの焔雷姫”」

姫が黒い炎に包まれた。奈落の業火を取り込んだ時のような禍々しい黒ではない。何処までも透き通った黒曜石のような黒い・・・・

・・漆黒の炎、それに黒い雷が纏わり付いている。

「・・・・・ッ！！！　■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ーーーーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

遂に、アリスの身体から噴出していた黒い魔力が爆発した。
木乃香の膨大な魔力で作り出した結界を容易く破壊し、今いる部屋自体も内側から完全に崩壊させながら、アリスは黒い魔力のオーラを纏ったまま飛び出していった。

「アリスさん！！！」

木乃香の悲鳴にも近い叫び声は、もうアリスの耳には届いていない。アリスのオッドアイになった瞳からは完全に理性の色が消えうせ、口から出る言葉は言葉にならず、獣のような叫び声が出るだけだ。

オスティア総督府に現われた影人形達、その対応にメガロメセンブリアやアリアドネー、ヘラス帝国の戦艦が多数終結して絶えず攻撃を開始していた。
だが、巨大影人形を押さえに掛かった龍樹は一撃で消されてしまい、その光景はヘラス帝国側に衝撃を与えた。
同時に、その光景を見ていた龍樹と同格の存在であるエヴァも、衝撃を受けた。

「馬鹿なっ！　龍樹といえば私と同格の存在だぞ！？　それが一撃とは・・・むん！」

近づいてきた影人形を真っ二つにしながら、エヴァは敵の中で見かけた鍵のような杖、その存在が何なのかに中りを付け、その恐ろしさに思わず恐怖した。

「・・・はっ、この私が恐怖するか・・・・・・馬鹿馬鹿しい」

それよりも今は他の仲間たちと合流するのが先だと、アキラたちを率いて先を進もうとした時だった。

突如、建物の一部から膨大な魔力を感じ、同時にオスティア総督府全体に響き割るかの様な獣じみた叫び声と、総督府全域に行き渡る強烈な殺意と殺気に足が止まった。

「この魔力・・・禍々しくなっているが、アリスか!?」

空を見上げれば、黒いナニかが影人形達で蠢く中に突っ込んでいった。

魔法で強化した視力で見上げてみれば、その黒いナニかは・・・・・・アリスだった。黒い雷と炎を纏った“姫”を持って、理性を失った瞳に殺意を宿して影人形の群れの中に突撃したのだ。

「アリス!!!」

エヴァが大声でアリスの名を呼ぶが、如何せん遠すぎる。それに聞こえていたとしても、今のアリスにエヴァの声が通じるかも妖しい。

「クソッ！　早く木乃香たちと合流する！　月詠！　チャチャゼロ！　お前達も遊んでないで早く来い！」

ようやく合流した月詠とチャチャゼロを急かし、急ぎ木乃香たち

との合流を急ぐ。何が起きたのか、それを早く知らねばならないのだ。

アリスが飛び出した後、木乃香はすぐにアリスを追った。
浮遊魔法と虚空瞬動を駆使して、近寄る影人形を切り裂きながら兎に角アリスを追うが、中々アリスに追いつけない。

「あかん・・・あかんよアリスさん！　今のアリスさん、我を失っとる！！」

ずっと傍にいたパートナーの消滅、それでアリスの中で何かが切れた。
完全に理性を失い、影人形への憎悪と怒りで心を支配された今のアリスは、下手をしたら敵味方の区別もつかなくなっている可能性が高い。

「このままやと、アリスさんの夢なんて、叶えられなくなってまう！　それだけは、絶対にあかん！！」

止めなくては・・・シルヴィアが消滅したのは木乃香自身の油断だってあったのが原因なのだ。だからこそ、何がなんでもアリスを止めなくてはならない。

「絶対に、ウチが止めたる！！」

木乃香は飛ぶスピードを更に上げた。身体に掛かる負担を無視して、とにかくアリスの下へ急ぐ。手遅れになる前に、アリスを止める為に。

アリスは今、完全に思考を憎悪と怒りに染め、目の前にいる影人形を次々と切り裂いて、焼いて、消滅させていく。
シルヴィアを消滅させたモノ、影人形への怒りと、油断していた自分への怒りとが心を占め、太刀筋には正確性が無くなり、ただただ憎悪の指し示すがままに剣を振るう。

「■■■■■■■■■■■■■■ーーーーーっ！！！！！」

言葉など要らない。人間らしい思考など要らない。ただ、目の前の“敵”を滅ぼしつくす事が出来れば、他には何も要らない。
人間の、獣時代の本能に全てを委ね、湧き上がる破壊衝動に全てを任せて、目の前の“全て”を破壊し、殺し尽くす。
そして遂に、アリスの破壊衝動は最悪な方向に向かってしまった。総督府に降りて地上の影人形を破壊していたのだが、今のアリスに敵味方の区別が付かない。逃げ遅れた舞踏会参加者の女性が尻餅を着いて恐怖に染まった目をアリスに向けていた。
アリスはゆっくりと“姫”を振り上げ、女性目掛けて振り下ろそうとした。その時、アリスと女性の間に入って“姫”をその手に持った扇で受け止めた少女の姿があった・・・・・・。

「アリスさん！　もうやめや！！　こんな・・・こんなことしてもシルヴィアさんは！！」

木乃香だった。女性は木乃香がアリスを抑えている間に脱兎の如く逃げ出し、既にこの場にはいない。

「■■■■■■■■■■■■■■ーーーーーーーーーーーっ！！！！！！！！！」
「っ！　なんでや・・・なんで、こんなことになってもうたんや・・

・・・・？　ウチが、アリスさんを、ちゃんと止めて、周りをもっと見ないとアカン言うてれば・・・・・・っ」

獣の様な叫び声しか発しないアリスに、木乃香は涙を流した。
黒い雷と炎を纏う“姫”を受け止めている二本のオリハルコン製の扇は煤ける程度で何とか無事だが、それを持っている木乃香の両手は既に大火傷をしている。

「っ！　せぇい！！」

木乃香は自身の魔力を体から吹き上がらせ、アリスの身体を弾き飛ばした。
数メートル先に着地したアリスは、“姫”を構えて、低く唸りながら木乃香を睨んでいる。そのアリスを悲しみの涙を流しながら、木乃香は着ているドレスの長いスカートを太股の所で大きく破り捨てて、ミニスカート状態にした。

「止めたる・・・・・・ウチの全てを持って、必ず止めたるえ。二代目・紅き翼、癒しの巫女・・・近衛木乃香！　アンタの心を癒してみせる！！」

九十四話　「暴走、決意」（後書き）

次回は暴走アリスと木乃香の戦いです！　実力的にアリスにはまだまだ及ばない木乃香が、どうやって戦うのか！

九十五話　「悲しき戦いの末」（前書き）

木乃香、実はとあるフラグが立つんです。何のフラグでしょうか？

九十五話　「悲しき戦いの末」

英雄と女王の子

九十五話

「悲しき戦いの末」

アリスと木乃香の戦いが始まる少し前、さよ、ペルシクムの二人と合流を果たしたエヴァ達は、ヘラス帝国艦隊と戦う巨大影人形を何とかする為に対策を考えていた。

エヴァがやってもいいのだが、エヴァはアリスと木乃香を見つけなければならないので、不可能・・・・・・アキラとさよ、チャチャゼロ、月詠では火力不足、いや・・・さよと月詠は可能かもしれないが、ここで切り札を曝すのは不味い。ならば如何するか・・・それが可能なのは二人、茶々丸とペルシクムだ。

「お前達二人のアーティファクト、火力で言えば私や木乃香、アリスクラスの火力があったな」

「かしこまりました・・・アリス様とのアーティファクト、ここで披露します」

「マスターの事、お願いします」

「ああ」

茶々丸とペルシクムは互いにカードを取り出すと、空へと舞い上がった。そして、その切り札たる未来のアーティファクトを取り出す。

「「アデアット！！」」

茶々丸のアーティファクト、空とび猫は手に握られた猫型銃が本体ではない。空・・・衛星軌道上に現われたファンシーな物体こそがその本体である。

ペルシクムのアーティファクト、空の箱舟は巨大なアームが二つ取り付けられた大型飛行機械、その中央に翼を広げてセットされたペルシクムは、紅く染まった瞳にターゲットをロックする。

「まだ試射はしていませんでしたが・・・この敵であれば試射には丁度いいです」

「ウラヌスシステム・・・起動、ギガ・ルナティーク、一斉発射！！」

億を超える数のルナティークが空の箱舟から発射された。

ルナティーク全弾が巨大影人形の周囲と、帝国、アリアドネー、メガロメセンブリア艦隊の周囲にいた影人形全てを撃ち抜き、巨大影人形の四肢を完全に吹き飛ばして、船を拘束していた触手全てを破壊しつくした。

「今です」

茶々丸の猫型銃で照準され、衛星軌道上の物体から魔法と思しき強大な雷が巨大影人形に落ちた。

「やりました・・・超」

「マスター・・・」

もう残る影人形は地上のやつのみ、それももうすぐ殲滅完了するだろう。

会場の一般客も避難は粗方完了した様子なので、残る問題はアリスのみ。

嘆きの焔雷姫となった“姫”を構え、憎悪と殺意のみの、理性無き瞳で木乃香を睨みつけるアリスは、縮地と言えるスピードで瞬動に入り、如何いう理屈かは判らないが膨れ上がった筋肉から繰り出される人外のパワーで“姫”を振り、木乃香の胴体を両断しようとする。

対する木乃香は扇を核に贖罪の剣を両手に発動、“姫”を受け止めたのだが、人外のパワーを受け止めるには余りにも彼女の腕は細すぎた。

抑えきれずに弾き飛ばされるが、近づいてくる前に牽制として光の戦斧を9本放ちながら、左足を軸足に床を削りながら着地して右足を踏み出し、全体重を前に掛けながら両手の贖罪の剣を伸ばして左右からアリスを挟む様に振る。

「グッ・・・!」

だが、両方の贖罪の剣をアリスが“姫”一本で受け止めた時、木乃香の腕に激痛が走った。

元々アリスの“姫”を一般客を助ける為に受け止めた時に大火傷をしていたのだが、先ほど弾かれた時、あの時に“姫”を受け止めた事で両腕の骨に罅が入ってしまったのだ。

「アーティファクト出しとる時間は無い・・・・・あかん、このままアリスさんの馬鹿力受け止めとったら、折れるやろな・・・・・詰んだ?」

何て諦めてる場合ではない。諦めた覚えも無いが、木乃香は何とか起死回生のチャンスを伺おうとしたのだが・・・・・・。

「っ！？　しまっ！」
「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ーーーーーーーーっ！！！！！！！！！！」
　アリスが瞬動中に方向転換などという普通は不可能な芸当を仕出かし、真っ直ぐ来るものだと思っていた木乃香は意表を突かれた。
　真横から現われたアリスの“姫”による斬撃、ギリギリで避けようとした木乃香だったが、背中を大きく切られ、焼かれてしまった。
「あ、あああああああああっ！！！」
　切られる痛みと傷口を焼かれる痛み、体内を電流が走る痛みの三つが同時に襲ってきて、血は吹き出なかったものの、激痛が絶えず木乃香の思考を妨げる。
「アリスさん・・・・・・もう、あかんの？　やっぱ、ウチの実力じゃ、アリスさんを止めるなんて、出来んいうんか？」
　木乃香の攻撃は尽くかわされ、受け止められ、弾かれる。逆に木乃香はどんどんアリスの攻撃を受けて、全身が傷と火傷で一杯になった。
　着ていたドレスもボロボロで、所々が破けて素肌や下着が見え、血が滲む。額からは壁に叩きつけられた時に切れたのか血が流れて、木乃香の密かな自慢だった長く艶やかな黒髪も、今は煤けて見える。
「ウチじゃ、シルヴィアさんにはなれんの？・・・シルヴィアさんの代わりになる事もできんの？」
　涙が、絶えず流れる。
　シルヴィアみたいに、アリスを支えられない自分が悔しくて、こ

んな風になってしまったアリスを止められなくて、自分の実力がまだまだ低い事が惨めで・・・・・シルヴィアとアリスの背中が、遠く感じられて、涙が止まらない。

「近衛木乃香！！」
「・・・え？」

目の前に立ったアリスが振り下ろした“姫”を見て、死ぬんだと思い、怖くなって目を瞑ったのだが、いつまで経っても痛みが来ない。

それどころか、聞こえてきたエヴァの声、目を開けてみると、右の肩口から左の腰半ばまで掛けて“姫”に切られ、骨盤で受け止めた“姫”の炎に傷を焼かれるエヴァの姿があった。

「グッ・・・がっ！　・・・木乃香・・・貴様、な・・・にを、諦め、ている・・・・・・」
「エヴァ、ちゃん・・・・・・」
「貴様の、アリスに対する想いは・・・その程度、だったの、か・・・？」
「・・・それ、は」

違う、そんな事はない。木乃香の中にあるアリスへの想いは、アキラやさよと認め合い、シルヴィアにだって負けないという自負もある想いは・・・・・アリスへの愛情は、こんな所で簡単に諦められるほど、小さなものでは無い筈だ。

「がぁああっ！！！」
「エヴァちゃん！！」

エヴァの骨盤も限界を迎えたのか、エヴァの身体は真っ二つにさ

れてしまった。
　目の前でエヴァの身体が二つに断たれ、大量の返り血をアリスも木乃香も浴びてしまい、全身が真っ赤に染まる。

「なんやねん・・・・・なんでこんな事に・・・いやや、もう・・・誰かを失うなんて、もう！」

　木乃香の中で、何かが切れた。同時に、木乃香の最大魔力がアリスと同じように身体から噴出し、その魔力の本来の性質である治癒の力が、全身の傷を無理やり塞いだ。

「もう誰も失いたくない！　シルヴィアさんも、エヴァちゃんも、アリスさんも！！！　絶対に止めたる！！！」
「・・・いや、死んで、ない・・・ぞ？」

　不死身なエヴァの上半身から声が聞こえるが、無視した。
　木乃香の贖罪の剣に涙が落ちた時、その姿が大きく変化した。今までは刀身のみの細い剣のような形だったのだが、二つの扇を合わせて、両手で握ると、剣そのものが太くなり、反りが出て太刀のような形になった。

「一刀・・・癒撃！！！」

　その時、その場にいた二代目・紅き翼のメンバー全員が不思議な光景を目にした。
　木乃香の後ろに、巫女服を着た黒髪の女性と、太古の鎧を着た男性の人影が映り、木乃香の身体に吸い込まれる様に消えたのだ。
　二つの人影が木乃香に吸い込まれた時、太刀の様な姿になった贖罪の剣が眩い純白の光を放つ。
　木乃香の魔力が噴出した時に後ろへ後退していたアリスは、それ

に危険を感じでもしたのか再び吼えて木乃香へと真っ直ぐ突っ込み、“姫”を振り下ろそうとした。

「稲羽之素菟（イナバノシロウサギ）！！！！！」

アリスが振り下ろした“姫”を大量の魔力で最大強化した鎖骨で受け止め、その痛みを堪えながら木乃香は贖罪の剣でアリスの胴を切り裂いた。

一瞬の静寂、その後に木乃香はその場に倒れ、アリスも倒れた。だが不思議な事に、胴を切られた筈のアリスには一切の傷は無く、それどころか木乃香の攻撃で若干ながらも負っていた小さな傷が消えていたのだ。

「がっ！　がぁあああああああああ！！」

未だに暴れようとしていたアリスだが、傷を癒した木乃香の一太刀で受けたダメージが大きく、立ち上がる事が出来ない。

肩で息をしながら木乃香はその様子を見ていて、駆け寄ってきたアキラとさよに肩を貸してもらいながら立ち上がると、倒れたまま暴れるアリスの下へ歩み寄り、しゃがみ込むと・・・・・・。

「・・・っ！！」

パァン！　という乾いた音と共に、アリスの身体は壁まで吹き飛ばされた。

木乃香の残った全魔力を込めた平手がアリスの頬を捉え、そのままアリカがナギを平手した時と同じ様に吹っ飛ばしたのだ。

「こ、このか・・・？」

「このかさん・・・？」

突然の事に傍で見ていたアキラもさよも目を丸くしていた。傍らで倒れるエヴァも真っ二つにされた身体を修復しながら、木乃香の意外な行動に驚いている。
木乃香はアキラとさよの手を離れて、ゆっくりとアリスに歩み寄った。その表情は俯いているため、前髪に隠れて見えない。

「がぁ、あああああっ！」

尚も暴れようとしているアリスを押し倒した木乃香は、暴れない様に全身を使って押さえ込むと、勢い良く自身の唇をアリスのソレに重ねた。
何秒か無言の時が流れ、ようやく顔を上げた木乃香は泣きながらアリスを見下ろしている。

「この、か・・・ちゃ・・・・・・・」
「馬鹿っ！！！！」
「っ！」
「馬鹿や！　大馬鹿者や！！　アリスさんも、ウチも、皆も！！何でウチらの事を頼ってくれんの！？　ウチらそんなに頼りないん！？」
「・・・・・・」
「シルヴィアさん消えて悲しいんはアリスさんだけやない、そうやろ！？　何でウチらのことも考えてくれんのや！　ウチらかて悲しいえ？　魔法世界に来てからのアリスさんの行動を止められなかった事も、アリスさんの負担を一緒に背負いたいと思ってても、その重圧を勝手に想像して臆病になってたことも・・・・・・その結果が、アリスさんとウチの油断でシルヴィアさんを失う事になった事実も、全部悲しいし、悔しい」

アリスの顔に涙が次々と落ちてきた。既に理性が戻りかけている瞳で木乃香の泣き顔を見ていたアリスは、ダメージで動かすのも億劫な腕を何とか持ち上げ、木乃香を抱きしめた。

「ごめ、ん・・・・・・ごめんね・・・木乃香ちゃん、シルヴィア・・・っ！」

「アリスさん・・・・っ！」

もう、二人は何も言えなくなった。周りで仲間達が見ているのも関係無しに、大声で泣き出した二人を、仲間達は同じように涙を流しながら、静かに見守るのであった。

九十五話　「悲しき戦いの末」（後書き）

次回は総督府からの逃亡！　それとのどかの事で少しあります。

九十六話　「認めた過ち」（前書き）

のどかの事と、遂に本契約の内容が明らかに！！

九十六話　「認めた過ち」

英雄と女王の子

九十六話

「認めた過ち」

現在、白き翼と二代目・紅き翼はグレートパル様号とフライマンタ、クリムゾンに乗り込んでオスティアから逃走していた。

クリムゾン船内ではアリスの部屋に全員が集まり、シルヴィアが消えた事、そしてこれからの事を話し合っている。

「そうか・・・シルヴィアは、消えたか・・・・・・」

エヴァは親しい誰かがいなくなるのは慣れている。だが、それでも胸の内に湧き上がってくるものがあった。

この場にいる誰もがシルヴィアの姿を思い返し、その笑顔が蘇ってくる。特に月詠はシルヴィアを姉のように慕っていたのもあって、先ほどからさよに抱きついて泣いていた。

「私は・・・焦っていたんだな・・・・・・シルヴィアが消えて、ようやく気付いた。皆にも、相談していれば、良かったんだ」

「・・・そうだな、貴様は焦りすぎた。夢を叶える為と口にしていて、その実やっていた事はメガロメセンブリア元老院や完全なる世界を滅ぼす為の事ばかり・・・・・・その結果がこの様だ」

エヴァの厳しい言葉が、今のアリスには胸に刺さる。

何も言い返せない。シルヴィアが消えた原因の一端は自分にあるのだから、言い返せる筈がない。

「だがな・・・・・貴様一人の責任ではない」
「そうだよ先生、私たちも・・・先生の事、無理にでも止めていれば良かったんだ」
「マスターに従うだけと言って、何もしなかった私も・・・悪かったです」

アリスは誰にも相談しないで、一人で何もかもを決めてきたのが悪い。他のメンバーはそんなアリスの現状に気が付いていながら、止める勇気が持てず、いつかは気付いてくれると信じて何もしなかったのが悪い。その結果が仲間一人の犠牲なのだ。

「私は・・・・・もう、一人で悩むのを止める。全てを私一人で決めるなんてしない・・・皆の意見を確り聞くよ」
「それでええんよ・・・ウチらもアリスさんが少しでも悪い癖を出したら、引っ叩いてでも止めたるえ」
「このかさんが引っ叩いたら、先ほどの様にアリス先生が吹っ飛んじゃうんじゃ～・・・」

脹れた木乃香に皆が笑った。ようやく暗い空気が明るくなった所で、アリスは完全なる世界とこれから戦う事になるため、それに備えて話をする事にした。

「影人形の一体が持っていた杖を手に入れた。造物主の掟・・・これはマスターキーだ」

アリスが影から取り出したのは、鍵の様な杖、造物主の掟の内のマスターキーだ。

「これは簡易型の戦闘用タイプで、この上にはフェイト・アーウェ

ルンクスやデュナミスなどの幹部クラスが持つグレートマスターキーが七本、そして更に上にはこの世でたった一本しかない、創造主の力そのものとも言われているグレートグランドマスターキーがある。これこそがこの世界の鍵とも言える」

マスターキーでも魔法世界人には勝てない。

そしてこの鍵の効果は魔法世界人を消滅させるというものがあるのだ・・・・・幻想でしかない、この魔法世界出身の人間や亜人などを。

「なるほど、魔法世界人は造物主が作り出した人形という事が・・・気に入らんな」

完全なる世界の目的は魔法世界全土にグレートグランドマスターキーと黄昏の姫巫女の力でリライトの魔法を発動させ、魔法世界人全てと、魔法世界そのものを消滅させる事だ。

「元々、魔法世界は限界が近い・・・この先何十年か先に、魔法世界は消滅し、魔法世界に住む住民は全て、大気が二酸化炭素で構成されている火星の大地に投げ出される事になる」

だが、アリスの目的、計画はこの問題すら解決させる為のものだ。その手段も、アリスは考えている。

「２０年前の大戦終結時に、空中王都オスティアにある王宮からメガロメセンブリア元老院は蔵書をくすねている。その蔵書をリカードさんのお陰で読む機会があって・・・・・そこで見つけた方法なんだ」

内容も、重要な所は手書きコピーして持っている。

そして、その中にはアリスの計画の要となる重要な事が載っていて、計画自体はこの蔵書を見た時に作り上げたのだ。

「必要な物は後一つを除いて揃っている・・・」
「その最後の一つが・・・グレートグランドマスターキー、なのですね？」
「そういうこと」

ならばやる事は決まったも同然、完全なる世界を倒し、グレートグランドマスターキーを奪う。

「そして、魔法世界の問題を解決して・・・母さんの名誉を回復させて、ウェスペルタティア王国を再建する。その上で邪魔になるメガロメセンブリア元老院の膿は、全て滅ぼす！」

リカードは協力者だ。リカードはメガロメセンブリア元老院で、信用出来る者を集め、アリスがメガロメセンブリア元老院の膿の殲滅をやり易いよう工作してくれている。

「まずは勝ちに行くぞ！　完全なる世界に！！」
『おう！！』

だけど、アリスにはその前に、やらなければならない事が一つだけ・・・残っていた。

アリスは秘密回線でのどかを呼び出した。
クリムゾンの内部、アリスの船室にはアリスと木乃香の二人だけが残っており、アリスはのどかとの事でケジメを付けるつもりでいるのだが、木乃香はそのアリスを支える為に、隣にいた。

「あのー・・・アリス先生?」
「ああ、来たね・・・入ってきて」
「は、はいー・・・」

のどかが部屋に入り、アリスに勧められて椅子に座った。
アリスはテーブルを挟んで反対側に座り、その隣には木乃香が座って、紅茶をそれぞれに差し出した。

「ありがとう・・・・・・さて、宮崎さんには・・・申し訳ない事をした」
「・・・え?」
「・・・今は何を言っているのか、理解出来ないよね・・・・・・今、暗示を解くよ」

アリスの両目がオッドアイに変わり、少ししてのどかはビクンッと一瞬だけ跳ねた。暗示は完全に解けたので、アリスの両目も元の色に戻り、改めて頭を下げる。

「君の、ネギへの恋心を利用して・・・暗示を掛けて利用していた事、許される事ではないと理解しているけど、それでも・・・・・・ごめん」

のどかは何度か記憶を思い返し、そして・・・・・・何日か前にアリスに抱かれている事を思い出した。
そう、のどかは一晩だけだがアリスに抱かれている。暗示の最後の仕込みとしてアリスはのどかを抱いて、処女を奪っている。それを思い出したのどかは真っ赤になった後、真っ青になり、涙目になってアリスを睨みつけた。

「わ、私を暗示で洗脳して・・・・・・あんな事を・・・ネギ先生への恋心を利用したって！」

「すまない・・・言い訳はしない。全ては私がやった事だし、許してもらえるなんて思ってないけど、私にはこうやって頭を下げて、謝る事しか出来ない」

只管、頭を下げる。

そんなアリスを見て、のどかは一つ決心したのか、真っ青になっていた顔色を何とか戻し、震える声で頭を上げるように言った。

アリスがゆっくりと頭を上げると、頬に衝撃が走った。

「のどか・・・」

のどかが顔を上げたアリスの頬に平手を打ったのだ。

涙を流すのを懸命に堪えながら、のどかは真っ直ぐアリスの目を見て、アリスを殴った手を押さえて、口を開く。

「許しません・・・・・・あなたがやった事、絶対に許しません・・・でも」

「・・・・・・」

「許さないですけど・・・、アリス先生が私を洗脳していた事は、ネギ先生達には黙っています・・・・・・私に許しを請うのでしたら、夢を・・・叶えて見せてください」

そう、言い残してのどかは部屋を立ち去った。

アリスはのどかが部屋を出たのと同時に右肘をテーブルに着いて、掌で顔を覆う。その隙間からは、涙が零れていた。

「本当に・・・私は、何をやっていたのだろう」

「・・・」

そんなアリスを見ていられなくなった木乃香は静かに立ち上がり、アリスの後ろに移動すると、覆いかぶさる様に抱きつき、胸の前に手を回した。

「償わなあかんな・・・・・・のどかの為にも、これから精一杯」
「・・・っ、ああ」
「あんなアリスさん・・・・・・こんな時に言うのも何や思うけど、アリスさんの事、好きや」
「・・・？」
「本当は全部が終わったら言おう思ってたんやけど・・・・・・今のアリスさん、見てられんて・・・アリスさん、愛してる。ずっと、ウチが傍におるから・・・アリスさんの悲しみとか、辛い事とか、一緒に分け合お？　ずっと・・・ずっと」

顔を上げたアリスの前に回った木乃香は、アリスに口付けをした。仮契約の時のとは違い、暴走するアリスを止めた時よりも深い、深い口付けを・・・・・・。

「ウチと、本契約・・・してください」
「本当に、私で・・・良いの？　一生に一度しか出来ない、本契約を、私なんかで・・・・・・」
「言うたやろ？　ウチはこの先ずぅっと・・・一生、アリスさんの傍におるえ」
「・・・・・・ありがとう」

アリスは影から取り出した一つの宝石をベッドの上に置き、魔力を通した。

宝石は割れ、ベッドの上下に仮契約用のものに似た魔法陣が現われる。これが、本契約用の魔法陣・・・魔法使いも従者も、一生で

一度しか行えない儀式を行うのに使う、最古の魔法陣の一つだ。

「私はこれから・・・このベッドで木乃香ちゃんを、抱く・・・・・・本当に、良いんだね？」

「うん、その代わり・・・必ず幸せにしてな？」

「・・・ああ、必ず」

この日、魔法世界に本契約を果たした一組の主従が生まれる。

神聖なる儀式によって生まれたアリスを主とする本契約カードには、白黒の二対の扇を持ち、白い鉢巻を巻いて、松葉色の袴の巫女服を着た木乃香が眩い笑顔を浮かべる絵が写っていた。

九十六話　「認めた過ち」（後書き）

正ヒロインは木乃香に決定しました！　って、この前から決まってたようなものか……。

本契約しました！　やり方はお子様駄目よ？　な内容です！

九十七話　「紛れ込んでいたスパイ」（前書き）

あ、頭痛てぇ……。風邪？

１６日に就職の面接が決定！！　ひゃっほう！！！↑本編の事書け

九十七話　「紛れ込んでいたスパイ」

英雄と女王の子

九十七話

「紛れ込んでいたスパイ」

木乃香との本契約が終わり、アリスはまだ腰が抜けて動けないと言う木乃香を部屋に残してエヴァと共にグレートパル様号に向かっていた。

向こうに乗り込んでいる龍宮真名に呼ばれて、確かめて欲しい事がある言うのだ。

「アイツの事か？」

「多分ね・・・まあ、十中八九・・・だろうけど」

「そうか・・・」

グレートパル様号（いい加減この名前変えたら良いのにとアリスは常々思う）に移った二人は真名と、一緒にいたのどかと千雨が迎えた。

のどかの顔を見たとき、アリスは一瞬だが顔色を変えたものの、のどかがいつもの様にアリスに・・・・・生徒が教師に向ける様な微笑みを向けたので、何とか落ち着いた。

「それで・・・呼んだ理由は？」

「先生なら気が付いているのだろう？　神楽坂の事さ」

「そう・・・・・」

ラカンが消えた事は既に聞いている。そのラカンからネギはアス

ナが偽者だという事を聞いていたらしく、その確認をこれから行うのだとか。

「既にネギ先生と神楽坂は中に入ってるぜ・・・後はあたしらが入るだけだ」

そう言われて案内された部屋の中央を見れば、ヘラス帝国製のダイオラマ魔法球があった。何でも、ラカン戦の時は直前までこの中に入って修行をしていたらしい。

早速中に入ったアリス達は、温泉で二人の姿を見つけた。ネギの背中をアスナが洗っていたらしく、アリスはすぐに目を逸らした。・・・・・流石に叔母の下着に近い姿（下半身は下着）を見るのは不味い。

「うーむ、こうして見てもホンモノの神楽坂にしか見えねぇな」

「・・・いや、間違いなく偽者だ」

「アリス先生、わかるのか？」

「ああ、あの神楽坂さんは魔法無効化能力を持っていない」

王家の魔力の事を話す訳にもいかないので、一般的な名称である魔法無効化能力の事を話した。

クルトの斬空閃を消せなかった事、影人形を一撃で消せなかった事、それらの事から王家の魔力は持っていないことがわかる。尤も、アリスは今のアスナから王家の魔力を感じられないので、偽者だと判るのだが。

「私が護衛についた時には既に偽者だったという事か？　とても信じられないな・・・だが、それが確かならどれほど高度な術を用いたのか・・・・・・」

「いくつか心当たりがある・・・・・・まさか、完成していたとは

思わなかったんだけど」
「完全なる世界だな・・・映画で出てきたフェイト・アーウェルンクスが２０年前の執政官に化けていた時の術・・・・・・あれは未完成だったのか」

エヴァの推理は当たりだ。フェイトはあの術を従者のアーティファクトによって完全に完成させたのだろう。今まで確認されていたフェイトの従者は調、暦、焔、環の四人だったが・・・もう一人いたという事だ。

「む？」

エヴァが闇の魔力を感じて見ると、ネギが闇の魔法の侵食によって再び発作を起こしていた。既に背中まで伸びていた模様は、魂を完全に飲み込むまで残り僅かだという事を示している。

「ふん、人間のぼーやが安易に闇の魔法に手を出すからああなるのだ・・・実力が格段に上がったのは確かだろうが・・・このまま飲み込まれるのであれば、無様としか言えんな」

そうこうしている内に、ネギは発作の苦しみの中でアスナに彼女は偽者なのではないかという質問をして、そのまま意識を失ってしまった。

とりあえずアスナは真名が拘束したので、ネギはこれ以上は必要ない。アリスは真名に尋問を頼んでエヴァと共に近くの岩に腰掛けて静観する事にした。どの様な術なのか、見極める為に。

「アリス、アレは用意してきているな？」
「一応ね・・・いざという時は、気は進まないけど・・・・・・やるよ」

アリスは懐に入れてある宝石二つを確かめながら、気の進まないという不満そうな表情で返事を返した

「だから何回言わせるのよっ！　私がスパイなわけないでしょ！？私は正真正銘、神楽坂明日菜よッ！！」

しかし、ここまで人格や記憶まで完全に再現する術というのも見事なものだ。

のどかの持つ鬼神の童謡も、いどのえにっきも効果なし、アスナ本人としか出てこないのだから、高位の幻術というレベルを遥かに凌駕している。

「アリス、あれは人格を本来の人格に上塗りしているのではないのかもしれない。術者本人の人格を裏に潜め、変装する対象の人格を完全再現で作り上げて、擬似的な二重人格を作り出すのかもしれんぞ」

「そこまで来ると、幻術とかそういうレベル超えてるね・・・」

更には作られた人格には作られたという自覚は無い。もしかしたら、これは魔法による術ではないのかもしれな。

最初はフェイト・アーウェルンクスの使っていた幻術を完成させたのかと思ったのだが、それを考えると最早アーティファクトの領域だ。

「・・・まて、そんなアーティファクトは聞いた事が無い」

「・・・まさか」

それなら考えられるのは・・・フェイトが魔法として幻術を完成させたのではなく、そういった幻術を発動させるアーティファクト

を創ったという事になる。

「可能か如何かで言えば・・・確かに仮契約で出現するアーティファクトを創るのは可能だが」

「２０年前の大戦から研究をして創ったと考えるのが、正しいかもしれないね」

２０年、それだけあれば確かに、アーティファクトを創るのも可能だろう。

これは・・・・・もう決まりと考えるべきだ。これしか考えられる可能性は無いし、そう考えるのが自然だ。

「って、龍宮待て・・・流石に退魔弾は弾が勿体無い。確かめるのに確実な手段がある」

「確実な手段だって？　アリス先生・・・弾代は確かに馬鹿にならないが、私はこれしか手段は無いと思うのだが」

「ネギ、どけ」

ネギが龍宮から守る様にアスナの前に立っているので、邪魔だと退かして、懐から宝石を取り出す。

その宝石をアスナの足元に置いて魔力を流すと、宝石は割れて仮契約用の魔法陣が展開された。

「オレッチの存在意義が！？」

カモミールが何やらショックで固まってしまった。そういえばカモミールもいたのだから、態々アリスが魔法陣を作る必要は無かったのだ。

「ネギ、彼女と仮契約をしろ・・・それで偽者か本物かは判る」

「わかった・・・」
「アリス先生はしないのか？」
「ああ、私はもう・・・二度と仮契約は出来ないからね」

如何いう事なのか、疑問を持った千雨とネギだったが、いどのえにっきで読んでしまったのどかと、理由が理解できた真名は何も言わなかった。

アリスは既に木乃香と本契約をしてしまった。本契約をしてしまった場合、もうこれ以上仮契約をする必要は無くなるので、既に仮契約をしている者の契約は切れないが、新たに仮契約をする事は出来なくなるのだ。

「アスナさん・・・行きます！」
「ちょっ！　まっ！？　んん！？」

現われたカードには・・・アスナは写っていなかった。ルーナという名の少女・・・・・・完全なる世界の一人、フェイトの従者だ。

そして、ネギとの仮契約で術が解けたのか、アスナの姿は完全に消え、アスナの格好をしたルーナが座り込んでいる。

「やはりね・・・・・・完全魔法無効化能力を持っていなかったから妖しいと思っていたが、一体いつ何処で入れ替わったのだか」

真名が銃を突きつけているのを眺めながら、アリスは完全なる世界の手にアスナが落ちたという事実を再認識し、改めて不味い状況だと舌打ちするのだった。

「エヴァ、後で会議だ・・・この事実を皆に伝える。情報はネギが引き出すだろうけど、多分私が知っている事だと思うから、これからの事を・・・みんなで話し合おう」

「ああ・・・、良い傾向ではないか、アリス・・・・・・あの女が完全なる世界の人間だというのは明らかなのに、冷静なままだ」
「焦ってもしょうがない・・・何でなんだろうね。何故か心に余裕が出来たからか、焦ってはいるけど、不安はないんだ」

仲間が、木乃香が支えてくれる。それを改めて学んだから、アリスは心に余裕が生まれた。
無闇に殺意を振り撒かなくなったのも、みんなと話し合うという考えも、アリスの心の余裕から生まれたものだ。

「あの・・・アリス先生」
「っ！　宮崎、さん・・・・・・どうかした？」
「ルーナさんから得た情報・・・後で渡しますか？」
「・・・ううん、いいよ。もう、君はそんな事しなくて良い・・・・・・それに、もう私にはそんな事をする必要はないんだ・・・仲間がいるんだって、それを思い出せたから」

そうですか、と言ってのどかはネギの所に戻った。
アリスとエヴァはのどかの後姿を見送ってから、打倒ラカンと書かれた岩の置いてある海岸に戻る。

「貴様・・・宮崎の事は吹っ切れとは言わんが、せめて引きつった笑みを向けてやるな。奴も気にするだろうが」
「ごめん・・・暫くは無理かも・・・・・・なんか、宮崎さんに対する罪悪感とか、そういうのの他に、恐怖みたいな感情があってね」
「恐怖・・・ね。この世界に来てからの宮崎の成長は著しいものがある・・・あの小娘、今や心の強さはアリスよりも上なのだろうな」
「それと、私が精神的に弱くなった、かな・・・・・・」
「違うな・・・貴様は元々精神的に弱い。今まで貼っていたメッキが剥がれただけだ」

「ハハ・・・違いない」

エヴァの容赦ない言葉が、今は嬉しかった。

耳に心地よい波の音を聞きながら、アリスは何処かスッキリした笑顔でエヴァの頭を撫でる。エヴァもその行為を咎める事もなく、何となく受け入れて、偶にはこういう穏やかな時間も悪くないと、相変わらず腕に抱いているクマのぬいぐるみを抱きしめるのであった。

九十七話　「紛れ込んでいたスパイ」（後書き）

次回は魔法世界の真実の話と、アリスの最後の修行です。
遂にアリスは最後の切り札を二つ…完成させて決戦に備えるのです。

九十八話　「未来の為に、最後の修行」（前書き）

アリス、計画を話すの巻。

九十八話　「未来の為に、最後の修行」

英雄と女王の子

九十八話

「未来の為に、最後の修行」

クリムゾンには現在、魔法世界に来ている二代目・紅き翼のメンバー・・・消えたラカンとシルヴィア、総督府に残ったタカミチ意外の全員が会議室に集まっていた。

これから話し合うのは魔法世界の真相と現状、そして未来の事だ。

「まず、魔法世界の真相から話さないといけないね・・・火星を触媒にした人造異界だっていうのは話したよね？」

全員が頷いたのを確認して、次に進む。

「魔法世界と魔法世界人は“同じモノ”で出来ているんだ・・・・・・魔法世界を構成するモノと同じモノでね。だから魔法世界が消えれば魔法世界人も消え去る。要するに魔法世界人というのは幻想なんだ」

造物主の掟は魔法世界人を構成するモノの結合を解いてしまう能力を持つ、だから魔法世界人にとってアレは危険な代物なのだ。

「完全なる世界にもメガロメセンブリア元老院にも、魔法世界人を救う方法は無い。だから完全なる世界は魔法世界が消える前に魔法世界人を消す事で救いとし、メガロメセンブリア元老院は魔法世界人を見捨てて純粋な人間のみを助ける」

だが、アリスの計画はそのどちらにも属さない第三の計画だ。魔法世界人を消さず、見捨てず・・・魔法世界そのものすらも救う方法を、アリスは考えたのだ。

「魔法世界は近い未来に崩壊する。だが、その近い未来を待つ前に完全なる世界は魔法世界を消し去るだろう・・・本物のアスナ叔母さんとグレートグランドマスターキーが向こうにあるという事は、奴等の計画の要は全て揃った事を意味するからね」

そうなれば魔法世界は終わり、アリスの夢も潰える事になる。

「アリス先生、先生の計画って・・・どんなモノなの？　まだ聞いた事が無いんだけど・・・」

「ああ、そう言えばまだ話してないね・・・・・・簡単さ、この魔法世界は始まりの魔法使い、造物主が作り上げたのだから、私が同じ事をするだけだ」

「同じ事？」

「そう・・・私の持つ、王家の魔力全てを犠牲にしてね」

その為には何としてもグレートグランドマスターキーが必要だ。絶対に奪い取らねばならない。

「それに・・・この方法なら消えたラカンやシルヴィア、他にもあの騒ぎで消えた魔法世界人の人達はみんな復活する・・・何としても成功させる。だから・・・みんな、協力してほしい」

頭を下げたアリスに、全員なにを今更と頭を上げさせて、改めてアリスの計画の成功と、夢の成就の為に協力する旨を伝えた。

「ありがとう・・・・・・」

アリスは改めて思う。こんなにも良い仲間に恵まれて、何故自分は一人で何もかもを行おうとしていたのか、何故頼ろうとしなかったのか。

あんな結果になってしまったのに、こうして今も協力してくれると言ってくれる仲間に、感謝と・・・そして夢へ向かって確かな決意を固めるのであった。

会議を終えた後、エヴァは一人でグレートパル様号に来ていた。

ネギに呼ばれて来たのだが、ネギの部屋にはネギの他に刹那、千雨、楓も居て、頼み事があると言ってきた。

「闇の魔法の副作用を何とかして欲しいか・・・・・・」

「はい、エヴァンジェリンさんなら、ネギ先生の闇の魔法の副作用を何とかできると思いまして・・・・・・」

「ふん・・・まあ、何とか出来なくもないが」

「では！」

「ああ・・・断る」

ネギ達が驚愕した。

てっきり弟子のネギの事なのだから協力してくれるとでも思っていたのだろうが、そんな考えは甘い。

「丁度良い機会だから言っておこう・・・ぼーや、貴様を破門する。もう私は貴様の師ではないし、貴様は私の弟子ではない」

「ど、どうしてですか師匠（マスター）！」

「どうしてだと？　何故、二代目・紅き翼のメンバーである私が、協力関係にあるわけでもない白き翼の貴様を、いつまでも弟子にし

ていなければならん」
「ならばエヴァンジェリン殿も白き翼に入ればよかったのではござらんか？」

楓の言う事も尤もだろうが、エヴァが白き翼に入るメリットなど無い。

「何のメリットも無いのに、白き翼に入る理由は無いな・・・・・・」
「ちょっと待てよ、ならアンタが二代目・紅き翼のメンバーになったのは何でだ？　そのメリットってのはそっちにはあったのかよ？」
「ああ、あるとも・・・私が二代目・紅き翼に入る代わりに、アリスは登校地獄の呪いを解いてくれた。充分なメリットだ」

それならネギだっていつかは解くのに、何故アリスを選んだのか、ネギはそう不満を言うが・・・・・・。

「貴様ではアテにならん。貴様が言うのはいつかだ・・・だがな、アリスはその場で解いて見せた。貴様とアリス、どちらを選ぶのかは・・・明白だよな？」
「・・・っ」
「闇の魔法の副作用を如何にかしたいのなら、巻物でも使え・・・弟子でもない仲間でもない人間に、私が協力するなど・・・闇の福音である私の矜持に関わる」

そう言い捨ててエヴァはネギの部屋を出て行った。無駄な時間を取った事にイライラしながら、早くアリスの所に行って、有意義な時間を過ごしたいと、少し早足でクリムゾンに向かう。

「・・・ふん、私も随分とアリスに惚れ込んだものだ・・・・・・

まあ、あいつは中々良い男だし、前回の一件で成長したから、これから更に良い男になるだろう」

良い男に惚れるのは、女として生まれたからには自然な事・・・そしてアリスはそう意味では優良物件だ。既に伴侶は決まってしまったのだが、愛人でもエヴァは別に構わない。

「さて、本妻になったからといって、安心するなよ木乃香・・・あれ程の良い男だ。油断していれば私が独占してくれる」

この時、アリスは背筋が凍るような冷たさに襲われ、木乃香は何故か不機嫌になったのだが、エヴァがそれを知る由もなかった。

エヴァがクリムゾンに戻ってくる少し前、アリスは木乃香と二人でエヴァが麻帆良学園から持ってきていたダイオラマ魔法球の中に入っていた。

木乃香は本契約によって現われた新アーティファクトの練習に、アリスは残された切り札の特訓の為に。

「アリスさん、最後の切り札二つってなんなん?」

「・・・王家の魔力を使ったウェスペルタティア王国に伝わる究極魔法と、王者の定めを得たおかげで可能になった原初の・・・世界最古の魔法さ」

一つはウェスペルタティア王国の蔵書から見つけたもの、もう一つはアリアドネーの秘密図書館で見つけたもの。どちらも使えれば最終決戦においてアリスを父たちの領域まで押し上げてくれる切り札となる。

「この二つが使えれば・・・私は父さん達の領域に行ける」
「ほんならウチは、そんなアリスさんの隣で・・・一緒に戦える様に頑張らなアカンなぁ」

それから二人は少し離れた所でそれぞれの修行を始めた。
木乃香の修行している所は既に砂浜がマグマに変わっていたり、海が蒸発して霧になっていたり、海に電流が流れたり等々・・・凄いことになっていて、アリスの所は同じように焼け焦げたり、電流が流れたり、凍っていたり、砂浜が盛り上がったり凹んでいたり、エヴァが見たら二人とも怒られる事間違い無しという有様になっていた。

「なあアリスさん」
「ん？」
「これ・・・どないしよ」
「・・・素直に怒られる？」
「嫌やなぁ・・・」

結果として、木乃香はアーティファクトの能力を完全に把握出来た。
だが、アリスはもう暫く掛かるらしいので、様子を見に来たエヴァに怒られた後、もう暫く別荘に籠もって切り札を確実に使いこなし、極める事に集中する事になった。
アリスが別荘にいる間の事はエヴァが何とかしてくれるので、その辺の事は任せて、アリスは来てくれたペルシクムと月詠を相手に、修行を続ける。
決戦まで、もう残り時間は少ない。だからこそ、意地でも間に合わせる。夢を叶える為だけじゃない・・・木乃香を幸せにする為に、これ以上仲間を失わない為に・・・・・守るべきモノを、守る為に、今・・・アリスは父に追いつく。

九十八話　「未来の為に、最後の修行」（後書き）

次回はタカミチとクルトが合流！　そしてヘラスのテオドラ、メガロのリカード、アリアドネーのヘラスといったアリスの協力者達も集合して、遂に墓守人の宮殿へ向かいます。

九十九話　「最終決戦に向けて、集まる世界」（前書き）

今回、書いてて楽しかったです。

九十九話　「最終決戦に向けて、集まる世界」

「最終決戦に向けて、集まる世界」

別荘内、そこでアリスとペルシクム、月詠の三人は全員膝を着いて荒い息を吐きながら先ほどまでしていた模擬戦の事を思い出していた。

「か、完成・・・だ・・・・・・遂に、完成した」

「ルナティーク全てが掻き消されましたから・・・間違いなく」

「周辺も凄いなぁ・・・またエヴァはんに怒られるえ～」

砂浜の所々がマグマに変わっていたり、凍っていたり、鋭い刃のようなもので切られた跡が残っていたり、エヴァに怒られるのはこれで何度目になるのだろうか。

「だが、これで最終決戦には間に合った・・・・・・父さん達の領域に、手が届いた」

オッドアイに変わっていた目を元の色に戻したアリスはペルシクムと月詠と共にハウスの中に入ると、ベッドに倒れこんでそのまま爆睡してしまう。

月詠も同じようにアリスを抱き枕に眠ってしまい、ペルシクムは二人に毛布を掛けると自身も休眠モードに移行する。

そのまま朝まで眠っていた三人は、朝になると目を覚まし、疲れも癒えたので別荘から出た。そして三人を待っていたのは、新オス

ティアからの緊急通信だった。

「タカミチから？」

「ああ、今はブリッジで木乃香が応対している。既に全員揃っているから、お前らも早く来い」

エヴァに急かされながらもブリッジに行くと、通信にはタカミチが映っていた。顔の所々に傷があるが、元気そうだ。

『やあ、アリス君・・・先ほどネギ君にも通信はしたんだけど、少し不味い事態になったよ』

「不味い事態・・・？　まさか！？」

『そうです２０年前の再現が始まろうとしています』

「クルト・ゲーデル！　貴様、何故タカミチと・・・」

『すまないアリス君、事は急を要する事態だからね・・・世界の危機だからアリアドネー、ヘラス、メガロメセンブリア全艦隊が墓守人の宮殿に向かっているんだ』

凄いスケールの戦いになりそうだが・・・正直、その艦隊の何パーセントが戦力になるのか・・・・・・殆どの艦隊は歯が立たない筈だ。

「タカミチ・・・確かお前も魔法世界出身だったな」

『うん？　そうだね・・・でも大丈夫、僕は純粋な魔法世界人じゃないからリライトでは消えない。攻撃も通用するよ』

「そっか・・・クルト・ゲーデル、貴様は？」

『私も純粋な魔法世界人ではありませんから』

「なら問題ないか・・・・・・」

どちらかでも純粋な魔法世界人だったらアリスが入手したマスタ

ーキーを渡しても良かったが、問題は無さそうだ。

「マスターキーを一本手に入れた・・・これは私が使うが、問題無いな？」

『流石だね・・・マスターキーを手に入れてるなんて・・・・・・さしずめ』

「ああ、王家の魔力の補充、さ・・・」

マスターキーから魔力の吸い上げる、それだけでアリスの保有する王家の魔力は格段に上がるのだ。

マスターキー、造物主の掟に入っている魔力は造物主の魔力・・・・・つまりウェスペルタティア王国の先祖の魔力だ。それ即ち王家の魔力、アリスの保有する王家の魔力はアリカと比べれば少ない、だからこれで増やす事にした。

「マスターキーは使えなくなるけど、構わないね？」

『そうですね、こちらはこちらで何とかします』

『頼んだよアリス君・・・ネギ君にも期待はしてるけど、最終的に魔法世界を救ってくれると信じるのは君だ・・・』

「ああ、完全なる世界だろうと、メガロメセンブリアだろうと、ネギだろうと・・・私の邪魔はさせない」

『私のいる前でよく言えますね・・・』

通信を切ってアリスは全員を見渡す。もうすぐ始まる作戦の説明をするのだ。

「現在、墓守人の宮殿を始めとして、廃都オスティア全体が浮上している。魔力の本流の影響でね・・・・・・私たちは墓守人の宮殿の、超大規模積層魔法障壁の頂点・・・この盛り上がっている所から中に突入する」

画面に映した墓守人の宮殿の全体図と、積層魔法障壁の図を映し出し、天辺の盛り上がっている所に何故か持っていたレーザーポインターを中てる。

「突入した後は全速力でクリムゾンを墓守人の宮殿の最下層まで移動させて、そこから私達は宮殿内部に侵入、一気に上を目指す」

恐らくは途中で幹部に会うだろうが、それは倒せば良い。最上階には恐らくフェイトとアスナ、そしてグレートグランドマスターキーがある。

アスナの救出はネギ達に任せるが、グレートグランドマスターキーはアリス達が奪取しなければならない。

「作戦は以上！　墓守人の宮殿に突入して最速で最上階を目指し、グレートグランドマスターキーを奪取！　後に完全なる世界を確実に滅ぼす!!　誰一人欠ける事なく、絶対に勝つ!!　覚悟は良いか!!?」

『おう!!!』

「二代目・紅き翼・・・出撃だ!!!!」

クリムゾン、グレートパル様号、フライマンタが先行して、後続でヘラス、アリアドネー、メガロメセンブリアの三国連合艦隊が墓守人の宮殿に向かう。

その途中、墓守人の宮殿が肉眼でも見える位になった時だった。墓守人の宮殿から億を超える数の影人形が飛んできたのだ。

「やはり来たか・・・・・・月詠!!」

「うふふ～・・・シルヴィアはんを消した木偶があんなにぎょうさ

ん・・・切ってええんどすかぁ？」
「ああ、“ひな”の使用を許可する・・・全てを切り殺して来い！！」
「アハハハハ！　ほな、行ってきます～」

月詠はブリッジを出ると船体の上に移動して、途中で寄った自室から持って来た黒い刀を鞘から抜いた。同時に懐から仮契約カードを取り出し、今まで使う事の無かったアーティファクトを取り出す。

「アデアット・・・聖魔の敵対・・・・・・小太刀一刀モード」

現われた純白の刀身に刃紋と刃が漆黒になった小太刀を左手に、黒い日本刀・・・“妖刀・ひな”を右手に握り、月詠の全身を黒い気が包む。
更に瞳が白黒逆転して、邪悪な笑みを浮かべながら狂気に満ちた笑い声を上げながら瞬動、虚空瞬動で近づいてくる影人形の群れに突っ込んだ。

「アハハハ、アハハハハハハハハハハ！！！！！！　ええ！　ええよ！！　これを待っとったんどす～、ウチは血湧き肉踊る殺戮を・・・こんな楽しい殺戮を待っとったんやぁ！！！！！！」

影人形に突っ込んだ瞬間、月詠の周囲にいた影人形がバラバラになって消える。

「サア、ウチヲ楽シマセテヤァ～！！！」

両手の刀だけではない、月詠の蹴りも刃となって影人形を切り刻み、黒い気までもが凶器となって襲い掛かる。
近づいただけで切り裂かれる月詠は、正に魔の権化と言える姿を

していた。見る者全てに恐怖と嫌悪感を与える魔のような空気が、映像越しでもはっきりと伝わってくる。

「クリムゾン発進！　一気に敵の中心を抜ける！　偽装解除！　全砲門起動、フルオートで撃ちまくれ！！」

「了解でさぁ！！　いっくぜぇえええええええ！！！！！」

クリムゾンの船体に変化が起きた。今までの認識阻害が全て消え、その船体に装備されている武装全てが露わになって、近づいてきた影人形を撃ち殺していく。

グレートパル様号とフライマンタもクリムゾンに続き、雲を抜けて遂に墓守人の宮殿の、積層魔法障壁の近くまで来た。

「デカブツまで近づいてきた・・・っと、綾瀬たちが片付けるのか、なら問題ないな・・・後は」

『妾たちに任せておけ！　アリスは敵陣に突っ込む事だけを考えればよい！』

『２０年ぶりの大戦！　燃えるぜぇ！！』

『アリアドネー艦隊の底力、見せてあげるわ』

テオドラ、リカード、セラスから通信が開き、同時に全艦隊から精霊砲が魔法障壁の隙間を狙って発射された。

魔法障壁の隙間付近にいた影人形の大半は消滅、マスターキーを持つモノのみが生き残っているが、それは問題ない。

「よし！　突撃！！！」

「いよっしゃあああああああああああ！！！！！！！」

クリムゾンが全リミッターを外してエンジンの限界ギリギリまでスピードを出した。

遅れてグレートパル様号とフライマンタも続き、突入！　と思ったとき、巨大影人形が二体現われた。

「アリス様！　こいつぁ！」
「慌てるな・・・そうだろう？　月詠」

巨大影人形の口から炎が吐き出されようとしたその時、巨大な斬撃が二体纏めて切り裂き、首を落とした。

『アハハハハハハハハハ！！！！！！！！』

首を落としただけでは満足しないのか、胴体、四肢、翼、全てを笑いながら切り刻む月詠、満足したらすぐにクリムゾンの船体に掴まり、用意は整った。

「行け！！」
「おおおおおお！！！」

クレイの咆哮と共にクリムゾンは障壁の隙間に入った。
後ろにはグレートパル様号もフライマンタもいる。前方には墓守人の宮殿が見える。後は一気に急下降するだけだ。

「っ！」

嫌な気配を感じたアリスは影の転移魔法で月詠の影から出ると、多重高速詠唱で魔法を放つ。

「紅き焔！　白き雷！！」

飛んできた黒い石の杭、これは墓守人の宮殿にあるという古代の

迎撃兵器である針の山だ。

「クレイ！　スピードを落とすな！　一気に墓守人の宮殿の最下層に突っ込め！」

『了解！』

大量の黒い杭が飛んでくる中、クリムゾンとグレートパル様号、フライマンタは全速力で最下層まで飛び、そのまま船体を建物に突撃させた。

遂に、完全なる世界との、魔法世界の命運を左右する決戦が始まる。最初にアリス達の前に現れる敵は誰か・・・・・それは最下層で、突っ込んできた三隻の船を眺めながら、無表情を貫いている麻帆良学園の制服を着た少女の影が物語っている。

九十九話　「最終決戦に向けて、集まる世界」（後書き）

次回は遂に、遂に百話達成！！　な、長かったぁ……。

百話　「現われた人形遣い、さよの本気」（前書き）

百話キタァアアアアア！！
ザジのことはネギたちに丸投げ！
一気にデュナミス戦に行きます。

百話　「現われた人形遣い、さよの本気」

英雄と女王の子

百話

「現われた人形遣い、さよの本気」

墓守人の宮殿内部に入った。

今いる地点は最下層になるので、ここから上へ向かい、儀式の準備をしているであろうフェイトの所まで行くだけだ。

だが、アリス達とネギ達の前に、一人の少女が立ちふさがる。その少女は麻帆良学園の制服を着ていて、褐色の肌をしている・・・・・その少女は。

「ザジ・レイニーデイ・・・いや、違うな」

見た目は３－Ａの生徒の一人、ザジ・レイニーデイだが・・・内包されている魔力、雰囲気、気配、何もかもが違った。

「こんにちはアリス先生、ネギ先生・・・・・・」

「完全なる世界の人間に、貴様の姿は見たことが無い・・・・・・・何のつもりだ？」

「あなた方を、止めに来たポヨ」

「ふん、私達を止めに来ただと？　小娘が・・・大きく出たな。だがそれはぼーや達だけにしておけ、こっちはこっちでやる事が山ほどあるのでな」

真名、刹那、楓がザジに武器を突きつけた瞬間、二代目・紅き翼全員瞬動に入り、ザジの事を全てネギ達に押し付けて先に進んだ。

折角、囮として来てもらったのだから、ザジの相手くらいはして貰わねばならない。その間にアリス達は完全なる世界を倒し、計画を完了させる。

「そして・・・ここで出で来るか・・・デュナミス」
「アリス・スプリングフィールド・・・二代目・紅き翼達よ・・・・・仲間一人失って尚、我らに挑むか」
「ああ、此処で貴様等を滅ぼして・・・・・・世界を救う！」
「無駄な足掻きを・・・・・・」

“姫”を抜こうとしたアリスだったが、さよがアリスの前に出た。

「さよ・・・？」
「この人の相手は・・・私にやらせてください」
「・・・わかった」

既にアーティファクトを展開して、白い死装束いるさよを見て、アリスは肩を竦めた。珍しくさよがキレているのが、見ただけでわかる。

「ふん・・・雑魚が我の相手か」
「あの～・・・せめてその悪趣味な仮面、取ったら如何です？」
「ふ・・・取って見せろ」
「では～・・・・・・」

突如、デュナミスの後ろに現われたさよが仮面を取った。仮面の下からは褐色肌の、何気に美形の男の顔が出てきて、それがデュナミスの顔なのだろう。

「馬鹿な！？　いつの間に！！　・・・む？」

後ろにさよが移動していたのかと思ったら、アリスの前に立ったままのさよも確かにいる。ではデュナミスの後ろにいるさよは何なのか・・・。

「私のアーティファクト、神々の神器の一つ・・・八咫鏡の能力、今あなたの後ろにいる私は」

「ドッペルゲンガーですよ～」

「何と・・・貴様、死霊術師（ネクロマンサー）か！！」

ニコリと微笑んださよは、右手の草薙の剣を振り、後ろに冥府の門を展開させた。

「神々の神器・・・死霊術師（ネクロマンサー）にのみ許されたグランドピースのアーティファクト、それをこんな小娘が・・・・・・」

「あの～、私はもう６０歳過ぎてまして・・・小娘っていう年齢でもないんですよ～」

「６０過ぎ・・・人間では年増というやつか」

「・・・・・・」

さよの米神に小さく青筋が浮いた。何気に気にしていたらしい。

「開け・・・冥府の門」

扉が開いた。その扉から大量の怨霊が現われ、更に魔法世界中にいる２０年前の大戦で死んだ者の彷徨える魂すらも呼び寄せ、さよの周囲を霊たちが包囲した。

「そうですか・・・２０年前の大戦で死んでしまったんですねぇ・・・・・ほら、あちらにいらっしゃる方は２０年前の大戦・・・あ

なた方が死んだ原因を作った組織の人です・・・食べちゃっても良いですよ」

その瞬間、大量の怨霊と化した霊魂がデュナミスに襲い掛かる。
デュナミスは自身の影から飛ばした影の槍で霊魂を貫こうとしたのだが、霊魂に現世のモノが触れる事はできない。
霊魂を透き通った槍はそのままさよに向かうが、さよは草薙の剣を使って槍を全て弾き、霊魂はデュナミスに喰らい付こうとさよの魔力の吸い上げて現世のモノに触れる事が出来るようにした。

「グゥッ！」

回避したデュナミスだが、それを怨霊達が追いかけ、後ろに瞬動で移動してきたさよが草薙の剣でデュナミスに切りかかった。

「甘い！」

デュナミスの影から現われた影の魔物・・・影人形が怨霊を飲み込み、さよの腹部に体当たりした。
追い討ちでカゲタロウも使った千の影槍でさよを串刺しにしようとしたのだが、千の影槍は八咫鏡によって反射され、全てデュナミスに返って来る。

「ふん」

自身に突き刺さる前に消して、千の影槍を反射させたさよを睨んだ。
さよは壁に激突した影響で頭から血を流しているが、特に重症という訳ではなさそうだ。それどころか、草薙の剣を構え、首に掛けていた八尺瓊勾玉に魔力を流している。

「デュナミスさん、神々の神器の能力って知ってますか？」
「・・・知らん」
「草薙の剣は破邪と破魔の剣であり冥府の門を開く鍵であるという矛盾の剣、八咫鏡は自身の幻影をドッペルゲンガーとして実体を持たせたり、敵の魔法を取り込んで反射させたりします。では・・・八尺瓊勾玉は？」
「知らん！」

黒い球体がさよに襲い掛かった。だが・・・その球体はさよに直撃する前に薄れ、消滅してしまった。

「何っ！？」
「日本の三種の神器では鏡は陰とされ・・・玉は陽、太陽を意味します。光は浄化を表し、浄化とは穢れを祓うという意味です」

さよの身体を白い・・・穢れ無き純白の光が包んだ。

「八尺瓊勾玉の能力・・・それは術者の身体を浄化の光で包み、闇や影といった陰に属するモノを触れるだけで浄化する・・・・・・魔を破るのではなく、魔を浄化して祓う、聖なる輝きです」

勿論、この光はさよが操る死霊すら触れるだけで浄化してしまうが、この状態でなければ使えない草薙の剣の奥義が存在している。

「さあ、苦しみから解放される時間ですよ・・・集まりなさい、我が剣に、我が鏡に、我が玉に」

怨霊となっていた筈の死霊は穢れを祓われ、憎しみと憎悪の表情を浮かべていた霊魂全て、安らかな顔となり、さよに集まった。

「させるかぁ！！」

再び千の影槍と黒い球体、影の魔物を出してさよに向け射出したのだが、当たる前にやはり消滅する。

「ならば！！」

デュナミスは自身の手で殺してくれると魔力で強化した手刀でさよの首を落とそうとしたが・・・。

「斬魔・浄霊の太刀！！！」

デュナミスの腕は放たれた光によって消滅し、さよの斬魔・浄霊の太刀の斬撃がデュナミスの左の腰から右肩に掛けて一刀両断に切り裂いた。

だが、さよのこの奥義は一度放てば浄化の光が消えるという弱点がある。それを見抜いたデュナミスの左手がさよの心臓を貫こうとしたが、さよもそれに気付いて体をずらし、結果さよの右胸が貫かれてしまった。

「ガァッ・・・アア・・・・・・」

「グプッ・・・カハッ！」

デュナミスとさよ、二人が倒れ、デュナミスからは血は流れなかったが、さよの右胸からは夥しい量の血が溢れた。

「さよ！」

「さよちゃん！」

木乃香がすぐに駆けつけ、さよの右胸に手を当てると治癒魔法を行う。
戦闘面で強くなった木乃香だが、治療魔法も欠かさず鍛錬してきたので、その治療魔法の腕は超一流の域にいる。
そんな木乃香の治療によってさよの右胸の出血は止まり、貫通していた肺も修復された。傷もすぐに塞がるだろう。

「デュナミス様！！」

さよの治療を行っていると、デュナミスを呼ぶ少女の声が聞こえた。
見れば部屋の奥から調、暦、焔、環の四人が走り、デュナミスに駆け寄ろうとしていたのだが、その傍にはアリスたちが居て近づけない。
四人ともアーティファクトを出そうとしたが、その後ろに回りこんだ茶々丸、ペルシクム、エヴァ、アキラの四人に取り押さえられ、カードも没収されてしまった。

「グッ・・・見事だ・・・死霊術師（ネクロマンサー）、まさか、格下に負けるとは・・・な」
「さよがお前に勝ったのは、アーティファクトの効果がお前の天敵だったからだ・・・もっとも、それもさよの実力だったという訳だが」
「厳しいな、闇の福音・・・」

デュナミスは体内に浄化の光が入り込んでいる為、もう長くはこの世に留まれない。少しずつだが身体が消え始めているのを見る限り、もうすぐ消えるだろう。

「ふん、アリス・スプリングフィールド・・・墓所の主には、気を

つける事だ・・・・・・彼奴め、貴様を見てから、何を考えているのか、判らんからな」

「・・・・・・墓所の主の正体、教えろ」

「ククク・・・教えては面白くないだろう？　精々、足掻くのだな・・・この世界の、終わりまで」

もう顔しか残っていないデュナミスは、最後に涙を流しながら自分を見る調たちの方に視線を向けた。

「あの子らは・・・生かしてやってくれ、戦災孤児をだった彼女たちを、拾っただけだから、な・・・・・・・」

「気が向けば、な・・・・・・」

「ハッ・・・敵には無慈悲な男だ・・・・・・・さらばだ英雄の、いや・・・黄昏の後継者よ」

完全に頭も消え去ったデュナミス

百話　「現われた人形遣い、さよの本気」（後書き）

デュナミス退場、原作ではネギがトドメを刺さなかった為に復活してしまいましたが、こちらでは消えて頂きました。

さよの実力はデュナミスに及びませんが、勝てたのは単にアーティファクトの能力によるところが大きいです。

百一話　「アーウェルンクスシリーズ、アキラの戦い」（前書き）

出ました偽フェイト！　今回は分断され、アキラの戦いがメインになります。

百一話　「アーウェルンクスシリーズ、アキラの戦い」

英雄と女王の子

百一話

「アーウェルンクスシリーズ、アキラの戦い」

デュナミスが消滅し、残された調、暦、焔、環の四人は拘束され、エヴァの影から取り出した別荘の中に入れた。

その後、別荘は再びエヴァの影に戻し、一同は先を進もうとしたその時だった。アリス達に向かった炎と雷と氷が襲い掛かってきたのだ。

「４番目（クウァルトゥム）、火のアーウェルンクスを拝命」

「５番目（クウィントゥム）、風のアーウェルンクスを拝命」

「６番目（セクストゥム）、水のアーウェルンクスを拝命」

フェイトと同じ顔をした三人、少年形態の火と風、少女形態の水、それぞれがアリス達の前に降り立つ。

「アーウェルンクスシリーズ・・・三番目（テルティウム）以外に完成していたのか」

「どうする？　貴様は早くフェイトとやらの所に行かなければならん・・・さよは先ほどの戦闘でのダメージが残っているから戦えんぞ」

ならば、やる事は一つ・・・。

「アキラ、火の相手を頼む」

「わかった」

「月詠は風の相手を」
「了解や～」
「エヴァ、水の相手だ。格の違いを見せてやれ」
「ふん、任せておけ・・・茶々丸とチャチャゼロはさよを守れ」
「はい」
「オウヨ」

残ったアリスと木乃香、ペルシクムは一気に上を目指す。

「行くぞ！」

アリス達三人が瞬動で去ったのを追おうとしたアーウェルンクスシリーズの三人だったが、アキラ、月詠、エヴァに邪魔をされて不愉快という表情を向けた。

「どこに行こうとしたのかな？」
「ウチを置いてったらあかんえ～？」
「言っただろう？　格の違いを見せてやるよ人形」

アキラ達がカードを取り出し、アーティファクトに変化させると、ようやくアーウェルンクスシリーズ三人も戦闘態勢に入った。

「あなたたちでは僕らを止められないよ」
「格の違いを見せ付けるのは・・・果たしてどちらかな？」
「私たちに、嬲り殺される不幸を呪いなさい」

アキラは４番目（クウァルトゥム）に、月詠は　５番目（クウィントゥム）に、エヴァは６番目（セクストゥム）に向かって瞬動に入った。

アキラはウンディーネの涙の能力で作り上げた愛用の水の太刀を構え、両手から炎を出している４番目（クウァルトゥム）に切りかかった。
だが、水の太刀は４番目（クウァルトゥム）が腕で防御した途端に腕を切る事なく蒸発して、アキラの腹部に蹴りが入った。

「グフッ！　はあ！」

絶えずに出現させた水の刃は次々と蒸発して４番目（クウァルトゥム）を霧が包んだ。

「高速詠唱！　凍てつく氷柩！！」

４番目（クウァルトゥム）の周囲にある水蒸気が凍り、普通の凍てつく氷柩よりも強力な魔法になった。強固な氷は分厚さ、密度もエヴァ並のものになり、たとえ４番目（クウァルトゥム）と言えど簡単に抜け出すなど・・・・・。

「・・・うそ」

内側から砕かれた。両手どころか、全身から炎を出す４番目（クウァルトゥム）はパワーがフェイトの比ではなかった。

「今度はこっちからいくよ！！」

瞬動でアキラの後ろに回った４番目（クウァルトゥム）は炎を纏った拳を背中に叩き込み、後頭部に回し蹴りを入れる。
強烈な拳と蹴りを背中と後頭部に入れられたアキラは血を吐きながら、飛びそうな意識を何とか保たせようとするのだが、後頭部への一撃は予想以上に足に来たらしく、その場で膝を着いて立ち上がれなくなってしまった。

「君程度の実力で僕に勝とうなんて、随分と甘くみられたのものだ

よ・・・格の違いってのが解った？」
「うっ・・・あ・・・・・・・」

アキラは朦朧とする意識の中で、周囲の水分を集めだした。
４番目（クウァルトゥム）は炎を操るため、周囲の水分の流れには気付かない。それが命取りになるとは思いもしなかっただろう。

「っ！　ネイ・ネル・プート・ネプチューン！！　契約に従い　我に従え　水の皇王　来たれ　始祖の大地を覆いし原始の水　万物全てを飲み込み　流れろ　生命の源！！！」

アキラの詠唱を聞いた４番目（クウァルトゥム）は魔法を使わせる前にトドメを刺そうと瞬動に入り、右拳に出せる全ての炎を集めて心臓を貫こうとしたが、アキラは此処で切り札を切った。

「ウンディーネの涙！　水壁のラビリンスウォール！！」

水の壁がアキラと４番目（クウァルトゥム）の間に現われ、更にそれが迷路の様な形になる。
小細工だと４番目（クウァルトゥム）は水の壁を蒸発させようとしたが、そこでアキラが魔法の詠唱をしていた事を思い出した。

「遅い！　始まりの海！！」

緑色の海水が４番目（クウァルトゥム）に直撃し、水壁のラビリンスウォール全域に満ちた。
アキラは閉じ込める為に迷路の上を更に水の天井で塞ぎ、高速詠唱で放ったこおる大地で迷路全体を氷に包んだ。
氷に包まれた迷路、氷の中は凍らずに緑色の海水が満ちている。
この緑色の海水は地球創世時に、まだ熱かった大地に降った雨が海

になったとされる水だ。水中はとてもではないが人の生き物の生息出来る環境ではなく、二酸化炭素を大量に含んでいる。

「さあ、ウンディーネの涙・・・最後の仕事、水圧増大！」

始まりの海の水の水圧をウンディーネの涙で倍増させる。圧力をどんどん高くしていき、深海レベルの水圧になった所で４番目（クウァルトゥム）のいる辺りに血が滲み出てきた。

「終わった・・・かな？」

これだけの水圧だ。内蔵は間違いなく潰れているし、骨も砕けている可能性はある。そもそも二酸化炭素に満ちた海水で呼吸など出来る筈も無い。

水を蒸発させてもすぐに水に満ちて、蒸発した水も逃げ場が無いからすぐに水に戻る。この無限の水中牢獄で逃げ出せる者は魔法世界広しと言えど、ラカンなどのバグキャラくらいだろう。

「そう思っていた時期も私にはありました・・・・・」

水の牢獄、氷の天井をブチ破って出てきた４番目（クウァルトゥム）を見て黄昏てしまった。口からは大量の血が流れ、耳や眼球からも流血しているが、４番目（クウァルトゥム）は間違いなく生きていた。

「調子に、乗るなよ小娘が！！」

全身から再び炎を吹き出した４番目（クウァルトゥム）は右手中指に填めた指輪をアキラに向けた。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　契約により我に

従え　炎の精霊　集い来たりて・・・」

詠唱・・・魔法が来る。それを迎え撃つ為にアキラは右手薬指に填めた指輪を同じように４番目（クウァルトゥム）に向けた。

「高速詠唱！　破滅の津波！！」

「紅蓮蜂！！」

アキラが放った破滅の津波による巨大な津波と炎の蜂がぶつかり、激しい衝撃波と水蒸気を生んだ。

アキラはすぐに動こうと瞬動に入り、虚空瞬動も駆使して４番目（クウァルトゥム）に接近し、水の太刀で切り裂こうとしたのだが・・・。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　九つの鍵を開きて　レーギャルンの筐より出て来たれ　燃え盛る炎の神剣！！」

左腕が埋まるように持った炎の大剣に抑えられてしまい、一瞬でアキラの水の太刀の全てが蒸発してしまった。

「死ね・・・」

「っ！」

打つ手無し、アキラは迫り来る炎の大剣を視界に納め、己が死を予感するのだった。

百一話　「アーウェルンクスシリーズ、アキラの戦い」（後書き）

アーウェルンクスシリーズの名前、メンドー……。
次回は月詠と風の戦いです。

百二話　「アキラの結末、月詠対風のアーウェルンクス」（前書き）

アキラの結末、成長を見守って下さい。

百二話　「アキラの結末、月詠対風のアーウェルンクス」

英雄と女王の子

百二話

「アキラの結末、月詠対風のアーウェルンクス」

迫り来る炎の大剣、目の前に来たソレを眺めながら、アキラは走馬灯の様に今までの人生の出来事が脳裏を駆け巡った。

物心付いた頃からの、両親の事や麻帆良学園に入学してからの事、アリスと出会った時の事、修行の日々や魔法世界に来てからの事など・・・・・・本当に沢山の事が一瞬で思い返された。

「もう・・・満足、かな」

まだ15年しか生きていないけど、良い人生だったと思う。悪くない、友と一緒に笑い合ったり、遊んだり、ライバルと恋の駆け引きをしたり、強くなる為に修行したり、本当に充分な人生だった。

「（・・・本当に？）」

本当に・・・良い人生だった、か？　本当に自分はこれで満足しているのか？　アリスと結ばれたのは木乃香だったが、自分は気持ちを告げたか？　一番やらなければと思っていた事を、まだしていないではないか。

「っ！！」

そう思ったら、勝手に身体が動いていた。

最後の戦いまで温存しておこうと決めていた戦いの葬送曲を発動して、全身の筋肉が悲鳴を上げるのも気にしないで無理な体勢から虚空瞬動に入った。

身体の所々から血が噴出し、肉離れを起こす所もあるが、アキラは水の太刀を再び作り出し、限界を超えた量・・・１０ｔの水を圧縮する。

「水圧・・・圧縮っ！！」

驚愕、そういう目を向ける４番目（クウァルトゥム）に向かって最後の虚空瞬動に入る。

両足の骨が砕けた。だが、それすら気にならなくなる程の気合・・・一度、ラカンに本気を出せば気合はラカン本人にも並ぶとまで言われた気合を込めて、吼えた。

「あああああああああああああああっ！！！！！！！！！！！！」

水の太刀は、若干蒸発したが、消える事無く４番目（クウァルトゥム）の心臓を貫く。

「全！　開！　放ぉおおおおおおおおおおおっ！！！！！！！！！！」

４番目（クウァルトゥム）の体内から水の太刀に圧縮されていた１０ｔの水が一気に開放され、強力な水圧が体内から４番目（クウァルトゥム）の全身を襲い、その身体をバラバラにする。

衝撃が大きかった所為か、アキラも押し飛ばされてしまい、壁に激突してしまったが、生きている。アキラは・・・勝ったのだ。

「か、った・・・・・・もう、無理」

戦いの葬送曲の効果が切れ、全身を死ぬほどの筋肉痛が襲い、骨

が砕けた両足からは絶え間無く激痛を訴えて来るが、満足だ。
これ以上、意識を保てなくなり、アキラは気を失うのだが、その表情は満ち足りていた。起きた時には全てが終わって、アリスの夢に向かい、最後の戦いの前になっている事を、願って・・・・・・。

月詠と5番目（クウィントゥム）は睨み合いが続いていた。
方や月詠はアーティファクトである聖魔の敵対の小太刀一刀モードと妖刀ひなを構え、方や5番目（クウィントゥム）は全身から雷を放ち、足元には突風が吹いている。

「君は、3番目（テルティウム）がスカウトしたいと思っていた人材だと聞きます」
「ん～？　フェイトはんに付いて行ってもえかったんやけどなぁ・・・ウチ的にはアリスはんの方が面白そうだったんどす～」
「そう」

それに・・・、今はそれだけじゃない。
アリス達と一緒に過ごすようになってから、月詠は今まで無かった大切なモノを得た。姉と呼べる人が、出来たのだ。

「アリスはんもシルヴィアはんも、お嬢様も・・・みんなウチの家族や、家族にしてくれたんや・・・、切ることしか知らんかったウチに、温かい心をくれたんや・・・・・・」

消えたシルヴィアを取り戻せるのは、またあの笑顔を見れる様にしてくれるのは、フェイトでもネギでもない。

「だから、ウチはアリスはんに協力するえ・・・またシルヴィアはんに会いたい・・・まだウチ、シルヴィアはんの事、姉様って、面と向かって言ってないんや！！」

月詠が黒い気を纏った。更に妖刀ひなも黒いオーラを発し、月詠の瞳は白黒逆転する。

「アンタヲ、ココデ切ル。ソレガ、ウチノ役目ヤ！」

月詠が黒い軌跡を残しながら瞬動に入った。

５番目（クウィントゥム）もネギの雷速瞬動並の速さで瞬動に入り、小太刀と拳がぶつかって激しい電流を引き起こす。

刀を通じて電流が全身に流れている筈なのに、月詠はまるでダメージを負っていないと言わんばかりに妖刀ひなを振り、５番目（クウィントゥム）の左腕を切り落とした。

「斬魔剣・弐の太刀・・・・・・神鳴流ニ切レヘンモノハアリマヘンエ」

「厄介ですね」

障壁だろうが、全身を覆う雷だろうが関係なく本体を切る。斬魔剣・弐の太刀は５番目（クウィントゥム）にとって天敵としか言えない技だろう。

「コレダケヤアラヘンエ・・・ニト～レンゲキ・・・斬空閃・弐の太刀！！」

離れながら放った斬空閃・弐の太刀が５番目（クウィントゥム）の身体を切り刻む。

障壁も雷も防御にならないと判断した５番目（クウィントゥム）は斬撃全てを回避しながら、遠距離戦を挑む事にする。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　契約に従い　我に従え　雷の帝王　来たれ　殲滅の雷　轟く轟雷　奔れよ　大地を焼きし　塵と雷雲　罪人達に　裁きの雷を」

5番目(クウィントゥム)の唱えた詠唱には聞き覚えがあった。
それはアリスも偶に使う魔法で、雷属性の上位古代語魔法の一つ、広域殲滅型雷系最強魔法の千の雷とは違い、単体殲滅型雷系最強魔法の・・・・・・。

「轟く雷帝」

月詠の頭上に落ちてきた極大の雷だったが、月詠は妖刀ひなを避雷針にして轟く雷帝の電気エネルギーを取り込んだ。

「オ返シドス～・・・黒刀雷鳴剣・弐の太刀!!」

ひなから放たれた黒い雷が刃となって5番目(クウィントゥム)を切り裂こうとするが、瞬動でかわされる。
しかし、その先には既に月詠が居て、ひなと聖魔の逆転を構えていた。

「一瞬千激・弐刀黒刀五月雨斬り!!」

放たれた二刀からの千を超える斬撃が四方八方から5番目(クウィントゥム)を切り刻む、回避は不可能、死角など存在しない斬撃の嵐が襲い掛かり、右腕を落とされ、両足も断たれた。身体も余す所なく切られ、出血が止まらない。
達磨状態となった5番目(クウィントゥム)だったが、ピアスにしてある予備の発動体によって何とか浮遊しているが、これ以上の手は・・・あった。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　イングラシルの恩寵を以って来れ貫くもの　轟き渡る(グングナール)　雷の神槍!!」

放ったのは巨大な雷の槍、ネギの使う巨神ころしとは大きさも形も、雷と魔力の密度も何もかもが違う正に神の槍、轟き渡る雷の神槍が月詠を貫こうとするのだが、月詠は聖魔の敵対を黒い刃紋の純白の刀身から白い刃紋の黒い刀身に変化させて黒い気を流した。

黒い気は聖魔の敵対に流された瞬間、邪気が祓われて白い気に変わり、月詠の身体を覆っていた気も黒から白になる。

「神鳴流奥義、斬魔剣・弐の太刀一閃！！」

大量の気を収束された一撃が轟き渡る雷の神槍を真っ二つに切り裂き、その向こうにいた5番目（クウィントゥム）を頭上から股下まで両断した。

「あんさん、フェイトはんと同程度の実力らしいなぁ～・・・でも、まだまだ実戦経験が少なすぎやえ。それが敗因どす」

笑顔で5番目（クウィントゥム）の亡骸を眺めながら、聖魔の敵対をカードに戻し、ひなを鞘に収めると、その場に倒れた。

「あ、あかんなぁ・・・全身に流れた電流・・・我慢しとったんやけど、もう動けへんわ～・・・・・・」

相当な量の電流が身体を流れたのだ、その影響が無い筈もなく、暫くは動けそうにもない。

意識こそ失っていないものの、完全なる世界との決戦における月詠の戦いは、ここで終わりらしい。

「後は・・・頼んますえ・・・・・・我が主君（アリス）」

満足出来る戦いを終えて、月詠は自分から眠った。戦いを終えたのだから、起きている理由も無いので、昼寝をする事にしたのだ。

起きる頃には、完全なる世界との戦いが終わっている事を祈って。

百二話　「アキラの結末、月詠対風のアーウェルンクス」（後書き）

月詠は実力的にはアリスと同等なので、アキラほど苦戦する事はありません。
次回はエヴァ対フェイト子です。同じ氷を操る者同士、如何に戦うのか、ご覧あれ！

百三話　「勝負にならない勝負」（前書き）

今回は短いです。
正直、実力差が大きすぎて長く出来ませんでした。

百三話　「勝負にならない勝負」

英雄と女王の子

百三話

「勝負にならない勝負」

相対する二人の少女、闇の福音こと最強の魔法使いエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルと、水のアーウェルンクスこと６番目（セクストゥム）は睨み合いから始まった。

６００年を誇る年齢と、人間では在り得ない実戦経験から来るエヴァの殺気と闘志、生まれたての６番目（セクストゥム）が殺気を放っても一瞬で呑まれてしまう。

「人形・・・先手を譲ってやろう。この私に一撃でも与えてみろ」

「甘く見ないでください。たとえ真祖の吸血鬼であろうと、元は人間・・・私に勝てると思っているその思い上がり、叩き潰してあげます」

「ふん、この私も随分と甘く見られたものだ・・・御託はいいから、来い」

エヴァのその言葉と同時に、エヴァは水の檻に飲み込まれた。更に水の檻は凍り、氷の檻へと変わってエヴァを閉じ込める。

氷の檻ごとエヴァの身体を砕いてしまおうと６番目（セクストゥム）は強化した拳を放ち、エヴァの身体ごと氷を砕いたのだが、砕かれたエヴァの身体は蝙蝠に変わり、いつの間にか６番目（セクストゥム）の腹部をエヴァの右手が貫いていた。

「がっ！　ああ！」

「戦法は良い。並の魔法使いであれば先の攻撃で死んでいただろうが・・・・・最強にして不死の吸血鬼である私には、無意味な攻撃だったな」

背中から貫いていた手を引き抜いて、エヴァは6番目(セクストゥム)を投げ飛ばした。手首を軽くスナップを利かせて捻るだけで6番目(セクストゥム)は面白いように飛んでいく。

「100年ほど前に日本にいたヘンテコじじぃから教わった体術・・・合気柔術というやつだ」

それから、星の吸血姫の能力で魔力を吸い上げ、その魔力を上乗せした魔法を放つ。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来たれ　深海の水　凍てつく氷塊　我を飲み込め　汝を閉じ込めろ　そは原始の氷水　南極の氷層!!」

6番目(セクストゥム)の身体が分厚い氷に包まれた。地球の南極の氷、その最下層の氷は原始の海が氷になったものだと言われている。

二酸化炭素が豊富な水が氷った分厚い氷、それが南極の表層という魔法だ。更に、その分厚さはエヴァの星の吸血姫の効果で膨大に膨れ上がった魔力により通常のソレを大きく超える厚さになっていた。

「ふん・・・」

パチンッ、とエヴァが指を鳴らすと、氷は砕け、中から6番目(セクストゥム)が息を乱しながら出てきた。

断罪の剣を右手に出して6番目(セクストゥム)の首筋に添えたエヴァは、胸を張

って己が力と存在を誇示する。

「どうだ人形？　これが最強の魔法使いの、闇の福音の力だ！　貴様のような生まれたての人形風情が勝てる道理は欠片も存在しないという事を思い知ったか！？」

「くっ・・・」

眼球に向けて飛ばしてきた氷の針はエヴァに触れる事なく障壁にぶつかって砕ける。６番目（セクストゥム）ではどうやってもエヴァには勝てない、触れられない。

「貴様、先ほどは面白い事を言っていたな・・・なんだ？　私が思い上がっているだと？　はたして今のこの状況は私の思い上がった力による結果ではないのか？　貴様は私に傷を負わせたか？　私は貴様に攻撃の一切が届かなかったか？」

「ぐっ！」

倒れる６番目（セクストゥム）の頭を踏みつけて、エヴァは問うた。

「解ったか？　貴様の様な人形風情が・・・この私に勝てると思っている事が思い上がりなんだよ」

そのまま頭を踏み潰さんとばかりに万力の様な力で頭を踏まれ、６番目（セクストゥム）が苦しみに呻く。

頭蓋骨がミシミシと嫌な音を立てて、眼球が飛び出そうになるほど目を見開いて、口からは声にならぬ声が洩れて手足が痙攣していた。

「つまらんな・・・・・本当につまらん。この程度の力でも抜け出せんのか・・・元々期待はしていなかったが、本当に飽いてくる

な」

断罪の剣を出していない左手に鉄扇を持ち、開くとパタパタと仰ぐ。

「くだらん・・・」

それが、６番目（セクストゥム）が聞いた最期の言葉だった。

グチャッ、という音が響き、エヴァの足元には血や脳漿が飛び散り、頭部を踏み砕かれた６番目（セクストゥム）の四肢は何度か痙攣して力尽きる。

「む・・・足が汚れたな。茶々丸、拭く物を出せ、汚いったらない」

「はい、マスター・・・手ぬぐいです」

茶々丸が何処から取り出したのか手ぬぐいを持って歩み寄り、手渡してきた。

渡されたエヴァは靴や足、頬にまで飛び散ってきた血を拭い、６番目（セクストゥム）の遺体を少しだけ眺めると、もう用は無いとばかりに背を向け、既にさよの所に運ばれているアキラと月詠の下へ歩いて行った。

「もうそろそろ墓守人の宮殿が揺れるな・・・・・・上でアリスの魔力が馬鹿みたいに膨れ上がっているのを感じる」

「はい・・・木乃香さんの魔力も同じく」

「ぼーやは・・・気にするだけ無駄か」

「はい」

ならば良し。エヴァはシルヴィアに教わった治癒魔法をアキラに施して、月詠が目を覚まして三人とも動ける様になったらアリス達を追う事にした。

「それにしてもアキラ・・・随分と強くなったではないか」
「そうかな・・・？」
「ああ、戦闘経験が無かったとは言え、人形共はお前よりも格上の実力者だ。それを殺してみせた・・・充分すぎるほどの成長だ」
「最後はほとんど我武者羅だったけどね・・・気合ってやつ」
「ラカンの理論だそれは」

だが、それがアキラを勝利に導いたのだから、気合というのも馬鹿にできない。

「アキラ、今度・・・私が直々に氷魔法を見てやろう・・・・・・前々から思っていたが、お前は伸び代が大きいからな。まだまだ強くなる」
「本当？　なら、お願いしようかな・・・」
「ああ、麻帆良でも指導はしてやったが・・・・・・それとは別だ。ぼーやという弟子がいなくなったからな、お前を弟子にしてやろう。この私が氷系魔法の全てを伝授してやる」

アキラとエヴァは氷の属性が同じだ。だから前々から呪文などは教えていたが、今度は弟子として徹底的に氷属性を鍛え上げてやろうと思った。
水属性もエヴァは氷ほどではないが出来るので、文字通り全てを叩き込もうと思っている。

「ああ、未来を楽しみにするというのは・・・良いものだな。６００年生きてきて、初めて未来というものが楽しみになった。感謝するぞ・・・・・・アリス」

アキラ達がようやく歩けるくらいに回復したので、アリス達の後を追った一同。

暫くしてネギ達がやって来たが、戦闘跡と、アーウェルンクスシリーズの惨たらしい死体を見て、青褪めるのだが、余談である。
ただ、死体を見たネギが・・・・・何かを決意して、その瞳に、何者かに対する敵意を宿しているのは確かだった。

百三話　「勝負にならない勝負」（後書き）

次回は遂に出てきます！　……墓所の主が。

百四話　「王族の末裔」（前書き）

墓所の主は私オリジナルの設定があります。
原作で詳しく出たら変えるかもしれませんが、今はこの設定です。

百四話　「王族の末裔」

英雄と女王の子

百四話

「王族の末裔」

エヴァ達にアーウェルンクスシリーズの相手を任せ、アリスと木乃香、ペルシクムの三人は墓守人の宮殿を昇っていた。

上を目指し、瞬動を繰り返しながら、途中でペルシクムにアーニャの捜索を任せて別れ、今はアリスと木乃香の二人だけだ。

「・・・ん？」

「あれは・・・」

通路の向こう側に人影が見えた。

全身を頭から被ったローブで身を包む小さな人影・・・完全なる世界の一人でそのような格好をしている者といえば、デュナミスと墓所の主しかいない。

「貴様は・・・墓所の主だな？」

「そうじゃ・・・我が末裔よ」

「っ！？」

フードを取ったその顔は・・・アスナやアリカによく似ている、いや・・・寧ろ二人が墓所の主に似ていると言った方が正しいのかもしれない。

「初めましてだな我が末裔・・・アリスと申したか？　我が名はア

マテル、主のご先祖様じゃ」
「あ、アマテル・・・・・・ウェスペルタティア王国初代女王・・・アマテル様」
「うむ、いかにも・・・・・・ふむ、良い目をしておる。妾が父より受け継いだ王家の魔力も、まあまあじゃな」

アスナやアリカ、アリスと同じオッドアイ、間違いなくウェスペルタティア王国王家の者の証だ。それもアマテルと言えば初代女王、現在のパートナー制度の基となった人物でもある。

「し、しかし・・・アマテル様と言えばずっと昔の人物・・・それが今、生きているなんて」
「エヴァちゃんみたいな不老不死いうんとは違うんやろか・・・？」
「ほう、そなたはアリスの伴侶か？　本契約をしている者特有の繋がりを感じるぞ」
「っ！　お、お初にお目に掛かります！　ウェスペルタティア王国前女王、アリカ・アナルキア・エンテオフュシアが第一子、アリス・スプリングフィールドに御座います！」
「あ、えっと・・・旧世界、関西呪術協会の長、近衛詠春が長女、近衛木乃香です！」

アリスと木乃香、二人そろってアマテルの前で傅いた。本契約の繋がりを感じ取れる者は、仮契約でもそうだが、契約の繋がりとは普通、感じ取れるものではない。

感じ取れるとしたらパートナー制度の基となった人物、アマテルくらいだろう。仮契約、本契約、これらを創ったのはアマテルだと言われているのだから。

「よい、表を上げろ。初代女王とは言え、今は完全なる世界の一人じゃ。主らが傅く必要もあるまいて」

「いえ、私は母からアマテル様のお話を子守唄に育てられてきました。ですから、そういう訳には・・・・・・」
「ほう？　妾の話を子守唄にしてか・・・・・・何とも気恥ずかしい話ではあるな」
「申し訳御座いません・・・」
「よい」

しかし、何故アマテルが生きてこの時代にいるのか、それが解らない。しかも見た目は幼女・・・明らかに年齢がおかしい。

「妾が何故生きているのかじゃな？　それは簡単じゃ・・・妾は造物主の血を色濃く引いている娘じゃ。我が子は血が薄まってしまったから人間より少し長い程度の寿命しかなかったが、妾は長命なのじゃよ」
「し、しかし・・・そのお姿は？」
「最近は良い物が売っておるな・・・なんじゃ？　年齢詐称薬じゃったか・・・幼子の姿になれるのは良いの」
「は、はあ・・・」

つまり、本来は大人の身体なのだが、今は年齢詐称薬で幼い姿になっているという事だ。

「してアリスよ・・・主は面白い事を考えておるらしいな？」
「・・・は」
「聞かせよ」
「は！　私はこの戦いの後、２０年前の大戦後に失われたウェスペルタティア王国を再興しようと思っております」
「ほほう・・・・・その瞳に王者の輝きを持っている事に気付いて興味を持っていたが、成る程な・・・・・しかし、この魔法世界の崩壊を如何する？」

「私の持つ王家の魔力を全て捧げ、グレートグランドマスターキーを使って・・・」
「我が父と同じ事をするということか」
造物主の娘としては無茶な真似をと思うかもしれない。しかし、アリスの意思が固いのは目を見れば解るし、何より。
「主は・・・王家の魔力を使いこなしておる様じゃな。その様子を見るに・・・・・・辿り着いたか？　王家の魔力の本当の使い方にして基礎であり、最後の境地であるアレに」
「はい・・・」
「そうか・・・主なら、可能かもしれんな・・・・・・この世界の未来を、主に託しても良いかの？」
それはアマテルから、造物主の娘であるアマテルから認められたという事だ。
それと同時に、ウェスペルたティア王国初代女王から直々に魔法世界の未来を託されたという事になる。
幻想とはいえ、先代の女王アリカ、ヘラス帝国第三皇女テオドラ、アリアドネー総長セラス、メガロメセンブリア元老院議員の一人でもあるリカードからもアリスは魔法世界の未来を託されているが、更にそこにアマテルも入ったという事になるのだ。
「アリス、主の腰にあるのは“姫”じゃな？　妾も現役女王時代は使っておったわ・・・・・・それを抜いて妾の前に出せ」
「は、はぁ・・・」
何をするつもりなのかは判らないが、アリスは言われた通りに“姫”を抜いてアマテルの前に差し出す。
するとアマテルは自身の右手親指を少し食い千切り、“姫”の刀

身に垂らしてそこに手を添えた。

「確りと“姫”を持っておれよ・・・ふっ！！」

「っ！？」

アマテルから彼女の血を媒介に“姫”を通じてアリスに王家の魔力が流れてきた。それもアリスやアリカのとは少し違う、薄まった魔力ではなく、造物主から受け継いだ濃い魔力が流れ込み、アリスの王家の魔力と混ざり合って最大量を強引に増やしてきた。

「多少の目眩は我慢せい、すぐに慣れる」

「こ、これ・・・は・・・・・・」

「妾の持つ王家の魔力・・・妾ほど濃い魔力であれば造物主の魔力と言っても過言ではないが・・・それをアリスに渡した・・・もっとも全部ではないがの、精々全体の２割程度じゃ」

全部アリスに渡したらアリスが廃人になると言われて冷や汗が出た。

アリスとアマテルでは王家の魔力の最大量も濃度も桁違いなのだ。二割でも相当な魔力酔いによる目眩がしているのに、全部流されたら確実に死んでいた。

「主の王家の魔力と混ざり合って多少薄くなったが、限りなく造物主の魔力に近い王家の魔力になった筈じゃ。最大量も増えたじゃろ？」

「え、ええ・・・ありがとうございます」

「アリスさん、ほんならアレ・・・使用時間も長くなったんとちゃうん？」

「うむ、間違いなく長くなったじゃろ・・・それに主の計画の最後に王家の魔力を全て捧げる必要もないじゃろうな・・・まあ何割か

は失われるじゃろうが、問題無いじゃろう？」

問題無いというか、寧ろお釣りが来るほどだ。

「しかしアマテル様・・・何故、私にこのような・・・・・・」

「最初はの・・・父の事もあって完全なる世界に協力しておったのじゃが・・・・・・妾はやはりこの世界が好きじゃった。本当なら滅ぼしたくない・・・そこに主と主の弟を見た。主ら兄弟を見てすぐに判ったぞ・・・妾の子孫じゃと、しかも兄の方は王家の魔力を受け継いでいるではないか・・・もしかしたら、主の成長次第では完全なる世界に変わる方法が見つかるかもしれん、そう思っておったら案の定」

だからアリスに賭けてみた。アリスに魔法世界と魔法世界人の未来を託し、世界を救ってくれる事を・・・。

「まあ、主が王国再建まで考えておったとは思わなんだ・・・予想外ではあった、良い意味でな」

魔法世界を救い、ウェスペルタティア王国を再建してくれると言うのなら、アマテルにとっては願っても無い事。

「行け・・・我が子孫よ、その伴侶よ・・・・・・勝って世界を救い、我が祖国を復興させてくれ！」

「畏まりました・・・我がご先祖様」

「行ってきますえ！」

アマテルに見送られて、アリスと木乃香は先を急いだ。

そして、最後の扉を開けた先にあるのは・・・祭壇。その先にある球体状の機械の中にはアスナが拘束されており、更に先には黒い

鍵状の杖・・・グレートグランドマスターキーがあった。

「やっと来たね・・・アリス君、旧世界のお姫さま」
「待たせたな・・・フェイト・アーウェルンクス」
「アスナ・・・返してもらいに来たえ」

遂に始まる。魔法世界の未来を賭けた激戦、黄昏の王と癒しの巫女は地のアーウェルンクスと対峙した。

「今こそ見せてやる・・・我が最後の切り札！」
「ウチの新たなアーティファクトを！」
「君達を倒し・・・僕はこの世界を消し去る。ここで退場してもらうよ」

“姫”を抜き、三枚の仮契約カードを取り出したアリスと、本契約カードを取り出した木乃香、周囲に黒い石の剣を複数出現させたフェイト、最強クラス同士の究極の戦いが、今・・・始まる。

「「アデアット！！」」

百四話　「王族の末裔」（後書き）

次回！　アリスの最後の切り札二つと、木乃香の本契約アーティファクトのご披露！
フェイトとの激闘が始まります。

百五話　「無の極地、原初の魔法、神話の再現」（前書き）

遂にアリスと木乃香の切り札及び新アーティファクトが解禁！

百五話　「無の極地、原初の魔法、神話の再現」

英雄と女王の子

百五話

「無の極地、原初の魔法、神話の再現」

アリスの持つ三枚の仮契約カードと、木乃香の持つ一枚の本契約カード、それが二人のアデアットというキーと共にアーティファクトへと変化する。

「きしのあかし！　えいゆうの籠手！　王者の定め！」

「伊邪那美（イザナミ）！　伊邪那岐（イザナギ）命！」

アリスの両手にはえいゆうの籠手が装着されて、“姫”ときしのあかしを握る。頭上には虹色の王冠が現われ、更にアリスの両目はオッドアイに変わった。

隣に立つ木乃香の両手には白い扇と黒い扇が握られ、服装は巫女服に変わって額には白い鉢巻が巻かれた。

「本契約をしたのかい？　その歳で早まった事をしたね・・・」

「早まってなどいない」

「これはウチとアリスさんの誓いの証や！」

アリスは切り札を出すのに時間が掛かる。その間、木乃香がフェイトの足止めをする必要があるので、木乃香は爆縮瞬動でフェイトに迫った。

その途中、左右の扇を縦に合わせて握り、その能力を発動させる。

「形態変化！　天之尾羽張（アメノオハバギリ）！！」

扇は光に包まれ、一本の剣に変わった。
天之尾羽張（アメノオハバギリ）と言えば日本神話においてイザナギが、息子を産んだ妻が、その出産が原因で死んだ事に激怒して生まれてきた息子、カグツチを切り殺した時に使った剣と言われている。
木乃香が振るいし神を殺した神剣・天之尾羽張（アメノオハバギリ）は炎に包まれ、フェイトに迫った。

「っ！　グレートグランドマスターピースのアーティファクト・・・・」

ギリギリでかわしたが、服の一部が燃え尽きてしまった。皮膚も若干だが炭化しかけている事から、その炎は間違いなく神の炎、火の神カグツチの持つ炎だと思われる。

「この剣が出せるんは炎だけやないえ・・・例えば、建御雷之男神（タケミカズチノヲノカミ）！！」

天之尾羽張（アメノオハバギリ）から雷が放たれた。
建御雷之男神（タケミカズチノヲノカミ）はイザナギがカグツチを切り殺した際、天之尾羽張（アメノオハバギリ）から滴り落ちたカグツチの血から生まれた雷の神の名だ。

「厄介だね・・・っ！　神の炎の次は神の雷かい？」

フェイトの周囲に展開していた黒い石の剣全てが雷によって砕かれた。
フェイトも若干だが雷を受けて手足が痺れを通り越して感覚が無くなり掛けているので、その威力の程は相当なものなのだろう。

「あともう一つあるえ・・・水の神の力が」
「本当に厄介だ・・・君は。やはりアリス君共々、ここで退場してもらうよ」

木乃香を本気で始末しようとした時だった。アリスから膨大な魔力が溢れ出るのを感じる。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　契約に従い　我に従え　天地創造の王　万物全ての理を持ちて　来たれ　常世の形　生者を育む世の全て　死者を葬る世の全て　我に　その全てを与えん」

聞いた事の無い詠唱、使用される膨大な魔力、何もかもがフェイトの予測を大きく超えている。

「世界の理！　術式固定！　黄昏の剣　魔法付与！　術式付与完了是、“森羅万象”」

世界の理という魔法を取り込んだ“姫”は、今までの術式武装の様な大きい変化をしなかった。だが、“姫”全体が虹色の光に覆われ、途方も無い量の魔力に溢れている。

「そして・・・今こそ見せてやるよフェイト・アーウェルンクス、王家の魔力の本当の使い方・・・・・・究極身体強化魔法、無我の境地！」

アリスの身体が無色のオーラを纏った。同時にアリスの瞳から感情らしい感情の色が消える。
前の様なバーサーカー状態ではない、途轍もなく大きく、そして頼もしいとも言える感覚を木乃香は感じられたのだ。

「・・・・・・」
「本当に、君達親子には驚かされるよ・・・父が父なら息子も息子だね」

無我の境地を発動したアリスは一切の無言になった。無表情で無感動、無口と、無の体現者とでも言えば良いのか。

「アリスさん・・・いくえ」
「・・・・・・」

無言で、それでも確かに頷いたアリスに安堵した木乃香は爆縮瞬動に入った。アリスも同時に瞬動・・・いや、縮地に入り、フェイトに迫る。

「っ！　速い！」
「せえええあああああっ！！」
「・・・・・・」

木乃香の振るう炎と雷を纏った天之尾羽張（アメノオハバギリ）をギリギリ避けたフェイトだが、縮地で動くアリスには反応しきれなかったのか、“姫”の一撃をかわしきれず、右脇腹を切られた。
そして、その切り口から雷や炎、氷や風、砂、水などが体内に入り込み、内臓に強烈なダメージを与えた。

「・・・・・・」

更に、アリスが離れた所に瞬動で移動したフェイトに向けて一歩も動かずに“姫”を振ると、地面から炎の柱や氷の槍が生まれてフェイトを襲う。

「成る程・・・っ、その魔法は・・・原初の魔法か」

アリスが術式武装に使った魔法、それこそがアリアドネーの禁書庫で見つけた原書の魔法だ。全属性の魔法を使える者にのみ許された魔法で、現代では使用出来る魔法使いが存在していないが、アリスは王者の定めによってその条件をクリアした為、使えるのだ。

「原初の魔法に王家の魔法の奥義、更にグレートグランドマスターピースのアーティファクト・・・本当に、危険な存在だよ」

「せやね、せやけどウチもアリスさんも・・・世界を救う為に使う力やって、そう決めとるんよ！　形態変化！　天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）！！」

木乃香の持つ天之尾羽張（アメノオハバギリ）が光に包まれて再び形を変えた。

さよのアーティファクトである草薙の剣と瓜二つの剣、天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）はイザナギの息子、建速須佐之男命（スサノヲノミコト）がヤマタノオロチを、その尾から生まれたそれを用いて切ったとされる、草薙の剣の原型の剣だ。

「八俣遠呂智（ヤマタノオロチ）！！」

天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）を振るった時、刀身から魔力で構成された８つの首を持つ大蛇が現われ、フェイトを食い殺そうと襲ってくる。

再び展開した黒い石の剣を放ったフェイトは大蛇の首を落とそうとするが、遠隔操作のそれはフェイトが意識を集中していなければならない。

フェイトの背後から襲い掛かったアリスは“姫”ときしのあかしに魔力を通してフェイトの背中を切りつけると、その傷口から大量の光を放出して傷を抉り、抉った先から凍っていく。

「っ！　しまっ・・・」

背後のアリスに気を取られ、石の剣の操作を忘れてしまった。
石の剣を全て弾いた大蛇たちが、その牙で持ってフェイトの四肢、胸、腹、首、頭に噛み付き、食い千切ろうとする。

「グッ！？　あ、ああ・・・・・・ガッ」

食い千切られそうになる痛みの中、フェイトは無詠唱で永久石化をアリスと木乃香に放つが、アリスの無我の境地はアスナと同じ完全魔法無効化能力を常に身に纏っている様で、寸前で掻き消されてしまい、木乃香は　天叢雲剣（アメノムラクモノツルギ）を扇に戻し、黒い扇・・・伊邪那岐（イザナギ）命を一振りする事で現われた大岩で永久石化を防いでしまった。
尤も、木乃香がアーティファクトを扇に戻してしまった事で大蛇たちが消失、フェイトは全身から大量の血を流しながら何とか生還するのだった。

「グッ・・・・・・前、なら・・・君達二人で来ても、勝てる自信はあったのに・・・まさか、此処まで苦戦するなんてね」

アリスも木乃香も、その実力はフェイトを超えている。それこそナギやラカン達と同じ領域・・・最強クラスの最上位に到達していると言っても過言ではないほどに、いや・・・間違いなく到達している。

その時、ようやく追いついてきたエヴァ達と、アーニャを救出したペルシクムがやって来た。全員、戦いに加わる事無く、三人の戦いを見守っている。

「観客が増えたね・・・もう、これが最後の戦いだ」

フェイトはグランドマスターキーを取り出し、背後に造物主の姿

を映し出した。

「君達にリライトは効かないのは判っているから・・・これは発動体として使う事になるね」

造物主の姿がフェイトと重なり、フェイトは造物主と同じ黒いマントを羽織った。

「さあ、最終ラウンドだよ」

「ええよ・・・ここで、終わらせたるえ」

「・・・・・・」

アリスと木乃香、フェイトは次の一撃に全てを込めるとばかりに魔力を高め、構える。

“姫”ときしのあかしが虹色と黄金の光を放ち、伊邪那岐命（イザナギ）と伊邪那美（ザナミ）は再び天之尾羽張（アメノオハバギリ）に変わる。

三人の魔力がぶつかり合って墓守人の宮殿を揺らし、建物の所々が崩れ始める中、遂に三人は動いた。

最終ラウンドにして最後の一撃・・・・・・魔法世界の未来を左右する最後の攻撃は・・・・・・はたしてどちらに未来を託すのか、それは・・・・・・。

百五話　「無の極地、原初の魔法、神話の再現」（後書き）

木乃香のアーティファクト、白い扇の伊邪那美と黒い扇の伊邪那岐命ですが、そのランクは最上位のグレートグランドマスターピース…神話の再現とも言われるアーティファクトです。

木乃香の場合は日本神話の再現という能力で日本神話の伝説を殆ど再現できます。

百六話　「決着の時」（前書き）

アリスとフェイトの戦い、遂に決着です。

百六話　「決着の時」

英雄と女王の子

百六話
「決着の時」

虹色の光を放つ“姫”と黄金の光を放つきしのあかしを構えるアリス、天之尾羽張（アメノオハバギリ）を構える木乃香、グランドマスターキーを構えるフェイト、三人はそれぞれ自身が持てる最大の業を持って最後の攻撃を仕掛けようとしていた。
この戦いに幕を下ろす最後の一撃、それに相応しい攻撃、そのぶつかり合いは凄まじい威力になるだろう事は簡単に予想出来る。

「ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト　契約に従い　我に従え　大地の王　来たれ　大地の怒りと災い　生命の都たる　星の基盤　罪深き者に　ガイアの裁きと絶望を」
「・・・・・・」
「形態変化、布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）！」

フェイトの上位古代語魔法の詠唱が響き、アリスは両手の剣をクロスさせて構え、木乃香の天之尾羽張（アメノオハバギリ）は光に包まれると今度は刀身が内反りの片刃で全長８５ｃｍはあろうかという剣に変わった。

「大地の顎（アギト）！！」

フェイトの魔法が発動して石造りの床から鋭い石の牙を持った石の顎が幾つも現れてアリスと木乃香に襲い掛かった。
二人を食い千切ろうと襲い掛かる大地の顎、浮遊しても追ってく

るソレは中々厄介だ。だが、木乃香の用意した布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）は魔法使い、魔法にとって完全魔法無効化能力と同じくらいの天敵だった。

「静まれ、荒ぶる大地の神よ！」

布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）は荒ぶる神を静めたという伝説を残す神話の剣、自然界の理を曲げる魔法に対して絶対の力を持っているのだ。

自然界に対する異常を静める事で、魔法そのものを無かった事にする究極の対魔法兵装。

「そんなっ！？」

フェイトの驚愕に見開かれた目、だがそれは命取りだ。懐に潜り込もうとするアリスに気付き、魔力で強化した手刀で首を落とそうとしたのだが、身を更に屈められて当たらないだろう。だからアリスが身を屈めた瞬間にもう一本の手に握っていたグランドマスターキーを放り投げてアリスの右胸を貫き、かわされた手刀は身を屈めた事で浮き上がったアリスの三つ編みを半ばで切り落とすだけに終わった。

しかし、右胸を貫かれてもアリスの猛攻は止まらない。口から血を吐き出しながらもクロスさせた二本の剣を振り上げ・・・・・。

「・・・開、放」

切り裂いた瞬間、“姫”の虹色の光ときしのあかしの黄金の光がフェイトに移って全身を森羅万象全ての力と黄金の輝きが襲い、核を破壊してしまった。

「僕の・・・負け、か・・・・・・みご、と、だよ・・・アリス、く・・・・・・」

息絶えたフェイトが倒れ、アリスの右胸を貫いていた手が抜けた。
途端に血が溢れてきたが、アリスは床に落ちた髪の束からリボンを抜き取り、そのリボンに自身の血を付けると、フェイトとの戦いで負った全ての傷が強制的に塞がった。
フェイトが死んだ事で戦いが終わったので、アリスは無我の境地を解き、既にアスナを救出したペルシクムを確認すると自分もグレートグランドマスターキーを回収する。

「終わった・・・・・全て」
「終わったんやねぇ」

戦いは終わった。後はグレートグランドマスターキーを使って計画の最後の仕上げをするだけだ。それが終われば今度は夢を叶える為の準備をしなければならない。

「まだまだ忙しいけど・・・付いて来てくれる？」
「勿論や、ウチはアリスさんの隣でずっと・・・支え続けるって言うたやろ？」
「うん・・・そうだったね」

仲間達が駆け寄ってきた。みんなアリスと木乃香の勝利を喜んでいるのか、心からの笑顔を浮かべている。

「アリス・・・準備は整っているのか？」
「ああ、問題ない。先に回収していたマスターキーと、これ・・・フェイト・アーウェルンクスが持っていたグランドマスターキー、これらから造物主の魔力を補給してからだね」

とりあえずグレートグランドマスターキーを影の中に仕舞って、

マスターキーを取り出し、グランドマスターキーを拾うと、その二つから造物主の魔力を吸い出した。

「ふぅ・・・これで良し」

後は最後の仕上げだけだという所で、木乃香が抱かかえていたアスナが目を覚ました。

「あ、あれ・・・？　ここ、は・・・・・・」
「あ、アスナ、目ぇ覚めたん？」
「このか・・・・・・？　それにアリス君たち、も・・・？」
「っ！」

今、アスナはアリスの事を何と呼んだ・・・・・・？

「ま、まさか・・・アスナ叔母さん？」
「ちょっと～、流石に姉さんの息子だからって、現役中学生を叔母さんって呼んで欲しくないんだけど？」
「記憶が・・・？」
「あ～、あの白髪のガキがあたしの記憶を復活させたのよ・・・おかげでガトウさんが死んだ時のこととか、姉さんの事とか、アリス君の事とか、全部思い出したわ」

そうだ、昔のアスナはアリス君の事をアリス君と呼んでいた。懐かしい記憶、それが次々と思い返される。

「それで・・・アリス君は何をする気？」
「魔法世界崩壊の危機なのは・・・記憶を取り戻したのなら判りますよね？」
「まあ、ね・・・ナギやラカンが言ってたし」

「それで、私はグレートグランドマスターキーを使って、私達の祖先・・・造物主と同じ事をやろうと思いまして」
「造物主？　ああ・・・あの黒ずくめね・・・リライトじゃなくて？」
「リライトしたら魔法世界消えますって・・・・・・リライトとは逆の事をするんです」
「リライトの逆の魔法って言ったら・・・もう一つの世界の始まりと終わりの魔法“ライト”よね？」

そう、リライトと同じ世界の終わりと始まりの魔法、ライト。
リライトは魔法世界や魔法世界人を消してしまうが、ライトは造物主が魔法世界を作った時の魔法だ。

「私は造物主ではありませんから、王家の魔力の何割かは失う事になるけど」
「ふぅん・・・あたしは王家の魔力を身に纏うだけしか使えないし、適任かな」

グレートグランドマスターキーと“姫”、この二つが無ければライトは使えない。更には王家の魔力を使いこなせなければ不可能な魔法なのだ。
アスナでは不可能、適任なのはアリスかアマテルだけだ。そして今この場にいるのはアリスだけ。

「そろそろ始めるか・・・・・・」

アリスはグレートグランドマスターキーを取り出すと、両目を再びオッドアイに変える。
ライトを行う為、王家の魔力をグレートグランドマスターキーと“姫”に流そうとしたその時、入り口の方から足音が複数聞こえ、

ネギたち白き翼が入ってきた。

「っ！」

入ってきたネギはフェイトの遺体と、その傍でグレートグランドマスターキーを持つアリスを視界に入れ、突然術式兵装・・・雷天大壮2になって雷速瞬動でアリスに襲い掛かってきた。

だが、アリスは冷静にそれを“姫”で受け止め、冷たい眼差しをネギに向ける。

「何のつもりだ・・・？」

「兄さん・・・何でフェイトを殺したんだ！」

「敵だから」

「っ！　敵だから殺すの！？　兄さんのやり方は間違ってる！　兄さんでは魔法世界は絶対に救えないって今、確信した！　だから、兄さんじゃなく、僕が魔法世界を救う！　グレートグランドマスターキーを・・・渡せ！！」

突然、何を言い出すのかと思えば、随分と身勝手な事を言ってくれる。

「お前では無理だ・・・王家の魔力も持たないお前では」

「っ！　王家の魔力が何なのかは知らないけど、僕の方が兄さんより確実に世界を救えるんだ！　もう、僕は兄さんより強い！　兄さんなんかに世界は救えない！　僕以外に世界を救える人間はいない！！」

「ほう・・・私よりお前の方が強い、か・・・・・・図に乗るなよガキが」

雷速瞬動より速い、縮地でアリスはネギの後ろに回り込むと、そ

の背中を蹴り飛ばした。

「グッ！　なら、この場で証明する！　僕の方が兄さんより強くなった事を！　そして兄さんに勝って僕が世界を救うんだ！　フェイトと友達になりたかった僕の邪魔をした兄さんを、排除する！」

「良いだろう・・・格の違いを見せてやるよ・・・・・ラカンに手加減されて引き分けた事にも気付かない愚か者が、私に勝てると思っているその御目出度い頭に現実というものを教えてやる」

今一度、グレートグランドマスターキーを影の中に仕舞ったアリスは、もう一度“姫”を森羅万象にする。

既に両目はオッドアイになっているので、無我の境地はいつでも発動できるが、ネギ程度に無我の境地は必要無い。

「来い、頭の出来が悪い愚弟が！」

「認めない、僕は兄さんの存在なんて、認めてなるものか！！」

フェイトとの戦いに決着が着き、今度はネギとの戦いが始まった。

アリスを超えたと勘違いしているネギは、長年のコンプレックスが爆発して。愚かな弟に初めて本気の殺意を持ったアリスは改めて、格の違いと現実というものを教える為に。

最強クラス最上位に辿り着いたアリスと、最強クラス上位に辿り着いたネギ、格の違う戦力差の大きな最後の兄弟対決が、幕を開けた。

百六話　「決着の時」（後書き）

ネギが何故、こんな行動に出たのか、それは次回出てきます。
予想してみてください。

百七話　「最後の兄弟対決、擦れ違いの果て」（前書き）

アリス対ネギ！　最後の戦いです。

百七話　「最後の兄弟対決、擦れ違いの果て」

英雄と女王の子

百七話

「最後の兄弟対決、擦れ違いの果て」

ネギ・スプリングフィールドにとって兄のアリス・スプリングフィールドは憧れだった。

もう一人の憧れ、父であるナギ・スプリングフィールドと同じであり、身近な目標でもあったのだ。圧倒的な実力、魔法技術、何もかもがネギよりも上で、いつかは追いつきたいと思って、必死に勉強して、魔法学校では主席卒業という結果も出した。

麻帆良学園に来てから、修学旅行でアリスの力の一端を見た時、その時は驚きと共に尊敬もしたが、同時に嫉妬もした。同じ父を持つのに、何故アリスは自分よりも強いのか・・・、年齢や実戦経験はアリスの方が上だと言われれば納得はしたが、１０歳の少年の心に生まれた嫉妬心は、小さいながらも残ったのだ。

それからはアリスとの差を見せ付けられる日々だった。考えてみればネギは幼い頃から何かとアリスと比べられていた。

魔法学校入学前も入学後も、常に良い成績を取ったり、魔法に成功したりしても身近な存在である兄のように頑張れとか、主席卒業だって流石はアリスの弟だとか。

麻帆良でも学園長やタカミチ、エヴァ、他の魔法先生や魔法生徒も、ネギを評価するが、アリスの様になれとか、アリス、アリス、アリス・・・・・・みんなアリスの事ばかり。

何故、みんな自分はこんなに頑張っているのに、アリスばかり評価するのか、魔法世界の未来もテオドラ達はアリスに託して、期待している。それが・・・ネギの心に復讐心以上の闇を生んだ。

ここに来る前、ポヨの見せた夢、それは麻帆良学園の夢で、父も母も行方不明になっていない平穏な世界だった。だが、その夢の中でアリスは存在していなかったのだ・・・・・・最初から、ネギの夢の中にはアリス・スプリングフィールドという存在は生まれてこなかった事になっていた。

ネギは無意識にアリスという兄が存在していなければ、自分だけが周りに認められ、魔法世界を救うのも自分で、フェイトの友達になれたと、思っていたのだ。

「はあああああ！」

雷速瞬動、アリスを超えるスピードを出そうと編み出した技術なのに、雷速瞬動に入った瞬間に縮地という瞬動の完成系の技術で動かれてしまって、入りが読めないネギの攻撃なんて一切当たらない。

「何で・・・何でいつも兄さんばかり！！」

「何が言いたい」

「僕はずっと頑張ってきたのに、どうしてみんな兄さんの事ばかり評価するんだ！　どうして僕じゃなくて、兄さんが魔法世界の未来を託されるんだ！！」

アリスは立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる気は無いと言っていた。魔法使いなら誰もが目指すものだと教えられてきたネギにとって、アリスのその言葉は何よりも信じられなかった。

立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる気も無いアリスが、何故・・・父と同じ英雄になれる事をしているのか、託されているのか、自分なら立派な魔法使い（マギステル・マギ）になる気があるのにも関わらず。

「兄さんは、やり方を間違えている！！　敵だからって殺す兄さん

に、英雄になる資格は無い！！」

墓守人の宮殿で、アリス達の後を追ったネギ達が見た三つの遺体、ここに着いて見たフェイトの遺体、アリスは自分でも敵を殺すだけではなく、生徒にまで殺しを強要する。

殺しを良しとするアリスに、魔法世界の未来を託すなんて間違っている。自分なら誰も殺さずに魔法世界を救う事が出来る。

「私が、いつ英雄になるなんて言った？　それに・・・お前の言い方は父さんも英雄になる資格は無いって言ってるようなものだ」

「父さんは兄さんとは違う！　父さんは人を殺したりなんてしない！！」

「・・・馬鹿か、父さんだって人は殺している。戦争で、戦場で人を殺さないなんてありえないんだよ」

アリスが振り上げた“姫”から風の刃が飛んできた。更に床からは石の槍が盛り上がってきて、氷の槍も飛んでくる。

「そんな事ない！　兄さんは間違ってるんだ！！　僕が正しいんだ！！」

飛んできたモノ全てを雷速瞬動で回避して、アリスの背後に回った。

全力で拳を背中に入れようとしたネギだったが、その拳は空を切る。アリスは既にネギの後ろに回っていて、“姫”を振り下ろしていた。

咄嗟に回避したネギだったが、右腕が落とされ、切り口から血が流れた。

「斬魔剣・弐の太刀」

雷化しているネギの本体を直接切ったため、雷化による回避は出来ずに右腕は落とされた。

「あ、あああああああああ！！！！」
「ネギ先生！」
「ネギ君！！」
「ネギ坊主！」

右腕を落とされたネギを見て、目の前の戦いを呆然と見ていた白き翼の戦闘メンバーが飛び出そうとした。ネギに助太刀して、今はとにかくアリスを倒そうと飛び出そうとしたのだが、それぞれ刹那の前には木乃香が、楓の前にはエヴァが、小太郎の前にはペルシクム、古の前にはさよ、裕奈の前に茶々丸、まき絵の前にはアキラが。

「お嬢様！　そこを退けてください！　ネギ先生が！」
「あかん・・・あかんえ・・・・・・ネギ君はアリスさんに倒される。これは決定事項や」
「そういう事だ、貴様らは黙って見ていろ・・・魔法世界の未来はアリスに任せてな」
「ならば、アリス先生にはネギ坊主の考えとは別に、魔法世界を救う方法があると言うのでござるか？」
「当然です」

刹那たちでは木乃香たちに勝てない。それは刹那や楓、古、小太郎などには理解できていた。

「ご安心を・・・アリス様は殺したりはしません。ちょっと現実を見ていないお子様に、お灸を据えているだけですから」

そういえばアスナはどうしたのかと思って見てみると、真剣な表情でアリスとネギの戦いを見ていた。
彼女にとって、姉の息子二人・・・甥同士が争っているのだが、記憶が戻ったアスナは一応は王族の仕来りというものを理解している。二人の争う理由も察していた。

「でもネギ・・・あんたはアリス君には勝てない。アリス君は魔法世界の事を姉さんに託されているんだから・・・・・・」

昔、まだアスナが記憶を封印される前、まだ幼かったアリスにアリカが魔法世界の事を話しているのを聞いた事があった。
幼いアリスは何を言われているのか理解していなかったみたいだが、その内容は・・・いつかアリスが大きくなったら、その時に魔法世界が崩壊の危機に遭ったら、救って欲しいと・・・。

「アリス君は覚えてるか判らないけど・・・姉さんの想いは伝わっていた筈、アリス君の決意はネギ、あんたに崩せるほど脆いものではないのよ」

そして、右腕を失ったネギは遂にアリスの前で這い蹲ってしまった。
這い蹲るネギに“姫”を突きつけたアリスは、ネギに敗北を認めるように言うが、ネギは諦めないとばかりに起き上がろうとする。

「無駄だ・・・ネギ、お前は結局私には届かない。お前は、勝てない」
「グッ・・・く、あ・・・・・・認め、ない・・・今の、僕が・・・兄さんなんかに、負けるなんて、認めない！　っ！？」

その時、ネギの左手の甲、背中に刻まれた闇の魔法の刻印が黒い

魔力を放出しながらネギを侵食し始めた。

「あ、ああ、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！！！！」

闇は一気にネギの全身を侵食して、その魂を喰らい尽くそうとした。

ネギの全身が黒く染まり、手足が変化して尻尾が生え、魔族のソレに近い姿へと変わっていく。抗おうとしているネギだったが、その目にアリスの姿を映した時、完全に魂が闇に飲み込まれてしまった。アリスに対する嫉妬、コンプレックス等の負の感情が一気に魂を飲み込んだのだ。

「きゃっ！？」

聞こえてきた悲鳴、見ればアーティファクトを出していたネギの従者たちの手に、アーティファクトの姿は消えていて、カードに戻っている。そのカードも今までのものと違い、龍宮真名が持つカードと同じ・・・・・・カードが死んでいた。

「ぼーやめ・・・魂が闇に飲み込まれて、完全に魔族化したか・・・・・・ネギ・スプリングフィールドという人間は、今・・・死んだ。あそこにいるのはネギ・スプリングフィールドという、魔族だ」

魔族と化したネギは雷速瞬動でアリスに猛攻を仕掛けてきたが、アリスにとって、相手が人間ではなく魔族である事の方が戦い易いというもの。

「斬魔剣・弐の太刀」

雷速瞬動で懐に潜り込んだネギの残った左腕を切り落とし、顎に膝を叩きつける。
両腕を失った事で顎を守る術の無いネギは簡単に宙に蹴り上げられ、尻尾をつかまれると勢い良く床に叩きつけられた。

「ガァッ！　グゥゥゥッ！！」
「獣だな・・・もはや人間ですらなくなったお前は、無様としか言い様が無い。力を求めすぎて、不相応な力に手を出した結果がこれか・・・・・・」

闇の魔法は、決して人間が手にして良い技法ではなかった。アリスはそれに気付いたからこそ、術式武装を編み出したのだ。
だが、ネギは闇の魔法を改良して、自分の身体に影響を出さないようにする事無く、そのまま使い続けた。それがこの結果、魔族となった姿だ。

「闇の魔法に、手を出すべきではなかったな・・・・・・ネギ、お前は闇を甘く見すぎたんだ。克服したから、驕りが出てしまった」

いや、そもそも克服なんて出来る筈も無い、アリスとて自身の心の闇を克服なんてしていないのだから。

「殺しはしない・・・お前を殺すと、流石に恨まれそうだからね」

アリスは王家の魔力を込めた眠りの霧をネギに放って眠らせた。
王家の魔力を込める事で障壁も何もかもを無視して直接ネギ本体に作用させた為、通常より過剰に込められた眠りの霧の効果で、ネギは暫く目を覚まさないだろう。

「呆気ない終わりだ・・・・・・魔族になっても、私に届かないな

んてな」
「アリス君・・・ネギは？」
「アスナ叔母さん・・・もう、ネギが人間に戻る事は無いと思います。カード、見てください」
「・・・っ」

アスナの仮契約カードも死んでいた。
確かにネギは今も生きているが、その魂が闇に飲み込まれ、人間としてのネギは死んでしまったのだ。アスナ達は人間のネギと仮契約をしているのだから、人間のネギが死ねば、当然カードも死ぬ。

「ネギは・・・このまま封印するべきでしょう。この墓守人の宮殿と共に、永遠に・・・・・・」

ネギの子孫を残したいと言う者には、後々に考えれば良い。体外受精という方法も、無くはないのだ。

「終わった様だな・・・小娘ども、貴様らは如何する？　ぼーやは、人間としてのぼーやはもう、死んでいるが・・・・・・」
「私は・・・お嬢様のお傍にいられれば、それで・・・・・・」

刹那は元々木乃香の護衛だ。ネギに思い入れが無いとは言わないが、ネギと木乃香、どちらを優先するのかと問われれば、やはり木乃香の方が大きい。
他のみんなは人間としてのネギは二度と蘇らないと知り、絶望して、嘆き、悲しんだり、悔やんだり、アリスを恨んだりしている。
この中で一番取り乱すのではと思われていたのどかは・・・・・・泣いていなかった。ただ、少し悲しげにネギの姿を眺め、既に死んでいるカードを握り締めながら、アリスを恨むでもなく・・・ただ、目の前の現実を、受け止めていた。

百七話　「最後の兄弟対決、擦れ違いの果て」（後書き）

こうしてネギは封印という形で退場！　今後は封印しながら、ネギの従者の中でネギの子孫を残したいと言う者に限り、精子を提供するという形になります。
そして次回は魔法世界を救え！　アリス、人生最大の魔法！！

百八話　「世界の終わりと始まりの魔法」（前書き）

ライト、発動！

百八話　「世界の終わりと始まりの魔法」

英雄と女王の子

百八話

「世界の終わりと始まりの魔法」

眠りの霧で意識を失ったネギをエヴァが氷の中に封印してから、アリスは“姫”を目の前の床に刺して影からグレートグランドマスターキーを取り出し、天に構えた。

「王家の魔力・・・解放」

アリスの両目がオッドアイに変わり、“姫”を媒介にして全身から王家の魔力が滲み出る。アリスの王家の魔力に反応してグレートグランドマスターキーの先端・・・火星儀になっている部分から無色の光が溢れ出て天を貫いた。

「アリス先生・・・何をやるの？」

アリスがこれから何をするのか理解していないまき絵が傍に立っていたアキラに問うが、アキラは何も答えない。

暫定的とは言え、ネギと仮契約をした事で白き翼に入った事になっているまき絵、裕奈、亜子には、二代目・紅き翼の機密を話す事ができないのだ。

「見てればわかるよ」

だから、言える事はそれだけ。これが話せる精一杯の事だ。

「世界の終わりと始まりの魔法・・・ライト、発動」

アリスの言葉と共に天を貫く無色の光が大きく広がり、魔法世界全体を包み込むと、枯渇し掛けていた魔法世界を構成する魔力が一気に供給され、小さな所から始まっていた綻びが修復されていった。

「戻って来い・・・シルヴィア、ラカン」

リライトで消えた魔法世界人が、再びその姿を再構成していく。消えた魔法世界人の数が少し多すぎたのか、グレートグランドマスターキーに内包されていた魔力はドンドン減っていくが、無事に再構成を終えた。

その証拠に、アリスの前にはシルヴィアとラカンの二人が横たわっており、息をして、ねむっていたのだから。

「最後の仕上げか・・・・・・っ！！」

魔法世界が次々と基の姿を戻していく。魔力消失現象で落ちた旧オスティアは今は浮いているが、その状態のまま島全土に魔力が供給されて固定された。

全ての作業が終了して、天を貫いていた光が消失すると、アリスはその場に倒れかけたが、傍に立っていた木乃香がそれを支える。

「終わったんやね？　全部・・・」

「うん・・・魔法世界崩壊は・・・・・・止まった」

だが、根本的な解決にはなっていないだろう。所詮、アリスがやったのは造物主と同じ方法、魔法世界崩壊を残り何百年から何千年に引き伸ばしただけだ。

「その何千年か先・・・私達の子孫が今の私と同じ事をしてくれれば、魔法世界はいつまでも崩壊する事無く残り続ける」

だから、後世に伝え残さなければなならない。アリスが今行った方法と、グレートグランドマスターキーと“姫”を・・・・・。

「アリス、よくやったな」

「エヴァ・・・ああ、今回は少し疲れた・・・・・・目眩がするよ」

アリスの王家の魔力は今回のライトの影響で全体の2割を失ってしまった。尤も、全てを失う計算をしていた為、8割も残ったのはアマテルのおかげで、嬉しい計算外の事態だ。

グレートグランドマスターキーを再び影の中に戻すと、アリスはアスナの方を向く。

「アスナ叔母さん・・・いえ、アスナ王女殿下、貴女様にお願いしたい事が」

「何？」

「私は明日より・・・魔法世界全体に向けて声明を出します。魔法世界崩壊の危機が去った事と・・・・・・ウェスペルタティア王国再建を」

「あたしに、その証人になって欲しいという事？」

「はい」

「・・・わかったわ、他ならぬ姉さんの息子だもの。その代わり、前よりも良い国を作りなさいよね！」

白き翼の面々はアスナ王女殿下という言葉にも驚いたが、アリスがウェスペルタティア王国を再建するという宣言に大きく驚いてい

た。
何の為に、そう思うが、アリスについてあまり詳しく知らない為、その真意が読めなかった。

「じゃあ・・・後はネギか」

ネギの処遇、それを如何するか。
白き翼はネギの封印に反対する者もいるが、魔族になったネギが、人間に戻る事は無いと理解しているメンバーは、せめてこのまま、安らかに眠らせてあげて欲しいと言った。
二代目・紅き翼は処刑する気も無いので、特に封印に対する反対はしなかったので、ネギはエヴァが厳重に氷の封印を施し、このまま墓守人の宮殿と共に封印する事になった。

「さて、シルヴィア、ラカン・・・起きて」

眠っている二人の身体を揺すると、ゆっくり・・・目を覚ます。
目覚めてすぐは、何が起きたのか理解していない様子だったが、消える直前の事を思い出して、アリス達の姿と、今いる場所が何処なのかを察すると、アリスが計画を成功させた事に気付いた。

「アリス様・・・よかった」
「やったじゃねぇか、なあ！　アリス！」

その瞬間、シルヴィアに月詠が抱きつき、泣き出した。
突然抱きつかれたシルヴィアは面食らっていたが、すぐに微笑みを浮かべると月詠の頭を撫でて、抱きしめる。

「心配・・・掛けちゃいましたね、月詠ちゃん」
「ええよ、ええんよ・・・グズ、姉様と・・・また、会えたんやか

ら」
「っ・・・ええ！　月詠！」

ラカンにはエヴァとアリスが近寄り、バグキャラの癖に消えた彼をからかっていた。

「うっせぇなぁ・・・魔法世界人のオレにリライトは天敵なんだよ！」
「まったく、心配掛けおって」
「お？　何だエヴァ、心配したのか？」
「するか！　私ではなくアリスや他の奴らにだ！」
「私も心配した覚えはないんだけどね」
「んだとぅ！？」

喧嘩している様にも見えるが、三人とも笑顔だ。
何だかんだ言って、アリスもエヴァも、ラカンが消えた事にショックを受けていたのは事実だし、ラカンも二人に心配掛けた事を申し訳なく思っている。

「それにしても・・・ぼーずは堕ちたのか」
「ああ、アリスに喧嘩売って、その時に堕ちた」
「封印するのか・・・」
「ああ」

少しの間だけだが、弟子として面倒見てきたネギが闇に呑まれ、堕ちた事に思うところはあるが、闇の魔法を選択したのはネギだ。
確かに闇の魔法を提案したのはラカンだが、警告もしたし、闇の恐ろしさは教えている。その上で闇の魔法を選んだのだから、今のネギの姿は自業自得なのだ。

「さあ、行こう・・・もうここに用は無い」

早く墓守人の宮殿から出て、外で待っているであろうメガロメセンブリア、アリアドネー、ヘラスの連合艦隊に宮殿の封印をしてもらわないといけない。

ポヨとの戦いに勝った真名を回収して、白き翼はグレートパル様号とフライマンタに、二代目・紅き翼と真名、アスナはクリムゾンに戻った。

クリムゾンの中に入ると、ブリッジにはクレイと、何故かアマテルも待っていた。アマテルもアリス達に付いて行くらしい。

「脱出だ！」

修復の終わった三隻の船が墓守人の宮殿から脱出して、いつの間にか消えていた結界を越えて集まっていた連合艦隊に合流する。

そして、合流してすぐに、クリムゾンにタカミチから通信が入った。

『やあ、アリス君・・・どうやら成功したみたいだね』

「勿論」

アリスの後ろに立っているシルヴィアとラカンの姿を確認したタカミチが安堵の表情を見せる。彼も心配はしていたのだろうが、アリスを信じていたのだ。

「タカミチ、悪いけど全艦に通達して欲しい。墓守人の宮殿に永久封印魔法を掛けて、封印するように」

『わかったよ・・・後で、詳しい話を聞かせてくれ』

タカミチからの通信が切れて少しすると、連合艦隊の全ての船か

ら同時に永久封印魔法が放たれた。
墓守人の宮殿は永久封印魔法を受けて侵入不可能の封印結界に包まれ、中に残っているネギごと封印される。これで完全なる世界との戦いは・・・本当に全てが終わったのだ。

「明日・・・だな」
「アリスさん・・・」
「大丈夫・・・今日は確り休むよ」
「・・・うん」

アリスの身体の心配をしていた木乃香を安心させて、何となく・・・モニターに映る墓守人の宮殿を眺めながら木乃香の肩に手を回し、抱き寄せた。
長かった戦い・・・・・父たち初代・紅き翼から続いた完全なる世界との戦いは、ようやく終わりを迎えた。残された戦いは・・・・・ウェスペルタティア王国再建の為の戦いだけ。

「明日で終わらせるさ・・・全ての戦いを。そして・・・・・」

父と母に、会うのだ。

百八話　「世界の終わりと始まりの魔法」（後書き）

次回は王国再建に向けて一休み、別荘に入って一日以上休みますよ。
タカミチも合流です。

百九話　「王国再建に向けて」（前書き）

今回は王国再建に向けての会議と、のどかの事が出てきます。

百九話　「王国再建に向けて」

英雄と女王の子

百九話

「王国再建に向けて」

現在、二代目・紅き翼のメンバーはタカミチや、復活したラカンとシルヴィアを含め全員とアマテルとアスナがクリムゾン内エヴァの部屋に設置した別荘の中にいた。

別荘に籠もって既に3日、完全なる世界との戦いで消耗した魔力も回復して、傷も癒えた。アリスの王家の魔力が2割失われた状態にも慣れたので、そろそろアリスの夢・・・ウェスペルタティア王国再建に向けた最後の会議が行われようとしている。

この会議の為にお忍びでテオドラ、セラス、リカードも別荘に訪れており、砂浜に用意した巨大デスクを囲む様に席に着いていた。

「先ず、外の時間で明日・・・私は魔法世界全土に向けて完全なる世界壊滅の報と同時にウェスペルタティア王国再建の声明を出します。その時、アスナ叔母さんには証人として、元ウェスペルタティア王国王女として立ってもらいますが・・・」

「判ってるって、ちゃんと王女らしくするわよ・・・とりあえず姉さんみたいにしてれば良いわよね？」

それでOKだ。

次に、その声明を出す時に前ウェスペルタティア王国女王アリカの罪状・・・それが偽造され、当時の、そして今もトップに君臨するメガロメセンブリア元老院の不正行為、完全なる世界に加担していた事実、その他諸々を発表する。

「この資料と証拠、リカードさん・・・揃ってますか？」
「ああ、苦労したが全て集めた。信頼出来る部下や同士が協力してくれたからな」

その部下や同士が乗っている船の識別もできている。
リカードが集めた資料や証拠、これらがあれば大義名分としては充分すぎるほどだろう。

「セラスさんとテオドラ様にはアスナ叔母さんの補佐をお願いしたいのですが・・・」
「任せておいて、確りフォローはするから」
「アリスが国王になるまで、確り妾たちで支えてやるぞ」

後は、間違いなくやって来るだろうメガロメセンブリア元老院の老害共、その傀儡たちだ。アリスの阻止と抹殺をするために本気で殺しに掛かってくるだろうが・・・・・。

「私達、二代目・紅き翼はアリアドネー艦隊、ヘラス帝国艦隊とリカードさんが指揮するメガロメセンブリア元老院の反上層部派と協力して向かってくる全ての敵を滅ぼす。生かしておく必要は無い・・・・・皆殺しにする」

その後、メガロメセンブリア元老院の本拠地、議員館に乗り込み、その地下へ向かう。アリスの読みが正しければ間違いなくそこにいる筈だ・・・・・二人が。

「幽閉されているであろう父さんと母さん・・・この二人の救出には私と木乃香ちゃん、エヴァで向かう。そのほかのみんなはその間に老害共を抑えていてもらいたい」

ナギとアリカがそこにいると思ったのは他でもないリカードが集めてきた資料を読んだからだ。その資料の中には議員館内に使われている資金、そこに用途不明金があったのだ。主に食料と思しき使用痕跡が１０年前と６年前からずっと、今まで。

「二人の救出が終わったらもう遠慮はいらない。老害全員を殺す」

その戦いが終わったらもう・・・やる事は一つ、アリスのおかげで再び浮遊島となった旧オスティアと新オスティア全てを領土にウェスペルタティア王国を再建して、アリスが国王として君臨する。

「リカードさんには老害共亡き後のメガロメセンブリア統治を任せたいんですが・・・」

「俺がかぁ？　まあ・・・乗りかかった船だ、やってやれない事も無いだろう」

ウェスペルタティア王国国王としてアリスが、メガロメセンブリア元老院の長としてリカードが着き、アリアドネーのセラスとヘラス帝国のテオドラと共に魔法世界をより良い方向へ導く。

それこそがテオドラ達がアリスに協力する理由であり、願いなのだ。

そして戦いが終わった後はオスティアの旧ゲートを開き、ゲートポートとして復活させる。恐らくは麻帆良学園の魔法先生が攻め込んでくるかもしれないが、事情を話し、アリスと敵対するというのなら・・・その時は麻帆良学園から全ての魔法先生が消えるだけだ。

「私達の・・・二代目・紅き翼の最後の戦い、外の時間で明日・・・行われる。確りと休養を取って、万全の態勢で挑むように」

後４日は別荘で休むが、別荘から出て、一日経てばすぐに戦いは始まる。
魔法世界最大の悪であり、害であるメガロメセンブリア元老院上院議員の老害共、その全てを滅ぼし尽くす。

別荘内５日目、既にテオドラやリカード、セラスの三人は去っており、有意義な時間を過ごしていた。
この５日間でタカミチがクルトの事は助けて欲しいとアリスに懇願してきたが、それはクルト次第だと答えておいた。尤も、クルトはアリスがアリカの名誉を回復させるのなら、協力する確立が高いので、一応は戦力として数えてはいる。

「・・・もうすぐか」
「・・・アリス先生ー」
「っ！」

アリスは別荘の林の中で一人、太い木に腰掛けてメガロメセンブリアとの戦い・・・実質魔法世界最後の戦争の事に思い耽っていた。
だが、そのアリスの下に一人の少女が訪れる。宮崎のどか・・・アリスにとって罪の象徴であり、精神的に成長する切欠にもなった少女の一人だ。

「何故・・・ここに？」

ネギの事で何かを言うのかとも思ったが、それならネギを封印した時に言っている筈だ。ならば何の用があって来たのか・・・・・・。

「そろそろアリス先生に、私にしてきた事の罰を与えようと思いま

してー」
「・・・そっか、凄いタイミングで来るね」
「はいー・・・」

その事だったらアリスも覚悟は出来ている。流石に殺される訳にはいかないが、覚悟そのものは既に出来ているのだ。

「アリス先生に与える罰は・・・・・・私を、あなたの近くに置いてください」
「・・・・・・？」
「私はアリス先生の罪の象徴、私の姿を見るたびにあなたは罪の意識に苛まれていますよね？」
「まあ、ね」
「だから私を常にあなたの目の届く所に置いてください。常に私があなたの目に触れる所にいて・・・常に罪の意識をあなたに与え続けます」

それがアリスへの罰、幸せになってもいい、だけどのどかに対する罪の意識を一生持って、苛まれ続けてもらう為に、のどかはアリスの目に届く所に居続ける。

「それは・・・随分とキツイ罰だね・・・・・・」
「自業自得、です」
「確かに・・・」

今ものどかと話しているだけで、のどかの姿を見ているだけで罪の意識に苛まれているというのに、のどかは満面の笑みを浮かべている。それがアリスには何より辛い事であり、アリスの罪なのだ。

「あ、でも安心してくださいー、私は将来はトレジャーハンターと

して活動しようと思ってますから、時々はアリス先生の前からいなくなります。その代わり・・・私にトレジャーハンターのチームを作ってください、目一杯の優遇で」
「君・・・成長して悪女になったね」
「まだまだですー・・・これからですよ」

それよりもネギの事は良いのか、それを聞いたアリスだったが、のどかの返事はそんなに悲しそうなものではなかった。

「ネギ先生のことは、確かに悲しかったです・・・・・・でも、不思議なんです。何だかあの結末を受け入れるのに抵抗が無かったんですよー」
「ネギへの想いは今もあるけど・・・ネギの結末を受け入れた、か・・・・・本当に成長したんじゃないかな？　大人の女として」
「アリス先生の所為ですよー？」
「・・・だね」

のどかは本当に大きく成長したと思う、人間として、女として・・・白き翼の中で一番成長してのではないだろうか。
それがたとえアリスに暗示を掛けられていた影響であるとしても、のどか本人にとっては前向きに考えられる様になったから、それなりに利点もあるとの事で、今の自分はそれなりに受け入れて生きているらしい。

「それじゃー・・・・・アリス先生には私への罪の意識を更に強くしてもらわないといけないので、もう一度、私を抱いてくれませんかー？」
「・・・は？」
「もう一度抱いてくださいー・・・これからも定期的に」
「・・・何故？」

「アリス先生に罪の意識を植え付ける為にです。絶対に罪の意識が薄れないように、定期的に私を抱いたという現実を与えます。でも私はアリス先生を愛しませんし、アリス先生も愛さないでくださいねー？　あくまで罪の意識を再認識する為の儀式・・・ドライな関係です」

「・・・君は悪女じゃなくて、怖い女性だよ」

「うふふ」

愛し愛する身体の関係ではなく、愛さず愛されずのドライな肉体関係・・・もう二度とそんな関係は結ぶまいと思っていたアリスにとっては、これほど辛い事もあるまい。

のどかに押し倒されたアリスの表情は、相変わらず罪の意識と、罪悪感、そして・・・・・・宮崎のどかという女性に対する恐怖の感情が浮かんでいた。

百九話　「王国再建に向けて」（後書き）

のどか……成長して悪女になりました。
アリスにとってはのどかは今後、罪の象徴であり、恐怖の対象になります。そののどかが常に目の届く所にいるのだから……怖い。

百十話　「声明発表！　新名アリス・S・エンテオフュシア」（前書き）

百十話達成！　ただし短い……。

百十話　「声明発表！　新名アリス・S・エンテオフュシア」

英雄と女王の子

百十話

「声明発表！　新名アリス・S・エンテオフュシア」

アリス達が別荘を出た翌日、遂にこの日が来た。

完全なる世界が壊滅して、魔法世界の危機が去った事を魔法世界全土に向けて発表し、同時にアリスがメガロメセンブリア元老院の不正や２０年前の大戦の真実、そしてウェスペルタティア王国再建の表明をする日、それが今日だ。

「アリスさん・・・緊張してへん？」

「いや・・・大丈夫」

「確りしなさいよ？　アンタはこれから一国を統べる王になるんだから、これくらいで緊張してたら身が持たないわよ」

いつもの様に拳闘士の服に二代目・紅き翼のローブを羽織って、腰に“姫”を刺したアリスが、らしくもなく緊張した面持ちで木乃香とアスナに心配されていた。

流石に夢が後少しが叶うと思うと緊張するのも解るが、少しは落ち着いて欲しいものだと思い、呆れるアスナであった。

「ほら！　行くわよ」

「はい」

「はいな」

アリスと木乃香、アスナはメガロメセンブリア上空に停滞してい

るクリムゾンの甲板に出る。そこには既にテオドラ、セラス、リカードも揃っており、アリス達三人の姿は映像として魔法世界全土に映された。

「・・・魔法世界に住む、全ての方々・・・・・・私は二代目・紅き翼のリーダー、アリス・スプリングフィールド！　英雄ナギ・スプリングフィールドの息子です」

メガロメセンブリア元老院の思惑は、このアリスの発表と同時に、アリスと二代目・紅き翼のメンバーを“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”に任命して、自分達の発言力を高める事だろう。

アリス達の行動は全て自分達の指示で行い、魔法世界を救ったとアリスの発表の後に宣言して、自分達の立場を更に高める為に、アリスを使うつもりでいる・・・・・だが、それは此処で崩される。

「２０年前の大戦の主犯、完全なる世界は昨日の戦いで・・・壊滅！　そして魔法世界に迫った崩壊の危機は去りました。完全なる世界に消された人々も戻ってきました・・・・・もう、魔法世界と、そこに住む人々を脅かす存在は・・・いません！」

真下のメガロメセンブリアの住人達から歓声が湧いた。英雄の子が魔法世界を救い、父の跡を継いで英雄になったと、喜びの声が街を埋め尽くしている。

「そして・・・・・」

そして、次の言葉こそ、メガロメセンブリア元老院との戦争の始まりだ。

「私はこの場で宣言する！　２０年前の大戦後、失われたウェスペ

ルタティア王国を再建して、その初代国王として就任する事を！
前ウェスペルタティア王国女王アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの息子として！　母の意志を継ぐ事を！！」
「そして、元ウェスペルタティア王国王女アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアの名の下に、アリス・スプリングフィールドを新ウェスペルタティア王国初代国王として認め、アリス・Ｓ・エンテオフュシアの名を与える！！」
「アリアドネー総長、セラスの名の下、それを見届けます」
「ヘラス帝国第三皇女テオドラの名の下に、それを見届ける！」

アリスとアスナ、セラス、テオドラの声明、それによって一瞬の静寂が訪れ、次いで困惑が魔法世界全てで包まれた。
アリスの言葉・・・魔法世界では災厄の魔女の名で知られるアリカの息子だとアリスは言った。アリスがナギの息子である事は有名だが、アリカの息子である事など誰一人として知らなかった事だ。
更に、そのアリスがウェスペルタティア王国を再建して国王として就任するなどと、訳がわからなかった。

「それから、この場を借りて２０年前の大戦の真実と、我が母・・・アリカ女王の無実、そしてメガロメセンブリア元老院の罪を証明する」

これに慌てたのはメガロメセンブリア元老院上院議員の重役・・・２０年前の大戦からずっとトップに君臨し続けてきた老人共だ。
老人共は慌てて映像を消そうと指示を出したが、部下たちがいくらやっても映像は消えない。消えない筈だろう、メガロメセンブリア元老院の電子精霊郡は茶々丸とペルシクムの二人掛りで制圧されているのだから。

「まず、２０年前の大戦・・・それを引き起こしたのは完全なる世

界と、それに協力したアリカ女王だと言われているが・・・それこそがメガロメセンブリア元老院の情報操作で改竄され、歪められた情報だ。真実は完全なる世界と、それに協力したメガロメセンブリア元老院上院議員の一部の者による計画だった。戦争を引き起こし、魔法世界の全てをメガロメセンブリア元老院が支配する為に」

リカードに頼んで流してもらった証拠となる情報・・・２０年前の大戦前に完全なる世界の構成員とメガロメセンブリア元老院上院議員の一人が接触している映像と会話記録だ。

「そして戦争は引き起こされ、上手く行けばメガロメセンブリア元老院の思惑通りに事は運んだだろう。だが、そこでイレギュラーが起きた・・・我が父ナギ・スプリングフィールド率いる初代・紅き翼の活躍と、ウェスペルタティア王国当時王女だった我が母アリカ・アナルキア・エンテオフュシアの接触、それから事態はメガロメセンブリア元老院の思惑を外れた・・・・・・最後には戦争を終戦へと導いた父を“立派な魔法使い（マギステル・マギ）”としてプロパガンダとして、母に自分達の犯した全ての罪を押し付けた」

その結果がアリカ女王処刑だ。自分達の保身の為にアリカに全ての罪を押し付けて、余計な事を言わないように2年間幽閉して、処刑した。

「もっとも、母さんは処刑寸前に父さんに救われ・・・今ここに私がいるのだけど」

つまり、アリカに罪は無い。オスティア崩落も、そもそもは戦争を引き起こした完全なる世界とメガロメセンブリア元老院が原因と言える。

「以上・・・・・これで私の演説は終わる。新ウェスペルタティア王国は現在の新オスティアと、復活した旧オスティア全土を領土として、旧オスティアの民全てを国民として受け入れる用意がある！　我が母を慕う者たちよ・・・まだ母を信じるのならば、我が下に集え！！」

現在、オスティアはメガロメセンブリアの領土となっている。つまり、アリスがそこに王国を作るという事は・・・・・メガロメセンブリアに対する宣戦布告だ。

「覚悟していろメガロメセンブリア元老院の老害共・・・貴様等全員、私達二代目・紅き翼が・・・・・滅ぼし尽くす！！」

完全に宣戦布告した。

メガロメセンブリア所属の艦隊は一斉に戦闘態勢に以降したが、直後にアリアドネー艦隊、ヘラス帝国艦隊、メガロメセンブリア元老院の反上院議員派の艦隊に砲撃され、次々と撃墜していく。

「よし、私たちも行くぞ！　二代目・紅き翼諸君！　最後の戦いだ！！　全力でもって・・・目の前の敵を葬り去れ！！！」

『了解！！』

クリムゾンからシルヴィア、ラカン、アキラ、さよ、月詠、タカミチ、エヴァ、チャチャゼロ、茶々丸、ペルシクムが飛び出し、向かってきたメガロメセンブリアの兵士へと突っ込んでいった。

リカードやセラス、テオドラも転移符で自分達の船に戻ったので、アリスと木乃香、アスナもシルヴィア達に続いた。

これが、最後の戦いであり、魔法世界最後の戦争になるのだ。

「これで戦いを終わらせるわよ！」

「ウチらの未来・・・掴み取るんや！」
「全ての過去に・・・これで決着を着ける！！」

「「「アデアット！！！」」」

アリスはえいゆうの籠手と王者の掟を、木乃香は伊邪那美（イザナミ）と伊邪那岐（ザナギ）命を、アスナは新しくエヴァと仮契約して復活したハマノツルギを出して、虚空瞬動に入る。
魔法世界最後の戦争・・・後の世に“真実の戦争”と呼ばれる戦いが今、始まろうとしていた。

百十話　「声明発表！　新名アリス・S・エンテオフュシア」（後書き）

次回はメガロメセンブリアとの戦争です。アリスの夢を叶える為の最後の戦いが始まります。

百十一話　「真実の戦争」（前書き）

メガロメセンブリア元老院を圧倒ｗｗ
戦争と言っても戦いにすらなりません。

百十一話　「真実の戦争」

英雄と女王の子

百十一話

「真実の戦争」

メガロメセンブリア元老院派と二代目・紅き翼を含めた世界の全ての戦争が始まった。

艦隊戦は数の勝負で元老院派が圧倒的に不利、地上での戦いもＭＭ兵では二代目・紅き翼の敵ではない。次々と蹴散らされ、その数を減らしていく。

「フハハハハハ！　どうした！　この闇の福音相手にこの程度の数、錬度で挑むなど無謀の極み！！　三下風情は下がれ！！」

「シリウス、術式　千の雷、雷の暴風、雷の投擲×2、統合　巨神ころし　暴風の螺旋槍　発射」

エヴァの氷魔法、ペルシクムの矢がＭＭ兵を片っ端から退け、その後ろから茶々丸とチャチャゼロが各個撃破する。

エヴァ達にＭＭ兵が触れる事すら叶わず、戦意を喪失した者は我先にと逃げるが・・・既にこの戦いは戦争だ。戦場で敵に背を向ける者は、その背中を撃たれても文句は言えない。

「臆病者が・・・高速詠唱！　こおるせかい！！」

茶々丸たちが飛び上がった瞬間、エヴァを中心に大地も大気も凍り、ＭＭ兵たちは氷系最強魔法の一つ、こおるせかいの餌食になるのだった。

「つまらん・・・」

エヴァ達とは別の地点ではシルヴィアとラカン、タカミチの三人が戦っていた。

シルヴィアは二代目・紅き翼の砲台としての本来の仕事として後方からの大魔法行使で大人数を蹴散らし、前衛のラカンとタカミチも出鱈目な力で持って敵を薙ぎ払う。

「多重高速詠唱、氷神の戦槌　風神の戦槌!!」

氷の戦槌と風の戦槌が所々に落ちてＭＭ兵を潰していく中・・・。

「千条閃鏃・無音拳!!」

タカミチが放った千の無音拳が迫り来るＭＭ兵を片っ端から打ち抜き。

「エターナル!　ネギ!!　フィーバーーーーーーッ!!!」

ラカンの全身から出た光線が残りのＭＭ兵を飲み込んで鎧を破壊、中身の意識を掻き消した。

アキラとさよの二人も水と怨霊を駆使してＭＭ兵を退けている。

アキラの作る水の壁は敵の接近を許さず、水の弾丸は敵の鎧や武器を砕き、水壁の迷宮（ラビリンスウォール）が敵を惑わす。

さよの放つ怨霊達は次々とＭＭ兵の肉体に憑依して悪夢を見せ、怨念によって頭を支配しながら精神をズタズタに引き裂く。

「水壁の迷宮（ラビリンスウォール）の前では、最強クラスでも逃れる術は無いよ」
「２０年前の大戦で死んだ者の恨み、憎しみ、絶望、その身に受けてください」

ＭＭ兵達では、二代目・紅き翼のメンバーには指一本触れる事は叶わず、他の場所でも戦っている帝国兵やアリアドネーの騎士団にも数の差で圧倒されてしまっていた。

真っ直ぐメガロメセンブリア元老院議員館に向かったアリス、木乃香、アスナの三人は向かってくるＭＭ兵を蹴散らしながら、ドンドン先を進む。
だが、その途中で今までのＭＭ兵が使う魔法とは桁違いの魔法が行く手を阻んだ。そこには１０名ほどの魔法使い達・・・・・元老院が選んだ立派な魔法使い（マギステル・マギ）達だ。

「逆賊アリス・スプリングフィールド！　貴様等をこれ以上先へは進ませねぇぜ！」
「・・・ふん、元老院の傀儡風情が、怪我をしない内に消えろ」
「んだと！？　俺たちゃ立派な魔法使い（マギステル・マギ）だぜ！？　次期とは言え、未だに立派な魔法使い（マギステル・マギ）になってねぇテメェに、俺たちが負ける訳がねぇんだよ！！」

１０人の立派な魔法使い（マギステル・マギ）から放たれた魔法の射手、その数は千にも届くが・・・・・アリスや木乃香達にとって物の数でも無い上に、精度は一般魔法使いより高い程度、最強クラスには到底及ばない。

「アスナ叔母さん」

「わかってるわよ」

アリスの両目がオッドアイに変わり、アスナと二人で前に出ると、二人に命中する前に魔法の射手は全て掻き消された。

「なっ！？」

「甘いわね！　こっちには完全魔法無効化能力者が二人もいるのよ？　あんた等のチャチな魔法なんて届くわけないじゃない！」

「そういう事だ！　術式武装　是、“森羅万象”！」

虹色の魔力を纏った“姫”を一閃、それだけで風の刃、氷の槍、雷、重力、炎、水、木、様々な属性の魔法が立派な魔法使い（マギステル・マギ）達を襲い、その命を刈り取った。

「貴様等は、老害共の傀儡だからね・・・・・この先の未来に立派な魔法使い（マギステル・マギ）なんて必要無い。余計な要素はこの世から断ち切らなければならないんだ」

一人残らず絶命した立派な魔法使い（マギステル・マギ）達に目を向ける事もなく立ち去り、眼前に元老院議員館が見えてきた。

見えてきた建物に向けて木乃香が両手の扇を一つに重ねると、形態変化させて天之尾羽張（アメノオハバギリ）にする。

「闇御津羽神（クラミツハノカミ）！！」

木乃香の一閃で天之尾羽張（アメノオハバギリ）から大量の津波が生まれ、一点に収束すると大砲の様に議員館を貫いた。

「アキラちゃんの水の太刀を真似て一点圧縮してみたんよ・・・その威力は絶大や」

因みに、更に収束させれなウォーターカッターにも出来る。

「あ、アリス・スプリングフィールド！　災厄の魔女の忌み子が！！」

木乃香の空けた穴から元老院上院議員の老害達が出てきた。相変わらずローブに身を包んで素顔を隠し、陰険そうな雰囲気を纏っている。

「災厄の魔女じゃない・・・ウェスペルタティア王国女王の子、そして新ウェスペルタティア王国国王のアリス・Ｓ・エンテオフュシアだ」

「黙れ！　よくも我等の秘密を暴いてくれたな！　貴様は１０００万$の賞金首に認定だ！　即座にその首を刎ねてくれるわ！！」

「その前に、貴様等を皆殺しにしてやるよ・・・自分達では何も出来ない無力な老害どもが！！」

老害共を護衛するＭＭ兵はアスナと木乃香が突っ込んで殆ど一撃の内にその命を奪い去った。アリスも森羅万象にしている“姫”を構え、縮地に入った。

慌てて防御結界魔法を発動させた老害達だったが・・・アリスの前に、そんなものは無いも同然。

「神鳴流奥義・・・森羅万象・滅殺斬空斬魔閃・弐の太刀！！！」

様々な属性の刃が斬空閃や斬魔剣の弐の太刀となって老害達の防御結界魔法を抜け、老害達の全身をズタズタに切り裂いた。

「ぎゃあああああああっ！！？」

「終わりだ・・・」

全身を切り裂かれた激痛に呻く老害達の真上に現れたアリスのオッドアイの瞳が、その無様な姿を捉える。

「高速詠唱！　黄昏の雷！！！！」

ボロボロになったとは言え、老害達の着ているローブは魔法に対する防御効果を持っている。しかし、アリスの使った魔法は黄昏の雷という王家の魔法、そのローブの魔法効果を打ち消して全身を焼き滅ぼすのだった。

「呆気ないな・・・こんな屑共の所為で、母さんは陥れられたのか」

そう思うと遣る瀬無い。だが、それも今日までだ・・・後は。

「行こう！　父さんと母さんを助ける！」

「ええ！」

「行くえ！」

木乃香が空けた穴から議員館の中に入る。リカードから貰った議員館内の見取り図を頼りに、地下へ降りると、一般議員が入れる地下３階より更に下、上院議員の中でもごく一部の許可された者のみが入れる地下１０階まで一気に駆け下りると、その階は牢獄が並んでいた。

その牢獄、一つ一つに魔法阻害、気の阻害をする術式結界が張られていたが、アリスが王家の魔力を部屋一杯に満ちるまで高めると、結界は破壊された。

「父さん！　母さん！！」

牢獄の一つ一つの中を見て回ると、何処も白骨化やミイラ化、腐敗した遺体が入っていて、漸く見つけた一番奥にある二つの牢獄・・・その中に拘束され、猿轡と目隠しをされたナギとアリカの姿があった。息はしているから、まだ生きている。

「父さん！　母さん！」
「ナギ！　姉さん！」

ナギが入っている牢の檻はアスナのハマノツルギが、アリカの入っている牢の檻はアリスの“姫”が破壊して、二人の拘束を解き、目隠しと猿轡を外す。
二人とも意識が無い上に衰弱している。衰弱はすぐに木乃香の治療で回復したが、意識はまだ戻らない。
しかし、これでナギとアリカの救出は完了だ。事実上、アリス達の勝ちは決まったも同然。

「さあ、地上に戻ろう！　これで一日限りの戦争は・・・終戦だ！」

早く二人を日の当たる地上に戻してあげたい。
地上に戻ったアリス達を待っていたのは、倒れ付すＭＭ兵を足蹴にしながら待っていた二代目・紅き翼の仲間達だった。

「・・・みんな、私達の・・・勝ちだ」

百十一話　「真実の戦争」（後書き）

一日限りの戦争が終わり！
次回は終戦とオスティアゲートの開放、アリスの国王就任になる予定です。

百十二話　「戦いを終えて」（前書き）

何を書きたかったのだろう…。

百十二話　「戦いを終えて」

英雄と女王の子

百十二話

「戦いを終えて」

一日限りの戦争・・・真実の戦争が終わった。メガロメセンブリア元老院は解体、老害派の人間の殆どは死亡か逮捕され、リカードを中心として新たな元老院を作り上げる事となった。

新たなメガロメセンブリア元老院はヘラス帝国、アリアドネー、新ウェスペルタティア王国と協力して魔法世界を良い方向へ持っていく事を誓い、翌年からスタートする事が決まる。

そして、アリス達はというと、新オスティアでの国王就任式の準備に追われていた。他にもオスティアの旧ゲートの開放準備や、救出したナギとアリカの治療もやらなければならないので、白き翼のメンバーを強制的に手伝わせているのだが・・・それでも目が回りそうになっている。

「アリス様の国王としての服をご用意しないと・・・」

シルヴィアは目の前の資料と格闘しながらも、アリスが国王就任式で着る服を用意する為にエヴァへ渡す為の報告書も作っていた。

アリスの服はスーツと拳闘士用の服しか無く、国王として相応しい服など一つとして持っていない。ならばエヴァに作らせれば良いのだが、その服を作るための材料の調達をシルヴィアはやらなければならない。

「おいシルヴィア・・・流石に私がやっても良いのだぞ？」

服の材料調達くらい、エヴァがやっても良いのだが、そこは二代目・紅き翼の金銭管理役をしていたシルヴィアの方が適任なのだ。何より・・・・・。

「あなたがやったら無駄にお金が掛かるではないですか！！」

そう、エヴァは金銭感覚が長年麻帆良で暮らしていたというのにズレていて、何と言うか・・・お嬢様感覚なのだ。

「む・・・」

言い返せないエヴァは押し黙るしかなかった。

いくら一国とは言えど、新ウェスペルタティア王国は新しく出来たばかりの国なのだ。無駄遣いは出来ないし、アリスの服の事以外にも旧オスティア復興と旧王城の再建造、魔獣狩り、その他にもお金が掛かる。ヘラスやアリアドネーからの支援もあるとは言え、アリスやシルヴィア達の懐からも出さねば追いつかない程の状況になっているのだ。

「エヴァ！　あなたは服の材料が届くまで暇なのですから、こっちを手伝いなさい！！」

「な！？　暇とは何だ！　私だって他にもやる事は沢山あるわ！！」

新ウェスペルタティア王国の宰相になる事になったエヴァには、これから覚えなければならない事が山ほどある。この後もヘラス帝国の宰相が来てエヴァに宰相の勉強を教える事になっているのだ。

因みに、今のエヴァとシルヴィアみたいなやり取りは二代目・紅き翼のメンバー全員が現在進行形でやっている事で、メンバー全員

が修羅場になっているのだった。

二代目・紅き翼のメンバーが修羅場を体験している時、アリスは新オスティア中央病院に来ていた。

病院内の病室・・・その中でも特別室と言える病室には意識を取り戻したナギとアリカがそれぞれのベッドの上で談笑していて、アリスが入ってきた事に気が付くと笑顔で手招きしてきた。

「おうアリス、今は忙しくねぇのか？」
「ちょっと休憩をね・・・話たい事もあったし」
「ふむ、ほれ・・・立ち話もなんじゃろう。座るとよい」
「うん」

アリカに勧められて二人のベッドの真ん中に置いてあるパイプ椅子に座ったアリスは少しやつれた両親の顔を見た。

「先ず、二人には現状を説明した方が良いよね？」
「うむ、救出された時には何もかも終わった後だと聞かされたからな」
「説明、頼むぜ」
「わかった・・・」

アリスが語るのはネギが生まれてから・・・つまりアリスが両親と別れてからの話だ。

幼い頃から戦場で戦ってきた事、６年前の事件の事、ネギがメルディアナ魔法学校主席卒業をして麻帆良学園の教師をしていた事、アリスも一緒に少しの間だけ教師をしていた事・・・魔法世界に来てからのアリスの罪を含めた全て・・・・・・完全なる世界を倒し、メガロメセンブリア元老院を滅ぼしてアリカの名誉を回復させた事

と、アリスを国王として新ウェスペルタティア王国を再建する事になったというのも全部・・・話した。

「それから・・・ネギなんだけど、あいつは闇の福音が開発した闇の魔法に手を出して・・・闇に堕ちた。魔族になってしまった・・・今は墓守人の宮殿ごと封印している」

そこまで話して、アリスはナギとアリカに一発ずつ殴られた。

「アリス、俺たちが何故お前の殴ったのか・・・判るな？」

「・・・うん」

「妾の名誉を回復してくれて、王家を復活してくれた事は嬉しい・・・しかしの、その過程でしてきた罪、それを親として・・・叱らねばならん」

「うん」

「ネギの事はまぁ・・・複雑だけどよ。俺は何も言わねぇぜ・・・そもそもそんな事になっちまったのは俺とアリカの責任だからな・・・・・」

息子達の事は・・・正直、それぞれ自分の責任で何とかする様にナギは言っている。ナギらしくないとは思うが、ナギにもナギなりの考えがあるのだろう。

「ネギの事は少し・・・残念だけどよ、それがアイツの選んだ道の結果だったってこった」

「うむ、妾としては成長したネギを見てみたかったが、アレもまた王家の者・・・仕方の無い事じゃろう・・・・・こうしてアリスが成長した姿を見ることが出来たのじゃから、良しとする」

突然、アリカがアリスを抱き寄せて、その頭を胸に抱かかえ、頭を撫で始めた。

「ちょっ！　母さん!?」

「大きくなったな・・・あの小さな子供が、今では妾よりも大きくなって・・・・・ナギのように強くなったのだな」

「ああ、お前の戦っている映像・・・見させてもらったぜ、届いたんだな・・・俺たちの領域に」

ナギもアリスの頭を撫で始めて、アリスは羞恥に顔を真っ赤に染めるのだが、幻影ではない・・・本物の両親の温もりが温かくて・・・心が満たされていくのを感じた。

幼い頃から、ずっとこの日を夢見てきた・・・、もう一度、こうして抱きしめてもらって、頭を撫でてもらいたくて、戦ってきた事を・・・原初の想いを思い出した。

「うん・・・こんなに、大きくなったよ・・・・・・父さん達みたいに、強くなったよ・・・・・・私は、父さんと母さんに会うために、頑張ってきたよ」

「ああ、頑張ったなアリス・・・流石は俺の息子だ」

「母として・・・アリスの成長が何よりも嬉しい」

アリカに抱きしめられ、ナギに頭を撫でられるアリスの頬には・・・いつの間にか涙が流れていた。

ナギとアリカの病室から出たアリスはすぐに仲間達の待つクリムゾンに戻ってきた。

戻ってきたアリスはエヴァの別荘に入って捕らえていたフェイトの従者達・・・調、暦、環、焔を軟禁している部屋に入ると、眠り

の霧で意識を奪ってそれぞれに記憶操作の魔法を掛ける。
いつまでも完全なる世界の記憶を持ったままというのは不安定要素にもなるが、何よりデュナミスはこれを望んでいるような気がしたのだ。
彼女達から完全なる世界の記憶を消した後はアリアドネーに入学させるか、それとも新ウェスペルタティア王国の王城でメイドとして働かせるか、それに関しては本人達の意見を尊重するつもりでいる。
一日経って別荘から出てきたアリスはフェイトの従者達に記憶の齟齬を暗示で埋めて、その上でこれから如何するかを問うたら、４人ともアリアドネー行きが決まり、一段落する。残るは国王就任式だけだ。

国王就任式二日前、アリスは木乃香を呼び出して二人でケルベラス渓谷を一望できる丘に来ていた。
今日、アリスは木乃香に大事な話をするつもりで、その為に用意した物もポケットに入っている。

「木乃香ちゃん・・・」
「どうしたん？」
「戦いが終わった・・・私はこれから国王として、新たな戦いに身を置くことになる」

戦いと言っても、今までの生死を掛けた戦いではなく、国家元首として外交や政治の戦いになるのだが・・・。

「木乃香ちゃんは、これから如何する？　本契約しておいて、今更かもしれないけど・・・」
「ウチは・・・言うたやろ？　ずっとアリスさんの隣で支え続けるえ」

「本当に・・・ずっと、隣にいてくれる？」
「勿論や」

ならばと、アリスはポケットから小さなケースを取り出した。それを開くと、中には小さいながらも見事なダイヤモンドが装飾されたシルバーの指輪が入っている。

「なら・・・これを受け取って欲しい。これからもずっと・・・私の、傍にいて欲しい・・・・・・結婚、してくれるかな？」

指輪を見て、アリスの言葉を聞いて、木乃香はしばらく呆然としていたが、その意味を理解した途端、ボロボロと涙を流し始めた。

「ウチで、ホンマにええの？」
「ああ・・・私は、木乃香ちゃんでないと、駄目だ」

木乃香の左手を手に取ったアリスは、薬指にケースから取り出した指輪を填めて、ゆっくりと抱きしめた。

「ありがとう・・・これからも、ずっと私を、支えてね・・・木乃香」
「うん・・・うん！　ずっと、ずっと一緒や・・・アリスさん」

ナギがアリカにプロポーズした場所で、アリスは木乃香にプロポーズをする。両親の時と同じく、抱き合う二人を・・・後ろから差し込んだ夕日が、祝福してくれていた。

国王就任式前日、アリス達は相変わらずクリムゾンに居たのだが、今回は白き翼のメンバーも揃って会議室の椅子に座っている。

「先ず、今後の予定なんだけど・・・新ウェスペルタティア王国国王として私は就任する・・・それで、木乃香・・・には、麻帆良学園卒業後にこっちに戻ってきて、王妃になってもらう」

他にも一時学園に戻る事を決めた二代目・紅き翼のメンバー、アキラとさよも卒業後は魔法世界に戻ってきて、そのまま新ウェスペルタティア王国で王国騎士団の団長をする事になった。

エヴァは宰相を、シルヴィアは財務大臣を、ラカンもアキラとさよ同様、騎士団長をする。タカミチは教師を辞職してから改めてウェスペルタティア王国の諜報員として活動をする事に。

月詠はアリスの護衛として残り、茶々丸とペルシクムは導入が決定した電子精霊の司令塔として活動する。

「それと、白き翼のメンバーは殆どが旧世界に帰るんだね？」

「そうなるでござる」

アリスの問いに答えた楓もそうだが、古も裕奈も、まき絵も、みんな旧世界に帰ることになった。卒業後の事でハッキリしているのは刹那とのどか、夕映だけだ。

旧世界には戻らないと決めたアスナはそのままウェスペルタティア王国で隠居するナギやアリカの護衛として騎士団入り、刹那は卒業後に木乃香の護衛を、夕映はアリアドネーの騎士団になる事が決定しており、のどかはアリスとの約束通りクレイグや黒い猟犬を仲間にトレジャーハンター活動をする事になっている。

「アリス・・・就任式が終わったらゲート開いて旧世界に行けよ。詠春に結婚の挨拶でもしておけ」

「あ・・・そうだね・・・・・・・決戦奥義くらいで勘弁してもらえるかな？」

「黒こげは覚悟しておけ」

怖い事を言うエヴァだが、あながち間違いではないだろうから笑えない。

結婚の挨拶に行った時に、アリスは間違いなく詠春とガチバトルをする事になるだろう・・・割と命懸けで。

「まあ、全ては明日だ・・・明日の就任式と、ゲート開放、それからだな」

「うん・・・そうだ」

そう、全ては明日・・・就任式と旧ゲート開放をしてからだ。アリスと木乃香の結婚は、全てそれからの話なのだ。

そして一夜が明け、遂にアリスの国王就任式が始まった。

新オスティアの大闘技場を会場にして式が始まり、会場には新ウェスペルタティア王国の国民となる事になった新旧オスティアの民が集まり、主賓にはヘラス帝国の国王を始めとしたテオドラを含む王族、アリアドネーの上級幹部やセラス、リカード、クルトも来ていた。

アリスは闘技場中央に設置された台の上で前ウェスペルタティア王国女王アリカと王女アスナの前に向かい合って立っていた。

「旧ウェスペルタティア王国最後の女王として、新ウェスペルタティア王国の国王に我が息子・・・アリスの就任をここに認め、同時に祝福する！」

アリカは宣言と同時に魔法世界各国の承認を得て新しく作られたウェスペルタティア王国の王冠をアリスの頭に乗せた。これでアリ

スは正式にウェスペルタティア王国の国王と魔法世界全体に認められた事になる。

「頑張るのだぞアリス・・・そなたの頑張り、これから確りと見させてもらうからな」

「はい・・・母さん」

こうして、アリスは復活したウェスペルタティア王国国王となり、就任式は終わった。

続いて二代目・紅き翼と白き翼、アリカ、ナギ、アスナは旧ゲートまで行き、ゲート開放を行う。このゲートは麻帆良学園の地下にある廃棄されたゲートに繋がっており、起動させて通ればすぐに麻帆良学園だ。

「さあ、２０年ぶりの開放だ・・・壊れてるなよ！」

開放手順はアリカが知っていたので、それに沿って開放を行う。そして、ゲートが開放された時、アリス達は光に包まれ、魔法世界からその姿を消すのだった。

百十二話　「戦いを終えて」（後書き）

次回は久々の麻帆良学園！
もうすぐ最終話！！

百十三話　「組織解体と新生、娘が欲しければ決戦奥義」（前書き）

相変わらず、何を書きたいのか…。

百十三話　「組織解体と新生、娘が欲しければ決戦奥義」

英雄と女王の子

百十三話

「組織解体と新生、娘が欲しければ決戦奥義」

オスティアのゲートが起動してアリス達は光に包まれた。メガロメセンブリアのゲートポートと同じ巨大な多重魔法陣が空を覆い、陣の中心を一筋の光が貫通する。

次の瞬間、アリス達の姿はオスティアゲートから消え、旧世界は日本埼玉県にある麻帆良学園地下にある廃棄されたゲートに転移していた。

「転移成功、ペルシクム・・・座標検索を」

「了解・・・・・検索完了、現在地・・・旧世界、麻帆良学園地下最下層です」

「へぇ・・・知らねぇ内に世の中便利になったもんだなぁ」

「うむ、ろぼっとという奴か？　昔、旧世界に来た時に見たあにめで見た事があるぞ」

ペルシクムを見ていてナギとアリカがその高性能さに感心していたが、アリカの感想はどこか違う気がする。

「アリカ様、ロボットちゃうえ・・・ペルシクムはガイノイドです」

「これコノカ、妾の事はお義母様と呼べと言うたであろう」

「え、えっと・・・お義母様」

「うむ、それでよい」

後ろで木乃香とアリカがほのぼの空気を展開していると、出入り口と思しき扉から詠春とアル、それに学園長を始めとした麻帆良学園の魔法先生が入ってきた。
恐らくゲート起動を確認して、膨大な魔力から誰かが魔法世界から転移してきたと判断して突撃してきたのだろう。

「ふぉ！？　アリス君とエヴァ、木乃香、アスナちゃん・・・それにナギ！？　アリカ姫！」
「ようじじぃ！　まだ生きてたのか」
「久しいのコノエモン」

入ってきた学園長はナギとアリカの姿を見て驚愕した。行方不明になっていた友人夫婦、それがアリス達と共に廃棄されたゲートから出てきたのだ、それを驚くなという方が無理だろう。

「お久しぶりですね学園長、父さんと母さんを無事見つけ出して、一時的にですが帰ってきました・・・魔法世界で起きた事を知りたいでしょうから、会議室にでも移動しませんか？」
「うむ、わかったぞい・・・葛葉先生、悪いが魔法先生の中で代表を何人か決めて会議室に集めとくれ、人払いを忘れずにの」
「わかりました」

魔法先生の一人、神鳴流剣士の葛葉刀子の手配で用意された大会議室、人払いの結界は西洋東洋両方の術式を用いて完備させた。
その大会議室に集まったのはアリスを始めとする合流を果たしたアルと二代目・紅き翼のメンバーと白き翼のメンバー、ナギ、アリカ、学園長、刀子、しずな、ガンドルフィーニ、瀬流彦、明石教授が集まり、それぞれ椅子に座ると魔法世界で起きた事の説明が始まった。

「先ず、魔法世界に私達が行った時、メガロメセンブリアのゲートポートにフェイト・アーウェルンクスを始めとした完全なる世界が現れ、ゲートは破壊されました」
「なんと!?　何かあったのではと思ってはおったが・・・」
「やはり壊滅していなかったのか・・・」

そしてゲートポート破壊の犯人として完全なる世界の罠でネギ達、白き翼は賞金首にされてしまう。
魔法世界で奴隷にされていた亜子、裕奈、まき絵を救出する為にネギと小太郎が拳闘士大会に出場、その過程でラカンに弟子入りして闇の魔法を会得、手加減したラカンと大会で引き分けた。
その後、オスティア総督府の舞踏会に攻め込んできた完全なる世界との戦いで一度ラカンとシルヴィアがリライトで消え、アリスと木乃香はその後に本契約を果たす。
魔法世界全戦力を持って墓守人の宮殿に乗り込み、二代目・紅き翼は完全なる世界を壊滅、ネギがアリスに襲い掛かり、その時に闇に呑まれて魔族化、墓守人の宮殿ごと封印する。
その後、メガロメセンブリア元老院の今までの不正を暴き、アリカの名誉を回復させて、元老院を壊滅、アリスは新ウェスペルタティア王国国王として就任した。
以上のことを話すと、先ず来たのはネギが魔族になった事、封印した事、メガロメセンブリア元老院を壊滅させた事で、アリスへの非難だった。

「何故ネギ君を封印なんてしたんだ！　彼は将来ある有望な人材なのだぞ!?」
「魔族になったネギを封印するのは当然、アレはもう二度と人間には戻らない」
「それからなガンドルフィーニ、貴様・・・誰に向かってそんな口を訊いている？　今のアリスと貴様では身分に天と地ほどの差があ

る・・・新ウェスペルタティア王国国王になったアリスにタメ口を使う気か？」

一国家の国王に対して高々一組織の構成員でしかないガンドルフィーニがタメ口・・・下手をすれば麻帆良が潰れる。

「し、しかし・・・元老院壊滅なんて穏やかじゃないのう？　ワシら、一応はあそこの下位組織なんじゃが？」

「それは残念ですね。メガロメセンブリア元老院下位組織の関東魔法協会は即座に解体してもらいます。その上で、関東魔法協会はウェスペルタティア王国所属組織として新生させますので」

「因みに私が色々と裏から手を回させて頂きましたよ。すぐにでも可能です」

相手は一国家元首とその首脳陣、最強クラスのみで構成されたメンバー相手に、麻帆良の魔法先生程度の実力では勝てる筈も無い。

アルが裏から手を回していたおかげでスムーズに話し合いは進み、結局学園側は反論する事すら許されず、黙って従わざるを得なかった。

「さてアリス君・・・一つ、良いかな？」

次に話しかけてきたのは詠春だ・・・笑っている様に見えるが、目が笑ってない。

「はい・・・」

「木乃香と本契約をしたとの事ですが・・・・・・何かいう事は？」

「・・・本当は彼女の実家の方でご挨拶したかったのですが、この場でさせて頂きます。近衛詠春さん、私・・・アリス・S・エンテオフュシアに木乃香さんをください！！」

頭を下げたアリスに、詠春は暫し思案顔になったが、アリスの肩に手を置き、ゆっくりと語りかけた。

「・・・・・私としてはね、アリス君」

「・・・はい」

「君になら、木乃香を任せても良いと思っていたよ・・・今もそうだ。君になら木乃香を任せられる」

「では・・・」

「ああ、認める・・・けど、その条件として私に勝ってからだ！」

「え〝っ！？」

「娘が欲しければ私に勝ってからにしなさい！！」

結局、この後エヴァの別荘の中でアリスが詠春と木乃香との結婚を賭けた真剣勝負をする事になってしまった。アリスは顔色を真っ青にしながら、遺言でも残しておくべきかと真剣に悩んで現実逃避をしそうになったのだが、無理も無い。

結局、麻帆良学園・・・関東魔法協会は新ウェスペルタティア王国の組織として再編成される事となった。人員は変わらないので、今までと違う所は上位組織だけだろう。

また、アスナ以外の白き翼メンバーとアキラ、木乃香、さよはこのまま中学卒業までは麻帆良に残る事に、それ以降はそれぞれの道を行くという事になり、ナギとアリカはオスティアで隠居生活を送る事が決定、タカミチも正式に麻帆良学園の教師を辞職して、オスティアへ移る。

そして遂に・・・その時が来た。エヴァの別荘に入っているのは詠春と学園長、アリス、木乃香、エヴァの5人だ。

「さて、アリス君・・・ナギから聞きましたよ。ナギやラカン、アル、全盛期の私と同じ領域に辿り着いたのですね」
「はい・・・」
「その力、私に見せて貰います。その上で、木乃香との結婚を許すか許さないかを決めさせて頂きます」
「・・・では、アデアット！　術式武装　是、“森羅万象”！　究極身体強化魔法“無我の境地”！」

“姫”が虹色の光を纏い、えいゆうの籠手と王者の定めを身に付けたアリスの全身から無色のオーラが溢れ出した。

「・・・・・」
「成る程・・・確かに」

無銘の野太刀を構えた詠春は、アリスから感じられる圧力で大体の力量を計算した。確かに、最強クラス最上位に辿り着いていた。

「ですが・・・実戦経験ではまだ、負けていませんよ？　雷光剣・百花繚乱！！！！」

先手必勝で詠春が放ったのは百花繚乱での無数の雷光剣だ。通常の倍以上の量の雷光剣がアリスに襲い掛かるが、無我の境地を発動しているアリスは慌てる事なく縮地で詠春の後ろに移動して、地面を巻き込みながら“姫”を振り上げた。
振り上げた“姫”の斬撃と同時に水の刃が詠春を襲うが、気が付くと詠春はアリスの目の前にはいなかった。

「極大・雷鳴剣！！」

莫大な電気エネルギーを野太刀に帯電させた詠春の斬撃がアリス

の背中を切り裂き、アリスは血を噴出しながら全身を襲う電流に無表情を若干だが苦しみに染める。

「・・・・・・っ」

縮地で距離を取ったアリスは地面に“姫”を叩きつける。すると地面から大量の砂の槍と氷の槍、炎の槍が詠春に向けて飛び出し、地面を紫電が奔った。

「ぬっ」

飛んでくる槍と地面を奔る紫電を飛び上がってかわした詠春は空中から斬空閃を放とうとしたのだが、目の前にアリスが居て一瞬行動が遅れた。

「・・・・・・雷鳴剣」

雷を纏った炎、氷、水、風、それぞれの刃が詠春の全身を切り裂いた。切られた箇所から血が流れる詠春を追い詰める為、アリスはそのまま連撃を続け、その度に詠春を炎だったり水だったり、様々な属性の刃が襲ってくる。

「クッ・・・中々、強くなりましたね・・・・・・ですが!!」

詠春がまさかの攻撃をしてきた。アリスの腹部に手を当て、大量の気を爆発させる・・・アリスやラカンが使う零距離ラカン・インパクトだ。

「同じ気を使う者同士、そして嘗ての仲間同士です・・・私にも出来ないなんて道理はないでしょう?」

確かに・・・詠春が出来ても不思議ではないだろう。事実ラカンも見様見真似で斬魔剣・弐の太刀を実演したのだから。

「では・・・死なないでくださいね？　神鳴流　決戦奥義！！　真・雷光剣！！！！！！」

今までの比ではない量の気が野太刀に込められ、膨大の電気エネルギーがアリスに向けて大爆発を起こした。

爆煙の中から、詠春とアリスの姿が出てきた・・・・・・詠春は若干スーツが破れていたりするものの、殆ど無事で、アリスは・・・ボロボロになって意識を失いかけながらも立っていた。無我の境地も解けて、無表情から苦悶の表情になったアリスだが、その瞳に闘志は消える事なく燃え盛ったいた。

「クッ・・・ゴホッ・・・・・・高速・・・詠唱！！」

「むっ！」

「千の、雷！！！！！」

詠春の頭上から千の雷が落ちて来た。それを避けながら、詠春はアリスの方を見ると・・・既にアリスは詠春の目の前に迫ってきている。

「速いっ！？」

「これが、私の・・・全てです！！！！　森羅万象開放！！　世界の理！！！」

その瞬間、詠春の至近距離で全属性のエネルギーが爆発して、お互いに吹き飛ばされた。その際、詠春の唇の動きを読み取ったエヴァは・・・安心したという表情を浮かべて鉄扇を開き、パタパタと

扇ぎ始める。

「・・・ふん、格好付けすぎだ詠春・・・お願いします、か・・・・・お前の目には、アリスは木乃香を任せるに足る存在だと見えて、そして認める事が出来たのだな」

アリスに駆け寄って治癒魔法を掛けている木乃香を眺めながら、エヴァは空を仰ぎ見た。

別荘内の人工の空だが、何故だろう・・・いつもより綺麗に見えたのは・・・・・・・。

百十三話　「組織解体と新生、娘が欲しければ決戦奥義」（後書き）

次回！　遂に最終話です！！　本当に長かった連載も、もう終わりが見えました！！

最終話　「未来」（前書き）

長い間、ご愛読頂きありがとうございました。
遂に最終話です。

最終話　「未来」

英雄と女王の子

最終話
「未来」

完全なる世界との戦いから１０年が経った。今では魔法世界も安定を取り戻し、ヘラス帝国、アリアドネー、メガロメセンブリア、新ウェスペルタティア王国、各国が協力して世界の平和を保って、人々の生活を改善されてきていた。

先ず、魔法世界共通の公認奴隷法は抹消され、元奴隷の身分にあった者たちはそれぞれまともな仕事を与えられ、誰もが公平な生活を営んでいる。

そして、３０年前の大戦の英雄の息子にして、１０年前の戦いの英雄アリス・Ｓ・エンテオフュシアは新ウェスペルタティア王国国王として王国復興に力を注ぎ、今では旧ウェスペルタティア王国以上の繁栄を齎す事に成功した。

アリスがリーダーを務めていた二代目・紅き翼のメンバーはそれぞれウェスペルタティア王国で仕事をしており、それぞれが国民に名を知られる人物となっていた。また、女性陣は皆仕事の他にアリスの妾として寵愛を受けており、子供が生まれた者も中にはいるのだ。

「師団長、王城警備って言っても攻めて来る馬鹿は居ないんじゃないっすかねぇ？」

「ん・・・その油断は命取りだ。私達の任務は陛下がご公務をされる場を守らないといけない・・・命に代えてもね。だから絶対に油

断はだめ」
「了解っす」

水の女神こと大河内アキラは麻帆良学園卒業後、両親に魔法の事を話して、粘り強い説得の末、新ウェスペルタティア王国騎士団の第二師団団長に就任して王城警備を主な任務として働いている。

「師団長！　Cポイント異常ありません！」
「は～い、じゃあ交代で休憩していいですよ～」
「師団長は休憩されないので？」
「私は他の所も周ってからにします」
「お疲れ様ですね」

死者の主こと相坂さよはアキラと同じく卒業後に第三師団団長に就任、国境警備の任に着き、国境付近に現れる魔獣や賞金首に対する抑止力になっていた。

「隊長・・・そろそろ止めてあげてくれませんか、チャールズ死んじまいますよ？」
「もう～、軟弱どすえ～？　陛下守ろう思うんやったらもうちょい気張りや～」
「隊長の体力が人外過ぎるんですよ・・・」

二代目サムライマスターこと月詠は国王護衛部隊の隊長として就任し、アリスが国外へ行く時は常に傍で護衛をしている。

「おい、その資料見せてみろ」
「エヴァンジェリン宰相？　あの・・・」
「この法案考えたのは誰だ？」
「アストンですが・・・」

「ふむ・・・一家に一つ、必ず福音ブランドの人形を置く事、か・・・悪くない」
「公私混同ですって・・・・・・・」

闇の福音ことエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルは賞金首だったという事実を抹消され、新ウェスペルタティア王国宰相として政治に関わり、その他にアリスの子供の面倒を見ていたりと、中々有意義な時間を過ごしている。
特にエヴァが作る人形は子供達に人気で、アリスの子供達だけではなく、国民の子供達からもエヴァが作る人形は福音ブランドとして大人気だ。

「今年度の決算を出してからまだ半年経ってませんが、随分と国庫の財産が余ってますね」
「建国時の節約癖が抜けませんか？」
「もう少し国民の生活に余裕が出来る様に調整してみますか・・・」

宝石姫ことシルヴィア・オーギスは財務大臣として王国の財務を担う存在として活躍し、人々の生活を守る重大な役目を担っていた。

「茶々丸姉さん、交代の時間です」
「ペルシクムですか・・・では茶々美、後をお願いします」
「了解」
「姉さん・・・買い物に行きたいのですが、付き合いますか？」
「行きます」

空の女王ことペルシクム・スプリングフィールドと福音の従者こと絡操茶々丸は王国警備システムや情報システムなどの電子系を警備する仕事をしながら、エヴァと共にアリスの子供達の世話、王国内の動物園園長と副園長を兼任していた。

この二人がいればウェスペルタティア王国のシステムにハッキング出来る人間など存在しないとまで言われており、茶々丸シリーズやペルシクムシリーズが開発されてからは正に鉄壁とまで言われるようになった。

「ほれほれジャック、もう少し優しくあやさんか！」
「だぁ～！　うっせぇな！」
「びゃあああああっ！」
「あ～ほらほら、泣くでない。母は此処におるぞ～？」

千の刃ことジャック・ラカンは騎士団の第一師団師団長を務め、１０年前の大戦の５年後にテオドラと結婚、今年生まれたばかりの第一子の子育てに悪戦苦闘していた。

「師匠・・・魔法世界は、平和になりました。アスナ姫も不幸にならず、師匠が夢見た世界が、実現されたんですよ・・・」

神速の拳こと高畑・Ｔ・タカミチは王国諜報部に所属して部隊長としてメガロメセンブリア元老院の旧上院議員派の生き残りの調査・殲滅を行っている傍ら、元・麻帆良学園の教師の源しずなと結婚、双子の女の子が生まれて幸せな家庭を築いていた。

「やはり、私は本に囲まれている方が落ち着きますね」

重力使いことアルビレオ・イマはウェスペルタティア王国最大の王都図書館で館長を務めており、王城の重役会議の時の資料などの提供も行っていた。因みに独身である。

「ようノドカ嬢ちゃん・・・おっと、リーダー、次は何処の遺跡に潜るんですかい？」

「えっと、ヘラス帝国辺境の古代遺跡の調査を頼まれてましてー・・・そこに行く事になるかとー。それとクレイグさん、リーダーって呼ばないでくださいぃー」
「まったく、ノドカってばいつまで経ってもリーダーって呼ばれる事になれないわね」

白き翼の読心術師こと宮崎のどかは麻帆良学園女子大学考古学部を卒業してから魔法世界に渡り、アリスの愛無き愛人をしながらクレイグ達や黒い猟犬をメンバーとしたトレジャーハンターチーム、“ブックストアー”のリーダーとして活動、各国から依頼されて遺跡に潜ったり、興味のある遺跡を見つけては潜ったりと、あまり日に当たらない生活をしていた。

「へぇ、姉さんとナギってば、相変わらずお盛んよね」
「なっ!?　あ、アスナ!!」
「へへへ、まぁな!」

黄昏の姫巫女ことアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアは隠居生活をしているナギとアリカの護衛をしながら墓守人の宮殿へ飛ばした哨戒機の警戒任務を行っていた。
今はアリカが妊娠したと聞いて二人の家に行って、呆れながら姉夫婦の喧嘩を眺めている。

他にも元白き翼のメンバーで魔法世界に来たのは綾瀬夕映と桜咲刹那だ。夕映はアリアドネー戦乙女騎士団の教官兼アリアドネー魔法学校の教員をしていて、刹那は王妃護衛として月詠の部下になっている。

そして、近衛木乃香は麻帆良学園卒業後に魔法世界に戻り、アリスと結婚。新ウェスペルタティア王国王妃になり、1男2女の子供

に恵まれ、長男は次期国王として王城で、次女が関西呪術協会の跡継ぎとして国内に作られた関西呪術協会の支部で教育を受けている。
　また長男と長女は修行も含めて三代目・紅き翼を作り、メンバーを集めて活動もしていて、アリスの後継者とナギの後継者として二代目・黄昏の王、二代目・サウザンドマスターとして魔法世界に期待されていた。

「なあアリスさん、幸せやなぁ」
「突然どうしたの？　言いたい事は理解出来るけど・・・」
「ん～、明日香も木乃里も、明日葉も、手ぇ掛からんくなって、まだまだ子供やのに、ウチらにいらん心配掛けないように強うなって、でも偶に甘えてくれて・・・・・ウチ、今がとても幸せやえ」

　明日香は二人の長男、アリス似の男の子で、オッドアイに黒髪、王家の魔力を持った次期国王だ。
　木乃里は長女、明日香の双子の妹で木乃香似の女の子だ。髪はアリス譲りの色で明日香と同じオッドアイ、明日香より少ないが王家の魔力を持っており、アスナと同じ体質になった。
　明日葉は次女、アリス似の女の子だが、黒髪で目の色は木乃香と同じ、アリスと木乃香譲りの膨大な魔力を持って生まれた。次期関西呪術協会の長になる事が決まっているので、陰陽道を勉強している。

「そうだね・・・私も、今がとても幸せだ。王の仕事は確かに忙しいけど、木乃香が隣でいつも支えてくれるから、頑張れる」
「そう約束したやろ？　ウチはいつでもアリスさんの隣で支えとるって」
「うん・・・忘れてないよ。私は木乃香がいてくれるから頑張れる・・・ずっと、ずっと・・・・・・」
「ほんなら、その愛情、また分けたげてな・・・今、ウチのお腹に

おる子の為に」
「・・・・・・え?」

木乃香は今、何と言った? 今、木乃香のお腹の中にいる子供・・・・・つまりそれは・・・。

「もしかして・・・!」
「今朝、病院行ってきてん・・・そしたらセンセに、御懐妊です言われたんや」
「ご、かい、にん・・・・・・妊娠!?」
「また新しい命が宿ったんやから、今まで以上に頑張りや・・・パパ」
「・・・・・・ああ」

本当に、幸せだった。沢山の子宝に恵まれて、妻と、妾になった仲間達に囲まれて、そしてまた・・・新たな命が妻のお腹に宿っている。

「また忙しくなるね」
「そやね、ウチが妊娠したいうだけで国は大騒ぎのお祭り騒ぎやから・・・」
「それだけ木乃香は民に慕われているって事だよ」
「アリスさんも、な・・・」
「二人とも、か・・・」

笑い合いながらアリスは木乃香をそっと抱きしめた。最愛の妻の温もりと、そのお腹に感じる新たな命の息吹、まだ小さな魔力で、集中しなければ気付けない小さなものだけど、確かに感じた。

「ずっと、傍におってな・・・・・・」

「ああ、ずっと・・・死が二人を別つまで、ずっと・・・・・・」

その後、王妃は４人目の子供を出産、二人が引退し、崩御する頃には多くの孫や曾孫に囲まれ、戦い続けた英雄王とその妻は、幸せな人生を送るのであった。

最終話　「未来」（後書き）

完結！
語られなかった１０年間は外伝として書こうと思います。
続編を希望する声があるのですが、そちらは少々考え中ですので、
この場では何とも言えません。

結婚式コラボ！　前編（前書き）

お待たせしました！　結婚式コラボの前編です。

結婚式コラボ！　前編

英雄と女王の子

結婚式コラボ

「新ウェスペルタティア王国国王と王妃・前編」

真実の戦争から一年が経った。

1年前の完全なる世界との戦いに勝利し、魔法世界崩壊の危機を救った英雄達・・・二代目・紅き翼のリーダー、アリス・S・エンテオフュシアが再建させた新ウェスペルタティア王国では盛大な式が行われている。

新ウェスペルタティア王国建国記念日にして、国王であるアリスの結婚式だ。相手は同じ二代目・紅き翼のメンバーで、アリスを終戦まで支え続けた少女・・・旧世界の姫君の近衛木乃香である。

木乃香は終戦後、旧世界に戻って義務教育期間である中学校生活、麻帆良学園での生活を卒業と共に終了させ、アリスの待つ魔法世界に戻ってきた。それからはアリスの婚約者として王妃の仕事を勉強し、新ウェスペルタティア王国再建一周年記念でもあるこの日、遂に結婚式を行う事となったのだ。

二人の結婚式はまだ復興の終わっていない旧オスティアでは不可能なので、新オスティア全土で行われる事になり、出席者はヘラス帝国の王族全員とアリアドネーの上層部全員、リカードを中心に新設されたメガロメセンブリア元老院の上層部全員、更には旧世界からも麻帆良学園魔法先生や魔法生徒、木乃香の魔法関係の友人達や両親、そして・・・アリスが宝石剣を使って呼び出した平行世界の友人達だ。

新ウェスペルタティア王国巨大大聖堂・・・そこには多くの結婚式参列者が集まり、祭壇の前には神父役のアマテル（大人ｖｅｒ）が立っていて、更にその前には豪華な王族らしい服装で、腰に“姫”を差したアリスが立っている。

そして、遂に新婦の木乃香が入場してきた。タキシードを着た詠春にエスコートされながら、純白のウェディングドレスを着た木乃香がゆっくり、一歩一歩かみ締める様にアマテルとアリスの前まで歩いて来る。

アリスの横に木乃香が並ぶと、詠春も自分の席に座り、式が始まった。

「アリス・Ｓ・エンテオフュシア」

「はい」

「汝は健やかなるときも病めるときも、この女性を愛し、敬い、慰め助ける事を誓うか？」

「誓います」

「近衛木乃香」

「はい」

「汝は健やかなるときも病めるときも、この男性を愛し、敬い、慰め助ける事を誓うか？」

「誓います」

互いに、夫婦の誓いを交わし、アリスはアマテルが差し出した指輪を持ち、木乃香の左手を取った。

「では、指輪の交換じゃ・・・」

アリスが木乃香の左手薬指に小さなダイヤの付いた指輪を填め、木乃香がアリスの左手薬指に同じく指輪を填める。

「誓いの口付けを」

アマテルの言葉と共に、アリスと木乃香は向き合い、木乃香の顔に掛かっていたヴェールを上げる。

「綺麗だよ・・・木乃香」
「アリスさんも・・・カッコエエよ」

ゆっくりと、二人は口付けを交わした。たっぷりと１０秒間、口付けをして、離れた二人は少し照れ臭そうに頬を赤くしながら、微笑み合った。

「これからよろしゅうな・・・旦那さま」
「こちらこそ、よろしくね・・・奥様」

式が終わり、大聖堂の外では多くの参列者がヴァージンロードを歩く二人にライスシャワーを浴びせながら祝福の言葉を投げかけていた。

そして、遂に待ちに待ったブーケトスの時。式に参列していた女性は誰もが今か今かとブーケが投げられる瞬間を狙い・・・そして、投げられる。

宙を舞うブーケ、それを取ろうと必死に手を伸ばす女性達、その群れの中に落ちたブーケを手に取った女性は・・・・・・平行世界から参列してくれたアリスの友人、カスミ・ヴェネーラだった。

結婚式は披露宴に移り、暫定王都となっている新オスティアの中心市街で行われた。

披露宴の中心地、新郎新婦が基本的にいるのは拳闘士大会の会場でもある大闘技場で、そこを中心に中心市街全域にテーブルや椅子

を並べ、新郎新婦が見えない地域には空に大型映像が映し出される。
そして、披露宴の司会をする事になったクルト・ゲーデルが披露宴開式の言葉を述べ、新郎新婦の入場となった

『それでは、新郎新婦のご入場です！』

選手入場用の入り口から黒いタキシードを着たアリスと、その腕を掴みながら純白のドレスを着た木乃香が入場してきた。
ゆっくりと歩き、会場内全てのテーブルを横切る様に中央の新郎新婦席へ向かう。途中でテーブルに座る出席者達から祝福の声が上がり、闘技場内の会場に席を用意されている平行世界の友人達からも祝いの言葉が投げ掛けられた。

「アリス兄様！　木乃香さん！　おめでとうございます！！」

アリスの妹、アリア・スプリングイールドから。

「アリス君、木乃香、おめでとうございます。お二人ともお似合いですよ」

木乃香のご先祖様、近衛雛から。

「アリスさん、木乃香さん、おめでとうございます！」
「アリスさん、おめでとう！」
「おめでとう！　アリスさん！」
「おめでとう！」

アリスの友人、星川志穂、神藤氷雨、桜笠蓮華、桜咲隼人から。

「おめでとうアリス！」

「アリス、幸せにな」
「アリスくん、木乃香～、おめでとうや～」

同じくアリスの友人、南武貴史、カスミ・ヴェネーラ、平行世界の木乃香の双子の姉、近衛薫から。

「おめでとうございますアリス君、木乃香ちゃん・・・お二人ともお似合いですよ」

平行世界のアリスの先輩、初代・紅き翼の一員の緋乃宮昴から。

「アリス！　木乃香！　おめでとさん！　お似合いだぜ！！」

平行世界のラカンの弟子、アリスの兄弟弟子でもあるアリウス・ウインダートから。

「おめでとうアリス！」
「おめでとう！」
「お似合いだぜ二人とも！」

同じく、平行世界の友人、北波日洸、レオン・G・レイブラット、ゴモラから。

「おめでとう！　お幸せにね」
「おめでとうございます！」

並行異世界の友人、シャルロッテ・A・V・エーデルシュタイン、マーリン・ウォーロックから。

「おめでとう二人とも！」

「おめでとう～！」
「アリスさん、木乃香さん、おめでとうございます！」
「幸せにな、二人とも！」

更に並行異世界の友人、不破飛翔、アリシア・テスタロッサ、リニス、リィンフォース・アインスから。

「幸せにしろよ二人とも！！」
「おめでとう！」
「おめでとうございます！　お幸せに！」
『うむ、目出度い目出度い！』

平行世界の友人、ジークフリート・シュウフェン、ブリュンヒルデ、ローゲ、きめぇ丸から。

「奥さん幸せにしろよアリス！」
「お幸せにね二人とも！」

同じく平行世界の友人、織原愁磨、ノワール・プテリュクス・エーデル・織原の織原夫妻から。

「おめでとうございます陛下！　王妃様！」
「おめでとう！　アリス陛下！　このか王妃様！」

平行世界からやって来て、一緒に来た多くのエルフやダークエルフと共に新ウェスペルタティア王国の国民となったルナライト・クレアラート、シャル・クレアラートの二人から。
多くの世界からアリスの友人たちが二人を祝福する為に、世界の壁を越えてこの式に参列してくれた。
アリスと木乃香がようやく闘技場中央の新郎新婦席に座ると、司

会のクルトがシャンパンの入ったグラス片手にマイクの前に再び立つ。

『それでは、乾杯の音頭を・・・新郎のご友人であらせられる南武貴史さまにお願いします』

「って、俺ぇ!?　ま、マジかよ・・・・・うし!」

乾杯の音頭をする事になった貴史は赤ワインの入ったグラスを片手にクルトのいる所まで移動して、そのままマイクの前に立った。

『え～、ご紹介に預かりました。南武貴史です・・・新郎のアリス、おっと・・・友人だから陛下付けなくて良いか?』

「勿論です」

アリスから了承を得たので、続きを始める。

『改めて、アリスとは俺の仲間のカスミを通じて知り合った。以前、カスミが平行世界、つまりこの世界に来て、それからカスミからアリスの話を聞いたんだが、その後でアリスが俺達の世界に来て初めて会ったのが出会いだ。アリスとはその時に友人となって、今・・・こうやって結婚という目出度い席に呼んでもらって、改めておめでとうと言わせてもらう!　それじゃあアリス!　木乃香!　おめでとう!!　乾杯!!!』

闘技場だけでなく、オスティア全域で一斉に乾杯という大勢の声が響き渡った。

本当に多くの人に祝福されながら、アリスと木乃香の結婚披露宴は始まる。

『え～、それでは先ず、新郎のご友人であらせられます・・・緋乃

宮鼎さまからお祝いのお言葉を頂きたいと思います』

名指しされた鼎が今度はマイクの前に移動する。

『アリス君、木乃香さん、本当におめでとうございます。風薫る、五月晴れの本日にお二人の御結婚をお祝いできます事、私といたしましても嬉しい限りでございます。ご両家の皆様にも、心よりお祝い申し上げます。

本日はおめでたい席にお招き頂き、本当にありがとうございます。僭越ではございますが、来賓として一言お祝いの言葉を述べさせていただきます。

私は、アリス君達とは異なる世界で「紅き翼」に所属していました、緋乃宮　鼎と申します。

それにいたしましても、幸福というものは「青い鳥」の例えもございますように、身近にありながら気付く事の出来ない物と存じます。これからのお二人の人生におきましても、そこに辿り着くには決して避けて通れぬ道もございましょう。

しかし、そうした事に心奪われている時こそ、お二人でお互いのお顔を見合わせられて、幸福は身近にあると言う事を思い起こしていただきたいと存じます。

どうぞ、かたい信頼の絆を、いつまでもはなされませぬようにお過ごしください。　本日はお招き頂きまして、本当にありがとうございました。お二人の永久の幸せをお祈りいたしまして、私からのお祝いの言葉とさせて頂きます』

常に礼儀正しい鼎らしいスピーチだった。鼎の心からの祝福に、アリスも照れながら、しかし本当に嬉しそうな笑顔を見せている。

『緋乃宮鼎さま、ありがとうございました。それでは続いて祝福のお言葉を、新婦の・・・え？　えっと、ご先祖様であらせられます・

・・近衛雛さまより、頂きたいと思います』

木乃香と同じ、大和撫子を思わせる優雅な動きでマイクの前まで来た雛は、アリスと木乃香の方を向いて静かに微笑んだ。

『アリスさん…木乃香……ご結婚おめでとうございます。私はいままで何代もの近衛の人間を見てきましたが……木乃香、今のあなたはその人達に負けないくらい幸せに見えますよ？そしてこれからは近衛の人間としてではなく、“近衛　木乃香”という一人の女として、アリスさんを支えていくのです。いいですね？そして……アリスさん？　木乃香と結ばれるからには、木乃香を後悔できないほど愛しなさい。貴方達人間の時間はあまりにも限られています。

しかし、その瞬きともいえる時間はとてつもなく美しい。それをどう使うかは貴方達次第です。いいですね？　もちろん、それで国政を蔑ろにしてはなりません。

まぁここは言わずとも分かるでしょう……では最後にもう一度、アリスさん、木乃香。ご結婚おめでとうございます。貴方達の子子孫孫に至るまでの幸福をここにお祈りします』

木乃香の先祖として、自身の子孫である木乃香と、その夫になるアリスのこれからの未来と、生まれてくるであろう子供達への祝福を述べ、アリスと、特に木乃香が涙を浮かべながら笑っているのを見て、雛は静かに席に戻っていった。

『近衛雛さま、ありがとうございました。それでは続きまして、新郎のご友人であらせられます織原ご夫婦からの祝福のお言葉です』

気合を入れた愁磨と、そんな夫に苦笑するノワールの二人が揃ってマイクの前まで移動する。

『アリス君、木乃香嬢。ご結婚おめでとうございます。ご両家の皆様に、心よりお祝いを申し上げます。この様な良き日に立ち会えた事を、大変嬉しく思います。私、先程ご紹介いただきました愁磨・Ｐ・Ｓ・織原と申します』

『同じくご紹介いただきました、ノワール・Ｐ・Ｅ・織原と申します』

『ノワールは、私の妻です。私の！妻です！！　最ｋ（バシィィィン！！）　痛ってぇぇぇ・・・・』

『コホン！／／　えー、アリス君と木乃香さんは麻帆良学園で出逢い、木乃香さんは副担任となったアリス君の魅力に惹かれ、学園生活では恋する乙女として近づいていきました。そして精神的に成長し、魔法世界ではアリス君を引っ張って行くほどに成長し、先日、遂に結ばれました』

『不躾とは思いますが、敢てこう言わせていただきます。アリス、木乃香ちゃん！！　本日は、本当におめでとう！！　二人の末永いお幸せを祈りまして、私達からのお祝いの言葉とさせて頂きます』

『『二人とも、本当におめでとう！！』』

何やら漫才みたいなやり取りもあったが、祝福の言葉は確かにアリスと木乃香に届いた。

それに、二人の夫婦漫才はオスティア全域を笑いに包み、盛り上げてくれたので、満更でもない二人は満足そうに自分達の席に戻っていった。

『織原ご夫妻、ありがとうございました。それでは一端新婦はお色直しとなりますので、一度退場となります。その間、参列者の皆様はご観覧頂きながら、お料理の方をお楽しみくださいませ』

結婚式コラボ！　前編（後書き）

次回の後編は誠意執筆中です。もう暫しお待ち下さいませ。

結婚式コラボ！　後編（前書き）

コラボ後編です！　お待たせしました！！

結婚式コラボ！　後編

英雄と女王の子

結婚式コラボ

「新ウェスペルタティア王国国王と王妃・後編」

『新婦のお色直しが終わったみたいですので、改めて！　新郎新婦の入場です！！』

木乃香がお色直しの為に一時退場して少しすると、アリスも一時退場した。

そして、お色直しが終わったらしく、再び入場する為に扉が開き、その向こうから白いタキシードを着たアリスと、白いドレスから桜色のドレスに換わった木乃香がゆっくりと歩いてきた。

最初の入場と同じ道を通って新郎新婦席に戻った二人、それを見届けて、司会進行役のクルトはカンペを確認しながらマイクの前に立つ。

『え～、それではご夫婦の初の共同作業として、ケーキ入刀を行います』

運ばれてきた苺がふんだんに使われた巨大なウェディングケーキ（作：昴）の前に立つアリスと木乃香の下へ、リボンを付けたナイフを持ってくる小さな少女の姿・・・平行世界からやってきたアリスの妹、アリア・スプリングフィールドだ。

「アリス兄様、木乃香義姉さま、ご結婚おめでとうございます！」

「ありがとうアリア」

「アリアちゃん、ドレス綺麗やなぁ」
「い、いえいえ、木乃香義姉様もお綺麗ですよ！」

そっと差し出されたナイフをアリスと木乃香が二人で持ち、ケーキの前に添えた。

『それでは、ケーキ入刀です！』

クルトの言葉と共に二人がナイフをケーキに入れた。その瞬間、会場どころかオスティア全域が再び歓声に包まれ、空気を振るわせる。

ケーキ入刀が終わり、席に戻ったアリスと木乃香。次は新郎新婦による両親への感謝の手紙だ。

『それでは新郎新婦のご両親方、どうぞ』

用意された舞台の上にあるマイク二つの前に移動するナギ、アリカ、詠春、木乃美。その後に続く形で向かい側へ移動するアリスと木乃香、二人の手にはそれぞれ手紙が握られている。

『まずお先に新婦によるご両親への感謝の手紙です』

木乃香が一歩マイクに近づき、真っ直ぐ詠春と木乃美の顔を見る。少し震える手で手紙を開くと、今まで育てられた１６年間の感謝の気持ちを読み始めた。

「拝啓、お父様・・・お母様。正直、言いたい事が沢山あって何を言ったらええのかわからんかったけど、最初に言いたいのは１６年間・・・ウチを育ててくれて、ホンマにありがとうございます。お父様とお母様はウチに魔法の事を教えず、普通の女の子として育っ

て欲しい言うてたけど、ウチは魔法の事を知って・・・良かった思うえ。魔法の事を知ったから、ウチは今・・・アリスさんっていう素晴らしい旦那様と結ばれて、こんな沢山の人に祝福されてんやから・・・・・せやから、お父様もお母様も、ウチが魔法を知って良かったって思ってください。あなた達の娘は・・・サムライマスターの娘は決して弱ないえ・・・・・っ、ウチは今日・・・アリスさんの妻となって、ウェスペルタティア王国の王妃に、なります・・・・・うっ・・・ウチはもう、旧世界に帰る事が少なくなるやろうけど、でもっ・・・いつまでもお父様とお母様の娘であることに、変わりありません・・・せやから、見守っててな？　ウチ、頑張るえ・・・だから、最後に、もう一度・・・言わせてください。お父様、お母様、１６年間・・・ホンマにありがとう、ございました！！」

「っ・・・このか、おめでとう！　本当に、綺麗になって・・・っ」

「ほんに、綺麗やよ・・・このかは、ウチと詠春さんの、宝や・・・これから、頑張りぃよ？」

化粧が崩れるのも気にしないで涙を流す木乃香と木乃美、そして眼鏡を外して止まらず流れ続ける涙を拭う詠春の姿は・・・本当に、理想的な親子の絵図だった。

『そ、それでは・・・新郎による、ご両親への感謝のお手紙です』

クルトも感動で少し涙を流していた。

「拝啓、父さん、母さん・・・父さんと母さんがいなくなって１０年の間に、私は夢を叶えました。父さんが救い、母さんが守った世界と国、私は二人の意思を継いで・・・両方とも救って、守ることが出来ました。私は、父さんと母さんを誇りに思ってます。そんな二人の意思を継げた事を、心から誇りに思ってます。今日、私は木

乃香という素晴らしい伴侶と共に、ウェスペルタティア王国を統べていく事になります。どうか見守っていてください・・・嘗て、母さんが愛した国を、父さんが守ろうとした国を、今度は私が愛し、守ります」

「へっ！　確りやりやがれよアリス！　詠春の娘を嫁にするんだ、確り幸せにしてやれ！」

「うむ、妾とナギの意思、本来なら妾のものだった責務・・・確りな。伴侶を、大切にするのだぞ」

ナギは涙を流すという事は無かったが、それでも息子が親友の娘と結婚するという事に思うところがあるのか、嬉しいという気持ちが表情に全開で出ていた。

対するアリカは、息子の晴れ姿が誇らしく、そしていつの間にか大人になっていたのだという複雑な気持ちと、素晴らしい伴侶を見つけた事への喜び、自分の手を離れていく寂しさが入り混じって、笑っているのだが、目尻に若干の涙が浮かんでいる。

「アリス君、このかの事を・・・よろしく頼むよ」

「それと、これからはアリスはんもウチらの義息子やから、よろしゅうな？」

「はい、これからも宜しくお願いします」

詠春がアリスと握手をして、娘を託す。妻の木乃美も、これから義息子になるアリスに、これからの親戚付き合いを頼むと言った。

「コノカだったか？　アリスの事、頼むぜ」

「コノカ、王妃の仕事は大変じゃが、確りな・・・アリスを、支えてやってくれ」

「はい！　お義父様もお義母様も、よろしくご指導お願いします」

木乃香にお義父様と呼ばれたからか、珍しくナギが照れ臭そうな表情をした。だけど、照れ臭そうにしていても、どこか誇らしそうにしている所は、父親なのだと思わせる。

アリカも木乃香という義娘が出来た事を喜び、そして息子をこれから支えてくれる木乃香の立派な姿に、満足そうだった。

『さあ、この披露宴も残り僅かとなりました。最後に、新郎新婦のお仲間・・・二代目・紅き翼の方々にお祝いのお言葉を頂きたいと思います！　お言葉を頂くのはエヴァンジェリン様、アキラ様、さよ様、ラカン様、そしてシルヴィア様です！』

最後になった。二代目・紅き翼のメンバーがマイクの前まで移動して、それぞれが自分達のリーダーと、その彼を支え、妻となる少女に祝福の言葉を贈る。

最初にマイクの前に立ったのはエヴァだった。後ろに茶々丸と、その頭の上に乗ったチャチャゼロを控えて、珍しく桃色のドレスを身に纏った彼女は持っていた手紙を開いた。

『まずは私からだな、アリス・・・木乃香、結婚おめでとう。私は６００年も生きてきて、それなりに仲良くなった者が結婚する所を見た事が何度かあるが・・・その中でもお前達が一番幸せそうで、一番輝いて見えるよ。アリス、お前は初めて会った時は面白い奴だと思った・・・人の身に余る大き過ぎる夢を抱き、実力は申し分ないが無謀と思える姿に、最初は内心だが馬鹿にしていた所があった。だけど、お前は更に強くなって、そして成長しながら夢を叶えて見せた・・・・・尊敬するよアリス、私はお前を心の底から尊敬する。そんなお前の横で支えてやるのが私ではないのが悔しいと思うけど、でも・・・木乃香でよかった・・・・・木乃香、お前は最初は魔法のまの字も知らない温室育ちの小娘だと思っていた。だけど、そんな小娘がいつの間にか私達の領域に来て、遂にはアリスを

支えるまでに育って、若干だが嫉妬もしたよ・・・木乃香、お前だからアリスを任せられる。お前だからアリスを支えてくれると信じている・・・・・だから、二人とも幸せになれ。お前達の幸せは、私が守ってやる』

エヴァの話は終わった。アリスと木乃香の姿をもう一度見た彼女の目には、若干だが涙が浮かんでいた。

次はアキラだ。アキラはエヴァと入れ替わりでマイクの前に立つと、エヴァ同様、持っていた紙を広げる。

『アリスさん、木乃香・・・結婚おめでとう。こういうのは初めてだから何を言ったら良いのか判らないんだけど・・・アリスさんはこれから、王様なんだよね・・・あ、今もか・・・・・・で、木乃香は王妃様なんだよね・・・凄いよね。本当に凄いと思うんだ・・・・・私は、二人を守る事がこれからの仕事になるけど、私は二人の事、王様と王妃様だからじゃなくて、友達として、弟子として、守っていくから・・・・・ご結婚、おめでとう』

静かに頭を下げたアキラは後ろに下がり、今度はさよが出てきた。

『アリスさん！　木乃香さん！　ご結婚おめでとうございます！！　アリスさんも木乃香さんもとってもお似合いですよ！　お二人の結婚は本当に嬉しいです、我が事の様に嬉しいです！　木乃香さん、必ず幸せになってください！　私達はアリスさんを支える役目を貴女に託しました。だから、生涯、アリスさんの隣を・・・お任せします！』

さよが下がり、今度はラカンが出てきた。

『おう！　アリス、コノカ嬢ちゃん、おめでとう！　いや～アリス

よぉ、こんなイイ嫁さん貰いやがって羨ましいぜこの野郎！　だがまあ、おめぇの今までの人生を考えれば・・・本当に嬉しい事だぜ。てめぇは幸せにならねぇと駄目だ、ずっとナギとアリカの為に戦い続けてきたんだ・・・これからはコノカ嬢ちゃんと一緒に自分の幸せの為に戦いな！　コノカ嬢ちゃんは確りとアリスを支えてやってくれ、この馬鹿は時々無茶やらかすからな、ナギの馬鹿に似やがったよこの辺は。頼んだぜ・・・そしておめでとう！　幸せになりやがれ！』

乱暴な言い方だが、ラカンの気持ちは確りとアリスと木乃香に伝わってきた。ラカンにとって親友の子供同士の結婚だからこそ、込められた気持ちは大きい。

そして最後はアリスの最初の従者であり、長年アリスの隣でアリスを支え続け、木乃香にその座を譲ったシルヴィアだ。

『アリス様、木乃香ちゃん、ご結婚おめでとう御座います。私がアリス様と出会ってから随分と経ちましたが、まさかこんなにも早く貴方様の晴れ姿を見る日が来るなんて思ってもいませんでした。あの日、今日明日を生きる為に必死になって、食べる物を飢えで苦しみながら探していた私を・・・従者として迎え入れてくださったあの日から・・・アリス様は私の命すら捧げる主であり、何処か目の離せない弟の様な存在であり・・・そんなアリス様と結婚する事になった木乃香ちゃんには、ちょっと嫉妬してしまいました。ずっと見守って支えてきたアリス様を、今度は私ではなく木乃香ちゃんが見守り、支えていく。嬉しいですけど、少し羨ましいなって・・・思いました。でも、何よりもアリス様の従者として、姉代わりとして、貴方達の結婚を心から祝福したいと思います・・・どうか、末永くお幸せに』

最後に、一筋の涙を流して頭を下げたシルヴィアに、多大な拍手

が贈られた。
二代目・紅き翼のメンバーがそれぞれの席に戻ると、再びクルトがマイクの前に立ち、長かった結婚披露宴の終わりを告げる。

『さあ、最後になりました！　最後に、新郎新婦の退場です！　皆様、盛大な拍手でお送りください！』

オスティア全域で、披露宴に参加した全ての人間が立ち上がり、夫婦として新たな道を行く新郎新婦へ向けて拍手が挙がった。
静かに立ち上がったアリスと木乃香は腕を組んで歩き出し、ゆっくりと入場した時の道を辿る様に歩き始め、会場にいる全ての人からの祝福の声が投げ掛けられる。

「アリスさん・・・今、幸せ？」
「うん・・・木乃香は？」
「ウチも、幸せや」
「そっか・・・」

こうして披露宴は終わり、夜にはアリスと木乃香は暫定王城の寝室で豪華なベッドの上に腰掛けていた。
平行世界から来た友人達は何人かに分けて明日と明後日に元の世界に帰す事になっているので、安心して初夜を迎えられる。

「あや・・・これが初夜なんか、緊張してきたえ」
「あはは・・・実は、私も」

木乃香は現在、風呂を済ませて寝巻きの浴衣を着ていて、アリスはバスローブを羽織っている。

「でも、これでウチは・・・アリスさんの奥さんなんやね」

「そうだね、私は木乃香の旦那さんなんだ」
「あやや・・・何や、照れ臭いなぁ」

あはは、と笑い合うが・・・そこで会話が無くなった。
お互いに頬を赤く染めて、何を話したら良いのか言葉が見つからず、でも何となくお互いの顔を見つめ合い・・・・・そっと、二人の影が一つに重なるのだった。

翌日、オスティアは披露宴の後片付けをしていて、アリスの仕事は無い。寝室で寝ている木乃香に毛布を掛けてあげると適当な服を着て王城のサロンに出た。

「あれ？　アリスさん？」
「氷雨さん・・・」
「どうしたの？」

何故ここに氷雨がいるのかと思ったが、考えてみれば平行世界から来た友人達は皆、王城に滞在しているのだった。
アリスは氷雨の問いに答えず隣に立ってテラスから見えるオスティアの景色を眺める。

「そうだアリスさん、前にこの世界に来たときのキスの事なんだけど・・・」
「あ～・・・・・・あれね」

あの後シルヴィアとエヴァが怒って大変な目に合ったので、あの時の事は嫌でも覚えている。

「私ね、最初はアリスさんの事、志穂ちゃんが好きになった人程度

の認識しか無かったんだ・・・だから最初はちょっとだけ面白そうな人って思って、興味はあったけど、恋愛とかとは無縁かな？　なんて思ってた」

「うん・・・」

「でも、アリスさんと戦って、強さもそうだけど・・・何て言うのかな、凄く楽しくて、凄く・・・興奮したんだ・・・・・多分、アリスさんが始めてじゃないかな？　私がここまで興奮出来る男って」

それは、何と返せば良いのか困る言葉だった。だが、氷雨はアリスの言葉を待たずに更に続ける。

「私ね、アリスさんの事が好きよ・・・あの時も、ファーストキスをあげても良いって思ったからキスした。アリスさんは木乃香ちゃんと結婚したから、まあ奥さんとか恋人とかは別にね・・・ただ、妾は娶るんでしょ？」

「ハッキリ言うね・・・でも、告白は嬉しいし・・・妾が何人もいる身だから、氷雨さんが本気なら、受け入れるつもりはあるよ」

「そう、じゃあ・・・もしアリスさんにその気があるなら、私にキスしてくれるかしら？　本気でアリスさんが私の告白を受け入れる気があるなら・・・・・・」

「・・・」

氷雨はアリスを試していた。雪女である彼女とのキスは、本来は相手の男が凍え死ぬ程のモノで、その寒さで相手が逃げるだろうと今まで思ってきた。

だからアリスを試す。本気で氷雨を受け入れる気があるなら、凍え死ぬのも厭わぬ意気込みでキスをしてもらいたい。

「じゃあ・・・」

「・・・え、ちょ、うそっ・・・んんっ!?」

まさか、本気でするとは思わなかったのか、アリスの唇が氷雨のソレに重なった時、彼女の頭の中が真っ白になった。

更に、驚く事にアリスの唇と重なっている自分の唇が、熱を持って温かく、その熱が氷雨の全身を支配していく。

「（あ、そっか・・・アリスさんの得意属性って、火だったんだよね）」

アリスは自身の属性である火の魔力を唇に乗せてキスしてきたのだ。だから氷雨の唇に触れても凍えず、むしろ氷雨の身体を温かくしている。

たっぷり１５秒、キスを続けたアリスと氷雨だが、そっと唇が離れると、二人の唇の間に銀色の橋が掛かって、切れた。

「満足かな?」

「・・・あ、あはは・・・・・・本当にキスしてくる人、アリスさんが初めてよ」

「雪女だって聞いたから、唇に火属性の魔力を乗せたけど・・・熱くなかった?」

「情熱的で・・・逆に素敵よ・・・・・・もう、腰が抜けるかと思ったじゃない」

苦笑して文句を言ってくるが、氷雨の表情は嬉しそうだ。初めて本気で自分とのキスをしてくれた人、雪女である自分とのキスを、逃げずにしてくれた人に出会えた事が、彼女の心を満足させたのだろう。

「それで・・・いつまで隠れてるのかな?　志穂ちゃんは」

「っ！？」
「あれ？　志穂さん・・・気配消して、何を？」

物陰に志穂が隠れていた。しかもご丁寧に気配まで消して氷雨とアリスのキスを見ていたのだろう、顔が真っ赤に染まっている。

「さてさて、次は志穂ちゃんの番だよ～？」
「え、ええ！？　ちょ、心の準備がまだ・・・」
「ほらほら！　そんな事してたら日が暮れちゃうじゃない」
「まだ朝でしょう！？」

ドンっと氷雨に背中を押された志穂はアリスの前に出てきた。
アリスと目が合った瞬間に顔どころか全身を真っ赤に染めた志穂は慌てて俯き、両手を前に組んでモジモジしている。

「あの・・・志穂さん？」
「ひゃい！？」
「志穂ちゃん・・・緊張しすぎ」

アリスが声を掛けると思いっきり上擦った声で返事をした志穂、それに対して氷雨が呆れ返っていた。

「えっと、前の答えだけど・・・」
「っ・・・はい・・・・・・」
「私は、結婚もして、妾も沢山いる様な・・・一般的に見れば最低な男だけど、それでも私の事が好き？」
「・・・はい、たとえアリスさんがご結婚されても、妾が沢山いても・・・私は、アリスさんが好きです。贅沢なんて言いません・・・せめてアリスさんが、私の事を少しでも想ってくだされば・・・・・・」

妾の一人でも良いから、愛して欲しい。それは氷雨と同じ答えだった・・・・・・。だからアリスは、そんな彼女の必死な想いに、応える。

「志穂さん」
「は、はい・・・っ！？　んん！？」

アリスに呼ばれ、顔を上げた瞬間、志穂の唇はアリスに塞がれていた。
そして、氷雨の時と同様１５秒たっぷりとキスをして、何の合図も無くお互いに唇を離す。

「これが私の答え、妾になっちゃうけど、氷雨さんも志穂さんも・・・精一杯愛するって誓うよ」
「アリス、さん・・・」
「あ、あはは・・・ちょっと照れるかなぁ」

その日の夜は、アリスが妾と夜を共にする最初の日で、氷雨と志穂、二人同時にアリスの愛を受け入れる事になった。
志穂には優しく、それでいて目一杯。氷雨には火属性の魔力を上乗せした情熱的な愛情を。それぞれが満足するまで、一晩中・・・・・。

氷雨と志穂と分かれてテラスを出たアリスは中庭に来ていた。テラスから見えたのだが、中庭に和装の美女・・・近衛雛がいたのだ。

「雛さん」
「あら、アリスさんですか・・・木乃香は？」

「寝室で寝てますよ」
「あらあら、昨夜は頑張りすぎたかしら？」
「あはははは・・・・・・」

笑えない。

「そうだ、アリスさんと木乃香に結婚祝いを持って来たのだけど・・・はいこれ」
「えっと・・・」
「これから子供が生まれてくる時の為に御札と、何かと入用だろうからお金を・・・それとアリスさんには私から神鳴流秘伝書を、中には参の太刀の記述もあるから使って頂戴。木乃香用には嫁入り道具をね」
「あ、ありがとうございます・・・助かります」

それと、と言って雛は何故か野太刀を抜いた。

「詠春からはもう受け取ったみたいですし、私からも・・・剣を抜きなさい」
「っ！」

慌てて“姫”を影から抜いたアリスは切りかかってきた雛の野太刀を受け止める。
“姫”で野太刀を受け止めた瞬間、衝撃波が地面に流れ、アリスの足元を中心に巨大なクレーターが出来上がるが、二人とも気にしないで剣を交え始めた。

「なるほど、良い腕ですね」
「っ！　まさか・・・受け止めるのが精一杯ですよっ！！」
「ならば見せてください。貴方が私達の領域に辿り着いた奥義を」

「・・・アデアット」

王者の定めを出して“姫”を“森羅万象”にする。虹色のオーラを纏った“姫”を構えたアリスに、雛も満足そうな表情になると、改めて野太刀を構えた。

「来なさい」

「っ！　はぁあああああああ！！！！」

この一撃に全てを込めて、アリスは出せる全ての力を込めた一撃を振り下ろした。

地面を抉る無数の属性の槍や奔流だが、雛はその悉くを避け、アリスの後ろに回って野太刀を振り下ろす。

「っ！？」

反応出来なかったアリスだが、雛はアリスの目の前で寸止めされた野太刀を持ったまま、ニッコリと微笑んだ。

「まだまだですね。ですが・・・貴方の一撃、お見事ですよ」

野太刀を鞘に収めた雛を見て、アリスも術式武装を解除した“姫”を影に戻す。

「木乃香の事、幸せにしてください・・・あの子の先祖として、そして初代・紅き翼のメンバーとして、お願いします」

「・・・・・はい、必ず幸せにして見せます！」

「宜しい」

アリスの言葉に満足した雛は城内に戻って行った。

その後姿を見送ったアリスは、雛の姿が見えなくなった瞬間、その場に座り込んでしまう。

「・・・・・・流石、だなぁ」

今までで一番死ぬかと思った。冗談抜きで、本気で死ぬかと思ってしまった。

「アリス兄様？」
「あ、アリア・・・？」

いつの間に来ていたのか、アリアがアリスの傍まで歩み寄ってしゃがみ込みアリスの顔を覗き込んだ。

「どうしたんですか？」
「いや・・・ご先祖様ってのは偉大だなぁってね」
「？」

何の事やらと首を傾げるアリアの頭を撫でて、アリスは勢い良く立ち上がると何となくだけどアリアを抱っこしてみた。

「あ、アリス兄様！？　ちょ、子供じゃないんですから抱っこは恥かしいですってば！！」
「アリア、年齢は子供でしょ？　良いじゃない、兄が妹を抱っこするなんて普通だよ」
「子供って言わないでください！　それにこの歳で抱っこは普通じゃないですよ！！」

だが、文句を言うわりにアリアはアリスの抱っこを振りほどいて降りようとはしない。滅多に会えない兄に甘えたいお年頃なのだろ

う。

「アリス兄様・・・」
「如何したの？」
「いえ・・・私も向こうでは現在、魔法世界にいるんですけど・・・その」
「オスティア関係で何かあった？」
「っ、わかりますか？」

何となく、アリアの表情が昔の・・・オスティア難民と初めて会った時の自分に似ている気がしたので言ってみたのだが、どうやら当たりのようだ。

「アリアは母さんに似ている」
「はい、王女・・・やらされますね」
「だろうね・・・私も最初は殿下って呼ばれて、変に期待を持たれてた事もあるから」
「兄様も・・・？」

恐らく、アリアも王女殿下と呼ばれているのだろう。だからこそ、その気持ちはアリスにも理解出来る。

「私は父さんと母さんに育てられたから、今の結果に繋がる選択をした・・・でも、アリアは父さんや母さんに直接会った事がある訳じゃない」
「はい・・・正直、女王になる気は無いんです。そんな事する義理もありませんし」
「うん、だから私とアリアちゃんでは境遇も違う・・・私からは的確なアドバイスをする事も助言する事も出来ない」
「はい・・・」

「自分が如何するべきなのか、それはアリアちゃんが自分で決める事だ・・・勿論、向こうのエヴァ達家族と相談して、ね」
「相談して・・・・・・」
「そう、その上で答えを見つけるんだ・・・どんな答えを見つけようと、アリアを責める人間なんていない。居たとしても、例え平行世界だろうと私が駆けつけて切り殺してやるよ」

過激すぎる。だけど、アリアはアリスの顔を見て何故か安心してしまった。アリスは真っ直ぐアリアの目を見ているのだから。

「私は、たとえアリアがどんな答えを出しても応援する。平行世界からだろうと、アリアの事を見守っているよ」
「兄様・・・・・・」
「それでもし、答えに悩むなら・・・いつでも会いに来て、私に思う存分甘えると良いよ。私はいつでも、アリアが甘えてくれるのを待っているから」
「兄、だからですか・・・？」
「そうだ、ネギがアリアの事で何もしなかった最低の兄だろうと、私はアリアの為に甘えれる場所になってあげる・・・エヴァや茶々丸に甘えても、それでも晴れない悩みがあるなら、私はいつだってアリアの甘えれる場所になってあげるよ」
「・・・・・・なら」

なら、今・・・甘えても良いですか？　というアリアの言葉に、アリスは頷いて抱きしめる事で応えた。

「私は、アリアの兄で、血の繋がった家族だ・・・アリアを甘えさせる事が出来る肉親だから・・・・・・今、思いっきり甘えて良いよ」
「っ・・・はいっ・・・・・・思いっきり、甘えちゃいます！！」

目尻に涙を浮かべ、抱きついてきたアリアを抱き返し、アリスはその場でクルクルと回り始める。楽しそうに笑い声を挙げる兄妹は、日が暮れるまでずっと・・・無邪気に遊び、妹は兄に思いっきり甘えるのだった。

そして、結婚式から一週間が経った。
平行世界から来た友人達も自分たちの世界に帰り、氷雨と志穂もアリスと一夜を共にして満足したのか、元の世界でやるべき事をやる為に帰って行った。

「アリスさん」
「木乃香・・・？」
「これから、やな」

二人揃って眺めるのは、復興活動を行っている旧オスティアの王城。もう半分は復興が終わっているが、まだまだ掛かりそうだ。

「沢山の人に祝福されて、幸せにならなあかんな」
「そうだね・・・」
「ウチ、頑張るえ・・・王妃様やもん！」
「ああ、私も王様だ！　頑張ろう」

遠くから、アリス陛下、木乃香王妃様と呼ぶ声が聞こえる。
沢山の民が、アリスと木乃香に向かって手を振っているので、それに振り返しながら二人は改めて復興中の王城を見た。

「さあ、新ウェスペルタティア王国の戦いは・・・これからだ！」
「ずっと、ウチが傍で支えるえ・・・これからも、ずっとな！」

二人の視線の先には、多くの民の笑顔が・・・・・・溢れていた。

結婚式コラボ！　後編（後書き）

次回からは番外編の、語られなかった１０年間が何話か続きます。
そして、番外編が終わったら……新シリーズ！　１０年後の新ウェスペルタティア王国……アフターシリーズが始まります！！

明日香「アフターシリーズ主人公の明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアです！　８歳です！　もう少ししたらお会いできますので、お楽しみに！」

木乃里「アフターシリーズもう一人の主人公、木乃里・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアです！　兄に同じく８歳です！　よろしくお願いします！」

明日葉「アフターシリーズ主人公二人の妹、明日葉・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアです。えっと…５さいです！　これからがんばります！」

番外編１　「語られなかった１０年間・王都建て直し」（前書き）

遂に番外編シリーズ開始！　これが暫く続いてアフターシリーズに突入します！

番外編１　「語られなかった１０年間・王都建て直し」

英雄と女王の子

番外編１

「語られなかった１０年間・王都建て直し」

真実の戦争から半年、二代目・紅き翼のメンバーの内、三人と白き翼のメンバー全員が旧世界に帰り、残ったアリス達は旧オスティアの復興をしていた。

特に最優先で復興を進めているのは旧王城と城下町、王都中心街で、一年から二年ほどで復興も終わるだろう計算で進行している。

「アリス、魔法世界全土に発表する新条約だが・・・これで大丈夫か？」

「エヴァ？　ああ、見せて・・・？」

内容は多くあるが、殆ど問題は無い。これならヘラス帝国やアリアドネー、新メガロメセンブリア連合国も合意するだろう。

先ず一番大きいのは奴隷制度の完全廃止、それに伴い旧オスティア出身の奴隷はオスティアに帰還する事と、奴隷階級にあった者の衣食住及び職の保障がある。

他にも戦争廃絶と闇の福音の賞金首からの抹消、魔法世界全国の流通や犯罪者取締り、封印した墓守人の宮殿の共同監視もあって、今までの魔法世界から大きく変わる内容となっていた。

「これで、魔法世界は大きく変わるのだな・・・・・・争いは旧世界では無くならない、だが・・・魔法世界からは失われる」

「ああ、そしてその平和を維持することが、これからの私達魔法世

界の住人の戦いなんだ」

条約の事はこの辺にして、アリスもエヴァも復興に参加することにした。

既にシルヴィアや月詠、ラカン、アル、茶々丸、ペルシクムも参加しているのだから、自分達も参加しないと民に示しが付かない。

「じゃあ、先ずは残った瓦礫を片付けるとしますかね・・・」

腰から“姫”を抜いたアリスは“姫”と指輪、ピアスに魔力を流す。

「多重高速詠唱！　千の雷！　燃える天空！　闇の抱擁！　術式混合固定、黄昏の剣・・・魔法付与！　術式付与完了・・・是、“嘆きの焔雷姫”！！」

アリスお得意の術式武装、その中でも最強である森羅万象に次ぐ強力な術式武装・・・そして、大戦直前までは封印していた術式武装、嘆きの焔雷姫になった“姫”を構え、目の前に聳え立つ大岩の前に立つ。

この大岩、重すぎて浮遊魔法を掛けても中々持ち上がらないらしい。無駄に魔力を消費してしまうので、アリスが破壊する事になったのだ。

「啼け・・・轟く焔の嘆き・・・・・・」

下段に“姫”を構え、闇色の雷を纏う闇色の炎が更に燃え上がった。

「闇雷黒焔破！！」

円を描く様な軌道で振られた“姫”から闇色の雷を纏う闇色の炎が渦となって大岩に向い、包み込むと、中心から溶け始め、１０秒と掛からずに燃え尽きた。
更に驚く事に、大岩の向こうにあった建物は一切燃える事なく、上手く大岩のみを燃やし尽くしたのだ。

「さて、建物は・・・随分と風化してるけど、うん」

現れた建物は当時の騎士団が使っていた稽古場だった。建物の殆どが風化してしまっているが、当時の物が原型を留めて残っているのは助かる。

「よし、この建物はこの形のまま建て直しだな」
「陛下！」
「ん？」
「なんだ？」
「っと、エヴァンジェリン宰相もいらしてましたか！　実は旧王城内部の宝物庫辺りに少し強力な魔物が占拠していまして・・・」
「ふん、なら私が行こう・・・アリスはこのまま陣頭指揮でもしていろ」

復興活動を行っている新ウェスペルタティア王国騎士団の一人――嘗てのウェスペルタティア王国騎士の息子らしい――が、魔物討伐を頼みに来たので、エヴァがそちらに向かう。
アリスはこのまま復興の指揮をしながら、外の魔獣退治をしつつ、復興の邪魔になる障害物の排除を続ける事になった。

旧王城及びその他の復興活動はやはりと言うか、時間が掛かった。

だが、大分完成が見えてきたので、そろそろ他にも手を回して良い頃合になると、今度は旧オスティアに新しい物を作る計画が立ち上がってきた。

「現在、オスティア全土で一般的に使われる空港は新オスティア国際空港のみとなっています。ですので、旧オスティアにも新たな国際空港を作るべきかと思います」

新ウェスペルタティア王国重役会議、その場で国王のアリス、宰相のエヴァ、財政大臣のシルヴィア、その他の法務大臣や厚生労働大臣など、旧ウェスペルタティア王国で力を振るっていた者、またはその子孫達が集まって旧オスティア復興計画を練っていた。

そして今出た案は国際空港を旧オスティア・・・後の首都ウェスペルタティアに作ろうという話だった。

「確かに必要かもしれんな・・・しかし、シルヴィア・・・予算の方はどうなのだ？」

国際空港は確かに必要だと思う、だがエヴァが気にするのはやはり予算の事だった。只でさえ再興したばかりの国だ、国庫予算はまだまだ少ない方で、アリスやシルヴィアの私産も使っている状況だ。

「空港の規模にも寄りますが・・・そうですね。新オスティア国際空港クラスの規模は流石に無理です。他にも使う予定が多々ある現状では・・・そうですね、魔法世界で一番小さな国際空港と呼ばれているヘラス国際空港クラスの規模が限界でしょう」

「そうか・・・アリス・・・おっと、陛下、如何する？　流石に首都に作る国際空港としては些か小さ過ぎる気がしないでもないが」

「ん、そうだね・・・一応、ヘラス帝国やアリアドネーからは支援金も来ているけど、使いすぎるのは問題だし、国際空港は新オステ

ィア国際空港よりメガロメセンブリア国際空港クラスは欲しい所だから・・・何年か掛けてみる？」
「それが妥当か・・・」

何年か掛けて、その年その年の年間予算から少しずつ予算を使って作るしかないだろう。
次に出た議題は民の仕事だ。今は旧オスティア復興という仕事があるから問題無いが、段々と民に振り分ける仕事は増やしていかなければならないだろう。今まで奴隷階級だった者で、オスティアに戻ってきた者は数多くいるのだから。

「仕事としては王国騎士団、飲食店、宿泊施設、娯楽施設、学校教員、医療・介護施設、その他に色々とありますが、優先的に用意する仕事は如何なさいます？」
「騎士団は最優先だ。それから学校教員、魔法学校を国内に作ろうと思うからな。それと飲食店と宿泊施設は同時進行しておけ、娯楽施設は・・・その都度決める」
「宰相殿、他にも会社を興したいという者が現れた場合は如何なさいますか？」
「それは自由にやらせろ。場所くらいはコッチで用意してやる」
「かしこまりました」

エヴァの宰相としての腕は中々だった。アリスとしても文句は無いし、他の大臣たちもエヴァを宰相として充分に頼っているのだから、上々だろう。

「陛下、明日の予定ですが・・・明日も旧オスティア復興活動と、それと明日訪れる事になっておりますヘラス帝国のテオドラ皇女殿下との会談がございます」
「ああ、その辺のスケジュール調整は宰相に頼む」

「かしこまりました。エヴァンジェリン宰相、此方が予定となります・・・陛下のスケジュール調整、お願いします」
「うむ、確かに預かった」

この辺りで重役会議は終了、役員たちが会議室を出た後に残っていたアリスとエヴァ、シルヴィアは漸く肩の力が抜け、そのまま三人揃って机に突っ伏してしまった。

「はぁ・・・疲れる」
「同感です・・・」
「闇の福音と呼ばれ恐れられていた私が・・・宰相と呼ばれ頼られる様になるとは、な・・・・・・」

今や二代目・紅き翼のリーダー、メンバーとしてではなく、一国の国王と重役という重い立場になったアリス達は、この半年ずっと休み無く王国復興や政治の仕事に追われている。
今まで戦いに明け暮れた人生を送ってきたアリス達にとって、やはりこの仕事は大変で、正直な話、アリカやアマテルがどれだけ大変だったのか思い知らされる。

「まあ、母さんやアマテル様も時々手伝いに来てくれるから・・・何とかなってるけど」
「慣れるまでが大変ですね」
「私は貴様等が死んだ後も続けなければいけないと思うと先が思いやられるがな」

はぁ、と同時に溜息が洩れて、揃ってノロノロと立ち上がると、重い身体を引きずりながら自分たちの部屋に戻るのだった。

この後も何ヶ月に渡って復興作業は続き、その間にも魔獣退治や重役会議、他国代表との会談など、休む間も無く忙しい毎日を送るアリスだったが、民や重役員達の前では一切の弱音を吐く事は無かった。

ただ、只管に母やアマテルの築いた国を復興させたいという気持ちを一心に働き、そして真実の戦争から1年、アリスが結婚する頃には予定の半分以上の復興が終わっていた。

「さあ、もう半分も無い！　ウェスペルタティアの民のみんな！！復興最後の追い上げ、頼むぞ！！」

『オオオオオオオ！！！！！』

アリスの結婚から数ヵ月後、遂に新ウェスペルタティア王国は旧オスティアの復興を終え、旧オスティア改め首都ウェスペルタティアは嘗て以上の街になり、完成した王城にはアマテル、アリカ、ナギ、アリス、木乃香の銅像も並んでいた。

各国から流れてきた旧オスティアの民も皆、新ウェスペルタティア王国の民として暮らし始め、新たな職に就いて今までとは比べ物にならない幸せな日々を送る事が出来る様になって、国中から笑顔が絶える事はない。

「アリス陛下！」

「どうした？」

「王妃様のご容態が！！」

「っ！」

何事かと振り返れば旧・白き翼のメンバーで、今は王妃護衛役の桜咲刹那が何やら慌てた様子で走ってきて、木乃香の容態が芳しくないという旨を伝えてきた。

急いで木乃香の部屋に向かうと、部屋の中には王宮医療団が既に

検診をしており、入ってきたアリスに笑顔を見せる。

「陛下・・・おめでとうございます！　王妃様は、おめでたです！！　ご懐妊されておりますよ！！」

「・・・・・・はぁ」

「陛下、王妃様は妊娠されておられるのです！」

「・・・妊娠！？」

漸く何を言っているのか理解したアリスは慌てて木乃香の下に歩み寄り、ベッドの上に座っている彼女の顔を覗き込んだ。

「・・・木乃香・・・・・・妊娠、してるって」

「うん・・・聞いたえ・・・・・・ウチ、アリスさんの子、身篭ってるんやね」

目尻に涙を浮かべ、そっと優しく自身のお腹に手を当てた木乃香に、事実だと認識が追い付いてきたアリスが、同じように涙を浮かべて木乃香を抱きしめた。

「木乃香！」

「ちょっ！　アリスさん、苦しいって・・・」

「よくやった・・・よくやった、木乃香！！」

「・・・・・・うん、ウチも・・・ホンマに嬉しい」

これからが大変だろうけど、でも・・・妻の妊娠はそんな事が吹き飛ぶくらい嬉しいニュースだった。きっと民からも盛大に祝福される事だろう。

「アリスさん・・・早速、民に知らせなアカンやろ？」

「ああ、この喜びを民にも伝えないとね・・・桜咲！」

「はっ！」
「今すぐ準備に取り掛かれ！　1時間後には王国全土に発表出来る様にな」
「御意！」

結論から言えば、王妃のご懐妊というニュースは瞬く間にオスティア全土に広がり、そして王妃の妊娠を民は皆、心から祝福してくれた。
明るい話題が民を更に活気付け、新ウェスペルタティア王国は更に発展を遂げて行くのだが、それはまた別の話だ。

番外編1　「語られなかった10年間・王都建て直し」（後書き）

次回はアリスと木乃香の子供が出てきます。二人だけですけどね……。

番外編2　「語られなかった10年間・生まれた王子と王女」（前書き）

木乃香妊娠から出産までです。

番外編２　「語られなかった１０年間・生まれた王子と王女」

英雄と女王の子

番外編２

「語られなかった１０年間・生まれた王子と王女」

新ウェスペルタティア王国王妃が妊娠した。その知らせはオスティア全土だけに留まらず魔法世界全域及び、旧世界全ての魔法組織に伝わった。

魔法世界では各国が木乃香の妊娠を祝い、お祝いの品として様々な物を贈って来て、旧世界の魔法組織も大半から祝辞が送られて来たのだ。

特に、旧世界の魔法組織の中でも日本の関東魔法協会と関西呪術協会からは盛大な祝いが贈られてきて、それぞれの長が娘、孫の妊娠を喜んでいるのが一目瞭然である。

「木乃香、そろそろ安定期に入った事だし・・・少し城下町に出てみないか？」

「え・・・？　ウチはええねんけど、アリスさん公務はどうするんや？」

「今日は殆どする事も無いし、散歩程度なら問題無いよ。月詠と桜咲にでも頼んで護衛もしてもらうし、行こう？」

「ん～・・・そうやね。安定期入るまでずっと城に缶詰めやったし、偶には外出て民に顔見せんとなぁ」

と、言うわけで国王夫妻は城下町に出る事になった。

月詠と刹那を影ながら護衛に就け、二人並んで城の外に出てみれば街の至る所から民に声を掛けられる。

「アリス陛下！　っと・・・コノカ王妃!?　もうお外にお出になられて宜しいので!?」
「あやや、やっぱ顔見せに出て正解やったなぁ・・・心配され過ぎや、ウチ」
「王妃様！　ご懐妊おめでとうございます!!」
「ありがとうなぁ！」

アリスもだが、木乃香は本当に民に好かれている。安定期に入るまでずっと城から出てくる事が無かったので、民に心配され、今はこうして外に出れば誰もが安心して、笑顔を向けてくるのだ。

「なんや嬉しいわ・・・ええ民に恵まれて、皆ウチの事を心配してくれて・・・・・ウチ、この国も民も大好きや」
「うん、私もだ。でも木乃香の人気は本当に凄いよね・・・ほら」

アリスが指差した方を見ると、小さな女の子が木乃香を真似て黒い髪のストレートロングにして、アリスと木乃香に向かって手を振っていた。
二人はその女の子に手を振り替えしながら、少し笑ってしまった。まさか、髪型を真似てしまう程だとは思わなかったのだ。

「かわええなぁ、あの子・・・ウチの髪型を真似しとったえ?」
「ああ、魔法世界で黒髪なんて滅多に居ないから・・・魔法で染めたかな?」

そこまでして木乃香の髪を真似するなんて、余程の事だ。

「この子も・・・皆に好かれるんやろか?」
「ああ・・・きっとね・・・・・なんてったって木乃香の子供な

んだから」
「それ言うたらアリスさんの子でもあるんやえ？」
「そう、だね・・・私達の子供だから、当然だ」

木乃香が自分の下腹部にそっと手を添えて、アリスも同じように右手を添える。まだまだ小さな、儚い魔力が、そこからは感じられた・・・・・・それも、２つ。

「・・・２つ？」
「・・・え？」

おかしい、何故２つも感じるのか・・・、それはつまり、お腹の中に二人分の魔力があると言うわけで・・・・・・。

「まさか・・・」
「双子、なん・・・？」

思わず立ち止まった二人を、民達が何事かと見つめる。
そして、木乃香のお腹の中の魔力を慎重に調べてみた結果・・・・・・間違いなく、お腹の中には子供が二人・・・いた。

「双子だ！！」
「双子や！！」

両陛下の言葉がその場に居た民全員に届く、その言葉の意味、それがゆっくりと民達の頭で理解が追いついて行くと・・・・・・、大騒ぎになった。

「王妃様が妊娠してらっしゃるのは双子！？」
「一気に殿下が二人になるのか！」

「めでたいぞ！　今日は祭だぁ！！」
「母さん！　今日は店閉めるぞ！　祭の準備だ！！」

なんだか本当に、大騒ぎになってしまった。
この後、民が大騒ぎする中、城に戻ったアリスと木乃香は・・・
騒ぎを聞きつけたエヴァとシルヴィアに大いに怒られ、そして双子を妊娠していた事に、祝いの言葉を貰うのだった。

木乃香が妊娠7ヶ月に入ると、随分とお腹も目立ってきた。普段着ているドレスではお腹がキツクなるので、今は王族用のマタニティドレスを着て、公務を休んで城内にいる事が多くなる。
今は、公務を終えたアリスが部屋で休んでいる木乃香に寄り添っており、随分と大きくなったお腹に耳を当てていた。

「・・・お、動いた」
「やねぇ、内側から蹴られたわ」
「元気な子達だな」
「二人とも元気一杯や！　夜中も蹴ってくるから大変なんよ？」

大変とは言うけれど、その蹴られる感触が・・・木乃香は大好きだった。自分が母親になるのだという実感を蹴られる度に感じる事が出来て、本当に幸せな気持ちで心を満たしてくれる。

「確か、男の子と女の子だっけ・・・？」
「せや、そろそろ名前・・・決めんとなぁ」

先日検査に行って来た所、生まれてくる双子は男の子と女の子だという事が判明した。つまり、王子と王女・・・男の子の方はアリスの跡取りとなる事が決定している。

「重いモノを背負わせてしまうけど・・・きっと、この国を愛してくれる子たちに育ってくれる」
「そや、民の笑顔を見ればきっと・・・この子達もこの国が大好きになるえ」

しかし、困った事に名前はまだ決まっていない。そろそろ付けたい所なのだが、どんな名前にしようか悩んでしまうのだ。

「ファミリーネームはエンテオフュシアになるんだし、そうだね・・・和名を付けてあげたいかな」
「ウチやアリスさんの名前から取ってみる？」

和名で、アリスと木乃香から名前を取るのなら、どんな名前が良いか・・・。

「・・・あ、そうだ。昔、母さんに聞いた事があるんだけど、母さんって生まれたばかりの私に名前を付ける時、アリスって名前の他に候補があったんだって」
「確かアリスさんって、お義母様の名前とアスナの名前から取ったんやったよね？」
「うん、それでもう一つの候補がアスカ・・・アスナ叔母さんのアス、アリカのカでアスカっていう名前」
「アスカ、かぁ・・・・・・ん？」

アスカという名前に何か引っかかる所があった。アスカだと・・・アリスと木乃香の名前が入っている。

「そや！　アスカや！　明日香！！」
「明日香・・・？　あ、なるほど・・・・・・」

アリスからアとスを取り、木乃香から香を取る。それを繋げて明日香、明日香・S・K・エンテオフュシア、良い名前だ。

「よっしゃ、これで男の子の名前は決定や。ほんなら女の子の方はどうしよ?」

「なら今度は木乃香の名前を多く使って付けよう」

明日香に付ける香を除き、木乃をメインに考えて、アリスの名前を付けるのなら・・・、アとスは明日香に付けるから、残るリを付ければ・・・・・・。

「コノリ、木乃里なんて如何だろう?」

「木乃里・・・ええなぁ」

木乃里・S・K・エンテオフュシア、これで決まった。

「明日香、木乃里・・・元気に生まれてくるんよ? お父様もお母様も、生まれてくるんを楽しみに待っとるえ」

「無事、元気に生まれて来るんだ・・・明日香と木乃里に会える日を、楽しみにしてるから」

生まれて来る子供の名前も決まり、正式に国民及び魔法世界各国、旧世界の魔法組織へ伝えられ、多くの者が王子と王女の誕生を待ち侘びた。

そして、遂に臨月に入った木乃香が、二人の子供を出産する時が来た。

朝になって陣痛が来た木乃香は直ぐに王城内に用意されていた出

産室に運ばれ、この日は朝から国中がそわそわしていた。
特に、国王であり、夫であり、これから生まれて来る王子と王女の父親になるアリスは公務をしていたのだが、戦闘の為にと鍛え上げられた分割思考で公務をしながら出産準備に入った木乃香の事ばかり考えている。

「おいアリス、分割思考を無駄に使うな」

当然だがエヴァにはそれがバレており、他にもシルヴィアや会議に参加していた月詠と刹那、ラカン、アキラ、さよにもバレバレであったのだ。皆、一様に呆れたという表情でアリスを見ていて、他の大臣達もそれにやっと気付いたのか、困った様に苦笑していた。

「陛下・・・いえ、アリス様・・・木乃香ちゃんなら大丈夫です。もし何かあれば即座に連絡が来る事になっていますから、今はご公務に集中してください」
「シルヴィア・・・すまん」

アリスが国王になって以来、陛下と呼ぶようになったシルヴィアが、昔みたいにアリス様と呼んで元気付けてくれた。それに感謝して、アリスは分割思考を停止、即座に公務へと集中していくのだった。

木乃香が出産室に入ってから6時間くらいが経っただろうか、公務に集中していたアリス達のいる大会議室の扉が些か乱暴に開けられ、木乃香の傍に付いていた筈の女官が入ってきたのだ。

「陛下!!　王妃様の陣痛の感覚が狭くなりました!!　もう間もなくお生まれになられます!!」
「っ!　わかった!!　すぐ行く!!!」

「後は任せておけ、アリス」
「残りは私達で処理しておきますから」
「早く、木乃香のところへ」
「急いでください！」

エヴァ、シルヴィア、アキラ、さよがアリスを送り出し、月詠、刹那、ラカンも、それから他の大臣達も頷いてくれた。
アリスは皆への最大の感謝を心に、大会議室を飛び出し、女官では追いつけないスピードで出産室を目指す。

「陛下！」

出産室の扉の前には他の女官が待機しており、アリスは立ち止まって中の様子を尋ねる。

「先ほど、出産の方に入りました。もう間もなくですよ」
「・・・そうか、私は・・・ここで待っていれば良いのだな？」
「はい・・・それでは、私は中に入って王妃様に陛下が扉の前でお待ちになっている旨をお伝えしてまいります」
「頼んだ・・・」

女官が中に入って行くのを見届け、アリスは反対側の壁に背を預けると腕を組み、扉の向こうから産声が聞こえてくる時を待った。
そして、女官が中に入ってから更に1時間は経っただろうか・・・中から時折聞こえてくる木乃香の苦しそうな声がアリスの心を締め付け、こんな時に男が何も出来ないという事を嘆いてしまいそうになる。

「まだか・・・まだ、生まれないのか・・・・・・」

段々と不安が押し寄せてくるようになった。もしかして、難産なのではと思い、今すぐにでも扉を蹴破って中に入りそうになる自分を、必死に押し留めている内に、会議が終わったのかエヴァ達が走り寄って来た事に気付く。

「アリス・・・まだ、生まれてないのか？」

「ああ」

「もう一時間経ってるよね・・・木乃香、大丈夫かな」

「大丈夫ですよ、木乃香ちゃんならきっと・・・もう直ぐ生まれて来るかもしれません」

誰もが祈り、木乃香と子供達の無事を願う。

それから更に1時間が経って、遂に・・・・・・。

『んぎゃぁああ！　んぎゃぁああ！　んぎゃぁああ！』

赤ん坊の泣き声が扉の向こうから聞こえてきたのだ。更に5分ほどで泣き声が2つに増え、無事・・・出産が終わったのだと、証明していた。

「陛下！　どうぞ中へ！　皆様も！！」

扉を開けて中から出てきた女官がアリス達を中へと招きいれる。

出産室に入ると、ベッドの上には初産で疲れたのか、疲弊し切った表情をしていながらも、それでも顔の横でタオルに包まれて眠る我が子達に慈愛の目を向けている木乃香がいた。

「木乃香・・・」

「あ・・・アリスさん、見て・・・・・・右が明日香で、左が木乃

里や」
「ああ・・・よく、頑張ってくれた・・・・・・そうか、この子達が、私の・・・」

アリスの後ろでは、眠る双子の赤子を見て、涙を流しながら喜ぶ仲間達の姿がある。
そして、父親になったアリスは・・・女官が抱き上げて差し出してきた赤子・・・妹の木乃里を抱っこして、その重みを噛み締めていた。

「重い・・・それに、温かい・・・・・・」

木乃香も、疲れているのでベッドからは降りられないが、上半身だけ起き上がって兄の明日香を抱っこしている。

「ウチら・・・本当に親になったんやなぁ」
「抱っこして、漸く実感したよ・・・私が、親になった事」

生まれた双子を、両親が揃って抱っこをしている光景は一つの絵画の様で、見ている者全てを魅了した。涙が流れるほど美しく、幸せそうな光景が、この場にいる全ての者の心を、温かくする。

「明日香・・・木乃里・・・・・・生まれてきてくれて、ありがとう」
「お父様もお母様も、二人の誕生を祝福するえ・・・」

今日、この日・・・新ウェスペルタティア王国に新しい命が誕生した。国王夫妻の間に生まれた双子の跡取り、そして・・・未来を紡ぐ希望の光の誕生を・・・・・・祝福した瞬間である。

番外編２　「語られなかった１０年間・生まれた王子と王女」（後書き）

次回は…超が本来いた未来の話か、それか明日香と木乃里が生まれてから木乃香が明日葉を妊娠するまでの話になるかな？
たぶん、このどっちかになります。まあ、どちらにしても番外編３と番外編４になるので、どちらが先になるのかは…私の次第。

番外編３　「語られなかった１０年間・幸せの時間（前書き）

まず、最初に、ごめんなさい。最後の方がかなりやっつけ仕事になっていましました。

番外編３　「語られなかった１０年間・幸せの時間

英雄と女王の子

番外編３

「語られなかった１０年間・幸せの時間」

新ウェスペルタティア王国国王と王妃の間に双子の赤子が生まれた。

男の子と女の子、王子と王女としてこの世に生を受けた二人の子供は現在、両親からの深い愛情を受けながら、それぞれの腕の中でスヤスヤと眠っている。

「赤ん坊は泣くのと眠るのが仕事だって聞いた事があるけど、本当なんだなぁ」

「せやねぇ、さっきまでお腹すいたぁって泣いとったんが嘘みたいに静かやわ」

明日香を腕に抱いたアリスと、木乃里を抱いた木乃香は眠っている我が子に慈愛の笑みを浮かべ、ベッドに座りながら部屋の隅に置かれたベビー用品を見て呆れ顔になる。

そこには山の様に積み上げられたオムツや粉ミルク、玩具に洋服、離乳食に大量の幼児育成本があった。

「とりあえず、離乳食はまだ必要無いよね」

「あの離乳食、全部お爺様が送ってきた物や」

「嫌がらせか？　良い度胸をしている・・・クビにしてやろうか」

新ウェスペルタティア王国国王のアリスと、新ウェスペルタティ

ア王国下位組織である関東魔法協会会長では立場に差がありすぎる。近衛近衛右門はアリスと木乃香から見れば組織の下っ端に等しい。

「お爺様には後で返事するとしてや、明日香の事、話そう？」

「将来、か」

「将来、明日香はアリスさんの跡を継いで国王になる。その為の教育とか、魔法使いとしての教育とか、考えんと」

とは言っても、国王になる為の教育に関しては宰相のエヴァがやる事になっているので、特段心配はしていない。

残る問題は魔法使いとしてだが、これもアリスが直々に魔法と神鳴流の基礎を叩き込み、成長次第、誰かに弟子入りさせる。

「“姫”はいつか明日香に譲る。その時に術式武装を教えようと思うんだ。神鳴流の師匠は月詠がしてくれるみたいだから、後は魔法使いとしてだけど・・・」

エヴァは時期国王としての教育に専念してもらうから、他の誰かが良いのだけど、アリスの知り合いで丁度良い人間と言えば・・・。

「セラスさんに弟子入りさせようかな・・・あの人もそろそろ後釜を探して引退したいって言ってたし、引退したら明日香の師匠をしてもらえる様に頼んでおこう」

セラスなら魔法使いとして弟子入りさせるのに問題は無いし、信頼も出来る。

「まぁ、まだまだ魔法を教えるのは先の話だし、弟子入りなんて更に先の話だ。セラスさんには話を通しておくけど、明日香が弟子入りする頃にはセラスさんも引退しているだろう」

将来の弟子入り先も決まり、一先ず安心した二人は未だに腕の中で眠る我が子達を、優しく見つめるのだった。

明日香と木乃里が生まれて3ヶ月が経ったある日、アリスと木乃香は明日香と木乃里、ナギとアリカを連れて旧世界に行く事になったのだ。

明日香と木乃里を連れて関西呪術協会と関東魔法協会へ顔見世をする事になっており、近右衛門にとっては初の曾孫、詠春にとっては初孫と会う事になる。

「久しぶりの休暇だ、存分に楽しんで来い」
「ああ、私がいない間の政務を頼むよエヴァ」
「任された」

アリスと木乃香がいない間の政務に関してはエヴァとシルヴィアがやってくれる事になっているので、安心して旧世界に行く事が出来る。

嘗ての旧オスティア、現在のウェスペルタティア中央島のゲートポートへ移動したアリス達はゲートが開くまで時間が少しあるので、昼食を摂る事にした。

「しっかしよぉ、昔のオスティアと比べて随分と発達したもんだよなぁ」
「うむ、メガロメセンブリアよりも旧世界で言う所の近未来的な作りじゃな」

ナギとアリカの言う通り、ウェスペルタティア王国の中でも、ウェスペルタティア中央島は特に旧世界の近未来的な建物が多い。

このゲートポートにしても、メガロメセンブリアの復旧後に新装されたゲートポートよりも豪華で、ゲートポート内にはレストランやカフェ、宿泊施設などがあって、魔法世界一豪華なゲートポートとして有名になっているのだ。

「それで？　メシは何処で食うんだ？　俺もアリカも最近はゲートポートに来てねぇから何があるのか知らねぇぜ？」

「あんなぁ、最近ウチが監督して開店した日本食のお店があるんえ。お義父様とお義母様も日本食好きや聞いてん」

「ほう、それは楽しみじゃな。コノカのアイデアで造った店か」

この日本食の店、実はウェスペルタティア王国内にある日本食の店の中でも唯一、木乃香が完全監修の下に造られた店で、店内の造りや装飾の指導、メニュー決め、料理の作り方の指導まで全て木乃香が行ったのだ。

「ウチが王妃として初めて一番力を入れた仕事やったんよ。自信あるから是非お勧めや！」

そして、その噂の店の前に着いた。店の看板には日本語で京都屋と書かれていて、中に入ると直ぐ目に入る位置に木乃香の特大写真が張られている。

「あやや、何やこれやめて言うたのにぃ・・・恥かしいわ」

恥かしがっているが、微妙に嬉しそうな木乃香だった。

店員が驚愕しながらも丁寧に案内してくれた席に座ったアリス達は、早速だが木乃香が考えたというメニューを見てみる。

「へぇ、昔、詠春の所で食ったメシとかもあるのな」

「うむ、懐かしいの」

ナギとアリカは嘗て京都に行った時に食べたという懐石御前を、アリスは京野菜をふんだんに使ったミニ鍋定食、木乃香は秋刀魚やわらか煮定食を頼んだ。

「うめぇ！　なんだよこりゃあ、マジでうめぇ！！」

「もう少し静かに食べんか愚か者！　しかし、確かにこれは美味いな」

「そう言っていただけるとウチも嬉しいです。監修した甲斐があるえ」

木乃香は明日香に哺乳瓶からミルクを飲ませながら、嬉しそうな顔をする。アリスも木乃里に哺乳瓶のミルクを飲ませながら、自分もミニ鍋定食を食べて、その味に満足するのだった。

京都屋を出たところで丁度良い時間となった。ゲートポートの受付を済ませてゲートまで移動したアリス達は、ゲート解放を待つ。

そして、ゲートが開放されて次の瞬間には、アリス達の姿は旧世界、日本の麻帆良学園地下のゲートポートに移動していた。

「さて、詠春さんと木乃美さんも既に来ているらしいから、直ぐにでも学園長室に行こうか」

「久しぶりやなぁ、麻帆良に来るんは」

というよりも、旧世界に来た事自体が久しぶりなのだ。

何はともあれ、４人は学園長室に向かい、到着して中に入ると、近右衛門と詠春、木乃美が揃ってお茶をしていた。

「おや、このか、アリス君、ナギ、アリカ様、お久しぶりですね」
「よう来たなぁ」
「うむ、待っておったぞい」

直ぐに木乃美がお茶を淹れてくれた。
用意されていた椅子に座ったアリス達は、早速だが明日香と木乃里を詠春と木乃美に抱かせると、二人とも初孫に顔を盛大に緩め、一瞬でメロメロになってしまう。

「お、おお・・・孫ですか、私がお爺ちゃんになったのですね」
「ウチもお婆ちゃんやなぁ、なんや複雑やわ」
「詠春、俺もお爺ちゃんだぜ？　アリカもお婆ちゃんだ、何か不思議だよなぁ。俺達に孫が出来るなんてよ」

嘗て、初代・紅き翼として共に戦った戦友の子供同士が結婚して、孫が生まれるなど、当時は考えもしなかったが、今こうして初孫を抱っこしていると、本当に不思議な縁を感じてしまう。

「む、婿どの・・・ワシにも抱かせてくれんかのう？　ワシにとっても曾孫じゃし」
「あ、そうでしたね。どうぞ、お義父さん」
「う、うむ・・・ふぉ・・・良いのう、長生きした甲斐があるというもんじゃわい」

本当に楽しい時間だ。アリスも木乃香も、ナギ、アリカ、詠春、木乃美、近右衛門、誰もが笑って、そしてスヤスヤと眠る双子が本当に可愛くて、穏やかな時間が流れた。
その後、今度こちらに来るときは京都に遊びに行く事を約束して、アリス達の旧世界滞在は麻帆良のみに留まるのであった。

そして、時は流れ明日香と木乃里が2歳になって少ししてから、木乃香は再び妊娠した。

出産予定日は双子達が3歳になってから、翌年になるとの事で、再び王国はお祭り騒ぎになり、前回の妊娠騒動の時が面白かったからと、エヴァがその祭りを大いに盛り上げて、王国中枢機能の殆どが数日ストップしてしまい、アリスからお叱りを受けてしまう事になるのは別の話。

「また、名前を付けなあかんなぁ」
「そうだね・・・女の子らしいから、何が良いかな？」
「今度はアリスさんの名前を付けたらええんやない？　あす・・・？」
「木じゃ語呂が悪い・・・木じゃなくて、葉なら・・・」

明日葉、明日葉・S・K・エンテオフュシア、即席で考えた名前だが、中々良かった。

「明日葉かぁ・・・ええなぁ」
「なら、決まりだね」

こうして、第二王女の名は明日葉と決まった。

生まれてきたのはアリス似の女の子で、名は明日葉と付けられ、明日香や木乃里とは違い、王家の魔力は持っていなかった為、後の関西呪術協会の跡取りとなる事が決定するのだった。

番外編３　「語られなかった１０年間・幸せの時間（後書き）

次回は、語られなかった１０年間シリーズではなく、超の本来の未来のお話です。
その次は再び語られなかった１０年間シリーズに戻ります。

番外編４　「スプリングフィールドの末裔」（前書き）

今回は超のいた未来のお話です。

番外編４　「スプリングフィールドの末裔」

英雄と女王の子

番外編４

「未来編・スプリングフィールドの末裔」

これは、アリス・スプリングフィールドとネギ・スプリングフィールドの最後の戦いで、ネギ・スプリングフィールドが魔族化しなかった未来のお話である。

二人の戦いはアリス・スプリングフィールドの勝利という形で終わり、ネギ・スプリングフィールドは死にはしなかったものの、魔族化の一歩手前で何とか押し止まるものの、完全なる挫折を味わい、兄に対して憎しみを残す事となるのだった。

そして時は流れ、アリス・スプリングフィールドはアリス・Ｓ・エンテオフュシアと名を変え、新・ウェスペルタティア王国を建国、近衛木乃香を伴侶として永き幸せを掴み、生涯を終えた。

ネギは最後の戦いからずっと一人で世界を彷徨い歩き、いつしか結婚して子を成し、そして自身の子孫にこう言い残してこの世を去った。

「所詮、魔法使いの世の中は力が全て。力無き者に生きる資格は無い、力が無い者は人ではなく、犬畜生にも劣る存在だ」

そして、アリス達が活躍した時代から既に１００年以上が経った。

アリスによって救われた魔法世界は特に大きな争いも無く、ずっと平和を保ち続けてきた。新・ウェスペルタティア王国では初代国

王であるアリスの存在を神聖視して、彼の功績を称え、皆の憧れ、目標としている。

１００年以上、新・ウェスペルタティア王国の宰相を務めているエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルが生き証人として初代国王の逸話を代々の国王に語り継いでいるので、余計にでもあるのだ。

そんな中、ネギ・スプリングフィールドの子孫、いつの間にか英国系から中国系の家系になっていた超家（チャオ）では一人の赤子が生まれた。名を鈴音と名づけられた女の子は・・・魔法が使えなかった。

ネギを祖とするスプリングフィールドの系譜では魔法を使えない者は人として扱う必要が無いという慣わしが出来ており、鈴音は魔法が使えないと発覚してからずっと、親戚はおろか、両親にすら人として扱われなかったのだ。

無視、虐待、魔法の実験体、ストレス解消の為の的、様々な暴力が鈴音に与えられ、いつしか鈴音は自分は生まれてきた事自体が間違いなのだと思う様になっていた。

そんな毎日が続くある日、超は遂に家出をする決意を固めた。若干８歳の頃ではあるが、もうこれ以上は限界だと悟り、彼女は超家を出て魔法世界を彷徨い歩いていた。

だが、８歳の子供一人で旅に出た所で何が出来る訳でもなく、食べる物も無い状況で鈴音はついに旅半ばで倒れてしまう。

ああ、自分は此処で死ぬのだと、そう思っていた鈴音だったが、そんな彼女を見つけ、拾ってくれた人間がいた。

「大丈夫かい？　随分とガリガリに痩せて・・・ほら、これを食べるといい」

その男は長い金髪に青と緑のオッドアイが特徴的な人間だった。名を明日馬・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアと言い、かの有名な新・ウェスペルタティア王国の第一王子だという。

「そっか・・・君はあのネギ・スプリングフィールドの家系なんだ」
「そうネ、そして魔法を使えないワタシは、酷い扱いを受けてたヨ」
「そうなんだ・・・なら、僕と一緒に来るかい？」
「アナタとカ？」
「うん、僕はそろそろ王国に戻るつもりだったから、君を王国に招待するよ」

そのまま、成り行きではあったが鈴音は新・ウェスペルタティア王国に行く事になった。
ウェスペルタティア王国に着てからの鈴音の生活は今までのものとは一変、王城での生活を国王であるアリマ・S・K・エンテオフュシアに許され、宰相であるエヴァンジェリンの教育を受けながら幸せな生活を送れる様になったのだ。

「エヴァンジェリン様は、建国当時からこの国にいるのだったネ？」
「む？　ああ、確かに、私は初代国王陛下と共に王国を築き上げた一人だ。陛下がリーダーを務めていた二代目・紅き翼のメンバーでもあったからな」

鈴音の目の前にいる金髪の少女、この国の宰相であり、もっとも古くから国を見守り続けてきた重鎮であるエヴァンジェリンは当時の事を思い出して、実に懐かしそうな顔をした。

「初代の陛下と言うと・・・アリス陛下カ？」
「ああ、そうだ。アリス陛下だ」
「かつて魔法世界崩壊の危機を救った英雄であるとも聞いたヨ。それと、ワタシのご先祖様の兄だとも」
「・・・確かに、ぼーや・・・ネギ・スプリングフィールドはアリス陛下の弟だった。あいつの事も覚えているよ・・・破門したとは

いえ、弟子だったからな」

エヴァンジェリンから当時の事を色々聞いた。アリスと初めて出会った時の事や、旧世界での話、魔法世界に来てからの事、そしてアリスとネギの戦いの事・・・。

「正直、あの時にぼーやを殺しておけばと思った。まぁ、そうしたらお前が生まれてこないから少し微妙なのだがな。それでも思うよ、ぼーやを殺しておけばお前のような不幸な幼少時を過ごす者も現れなかったのにな」

「・・・」

確かに、アリスとネギの戦いでネギが死ぬか封印でもされていれば、鈴音は生まれてこなかっただろうが、鈴音が不幸な幼少期を過ごす事も無かった。

「なら、もしも過去を変える事が出来たら、どうするネ？」

「ふん・・・そうだな、旧世界に魔法の存在でも公開してみるのも面白いかもな。ぼーやは旧世界から動けなくなるか、それとも男として不能になる年齢までオコジョ刑になるだろう。アリスも何の憂いも無く王国を建国出来ただろうさ」

もっとも、それは只の夢物語であり、過去に過ぎ去った事だ。エヴァンジェリンが愛したアリスも、仲間達も、敵となったネギやその仲間達も、１００年以上も昔に亡くなっているのだから。

「なら、ワタシがそれを実現して見せるネ！」

「・・・何？」

「エヴァンジェリン様の事、陛下や殿下と同じくらい大好きヨ。だからその願い、ワタシが叶えてみせるネ！　この先、ワタシと同じ

様な存在が生まれないとも限らないから、別の未来ではあっても、ワタシと同じ思いをする子を減らす為にネ！」

「・・・フ、やはりお前は・・・超なのだな」

「？　エヴァンジェリン様、ナニカ？」

「いや、それより鈴音、それをするなら過去に行く必要がある。そんな魔法でも不可能な芸当をどうやって行う気だ？」

いや、問うまでもないだろう。彼女は天才、それも彼女の祖先であるネギ以上の天才なのだ。

「魔法で足りないなら科学で補うヨ！！」

こうして、鈴音によるタイムマシン製造計画が始まった。

だが、このまま過去に行っても超の力では何も出来ない。ならば如何するか、科学だけでは魔法に勝てる確立は低い。勝てないとは言わないが、もう少し確実性を上げておかなければ計画の意味が無いのだ。

「エヴァンジェリン様、ワタシに呪文処理を施して欲しいネ」

「・・・何だと？」

「今のままではワタシは科学という手段しか持ちえていない。なら、持っている膨大な魔力を使うための魔法を呪文処理によって使える様にしたら勝率も上がると考えたヨ」

呪文処理、それはここ数年で開発、実用され始めたものだが、その危険性、非人道性から使用を禁止したばかりのものだ。

「魔法が使えれば、切り札として使えるから、だからやって欲しいネ」

「・・・使い過ぎれば死ぬぞ？」

「死ぬ気は無い・・・けど、覚悟の上ネ」
「・・・知り合いの呪文処理専門研究者を紹介してやる、そいつに頼め」
「謝謝(シェイシェイ)ネ」

こうして、鈴音は全身に呪文処理を施し、魔法が使える様になった。

さいごの　切り札として温存する事にはなったが、慣らしとして試験をする時に、国王から術式武装を教えてもらい、第二の切り札として使えと言われたので、それに感謝しつつ、死ぬ思いで訓練と調整をしながら、遂にタイムマシン“カシオペア”の試作品が完成した。

その試作品を元に最終調整を施した物を3つ造り、ついに鈴音が過去へ旅立つ日が来る。

「それでは、行ってくるネ」
「ああ、向こうでアリス陛下によろしく頼む」
「了解ネ」

見送りに来ていたエヴァンジェリンの頼みに応え、鈴音は見送りに来たもう一人の男性、明日馬の方を向いた。

「殿下・・・行ってきます」
「ああ、頑張れ・・・鈴音、必ず、生きて帰ってくるんだ」
「・・・っはい！！」

明日馬からの激励を受けて、涙が流れそうになるのを堪えながら鈴音はカシオペアを起動、嘗ての旧世界、アリス・スプリングフィールドが麻帆良学園に来る2年前に設定した。

「エヴァンジェリン様、明日馬殿下・・・いってきます！！」

こうして、超鈴音は過去へ行き、そして・・・・・・。

「アリス陛下、未来を頼むヨ」

戦いに敗れ、アリスに未来を託して帰ってくる事になるのだった。

番外編４　「スプリングフィールドの末裔」（後書き）

次回はエヴァ、初めての子育て！
多分次回の、その次辺りで番外編終了です。

番外編5　「語られなかった10年間・福音の子育て」（前書き）

子育て経験なんて…無いよ！！

番外編５　「語られなかった１０年間・福音の子育て」

英雄と女王の子

番外編５

「語られなかった１０年間・福音の子育て」

「びゃあああああああ！！！」

「うえええええええええ！！！」

「お、おい・・・泣くな・・・どうしたら、どうしろと言うのだぁ！？」

現在、新・ウェスペルタティア王国王城に新しく造られた育児室にて、この国の宰相であり、嘗て６００万ドルの賞金首だった闇の福音ことエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルは半年前に生まれたばかりの第一王子と第一王女、明日香と木乃里の面倒を見ていたのだが。

「オムツは換えたばかりだし、ミルクも先ほど与えた・・・ああもう！　なら何で泣くのだ！？」

アリスと木乃香がシルヴィア、月詠、刹那を連れてヘラス帝国へ訪問に行ってしまった為、二人の面倒をエヴァが見る事になり、最初こそ楽な仕事だと思っていた彼女も、先ほどから泣き止まない双子に困惑している。

「くそっ！　こんな時に限ってさよは国境にいるし、アキラは休暇でメガロメセンブリアか・・・茶々丸とペルシクムも電子室で缶詰め、アスナは墓守人の宮殿付近に行ってるし、ナギとアリカも今日

は夫婦で旅行だと!?　何なのだ本当に!!」
『びえええええええええ!!!!』
「あああ・・・・・・な、何が原因だと言うのだ」

エヴァの方が泣きたくなってしまった。
その時、育児室の扉をノックする音が聞こえ、入ってきた人物がいた。

「エヴァンジェリン宰相?　あの、殿下の姫殿下の泣き声が絶えませんが、如何しました?」
「み、ミーナぁ・・・助かった」
「あの・・・?」

入ってきたのは王城に務めるメイド副長、ミーナ・キャンベルだ。
桃色の髪をストレートに伸ばし、前髪にワンポイントで星のピンを付けた彼女は、今のエヴァにとっては救世主とも言える存在だろう。

「ミーナ、貴様は確か子育ての経験があったな」
「はい、今年で4歳になる息子がいますが・・・」

ミーナは現在27歳、王国騎士の男性と結婚していて、4歳になる一人息子がいる。

「実は、見ての通り明日香と木乃里が泣き止まないのだ。ミルクはもう与えてるし、オムツも替えた。他に思い浮かぶ事が無くて困っていたのだ」
「あら、それでしたら喉が渇いておられるのではありませんか?」
「・・・何?」
「少々お待ちください」

そう言ってミーナは近くにあった空の哺乳瓶二つを消毒して、部屋に備え付けてあった冷蔵庫から天然ミネラルウォーターを取り出し、哺乳瓶に入れると、少し暖めてから木乃里を抱っこして飲ませ始める。

「む、木乃里が泣き止んだ・・・」
「明日香殿下の方もお願い出来ますか？」
「う、うむ」

ミーナに倣って明日香に水の入った哺乳瓶を近づけると、泣き止んで凄い勢いで水を飲み始めた。
哺乳瓶が空になると、満足したのか明日香も木乃里も可愛いゲップをしてウトウトし始める。眠くなったのだろう。

「こんな単純なことだったのか・・・」
「はい、ただミルクを与えただけでは駄目なんです。赤ちゃんも私達同様にお腹が空いたり、喉が渇いたりしますから、ミルクを与えたからと安易に考えてはいけません」
「成る程な・・・」
「他にもお腹が空いていなくても、喉が渇いていなくても泣いてしまう事があります。もしその時、オシメではなかったらエヴァンジェリン宰相なら幻術で大人の姿になっておっぱいを吸わせれば宜しいです」
「そうなのか？」

赤ん坊というのはそういうものだと、ミーナが言う。流石に子育て経験者は違うと改めて感心したエヴァは、眠った二人をベビーベッドに寝かせると紅茶を淹れてミーナに差し出す。

「これは、申しわけ御座いません。私のお仕事でしたのに・・・」

「気にするな、これは私からの礼と思ってくれ」

エヴァが淹れた紅茶を飲みながら、備え付けの椅子に座る二人はベビーベッドで眠る双子に目を向け、微笑ましい気持ちを素直に表情に表した。

「子供というのは凄いな・・・あんなに小さくて、まだ自我すら無いのに、その魂の輝きというのか・・・それが私達大人よりも綺麗だ」

「それが子供の良い所です。そして、それがあるからこそ、子供というのは守るべき存在なんですよ」

「ああ、そうなのだろうな・・・吸血鬼になって、成長出来ないこの身体では、子を成す事が出来ないから、今まで経験すら無かった私だ、余計に驚く」

６００年間、成長する事の無かった身体、女性の月のモノが来る前に吸血鬼となった彼女は、決して妊娠する事は無い。

だからこそ、余計に子供という存在、妊娠というものに憧れと尊敬を持ってしまうのだ。

「まぁ、一応私でも妊娠する事は強制的になら可能なのだが・・・身体が持たないからな」

魔法世界には強制排卵剤という物もあるし、魔法の中にも強制排卵魔法というものもある。その効果は月のモノが来ない子供だろうと、安全日の女性だろうと、強制的に排卵させるというものだ。

それを使えば当然だがエヴァでも妊娠は可能だ。しかし、１０歳の時点で成長が止まっているエヴァの身体では妊娠、出産には耐えられない。

「エヴァンジェリン宰相・・・」
「ふん・・・ああ、あの子達が寝ている間に片付けでも済ませておくか」

紅茶を飲み終えたエヴァは立ち上がって随分と物が散乱してしまった部屋の片付けを始めた。
同じく紅茶を飲み終えたミーナは手伝おうかと思ったのだが、片付けをしているエヴァの横顔が、あまりにも楽しそうで、手伝うのを憚られてしまったため、静かに頭を下げて部屋を出て行くのであった。

エヴァが明日香と木乃里を初めてお世話してから2年が経った。
あれからエヴァはアリスの子供達の世話を、アリス達がいない時に任される様になっていて、エヴァも子育てが面白くなってきていたので、ずっと続けていた。
そんなある日、エヴァはアリスとシルヴィアの子供と、アリスとさよの子供を寝かしつけて一段落したので王城の中庭に来ていた。

「良い天気だ・・・」
「エヴァまま～」
「エヴァおかあさん！」
「ん？　ああ、木乃里、明日香」

エヴァを呼ぶ声がしたので、振り向いてみると2歳になった明日香と木乃里がヨチヨチ歩きで歩み寄ってくるのが見えた。その向こうにはミーナの姿もあり、自分よりエヴァを取った双子に苦笑している。

「エヴァおかあさん！」

「エヴァまま！」
「ああ、どうした？　随分とご機嫌ではないか」

因みに、明日香も木乃里も、エヴァの事は母と呼ぶ。勿論、本当の母親である木乃香の事も確りと母と呼んでいるので、問題は無いのだが、ただアリスと木乃香が忙しい時に世話をしただけのエヴァを母と呼ぶのも妙な話だとは思うも、悪い気はしない。

「エヴァおかあさん、これ！」
「エヴァままにぷれぜんと～」
「プレゼント・・・？」

はて？　と首を傾げるが、とりあえず素直に受け取る。
二人からプレゼントされたのは似顔絵だった。エヴァの似顔絵が描かれており、二人で描いたのだろう、所々で随分と描き方が違う。
だが、それよりももっと驚いたのは、エヴァの似顔絵の上には二人の字だろう、クレヨンで書かれた“おたんじょうびおめでとう”の文字、それを見て、今日はエヴァの誕生日だった事を思い出した。

「ああ、そうか・・・今日は私の、誕生日だったな」

逆算して導き出した誕生日、それを二人が覚えていてくれて、そしてそれをこうして祝ってくれた。似顔絵というプレゼントまで用意してくれた二人の顔の高さまでしゃがんだエヴァは、両手一杯に二人を抱きしめた。

「ありがとう・・・明日香、木乃里・・・すごく、嬉しいぞ」
「エヴァまま、だいすき～！」
「ぼくも、エヴァおかあさんすき～！」
「私もだ・・・私も、明日香と木乃里が、大好きだ」

嬉しくて、本当に嬉しくて、涙が流れた。明日香と木乃里が、エヴァを第二の母として慕ってくれている事も、プレゼントも、何もかもが嬉しくて、エヴァは二人を抱きしめたまま、ミーナが見ているのも構わず涙を流し続けるのだった。

番外編5　「語られなかった10年間・福音の子育て」（後書き）

次回が番外編最後です。少し成長した明日香と木乃里、明日葉が出てきて、そしてアフターシリーズに突入します。

番外編６　「語られなかった１０年間・三代目の翼」（前書き）

最後の番外編です。

番外編６　「語られなかった１０年間・三代目の翼」

英雄と女王の子

番外編６

「語られなかった１０年間・三代目の翼」

真実の戦争から９年が経った。

７歳になった明日香と木乃里は魔法使いとしての基礎と応用を父と母から教わり、明日香は神鳴流を月詠から、木乃里は宝石魔法をシルヴィアから教わっている。

４歳になった明日葉は魔法と陰陽術の両方を教わる為の下地を築いている所だ。

「お兄様、みてください！」

「どれ？」

「えい！　開放！　紅き焔！！」

木乃里が投げた宝石が割れると、紅き焔が発動した。シルヴィアから教わった宝石魔法を兄に見せて自慢しているのだ。

「わぁ、凄いね！　僕も月詠さんから教わったの見せてあげる！斬空閃！！」

練習用の刃挽きした野太刀から斬撃が飛んだ。明日香も月詠から教わった神鳴流を自慢している。

「お兄様も凄い！」

「うん、僕も木乃里も見本になれって言われてるから、頑張らない

とね」
「月耶君とシルヴィーちゃんの見本ですね！」

月耶は月詠の息子で、シルヴィーはシルヴィアの娘の名だ。月耶は母から神鳴流を習い、シルヴィーは母から宝石魔法を教わっているのだが、まだまだ基礎の基礎の段階で、明日香と木乃里は二人の見本になって欲しいと期待されているので、二人とも一生懸命練習しているのだ。

「もう直ぐセラスさんの所に弟子入りするんだよね？」
「はい、お父様がエヴァままとお話してましたから」
「楽しみだなぁ、セラスさんに教わるの」
「私もですよ！」

それもあと数ヶ月の話、だからこそ、今のうちに出来る限り腕を磨きたいと思い練習する二人は、間違いなくアリスの子供だった。

「おにいさま～、おねえさま～」
「あれ？　明日葉？」
「明日葉ちゃ～ん」

明日香と木乃里を兄、姉と呼ぶ存在、そして聞き覚えのあり過ぎる声、それは二人の妹であり、新・ウェスペルタティア王国第二王女にして次期・関西呪術協会の長、明日葉だった。

「？　おにいさまとおねえさまはれんしゅうです？」
「うん、明日葉も練習してたの？」
「はい！　がんばってじゅふのかきかたをおぼえました！」
「偉いですね～、明日葉ちゃんは」
「えへへ～」

姉に頭を撫でられて喜ぶ明日葉、兄姉妹仲が非常に良い三人の姿は、少し離れた所で見守っている王国騎士の頬を緩ませる。

「あ、陛下！　王妃様！　お疲れ様です！」
「ああ、三人の護衛、ご苦労だね」
「いえ！　王国騎士として、当然の勤めにございます！！」
「それでも、見守ってもろて、ウチらも感謝しとるえ」
「光栄にございます」

三人を見守っていた騎士の傍に、アリスと木乃香が近づいてきた。
騎士は慌てて敬礼して、アリスと木乃香も騎士を労い、継続して護衛を頼むと夫婦揃って子供達の所に歩み寄って行く。

「明日香、木乃里、明日葉」
「ちゃんと練習しとる？」
「父様、母様！」
「お父様、お母様！」
「おとうさま、おかあさま！」

三人とも、大好きな両親が来た事で今まで以上の笑顔を見せた。
駆け寄ってきた明日葉をアリスが抱っこして、歩み寄ってきた明日香と木乃里の頭を木乃香が撫でる。

「今日はセラスさんに弟子入りが決定した明日香と木乃里にプレゼントがあるんだ」
「僕と木乃里にですか？」
「何でしょう？」

明日葉を木乃香に渡したアリスは自分の影に手を入れて、目的の

物を二つ取り出した。
片方は黄昏色の剣、もう片方は木で出来た長い杖だ。二つとも見覚えがあるどころか、明日香も木乃里もよく知っている。

「それって、“姫”！？」
「それに、お爺様の杖・・・？」
「ああ、私が使っている“姫”と、父さん・・・ナギお爺様の杖だ」

アリスは“姫”を明日香に、ナギの杖を木乃里に手渡した。二人とも慎重に受け取り、不思議そうな顔で父の顔を見上げる。

「明日香、木乃里、お前達にこの二つを授ける。そして、二人には紅き翼を・・・任せるよ」
「父様！？」
「お父様！？」

“姫”もナギの杖も、そして紅き翼も、アリスにとって大切なモノのはずだ。それを二人に託すという事は、二人は父に魔法使いとして、そして将来の王国を担う者として認めたという事になる。

「二人に渡したモノ、それは大きな意味を持つ。その重みに負けない様に、頑張れ」
「・・・はい、僕は“姫”を受け継ぐ者として、父様の息子として、恥かしくない魔法使いになります！！」
「私も、お爺様の杖を受け継ぐ者として、お父様の娘として、恥かしくない魔法使いになる事を誓います！！」
「うん、応援してるよ」

“姫”とナギの杖を受け継いだ明日香と木乃里を見ていて、明日葉が不満そうな顔をした。その表情を母に向けると、母は苦笑しな

がら明日葉の頭を撫でる。

「明日葉は、もう少し大きくなったらウチの扇をあげるから、それまで我慢や。ちゃんと練習頑張るんやよ？」

「は～い」

素直な子で良かった。母から大きくなったら扇が貰えると判ってご機嫌になった明日葉、明日葉も母が使っているオリハルコン製の扇の事は知っている。それが貰えるのなら明日葉も満足だった。

「明日香、セラスさんに弟子入りして、確り魔法を学べ。一人前の魔法使いになったら、術式武装を教えてあげよう」

「術式武装を！？　うん！　頑張るよ！！」

父の代名詞と言ってもいい術式武装、それを一人前の魔法使いになったら教えてもらえる。余計に明日香はこれからの修行に力が入るだろう。

勿論、木乃里にも教えるが、ナギの杖では完全な術式武装を使う事は出来ない。“姫”を使って初めて術式武装は完璧になるのだから。

「それじゃ、私とお母さんは少し出かけてくるよ」

「お父様とお母様、お仕事ですか？」

「そうなんよ、国境のさよちゃんに呼ばれとってなぁ」

「さよさんですか、父様・・・何かあったのですか？」

「さぁ、また残党だとは思うけどね」

国境で現れるのは殆どが犯罪者や旧・メガロメセンブリア元老院の上層部派残党だ。特に残党の方が多く現れるので、今回もその辺なのだろう。

「ほんならなぁ、ちゃんと練習してるんやえ？」
「「はい！」」

両親が去って行ったのを見送り、明日香と木乃里は早速だが魔法の練習、明日葉は作った呪符のテストを開始した。
将来を担って立つ三人の瞳は、まだ子供ながらアリスの子供だという証である力強い輝きが宿っている。

魔法世界某所、薄暗い地下の一室では一人の女性がベッドの上に座ってた。
女性が座るベッドにはもう一人、眠っている人間・・・男性が居て、二人とも衣服を身に纏わず、素肌を曝している。

「もう直ぐです・・・もう直ぐ、私の復讐は始まるです」

長い黒髪の一部を三つ編みにした女性は適当なシーツを身体に巻いて立ち上がると、ベッドサイドに置いてあったタバコを一本口に咥え、魔法で火を点けると、タバコの隣に置いてあった物に目を向けた。
そこに置いてあったのは、白い翼をモチーフとしたバッチ・・・嘗ての白き翼の証であるバッチだった。

「アリス・S・エンテオフュシア・・・・・・必ず、王国諸共、殺してやるです！！」

番外編６　「語られなかった１０年間・三代目の翼」（後書き）

次回からアフターシリーズが始まります！
主人公はアリスから替わり息子の明日香となります！！

プロローグ（前書き）

アフターシリーズの始まりです。

プロローグ

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

プロローグ

嘗て、戦争があった。３７年前には魔法世界全土を巻き込んだ大戦、そこで活躍した初代・紅き翼と完全なる世界との戦い。
１７年前には世界崩壊の危機と真実の戦争と呼ばれる魔法世界の全ての国とメガロメセンブリア元老院上層部との戦争、その戦争で活躍した二代目・紅き翼は新・ウェスペルタティア王国を建国して、永きに渡る平和を実現した。
二代目・紅き翼のリーダーだったアリス・Ｓ・エンテオフュシアは国王となって現役を引退、その後は息子である明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアと娘の木乃里・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアが三代目・紅き翼を結成して魔法世界各地に赴き、数々の犯罪者を捕らえて活躍していた。

三代目・紅き翼の野営地、そこには焚き火の前で肉を焼いている長い艶やかな黒髪をストレートに伸ばしたオッドアイの少年、１５歳になった明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアの姿があった。

「ん、良い焼き具合だ」

焼きあがった肉を火から離して用意してあった皿の上に切り分けていると、後ろから金髪の長い髪を三つ編みにした少女、明日香と同じく１５歳になった木乃里・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアと、三代目・紅き翼のメンバーの一人である少女と青年が歩いてきた。

「お兄様、お肉焼けました？」
「木乃里か、焼けたよ。そっちは？」
「リューガ君が野イチゴ見つけました。それとメルシィちゃんが野草を」
「おう、良い苺だぜ！　甘さも充分だ」

リューガと呼ばれた青年、リューガ・ウォンバットは短髪にした銀の髪に褐色肌のヘラス族の青年で、年齢は３１歳。人間で言う所の十代後半という年齢の青年だ。

「明日香様、この野草ですけど、良い魔法薬が作れそうです」

メルシィ・ブルーメール、元々は旧世界のイスラエル魔法学園の生徒だったのだが、高すぎる才能故に孤立してしまい、逃げ出してしまった所を明日香に拾われた少女だ。
年齢は１３歳、陶磁器の様に白い肌にブルーシルバーの髪をサイドテールにしたフランス人だ。

「ありがとう、じゃあメルシィは僕の方を手伝って。リューガは木乃里と野菜を切ってくれると助かる」
「はい」
「おうよ！」

これで今日の夕飯の準備も終わる。
出来上がったオオトカゲの肉の塩焼きと、野菜と野イチゴのサラダをメンバー４人で仲良く食べ始め、２０分で全員完食するのだった。

「なぁ明日香」

「何？　リューガ」
「いやな、明日から何処に行くのか気になってよ」
確かに、明日からの目的地はまだ知らせていなかった。すっかり忘れていた事に明日香は苦笑して地図を取り出す。
「今はヘラス帝国付近のこの位置にいる。だから明日からはここ・・・新グレートブリッジに行こうかと思って」
「お兄様、それってリカード小父様からの依頼ですか？」
「リカード議長からですか・・・」
数日前、新メガロメセンブリア元老院議長であるリカードから依頼が入っていた事を思い出した。最近、新グレートブリッジ付近で何やら妖しい一団が目撃されているという事なのだ。
「妖しい一団だぁ？　んだよそれ、旧メガロの残党か完全なる世界の残党じゃねぇのか？」
「わかりません。ただ、小父様が言うには統率された服装だったらしいのですが、今まで見た事の無いものだったとか」
「ほほう・・・それより木乃里、いい加減に俺に敬語使うの止めれっての！」
「あ、ご、ごめんなさ・・・・・・ごめんね？」
「ケッ！」
そっぽを向いたリューガだが、その頬が若干だが赤く染まっていたのを明日香は見逃さなかった。妹と仲間の微笑ましい光景に若干だが口元を緩め、メルシィの方を向く。
「メルシィ、悪いけど明日、朝一でクリムゾンのグランさんに連絡を入れて迎えに来てもらって」

「わかりました。では、今のうちに眠っておきますね」
「うん、お休み」

寝袋に入っていくメルシィを見送り、明日香は夜空を見上げた。
17年前、父が救った世界の、綺麗な夜空は明日香の大好きな光景でもある。

「何でだろう・・・嫌な予感がするのは」

大好きな夜空を眺めているのに、胸の内に湧いてくる嫌な予感が止まらない。それが不安となって表情に表れる前に、いつの間にか明日香の隣に来ていた木乃里が身の丈ほどもある祖父の杖を夜空に掲げていた。

「木乃里？」
「ほら、お兄様も」
「あ、うん・・・じゃあ」

明日香も腰に差していた“姫”を抜いて木乃里の杖と交差させる様に掲げる。これがこの兄妹の昔からの癖だ。
どちらかが不安を覚えた時は、必ず夜空に向って杖と剣を交差させながら掲げていた。

「私も、嫌な予感がしますけど、きっと大丈夫です。だって、私もお兄様も、お父様とお母様の子供ですから」
「・・・そうだね、僕と木乃里は、父様と母様の子供だ」
「ええ、明日葉と、木乃亜もですよ」

今は旧世界の関西呪術協会に行っている妹の明日葉と、王城で暮らす幼い弟の木乃亜を思い出し、二人は改めて夜空を見上げた。

「うん、大丈夫。僕たちは守るべきものが沢山あるから」
「はい」

きっと大丈夫、そう思うだけで不安が消し飛んだ気がする。
その二人の姿を眺めていたリューガは、相変わらずのリーダーと、その妹の姿に苦笑して、自分も寝袋に入って眠る事にした。
明日は新グレートブリッジ、そこで何が起きるのかは判らないが、受け継いだ“姫”と杖、そして三代目・紅き翼がある限り、明日香も木乃里も、絶対に負けない。

プロローグ（後書き）

次回は新設されたグレートブリッジ、そこで何が待ち受けているのか。

第一話　「謎の組織」（前書き）

アフターシリーズ、記念すべき第一話です。

第一話　「謎の組織」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第一話
「謎の組織」

新グレート＝ブリッジ、３７年前の大戦で連合と帝国の戦場となった場所であり、１０年前に新しく造り直したメガロメセンブリアとヘラス帝国、新ウェスペルタティア王国を繋ぐ平和の架け橋となった場所だ。
新メガロメセンブリア元老院上院議員議長リカードが言うには、そんな場所に此処最近になって妙な集団が目撃される様になったらしい。
その真偽を確かめる為に、明日香たち三代目・紅き翼は二代目の代から紅き翼のメインシップとなっている戦艦クリムゾンで新グレート＝ブリッジに到着した。

「明日香様、リカード議長との待ち合わせ場所はこの辺りです」
「ああ、ありがとう。リューガ、悪いけど周囲に気を配っておいて。何が起きるか判らないし」
「おう、任せとけ！」

４人は新グレート＝ブリッジの中間地点、国境ステーションのカフェに入って紅茶や珈琲を飲みながら、明日香と木乃里はリカードからの依頼の資料を読み、メルシィはそんな二人のサポート、リューガは怪しい気配が無いか周囲を気配だけで探っていた。
カフェの席に座ってから３０分ほどしてからだろうか、漸くリカ

ードが来て、明日香の真向かいの席に座る。

「よお明日香、木乃里、久しぶりだなぁ。4～5年ぶりか？」
「お久しぶりですリカード小父さん」
「お久しぶりです」
「おう・・・へぇ、二人ともアリスや木乃香ちゃんに似てきたなぁ」

明日香と木乃里を一目見て、リカードは二人の両親の話題を出してきた。

確かに、明日香と木乃里は髪の色こそ反対だが、明日香は父に、木乃里は母に似ているどころか、二人の若い頃と瓜二つなのだ。

「それとそっちの二人が三代目・紅き翼のメンバーか？」
「リューガ・ウォンバットだ。ヘラス族でな、明日香とはラカン師匠の紹介で会ったんだ」
「メルシィ・ブルーメールです。元・旧世界イスラエル魔法学園の生徒で、今は退学して明日香様と共に行動してます」
「ほほう、リューガはラカンの弟子か」
「おう、親父がラカン師匠の部下でな。その縁で弟子入りさせてもらってた」

リューガは元々、新・ウェスペルタティア王国第一騎士団員の息子であり、第一騎士団長のラカンに直接弟子入りをしていた男だ。

リカードは親友の弟子という事でリューガを改めて見ると、成る程確かに・・・ラカン同様に気の扱いに長けているのが見て判る。

「それとメルシィだったか？　旧世界の魔法学園の生徒だったのか」
「メルシィちゃん、生まれつき魔力が人より高くて、更に魔法の才能も高すぎたみたいで、学園では周囲から孤立していたみたいです」
「それと、両親からも親である自分達を上回る才能を持った彼女を

妬ましく思ったのか、メルシィが学園から逃げ出すのと同時に捨てたらしいですよ」

そして気分転換にと魔法世界に来た彼女を拾ったのが明日香なのだ。

「見たところ後衛の魔法使いタイプって所か・・・明日香、お前はトコトン父親に似たなぁ。シルヴィア拾った時のアリスと似た状況じゃねぇか」

新・ウェスペルタティア王国財務大臣のシルヴィア・オーギスは、元二代目・紅き翼の一員にして明日香と木乃里の父、アリス・S・エンテオフュシアの最初の従者でもある女性だ。

彼女は元々、オスティア難民で、母が死んでから一人彷徨っていた所をアリスに拾われた経緯がある。

「っと、まぁ話もそこそこにしようぜ。今日、お前達に来てもらったのは他でもない。事前に言ってはあるが説明するぞ?」

此処最近、この新グレート＝ブリッジ付近に妖しい一団が目撃されるようになった。

その一団は皆、統一された服を着ていて、服装から完全なる世界や旧メガロメセンブリア元老院上院議員派の残党ではないという事は判っている。

「盗賊とか賞金首にしちゃあ服装に統一性があるってのも変な話だから、少し議会でも話題になってんだ」

「一番最初に目撃されたのはいつですか?」

「ああ・・・、確か1~2年前くらいだったか?　それから少しずつ目撃頻度が上がってんだ」

服装の統一性から、恐らくは組織的な集団だとは思われるのだが、魔法世界、旧世界、両世界に存在する魔法組織に、こんな服装の組織は存在しない。

「白地に金糸の翼と杖が描かれた服・・・か」

「お兄様、これはお父様なら何か知ってませんか？」

「ああ、いや、もうアリスには話を通してるんだけどよ。あいつも知らないって言ってたから、それで調査の為にお前達に依頼したって訳よ」

納得した。もしアリスが何か知っているのなら明日香たちが動く必要なんて無いのに、態々メガロメセンブリア元老院上院議員議長であるリカードがこんな所まで来て、直接依頼の話をしてくるのだ。もしかしたら何か犯罪の可能性もあるのだろう。

「リカード議長、ここ数年の犯罪歴・・・そうですね、犯人不明の犯罪歴は判りますか？」

「ん？　それならこのファイルだ」

メルシィの問いにリカードは懐から一冊のファイルを取り出してテーブルの上に置き、開いて見せた。

「このファイル全部がここ数年の犯人不明犯罪歴だ」

ファイルに入っている紙の厚さは５ｃｍと言った所で、一枚につき平均５～６件の犯罪が書かれている。

「かなりあるんだな」

「ああ、魔法世界、旧世界問わずにな」

確かに、いくらなんでも多すぎる。それも犯人不明の犯罪がここ数年でこんなに、誰の目から見ても異常としか思えない。

「改めて、明日香・・・お前達、三代目・紅き翼に依頼するぜ。謎の集団・・・もしかしたら組織になるかもだが、この存在を調査してくれ」

「わかりました。お受けします」

今までに経験した事の無い大きな依頼となった。

流石に緊張の色を隠せない明日香たちだったが、まぁ今の平和な世界ではこれほどの事件、依頼が入る事自体が稀なので、仕方ないと言えばそれまでなのだが、大戦時代や世界危機の時代を見てきたリカードにしてみれば、少し甘いかと思える。

「ま、変に緊張しすぎるな。こういうのはな、緊張すればするほどミスが大きくなるからな」

「はい、気をつけます・・・」

「木乃里ちゃんやリューガ、メルシィもな」

「はい・・・」

「お、おう・・・」

「・・・・・・」

甘いとは言えるかもしれないが、それでも何故か大丈夫だと思えるのは、やはり明日香と木乃里の父と母、リューガの師の存在をよく知っているからなのかもしれない。

リカードは立ち上がって明日香と木乃里の頭を撫でると自分の分の珈琲代を置いて立ち去って行った。

残された三代目・紅き翼は今回貰った資料も合わせて、依頼の件の事を話し合う事にする。何かきな臭いものを感じるのだ。

「犯人不明の犯罪が多いというのが、気になります」
「メルシィ？」
「いえ、これだけの数あれば、流石に偶然とは考えられませんし、同一組織の犯行と考えるのが自然かと思ったのですが・・・」
「だろうな、普通に考えればその通りだ。単純に考えればの話だけどな」

そんな単純な事だとは思えないのだが、その路線で捜査をしていくのが妥当かと思う。

「お兄様、一先ずグレート＝ブリッジ全体を見て回りませんか？それらしい何かを見つけられるかもしれませんし」
「そうだね。じゃあ、行こうか」

まずはヘラス帝国側かた見て、次にメガロメセンブリア側、そして新ウェスペルタティア王国側の順で行く事になった。

「この依頼が終わったら一度、王国に帰ろうか」
「おう！　師匠にも会いたいしな！」
「私も、アリス陛下やコノカ王妃様にお会いしたいです」
「あ、そういえばメルシィちゃんはまだお父様とお母様にお会いした事が無かったんですよね？」
「はい」

メルシィが三代目・紅き翼に加入したのはつい最近の話だ。更にはメルシィは旧世界出身という事もあり、明日香と木乃里の両親に会った事が無い。

「なら、早く依頼を終わらせて王国に帰ろう！」

『おう！！』

だが、このときはまだ知る由も無かった。

今回の依頼、それが只の犯罪集団によるものではない事も、１７年前の再来と言える事件にまで発展していく事も、まだ・・・・・・。

第一話　「謎の組織」（後書き）

いきなりきな臭いことになってきました。
次回はヘラス帝国とメガロメセンブリアを周り、最後に新ウェスペルタティア王国側に行きます。そこで懐かしい人が登場！　まぁ、そんなに懐かしくないのかな？

第二話　「17年前の英雄」（前書き）

寝ます。

第二話　「17年前の英雄」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二話
「17年前の英雄」

明日香たち三代目・紅き翼は新グレート＝ブリッジの中央にある国境ステーションからヘラス帝国側に入り、帝国入り口まで歩きながら調査を始めた。
ブリッジの道路を中心にブリッジから外れた場所まで捜査ポイントを広げ、一日掛けてヘラス帝国側を捜査する。
これと同じように翌日からもメガロメセンブリア側、新ウェスペルタティア王国側も一日掛けて捜査するので、合計3日間での捜査スケジュールとなっているのだ。

「この辺か？　よく目撃されているって地点は」
「ヘラス帝国側だとこの辺がそうだね」
「ふぅん・・・まぁ、確かにこの辺には誰かが、それも此処最近だなコリャ。訪れた痕跡が残ってら」

明日香たちが現在いるのは国境ステーションからヘラス帝国入り口までの丁度中間地点に位置する場所、そのブリッジから少し離れた獣道だ。
この場所はブリッジから少し目を凝らせば見える所で、最近目撃されているという謎の集団の目撃談が最も多い場所でもある。

「残存魔力は・・・少しですが念話と、それと防音結界ですね」

「流石はメルシィちゃんですね。こういう解析魔法は簡単に出来てしまうんですから」
「い、いえ・・・その、基礎ですし」

メルシィが行っているのは解析魔法で、周囲の残存魔力から、その場所で使われた魔法が何なのかを特定する事が出来る。
基本的に魔法学校で教えている魔法なのだが、殆どの魔法使いが戦闘の役に立たないと忘却してしまう魔法なのだが、一応基礎でもあるのだ。

「しかし、念話と防音・・・目撃例は一度に複数人だから、多分ここで会話はしていたんだろうね。それも防音結界を張らないと話せないような内容の」
「後、念話だと遠くの誰かと会話をしていたという事ですね。お兄様、もしかして・・・」
「うん、さっき調べたから判ったけど、目撃例・・・ヘラス側とメガロメセンブリア側、ウェスペルタティア側、この三つが基本的に同時刻なんだ」

つまり、三箇所で同時に三つのグループが集まり、念話をしながら話し合いをしていたという事だ。

「随分と慎重なんだか慎重じゃないんだか・・・」
「こんな目撃されやすい場所に集まっておきながら、集合場所を分けて防音結界を張り、念話まで使うとは、矛盾です」

リューガとメルシィの言う通り、矛盾しているのだ。
話し合い方法は慎重なのだが、その為に集まる場所が全然慎重とは言えない。どうもそれが腑に落ちなくて、その集団の目的が予想出来ずにいる。

「ただの間抜けか、それとも計算なのか・・・それが問題だな」

出来れば前者であってほしい。その方が少しは気が楽になるのだが、もしも後者だった場合、確実に厄介な事が起きるだろう。

「一応、明日のメガロメセンブリア側、明後日のウェスペルタティア側を見て回ってだね」

「それじゃあ、お兄様。今日はヘラス帝国のホテルに？」

「うん、行こうみんな」

この日は何も無かった。翌日のメガロメセンブリア側でも特に何も無く、あるとしたらヘラス側と同じく目撃ポイントで防音結界と念話の痕跡が発見された事くらいだ。

そして、メガロメセンブリア側の調査が終わった日の夜、ホテルの明日香とリューガの部屋に集まった三代目・紅き翼は資料を読み返していた。

「犯人不明の犯罪で多いのは魔法学校卒業直後の魔法使いの誘拐か・・・」

「あん？　なんでまた」

「誘拐されているのはどれも魔法学校で成績優秀な子ばかりですか・・・木乃里様、どう思われます？」

「そうですね・・・才能ある子を誘拐して身代金というのなら判るのですが、この誘拐事件は誘拐後に犯人からの連絡は一切無しで、攫われた子も誰一人として帰ってきていないというのが・・・」

後は魔法発動体の窃盗だったり、新旧両世界の希少生物密猟だったりと、本当に多い。

「明日、ウェスペルタティア王国側に行くから、後はその時だね」
「そうですね、メルシィちゃん、部屋に戻りましょう？」
「はい、それでは明日香様、リューガ、おやすみなさい」
「おう！」

こうして、調査二日目の夜も過ぎて行き、ついに三日目、一同は国境ステーションからウェスペルタティア王国側に入ると驚きの人物と出会った。

「こんにちは明日香君、木乃里ちゃん」
「さよさん！？」
「さよさん、、何故ここに居られるのですか！？」

相坂さよ、元二代目・紅き翼の一員にして、世界でも数少ない死霊術師（ネクロマンサー）でもある。
現在は新ウェスペルタティア王国国王であるアリスの妾の一人として二人の子供を生み、王国騎士団第三騎士団長として国境警備の任務に就いているのだ。

「今日は休暇なの、それで暇つぶしにって国境ステーションに行こうと思ってたんだけど・・・あれ？　そちらはリューガ君と・・・？」
「あ、さよさんはまだお会いしていませんでしたね。彼女はメルシィ・ブルーメール、半年前に仲間になったんです」
「め、メルシィ・ブルーメールです！　死者の主さまの事は明日香様からよく聞いてます！　お会い出来て光栄にございます！！」
「うん、よろしくね。それと、緊張しないで良いよ？　あまり畏まられるのって苦手なの」

困った様に笑うさよ、とてもではないが３０過ぎとは思えない可

愛らしさが感じられる。
　そもそも服装からして和服で、小柄な体格が可愛く見えているのに、一々表情まで可愛くなるから第三騎士団のアイドルとまで言われてしまうのだ。

「そういえば明日香君たちは何してるの？　なんか任務かと思うけど」
「あ、はい、実は・・・」

　さよにリカードからの依頼の話をすると、さよの表情から少し怪訝そうな色を感じた。特に、謎の集団の服装の辺りで。

「私も、この話は陛下から聞いてるの。でもね、陛下も王妃様も、それに私も、心当たりが無いのは本当・・・なんだけど」

　何故か引っ掛かる。そう言わんばかりの顔をしているのだが、さよとしても本当に心当たりが無くて困惑しているのだ。

「さよさんも一緒に行きます？　これから目撃例のあったポイントまで行くんですけど・・・」
「私も？　う～ん・・・本当は明日香君たちの為にも手伝ったりしたら駄目なんだろうけど、今回ばかりはちょっと気になる事があるし・・・うん、じゃあ案内してくれるかな？」

　さよも交えた五人は早速だがウェスペルタティア側の目撃例があった場所まで行くと、直ぐにメルシィが調査を始めた。

「やはり、ヘラス帝国側とメガロメセンブリア側と同じですね。防音結界と念話の痕跡があります」
「そうですか・・・お兄様、これで」

「うん、三地点で連絡を取り合っていたという事だね」
「用意周到なのか、間抜けなのか、それはこれからか」

調査を進める四人を少し離れて眺めていたさよは、その姿に懐かしさを覚え微笑ましげな気持ちだった。
だが、ふと周囲に目線を向けると、瞬動で明日香の真横に並んだ。

「さよさん？」
「みんな気をつけて・・・囲まれてる」
『っ！？』

明日香たちは気付かなかったが、最強クラスに属しているさよは気付いていた。いつの間にか、さよ達を囲む様に気配が現れたのを。

「皆、人との戦闘経験はある？」
「私と木乃里、リューガは何度か」
「あ、あの・・・私は、初めてです」

明日香、木乃里、リューガは何度か人との戦闘経験があるが、メルシィだけは半年前まで魔法学園の生徒だった為に未経験だった。

「あちゃあ・・・じゃあ木乃里ちゃんとリューガ君はメルシィちゃんを守って、明日香君は私と一緒に迎え撃つよ。配分は６：４でね」

当然、さよが６で明日香が４、実力や経験差から言えば当然だろう。
全員が頷いたのを確認したさよは懐からカードを一枚取り出して、立ち上がる。

「アデアット！！」

その瞬間、カードは消え、さよの右手には剣が、左手に鏡、首には勾玉のペンダントが現れた。

「みんな、勉強するつもりで確り見ててね？」

なにせ、これから明日香たちが見るのは17年前の英雄の一人の戦い。四人の誰もが未だに到達し得ない最強クラスの実力者の戦いなのだから。

明日香も己を奮い立たせて、鞘から抜いた“姫”を構えて、詠唱を始めた。

「ブルグ・ブルーグ・ブレイジング！！　契約に従い　我に従え
高澱の王　来たれ　巨神を滅ぼす　燃え立つ雷霆　百重千重と重なりて　走れよ稲妻！！」

それは、父が得意としていた技法にして、父の代名詞とも言うべき固有技法。嘗て、闇の福音と恐れられていた真祖の吸血鬼が編み出した固有技法から発展した英雄の御業。

「千の雷！　術式固定！　黄昏の剣　魔法付与！　術式付与完了
是、“千撃の雷姫”」

第二話　「17年前の英雄」（後書き）

次回は懐かしのさよが戦闘！　更に父と同じ術式武装を使う明日香も戦います。

第三話　「事件発生」（前書き）

リアルの方でショックな出来事…仕事、無くなっちゃった。

第三話　「事件発生」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第三話
「事件発生」

さよがアーティファクトを出して、明日香が術式武装を完成させた直後、５人を囲んでいた集団が姿を現した。
白地の服に、金糸で杖と翼の紋様が入ったその姿は、間違いなくリカードが言っていた謎の集団だ。

「明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシア、木乃里・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシア、相坂さよ、まさか目標（ターゲット）がこんなにも集まっているとは・・・運がいい」

リーダー格と思しき茶髪の青年の言葉に明日香たちは眉を顰めた。謎の集団の目的は未だに判らないが、明日香と木乃里、さよの三人が目標（ターゲット）にされているのは確からしい。
そして、言い方から察するに他にも目標（ターゲット）はいると考えるのが妥当だろう。

「首領様からは相坂さよと木乃里・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアは生け捕りに、明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアと他の三代目・紅き翼のメンバーは殺せと言われている。抵抗してくれるなよ？」

その言葉と共に、囲んでいた集団が一斉に杖を向けて無詠唱の魔法の射手を放ってきた。その数は５００にも届こうかというものだ

が、木乃里達が回避しようとする前にさよと明日香が動く。
さよの持つ鏡が半分の２５０本の魔法の矢を吸収して反射し、明日香が“姫”を一振りするだけで放たれた電流が魔法の矢を掻き消した。

「チィッ、やはり英雄と英雄の子はこの程度では無理か・・・」
「貴方達の目的、それは聞いても無駄でしょうから聞きません。しかし・・・」

さよが草薙の剣を構えて周囲に怨霊を漂わせ始めると、濃厚な殺気が集団に圧し掛かる。

「殿下と姫殿下に危害を加えると言うのなら、新ウェスペルタティア王国第三騎士団長、死霊の主こと相坂さよが全てを切り伏せます」
「生憎、僕も守られてばかりじゃないから、英雄アリスの息子として、貴様たちを切り伏せる！」

途端に、様々な魔法が飛んできた。紅き焔や白き雷、青き水や魔法の射手、どれも初心者が覚える魔法ばかりで、精度もそんなに高いとは言えなかった。

「相殺しなさい、怨霊の矢、絶望の７７矢！！」
「神鳴流奥義、斬空閃・雷！！」

さよの怨霊の矢と明日香の斬空閃が殆どの魔法を相殺して、一部だけ木乃里達の所に飛んで行ったものもあったが、それらは全て一歩前に出た木乃里に直撃する前に掻き消されてしまった。

「クッ、噂の完全魔法無効化能力か！」
「残念だったな、僕の妹に魔法は効かない。そして、僕にもね！」

明日香は術式武装をしている為に発動体として使用出来ない“姫”の変わりに指輪を発動体として高速詠唱の奈落の業火を放った。
奈落の業火によって集団の3分の1が絶命して、その事に恐怖した他の人間に決定的な隙が生まれる。

「さっき吸収した魔法、お返ししますよ！　呪怨魔砲！！」

その隙を狙ってさよの呪怨魔砲がリーダー格の青年を残して全員の魂を冥界へと送ってしまった。
残されたリーダー格の青年は腰を抜かしてさよと明日香を見上げる。二人が捕縛しようとした時、青年は意を決したかのように何とか二人から距離を取ると奥歯を思いっきり噛み締めて何かを潰す。

「ぐっ！　がぁあああ、あああああがぐぐぐぐ……」

何かを潰した途端、青年は突然苦しみだして、口の淵から泡を吹き出しながら倒れてしまう。
慌ててさよが駆け寄って脈を計るが、既に青年は事切れている。
捕まって情報を引き出されるより、自害して情報漏えいを防ぐ事を選んだようだ。

「・・・・・死人に口無し、ですか」

さよがポツリと呟いた言葉は、突然の出来事に困惑していた明日香たちの耳にも届き、静寂の中に消えていくのだった。

辺りの死体は直ぐに王国第三騎士団、つまりさよの部下達が回収して、さよと明日香たちはウェスペルタティア王国首都に入った。

首都に入って直ぐにでも王城へ向おうと思ったのだが、突然さよに念話が入った為、一時歩みを止めると、さよは念話に集中する。

「っ！？　そ、そんな！？」

「さよさん・・・？」

念話をしていたさよが突然大声を出した。

何事かと明日香たちが心配する中、さよは顔を俯かせ、震える手を堪えながら明日香たちを近くの喫茶店の個別ブースに連れてくる。

「それで、どうしたんすか？」

「さよ様、何かございました？」

リューガとメルシィも先ほどから様子のおかしいさよを心配している。何か大きな事件でも起きたのかもしれない。

「みんな、よく聞いてね・・・・・・先ほど、丁度私達が謎の集団と戦闘を行っていた時間に」

あの戦闘のときに、何か起きたらしい。そこで言葉を止めたさよだったが、俯いていた顔を上げると、目尻に涙が浮かんでいた。

「学術都市、アリアドネーが・・・・・・・・崩壊したの」

「・・・え？」

「ほう、かい・・・？」

一瞬、何を言っているのか理解出来なかった。だが、その言葉の意味を理解した途端、４人とも立ち上がって驚きを露わにする。

「ちょっと待ってくれ！　アリアドネーって独自の軍も持つ巨大学

術都市だろう!?　その軍の人間もそれぞれがアリアドネー卒業の精鋭ばかりで、ちょっとやそっとじゃ落ちるなんてありえねぇだろ!?」

そう、アリアドネーの戦闘力は魔法世界でも高い位置にある。メガロメセンブリア、ウェスペルタティア、ヘラス、アリアドネー、この4国が魔法世界最大の軍事力を誇る国なのだ。

その内の一つ、アリアドネーが崩壊したなどと、いきなり言われても信じられなかった。

「本当よ・・・セラス元総長は無事だったみたいだけど、殆どの人間が死んだみたいなの」

そして、その中にはさよの嘗ての学友も存在していた。

「元白き翼の一人、綾瀬夕映の死亡が確認されたんだって」

綾瀬夕映、明日香と木乃里の母やさよの嘗ての学友であり、元白き翼の一員であり、麻帆良学園高等部を卒業後は魔法世界に渡ってアリアドネー魔法学園の教員をしながらアリアドネー戦乙女騎士団の一部隊を指揮していた女性だ。

その彼女も、今回のアリアドネー崩壊によって命を落としたらしい。

「アリス君、今回貴方達が受けた依頼・・・下手しなくても世界規模の大事件に繋がる」

「はい・・・」

「王城に行きましょう。陛下達と、緊急会議を開かないといけなくなるから」

事態は急を要する事柄にまで発展してしまった。もはや三代目・紅き翼だけで捜査して良い事件ではないのだ。

「王城かぁ、師匠に連れられて入って以来だな」

「私は初めてです。明日香様と木乃里様のご自宅にもなるのですよね？」

「そうなるね」

「ええ」

「はい、無駄話はそこまで！　転移するから寄って」

さよの周りに全員集まったのを確認すると、５人は足元の影に飲み込まれていく。影を使った転移魔法で、一同は一気に王城の城門前まで移動した。

「これは、相坂第三騎士団長！　っと、明日香殿下と木乃里姫殿下！？　ど、どうぞお通りください！　陛下と王妃様がお待ちにございます」

門番の騎士が近くの影から現れた明日香たちの姿を見て慌てて城門を開いた。

開いた門から王城敷地内に入ると、庭を突っ切って城の中に入る。中に入って直ぐに案内されたのは謁見の間ではなく、大会議室。既に全員揃っているらしい。

「失礼します。王国騎士団、第三騎士団長の相坂、入ります」

さよに続き、明日香、木乃里、リューガ、メルシィが中に入ると、大きな丸いテーブルを囲む様に王国の重役が座っており、その全員が明日香たちに目を向け。

「待っていたよ・・・明日香、木乃里」

そして、上座と呼ばれる位置に座っていた男性・・・木乃里と同じ赤が混じった金の髪を腰まで伸ばして、三つ編みの先に紅いリボンを結んだその男性、１７年前の英雄ことアリス・Ｓ・エンテオフュシアが立ち上がるのだった。

第三話　「事件発生」（後書き）

え～…次回は何が起きたのか、その説明になるかと思いま～す。

第四話　「緊急会議」（前書き）

嘗ての主人公の登場！

第四話　「緊急会議」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第四話
「緊急会議」

　明日香たちとさよが来る少し前、新ウェスペルタティア王国の重役達は会議室に集まって緊急会議を行っていた。
　重役の中には国王であり、１７年前の英雄、二代目・紅き翼のリーダーだったアリス・Ｓ・エンテオフュシアや、その妻であり王妃、そして二代目・紅き翼のメンバーでもあった木乃香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシア、宰相であり嘗ては闇の福音と呼ばれ恐れられていたエヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル、財務大臣であり、アリスの最初の従者でもあるシルヴィア・オーギス、第二騎士団長にして木乃香の元学友でもある大河内アキラ、第一騎士団長にして３７年前の英雄のジャック・ラカン、王国顧問であり旧ウェスペルタティア王国初代女王のアマテル・ウェスペリーナ・アナルキア・エンテオフュシアの姿もあった。
　会議の議題は先ほど起きたアリアドネー崩壊について、直ぐに高畑・Ｔ・タカミチ率いる諜報団を転移させて得られた情報を洗っている。

「アリアドネー国民の９割が死亡、学生も殆どが亡くなられたらしいですな」
「騎士団も大半が殉職、セラス元総長は事件時にメガロメセンブリアに滞在していたから無事でしたが・・・」
「更には白き翼のメンバーだった綾瀬夕映の死亡まで・・・」

重役達は皆、一様に驚きと不安、更に不審を抱いている様だ。
当然だろう。アリアドネーと言えば学術都市ではあるものの、保有する軍事力たる戦乙女騎士団他の戦力は魔法世界でも名高い精度を誇る一大国家なのだ。それが突如、それも短時間の内に崩壊してしまったのだから、驚きも不安も、不審も、持ってしまうのも無理は無い。

「エヴァ、崩壊の原因については送られてきているのか？」
「ん？　ああ、まぁ現段階での予測としてだが送られてきている。もっと詳しい事は時間を掛けて調査しなければ判らんが・・・」
「それでも良い、現段階でのタカミチの予測を聞かせてくれ」
「わかった。現段階でのタカミチの予測では崩壊の原因は超々広域殲滅魔法による破壊という事だ。アリアドネー全域を覆うように空に展開された魔法陣から魔法が降り注いだのではないかと思われている」

だが、そんな魔法を使うには人間一人分の魔力では不可能。何人かの術師が協力して一つの魔法を発動するやり方は存在しているが、超々広域殲滅魔法に関しては並の術者集団では無理、それこそアリスを含む最強クラスの魔法使いが１０人以上は揃っていないと不可能なのだ。

「最近になって目撃されているという謎の集団、それが犯人だと考えて間違い無いとは思う。だが、そうだとしたら危険だな」
「せやな、その集団には少なくとも最強クラスの人間が１０人以上は存在している事になるえ」
「しかしよ、最近は最強クラスに到達した魔法使いなんて聞いた事無いぜ？」

そうなのだ。１７年前以来、魔法使いの中から最強クラスに到達した者が現れればその名が魔法世界全体で管理している名簿に登録される事になっているのだ。

その名簿の中には当然だが二代目・紅き翼と初代・紅き翼のメンバーの名前も載っており、他にほんの数人程度しか登録されていない。

そして、確認している最強クラスの魔法使いの居場所や活動は全て把握している。つまり・・・・・・。

「確認されていない最強クラスの魔法使いが１０人以上もいる・・・という事だね」

アキラの言葉が重く会議室の空気を支配した。

先ほどから何度も出てきている言葉、最強クラス・・・内訳をすると下位、中位、上位、強上位、最上位と分けられるが、一番したの下位でも普通の魔法使いから見たら雲の上の実力なのだ。一応、最強クラスの一つ下として準最強クラスというのも存在しているが、準最強クラスと最強クラス下位でもかなりの差がある。

そんな普通の魔法使いから見たら化け物レベル・・・英雄クラスとも言える実力者が謎の組織に少なくとも１０人以上も存在しているとしたら、最悪だった。

「失礼します。王国騎士団、第三騎士団長の相坂、入ります」

その時、ようやく休暇中だった第三騎士団長であり、二代目・紅き翼のメンバーだった相坂さよが帰ってきた。

中に入ってきたさよの後ろにはアリスと木乃香の子供達・・・明日香と木乃里、そして明日香がリーダーを務めている三代目・紅き翼のメンバーであるリューガとメルシィがいる。

「待っていたよ・・・明日香、木乃里」

アリスは立ち上がって自身の愛息子と愛娘の名を呼んだ。

「父様・・・あの」

「おい明日香、お前はここでは三代目・紅き翼のリーダーであるのと同時に重要な立場があるだろう。木乃里、お前もな」

「エヴァまま・・・」

エヴァに言われて改めて振舞いを直す。そう、この国では明日香も木乃里も第一王子と第一王女という立場がある。

二人は直ぐに専用席に座り、その後ろにリューガとメルシィが恐る恐る控える様に立った。

「さて、みんなゴメン、会議の続きと行きたい所なんだけど、三代目・紅き翼のリューガは知ってるけど、新しい子の事は知らないんだ。明日香、紹介してくれるかな？」

「あ、はい。彼女はメルシィ・ブルーメール、半年前に三代目・紅き翼のメンバーになった子です」

「め、メルシィ・ブルーメールと申します！　あ、アリス陛下、木乃香王妃、お、おお・・・お会いできて光栄の極みに御座います！！」

物凄く緊張しているメルシィだった。当然と言えば当然だろう、何せ彼女が尊敬する明日香と木乃里の両親にして、この国の国王と王妃でもあり、１７年前の英雄でもあるアリスと木乃香を目の前にして、緊張するなと言う方が無理だ。

「若いね、１３～４歳くらいかな？」

「は、はい・・・１３歳です」

「は～、ウチがアリスさんと出会った時より一つ下やねんなぁ」

結構有名な話だ。王妃である木乃香が夫である明日香と出会ったのは彼女がまだ麻帆良学園女子中等部２年の頃、１４歳の頃の事なのは。

「おいアリ・・・陛下、そろそろ会議を進めるぞ？」

「あ、ごめんねエヴァ、良いよ」

「はぁ・・・まぁいい。それでは話を戻す。さよ、明日香殿下、木乃里姫殿下、三人は今来たばかりだから聞いていないだろう、簡単にだが説明するぞ？」

今来たばかりのさよや明日香たちに先ほどまで話していた内容を話す。やはり明日香たちも同様の反応を示し、同時に若干だが表情を青褪めた。

明日香も木乃里も、リューガも実力的には上級、メルシィは中級なのだ。自分達が請け負った依頼で、まさかそんな存在と当たる可能性があったなどと聞かされれば当然だ。

「それで、だ。アリアドネーの生き残りは今後、我がウェスペルタティア王国とヘラス帝国、メガロメセンブリアで保護するべきだろう。セラスに関してはリカードが何とかするだろうから、今後の我々の行動だが・・・」

「宰相殿、謎の組織は犯罪組織として既に手配する準備が整っておりますが？」

「ん、流石に仕事が早いな。ならそのまま手配を進めてくれ、国際犯罪組織としてだぞ？」

「御意に」

法務大臣の素早い仕事ぶりに下を巻いたエヴァだが、こういう仕

事の早い人間は助かる。そのまま謎の組織を国際的犯罪組織として手配を進める事にして、改めて新ウェスペルタティア王国が今後行う事なのだが。

「あ、その前にエヴァさん、一つ報告したい事が・・・」
「さよか・・・ああ、そう言えばお前は明日香殿下たちと共に謎の組織と戦ったのだったな、聞かせろ」
「はい、その謎の組織の構成員と思しき集団ですが、接触した時に私と明日香殿下、木乃里姫殿下を目標（ターゲット）と言っていました。そして明日香殿下と他の三代目・紅き翼メンバーは殺して、私と木乃里姫殿下は生け捕りしろとも・・・」

そして、情報を引き出す為に捕らえようとしたリーダー格の青年は奥歯に仕込んでいた毒で自害した事も伝えた。

「陛下、どう思われますか？」
「・・・木乃里を生け捕りにしろというのは何となくだが、な。しかし、だとすると危険だ」

シルヴィアの問いにアリスは神妙そうな顔をする。
さよを生け捕りにしろというのはまぁ、判る。木乃里もという事は恐らくは女性としての利用価値を考えての事なのだろうが、木乃里の場合はそれだけではないのだ。

「黄昏の姫御子・・・アスナ叔母さんと同じ完全魔法無効化能力者である木乃里を生け捕りするというのは、まぁ・・・戦略としては判らなくはない」

木乃里を捕らえて洗脳して、兵器として使う事が出来るのだ。３７年前に黄昏の姫御子であるアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシ

ア・エンテオフュシアが兵器として利用されていたみたいに。

「ふむ、我が末裔を再び兵器として利用するか・・・随分とナメた真似をしてくれるのぅ」

ずっと黙っていたアマテルが、額に青筋を浮かべて呟いた。彼女にとっても明日香は勿論、木乃里も、子孫であるので、孫のように可愛がっているのだ。

「ありがとう、さよ。エヴァ、これで決まりだ」

「ああ、今後の我等が取るべき行動は謎の組織の調査及びその行方、それからアリアドネー崩壊事件の首謀者の調査だ」

「せやね、それと明日香と木乃里・・・悪いんやけど暫くは王国から出んといてな。ちょい不味い事態に発展しそうやから」

明日香と木乃里が狙われている以上、二人を国外に出す訳にはいかない。そう考えて木乃香は暫く三代目・紅き翼には王国内に留まる様に言うが、アリスがまさかの言葉を出した。

「いや、三代目・紅き翼にはこのまま謎の組織の調査をしてもらう」

「アリスさん!?」

「木乃香、言いたい事は理解出来る。私だって本当は国外に出したくないさ。でも、この子達ももう守られてばかりの子供じゃない。自分の身は自分で守る事が出来なければ魔法使いとしてはまだまだ未熟と言わざるを得ない。でも、明日香も木乃里も、ちゃんと自分の身は自分で守れるから。それに・・・」

何も、三代目・紅き翼のメンバーだけで行動させるなどとは一言も言っていない。

「それに、勝手で悪いけど三代目・紅き翼にはもう一人、メンバーを加えさせてもらうよ。月詠、いるだろう？」
「はいな～」

いつの間にか、アリスの後ろに新ウェスペルタティア王国護衛部隊隊長の月詠が現れた。

「え、お父様・・・もしかして、新しいメンバーって、月詠ちゃんですか？」
「ああ、そうだ。二代目・サムライマスターの月詠を加える。ただし、彼女にやってもらうのはあくまで明日香と木乃里の護衛、それ以上のことはお前達がやるんだ」

つまり、基本的に月詠が三代目・紅き翼に入ってやる事は明日香と木乃里の護衛と、本当に不味くなった時の加勢だけ。
調査や基本的な戦闘は月詠に頼らず、明日香たちがやる事に決まった。木乃香も月詠なら安心だと納得した。

「しかし、父様の護衛は如何するんですか？　月詠さんは父様の専属護衛なのに・・・」
「安心しろ、月詠の抜けた穴は桜咲が木乃香の護衛と同時に務めてもらうから」

元白き翼のメンバーにして、現在は新ウェスペルタティア王国護衛部隊副隊長にして王妃専属護衛の桜咲刹那、彼女が知らぬ間に負担が増えたのだった。

「エヴァ、タカミチにはこの後も引き続きアリアドネーでの調査を進める様に伝えてくれ。どんな小さなことでもいい、何か判り次第、直ぐに報告する様に」

「わかった」
「ラカン、アキラ、さよの三人はいざと言う時の為に騎士団の編成を頼む」
「おう！」
「わかった」
「はい！」

こうして、会議は終了して、解散した。明日香たちは月詠と共に王城の中庭に出て今後の話し合いをする事に。

「で、如何するんだ？」
「アリアドネーはタカミチさんが調査をしているから、僕達は“ブックストアー”に接触しようかと思うんだ」
「ブックストアーにですか・・・？　お兄様、私はあまり・・・」
「木乃里様・・・？」

突然、木乃里が難色を示して、その珍しさにメルシィが疑問を持った。

「木乃里姫殿下の言いたい事は理解出来るえ～、でももう何も蟠りも無いんやし、ええんとちゃいます～？」
「そうですけど・・・」
「あの人も結婚して、父様との付き合いも無くなったんだから、今更気にしても仕方ないよ」
「はい・・・」

兎に角、三代目・紅き翼の今後の予定は決まった。
翌日の朝に三代目・紅き翼はクリムゾンでトレジャーハンターの街へ行く事になり、本日はもう遅いので準備を整えて休む事になる。
明日香と木乃里、月詠は王城の自分達の部屋に、リューガとメル

シィは来賓様の部屋に泊まる事になり、忙しすぎる一日が過ぎるのだった。

第四話　「緊急会議」（後書き）

次回は、アリスのアキレス腱…だった女性が登場！　既に結婚してます。

第五話　「最強のトレジャーハンター」（前書き）

アリス陛下のアキレス腱だった女性、登場！

第五話　「最強のトレジャーハンター」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第五話
「最強のトレジャーハンター」

月詠を新たな仲間として迎え入れた明日香たち三代目・紅き翼は新ウェスペルタティア王国から離れ、クリムゾンに乗ってヘラス帝国の近くにある村に来ていた。
この村は魔法世界で活動するトレジャーハンター達が拠点として利用しているトレジャーハンターの為の村で、住民は皆トレジャーハンターという変わった村なのだ。

「明日香様、ブックストアーというのは・・・本屋ですか？」
「あはは・・・普通ならそう思うよねぇ」
「メルシィちゃん、これは魔法世界での常識なんですけど、魔法世界ではブックストアーと言うと本屋ではなく別のものを指すんです」
「別のものですか？」

メルシィは半年前に魔法世界に来たばかりなので、知らないのも当然だろう。
旧世界では確かにブックストアーと言えば本屋で合ってるのだが、魔法世界ではブックストアーとは別の意味を持っているのだ。

「メルシィ、一つ勉強になるぜ。ブックストアーっつーのはな、魔法世界最強のトレジャーハンターチームの名なんだ。元白き翼の一員だった宮崎のどかがリーダーを務める最も有名で、最も強いチー

ム、それがブックストアーだ」
「元白き翼の一員がリーダー・・・」

宮崎のどか。元白き翼の一員にして、白き翼の戦略の要とも呼ばれていた読心術師であり、17年前の戦争後、一度は旧世界に戻ったが、麻帆良学園大学考古学部を卒業後に魔法世界に渡り、トレジャーハンターチーム“ブックストアー”を結成、僅か数年で魔法世界屈指のトレジャーハンターチームのリーダーとして名を挙げた女性だ。

「殿下ぁ！　着きやしたぜ！」

クリムゾン操舵手のクレイが目的地に着いたという事を知らせてきた。
早速明日香たちはクリムゾンを降りて村に入ると、ブックストアーの拠点である屋敷に向った。和洋折衷の少し大きな屋敷、これこそがブックストアーの拠点だ。

「すいませーん、三代目・紅き翼の明日香です！　のどかさん居ますか～？」

扉をノックして中の人を呼ぶと、扉が開いて金髪の綺麗な女性が出てきた。

「あ、アイシャさん、お久しぶりです！」
「あら、明日香殿下に木乃里姫殿下、それと月詠隊長とリューガくんじゃない・・・あら？　知らない子もいるわね、新しいメンバーかしら？」
「はい、半年前に入ったんです」

出てきたのはブックストアーのメンバーの一人、アイシャ・コードウェルだ。旧姓はコリエル、同じくメンバーの一人と結婚して、今はコードウェルの姓を名乗っている。

「それで、のどかさんはいますか？」
「のどか？　いるわよ、他のみんなもね。さ、いらっしゃい」

アイシャに案内されて中に入ると、リビングに連れてこられた。リビングにはブックストアーのメンバー全員が揃っており、その中でも一際目立つのが黒髪の女性、のどかだ。

「明日香君、木乃里ちゃん、いらっしゃいー」
「ご無沙汰してます、のどかさん」
「前にお会いしたのは、2年前でしたか？」
「そうですねー」

ふと、のどかの視線はメルシィに向った。最後に明日香たちが会ったのは2年前だから、メルシィとは初対面だ。

「あ、紹介します。彼女はメルシィ、半年前に三代目・紅き翼に入ったんですよ」
「メルシィ・ブルーメールです」
「よろしくねー、私はのどか・コードウェル、このブックストアーのリーダーをしてます」
「・・・？　コードウェル？」

確か、アイシャもコードウェルだった筈だ。それに、リューガからは宮崎のどかと聞かされていたのに、姓が違う。

「よろしくな、嬢ちゃん。俺はクレイグ・コードウェル、のどかと

アイシャの旦那だ」
「あ、重婚者でしたか」

魔法世界では基本的に旧世界の殆どの国と同じく一夫一妻制だが、許可があれば男は妻の三人までなら持つ事が許される。
最も、その許可が出るまでの審査が厳しすぎる為、基本的に重婚する者は殆ど居ないのだが、稀に審査が通って重婚する者もいるのだ。

「それで、俺はクリスティン・ダンチェッカー、こいつは妻のリンだ」
「リン・ダンチェッカーです。よろしく」

それから、同じくメンバーのパイオ・ツゥやモルボルグラン、チコ☆タンやラゾムといったメンバーも紹介された。
モルボルグランは魔族なので、その骨だけの姿に最初こそ驚いたメルシィだが、魔族が魔法世界にいるのは特に珍しい事でもないので、その辺は納得する。

「それで、明日香君たちが来た理由は何ですかー？」
「実は・・・」

明日香は此処最近になって目撃される様になった謎の組織の事、自分たちが襲われた事、そしてアリアドネー崩壊の事を話した。
のどか達も謎の組織の事は知っていたが、まさか明日香たちが襲われていたとは思ってもおらず、少し驚きを表したが、アリアドネー崩壊を聞いて驚愕し、誰もが立ち上がる。

「あ、アリアドネー崩壊って・・・じゃ、じゃあ夕映は・・・」
「綾瀬夕映はアリアドネー崩壊に巻き込まれ、死亡が確認されてま

す」
「夕映が、死んだ・・・」
そういえば、のどかは死んだ綾瀬夕映の親友だったと聞いた。
親友の死の報告に膝から崩れ落ちたのどかは、夫であるクレイグに支えられながら何とか椅子に座りなおし、そのまま項垂れてしまう。
「のどかさん、今日、僕達が来たのは依頼したい事があったからなんです」
「依頼、ですかー・・・？」
「はい、ブックストアーに謎の組織の情報を集めてもらいたいんです。ブックストアーは幅広いパイプがあると聞きますし、それなりに大きな情報網もお持ちでしょうから」
「謎の組織の情報を集めて、明日香君たちに伝えるの？」
「はい」
のどかはクレイグと仮契約して、マスターピースのアーティファクトである“いどのえにっき”を所持している。
相手の名前を知っていればその心を読むことが出来るアーティファクトを持つ彼女は、情報収集という点では世界最高の実力を持っているのだ。
「どうするのどか・・・正直、俺達も今回の件はやべぇと思うぜ」
「・・・でも、夕映が殺されたというのなら、手伝わないなんて・・・出来ません」
親友を殺された。だからこそ、その殺した組織を調べ上げる事にのどかは躊躇いなど無い。

「わかりました。ブックストアーのリーダー、のどか・コードウェルの名において、三代目・紅き翼の依頼を正式にお受けします」
「ありがとう御座います、のどかさん。では、僕達はこの後も色々と行く所がありますので、この辺で失礼しますね」
「うん、得た情報はクリムゾンに送れば良いよねー？」
「お願いします」

ブックストアーは正式に依頼を受けてくれたので、明日香たちはクリムゾンに戻ると次の目的地に向った。
次の目的地はメガロメセンブリア、その元老院議員館だ。そこでリカードと会い、今回の件についてもう少し詳しい話をしたい。

「クレイさん、メガロメセンブリア国際空港へ向ってください」
「了解でさぁ！」

クリムゾンが発進して、メガロメセンブリアに進路を取った。
途中で窓からアリアドネーが遠目に見えたが、やはりそこには嘗ての街並みは存在せず、何も無い廃墟のみが広がっている。

「本当に、崩壊したんだね」
「タカミチ小父様が頑張って調べてくださってます。その情報を待つしかないのが、少し悔しいですね」
「だけど、俺達じゃ何も出来ねぇのも事実だかなぁ」
「力不足が、もどかしいです」

四人とも、己の力不足を嘆いていた。
アリスも、木乃香も、エヴァやタカミチ、他の騎士団たちが頑張っているのに、自分たちは何も出来ない。それが本当に悔しいのだ。

「ほんなら、もっと強ぅならんとあかんどすえ？　力不足を嘆くん

やったら、強ぅなればええんやからな」
「月詠さん・・・」
にこにこと笑顔で言ってくる月詠、確かに彼女の言う通りだ。
今は自分たちでは力不足なのかもしれない。だけど、それで悔しいと嘆くだけでは何も変わらないのだから、強くなるしかない。
「それに、陛下も王妃様も、力が足りない言うて悩んだ時は挫けずに修行しはったんや。明日香殿下と木乃里姫殿下も、それに二代目を継ぐメンバーであるリューガはんもメルシィはんも、偉大な名に恥じない努力をするんやえ?」
「・・・はい!」
「勿論です!」
「当たり前だぜ!」
「必ず、強くなってみせます!」
四人の答えに満足したのか、月詠は更に笑顔を増して自室に戻って行く。
17年前の英雄の一人であり、自分たちにとっては先輩になる月詠の言葉を真摯に受け止め、四人は今よりもっと強くなると心に誓うのだった。

第五話　「最強のトレジャーハンター」（後書き）

次回はメガロメセンブリアです。リカード議長再びｗｗ
そろそろ、また戦闘でも出しますかね？

第六話　「暗躍する影」（前書き）

リカードさん再び。

第六話　「暗躍する影」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第六話
「暗躍する影」

明日香たち三代目・紅き翼はブックストアーに依頼を終えると一路、メガロメセンブリアへ向った。
クリムゾンをメガロメセンブリア国際空港に入港させて、空港からは歩きでメガロメセンブリア元老院議員会館へ行き、受付で三代目・紅き翼の名を出すと直ぐにリカードの執務室へ通される。

「おう、明日香たちか・・・って、月詠も一緒なのかよ」
「お久しぶりどす～」
「おう、半年振りか？　そんときの会食でアリスの護衛してたからなお前」

互いの国のトップ同士、会食の機会はある。当然だが17年前の大戦でも月詠とリカードは顔を合わせているだろうが、そういう会食の時もアリス専属護衛の月詠が会うのは当たり前なのだ。

「それで？　今日は如何した、依頼に関してはまぁ、アリスから報告は聞いてっから良いけどよ」
「はい、僕たちはこれから普通に情報収集に努めるつもりです」
「ブックストアーにも依頼を出してますから、その筋で情報を集めるつもりです」

だから今回、メガロメセンブリアまで来たのは別の理由でだ。

「リカード議長、メガロメセンブリア元老院の方で掴んでいる今回の事件の詳細は判りますか？」

「アリアドネーのか？　ちょっと待ってろ」

メルシィの言いたい事を察したリカードは手元の端末を弄り、アリアドネー崩壊に関するメガロメセンブリア元老院での調査報告の資料を開いた。

書かれている内容は明日香たちも知るものばかりで、ウェスペルタティア王国側でも掴んでいることばかりなのだが、一つだけ、明日香たちも知らない事が書かれている。

「こいつは知らなかったか？　なら丁度良いな、後でアリスの方にも送っとくぜ。んでだ、この報告に書いてあるのは読んでの通り」

「アリアドネー崩壊直前、市街地の多数地点にて誘拐事件の被害者と思しき人物達が目撃されている・・・」

「ああ、アリアドネー崩壊の生き残りから得られた情報だ」

しかし、現在の調査では誘拐事件での被害者の遺体はアリアドネー崩壊跡からは発見されていない。

「誘拐事件の被害者がアリアドネー崩壊直前にアリアドネー市街地で目撃されている・・・、一体どういう・・・」

「最初は洗脳でもされてるのかと考えたんだがな、どうにも腑に落ちねぇんだよなぁ」

もっと裏がありそうな気がする、リカードはそう言いたいのだ。

洗脳したのなら魔法学校卒業直後の新米魔法使いでしかない彼等の使い道など使い捨てくらいしか無い。だから、アリアドネー崩壊

後に遺体が見つからない筈がない。
だが、遺体が見つかっていないという事は使い捨てではなく、別の用途で誘拐されているという事になる。

「おい明日香、木乃里、リカード議長、もう一つだけ使い道があるぜ」
「もう一つ・・・？」
「ですか・・・？」
「リューガ・・・ああ、成る程な、魔力タンクか」

そう、魔力タンクとしての使い道だ。
誘拐されているのは魔法学校在学時は優秀だった者ばかりで、当然だが優秀な魔法使いは総じて魔力が高い者が多い。
中には例外として魔力が少なくとも成績優秀な者もいるだろうが、今回誘拐されているのは全員魔力が高い者だけ。

「つまり、リューガの言いたい事とは誘拐してきた被害者を何らかの術式で縛り、魔力を吸い上げて他人が使うための魔力タンクにするという事ですか？」
「ま、そういうこった」
「胸糞悪くなる話だよね」

勿論、まだ本当にそうと決まった訳ではない。
実際の所、犯人を捕まえなければ被害者を何に使っていたのかは判らず、全て憶測で語る事しか出来ないのだから。

「まぁ、魔力タンクに被害者を使ったなら超々広域殲滅魔法の線が濃厚になってくるわなぁ」

最強クラス１０人以上じゃなくとも、超々広域殲滅魔法使用に魔

力タンクを複数使えば余裕か、もしくはギリギリ可能なのだから。

「よし、その可能性も視野に入れて会議の議題として取り上げておくぜ」

「よろしくお願いします」

「おう、それで？　お前さん達はどうする？」

「一先ず1週間ほどメガロメセンブリアに滞在しようと思ってます。少し纏めたいこともありますし、エヴァお母さんからダイオラマ魔法球を借りてきてますので、修行もしようかと」

「そうかい」

リカードは明日香たちが滞在する為にとホテルを用意してくれた。メガロメセンブリア首都メセンブリーナ中央にある高級ホテルの特上スウィートを予約してくれたので、明日香たちはそこに1週間だけ滞在して、その間に自分達が持っている情報を整理したり、見直したり、ダイオラマ魔法球に入って修行をする事となった。

アリアドネー崩壊跡地、そこでは現在、新ウェスペルタティア王国諜報部隊隊長のタカミチ・T・高畑率いる諜報部隊が調査を進めていた。

「タカミチ隊長！　駄目です、やはり生存者はもう・・・」

「そうか・・・、一応諦めずに探してみてくれ、駄目で元々だ」

「了解です」

隊員が調査に戻ったのを見送りながらタカミチはポケットから取り出したタバコを口に加え、ライターで火を点けると煙を肺一杯に吸い込み、吐き出す。

「ふぅ・・・・・しかし、これは困った事になったなぁ。まさか見つからないなんて」

タカミチは先ほど部下から報告として渡された用紙に目を向けた。

「遺体が見つかってもいないのに、何故・・・彼女の死亡が確認されたなんて情報が入ってきたのかな」

その報告書に書かれているのは、“綾瀬夕映死亡”の文字と、その横に部下が書いたであろう“綾瀬夕映の遺体確認できず”の文字。

「超々広域殲滅魔法で跡形も無く消滅したのなら遺体が見つからないのも頷けるけど、こうして彼方此方に遺体が転がっている状況だと、まず彼女の遺体だけが見つからないというのは可笑しな話だ」

一応、綾瀬夕映の遺体らしきものは見つかっている。背格好は確かに同じなのだが、タカミチは嘗ての教え子と他人の遺体を見間違える筈が無い。

「影武者・・・？　しかし、何故綾瀬くんの影武者など・・・・・・」

いや、まだそれは早計かもしれない。見つかった遺体がもしかしたら本当に綾瀬夕映のものかもしれない。タカミチの勘だけで決めて良い問題でもないのだから。

「詳しくはＤＮＡ鑑定の結果かな・・・」

魔法世界にも旧世界の技術であるＤＮＡ鑑定が取り入れられる様になった。その技術があれば遺体の身元を判別するのは魔法よりも

簡単なのだ。

「うん、さてと・・・それじゃあっ！？」

ふと、背後から殺気を感じたタカミチは瞬動でその場から回避する。

その瞬間、先ほどまでタカミチが居た場所に１００本を越える魔法の射手が飛来してきて、大爆発を起こした。

「・・・何者だい？」

煙の向こう、そこには謎の組織の服を着て、フードで顔を隠した者達が合計２０人、杖を持って立っていた。

「新ウェスペルタティア王国諜報部隊隊長・・・二代目・紅き翼のタカミチ・Ｔ・高畑だな？」

「・・・そうだよ」

「死ね」

再び瞬動でその場を避ける。

今度は魔法の射手だけではなく、白き雷や紅き焔、更には雷の暴風や闇の吹雪など、様々な魔法が飛来してきた。

「本気で殺しに来ているみたいだね・・・なら！」

タカミチは咸卦法を発動してポケットに手を入れた。そして・・・・・。

「七条大槍・無音拳！！」

一瞬にして七つの無音拳が襲撃者達に襲い掛かり、２０人中１４人を一撃でノックアウトしてしまう。
だが、この場に来ている者たちは明日香たちの所に来た者たちとは違い、その事で動揺するわけでもなく、冷静に魔法を放ってくる。
今度は魔法の射手は無く、雷の暴風などの中級や上級魔法、更に雷の斧や氷神の戦槌などの上位古代語魔法まで来た。

「それなりの使い手がいるのか・・・っ！」

瞬動で魔法をかわしながら、豪殺・居合い拳で回避出来ない魔法を相殺していく。

「隊長！」
「来るな！　僕一人で問題ない！！」

騒ぎに気付いたタカミチの部下達が駆け寄ってきて槍杖を構えようとするが、タカミチがそれを止めた。
この程度ならタカミチ一人で何とかなるし、部下たちにはそれよりも逃走阻止をやってもらいたいのだ。

「おのれ神速の拳め！」
「僕を相手にするには、少し錬度が低すぎたみたいだね・・・もう一度行くよ！　七条大槍・無音拳！！」

再び、七つの無音拳が同時に放たれ、残った六人に直撃して、障壁ごと押し潰した。

「よし、じゃあ悪いけど捕縛させてもらうよ」
「っ！　捕まるくらいなら・・・っ！」

ガリッ！　という何かを噛み砕く音が複数聞こえた。
同時に２０人全員が口から血を吐き散らして命を絶つ明日香たちの時と同様に奥歯に仕込んでいた毒で自害したのだ。

「・・・やられたね」

明日香たちの時と同じだ。情報を洩らすくらいなら死を選ぶ、その姿勢は組織の人間としては潔いが、やはり見ていて気分の良いものではない。

「た、隊長・・・」
「ん、ああ・・・そうだね。一応、遺体だけでも回収しようか」

自害した襲撃者２０人の遺体を部下達に回収させて、タカミチは吸いかけだったタバコを携帯灰皿に捨てると、もう一本のタバコを取り出して火を点けた。

「どうなるんだろうね、一体」

その呟きは、タバコの煙と共に空気に溶けて消えていった。

第六話　「暗躍する影」（後書き）

久々にタカミチの戦闘でした！　本当に…。

次回は…まだ決まってません！　っていうか寝ます。眠い…Ｚｚｚ。

第七話　「模擬戦、動き出す影」（前書き）

今回は模擬戦オンリー、最後が大変です。

第七話　「模擬戦、動き出す影」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第七話
「模擬戦、動き出す影」

メセンブリーナ中央市街にある高級ホテル、そのスウィートルームには三代目・紅き翼のメンバーが本来なら寛いでいた筈だった。
しかし、部屋には誰も居らず、部屋の中央にダイオラマ魔法球だけが置いてあるだけだ。明日香たちはホテルに滞在している間、ずっと魔法球に入って修行をしているのである。

「くらえ！　羅漢破裏剣掌！！」

リューガが小太刀二刀を構える月詠に接近して胴体を掴もうとしたのだが、

「甘いです～」

瞬動で避けた月詠は、そのままリューガの肩の上に乗ってバク転の要領で頭から地面に叩き落す。

「神鳴流、浮雲・桜散華～」
「う、ぉ！？　ぐえっ！！」

身長１９０ｃｍ以上もあるリューガの身体をいとも簡単に投げ飛ばした月詠に、投げられたリューガは驚くしかなかった。

だが、リューガを投げる過程で出来た隙に明日香が地獄の焔姫にした“姫”を月詠の胴体狙って振る。

「あん、せっかちな所は父親似やな～」

「っ！　まさか、小太刀一本で防がれるなんて・・・」

月詠は右手の小太刀一本で“姫”を受け止めると、左の小太刀の峰で明日香の側頭部に叩きつけようとしたのだが、後ろから迫る魔法の射手に気付いて中断、明日香の脇腹に蹴りを叩き込んで吹き飛ばすと、足元で起き上がろうとしていたリューガの襟首を掴んで持ち上げると楯にした。

「ちょ、ちょまぁあああああ！？」

メルシィが放った魔法の射手、闇の４５矢が全てリューガが慌てて張った気のバリアーに直撃して砕いた。

そして、闇の矢がリューガを襲っている間に月詠は虚空瞬動に入って後方に居た木乃里とメルシィの後ろに着地、逆立ちしながら回転して技を放つ。

「烈蹴斬・弐の太刀～」

「きゃああ！？」

「くぅっ！　風花・風塵乱舞！！」

障壁を無視して飛んできた足での斬撃にメルシィが戦闘不能に、木乃里は風の魔法で応戦しながら後退して明日香の横に並んだ。

「リューガ、大丈夫ですか？」

「ああ・・・って言いたいけど、気がもう空だ。戦えねぇよ」

「そうですか・・・」

リューガも戦闘不能となると、残るのは明日香と木乃里だけだ。

「お兄様、詠唱しますから時間稼ぎをお願いします」

「任された。けど・・・期待しないでね？」

「元々相手が相手です」

お互いに苦笑して、明日香は月詠に突っ込んだ。

小太刀二刀と“姫”がぶつかり合って衝撃波が砂浜にクレーターを作るが、それを気にするでもなく明日香の追撃が月詠を襲う。

「高速詠唱！　雷の投擲！！」

合計６本の雷の投擲が射出され、月詠に迫る。しかし、神鳴流に飛び道具は効かない。魔法とは言え、雷の投擲は投擲系の魔法である以上、それは悪手だ。

「甘いなぁ～、まだまだどすえ～？　にと～れんげき～、ざ～んく～せ～ん！！」

間延びした喋り方で緊張感の欠片も無いが、確かな精度を誇る斬空閃の連撃が雷の投擲を全て切り裂き、それを承知していた明日香が瞬動に入る前に、月詠は既に明日香の真後ろに立っていた。

「はい、これで明日香殿下は死亡や～」

「・・・っ」

首筋に小太刀を添えられ、明日香も戦闘不能になる。

残された木乃里に月詠が向おうとしたが、既に木乃里は詠唱を終えていた。

「いきます！　常世の輝き！！」

光の上位古代語魔法、常世の輝きが杖の先から放たれた。
眩い光が物理効果を伴いながら月詠に迫るが、常世の輝きが放たれたときには、既に月詠の姿はそこには無かった。

「っ、何処に・・・！？」
「此処どす～」
「っ！」

背後から声が聞こえ、咄嗟に前に向ってジャンプすると、小太刀の斬撃が木乃里の居た場所を切り裂いた。

「贖罪の剣！！」

杖を持っていない左手に展開した贖罪の剣を振り返り様に振るうと、月詠は小太刀二刀をクロスして受け止める。
これで月詠の足止めは出来た。木乃里は直ぐに杖を構えて無詠唱の灼熱の白光を放った。これで決めると残った魔力を全て注いだソレは、ニッコリと笑った月詠を飲み込んだ。

「はぁ、はぁ、はぁ・・・これで」
「終わりどす～」
「っ！？」

いつの間にか、木乃里の後ろに月詠が立っており、首筋に小太刀の刃を添えていた。木乃里、戦闘不能の瞬間であり、月詠ＶＳ三代目・紅き翼の模擬戦の結果が出た瞬間だった。

「やはり、届きませんでしたか・・・」
「いえいえ～、姫殿下の最後の魔法は届いとりましたえ～。ほら」
月詠が指差したのは自身の右脇腹、そこに目を向けると服の生地が焼け焦げており、無傷の肌が見えていた。
「ウチの服を傷つけられるくらいにはなったんやから、充分合格点や～」
今まで服すら傷つける事が出来なかったのを考えると、大した進歩だ。
だが、それでも服だけで、月詠自身には傷一つ無いというのは、やはりまだまだ実力に差がありすぎるという事の証明でもある。
「はぁ、これが17年前の英雄の力ってヤツかよ」
「それと、最強クラスの力ですね」
リューガとメルシィは改めて最強クラスの、英雄の力というものを実感した。
見た目ぽわぽわしている月詠だが、その見た目とは裏腹に明日香たち四人掛かりで挑んでも服の一部を焼く位しか出来ないという結果に、驚きを通り越して呆然とするしか無い。
「はぁ、月詠さん相手にこれじゃあ、まだまだ父様や母様には届かないなぁ」
「お父様もお母様も、最強クラスの最上位ですからね」
「そない落ち込まんと、まだまだみんな若いんやから。これから強うなりますえ～。伸び代は充分あるんやから」
小太刀を鞘に納めながら月詠はケラケラ笑い、砂浜の片隅に置い

てあるデッキチェアーの方に歩いていくのだった。
残された明日香たちは座り込んだまま、月詠の後姿を眺め、その背中の遠さを改めて知る。まだまだ、自分たちはあの背中に届くどころか追いつく事も出来ていない。

「強く、ならないとね」
「はい」
「だな」
「ですね」

新ウェスペルタティア王国騎士団、その第二騎士団長の大河内アキラは一人、市街の警邏に出ていた。
王都防衛を担う第二騎士団の仕事の一つには警邏の仕事も含まれており、おうして毎日市街地を見て回っている。

「王国の外は今、随分と騒がしくなってきているけど・・・王国内は平和そのもの、良いことだよね」

今も市民たちは平和そのものの生活を営んでいる。笑顔が彼方此方で溢れ、何の不自由も無い営みが、何度見てもアキラの心を癒してくれるのだ。

「このまま、この国の民には笑顔のままで居て欲しいな・・・？」

ふと、視界の隅に何かが見えた。
普段の市街では見る事の無い何か、路地裏に消えて行ったそれが何とも気になり、アキラは警戒しながら路地裏へと歩みを進めていく。

「確か、この辺・・・だよね」

路地裏を少し行ったところにある小さな空き地、しかしそこには何も無い。見間違えかと思い、踵を返して戻ろうとしたアキラだったが、突如、腹部に熱を感じた。

見下ろしてみると、彼女の腹部から銀色の刃が突き出ており、その刃を真っ赤な血に染めている。

「あ、ああ・・・ガハッ！」

引き抜かれた刃が通った腹部から血が吹き出てくる。

血を吐きながらアキラは普段から展開しているアーティファクトの力で水の太刀を作り、背後の襲撃者を切り裂こうとしたが、既に誰も居らず、水の刃は空を切った。

「うぐっ・・・く・・・・・・だ、め・・・ここで、倒れたら・・・」

血を流しすぎて意識が朦朧とするのを堪えながら、アキラは表を目指して足を動かす。

そして、漸く表街道に出た所で力尽き、意識を手放して倒れてしまった。そのアキラの姿を見た民が、血を流しながら倒れるアキラに悲鳴を上げ、騎士団が駆けつけるのは直ぐだった。

その様子を遠くから見つめていた黒いローブの人物は、フードの陰の下で、口元をニヤリと歪めてその場を立ち去った。

一瞬だけ、黒い髪の一部・・・三つ編みにした髪が見えたのだが、それに気付いた者は誰もいない。

第七話　「模擬戦、動き出す影」（後書き）

次回は…明日香たちがメガロメセンブリアから離れます。
そして、事態は更に動く予感…？

第八話　「襲撃」（前書き）

今回、三代目・紅き翼のアーティファクトが本編初公開です。

第八話　「襲撃」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第八話
「襲撃」

その報を受けたのは明日香たちがメガロメセンブリアを出て直ぐの事であった。
新ウェスペルタティア王国第二騎士団長、大河内アキラが何者かに襲撃され、意識不明の重体。犯人は不明、警邏に出ていた彼女が腹部から大量の出血をしながら路地裏から出てきた所で倒れたのを街の者が発見、直ぐに騎士団の人間に報告が行き、王国緊急病院に搬送されたらしい。

「アキラさんが・・・」
「そんな・・・」

アキラと言えば第二騎士団長でもあり、17年前の二代目・紅き翼の一員にして英雄の一人、最強クラスに名を列ねる王国最強の一角だ。
水魔法の使い手であり、この世の水全てがアキラを加護する世界屈指の水の王、水の主とも言われている女性でもある。

「アキラさんが重体って・・・じゃあ、やっぱ敵には最強クラスがいるって事かよ・・・アキラさんを倒せるだけの実力者が」
「私たちでは・・・勝てない」

三代目・紅き翼のメンバーで最強クラスは月詠だけ、敵に最強クラスが何人いるのか判らないが、もしも戦うときは月詠しか戦力として使える者はいない。

「まぁ、敵さんに最強クラスがおったらウチが戦いますえ～、明日香殿下たちはその他の雑魚の相手をお願いするしかあらしまへん」

「手厳しいですね」

「そう思うんやったら、もっと強ぅならんとなぁ」

結局、それしかないのだ。

明日香たちを乗せたクリムゾンは一路、ヘラス帝国へと向う。新ウェスペルタティア王国第一騎士団長ジャック・ラカンの妻、テオドラ・ラカンの兄が現在皇帝になっているので、アポ無しでも会えるだけのコネは持っている。

ヘラス帝国現皇帝に会うために、明日香たちはヘラス帝国国際空港に入国するのだった。

新ウェスペルタティア王国では連日緊急会議が続いていた。理由は勿論、アキラが襲撃され、今も意識不明の重体で入院している事である。

最強クラスのアキラが襲撃された事もあるが、そのアキラが襲撃された場所が王国内での出来事だというのが問題の一つなのだ。

「まさか、王国内部に侵入されていたとは・・・」

報告書を読みながら宰相のエヴァンジェリンが忌々しげに呟いた。

入国に関してはアリアドネー崩壊以降、厳重な審査を課していたのにも関わらず、謎の組織と思しき者を王国内に入れてしまい、その結果がアキラの戦線離脱だ。

「入国審査官は何をやっていたのだ！　これは大問題だ！」
「も、申しわけ御座いません宰相！　く、隈なく入国記録を確認したのですが、その・・・特に怪しい人物が入国したという記録はまだ見つかっておらず、入国審査官も怪しい人物は見なかったと」
「既に事が起きているのだぞ！　そのような言い訳が通用すると思うな！！！」
「エヴァ、落ち着け」
「落ち着いていられるか！　アリス！　貴様も何を落ち着いている！！」
「落ち着け！」

会議室に殺気を撒き散らしているエヴァを嗜めるアリスだったが、一向に落ち着かないエヴァにアリスも殺気を出しながら怒鳴りつけた。
実力的にアリスよりも高いエヴァだが、何故かアリスの殺気にだけは弱く、一瞬で竦みあがって、怯えた子供のような表情になる。

「落ち着いてくれエヴァ・・・私も堪えてるんだ・・・だからエヴァも、落ち着いてくれ」
「え、あ、ご、ごめ・・・なさい」
「・・・すまん、それよりも皆、重要なのはアキラが重傷を負わされた事だ。」
「確かにそうですな・・・アキラ団長と言えば陛下がリーダーだった最強集団、二代目・紅き翼のメンバーでもあられたお方、１７年前の英雄のお一人でもあるのですから、そのアキラ団長に重傷を負わせるなど、只者ではございません」

アキラの実力はこの場にいる誰もがよく知っている。
確かにアキラは二代目・紅き翼の“人間”の中では最弱だが、そ

れでも最強クラスの実力者であることに変わりはない。そのアキラに重傷を負わせるという事は下手人も最強クラスの実力者である事の証明にもなるのだ。

「陛下・・・」

「・・・シルヴィア、言いたい事は理解出来る。捜査はラカンの第一騎士団にやってもらうけど、国内に警戒令は出すべきだろう」

今のところ一般市民に被害は出ていないが、今後も出ない保障は無い。

「それから、さよ」

「はい！」

「しばらく、第三騎士団はさよだけ王都に待機、霊を使って王国内の調査を隈なく頼む」

「了解です！」

こんな時、自由に動けない事をアリスは口惜しく思う。

国王である以上、今のアリスが滅多に最前線で動く事は許されないのだから、仕方が無いと言えばそれまでなのだが、どうしても思ってしまうのだ。

「アリスさん・・・アカンよ、その気持ちは犯人を見つけてからぶつけな」

「ああ・・・勿論だ」

とりあえず、犯人が見つかり次第、その末路は決まった様なものだった。

ヘラス帝国に向う明日香たちを乗せたクリムゾンは、順調は航路を取っていたのだが、現在は謎の組織と思しき魔法使い達に襲撃を受けていた。

「くそっ！　殿下！　姫殿下！　防御結界ももう限界でさぁ！　迎撃をお願いできませんか！？」
「わかってる！　みんな！　甲板に上がって迎撃する！」
『了解！』

装備を整えて甲板に上がった明日香たちは我先にと襲い掛かってくる襲撃者の迎撃を行う為に月詠を除く四人全員がカードを掲げた。

「「「「アデアット！！」」」」

仮契約の証、パクティオーカード。リューガは木乃里と、メルシィは明日香との仮契約によって生まれたカードを、明日香と木乃里は互いに相互契約をして得たカードを、アーティファクトに変える。

「猛者の甲冑！！」
「強者の兆し！！」
「ホウマノツルギ！！」
「テンマノツルギ！！」

リューガのアーティファクト、猛者の甲冑は両手足に装着されたゴツイ鉛色の甲冑だ。この甲冑、オリハルコンで出来ており、気の伝達率が高く、尚且つ魔法を反射する能力を持っている。
メルシィのアーティファクトである強者の兆しは杖を持つ両手首に装備された腕輪、効果は術者の呪文を強化・倍増させる補助型のアーティファクトである。
木乃里のアーティファクト、ホウマノツルギは彼女の叔母である

アスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアのアーティファクトであるハマノツルギと同じく魔法無効化能力を持った究極の対魔法・気兵装だ。
そして明日香のアーティファクト、テンマノツルギはホウマノツルギやハマノツルギと同じく、魔法や気に対する無効化能力を持った究極の兵装だが、たった一つの違いは刀身が雷を帯びている事だろう。

「死ねぇ！！　明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシア！！！」
「高速詠唱！　千の雷！！　是、“千撃の雷姫”！　二刀連撃、斬空閃・雷！！」

雷を纏う剣二本から放たれた斬空閃が、雷交じりの空気の刃となって迫り来る襲撃者の身体をクロスに切り裂いて絶命させる。
更に明日香は殺した襲撃者の後ろから迫ってきていた男に向って虚空瞬動に入り、背後に移動すると首を切り落として真横から迫ってきた女の腹部にホウマノツルギを突き刺した。

明日香の従者でもあるメルシィは明日香が戦い安い様にサポートをする為に杖を構えると、襲撃者が迫ってこないのを確認して詠唱を始めた。

「ミル・モル・メイグ・モラトリアム　来たれ雷精　闇の精　集い着たりて轟け　夜闇の奔流　闇の降雷！！」

杖の先から放たれた黒い雷の奔流が明日香を囲もうとしていた襲撃者の半分を飲み込んだ。
まだ躊躇いがあるのか、その一撃で死ぬ者は居なかったが、殆ど重傷を負って高度から地面に落ちていく。恐らくそのまま地面に叩きつけられて死ぬだろう。

木乃里と、彼女の従者であるリューガの二人は背中合わせで迫り来る敵をホウマノツルギと猛者の甲冑で切り裂き、殴り、蹴り殺していく。

「リューガ、時間稼ぎを！」
「おうよ！」

後方に下がった木乃里を守る様にリューガが前に出て両手の拳に大量の気を集めた。

「いくぜぇ！！　ダブル！　ラカン・インッパクトォおおおおお！！！！！！」

腰溜めに構えた両腕を一気に突き出し、大砲の如き気の砲撃が木乃里の詠唱を妨害しようとする襲撃者たちを飲み込み、強烈な圧力で身体を押し潰し、消滅させていった。

「フロム・フルーレ・ル・リフレイン　契約に従い　我に従え　光の王　来たれ　万物を照らす　天空の輝き　日輪を歩む者に　生命を　常世の全てに　生者の理を」

詠唱が終わった。
木乃里は杖をホウマノツルギを甲板に突き刺して杖を構えると、その先を残る襲撃者全員に向ける。

「生者のせかい！！」

生命を象徴する様な輝きが命を奪う、その矛盾を孕んだ魔法は残りの襲撃者全てを飲み込み、その肉体、塵一つ残さず光の中へを掻

き消してしまうのだった。

「おろ？　なんや、まだ一人残ってたんやな～」

少し離れて戦闘を見ていた月詠だったが、ふと背後に気配を感じて、振り向いてみると襲撃者の一人であろう女性がダガーを構えて月詠に向って走り寄ろうとしているのが見えた。

「うふ」

小太刀を一刀だけ抜いた月詠は女のダガーをかわして頭上から股下まで一気に小太刀を振り下ろす。

真っ二つになった女はそのまま崩れ落ち、返り血を浴びた月詠はつまらなさそうな表情で頬を膨らませた。

「なんや、つまらん。もっと強い人連れて来んと満足出来まへんえ～？」

小太刀に付着した血を払って鞘に収めると、船内に戻った。

クリムゾンは一応無傷で何とか航行を再開して、夕方にはヘラス帝国に到着。三代目・紅き翼は翌日に皇帝と謁見する事になるのだった。

第八話　「襲撃」（後書き）

次回はヘラス帝国皇帝との謁見と、ついに最悪の事態が起きてしまいます。

第九話　「最悪の事態」（前書き）

どうしてこうなった…ｏｒｚ

第九話　「最悪の事態」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第九話
「最悪の事態」

ヘラス帝国、魔法世界でも最大の領土を誇る大国であり、新ウェスペルタティア王国とは最も深い同盟を築いている国でもある。
前皇帝が隠居後、新皇帝としてテオドラ元第三皇女の兄が即位したのが６年前、明日香たち三代目・紅き翼とも親交があって、こうしてアポ無しでも会う事が出来るだけの関係は築いていた。

「久しいな、明日香殿下、木乃里姫殿下」
「ティム皇帝陛下も、ご壮健そうで何よりです」
「お変わり無いご様子で、安心いたしました」

ヘラス帝国皇帝と、新ウェスペルタティア王国第一王子と第一王女としての挨拶を挟み、続いて三代目・紅き翼としての話を始めた。
話す内容はリカードの時と同様、謎の組織の事とアリアドネー崩壊の事。ヘラス帝国ではどの程度掴んでいるのかを尋ねる。

「ふむ、我が帝国の諜報員からの情報では他の国と同様の事しか得られていない。ただ、一つだけ気になる事があったな」
「気になった事、ですか？」
「謎の組織と関係があるのかは判らないが、アリアドネーでは１０年前くらいからアリアドネーの人間以外の男が多数見受けられたらしい」

それだけなら別に気にする事でもないのだが、何が気になったのかというと、その後の報告だ、その男達に一つの共通項があるのだ。

「その男達は皆、一人の人物と会っていたらしい」

「一人の人物ですか？」

「うむ、アリアドネー戦乙女騎士団長の一人にして、アリアドネー魔法学園教員の一人でもある綾瀬夕映と会っていたらしいな」

しかし、その綾瀬夕映の死亡が確認されているので、今となっては確認する術は無い。

それに、アリアドネーの綾瀬夕映と言えば、元・白き翼の一員である事を除けばアリアドネーでも良い意味で有名な人物だった。

教え方が上手い、指揮が上手、優しい、旧世界の元一般人とは思えない程の実力者等々、実力に関しては最終的にどの程度だったのかは定かではないが、生徒や部下から慕われる女性だったのは確かなのだ。

「怪しい所はありませんね」

「だな、俺も綾瀬夕映の噂は聞いた事があるけど、そんな悪い人間じゃないぜ？」

メルシィもリューガも同意権だ。特に怪しいとは思えない以上、気にするべき点ではないのだろう。その男達も彼女の客人というだけだったのだろうから。

「ふむ、こんな所か・・・して、明日香殿下たちはこの後は如何なさるので？」

「あ、はい。一度、オスティアに戻ろうかと思ってます」

「そうか、ではアリス陛下によろしくな」

「はい」

結局、ヘラス帝国でも詳しい情報は得られなかった。
明日香たちは一度、新ウェスペルタティア王国に戻って再度、アリスと会って今後の事を決める事に決め、クリムゾンに乗ってオスティアに進路を取るのだった。

新ウェスペルタティア王国の郊外、１７年前に封印された墓守人の宮殿の見える丘には１５年前に建設された駐在基地が存在していた。
その基地にいるのは新ウェスペルタティア王国、ヘラス帝国、アリアドネー、新メガロメセンブリアの混成軍で、封印された墓守人の宮殿の監視・観測を主な任務としている。
混成軍で司令官をしているのは、１７年前は白き翼に所属していて、、現在は新ウェスペルタティア王国軍の将軍を務めるアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアだ。

「魔法世界が騒がしくなってるけど、墓守人の宮殿は相変わらずね」

司令官室の窓から見える墓守人の宮殿を眺めながら、紅い司令官服を身に纏ったアスナは資料片手に紅茶を口にした。

「指令、こちらの資料にも目を通しておいてください」
「あ、うん・・・ねぇウルフ、今回の事件なんだけど・・・アンタは如何見るの？」

同じく、司令官室に居たアスナの副官、新ウェスペルタティア王国軍大佐のウルフ・ワークリーは上官の問いに対して顎に手を添えながら考える。

確かに、今回のアリアドネー崩壊事件や三代目・紅き翼襲撃事件、大河内アキラ襲撃事件は計画性がありすぎるのだ。まるで・・・、

「まるで、誰かが何年も前から計画していたみたい・・・そう言いたそうね？」

「は・・・仰るとおりです」

「そうね、あたしもそう思うのよねぇ。それじゃ、今度は何が起きると思う？」

「アリアドネー崩壊、明日香殿下と木乃里姫殿下たちの襲撃、大河内第二騎士団長襲撃、それに続いてですか・・・墓守人の宮殿襲撃でしょうか？」

「最悪のパターンよね、それ」

本当に最悪のパターンだ。何故なら墓守人の宮殿には“アレ”が封印されている、襲撃を受けて、もしも“アレ”の封印が解かれでもしたら・・・。

「真っ先に狙われるわ、陛下が」

「はい」

アスナやウルフの最も上官に当たる新ウェスペルタティア王国騎士団及び軍の最高総司令官にして国王のアリス、真っ先に狙われてしまう。

「はぁ」

「指令・・・いえ、アスナ、少し休んだ方が良いのでは？　もう随分と休んでいないだろう？」

「ん・・・そうしたいけど、出来ないわ。あなたには迷惑掛けちゃうけど、指令のあたしがこの情勢下で呑気に休んでいられないわよ」

「妻の身を案じない夫がいるか、迷惑なんて、思うわけないだろう」

ウルフとアスナ、実は夫婦別姓にしているが結婚している。
最初こそ指令と副官だった二人だが、お互い共に仕事をしている内に何となく惹かれあうようになって、気が付けば男と女の関係になって、恋仲になって、2年前に結婚した。

「ありがとう、でも大丈夫よ。もう少ししたら確りと休暇を取るから、それまでは頑張らないと」
「無理はするなよ？」
「勿論よ、休暇に入ったら一緒に温泉でも行きましょうか？」
「ああ、楽しみにしてる」

休暇の楽しみも出来たところでアスナは渡された資料に目を通そうとした時だった。基地全体に警報が鳴り響き、非常事態警報を知らせる。

「発令所！　何事！？」
『し、指令！　墓守人の宮殿に接近する船籍不明艦が多数！　いずれも武装をしている模様です！！』
「あたしも直ぐに発令所に上がるわ、その間に第一種戦闘態勢発令！　混成艦隊出撃！　対魔法戦闘用意！」
『了解！』

突然の出来事にアスナは一瞬だが驚くも、直ぐに表情を引き締めて、オペレーターに指示を出して通信を切ると、己が夫でもある副官の方を向いた。

「ウルフ、あたし達も直ぐに発令所へ行くわ」
「了解です」

急ぎ足で発令所に着くと、多くの軍人が非常事態に大慌てしていたが、指令のアスナが入ってきたことで全員立ち上がりながら敬礼する。
アスナとウルフも敬礼を返して、司令官席にアスナが座り、その横にウルフが立った。

「状況報告！」
「は、はい！　現在、船籍不明の艦隊が墓守人の宮殿に近づいてきています。その距離およそ３００００！　距離としてはまだ離れていますが、進行スピードから考えて１時間以内には墓守人の宮殿の封印結界に接触するかと・・・」
「混成艦隊は？」
「ウェスペルタティア、ヘラス、アリアドネー、メガロメセンブリア、全艦隊が既に出撃準備を終えています」
「よし、ウルフは混成艦隊の指揮をお願い。皆は船籍不明艦隊に呼びかけと警告を出して」
「了解」
『了解！』

しかし、アスナが危惧していた事が本当に起きてしまった。
船籍不明艦隊は間違いなく謎の組織のものだろう、それくらいは簡単に予想出来る。だからこそ大変な事態なのだ、墓守人の宮殿に、接触させる訳にはいかないのだから。

「それと、新ウェスペルタティアのアリス陛下に緊急連絡、現状を説明しておいてちょうだい」
「了解です！」
「っ！　指令！　大変です！！！　船籍不明艦隊から魔法使いと思しき人影が多数出撃しました！！」
「こちらも魔法騎士部隊を出撃！　それから基地全体に通達！　こ

れより我が基地は浮上、その後すぐにトランスモードへ移行する！！」

「了解！！」

既にウルフの指揮で混成艦隊は出撃している。艦隊から魔法騎士隊が出撃したのと同時に墓守人の宮殿監視・観測用駐在基地が地面ごと浮上して、基地が付着していた地面の中に収納された。

そして、地面が一気に吹き飛ばされ、中から巨大な戦艦が現れる。これこそ駐在基地の本体であり、アスナ達混成部隊の旗艦、対艦隊殲滅戦艦タソガレだ。

「タソガレ、魔道エンジン異常無し、主砲を含む全武装オールグリーン」

「魔法無効化シールド展開完了、全工程オールクリア」

「対艦隊殲滅戦艦タソガレ、発進！！」

アスナの号令と共に、魔道エンジンが点火して混成艦隊を追い掛ける形で発進する。

タソガレは巨大な船体をものともしないスピードで混成艦隊に追いつくと、最後尾に並んで武装を展開した。

「船籍不明艦隊からの返事はあった？」

「いえ、無言を貫いてます」

「あ、船籍不明艦隊、武装を展開しました！」

「成る程ね、やる気満々と言った所なんだ・・・ならあたし達、混成艦隊の力を見せてやろうじゃない。全艦隊に通達！　武装展開！向こうが仕掛けてきたら容赦しなくていいわ、徹底的に殲滅せよ！！」

混成艦隊の全戦艦が武装を展開した所で、船籍不明艦隊が精霊砲

を発射してきて、魔法騎士隊も敵、魔法使い部隊と接触、戦闘に入った。

「被害は？」

「前衛艦隊のダメージ率は最高でも２０％、まだ行けます」

「ならもう容赦はいらないわ。こちらも精霊砲を発射！　タソガレは主砲をチャージ！」

「魔法騎士隊、戦闘開始しました！　敵の服装から謎の組織と判明！」

「やはりか・・・・・・」

やはり謎の組織だった。

今までは魔法使いのみの襲撃だったのに、こうして艦隊まで持ってくるとは、それだけの軍事力を持った組織という事の証明にもなる。

これは何としても墓守人の宮殿に近づけるわけにはいかない。アスナは目の前に出したトリガーを握った。

「主砲、チャージ率５７％」

「チャージ完了まで残り４５秒です！」

「チャージ完了後、混成艦隊を斜線上から退避させて」

「了解！」

画面に映る謎の組織の艦隊を見つめながら、アスナはトリガーを握る手に力が入った。

「近づける訳にいかないのよ・・・“アレ”の封印を解かれたら、アリス君も、木乃香も、それに明日香君や木乃里ちゃん、明日葉ちゃん、木乃亜君が狙われるんだから」

大事な甥と、その妻となった親友、そして二人の子供達の顔が脳裏を過ぎった。

彼等を守る為に、“アレ”の封印が解かれる事が無いよう、この仕事に就いたのだから、こんな所で負けるわけにいかない。

「チャージ完了！」

「斜線上の混成艦隊、退避完了しました！」

「よし・・・究極精霊砲ライフブレイカー・・・発射！！」

第九話　「最悪の事態」（後書き）

こ、後半が魔法ファンタジーというより、ＳＦっぽくなってしまった…。
どうしてこうなったｏｒｚ
次回はアスナが出撃！　そして…。

第十話　「復讐者」（前書き）

やべ、１０分で書き上がっちゃった…。

第十話　「復讐者」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十話
「復讐者」

究極精霊砲ライフブレイカー、対艦隊殲滅戦艦タソガレの主砲にして、アリアドネー、ヘラス、メガロメセンブリア、ウェスペルタティアの４国で協同開発された最強の精霊砲の名だ。
このライフブレイカーは４国の旗艦となる戦艦にのみ搭載されている主砲で、一つの国につき二つまでしか所持が許されていない。
破壊力は従来の精霊砲の１０倍以上で、上位古代語魔法並みか、それ以上の威力を持つため、国防の抑止力として重宝されていた。
タソガレが放ったライフブレイカーは謎の組織の艦隊の６０％を飲み込み、爆発する前に消滅させてしまう。
残る艦隊は混成艦隊で充分対処可能なので、タソガレは少し下がって指揮に徹する事となった。

「少し、魔法使い部隊が多いわね」
「はい、こちらの魔法騎士隊より１０％ほど多いでしょうか？」
「あたしが打って出るわ。ウルフ、指揮をお願い」
「指令、自ら出なくとも・・・」
「大丈夫よ、向こうの魔法を打ち消して魔法騎士団が攻撃する隙を作りに行くだけだから」

そう言ってアスナはブリッジでもある発令所を出ると甲板まで行き、飛行魔法が付与された呪符（新ウェスペルタティア王国第二王

女特製）を取り出して一気に飛翔、虚空瞬動を併用しながら魔法騎士隊に追いついた。

「状況は？」

「指令！？　は、現在は数で向こうに有利ではありますが、善戦してます。ただ・・・敵に上級クラスがいるのか、上位古代語魔法が時々来るのが・・・」

「そう・・・って、話してる間にも来たわね」

見えたのは燃える天空と千の雷だ。

アスナは懐から一枚のカードを取り出すと、それを掲げて一言呟いた。

「アデアット」

１７年前、エヴァとの仮契約によって復活したアーティファクト、ハマノツルギに変えたアスナは肩に担ぐ様に構えると、王家の魔力を巨大な刀身に込めて、呪文を唱えながら一気に魔法へ向けて振り下ろした。

「無極而太極斬！！！」

アスナを含む完全魔法無効化能力者の奥義、無極而太極斬。魔法や気といったもの全てを無効化しながら突き進む斬撃、それは燃える天空と千の雷を切り裂いて無効化しながら敵魔法使い部隊の１０分の１を薙ぎ払う。

「今よ、総員攻撃！！」

突然の事に動揺し始めた敵は決定的な隙を作った。

アスナの号令と共に魔法騎士隊が一斉に魔法を放ち、数の不利を覆して一気に攻勢へと回る。

「よし、これで・・・」
「フォワ・ゾ・クラティカ・ソクラティカ」
「っ！」

突如聞こえた起動キー、その声、そこキーに、アスナは覚えがある。

それは嘗ての学友で、嘗ての仲間で、嘗て袂を別った人、そして・・・アリアドネー崩壊と共に死亡したはずの女性の・・・・・・。

「契約に従い　我に従え　高殿の王　来たれ　巨神を滅ぼす　燃え立つ雷霆　百重千重と重なりて　走れよ稲妻」

不味い、背後から聞こえるこの詠唱、アスナやタソガレは問題無いが、このままでは魔法騎士隊が壊滅してしまう。

「みんな、逃げて！！」
「千の雷！！」

先ほどアスナが掻き消した千の雷とは比べ物にならない強力な千の雷が放たれた。

背後からの突然の魔法に魔法騎士隊は咄嗟に動く事が出来ず、アスナが何とか間に身体を滑り込ませた事で半分以上は無事だった。

だが、それでも被害は出てしまい、アスナが無効化し切れなかった分の雷を受けてしまった騎士たちは殆どが死亡、残る少数は重傷を負ってしまう。

「夕映ちゃん！！」

千の雷が放たれた場所へ一気に虚空瞬動で移動したアスナだったが、そこには既に人影は無く、ただ魔法が使われたという痕跡が残っているだけだった。

「まさかっ！」

急ぎ墓守人の宮殿の方を振り返ると、アスナたちが戦っていた艦隊とは別の艦隊が墓守人の宮殿に張られた封印結界に接触している。

「こっちは囮！？　別働隊がステルスで・・・やられた！！」

ここからではアスナや魔法騎士隊も、タソガレも距離がありすぎて間に合わない。

もう一度、無極而太極斬を放っても届かない距離に敵別働艦隊がある為、もう手出しが出来ないのだ。

「魔法騎士隊はここの囮を何とか殲滅！　あたしとタソガレは急いで墓守人の宮殿に行くわ！！」

既に敵別働艦隊は封印結界を越えて墓守人の宮殿に接近している。もう間に合わない可能性が高いが、兎に角行動しなければ・・・最悪の事態が、本当に最悪の事態が現実になってしまう。

「なんで、なんでアンタは・・・そんなにアリス君が憎いの！？あの時の事は、みんな納得してなかったのは理解してる！　でも、みんな・・・大人になるにつれて納得出来る様になったのに、アンタはまだ納得してなかったの！？　アレは、あの時は封印するしかなかったのが、何で理解出来ないのよ・・・夕映ちゃん！！！」

アスナの必死の叫びが、飛行スピードを更に上げる。
だが、その追い上げも空しく・・・墓守人の宮殿の最上階から、どす黒い光と、強大な魔力と、憎悪を孕んだ叫び声が、天に響いたのだった。

明日香たち三代目・紅き翼が新ウェスペルタティア王国に到着して、王城に入った時、王城内・・・つまり重役達は大慌てだった。
何しろ、現在の魔法世界における最大の緊急事態が起きてしまったのだから。

「あ、シルヴィアさん」
「本当です・・・どうしたのでしょうね？　なんだか皆さんもですが、様子がおかしい？」

謁見の間に向う途中で、シルヴィアの姿を見つけた。
すると向こうも明日香たちの姿を見つけたのか、駆け足で走り寄って来る。本気で慌てているのか、表情にも余裕が無い。

「明日香殿下、木乃里姫殿下！」
「おいおいシルヴィアさん、随分と慌しいけど、何かあったのか？」

リューガの問いに、シルヴィアは一端立ち止まって深呼吸をすると、険しい表情で三人を見下ろした。

「先ほど、アスナ指令から連絡が入りました。墓守人の宮殿の封印結界が謎の組織に破られ、最上階に封印してあった“アレ”の封印が解かれたと」
「っ！　あ、アレの封印をですか！？」
「？　明日香様、アレとは・・・」

「メルシィちゃんは知りませんでしたね・・・墓守人の宮殿が封印されていたのには、訳があるんです」

まだその辺の事情を知らないメルシィが首を傾げたので、木乃里が説明する。１７年前、明日香と木乃里の父が倒して、封印したアレの事を。

「白き翼のことは、ご存知ですよね？」
「ええ、話には聞いてます。ブックストアーのリーダー、のどかさんやアリアドネーで亡くなられた綾瀬夕映さんが所属していた組織ですね」
「うん、その白き翼のリーダーが誰なのかは、知らないでしょ？」
「そういえば・・・」

白き翼の話は魔法世界でもそれなりに知られているのだが、今のメルシィ達の世代に白き翼のリーダーの名を知る者は居ない。

「白き翼のリーダーの名はネギ、ネギ・スプリングフィールド・・・私たちのお爺様、ナギ・スプリングフィールドと、お婆様、アリカ・Ａ・Ｅ・スプリングフィールドの息子です」
「・・・え、っと・・・・・・それってアリス陛下の事では？」
「いいえ、お父様の事ではなく、もう一人の息子、お父様の弟の事です」

アリスに弟がいる、その話は初耳だったのだろう。メルシィは大層驚いていた。

「ま、まさか・・・その封印されていた理由って」
「はい、墓守人の宮殿の最上階には・・・闇の魔法で魔族に堕ちたネギ・スプリングフィールドが封印されているんです」

そして今回、ネギ・スプリングフィールドの封印が解かれてしまった。
魔族に堕ちたネギが真っ先に狙うのは、自身を封印した者、つまりアリスのみ。

「そ、そんな!?」
「でも、まだネギ・スプリングフィールドが襲撃してきたという訳ではなさそうですね・・・」
「ええ、まだ来てない・・・いいえ、来ないんですよ。だって、ネギ・スプリングフィールドは・・・」

綾瀬夕映が連れて行ったのだから、シルヴィアはそう言った。

「ちょっと、待ってくれ！　綾瀬夕映って、アリアドネー崩壊で死んだんじゃねぇのか!?」
「そう、報告されていました。しかし、生きていたんです・・・それも、謎の組織の、いいえ、反・新ウェスペルタティア王国連盟組織“アヴェンジャー”の首領として」

謎の組織改め、アヴェンジャー。死んだ筈の綾瀬夕映が首領の組織が、ネギ・スプリングフィールドを手に入れた。
事態は急展開を見せ始める。17年前の大戦の再来とも言うべき事態が起きるのは、もう直ぐだった。

第十話　「復讐者」（後書き）

次回はアヴェンジャーの声明と、旧世界から第二王女の帰還。
そして、綾瀬夕映のアリスに対する憎しみが曝け出されます。

第十一話　「憎しみ」（前書き）

な、何が書きたかったのかなぁ？　何書いてるのか判らなくなってきた…。

第十一話　「憎しみ」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十一話
「憎しみ」

明日香たちがシルヴィアと共に会議室に入った時、既に会議室には入院中のアキラを除く重役全員が揃っており、鎮痛な面持ちで投影された映像を見ていた。
何事かと尋ねれば、反・新ウェスペルタティア王国連盟組織アヴェンジャーからの声明が魔法世界全土に発表されたのだとか。それも首領である綾瀬夕映自身によって。

『私は、反・新ウェスペルタティア王国連盟組織アヴェンジャーの首領、綾瀬夕映です。我々アヴェンジャーは新ウェスペルタティア王国と、その国王であるアリス・S・エンテオフュシアの存在を認めないです。17年前の大戦以降、立派な魔法使い（マギステル・マギ）制度が廃止された事は多くの魔法使い達の不満を買っているという事を知りながら、実行した暴挙。何より、魔族に堕ちたからと実の弟を封印した冷酷性、英雄などと持て囃され、本来その称号を受ける筈だったネギ・スプリングフィールドを封印したその行いに、私は強い怒りを感じているです。我々はネギ・スプリングフィールドの封印を解き、彼の人格を取り戻す事に成功しました。だからこそ、今此処に宣言するです！　ネギ・スプリングフィールドを国王とした神聖ウェスペルタティア王国の建国と、新ウェスペルタティア王国を含む魔法世界全ての国への宣戦布告を！！　新ウェスペルタティア王国は滅び、神聖ウェスペルタティア王国が魔法世界を支配する！！』

映し出されたアヴェンジャーの服を着た夕映の姿、その後ろには黒い魔族の姿をしたネギの姿も映っており、更に幹部と思しき者たちの姿もあった。

その幹部にも見覚えがある。17年前の大戦でアリスたちが戦った完全なる世界の一員だったフェイト・アーウェルンクスの従者達、アリアドネーで暮らしているというのは知っていたが、まさか記憶の封印が解かれてしまっていたらしい。

「焔・・・暦・・・環・・・調」

その幹部達の名を呟いたのはアリスの後ろに控えていたメイド、王城のメイド長を務めている嘗てのフェイト・アーウェルンクスの従者の一人でもあった栞こと ルーナだ。

17年前の大戦以降、フェイト・アーウェルンクスの従者達はルーナを除いて全員がアリアドネーに行った。そしてルーナだけは本人がアリスのこの先を見定めたいという希望もあって新ウェスペルタティア王国に残ったのだ。

「お父様・・・アヴェンジャーの事で判ってる事は何かありますか？」

「今のところ、判っているのは綾瀬夕映を首領として、幹部にはネギとフェイト・アーウェルンクスの元従者が、構成員には完全なる世界の信派や旧メガロメセンブリア元老院上院議員派の生き残りやその子孫、更に誘拐された魔法学園卒業生達やその親の魔法使い達だ」

正確には魔法学園卒業生達は誘拐されたのではない。今の立派（マギス）な魔法使い（テル・マギ）制度を廃止した魔法世界に不満を持って、自らアヴェンジャーに付いて行ったらしい。

「恐らく、新ウェスペルタティア王国を滅ぼして魔法世界を支配した暁には立派な魔法使い制度を復活させるとでも言ったのだろう。あの制度を廃止した事で不満を持っていた旧世界の魔法使いは多かったからな、その子供達にも影響はあったらしい」

そして綾瀬夕映の目的は復讐だ。17年前、ネギを封印したアリスへの憎しみと、彼女の主観で本来英雄の称号を受ける筈だったネギの邪魔をしたアリスという存在の消去が目的だろう。

「その為に、ぼーやの封印を解いて、どうやったのかは知らないがぼーやの意識を取り戻したという事か」

「そして、今度こそネギに私を殺させて、神聖ウェスペルタティア王国を建国。新ウェスペルタティア王国を乗っ取るつもりだろうね」

不味い事になった。

綾瀬夕映の実力は、17年前はアリス達にとって路肩の石にも劣る程度のものでしかなかったが、アスナが受けたという夕映の千の雷は上級クラスを超越しているという報告も上がっている。

更にネギ、人間だったときにも既に最強クラス上位に入っていたが、魔族化したことで強上位になっていても不思議ではない。

今のネギの対抗出切るのは17年前から衰えていないラカンとエヴァ、アルくらいだろうが、ラカンもエヴァもアルもそれぞれの立場があり、ネギと一騎打ちをしていて良い状況ではないのだ。それに、ネギが真っ先に狙うのは間違いなくアリス、17年で随分と衰え、更にアリスの代名詞とも言うべき術式武装を行う為の“姫”を明日香に譲った今のアリスでは、勝てる可能性は低いだろう。

「陛下、アヴェンジャーの規模としては恐らく一国分の戦力があると考えるべきかと・・・」

「だろうね、多分うちと互角くらいか、少し多いくらいの戦力だと思う」

新ウェスペルタティア王国の戦力は軍艦が凡そ５００、騎士団を含めた軍の魔法使いが約５４０だ。魔法世界でも屈指の軍事力を有している新ウェスペルタティア王国なのだが、アヴェンジャーはどうやって同等クラスの軍事力を用意したのだろうか。

「可能性として考えられるのは魔族を使った方法だろうな」

「ああ、そういやそんな方法もあったよなぁ」

エヴァが出した方法、その内容を聞かずとも理解したのかラカンが顔を顰めて頷いた。

明日香も木乃里も、リューガもメルシィも、それにこの場にいる誰もがその方法に心当たりがあるのか、表情が優れない。

「魔族と交わって、産み落とした子供を使うか・・・」

魔族、それも魔獣系の魔族の子供は成長が早い。

孕んでから１週間もあれば産まれ、そして成長して人間で言う青年期になるのに１ヶ月もあれば余裕だろう。

魔獣系の魔族と人間のハーフは魔獣の特性を受け継ぐ人間形態をとっているので、戦力としては申し分ないだろう。

「恐らく、アヴェンジャー所属の女性は殆どが魔族の子供を生んでいる筈だ」

「なんと恐ろしいまねを・・・」

数年単位で計画していたが故の方法だ。

それともう一つ、アヴェンジャーが所有している戦艦はどうやっ

て入手したのかだ。アヴェンジャーの戦艦はどの国の戦艦とも規格が合わないから、恐らくはオリジナルなのだろうが、それを造るだけの資金を用意したのだろうか。

「・・・考えるだけ無駄でしょう。方法はいくらでも思いつきますが、それが私達に何の関係も無いのなら、今はもっと他の事を考えるべきです」

財務大臣のシルヴィアらしい意見だった。

兎に角、今は軍備を用意する方が先決、第一騎士団、第二騎士団、第三騎士団、ウェスペルタティア軍、全てを結集させて、ヘラス帝国、メガロメセンブリアとも連携した軍を用意して事に当たるしか無い。

「それと明日香」

「はい！」

「三代目・紅き翼にも今回の戦争、参戦してもらうよ」

「は、え・・・？」

「お父様・・・それは」

正直、アリスとしても嫌な選択だ。しかし、今は戦力を遊ばせておく余裕は無い。

幸いにも三代目・紅き翼はメルシィを除けば全員が上級クラスの実力を持っている。戦力として数えるには充分だ。

「それから、旧世界から明日葉が帰ってきている。明日葉も三代目・紅き翼に合流させるから、一緒に事にあたってくれ」

「明日葉が！？」

明日葉・S・K・エンテオフュシア、アリスの娘で、明日香と木

乃里の妹。新ウェスペルタティア王国第二王女であり、旧世界日本の次期関西呪術協会長となるべく修行をしている。
その明日葉が帰ってきている。そして三代目・紅き翼の一員として合流して共に戦う事になるという。まだ１２歳ながら、陰陽師としての実力は現・関西呪術協会長である近衛詠春の妻、近衛木乃美と並ぶほどなので、戦力としては申し分ないのだ。

「明日葉ちゃんも・・・」
「まじかよ・・・」
「明日葉姫殿下まで・・・」

言いたい事は山ほどある。だが、状況が状況なだけに文句を言ってられないのも事実だ。

「よし、レイバルト国防大臣」
「は！」
「急ぎ軍備の用意を、アヴェンジャーが攻めてきたら直ぐに対応出切る様、迅速にな」
「御意に！」
「シルヴィア財務大臣」
「はい！」
「軍資金の工面を頼む、余裕はあるな？」
「御意、余裕は充分です」

レイバルト国防大臣と財務大臣のシルヴィアが協力して軍備を整えている間に、アリスと木乃香、エヴァは他国への根回しをする準備に入る。
明日香たち三代目・紅き翼は王城にいる明日葉を迎えに行く事になり、会議室を出ると第二王女専用の部屋へ向った。

「明日葉、木乃里です。入りますね」

中に入ると陰陽師の服を着た明日葉が出迎えてくれた。１２歳になって、子供らしい可愛さの中に美しさも出てきた彼女は、関西呪術協会でもアイドルみたいな扱いを受けているらしい。

「お姉さま、お兄さま、お久しぶりです！」
「ええ、お久しぶり、明日葉ちゃん」
「久しぶり、元気だった？」
「勿論です！」

それから、リューガとメルシィも挨拶をした。
リューガとメルシィも一度だけだが明日葉に会った事があるので、今更自己紹介も必要ない。

「明日葉、僕たち三代目・紅き翼に入る事になったけど・・・大丈夫？」
「はい。陰陽師だから対人戦には向かないと思われがちですけど、魔族が相手なら自信ありますよ」
「そうですか・・・なら、明日葉ちゃんがいれば百人力ですね」
「えへへ」

確かに、陰陽師の力は魔族相手に有効だろう。
相手に魔族のハーフがいる場合でもそれは変わらず、今回の戦争では明日葉の存在はかなり有効なものになる。

「明日葉姫殿下、ご無理だけはしないでくださいね？」
「メルちゃん、心配性～。大丈夫、ちゃんと護衛もいるのですよ」
「護衛？」
「うん！　おいで、絶鬼、護鬼！」

二枚の札を掲げて召喚されたのは蒼く２ｍを超える身体を持った大太刀を構える鬼と、紅く３ｍを超える巨体に斬馬刀を持つ鬼。
明日葉が契約した鬼であり、明日葉が誇る最強の護衛だ。

「す、凄い圧力・・・これは」
「明日葉の膨大な魔力あって初めて召喚されるって事なのか・・・」

明日葉の母から受け継いだ膨大な魔力でもって召喚された最強種の鬼、その身体から放たれる圧力（プレッシャー）は最強クラスの魔法使いが放つソレと同じだった。

「おいおい・・・エンテオフュシア家ってのは規格外の一家かよ・・・・」

リューガが思わず呟いた事に、メルシィが内心同意してしまったのは、無理も無いだろう。

第十一話　「憎しみ」（後書き）

地味に凄い明日葉でした。最強クラスの鬼を従えてるんですから、怖い怖い…。

次回はついに開戦、それと同時に夕映の過去が少しだけ明らかに。

第十二話　「開戦」（前書き）

何だろう…筆が進む。

第十二話　「開戦」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十二話
「開戦」

反・新ウェスペルタティア王国連盟組織アヴェンジャー首領、綾瀬夕映はこの時をどれだけ待ち焦がれただろうか。
思えば、１７年前のあの時から、夕映は復讐の道を歩む事を決意していたのだろう。
麻帆良学園を卒業してから魔法世界に渡り、アリアドネーで教員をしながら、暇を見ては今の世界に不満を持つ者を探し、他にも旧メガロメセンブリア元老院上院議員派の生き残りと接触して、時には金を、時には自身の身体を使って味方を集めた。
そして、人が集まって来たら裏で組織を結成、名をアヴェンジャーとして、その首領に就き、それからも資金集めの為に多くの男に抱かれてきたのだ。
その結果、漸くこの時が来た。多くの戦艦を作り、旧世界からも人材を集め、多くの証拠が裏に残るアリアドネーを崩壊させて、ついに動く時が来た。

今、夕映の目の前には分厚い氷がある。その氷の中には黒い人影・・・１７年前、目の前で魔族に堕ちて、そして憎きアリス・Ｓ・エンテオフュシアによって封印された初恋の人、ネギ・スプリングフィールドがいた。

「ネギ先生・・・今、出してあげるですよ」

氷全体に張り巡らされた封印の術式を解呪、更に氷を炎の魔法で溶かした瞬間、氷の中から黒い魔力が噴出してきた。
そして、残る氷を内側から砕いて現れたのは元人間の魔族、理性を失って破壊の権化と化したネギだ。

「■■■・・・ａ、ｒｉｓｕ！・・・■■■■■■■■ーーーーーーっ！！！！」

今にも飛び出して行きそうなネギを、夕映は戒めの風で押さえ込む。
戒めの風でネギを拘束した瞬間、破られる前に夕映は魔法発動体としている杖剣を構え、１７年間ずっと研究してきて、漸く完成させた術式を発動させた。

「魔族転生術式・・・発動！！」

魔族転生術式、それは魔族に堕ちた人間の理性を蘇らせる為の術式だ。
元々、魔族として生まれた者とは違い、人間から魔族に堕ちた者は大半が理性を失い、人間の頃の意識は残されていないのだが、この術式を使う事で堕ちた魂を正式に魔族として転生させて定着、人間の頃の意識を強制的に蘇らせるのだ。

「■■■■■■■■■ーーーーっ・・・・・・・ぐ、がぁ！　あ、あああ・・・・・・」

理性を失い、紅い光を放っていた瞳に理性が戻った。
黄色い瞳と縦に割れた瞳孔、魔族の証である瞳ではあるが、ネギは確かに人間の頃の意識を取り戻したのだ。

「こ、こは・・・僕は、兄さんと戦って・・・」
「ネギ先生・・・意識を、取り戻しましたか？」
「・・・？　貴女は・・・・・・・」

いきなり話しかけられてネギは困惑した。
それも当然だろう、ネギの意識は１７年前で止まっている。今、ネギの目の前にいる夕映は１７年の時を経て随分と変わってしまったのだから。

「私です。綾瀬夕映ですよ・・・ネギ先生」
「ゆえ・・・さん？　夕映さん、なんですか？」
「はい・・・ネギ先生がアリス・スプリングフィールドと戦ってから、もう１７年もの時が経ったですよ」

１７年、そんなにも経っていたとは思いもしなかったネギは慌てて立ち上がり、辺りを見渡す。
墓守人の宮殿最上階、１７年前と比べて随分と風化してしまった其処は、ネギの記憶と大きく差異を示していた。

「本当に、１７年も経ってるんですね・・・あの、あれから如何なって、今はどうなってるんですか？」
「・・・１７年前、ネギ先生が魔族に堕ちてアリス・スプリングフィールドに封印されてから、彼はアリス・Ｓ・エンテオフュシアと名を変え、メガロメセンブリア元老院を滅ぼし、新ウェスペルタティア王国を建国したです」

それから、アリスは魔法世界を救った英雄として祭り上げられ、立派な魔法使い（マギステル・マギ）制度を廃止して、封印されたネギを余所に幸せな生活をしている事を話した。

「そんな・・・立派な魔法使い(マギステル・マギ)の制度を廃止したって・・・魔法使いの誰もが目指す正義を、廃止してしまうなんて、何て・・・愚かな事を」

「それに、本来なら英雄という称号はネギ先生にこそ相応しいのに、あの男に英雄の称号が与えられ、今は新ウェスペルタティア王国の国王です」

「兄さん・・・僕の邪魔を散々して、その結果、僕はこんな魔族になって、封印されて・・・・・・そして兄さんは英雄になって、幸せな生活？　許さない・・・許せない！　アリス・S・エンテオフュシアぁあああああ！！！！」

「そうです、憎みなさい先生・・・その憎しみの全てを新ウェスペルタティア王国に・・・アリス・S・エンテオフュシアに向けるですよ」

肌にビリビリと感じるどす黒い魔力が心地よくて、それがネギの・・・愛する男のものだと思うと、身体が疼いて仕方が無い。

下半身が思わず熱くなるのを感じながら、夕映は服を脱ぎ始めた。

魔族転生術式の、最後の仕上げをする為に。

「さぁ、ネギ先生・・・その魔族としての本能、衝動、全てを私にぶつけてください。それであなたは人間としての意識を保った魔族として、真に生まれ変わるのです」

ついに反・新ウェスペルタティア王国連盟組織アヴェンジャーが大軍を挙げて新ウェスペルタティア王国に攻めてきた。

アリスの指示で新ウェスペルタティア王国も全軍を出し、迎え撃つ用意を完了させ、更にヘラス帝国、新メガロメセンブリアからも応援を要請しているので、数の差で圧倒的にアヴェンジャーが不利

になる。
なる・・・筈だったのだ。アヴェンジャーの大軍の数を見るまでは・・・・・・。

「お兄様・・・」
「ああ、異常だよ。あの数・・・」

明日香たちが乗るクリムゾンからは、新ウェスペルタティア王国の三倍以上のアヴェンジャー所属戦艦が見えた。
ヘラス帝国と新メガロメセンブリアからの応援が来ても互角になるのかどうかという数、一体何処にあれだけの数の戦艦を隠し持っていたのか、疑問は尽きないが、今はそれよりも数の有利が無くなり、逆に不利になってしまっていることだ。

「魔法使い部隊、魔法騎士部隊、王国騎士団、それと俺達三代目・紅き翼・・・それを足しても無駄だな」
「リュー君・・・」
「明日葉姫殿下、流石にこれは・・・」

勝ち目が無い。誰もがそう言いたげにしていた。
だが、その明日香たちを後ろで見ていた月詠だけは何やらウズウズした様子で大艦隊を見ているのに明日香が気付く。

「月詠さん・・・？」
「まだまだやねぇ殿下たちも、あれだけの大艦隊・・・切り甲斐があるいうもんどすえ～？」
「そう言うと思いました」

月詠らしい言い分だった。根っからの戦闘狂である月詠にとって、誰もが絶望する大艦隊は、むしろ絶好の標的と映るのだろう。

「それと、今回ばかりはウチも一緒に戦う事になります～。確りと付いてくるんやえ～？」
「へぇ、心強いなそりゃ。英雄の一人が一緒に戦ってくれるのか」
他にも今回の戦争、１７年前の英雄や３７年前の英雄が多数参戦している。
国王のアリス、王妃の木乃香、宰相のエヴァ、財務大臣のシルヴィア、第一騎士団長のラカン、第三騎士団長のさよ、諜報部隊長のタカミチ、電子部隊長の茶々丸と副隊長のペルシクム、初代・紅き翼のナギ、王国中央図書館長のアルビレオ、混成部隊指令のアスナ、英雄たちのオンパレードだった。
勿論、全員が前線で戦う訳でも、一人で戦う訳でもない。アリスと木乃香、エヴァ、シルヴィアは新ウェスペルタティア王国軍旗艦マーズに乗っての戦場指揮、ラカンとさよはそれぞれの騎士団の指揮、タカミチは諜報部隊の指揮、アスナはタソガレでの指揮、茶々丸とペルシクムはマーズとタソガレにそれぞれ乗り込んで電子戦、個人で戦うのはナギとアルビレオだけだろう。
「お爺さまとアル小父さまだけで充分過剰戦力なのです」
明日葉の言う通り・・・と言いたいが、ナギもアルも、随分と衰えてきている。
もう３７年前ほどの活躍は年齢的にも体力的にも無理があるのは本人達が理解していた。一騎当千の戦いはまだまだ可能かもしれないが、最強クラスの敵が出てきた場合は苦戦も必至だろう。
「明日葉姫殿下の絶鬼と護鬼に期待どす～」
人間の最強クラスレベルの力を持つ明日葉の鬼達なら、戦場で充

分な活躍が出切る。

「明日葉、大丈夫。絶鬼と護鬼だけじゃなく、僕達も明日葉を守るから」

「だから、一緒に戦いましょう」

「お兄さま、お姉さま・・・勿論なのです！　私はこの国の第二王女、お父さまの娘なのですよ！　お二人の事も、絶対に守るのです！」

明日葉も気合充分、いざ出陣準備と行こうとした時だった。アヴェンジャーから新ウェスペルタティア艦隊に対して全体通信が開いたのは。

『私は反・新ウェスペルタティア王国連盟組織アヴェンジャー首領の綾瀬夕映です。新ウェスペルタティア王国国王、アリス・S・エンテオフュシアに通告する。今すぐ武装を解いて、我等が正義の鉄槌の前に散るがいい！』

降伏勧告でもなんでもない、一方的にアリスに死ねと言ってきた。しかも、自分達を正義と言ったところから察するに、アリスを含む新ウェスペルタティア王国は悪だと言いたげだ。

『新ウェスペルタティア王国国王、アリス・S・エンテオフュシアだ。随分と威勢だけは良いな、綾瀬・・・悪いが、子供の我侭に付き合う程、私は人生を諦めていない。降伏しろ』

『・・・言ってくれますね、実の弟を封印する事に躊躇わなかった冷酷非道の悪人風情が』

『ガキと問答するつもりはない。降伏するか否か、それだけを答えて貰おうか』

『・・・良いでしょう、徹底的に滅ぼしつくして、抹殺してくれる

ですよ！』

開戦の狼煙が上がった。

通信が切れるのと同時に始まった精霊砲の応酬、出撃して次々と魔法を放つ魔法使い部隊と魔法騎士部隊、王国騎士団を見て、明日香たちも出撃の用意を整える。

「ほな、明日香殿下・・・リーダーは殿下どす～、出撃命令を～」

「はい・・・三代目・紅き翼は、これよりアヴェンジャーの魔法使い部隊との戦闘に出る！　準備は良いな！！」

『おう！！』

「三代目・紅き翼・・・出撃！！！」

クリムゾンから三代目・紅き翼の６人が飛び出した。迫り来るアヴェンジャー軍に対して、明日香は“姫”とカードを、木乃里は杖とカードを、リューガとメルシィはカードを、月詠は妖刀ひなとカードを構え、明日葉は母から受け継いだオリハルコン製の扇を両手に、背後に絶鬼と護鬼を従えて進軍する。

「「「「「アデアット！！」」」」」

旧世界、麻帆良学園学園長、近衛近右衛門は魔法世界がアヴェンジャーとの戦争に入ったという知らせをまだ知らない。

だが、アヴェンジャーがネギの封印を解いた事は報告されているので、用心の為にと世界樹の地下深くまで降りていた。

そこに封印されている“あるモノ”の様子を見る為に・・・。

「・・・ふぉっ！？　こ、これは・・・な、何たることじゃ！！！」

“あるモノ”が封印されている場所を見て、近右衛門は驚愕して目を見開いた。

何故なら、封印していたクリスタルが割られ、中に封印していた“モノ”がいなくなっていたのだから。

「まずい、まずいぞい！！　これは、直ぐにアリス陛下に知らせなくては！！」

事態は、急速に動いていく。

第十二話　「開戦」（後書き）

事態は不味い状況に転がっていますね。
次回は三代目・紅き翼の戦いがメインになります。そして、遂に動く夕映と、魔族と化したネギに、三代目・紅き翼は大苦戦。

第十三話　「三代目の翼、大苦戦」（前書き）

明日香たちの活躍です！

第十三話　「三代目の翼、大苦戦」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十三話
「三代目の翼、大苦戦」

新ウェスペルタティア王国とアヴェンジャーの戦争が始まった。
国王のアリスが乗る旗艦マーズと首領の夕映が乗る旗艦イラ、それと両軍の戦艦が精霊砲の応酬を繰り広げる中、明日香たち三代目・紅き翼はアヴェンジャーの魔法使い部隊との戦闘に入っていた。

「神鳴流、二刀連撃、斬空閃・雷！！」

リーダーの明日香は千撃の雷姫にした“姫”とテンマノツルギを構えて斬空閃を放ち、魔法を放とうとしていた魔法使い達を切り捨てる。
更に、背後から杖剣で切りかかろうとしていた魔法剣士には虚空瞬動でその背後に移動すると、背中に指輪を押し付けて、

「雷の暴風！！」

零距離の無詠唱魔法を叩き込んだ。

明日香とは少し離れた所で、木乃里はホウマノツルギをと杖を構えて、迫り来る魔法使いの集団を優雅に眺めていた。

「あらあら・・・魔法を私に使っても無駄なのに」

飛来する多くの魔法、だがそれは木乃里に直撃する前に掻き消されてしまう。
木乃里は魔法が掻き消されて動揺している魔法使い達を微笑みながら眺め、杖を持った腕を軽く振る。
すると、袖から宝石が5つ落ちてきて、宝石を杖で打ちつけ、魔法使い達の所まで飛ばした。

「開放、常世の輝き」

5つの宝石が魔法使い達の中心で弾け、光の上位古代語魔法の一つ、常世の輝きが襲い掛かった。
密集していた魔法使いたちは5箇所から放たれた常世の輝きに飲み込まれ、光の中に消えていく。

「あら？」

何とか常世の輝きから逃れた魔法使いがいたらしい。それを見つけた木乃里は虚空瞬動で目の前に移動すると、魔法使いが何か反応する前にホウマノツルギを腹部に突き刺す。
ホウマノツルギを引き抜くと、掴みかかろうとした手を払って宝石を一つ、傷口から体内に押し込むと、再び虚空瞬動で離れた。

「開放、燃える天空」

宝石を体内に押し込まれた魔法使いが内側から弾けて四散する。
身体の内側から燃える天空が発動して大爆発を起こし、血潮すら蒸発しながら命を散らしたのだ。

初代、そして二代目の紅き翼で活躍した英雄ジャック・ラカンの

弟子、リューガは特に凄かった。
迫り来る魔法使いの集団に単騎で突っ込み、魔法を使われる前に殴り、蹴り、次々と血潮を散らせて行く。

「まだまだぁ！！　ラカン・インッパクトォおおおおおおおおお！！！！！！！」

大量の気を込めたラカン・インパクトが直線上に居た魔法使いを飲み込み、跡形も無く消し飛ばす。
更に気を全身に充満させて、取り囲んでいた魔法使い達の姿を確認すると、ニヤリと笑って一気に気を開放した。

「ラカン・ビッグバン！！！！」

リューガの全身から開放された爆発の如き気が周囲の魔法使い全てを蒸発させた。弟子は師に似ると言うが、ここまで似た弟子というのも珍しいと、後にリューガの戦闘を見ていたラカンを知る者は語ったという。

三代目・紅き翼では恐らく最弱であろうメルシィだが、それでも実力的には中級クラスの上位には入るだけのものはある。
杖を構えて遠距離から魔法を行使する姿は、一見すると地味だが、それでいて魔法の魔力運用が非常に効率良く使われていた。

「ミグ・モル・メイグ・モラトリアム　来たれ氷精　闇の精　闇を従い吹雪け　常世の氷雪」

メルシィが得意としている属性は闇と雷、氷の三属性、闇と氷が使えるという事は、かの闇の福音が得意としていた魔法が使えるという事だ。

「闇の吹雪！！」

杖の先端から放たれた闇の吹雪が遠くにいる魔法使い達に直撃する。

アーティファクト、強者の兆しによって倍増された闇の吹雪は、今までメルシィが避けてきた命を奪うという結果を生み出した。

最初は、相手の命を奪った事に手が震えそうになったが、それでもメルシィは敬愛する明日香と共に戦う事を決意した身だから、命を奪ったという恐怖を乗り越え、力強い決意の篭った瞳で次の敵を定めるのだった。

三代目・紅き翼に新加入した新ウェスペルタティア王国第二王女、明日葉は絶鬼と護鬼を従えながら飛行用の呪符を使って飛んでいたのだが、あまり実戦向きではないこの呪符よりも召喚した妖怪の方が良いという事で、召喚用の呪符を取り出した。

「おいで・・・我が翼、八咫烏（ヤタガラス）！！」

日本が誇る鳥の妖怪、巨体を持つ烏こと八咫烏を召喚した明日葉は、その背中に乗った。

「？　来たのですね・・・あれは、火の属性なのです？」

魔力を感じた明日葉が目を向けた先、炎系の中級魔法が迫ってきていた。だが、明日葉は慌てる事無く一枚の呪符を取り出すと魔法に向けて投げ放つ。

「水剋火、急々如律令！！」

呪符から膨大な水が出て、炎の魔法を掻き消す。
陰陽道において木火土金水の五行思想を使った術は基礎であり、全ての術における基盤ともなっている。今回の場合で言うのなら、火は水によって剋するという具合に、水の術で火を消したのだ。

「行くのです！　我が鬼達！！」
「マカサ、レタ！」
「アスハ、ノ・・・タメニ！！」

絶鬼と護鬼が飛び出し、それぞれの巨大な得物で魔法使い達に襲い掛かった。
サイズがあまりに違いすぎて、一撃で肉塊になる魔法使い達の姿に、仲間は恐怖で逃げ出そうとするが、逃げる為に背を向けた瞬間には肉塊になってしまうので、誰一人として逃げられない。

「陰陽術は本来、妖を討つ為の術なのですよ。ですから、私自身が戦う事は殆どないのです。なので、魔法使いの皆さんには、私の愛する鬼たちがお相手するのですよ！」

戦場に、鬼の雄叫びと魔法使い達の悲鳴が、響き渡るのだった。

二代目・紅き翼の一員だった英雄、月詠は三代目・紅き翼の一員として、現在はアーティファクトである聖魔の敵対の小太刀一刀モードと、妖刀ひなを構えてリューガと同じように魔法使いの集団に飛び込んでいた。

「っ！　え、二代目・紅き翼の月詠だと！？」
「うふふ～、ほな！」

相手が英雄の一人である月詠だと知って驚いていた男の首を切り

落とした月詠は、それを皮切りに、一気に黒い気を纏い始めて、瞳が白黒逆転する。

「うふ、うふふふふふふふふふふふふ・・・あははははははははははははは！！！！！」

狂ったかのような笑い声と共に、大量の血が魔法使い達の視界に映った。

見れば月詠の周りに居た魔法使い達が全身を黒い気によって切り刻まれ、腕や足、首を失って大量の血を噴出している。

「一瞬千撃、二刀黒刀五月雨切り！！！」

一撃で千人、その命を散らしていく。悪夢のようなその光景は、まさに地獄絵図と言う言葉がピッタリだった。

三代目・紅き翼が月詠以外、未熟ながらも一騎当千の活躍をしていた時、突如感じた黒い魔力。明日香と木乃里は一度合流して共に戦っていたのだが、その黒い魔力で動きを止めた。

「い、今のは・・・」

「まさか・・・」

黒い魔力、その正体に気付いて慌てて顔を上げてみると、魔族と化した身体を雷化したネギ・スプリングフィールドと、アリアドネー戦乙女騎士団の杖剣を持った夕映が、明日香と木乃里を見下ろしていた。

「へぇ、君達が兄さんの子供なんだ」

「ね、ネギ・・・スプリングフィールド」
「失礼だな、叔父さんくらい付けた方が良いんじゃないかな？」
「っ！　あなたの様なお父様の汚点でしかない存在を、叔父だなんて呼びたくありません！！」

汚点、その言葉で夕映の明日香と木乃里を嘲笑っているかの様な表情が憤怒に染まる。

「汚点？　小娘が、貴様がネギ先生を汚点と言うですか・・・、アリス・S・エンテオフュシアこそ、ネギ先生の輝かしい人生の邪魔をした汚点でしかないという事を知れです！！」
「いいよ夕映さん、所詮は兄さんの子供・・・程度が低いのは当たり前なんですよ」
「言ってくれるねネギ・スプリングフィールド・・・自分の程度の低さを棚に上げて、僕達の程度が低いなんて」
「・・・僕の程度が低い？　所詮は上級クラスでしかない君達が、最強クラスになったこの僕に、程度が低いだって？」

バチッ！　と、ネギの雷化した身体が紫電を奔らせた。

「木乃里・・・勝てない戦いだ、逃げても良いよ」
「ご冗談を・・・私とお兄さまは、お父様の子供・・・どんな戦いだろうと、逃げたりしないと誓ったではありませんか」
「なら・・・行こう！」
「はい！」

“姫”とテンマノツルギを構える明日香、杖とホウマノツルギを構える木乃里は、虚空瞬動に入ろうと足の裏に魔力を溜めた。
だが、その時には既に二人とも腹部にネギの拳が入っており、血を吐きながら吹き飛ばされる。

「が、ぁっ！　く、ぅ・・・」
「ぐぅ・・・っ」

速い、雷速瞬動というのは話には聞いていたが、実際に相手すると、その速さに知覚すら出来なかった。

「ぐ、二刀連撃、斬魔剣・雷！！」

弐の太刀は使えない、だが普通の斬魔剣でも今のネギには通用する筈だ。そう思って放ったのだが、当たらなければ意味は無い。

「遅いよ、千磐破雷！！！」
「っ！」
「お兄様！！」

ネギの千磐破雷を無効化した木乃里は、宝石を一つ取り出してネギに向けて投げようとしたのだが、ふと真横から殺気を感じてホウマノツルギを構えた。

木乃里の横に来ていた夕映が振るった杖剣とホウマノツルギがぶつかり合って火花を散らす。互いに鬩ぎ合っていたのだが、突然、木乃里の密かな自慢だった父と同じ三つ編みの髪を掴まれる。

見ると、ネギが邪悪な笑みを浮かべて木乃里の髪を掴んでいて、女としての本能が恐怖を伝えてきた。

「木乃里！　っ！？」
「あなたの相手は私がするですよ！」

木乃里を助けようとした明日香に夕映が切り掛かり、テンマノツルギと“姫”を交差して杖剣を防いだ。

一方、木乃里の身体を抱きしめて捕らえたネギは、彼女が持っている杖が、嘗て自分が使っていた杖だということに気付く。

「へぇ、僕の杖を使ってるんだ・・・」
「ぐっ、これ、は・・・お爺様の杖、です！　いや！」
「おっと、暴れないでください。うん、このかさんに似てますね・・・髪型と色は兄さんにソックリだけど、染めればこのかさんになりますか」
「な、にを・・・」
「いえいえ、あなたは僕の生徒だったこのかさんにソックリですから、兄さんへの当て付けの意味も込めて、僕の従者にして差し上げようかと」
「っ！？」

ネギの片手が木乃里の胸に触れた。
人間の頃の意識を取り戻していても、思考や行動は魔族のモノになっているという事なのだろう。寧ろ、人間としての意識を持って魔族として行動している分、性質が悪い。

「ついでに、あなたと交わって魔力を頂きますね・・・魔族になってから、魔力を定期的に女性から補充しないと意識が飛んで暴走してしまうので」
「いや！　いやぁ！！」
「ぐっ！　木乃里！！」
「諦めるですよ、あの小娘はネギ先生の玩具になる運命なのですから」
「貴様ぁ！！」

リューガやメルシィ、月詠、明日葉はまだ遠くにいる。ネギと夕映が木乃里を連れて転移してしまったら、間に合わない。

絶体絶命、もう駄目かと思われたその時だった。

「神鳴流奥義、斬魔剣・弐の太刀!!」

木乃里を掴んでいたネギの腕が切り落とされた。
同時に、ネギの身体が大きな衝撃と共に吹き飛ばされ、明日香と激闘していた夕映にぶつかる。

「な、なに!?」
「なにが起きたです!?」

先ほどまでネギが捕らえていた木乃里の方を見ると、えいゆうの籠手を両手に、きしのあかしを握り、頭上に王者の定めを乗せたアリスの、木乃里をその腕に抱いている姿があった。

「お、お父様・・・」
「もう大丈夫、怖い思いをさせたね」
「っ！　お父様ぁ！」

泣きながら抱きついてきた木乃里の頭を撫でながら、アリスは隣に来た明日香の頭も撫でてあげた。

「父様・・・」
「自分の子供のピンチに、駆けつけない親はいないよ。たとえ国王であろうとね・・・・・・木乃香！」
「はいな」

いつの間にか、アリスの後ろに木乃香がいた。グレートグランドマスターピースのアーティファクト伊邪那美（イザナミ）と伊邪那岐（イザナギ）命を構えていて、戦闘態勢を整えている。

「綾瀬を頼む」
「ネギ君はアリスさんが・・・？」
「ああ、まぁ・・・“姫”じゃなくて、きしのあかしだから森羅万象は使えないけど・・・まぁ足止めくらいは出切る」
「気ぃつけてな？」
「勿論」

始まる。１７年前の最強の象徴、最大の英雄となった二人が今・・・１７年の時を越えて、再び戦場に降り立った。
見下ろしてくるアリスを、憎悪の瞳で睨みつけるネギと夕映は、切り落とされたネギの腕を修復し終えて構える。
１７年前の戦いが再び、戦場で再現される瞬間、歴史は動く。

第十三話　「三代目の翼、大苦戦」（後書き）

子のピンチに駆けつけた父！　しかし実力は１７年前と比べて随分と衰えてしまっている！　はたして……。

第十四話　「衰えた英雄王」（前書き）

一日二話投稿を目指してみます。一日で挫折しないことを祈ってｗ

ｗ

第十四話　「衰えた英雄王」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十四話
「衰えた英雄王」

きしのあかしを構えて魔族と化した弟を見下ろすアリスの胸には、様々な思いが渦巻いていた。
大事な娘を辱めようとしていた事に対する怒りと、嘗て自分が兄である事を放棄したが故にこの様な姿になってしまった弟への罪悪感、罪悪感は17年前なら感じる事も無かったが、親となって、大人になるに連れて感じる様になったのだ。

「相変わらず、僕を見下すんだね・・・兄さんは」
「ネギ・・・今更、何も言わない。だからせめて・・・お前を、私の手で殺す」
「それは、こっちのセリフだ！　僕は兄さんをこの手で殺す！！」

一瞬で、ネギの姿が消えた。
アリスに術式武装を使わせる前に殺そうと、雷速瞬動に入ったネギは、雷のスピードの中から魔族になって凶器にもなった爪を突き刺そうとする。
しかし、たとえ衰えたとは言え、アリスは英雄と呼ばれた最強クラスの実力者だ。ネギが雷速瞬動に入る前に既に虚空瞬動で移動しており、きしのあかしに術式武装を施していた。

「是、“嘆きの焔雷騎”」

漆黒の炎と雷を纏うきしのあかしを構え、アリスの両目がオッドアイに変わる。

「究極身体強化魔法・・・無我の境地、発動」

無色の光がオーラとなってアリスの身体を包む。

アリスの顔から表情が消え、感情が消え、無がアリスの全てを支配する王家の魔力を使った究極身体強化魔法、無我の境地だ。

「それが、17年前に僕と戦った時に使わなかった魔法なんだ・・・舐めてるよね、本当に」

「・・・・・・」

無我の境地を発動中のアリスは何も答えない。

だが、ネギはそれすらも余裕と取ったのか、再び雷速瞬動に入ってアリスを殺そうと爪を構えて懐に潜り込もうとする。

アリスの無防備な腹部にネギの爪が突き刺さろうとした瞬間、ネギは勝った！　と己が勝利を確信した。しかし、それで安心して良い相手ではないのを忘れていたのだ。

「っ！？　そ、そんな・・・」

「・・・・・・」

本来は雷のスピードなんて人間に知覚出切るものではない。アリスが今、こうしてネギの爪をきしのあかしで受け止めている光景なんて、本来は在り得ないのに、起きてしまっている。

「馬鹿な・・・雷のスピードを、如何して知覚出来る！！」

「・・・・・・」

ネギは知らないだろうが、無我の境地は究極身体強化魔法の名を冠しているのだ。その効果は当然だが並の身体強化魔法の比ではない。

肉体、精神の強化だけではなく、存在の強化まで施している魔法である。当然だが、人間に不可能な雷のスピードの知覚も、可能になっていた。

「っ！　あああああああ！！！！　死ねぇえええええ！！！！アリス・スプリングフィールドォおおおおおおおおお！！！！！！！」

嘗て、ラカンと戦った時みたいにインファイトを仕掛けるが、その全てをアリスは捌いていた。しかし、ネギは気付いていない、アリスが先ほどから一度も攻撃に回っていないという事に。

アリスは攻撃に回っていないのではなく、回れないのだ。正直な話、17年前なら兎も角、今のアリスではネギのインファイトを捌くので精一杯で、とてもではないが攻撃に転じる余裕なんて無い。

魔法で人間を超越する兄と、魔族に堕ちて人間を超えた弟の戦いは、アリスの防戦一方という形で長引く結果になるのだった。

新ウェスペルタティア王国王妃、木乃香・S・K・エンテオフュシアは、嘗ての学友で、同じ部活の友達だった綾瀬夕映の姿を見て、悲しそうな顔をする。

それを見た夕映は木乃香を嘲笑うかの様に表情を歪め、杖剣を構えながら木乃香と同じ高さまで浮いてきた。

「久しぶりですね、このかさん」
「うん、久しぶりやね・・・ゆえ」

「お互い、随分と偉くなったものです。方や一組織の首領、方や一国の王妃ですか・・・人生、何があるか判らないものです」

木乃香は夕映が同じ高さまで浮かんできたのを見て、伊邪那美（イザナミ）と伊邪那岐（イザナギ）命を一本の炎を纏った剣に変える。

神剣、天之尾羽張（アメノオハバギリ）。木乃香のアーティファクト、伊邪那美（イザナミ）と伊邪那岐（ザナギ）命の能力で変化した日本神話に登場する伝説の神剣だ。

「夕映、夕映は偉くなんてなってへん・・・夕映がやっとる事は、ただのテロや、テロリストになったんよ？　夕映は・・・」

「これは異な事を・・・私はテロリストになんて、なった覚えはないです。私は魔法世界の、この世の害悪でしかないアリス・S・エンテオフュシアと、その関係する全てを滅ぼす為に行動しているですよ・・・そう、いわば正義の行為！　ネギ先生という正義の象徴の下、あの男の存在を、存在したという証を、この世から消し去る為に行動しているです！！」

ネギこそが正義であり、アリスはこの世の害悪だと言って憚らない夕映、最早手遅れ・・・いや、17年前のあの時から既に手遅れだったのだろう。

なら、木乃香のやるべき事は決まっている。新ウェスペルタティア王国王妃として、国家に仇なす敵を討つ、それだけだ。

「ほなら、反・新ウェスペルタティア王国連盟組織アヴェンジャー首領、綾瀬夕映・・・新ウェスペルタティア王国王妃として、あなたを討つ！」

「はっ！　もはや敵となれば嘗ての友でも殺すですか？　これだからあの男に靡く人間は・・・っ！」

夕映の真横を神の炎が横切った。

夕映が着ている白い服の袖が黒く焼け焦げ、髪も一部が焼けたのか、チリチリと落ちる。

「・・・・・やってくれたですね」

「今のは中らなかったんやない、中てなかっただけや・・・次は、中てるえ」

「良いでしょう、折角・・・ネギ先生の玩具として生かしてあげようと思ってたですのに、もういいです。もう・・・殺す！！」

お互いに虚空瞬動に入って、杖剣と天之尾羽張（アメノオハバギリ）がぶつかり、火花を散らす。

本来、お互いに後衛型の魔法使いであるのにも拘らず近接戦をするという事は、隙を窺って強力な魔法で一撃必殺を狙っているからだ。

「建御雷之男神（タケミカズチノヲノカミ）！！」

放たれたのは神の雷、全てを雷光で焼き尽くす始祖の雷が夕映に襲い掛かろうとしたが、虚空瞬動で避けられ、夕映は無詠唱の魔法を放った。

「雷の暴風！！」

近距離からの雷の暴風だった。だが、夕映は知らない。木乃香のアーティファクトは、アスナや明日香、木乃里のアーティファクトと同じで魔法の天敵となる存在だという事を。

「布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）！　静まれ、荒れ狂う暴風と、轟く雷よ！！」

剣が天之尾羽張（アメノオハバギリ）から布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）に変わり、雷の暴風が消滅した。

魔法無効化能力者ではない木乃香が魔法を無効化したことに驚いた夕映だったが、今は戦闘中だという事を思い出して、天之尾羽張（アメノオハバギリ）に戻して切り掛かってきた木乃香を弾いて、一気に虚空瞬動で離れる。

「フォワ・ゾ・クラティカ・ソクラティカ！！」
「っ！　リム・リル・リック・リプシオール！！」

夕映が詠唱を始めたのを見て、木乃香は布都御魂剣（フツノミタマノツルギ）に変化させるのを忘れ、慌てて詠唱を始めた。
だが、ギリギリで木乃香の方が遅く、状況を打破するには強力な魔法を放つしかない。

「契約に従い　我に従え　高澱の王　来たれ　巨神を滅ぼす　燃え立つ雷霆　百重千重と重なりて　走れよ稲妻！！」
「（やっぱ、戦闘の勘が鈍ってるなぁ・・・あかんわ）契約に従い　我に従え　天界の王　来たれ　浄化の恵み　命の輝き　現世に育まれし　光の象徴！！」

夕映が選んだのは雷の上位古代語魔法にして、雷系魔法最強の魔法。木乃香が選んだのは光の上位古代語魔法にして、光系魔法最強の魔法。
お互いに属性最強の魔法を放つ以上、勝敗を決するのは込められた魔力の差だ。なら、普通に考えれば極東一の魔力を持つと言われていた木乃香に分はあるだろう。

「千の雷！！！」
「無限の光！！！」

千の雷と無限の光、それぞれの属性最強の魔法がぶつかり合った。

順当に行けば木乃香の無限の光が夕映の千の雷を押し返して、木乃香の勝利が決定するのだろうが、そこで誰もが予想しなかった事態が起きる。

魔力量で木乃香に劣る筈の夕映の千の雷が木乃香の無限の光を押し始めたのだ。

「う、ウチが押し負ける!?　魔力量はウチの方が上のはずやのに!!?」

「ククク・・・確かに素の状態では、このかさんの方が魔力量では勝っているですよ。しかし、私がその事に何の対策も立てなかったとでもお思いですか?」

「な、にをしたんや!!」

「簡単です。魔法学校を卒業したばかりの魔力量が多くて成績が優秀だった子供達を、身体を交える事でパスを作り、魔力を常に私の方に流しているです。親は戦力として使えるですが、子供の方は一部を除けば殆どが魔力タンクにしか使えないですからね」

「っ!　それで、誘拐したんか!?」

「誘拐とは酷い言い草です。立派な魔法使い(マギステル・マギ)制度を復活させて、その暁には推薦してあげると言ったら自分から付いて来たですよ」

最悪だった。そして、本当に手段を選ばない外道に夕映は堕ちてしまったのだと確信した。

もう、アレは木乃香が知る綾瀬夕映ではない。外道に堕ち、外道の所業を躊躇いなく行う悪魔だと、そう認識する。

なら、もう本当に容赦しない。木乃香は持てる全魔力を無限の光に注ぎ込み、この一撃で夕映を葬る為に発動体の指輪が填められた手に力を込めた。

「ぐぅっ!?　ぜ、全魔力を注いだですか!　正気ですか!?」

「ウチは王妃、民を守るのが務めや。その敵を倒す為に、躊躇いな

んて必要ないんや！！」

押し返し始めた無限の光に、夕映は更に魔力を注ぐが、足りない。予想以上に木乃香の魔力が多いのだ。

「これで、終わりや！！！」

全力全開、全ての力を込めて千の雷を押し返して、夕映を倒そうとした。その瞬間、木乃香の腹部から黒い爪が生えてきた。

「・・・え？」

「グルルルルルル…」

後ろを見れば、無我の境地が限界を向かえて解除された為、雷速瞬動のスピードに追いつけずに敗れ、血塗れになったアリスを片手にぶら下げたネギが理性を失った瞳を木乃香に向け、空いている手を木乃香に突き刺していた。

「補充した魔力が限界を迎えて理性が無くなったですか・・・やはり、術式に改良が必要ですね。しかし、よくやったですネギ先生！」

木乃香の意識が削がれた事で無限の光は消え、夕映も千の雷を解除すると、トドメを刺そうと杖剣を構え、虚空瞬動で木乃香の前に移動、心臓目掛けて杖剣を突き立てた。

「死ね！！」

もう、終わり。そう思われた時、三本の剣が杖剣を夕映ごと弾き飛ばし、ネギの頬が何者かに殴り飛ばされた。

「大丈夫ですか!?　お母様!!」
「母様!!」
「あ・・・明日香・・・木乃里・・・・・・・」

夕映の杖剣を弾いたのは明日香と木乃里だった。“姫”とホウマノツルギ、テンマノツルギで弾いたのだろうが、よく見れば木乃里はホウマノツルギだけしか持っていない。

「木乃里・・・杖、どうしたん?」
「杖は・・・あちらです」
「?　あれは・・・」

古いローブに身を包む赤毛の男、木乃里の杖を持ってネギを殴り飛ばした拳を解いてアリスをキャッチすると、木乃香の方を向いて笑顔を見せた。

「お、お義父様!?」
「よぉコノカ、助けに来たぜ!」

37年前の英雄、ナギ・スプリングフィールドが、息子と義娘、そして孫のピンチに駆けつけた瞬間だった。

第十四話　「衰えた英雄王」（後書き）

次回、ナギの登場と、アヴェンジャーの一時撤退までですね。

第十五話　「古き英雄」（前書き）

ナギ無双！

第十五話　「古き英雄」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十五話
「古き英雄」

綾瀬夕映と木乃香・S・K・エンテオフュシアの戦いは、補充した魔力が尽きて理性を失い、アリスに勝利したネギが木乃香の背後から奇襲した事で決まるかと思われた。
しかし、夕映が木乃香にトドメを刺そうとした時、明日香と木乃里が母の窮地を救い、そして、37年前の英雄が駆けつけて捕らわれたアリスを救い出したのだった。

「お、お義父様・・・」
「おう、コノカ、助けに来たぜ！」

血塗れで意識を失っているアリスを明日香に預けたナギは木乃里から一時的に返してもらった杖を構えて、未だに理性の戻らぬ瞳でナギを睨みつけてくるネギと、同じく邪魔者を見るかの様な目でナギを睨む夕映に不敵な笑みを浮かべた。

「はっ！　なんてザマだよネギ・・・いや、まぁお前達の事を放ったらかしにした俺が言うのも何だけどよ、随分とまぁ情けねぇ姿になっちまったじゃねぇの」
「グルルルルルルル……」
「ナギ・スプリングフィールド・・・あなたもネギ先生の味方をしないで、アリス・S・エンテオフュシアの味方をするですか・・・

ネギ先生だって、あなたの息子なのに」
「昔ならネギの味方だってしてやりてぇって思ったさ・・・でもよ、んな姿になった息子が、世界に喧嘩売るってんなら、俺は親父として拳骨一発くらいは御見舞いしてやらねぇとな」

最も、その拳骨一発がナギの場合だと本気の千の雷一発に相当するのだが・・・。

「ほら来いよネギ・・・偉大なるお父様が直々に拳骨くれてやるぜ？」
「グルルルル…ガァ！！！」
「っ！　駄目ですネギ先生！　挑発に乗っては！！　・・・くっ、これだから理性の無い獣は！！」

ネギが夕映の制止を振り切って雷速瞬動に入り、ナギの心臓目掛けて爪を突き出した。
流石のナギも、雷速瞬動には対応出来まいと思われたのだが、皆が忘れている。彼は、ラカンと同じくバグなのだという事を。

「っらぁあ！！」

ナギが身体を屈めると、その頭上でネギの爪が空を切る。そして、そのままナギはアッパーの要領でネギの下顎に全力の拳を叩き込んだ。

「ガァッ！？」
「はっ！　速すぎて見えねぇからって、この俺様・・・サウザンドマスターを倒せるわけねぇだろ？　ついでにお返しだぜ！！！」

そのまま腕を掴んで（雷化していて普通なら触るだけで痺れる筈

なのだが）、膝を顔面に叩き込み、後ろ回し蹴りで後頭部を蹴って吹き飛ばしてしまった。

「まだまだぁ！！　来たれ　虚構の雷　薙ぎ払え！！　雷の斧！！！」

脳震盪を起こしながら吹き飛ぶネギにナギの雷の斧が直撃する。

夕映はそれを見て悲鳴を上げそうになったのを堪えながら、ネギを助けようとナギに対して杖剣を構えたのだが、何も出来なかった。

何故なら夕映の後ろから木乃里がホウマノツルギを突きつけていたのだから。

「・・・何のつもりです？　小娘」

「アヴェンジャー首領、綾瀬夕映・・・あなたを捕縛します」

「・・・身の程を弁えろです。あなたの兄は父親と母親を抱えて足手纏い、そして・・・格上を相手に、小娘が適うとでも思ったですか？」

「状況を見て言ってください・・・あなたが動くより、この剣があなたの心臓に突き刺さる方が早い」

確かに、その通りだ。それに魔法を使っても完全魔法無効化能力者である木乃里には通用しないのだから、夕映はここで万事休すのはず。

「ふっ、本当にまだまだです」

「なに、を・・・っ！」

背後に気配を感じてホウマノツルギを向けると、ナギと戦っている筈のネギの爪を受け止めた。

「なっ！？」
「それじゃあ、離れさせてもらうですよ」
「チィ、大丈夫か？　木乃里」
「お爺様・・・はい」

如何やら、夕映がピンチになれば何よりも優先して守る様に暗示が掛けられていたらしい。
その暗示のお蔭でナギと戦っている最中のネギは戦闘を中断して、夕映の背後にいた木乃里に襲い掛かったのだ。
ナギも直ぐに孫娘の隣に並んで魔法の射手でネギを牽制する。

「木乃里！　綾瀬夕映が逃げる！！」
「え・・・？　あ！！」

明日香に言われて見てみると、夕映が旗艦イラに向けて飛んでいくのが見えた。

「せめてネギ・スプリングフィールドだけでも・・・」
「いや・・・もう遅ぇよ」

ネギの足元に浮かぶ魔法陣、従者召喚の為の陣だ。如何やらネギは夕映を主にして仮契約を結んでいるらしい。

「逃げられたな」
「はい・・・」

逃げられたものは仕方が無い。兎に角、今は重傷のアリスと木乃里を連れてマーズに行かなければならない。

「明日香、アリスは俺が運ぶぜ。悪いが木乃里は移動中の護衛、頼

むわ」
「はい」

運んでいる最中に魔法使いに襲われても、木乃里なら魔法を無効化する事が出来るし、大抵の魔法剣士相手でも引けを取らないだけの近接戦技能も持っている。たとえ魔法使いタイプであっても、近接戦をこなせる様にしておけと、エヴァから言われているのだ。

「さてと・・・へぇ、アリスの奴、忙しいからって暫く会ってなかったけど、随分と老けたなぁ」
「お爺様もですよ」
「うっせーよ明日香、５０超えたら誰だって爺になるっての。ま、俺様はまだまだ若いけどな」
「目元の皺・・・」
「だからうっせぇっつーの！」

気にしてたらしい。最近、アリカが言っていたのだが、小皺が増えたって言って情けない声を出しているらしい。皺を伸ばす魔法具を幾つも買って試していると言っていた。（実はアリカもこっそり使っている）

「お、着いたな」

マーズに着いて直ぐにアリスと木乃香を医務室に運び、明日香と木乃里、ナギの三人がブリッジに上がるとエヴァとシルヴィアが駆け寄ってきた。

「明日香！　木乃里！　無事だったか！？」
「きゃ！？　え、エヴァまま・・・大丈夫ですよ」
「シルヴィアさんにも、ご心配をお掛けしました」

「いいえ、殿下たちがご無事で良かったです」

ナギはエヴァにアリスと木乃香を医務室に運んだ事を伝えると、直ぐにブリッジを出て戦場に戻ろうとしたのだが、エヴァに待ったを掛けられる。

「んだよ、まだ戦い足りねぇってのに」

「いつまで現役のつもりだ貴様は・・・それより見ろ、アヴェンジャーの艦隊が撤退していく」

「あん？」

モニターを見ると、確かにアヴェンジャーの艦隊が撤退を始めていた。

「エヴァンジェリン宰相閣下！　敵旗艦から通信です！」

「映せ」

「了解！」

敵旗艦という事は、夕映からだろう。

案の定、通信を開いてみると、夕映が映っていて、先ほど以上の憤怒の表情を浮かべていた。

「ふん、どうした小娘・・・勝てないと悟って逃げ帰るか？」

『エヴァンジェリンさんですか・・・私たちが逃げる？　馬鹿な事を言うですね。ただ、こちらも色々とやる事があるですよ。そして、今の腐りきったこの世界を破壊する為の準備が整ったので、その用意をするのに戻るだけです』

「ほう？　随分と面白い事を考えている、この世界を破壊か・・・大きく出たな、まだまだヨチヨチ歩きの小便臭い小娘風情が」

遠まわしに・・・なっているのかは判らないが、ガキと言っている。

『その余裕、いつまで続くですかね・・・麻帆良学園、世界樹地下の“アレ”の封印を解いたと言っても?』

「・・・何だ、それは」

「“アレ”の封印を解いただと!?」

夕映の言っている事、エヴァは理解出来なかったことにナギが反応した。

『流石は“アレ”と戦った人は知ってますか・・・ええ、そうです。“アレ”の封印を解いたですよ』

「な、なんて事しやがる!!“アレ”の封印を解いたって・・・まさか!!」

『ええ、こちらに居られますよ・・・“アレ”と、その寄り代となったあなたのお師匠様が』

「クソッタレ! お師匠に何かしてみろ!! アリスに代わって俺がてめぇをぶっ殺す!!」

『楽しみにしてるですよ、お爺さん』

最後にナギへの皮肉を言って通信が途切れる。アヴェンジャーの艦隊は既に撤退してしまっていて、深追いするのは危険と判断した王国側は、一度戻る事になった。

「ナギ、“アレ”とは何だ?」

「・・・アリス達も交えて話す。初代、二代目、三代目の紅き翼のメンバー全員を王城の大会議室に集めてくれ」

「・・・わかった」

第十五話　「古き英雄」（後書き）

次回は…アレの説明です。

第十六話　「封印されし者」（前書き）

会議です。

第十六話　「封印されし者」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十六話
「封印されし者」

シルヴィアの魔法で木乃香の治療が行われ、回復した木乃香がアリスに治癒魔法を掛ける事で何とかアリスも回復した。
最も、アリスも木乃香も少し血を流しすぎたので、暫くは無理は禁物と言われてしまい、戦闘には暫く出られなくなった。
そして現在、王城の大会議室にはアマテルとアリカ、アスナの他に、初代・紅き翼のナギ、アル、ラカン、二代目・紅き翼のアリス、木乃香、エヴァ、シルヴィア、さよ、意識を取り戻して漸く動ける様になったアキラ、茶々丸、ペルシクム、チャチャゼロ、タカミチ、月詠、三代目・紅き翼の明日香、木乃里、リューガ、メルシィ、明日葉が集まっている。

「それで、ナギ・・・話して貰うぞ。麻帆良学園の・・・世界樹の地下に封印してあったアレとは何だ？」
「３７年前、俺が大戦で戦い、そして２７年前に封印した存在だ」
「父さん・・・それって、まさか」
「アリスには話した事があったな。その通り、封印されているのは始まりの魔法使い、造物主だ」

造物主、嘗ての完全なる世界の首領にして魔法使いの始祖、そして明日香や木乃里、アリス、アリカ、アスナにとっては先祖になる存在であり、アマテルの父でもある。

「３７年前、確かにナギは造物主を倒しました。しかし、造物主は不滅の存在、あの大戦でナギに倒された後、我々の仲間を寄り代として復活したのです。それを２７年前に封印して、私はその時の怪我で麻帆良から動けなくなり、ナギとアリカ様も怪我を負って動けなくなっていた所を旧メガロメセンブリア元老院に捕らわれました」
「その仲間というのは、ナギのお師匠という言葉に関係あるのだな？」
「ええ、造物主の寄り代となったのは我々の仲間、ナギの師匠でもあったフィリウス・ゼクト、彼です」

３７年前に死んだと思われていた初代・紅き翼の一人、フィリウス・ゼクトが、実は造物主の寄り代となっていた。
それは彼が死んだと教えられていたアリスにとっても、それをアリスから聞いていた明日香と木乃里、明日葉にとっても、驚きの事実だ。

「それからキティ、貴女にとっても、造物主は因縁のある相手なのですよ？」
「・・・何？　私は会った事も無いのにか？」
「会った事ならあるでしょう。彼は昔、貴女に殺された事があるのですから」
「待て・・・私が殺した？　いつの話だ」
「６００年前、貴女が１０歳の誕生日を迎えた日ですよ」

６００年前、エヴァが１０歳の誕生日を迎えた日、その日はエヴァが人間から吸血鬼になった日でもある。その日にエヴァが殺した者は・・・エヴァを吸血鬼にした男だけだ。

「ま、さか・・・あの男が」

「ええ、貴女を吸血鬼にしたのは、造物主です。貴女を吸血鬼にした男こそが、当時の造物主の寄り代だったんですよ」

更なる驚きの事実、何故アルがそんな事を知っていたのか、それはエヴァの固有技法にあった。

「証拠として示すのでしたら、貴女の闇の魔法、それからアリス君と明日香君の術式武装がそれです。あれは造物主の御業に連なる技術・・・アーウェルンクスシリーズもまた、似た様な事が出来ましたから」

嘗てのアーウェルンクスシリーズも術式兵装に似た技法を使っていたらしい。エヴァ達が戦った時には使う暇を与えなかったので見なかったのだが。

「ふん、アーウェルンクスシリーズはもういない。今は造物主の事だ・・・確か、魔法世界人には勝てないのだったな」

「となると、シルヴィアとラカン、リューガ、アル、それと騎士団や軍人達の大半が駄目か・・・グレートグランドマスターキーを始めとした造物主の掟は全てこちらにあるから、リライトの心配は無いけど・・・」

17年前の大戦以降、造物主の掟は全て、新ウェスペルタティア王国で回収して、王城地下深くに封印している。

故にリライトの心配は無いのだが、それ抜きにしても造物主には魔法世界人では勝てない。勝てる可能性があるとしたら、37年前に一度勝っているナギくらいだろうが、ナギも随分と衰えたと言っているので、恐らくは勝てない。

「アリスさんでも、無理なん?」

「うん、全盛期なら相打ち覚悟で戦えば勝てたかもしれないけど、今は勝ち目が無いね」

つまり、この世界で造物主に勝てる人間は存在しないという事だ。

「不味いな・・・向こうに造物主がいるという事は、我等に勝ち目が無いという事か・・・如何する？」

エヴァの問いに、答えられる者はいない。

戦力差は質で補って勝てる自信がある。しかし、アヴェンジャーに造物主が居るのなら、何をやっても最終的には負けが確定しているのだ。

「向こうで最強戦力と考えていいのはネギと綾瀬、それから造物主・・・それから正体不明の最強クラスか」

まだアヴェンジャーに最強クラスが何人いるのかは判明していないが、アキラの背後を取れる程の隠密性を持った者、アリアドネー崩壊の原因となった超々広域殲滅魔法発動に参加した者もいる筈だ。

「造物主が出てくる前にアヴェンジャーの最強クラスと、ネギ・スプリングフィールド、綾瀬夕映を殺す必要がありますね」

「ああ、シルヴィアの言う通りだ。造物主以外であれば我々に勝てない相手ではない。だから我等がやるべき事は造物主を如何するか、だな」

何か言い方法は無いか、そう思ってアリスは先祖であり、造物主の娘でもあるアマテルの方を向いた。

彼女は先ほどから資料を読んで会話には参加していなかったので、何か考えているのだろうと思っていたが、アリスの視線に気付いて

顔を上げる。

「我が父を倒す方法かの？　じゃが、父は倒しても次の寄り代に魂が移るだけじゃろうて、決して滅ぼせぬ」

「でも、何か方法はあるのですよね？　世の中には不死殺しという物も存在してます。という事は・・・」

「うむ、確かに不滅殺しという概念を秘めた方法も無いとは言わぬ」

不滅殺し、それは不滅という存在に対してのみ有効なもの。不滅の存在を唯一殺し、滅ぼす事が出来るモノなのだ。

「その不滅殺しとは・・・？」

「読んで字の如く、不滅の存在を滅ぼす事が出来る唯一の方法じゃよ。不滅殺しの魔法、それが我が父を滅ぼし得るたった一つの方法、王家の魔力と“姫”、グレートグランドマスターキー、そして・・・我が父が魔法世界の何処かに封印したという伝説の魔法具、デミウルゴスの翼が揃って初めて使える」

「デミウルゴスの翼・・・」

初めて聞く名前だった。デミウルゴスの翼、アリアドネー魔法図書館でも、新ウェスペルタティア王国魔法図書館でも、そして、王家の資料でも、そんな名前の魔法具は載っていなかった。

「デミウルゴスの翼は、不滅殺しの魔法・・・デミウルゴスを発動させる為に必要な道具じゃ。デミウルゴスの翼の他にも、グレートグランドマスターキーはデミウルゴスの杖と呼ばれ、“姫”はデミウルゴスの剣、王家のオッドアイはデミウルゴスの眼、王家の魔力はデミウルゴスの血、究極身体強化魔法“無我の境地”はデミウルゴスの鎧、完全魔法無効化能力はデミウルゴスの盾、これら全てが揃わねばデミウルゴスを発動する事は出来ん」

「初めて、聞きました」
「妾もじゃ・・・まさか王家の魔力や“姫”にそんな力があろうとは」
「本来であれば口伝で伝えておいたのじゃが・・・何代目かで失伝したのじゃろうて。知らぬのも無理は無い」

アリカもアリスも、初めて知った事だ。だが、それが本当なら造物主を殺す唯一の方法、アリス達が勝ち得るたった一つの方法だろう。

「シルヴィア、ブックストアーに緊急依頼、デミウルゴスの翼を探し出してもらってくれ」
「御意、今すぐに」
「おう、のどか嬢ちゃんに探してもらうのか？」
「ああ、ラカンも知ってるだろう？　彼女たちの実力は」
「まぁな、トレジャーハンターとしては魔法世界一だ。それは認めるぜ」

肝心の封印した場所はアマテルも知らない。造物主も既に忘れているらしい。

「なんというか、封印した本人が忘れたというのも呆れたお話ですね」
「木乃里、頼むから黒い事を言わないで」
「あらお兄様、私は本当のことを言ったまでですよ？　クスクス」
「お姉さま・・・黒いのですよ」

木乃里の黒い笑いが大会議室に響いた。その姿に、一人の例外も無く皆、その黒さに引いたのは言うまでも無い。

「さ、さて・・・話は以上、今後の事はまた改めて決めるとして、今はアヴェンジャーの動向に注意しておけばいい」
「う、うむ・・・そうだな。この場は解散で良かろう」

アリスとエヴァが頬を引き攣らせながら何とか会議を終了させる。
この会議で得られたのは、造物主の存在と、不滅殺しの存在と、そして・・・木乃里の黒さが最強クラスですら引いてしまうほど恐ろしいという事だった。

第十六話　「封印されし者」（後書き）

次回は…未定！

書いてる最中に音楽聴いてました。ウイニング・ラン！～風になりたい～

知ってる人、いるかな？　知ってたら私と同世代ですね。

第十七話　「束の間の平穏」（前書き）

やっと書きおえた…。

第十七話　「束の間の平穏」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十七話
「束の間の平穏」

デミウルゴスの翼の捜索はブックストアーに依頼することが決まり、依頼自体はアリスの方でやっておくので、明日香たちは少しばかり暇になってしまった。
なので先の戦いの疲れを癒すという事で明日香たちはオスティアの公衆大浴場に来ていた。三代目・紅き翼のメンバーと、まだ退院したばかりのアキラが来ている。

「ふへぇ～・・・ア〝ア〝～・・・良い湯だぁ」
「リューガ、親父臭いよ」
「うっせぇ！　こちとら疲れてんだよ！」
「僕もね」

風呂に浸かり、疲れを癒す明日香とリューガの二人、リューガは風呂桶に旧世界から取り寄せた日本酒の徳利とお猪口を入れて、酒を飲みながら風呂を楽しみ、明日香はホットワインを楽しんでいた。

「くぅ～っ！　ああ～美味ぇ！　やっぱ流石は王妃様のご出身国伝統の酒だなぁ！　この味わいが最高だ！」
「ホットワインも中々だけどね・・・ピンヘワインを温めたものだけど、流石はオスティア名物」

男二人、酒を飲みながら風呂に浸かるという贅沢を楽しんでいる頃、女湯の木乃里たちはというと・・・。

「あらあら～、木乃里姫殿下、随分とおいしそ・・・もとい、エエ身体付きになってもうたなぁ～」
「あ、あの・・・月詠さん？　目が、怖いですよ？」
「うふふふふ～」
「ひ、ひゃあああああ！？！？！？」

月詠に後ろから抱きつかれて胸を揉まれる木乃里から少し離れた所では、明日葉がメルシィとアキラの二人に挟まれてのんびりしていた。

「あの、明日葉姫殿下・・・木乃里様が」
「だいじょ～ぶなのですよ～・・・お姉さまと月詠さんのアレはいつもの事なのです～」

プカプカと浮いていた明日葉をアキラが抱きとめて膝の上に座らせた。そのまま後ろからギュッと抱きしめられ、満面の笑みを浮かべる明日葉が、可愛いなんて思ってしまったメルシィは、頬を少し赤くしながら首を振る。

「でも、あれは不敬罪なのでは・・・」
「いつもの事なのです。だから誰も気にしないのですよ？」
「うん、それに月詠と木乃里姫殿下のスキンシップでもあるから、気にする必要は無いよ」
「はぁ・・・」

今尚、月詠の怪しい笑い声と、木乃里の甘い声が響く中、三人は和気藹々と話に花を咲かせるのであった。

「助けてくださ～い！！　ひぃ！？　あ、いや！　ひゃうん！？」

公衆大浴場の憩いの場でもある休憩場、そこに浴衣を着た三代目・紅き翼とアキラの姿があった。ただ、木乃里は何故か寝そべってグッタリとしているのだが、誰も触れないようにしている。話し掛けたら間違いなく泣くからだ。

「それにしてもアキラさん、元気そうですね」
「うん、最初は意識不明みたいだったけど、王妃様が治療してくれたから、今はもうね」
「母様が・・・まぁ、それなら当然ですか」

木乃香は魔法世界屈指の治癒術師としても有名だ。彼女に治せない怪我は無いと言われており、木乃香自身も過去に何人かの治癒術師見習いを弟子にしていた事もある。その弟子は皆が大成していて、師である木乃香の名は余計に脚光を浴びているのだ。

「お母さまの治癒は蘇生レベルですからねぇ。瀕死であろうが仮死状態であろうが、死んでいなければ治せるのです」
「それでいて戦闘面でも最強クラスのお方ですから、王妃様って、本当に凄いですね」
「俺としてはアリス陛下も凄いと思うぜ？　何せ戦闘では最強クラスなのは勿論、あの人に解呪出来ない呪いは存在しないって位、解呪術師として有名だからな」

そう、アリスもまた、戦闘以外でも有名なのだ。
王家の魔力を使った解呪は世界一で、嘗て旧世界ウェールズで起きた悪魔襲撃事件にて永久石化の呪いを受けた村人の石化を解呪し

た腕前がある。

「特に永久石化の呪いは未だにアリス陛下以外に解呪出来る魔法使いは存在しないって言われているからなぁ、ホント凄ぇよ」

改めてアリスと木乃香の凄さを認識する三代目だった。アキラや月詠としても、自分達の仲間でもある二人が尊敬されるのは嬉しいもので、更にそれを追いかけている若者達の姿が何となく微笑ましく思えて、笑顔になっている。

「みんなも、アリス陛下や木乃香王妃みたいに、誰からも尊敬されるようになるんだよ？」

「ウチらみたいに英雄にならんでもええ、英雄になってもええ、でも一番大事なんは人から尊敬される人になる事どすえ？」

勿論、そのつもりだ。始めから英雄を目指す者に碌な存在は居ない、アリス達の英雄という称号は後から付いて来たもので、本人達は称号など興味が無かったと聞く。

明日香たちも英雄という称号になど興味は無い。ただ目先にある不幸の芽を排除出来ればそれで良いのだから。

だから英雄になどならずとも、誰かを助ける存在であれば良い、そんな存在になる事を目指しているのだ。

「さてと、んじゃあ話は此処までにして・・・飲むか！」

「リューガ、まだ飲むの？」

「ハッ、テメェもワイン片手に持ってるじゃねえかよ明日香」

「・・・飲み比べ、しないよ？」

リューガもその辺は弁えている。流石に戦争がまだ終わっていな

い現在、飲み比べなんてしようなんて考える訳が無い。

「ほなウチらも飲みます～？」

「うん」

月詠とアキラは焼酎を取り出すと、お互いにコップに注ぐとアキラはロック、月詠はストレートで飲み始め、まだ子供の明日葉はピンへ葡萄ジュースを、木乃里は・・・・・まだグッタリしているのだった。

魔法世界某所にあるアヴェンジャーの根城、その首領の寝室では一組の男女がベッドの上で情事を行っていた。

水音に混じって聞こえる女性の艶やかな声が暫く続き、やがて聞こえなくなると、男の寝息が聞こえ始め、一緒に横になっていた女性が身体を起こす。

「ふぅ・・・大分、魂が魔族の肉体に定着して正常な転生状態になってきたですね」

ベッドの上に居たのはネギと夕映だった。

既に眠っているネギを余所に、夕映はタバコに火を点けると、裸体を隠す事も無く立ち上がる。

「終わったのか？」

「・・・来てたですか？　覗き見は悪趣味なのです」

「ふん、居る事に気付いていながら始めたのは貴様だ、小娘」

夕映は背後から聞こえた声に振り返る事無く返事を返した。する

と、夕映の背後に黒いローブの存在が現れる。この存在こそ、フィリウス・ゼクトを寄り代とした造物主だ。

「しかし、我が末裔が魔族に墜ちたとはな・・・我が系譜の術を使った結果、か」

「ええ、闇の魔法です」

「なるほど、我が６００年前に真祖にしたお姫様の術か」

「ネギ先生を裏切った醜い吸血鬼です。あまりお姫様なんて言ってほしくは無いですね」

それはスマンと、特に誠意の無い謝罪をした造物主は部屋の中央で立ったままの夕映の隣に並んだ。

「それより、終わったのですか？」

「ああ、流石にコアが破壊されていたデュナミスと３番目（テルティウム）は無理だったが、それ以外は全て復活させた」

「それは何より。で？　私に何をして欲しいですか？」

「２番目（セクンドゥム）の相手をしてやってくれ。私は１番目（プリームム）の調整をもう少しやっておきたいのでな、奴の手綱を握るのは貴様がやっておけ」

「はぁ・・・彼ですか、まぁ彼なら私が身体を差し出しても通用しそうですし。良いですよ」

一番気性の荒い人形の相手を任された気がするが、協力関係にあるのだから、無下には出来ない。

仕方が無いとばかりに近くにあったバスローブを羽織ると、２番目（セクンドゥム）に宛がわれている部屋に向う事にした。

「む？　我が末裔は良いのか？」

「・・・ああ、構わないのです。どうせ肉体は１０歳の子供なのですから、疲れ果てれば寝るだけのお子様なのですよ」

「そうか」
「まぁ、そんなネギ先生だから・・・愛おしいのですが」
眠るネギの寝顔に目を向け、一瞬だが笑顔を見せた夕映だったが、直ぐに無表情になると、部屋を出て行った。
残された造物主は、ネギに目を向けると、その頭に手を翳し、何かを呟く。それを終わらせると、夕映と同じように部屋を出て行き、1番目（プリームム）の調整の為に人形部屋へと向うのだった。

第十七話　「束の間の平穏」（後書き）

次回は…未定です。まだ何も考えてません。

第十八話　「アヴェンジャー結成の裏」（前書き）

夕映の話です。黒いですね。

第十八話　「アヴェンジャー結成の裏」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十八話
「アヴェンジャー結成の裏」

２番目（セクウンドゥム）との行為を終えた後、夕映は一人、アヴェンジャー旗艦イラの甲板に出て夜空を見上げていた。
右手には火の点いたタバコがあり、左手には魔族と化したネギの姿が写ったパクティオーカードのマスターがある。

「ついに此処まで来たですね・・・・・・１７年、あの日から１７年も経って、漸く此処まで」

思い出す、１７年前、怨敵アリスが英雄となって、自分達は旧世界に戻ってからの日々と、復讐を決意した時からの活動の日々を。

「結局、誰一人として私に協力してくれる者はいなかったですね」

本当に思い出す。復讐を決意してからアヴェンジャーを設立するまでの活動、同士を集める為にと動き回っていた時の事を。

真実の戦争から5年が経ったある日、２０歳になった夕映はアリアドネーでの仕事に休暇を貰い、里帰りという名目で旧世界に来ていた。
新ウェスペルタティア王国には行きたくなかったので、新メガロ

メセンブリアのゲートから旧世界のイギリスを経由して日本の麻帆良学園に向かい、嘗ての友、白き翼の仲間達に会いに行ったのだ。

「やっほー！　ユエ！」
「ハルナ！　久しぶりです！」

麻帆良学園に来て最初に会ったのは親友の一人でもある早乙女ハルナだ。嘗ての白き翼の一員であり、現在は麻帆良学園大学文学部に在籍する女子大生でもある。

「いや～本当に久しぶりだよねぇ。ユエってば中学卒業してから魔法世界に行っちゃって。のどかも心配してたよ？」
「それは、ごめんなさいです。今日はのどかは・・・？」
「あの子は今の時間だと講義だから・・・後２０分もしたら終わるかな？」

この頃、宮崎のどかは麻帆良学園大学考古学部に在籍しており、卒業したら魔法世界に渡る事になっていた。

「そうですか、では何処かの喫茶店にでも入ってるです」
「賛成～、暑いもんねぇ」

近くにあったスタバに入り、それぞれ冷たい飲み物を注文すると、お互いの近況を報告し合った。二人とも、魔法世界と旧世界で、生活の場が違うので、どうしてもこういう時でないとお互いの最近の生活などを知る事が出来ない。

「ハルナは如何してるです？　文学部に所属したらしいですが・・・」
「アタシ？　アタシは今はね・・・実は漫画家としても活動してる

のよ？」
「デビューしたですか！？」
「まぁねぇ・・・って、言ってもまだまだ駆け出しなんだけど」

それでもプロの漫画家としてデビューしたというのは凄い事だ。
中学生の頃から同人誌を描いていたハルナの姿を見てきた夕映としては、親友のデビューは本当に嬉しい限りだった。

「それで？　夕映は今はアリアドネーよね？」
「はい。アリアドネー戦乙女騎士団の一部隊を指揮しているです。他にもアリアドネー魔法学園の非常勤講師もしてるですよ」
「へぇ、凄いじゃん。アリアドネーの騎士団で指揮官をして、それに魔法学園の講師なんて、エリートコースまっしぐら？」

エリート、確かに夕映の現在の立場はエリートと言って差し支え無いだろう。現に夕映の同期でもある少女達と比べて、一番昇進しているのだから。

「ところでハルナ・・・お話したいことがあるです」
「ん？　如何したのユエ・・・随分と深刻な話？」
「ええ・・・ハルナ、ハルナはアリス先生がネギ先生にした事・・・あの封印の事を如何思うです？」
「・・・随分と懐かしい話を持って来たわねぇ。ネギ先生の事か・・・あの頃のアタシなら、アリス先生のやった事は許せなかったかな」
「今は・・・？」
「何かね、今じゃ納得してるのよ。ネギ先生は闇の魔法の侵食で魔族になってしまった。一度魔族に落ちた人間は二度と人間に戻る事は出来ないって学園長も言ってたから。それが闇の魔法による侵食なら余計にって」

一般的に聞く方法で人間が魔族になった場合、殆ど人間に戻れる確立は無いに等しいが、戻れる可能性は無くはないらしい。

だが、エヴァが開発した闇の魔法によって魔族になってしまうと、魂の根幹まで闇に侵され、輪廻の輪からも外れて完全な魔族になり、人間に戻る事は１００％不可能なのだとか。

「前者は肉体から魔族になって、魂がゆっくりと魔族に変化していくらしいの。だから魂が完全に魔族になる前なら人間に戻れる可能性が少しだけならある。でも闇の魔法の場合、肉体と魂の両方が同時に魔族になって、人間に戻れる可能性の一切が失われてしまうみたいよ」

だから、魔族になってしまったネギを、封印してしまうのは、仕方が無いと思えてしまった。弟みたいにネギを可愛がっていたハルナとしては、あれ以上魔族になったネギを苦しめたくないから、封印に納得したのだ。

「ユエは？　ユエは納得してる？」

「・・・出来るわけ無いです。アリス先生は・・・あの男は、ネギ先生が魔族になってしまった原因でもあるですよ。それなのに、ネギ先生を封印して、自分は英雄に、一国の王になって、輝かしい栄光を得ている・・・殺してやりたいくらい憎いです」

「ユエ・・・・・・」

この時、ハルナは理解した。夕映は、あの日から精神が成長出来ていないのだと。

ハルナを含めた白き翼のメンバーは、大人になるに連れて皆があの日のことを納得していった。いつまでも子供ではいられない。あの日の事を乗り越えて今を生きているのだ。

「ユエ・・・間違っても馬鹿な事をしないでね？　もう、アタシらは子供じゃないんだから」
「馬鹿な事、ですか・・・・・・・」

このとき、夕映の中でハルナに対する感情が急激に冷めていくのを感じた。夕映にとって親友からの裏切りとも取れる言葉を聞いて、何故だろうか、ハルナへの友情という気持ちが消えていくのだ。

「ハルナ、もしも私が・・・アリス先生に復讐をしたいと言ったら、それに協力してほしいと言ったら・・・如何するです？」
「ユエ？　まさか・・・」
「もしもの話です。実際にするわけじゃないですよ」
「・・・・・賛成しないし、協力しない。それに、絶対に止めるよ。もう私たちはいつまでも子供じゃないんだから」
「子供じゃない・・・ですか」

復讐したいという気持ちの、何処が子供なのか、夕映には理解出来ない。むしろ、ネギの事に納得してしまった親友が、夕映には信じられないのだ。
だから、夕映は立ち上がって、珈琲代を置いて、まだ何かを言っているハルナを無視しながら立ち去った。もう二度と、彼女に会う事は無いだろうという確信を持って・・・。

それから、夕映は旧世界にいる間に嘗ての白き翼のメンバーと会い、話を聞いて周ったのだが、皆、ハルナと同じ事を言った。
だから夕映は嘗ての仲間に見切りを付け、新たな仲間を作る事を決意したのだ。旧世界には立派な魔法使い（マギステル・マギ）制度を廃止したアリスに不満を持つ魔法使いが多々居るという話を聞いた事がある。その魔法使い達と接触して、同士を集める所から始めれば良い。

「いざと言う時は、女である事を利用して、集めるですよ」

そう言って、夕映は日本を出て海外に出た。休暇はまだまだあるのだから。

ふと、昔を思い出し過ぎたらしい。火を点けていた煙草がそろそろ根元まで来てしまった。

「はぁ」

火を消して新しい煙草に火を点け、肺一杯に煙を入れて吐き出す。

「そう言えば、あの頃からですね。私が煙草に手を出したのは・・・」

嘗ての仲間の裏切りによって溜まったストレスを解消しようと手を出したのが始まりだった。今では煙草を手放せないくらいニコチン中毒者になってしまったが、後悔とかは無い。

「綾瀬夕映」

「調整は終わったですか、一番目（プリームム）」

「終わったよ。君が回収した三番目（テルティウム）のコアの破片を取り込んだから、劣化してしまったとは言え、アリス・スプリングフィールドとの戦いの経験も受け継げた」

「そうですか・・・」

元々、フェイトは一番目（プリームム）が死んでから目覚めた生まれ変わりみたいな存在だ。いわば同一人物、コアの破片から経験を吸収するのは可能なのだ。

「まぁ、８割が限界だったけど。劣化が激しくて」
「１７年も放置してたですから」
「そう・・・で？　これからの僕達の活動は？」
「造物主が言うには不滅殺しの概念を秘めた魔法が存在しているらしいですから、奴らがそれに気付き、その方法を見つけるまでには滅ぼす必要があるですが・・・」

造物主は夕映たちアヴェンジャーにとっても切り札だ。だから彼を殺し得る不滅殺しの魔法をアリス達が得てしまったら不味い。
だが、今すぐに攻められるかと問われれば、否だ。先の戦いでアヴェンジャー側の被害も甚大だったのだから。特に初代や二代目の紅き翼と戦った者達の被害が凄い。

「戦力の補充を急がねばならないですね・・・」
「如何するの？」
「アリアドネーを崩壊させた時に捕虜にしたアリアドネー市民がいるです。男は即戦力として洗脳、女には魔族の子供を孕んでもらって戦力を増やしてもらうです」

それしかない。それでも少なく見積もって一月は掛かるのだが、今考えられる策で最も効率的な方法なのだから。

「一番目（プリームム）」
「なんだい？」
「貴方達人形は子供を作れるですか？」
「・・・一応ね」
「なら、貴方達も捕虜の女で子供を作るです。マッドが作った胎児成長促進薬を使えば一月で産まれるですし」
「六番目（セクストゥム）は性別的に無理だよ？」

「生ませなさい」

胎児成長促進薬は普通の人間の母体が使えば殆どが廃人になってしまうが、人形である六番目（セクストゥム）が使っても問題は無い。

「中々、外道だね」

「外道？　違うですよ・・・私こそが正義なのです。全ては正義の象徴たるネギ先生の為の行動なのですから」

「そう」

興味が無くなったのか、それとも早速始める為なのか、一番目（プリームム）は甲板から立ち去って行った。

それを見送った夕映は狂気に染まった表情で一番目（プリームム）を見送ると、三本目の煙草に火を点ける。

「私も、更に強くならないとですね」

魔力という点では確かに強くなっただろうが、技術という点では最強クラス最上位に未だ劣っている。

前の戦いで木乃香と戦い、魔力量で勝っても技術という点で負けていた事が響いた。やはり最強クラスの最上位を相手に、今のままでは不味い。

「確実にアリス・S・エンテオフュシアを含む紅き翼の関係者全てを殺す為に・・・」

第十八話　「アヴェンジャー結成の裏」（後書き）

次回は再び新ウェスペルタティア王国とアヴェンジャーの戦争です。
出てきますよ、アーウェルンクスシリーズが戦いに。

第十九話　「二度目の戦い」（前書き）

お待たせしました！！

第十九話　「二度目の戦い」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第十九話
「二度目の戦い」

新ウェスペルタティア王国とアヴェンジャーの一度目の戦いから一月半が経った。
両者とも一月半の間に二度目の戦いの準備を整え、ついに二度目の戦いが始まろうとしていたのだ。

「陛下、全艦隊出撃準備が整いました」
「ああ」

今度の戦いは、恐らくは王国側が不利な戦いになると予想される。
何故ならアヴェンジャーには造物主がいる。間違いなく戦いの終盤には出てくるだろうと思われるので、彼と戦える人間の戦力温存をしながらの戦いになってしまうのだから。

「造物主と戦うのは父さんと私、木乃香、エヴァのみ。その他では攻撃が届かないだろうからね」

魔法世界人では造物主に攻撃を中てられない。中途半端な実力者でも中てられない、最強クラスでも最低強上位は無いと届かないのが造物主なのだ。
王国側の戦力で造物主とまともに戦えるのはアリスと木乃香、エヴァ、ナギの四人だけ。この四人は造物主が出てくるまで戦場には

出られない。

「アヴェンジャーの様子は？」

「まだ動きは見せていません・・・っ！　い、いえ！　今、動き出しました！！　旗艦イラを先頭に後続艦隊が前進！！　更に無数の人影を確認！！」

「よし、全艦隊出撃！！　同時に魔法使い、魔法騎士、王国騎士部隊出撃だ！！」

「了解！！」

新ウェスペルタティア、新メガロメセンブリア、ヘラス、それぞれの艦隊から魔法使い、魔法騎士、王国騎士部隊が出撃する。

そして、アヴェンジャーの部隊と交戦状態に入ると、途端に戦場である空に雷や炎、氷、水、様々な属性の魔法だったり、光の斬撃や闇の斬撃、影の槍などが飛び交った。

「陛下、紅き翼は初代、二代目、共にスタンバイ完了だ」

「エヴァか・・・ああ、三代目は既に出撃しているな？」

「出撃は確認済みだ。クリムゾンから出撃している」

「そうか」

現在、初代・紅き翼のナギ、ラカン、アルの三人はタソガレに、二代目・紅き翼の木乃香、シルヴィア、アキラ、さよ、茶々丸、ペルシクムはマーズにて待機している。

アリスとエヴァはマーズのブリッジに居るが、出撃の時には直ぐ外へ出られる様になっているので問題なく、後は敵の動きを注意しながら見ているだけなのだ。

「さて、如何出る？　綾瀬・・・」

戦場では現在、多くの魔法が飛び交い、多くの命が失われていた。
それは人間だったり、亜人だったり、魔族のハーフだったり、様々な命が空の戦場で散っていく。
そんな戦場の中、明日香と月詠を先頭にして三代目・紅き翼のメンバーが向ってくる敵を薙ぎ払いながら敵艦を一隻落とした。

「やっぱええなぁ～、沢山切れるんも、でっかいおふねを切るんも、たまらんわ～」

妖刀ひなと聖魔の敵対を振るいながら月詠は上気した頬と、明らかに切る事への快感によって感じる絶頂感を表に出しながら、蕩けた表情で次々と敵兵の首を切り落としている。
それを傍で見ながら敵兵と戦っている明日香たちは、流石に引いていた。

「まぁ、僕たちは僕達の戦いをしよう」
「そうですね」
「だな」
「はい」
「いくのですよ！！」

千撃の雷姫となった“姫”とテンマノツルギを構えて敵兵を切り伏せる明日香。杖とホウマノツルギを構え宝石を併用しながら中距離からの戦闘を行う木乃里。明日香の隣に並んで己が拳と脚を気で強化しながらラカンスタイルで戦闘をするリューガ。杖を構え、遠距離からの魔法戦を行うメルシィ。絶鬼と護鬼を従え、八咫烏の背から陰陽術を行使する明日葉。
三代目・紅き翼はまだまだ未熟ながらも、戦場では一騎当千の活躍を見せている。

圧倒的物量で戦局を有利に進める新ウェスペルタティア王国と、ヘラス帝国、新メガロメセンブリアの連合軍を相手にしているアヴェンジャーの旗艦イラのブリッジでは、夕映が何故か余裕の笑みを浮かべながら戦場の様子を映したモニターを眺めていた。

「ふふふ、圧倒的な物量による攻撃で有利だと、精々ほくそ笑んでると良いです・・・さて、そろぞろ良い頃合ですね」

夕映がブリッジ要員に指示を出す。

すると、今まで連合側が有利だった戦場に炎、水、雷、石、闇、それぞれの巨大な魔法が降り注ぎ、敵味方問わず多くの人間の命を奪い去るのだった。

「さあ！　行くのですよ一番目（プリームム）！　二番目（セクウンドゥム）！　四番目（クウァルトゥム）！　五番目（クウィントゥム）！　六番目（セクストゥム）！」

『地のアーウェルンクス、了解』

『闇のアーウェルンクス、精々楽しんでやるよ』

『火のアーウェルンクス、フン・・・まぁあの程度の有象無象なんてね』

『風のアーウェルンクス、任務了解』

『水のアーウェルンクス、行きます』

その他の人形達も出撃している。合計7人の最強クラスが戦場に現れた事により、一気に戦況はアヴェンジャー有利に引っくり返されてしまう。

戦場で戦う連合の人間の殆どは良くて上級クラス、平均して中級クラスの上位なのだ。そこに最強クラスが投入されれば、最早言うまでも無い。

「さて、これで向こうは最強クラスを出さざるを得なくなったですね。三代目・紅き翼は二代目・サムライマスターを除けば雑魚ですし」

雑魚、とは言うが、明日香たちは一応メルシィ以外は上級だ。まぁ確かに、最強クラスから見れば雑魚に過ぎないのかもしれないが。

「ふふ、向こうの最強クラスの人間の殆どは衰えている者ばかり、勝てるですよ」

今度こそ、勝利を確信した夕映は、背後に現れた気配に振り向いた。そこには造物主の姿があり、フィリウス・ゼクトの顔でモニターを眺める姿は、何を考えているのか理解する事は不可能だ。

「そろそろ、あなたにも出てもらうですよ」

「・・・・・まぁ、良かろう」

連合側が未だに不滅殺しを得ていない以上、この戦いはアヴェンジャーの勝利で間違いない。それを理解している夕映は隣にいるネギに目を向けた。

「さあ、ネギ先生・・・貴方はアリス・S・エンテオフュシアが出てきたら出てもらうですよ。あの男を、今度こそ殺しなさい」

「勿論ですよ。今度こそ、僕はあの男を殺してみせます」

これで全ての準備が整った。

夕映は全てが順調に進む今の状況に、笑みが隠せないのだった。

マーズのブリッジでは、アーウェルンクスシリーズと、その他の人形の登場に混乱が広がっていた。その中で冷静なのはアリスとエヴァのみ、既に初代、二代目の紅き翼に出撃命令は出しているが、人形が相手ならと、アリスはエヴァに視線を向ける。

「ふん、まさかあの魔法を使う事になるとはな・・・まぁ、良いさ。行ってくる」

「ああ」

エヴァはブリッジを出て、ブリッジ前の通路の壁にある穴に飛び込んだ。すると、中に敷いてあった転移魔法陣が発動して、エヴァの姿はマーズの甲板に移る。

「アリス！　拡声魔法！」

『・・・いいぞ！』

「紅き翼！　今から私が呪文を唱える！！　良いか！　時間を稼ぐんだ！！」

それだけ言い、エヴァはカードを取り出す。

「アデアット！　星の吸血姫！！」

純白のドレス姿になったエヴァは火星から魔力を吸い上げるとこれから発動しようとしている魔法に使う己が魔力に上乗せした。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！　契約に従い　我に応えよ　闇と氷雪と永遠の女王　咲きわたる氷の白薔薇　眠れる永劫庭園　来れ　永久の闇　永遠の氷河　氷れる雷をもて　魂なき人形を囚えよ　妙なる静謐　白薔薇咲き乱れる　永遠の牢獄・・・・・！！」

エヴァの周囲を冷気と化した魔力が渦巻き、マーズの甲板を氷らせてゆく。更には彼女の周囲の空気まで冷え、その温度は絶対零度にも届こうとしていた。

「覚悟しろ人形共・・・これは17年前の戦争では使わなかった対人形用のオリジナル魔法だ!!」

エヴァの爪が戦場に向けられる。その魔法の標的を人形に絞込み、一気に開放した。

「終わりなく白き九天!!」

第十九話　「二度目の戦い」（後書き）

次回はついに戦場に現れる不滅！　再び戦場に立つアリスと、それを殺そうと出てくるネギ！　そして、そのアリス達のピンチに駆けつけ救いを齎す存在が……！！

第二十話　「激戦」（前書き）

明日からまた仕事、更新が遅れます。

第二十話　「激戦」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二十話
「激戦」

戦場にアーウェルンクスシリーズが出てきてから、戦況は一気にアヴェンジャー側が有利に転んだ。
直ぐに出撃した初代と二代目の紅き翼はそれぞれ、一番目（プリームム）とはナギが、二番目（セクウンドゥム）とはラカンが、四番目（クウアルトゥム）とはアキラとシルヴィアが、五番目（イントゥム）とは月詠が、六番目（セクストゥム）とはさよと茶々丸、ペルシクムが戦い、残るアル、タカミチ、木乃香、それから木乃香の護衛として共に出撃している刹那は残る人形二人・・・風の初代と炎の初代や、人形達の子供を相手にしていた。

「ハッ！　まさかまたてめぇと戦う事になるなんてな！！」
「３７年前は負けたけど、今度は勝たせてもらうよ」
「言ってろ！　何年経とうが俺は最強の魔法使いだぜ！」

一番目（プリームム）と戦うナギの戦いは３７年前の戦いの再現となった。しかし、ナギも流石に衰えがある為か、若干だがナギが押され気味ではある。

「オラァアア！！」
「ハッ！　相変わらずの筋肉馬鹿がよテメェ！」
「そういうテメェは相変わらずの悪人面だなぁ！」

ラカンと二番目（セクウンドゥム）はお互いに拳の応酬が続き、互角・・・いや、若干だがラカンが有利な状況で戦闘が進む。

「君には17年前に殺された借りがあるからね、ここで殺させてもらう」

「前と同じとは思わないで・・・！」

「ふん、人間である君は17年前よりも衰えがある。そこのシルヴィア・オーギスもね。だから衰えない僕に勝てるとは思わない方が良いよ」

「ですが、私達二人を相手に余裕は無さそうですね」

「っ！　良いハンデだね！」

シルヴィアとアキラ、二人は衰えてはいるものの、最強クラス二人という有利を生かして四番目（クウァルトゥム）と善戦している。

「今度は負けない」

「うふふふふふ、あはははははははは！！！　アハハハハハハハハ！！！　エエヨ！　マタ、何度デモ切ッテ切ッテ、楽シマセテモライマス～！！」

黒い気を纏い、白黒反転した瞳で狂気の笑みを浮かべる月詠と、雷を身に纏った五番目（クウィントゥム）は、狂と静、二つがぶつかり合い、激しいスパークと衝撃波を放ちながら高速戦闘を始めるのだった。

「あなたは、主を倒した死霊術師（ネクロマンサー）ですね」

「主？　ああ、人の事を年増呼ばわりした仮面の人ですね」

「主を倒した実力、見せていただきます」

「茶々丸さん！　ペルシクムさん！」

「了解、結界弾セットアップ」

「ルナティーク起動、アルテミス展開」

怨霊を呼び寄せ、草薙の剣を構えたさよ、ライフルに結界弾を装鎮した茶々丸、翼を広げ、光の弓を展開したペルシクムの三人は水を両腕に集め、無表情で此方を見つめている六番目（セクストゥム）と向き合うのだった。

初代、二代目、それぞれの紅き翼が人形たちとの戦闘に入り暫くして、戦場にエヴァの声が響いた。

『紅き翼！　今から私が呪文を唱える！！　良いか！　時間を稼ぐんだ！！』

その声と同時に、マーズの方からエヴァの魔力が膨れ上がるのを感じた。その量から、彼女が最上級クラスの魔法を使うという事に気付いて人形達が逃げられない様に皆、足止めをする為に、またエヴァの方に行かせない為に戦い出す。

「チィッ！　あの吸血鬼が何か企んでる！　誰でも良いから行きやがれ！！」
「そういう君が行けば良いのではないのかい？　二番目（セクウンドゥム）」
「うっせぇよ一番目（プリームム）！！」

一番目（プリームム）と二番目（セクウンドゥム）が言い争っている間にも、エヴァの詠唱は進んだ。

『リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！　契約に従い　我に応えよ　闇と氷雪と永遠の女王　咲きわたる氷の白薔薇　眠れる永劫庭園　来れ　永久の闇　永遠の氷河　氷れる雷をもて　魂なき人形を囚えよ　妙なる静謐　白薔薇咲き乱れる　永遠の牢獄・・・・・！』

今まで聞いた事の無い呪文だった。それどころか、誰一人として知らない呪文、それは彼女のオリジナル魔法だという証でもある。

「お、オリジナル呪文だとぉ！？」

二番目（セクウンドゥム）の驚愕の声が響くが、もう遅い。エヴァの詠唱は既に終わってしまったのだから。

『終わりなく白き九天！！』

その瞬間、マーズから雷が走った。白い氷の雷が広がり、一気にアーウェルンクスシリーズを含むアヴェンジャー側の人形に襲い掛かる。

「これは・・・！」

襲い掛かってきた氷の雷を避けた五番目（クウィントゥム）だったが、次から次へと追いかけて襲い掛かる氷に驚愕する。

そして、何よりも人形である自分の中の本能が叫んでいるのだ。この氷の雷に触れてはならない、触れればその瞬間、自分は終わる・・・と。

故に、人形達は恐怖の表情を浮かべ、それぞれ逃げ惑う。だが、それを許す紅き翼ではなく、逃げようとする人形達の行く手を阻み、逃げ道を塞いだ。

「っ！　不味い！？」

六番目（セクストゥム）が焦りの表情を浮かべた時、彼女の足に氷の雷が触れる。その瞬間、彼女の全身に氷が広がり、彼女を恐怖に陥れながら氷の

中へ閉じ込めてしまうのだった。

「六番目（セクストゥム）！　クッ！？　こんな氷、僕の炎で・・・！　ヴィシュ・タル・リ・シュタル・ヴァンゲイト！　九つの鍵を開きて　レーギャルンの筐より出て来たれ　燃え盛る炎の神剣！！」

四番目（クウァルトゥム）の右腕に炎の剣が現れ、その高温の炎で氷の雷を薙ぎ払い溶かそうとしたのだが・・・。

「ば、馬鹿な！？」

炎の剣が氷の雷に負けた。氷に触れた瞬間に消える剣に驚き、その瞬間には既に氷が四番目（クウァルトゥム）の全身を覆っているのだった。

「そんな、そんな馬鹿な事があってたまるか！？」

二番目（セクウンドゥム）は二人の状態を見て、更に焦りの色を浮かべながら迫り来る氷の雷から逃げていた。

だが、その逃げ道を尽くラカンに塞がれ、彼の苛立ちもピークに達する。

「どけ！！　人形がぁ！！」

「へっ！　同じ人形が何言ってんだよ！　オラァ！！　ラカン！！　インッパクトォォオオオオオ！！！！！！」

「ま、待て！　そんな事をしたら・・・！！　う、うあああああ！！！！！」

ラカン・インパクトが二番目（セクウンドゥム）に直撃して、彼の背後に迫っていた氷の雷に叩き付けた。

当然、二番目（セクウンドゥム）はそのまま氷に閉じ込められてしまい、その顔に恐

怖と絶望を浮かべたまま、永遠に氷の中で過ごす事になる。

「三人も・・・クッ！？」

五番目（クウィントゥム）と一番目（プリームム）は合流して逃げていたのだが、やはり背後からは氷の雷が執拗に追いかけてきて、逃げ切るのは難しい。

「万象貫く黒杭の円環！！」

「轟き渡る（グングナール）　雷の神槍！！」

雷の槍と無数の黒い杭が迫り来る氷の雷に向けて放たれる。しかし、その全てを弾き飛ばしながら氷は二人に迫り、ついに五番目（クウィントゥム）は氷に閉じ込められてしまうのだった。

「なら・・・！　千刃黒曜剣！！」

黒曜石で出来た剣を無数出現させて突撃させる。だが、それすら意味を成さず、一番目（プリームム）もまた・・・。

「くっ！？」

氷の中に閉じ込められ永遠を過ごす事になるのだった。

マーズのブリッジで様子を見ていたアリスは満足そうに司令官席に深く腰掛けた。敵はこれで人形を全て失い、最強クラスを失ったと見て良いだろう。

再び連合側が有利になるだろうと思いながら一気に畳み掛ける様に命令を出そうとしたその時だった。

「っ！？」

嫌な予感が背筋を冷やす。

慌ててモニターを見ると、イラの甲板に黒い影・・・・・フィリウス・ゼクトの身体に黒いローブを纏った、造物主が立っていたのだ。

「私も出る！！　特殊戦闘配備発令！！！」

「りょ、了解！！！」

ブリッジを出たアリスはエヴァと同じ方法で甲板に出る。そこではエヴァが待っており、二人揃って飛び立った。

「アデアット！」

きしのあかし、えいゆうの籠手、王者の定めを出し、更にきしのあかしを嘆きの焔雷騎にすると既に合流していた初代、二代目、三代目の紅き翼の下に追いついた。

「アリスさん」

「木乃香・・・まだ動きは？」

「無いえ・・・でも、見てみ」

「っ！　ネギ・・・綾瀬」

造物主の両サイドには雷天大壮2になった魔族ネギと杖剣を構えた夕映の姿があった。

「父さん・・・アル、ラカン、造物主の相手を頼める？」

「良いけどよ・・・多分、攻撃が中るのは俺くらいだぜ？」

「それでも・・・お願い」

アルとラカンでは造物主に攻撃が中らない。だから主戦力はナギだろう、だけどナギだけでは心許ないので・・・。

「エヴァも、父さんと一緒に戦って欲しい」
「任せろ」

エヴァを初代と共に向わせる。
それから夕映の相手だが、それはタカミチ、アキラ、さよ、茶々丸、ペルシクム、シルヴィア、三代目・紅き翼に任せた。アリスと木乃香はネギの相手だ。

「父様・・・僕と木乃里も、父様と一緒に・・・！」
「駄目だ・・・ネギは最強クラスだ」
「でもお父様!!」
「あかんよ・・・明日葉もや。ネギ君の相手はウチとアリスさんだけでやる」

何とか言い聞かせると、それぞれ戦う相手に向き合った。

「お師匠の身体・・・返してもらうぜ!!」
「ふん、貴様には前に敗れたな・・・だが、今度は我の勝利に揺らぎは無い」
「随分な余裕だな」
「これは我が愛しのお嬢様・・・余裕だとも。何故なら・・・・・・」

瞬間、造物主の姿が掻き消え、ラカンとアルが近くの戦艦の装甲に叩きつけられた。

「ガハッ！？」
「グゥッ！？」
「ジャック！　アル！」
「馬鹿な・・・！？」

ナギやエヴァですら、造物主の動きが見えなかった。
そして、更にいつの間にか造物主は二人の後方に居り、砲撃を放ってきたのだ。

「っ！！　最強防壁！！」
「耐えろよエヴァ！！　来たれ　虚構の雷　薙ぎ払え！！！　雷の斧！！！！」

エヴァが造物主の砲撃を最強防壁で受け止め激しい衝撃波に押される中、ナギが雷の斧を造物主に叩きつける事で砲撃を止ませる。

「ど、如何だ！！」
「・・・いや、駄目だな」

エヴァの言う通り、造物主は傷一つ負っていない。

「やはり人間の衰えというのは悲しいものだな・・・昔のお前なら今の攻撃、我に通っていたであろうに」
「なら、これは如何だ？　高速詠唱！　こおるせかい！！　術式固定！！　掌握！！」

エヴァはこおるせかいを掌握して、闇の魔法による術式兵装を発動した。

「“氷界闇姫”！」

エヴァの身体が闇色に染まり、冷気を纏う。美しい金髪は蒼銀に変色して、冷気と共に揺らめいた。

「ほう、我の系譜の技法か」

「らしいな・・・だが、これは私自身が考案した技法だ。決して貴様に真祖の吸血鬼にされたから考案できたものではない！！」

両手に断罪の剣を展開したエヴァはナギと共に瞬動に入った。アリスがネギを倒すまで、少しでも造物主を消耗させるための戦いが、始まる。

魔族と化したネギを前にして、アリスと木乃香は冷静だった。既に二人にとってネギは弟でも、嘗ての同居人でもない。倒すべき敵なのだから、余計な感情など、持つ必要は無いのだ。

「今度こそ、兄さん・・・貴様を殺すよ」

「出来るのならな・・・来いよガキ、格の違いを見せてやる」

「ふん。このかさん、貴女は如何です？　今なら僕の所に来たら良い待遇を約束しますよ？　僕の物になるという高待遇を」

「それは高待遇言わんえ・・・それに、ウチはアリスさんのモノや、ネギくん」

「そうですか・・・残念です」

その瞬間、ネギはアリスの懐に入って心臓目掛けて爪を突き刺そうとしていた。

だが、アリスはノーモーションで発動した無我の境地によって人間を超えた反射速度を持ってそれを避け、木乃香が天之尾羽張（アメノオハバキリ）で首を切り落とそうとする。

「フン！」

しかし、ネギは冷静に刃を掌で受け止めると逆方向から切り掛かってきたアリスに木乃香をぶつけた。

「っ！」

「きゃあ！？」

「開放、巨神ころし、暴風の螺旋槍」

アリスには巨神ころし、木乃香には暴風の螺旋槍が突き刺さろうと迫り来る。それを避けた二人だったが、何時の間にかネギが背後に居り、二人の背中に雷華崩拳が叩き込まれたのだった。

「っ・・・ッ！！」

「うぐっ！？」

魔族と化したネギの人間離れした筋力による拳は、二人の背骨を折りそうなほど強力だった。実際、背骨がミシリと嫌な音を響かせていたので、少し身体の軸をずらしていなかったら、不味かっただろう。

「まだまだ！！」

ネギが両手に断罪の剣を展開して切り掛かってくる。それを“姫（アメノオハバキリ）”と天之尾羽張で受け止めたのだが、雷を帯びた断罪の剣が放電して、二人の皮膚を焼いた。

「嘘やろ・・・っ！　ネギ君、強い・・・！？」

「不味い・・・か」

無我の境地の最中、口数は殆ど減るアリスですら不味いと口走るほど、今のネギは不味かった。正直、先の戦いのとき以上に強くなっている。

「この短期間で、何したんや？」

「簡単ですよ。ダイオラマ魔法球に入って、少しばかり人と魔族のハーフを食べただけです」

「っ！　そこまで、墜ちたんか！！」

ついには人食いまでしてしまったネギは、最早ヒトとしての倫理観など無い。それを理解した木乃香は天之尾羽張（アメノオハバキリ）に神の炎と神の雷を纏わせ、全身に神の水のヴェールを展開した。

「見せたる。これがウチの切り札や」

すると、彼女の背後に二人の男女の影が映り、木乃香の中に吸い込まれた。

「日本の神の力・・・今、此処に！！！　黄泉比良坂（ヨモツヒラサカ）！！！」

天之尾羽張（アメノオハバキリ）を一振りすると、空間が裂け、ネギに向って無数の手が伸びてきた。

「これは・・・？」

「この手は亡者の手や・・・黄泉比良坂、日本神話では死者が黄泉の国へ旅立つ時に訪れる世界、この手に掴まれれば最後、その魂を黄泉の国へ誘われるえ」

「っ！」

それはつまり、この手に掴まれれば問答無用で死を意味する。
焦ったネギは雷速瞬動で逃げたのだが、逃げた先に再び空間の裂け目が現れ、無数の手がネギに向けて伸びてきた。

「無駄や、この術は一度発動したら対象を黄泉の国へ誘うまで追い続けるんや」
「クッ、この！！」

伸びてきた手を断罪の剣で切り落としながら避け続けるネギ、しかしいよいよ無理だと、不味いと思い始めたその時だった。
その空間の裂け目に向って砲撃が放たれ、裂け目が消滅してしまったのだ。

「何や！？」
「あれは・・・っ」

木乃香とアリスが目を向けた先、そこには血塗れになって意識を失ったナギとエヴァを足元に置き、適当な戦艦の甲板に立つ造物主の姿があった。

「た、助かりました」
「油断だ、我が末裔」
「はい」

不味い、ナギとエヴァが負けたという事は、アルとラカンも負けたという事だ。つまり、造物主とネギ、この二人をアリスと木乃香の二人で相手しなければならない。

「ピンチ・・・やね」
「ああ・・・」

全盛期から比べれば格段に衰え、更に言えば全盛期ですらナギ達には及ばなかったアリス達が、造物主に勝てる可能性は無い。

そこにネギまで加わってしまえば、もはや絶望的だろう。だからこそ、覚悟を決めようとした時だった。二人にとって救いとなる声が聞こえてきたのは。

「アリス先生ー！！　このかー！！」

高速で突撃してくる一隻の船・・・それは、ブックストアーの船でもあるフライマンタだった。その甲板に立つ一人の女性・・・のどかが、険しい表情で夕映と造物主、そしてネギを見ている。

「のどか！」
「宮崎・・・！」

ブックストアーのリーダー、のどか・コードウェル、激化する戦場に舞い降りた救いの女神となるのか、それは彼女の手に握られている透明のローブが物語っていた。

第二十話　「激戦」（後書き）

次回、ついに……。

第二十一話　「不滅殺し」（前書き）

出張前、なるべく多く投稿したい。

第二十一話　「不滅殺し」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二十一話
「不死殺し」

戦場に現れた一隻の船、17年前は白き翼に協力していた船であり、現在はブックストアー専属の船となったフライマンタだ。
そして、その甲板には透明のローブを手に持った宮崎のどか・・・・・のどか・コードウェルの姿がある。

「のどか・・・」
「夕映・・・」

嘗ての親友同士がお互いに戦場で顔を合わせた瞬間だ。

「のどか、信じていたですよ・・・のどかなら私に協力してくれると」
「・・・・・夕映、ネギ先生・・・」
「さぁ、のどかさん・・・僕の所に来てください」

ネギと夕映が差し出した手、のどかはフライマンタの甲板からそれを見ると、浮遊魔法符を使って浮遊した。
そのままのどかは夕映とネギの所ではなく、アリスの所に行く。

「のどか!?」
「のどかさん!?」

のどかの行動に驚いた二人は驚愕の声を上げるが、のどかはそんな二人に悲しげな瞳を向け、それでもアリスの傍に来ると、透明のローブを手渡した。

「これが・・・」

「はい、墓守人の宮殿の最深部、ウェスペルタティア王家の墓所、その更に最奥に安置されていました。デミウルゴスの翼です」

のどかがデミウルゴスの翼捜索依頼を受けた時、一番最初に思い浮かんだのが墓守人の宮殿だったのだ。

既に封印が解かれているので、中に入るのは難しくないので、最深部を目指して探索していると、王家の墓所の最奥にあった初代女王アマテルの墓の下に階段があり、そこを降りるとあったのだ・・・初代造物主の遺骨と思しきモノと、その上に安置されていた透明のローブ・・・デミウルゴスの翼が。

「デミウルゴスの翼・・・まさか、それが不滅殺し!?」

夕映の表情に焦りの色が出た。このままでは切り札たる造物主が消滅してしまう、ならば圧倒的物量でアリスを殺そうとネギだけではなく、周囲にいた兵士１０００人近くをアリスに向けて放つ。

「造物主、あなたも行くです!」

「うむ」

造物主もアリスに向けて砲撃を撃って来た。流石に自分を消滅させる事が出来る存在がアリスの手元にある以上、この場で殺さなくてはと思っている。

「三代目！　二代目！　時間稼ぎを頼む」
『了解！！』

三代目・紅き翼、二代目・紅き翼でまだ戦える者はアリスの前に出ると、アリスが詠唱する時間を稼ぎ始めた。
アリスは後方でそれを確認すると、ローブを一度懐に仕舞い、発動体である指輪に魔力を通し、詠唱を始める。

「ボルグ・ボルクス・ボルメテウス　契約に従い　我に応えよ　天空を支配する悠久の王　大地にもたらす生と死　恵みと滅びの自然　来たれ　生をもたらす世界　死をもたらす猛威　天より貫く光と氷水　轟き吹きすさべ　全ての魂持つ者に　生と死を持つ矛盾たる恵みを」

これはエヴァと共に開発した魔法であり、アリスオリジナルの魔法、そしてエヴァが開発した終わりなく白き九天と対を成す魔法だ。

「見るが良い、これは命という概念を持つ全ての存在を殺す魔法だ！！　猛攻する大自然の脅威！！！」

アリスの魔法が発動した瞬間、世界が震えた。
大地は地震で裂け、空は暴風と雷雨、猛吹雪によって荒れ狂い、アヴェンジャーの兵士全てに襲い掛かる。
ある者は暴風に飲み込まれ、ある者は雷雨によって身体を焼かれ、ある者は吹雪により全身が凍った。更に、アヴェンジャーの地上部隊では地震によって立てなくなった所を足元が裂け、奈落の底に落ち、別の場所では吹き上がってきた溶岩に飲み込まれ生きたまま身体を燃やされ、溶かされていった。
正に大自然の猛威、命という概念を持つ存在全てに死を与えるアリスオリジナルの超広域殲滅魔法だった。

「な、なな・・・・・・」

一瞬でアヴェンジャーの戦力が殆ど全滅して、残されたのは夕映とネギ、造物主のみになってしまった。

それを見て、夕映は驚愕と怒り、そして若干の恐怖に震える。漸く、自分が戦っている相手の実力がどれ程のものなのか、理解してきたのだろう。

「さて、これでアヴェンジャーの戦力は0だ。残るは綾瀬、ネギ、造物主、お前達だけだ！」

きしのあかしを構え、アリスはネギたちの前に立つ。

「明日香・・・“姫”を一時的にだけど借りるね」
「父様・・・」
「大丈夫、一世一代最大の仕事をするだけだから」

きしのあかしをカードに戻したアリスは、明日香から“姫”を受け取ると、術式武装を施す。アリスが使う最大の術式武装、森羅万象だ。

そして、右手に持った“姫”とは反対の、左手には手首に巻いたブレスレット型魔法具に収納していたグレートグランドマスターキーを出して持ち、デミウルゴスの翼を身に纏うと瞳をオッドアイに変え、無我の境地を発動する。

「アマテル様に教わった不滅殺しの魔法、発動まで時間が掛かる・・・皆、時間稼ぎを頼むよ」
「アリスさん・・・」
「大丈夫、必ず・・・帰るから」

不滅殺しの魔法、それをアマテルに教わった時、アリスと木乃香は聞かされていたのだ。不滅殺しの魔法を使えば必ず代償が支払われる、と・・・。

その代償が何なのか、それはその時によって違うらしく、命の場合もあれば、五感の場合もある。もしかしたら精神の可能性だってあるのだ。

「必ず、帰ってきてな」
「ああ・・・」

泣きそうな顔でアリスを見上げる木乃香の頭を撫でて、アリスは目を閉じた。すると、アリスの身体が無色の光を放ち始め、不滅殺しの魔法の準備が始まる。

「っ!?　ネギ先生!　アリス・S・エンテオフュシアを殺すです!!　このままでは造物主が、私達の切り札が!!　造物主の死は私たちの敗北も同じです!!」
「はい!!」
「我も出よう・・・」
「させへんよ」

突如、木乃香の身体から光が放たれた。それは三人に当たる事無く通り過ぎた。

「な、何です・・・?」
「後ろ、見るんやな」
「後ろ・・・?　っ!?」

後ろを見ると、造物主によって重傷を負わされた筈のナギとエヴ

ァが完全回復して立ち上がっていた。

「流石だな木乃香、一瞬で完全回復するとは」

「流石は俺の義娘だぜ！」

エヴァとナギは傷が癒え、更には疲労すらも消えた身体に満足したのか構える。その後ろには同じく木乃香のおかげで完全回復したラカンとアルの姿もあった。

「さてと・・・今からウチが指揮を執る！　総員！　これが最後の戦いや！！　アリスさんが不滅殺しの魔法を完成させるまで、時間稼ぎをするんや！！！」

『応！！！』

明らかに不利過ぎる状況、夕映とネギは後ずさりをしながら恐怖に震えるが、気持ちを持ち直し、構えた。

造物主も、真っ先にアリスを殺す為、砲撃の準備に入る。

「これが、最後の戦いや・・・アリスさんが命懸けとるんやから、ウチかてこの戦いに命を懸けたるわ！！」

天之尾羽張（アメノオハバキリ）を構え、神の雷、炎、水を展開した木乃香は、造物主に突っ込んだ。

これが、本当に最後の戦いになる事を信じて・・・・・・。

第二十一話　「不滅殺し」（後書き）

１５日には出張に出発です。横浜ですね。
それまでに完結出来ると良いなぁ。

第二十二話　「時間稼ぎ」（前書き）

スーツケース見つけた…良かったぁ、失くしてなくて。

第二十二話　「時間稼ぎ」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二十二話
「時間稼ぎ」

アリスが不滅殺しの魔法、デミウルゴスを発動する為の準備に入った。
その間の時間稼ぎの為に、木乃香の指揮の下、初代、二代目、三代目の紅き翼は造物主、ネギ、夕映と戦う事になる。

「のどか、のどかはフライマンタに戻って、先に離脱してな」
「このか・・・」
「大丈夫やって・・・必ず生きて帰るえ」
「・・・うん」

のどかがフライマンタに戻ったのを確認した木乃香は天之尾羽張（アメノオハバキリ）を構えると、造物主に向き合った。彼女の後ろにはナギやラカンを始めとした初代・紅き翼の姿がある。
その他はエヴァを先頭に二代目・紅き翼がネギと、明日香を先頭に三代目・紅き翼が夕映と対峙していた。

「これが最後の戦いになる、そう信じて・・・行くえ！！」
『応！！！』

次の瞬間、皆がぶつかった。
造物主には木乃香の持つ天之尾羽張（アメノオハバキリ）と、ナギとラカンの拳、アル

の重力魔法が。ネギにはエヴァの断罪の剣とタカミチの拳、月詠の小太刀、さよの草薙の剣、アキラの水の太刀が、夕映には明日香のテンマノツルギと木乃里のホウマノツルギ、リューガの拳、メルシィの魔法、明日葉が従えし絶鬼・護鬼の武器が。

紅き翼の攻撃は造物主には一切届かず、ネギは雷速瞬動で避けられ、夕映に対してはかなり命中する。

「ぐぅっ！　このガキどもが！！」

「綾瀬夕映、あなたは最強クラスと同等の魔力を得ても、実力が伴っていない」

「だから、私たち上級クラス相手に苦戦するんですよ」

「こんな、こんなガキに私が負けるなど、あり得ないんですよ！！」

そもそも、夕映は勘違いしているのだ。魔力は確かに木乃香並みになったのだろうが、魔力量＝実力の高さではない。

確かにアリアドネーで戦乙女騎士団の指揮官をしていただけの実力があるのだろうが、それでも所詮は上級クラスが良い所、彼女には最強クラスになれるだけの才能は無かった。

しかし、明日香と木乃里、リューガ、メルシィには最強クラスになれる才能があった。今はまだ上級、中級クラスの実力しか無くとも、近い未来、必ず最強クラスに到達出来るだけの才能がある。才能のある者と無い者では、そもそも実力が同じでも違うものだ。

「ハッ！　アリアドネー戦乙女騎士団の指揮官をしてたって話だけど、随分と弱いじゃねぇか！」

「くっ、この人形風情が・・・！」

「今はまだ格下の筈の私でも、勝てそうですね」

「っ！　図に乗るなです！！　雷の暴風！！」

「甘い！！」

メルシィの挑発で頭に血が昇った夕映の放つ雷の暴風は、木乃里が前に出る事で掻き消されてしまった。

「完全魔法無効化・・・っ！」

「そして、忘れないで欲しいけど、僕も同じ完全魔法無効化体質なんだ・・・無極而太極斬！！！」

「しまった！？」

テンマノツルギから放たれた明日香の完全魔法無効化の力を持った究極の斬撃、それは夕映の魔法障壁を簡単に切り裂き、魔法強化を施している杖剣や鎧を叩き切ると、夕映の身体を近くの戦艦の船体に思いっきり叩きつける。

「リューガ！　メルシィ！！」

「おっしゃあああああ！！！　ラカン！！　インッパクトォォォォォォオオオオオオオオ！！！！！！！！！！！」

「高速詠唱！　闇の吹雪！！！」

追い討ちを掛ける様に、リューガとメルシィの一撃が夕映に叩き込まれ、夕映は完全に重傷で意識を失い、その場に倒れてしまうのだった。

「綾瀬夕映・・・新ウェスペルタティア王国第一王子、明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアの名の下に、第一級戦争犯罪者として貴女を、逮捕します」

ネギと戦う二代目・紅き翼は前衛としてアキラと月詠、チャチャゼロが小太刀と水の太刀、大型ナイフを持って切りかかり、後方ではエヴァとシルヴィアが詠唱して、その中間ではタカミチと茶々丸、

ペルシクムが前衛を援護している。

「アハハハハハハ！！　・・・・・なんや、アリスはんの弟やいうても、全然ゾクゾクせぇへんなぁ」

「失礼な人ですね、最強クラスに到達した僕を相手に、そんな戯言を吐けるなんて」

「ネギ君、戯言なんかじゃない。実際、私たちはネギ君を脅威と思えないんだ・・・確かに君は最強クラスになったのだろうけど、でもね・・・絶対に勝てないと思う程の脅威とは感じない」

「アキラさん、あなたまで僕を過小評価するんですか？」

雷天大壮2で雷速瞬動を繰り返すネギに、アキラと月詠の斬撃は一撃たりとも中らない。だが、そんな状況だというのに、アキラにも、月詠にも、そしてそれを後ろから見ている他のメンバーにも、焦りは無かった。

何故なら、今のネギは最強クラスに到達したという驕りと、魔族となって人間を超えたという変な余裕が浮き彫りになっていて、真の最強クラスである二代目・紅き翼のメンバーにはネギが脅威とは映らないのだ。

「ネギ君、君は・・・本当に変わったよ」

「タカミチ・・・タカミチは、僕の味方だと思ってたのに」

「ふん！　それこそが貴様の甘さだと、私は貴様の甘さを何度も指摘して来たな、ぼーや」

「エヴァンジェリンさん・・・っ！」

タカミチが放った千条閃鏃・無音拳を、ネギは雷速瞬動を持ってしても避け切れなかった。千の無音拳が避ける先々に叩き込まれてしまうので、避ける事が出来なかったのだ。

無音拳を受けて怯んだ隙を突いて、エヴァが虚空瞬動でネギの背

後に立つ。その姿はこおるせかいを術式兵装した氷界闇姫になっていた。

「零距離だ。精々苦しまずに死ね、ぼーや・・・・・闇の吹雪！！！」

星の吸血姫によって普通の上位古代語魔法並みの威力になった闇の吹雪がネギの背中に叩き込まれた。

血を吐き散らしながら吹き飛ばされるネギに追い討ちでシルヴィアの杖が向けられ、その杖に装備されている無数の宝石が光り輝く。

「宝石魔法の最終奥義、受けなさい。全術式統合！！　光り輝く贖罪の氷雪！！！」

氷混じりの光り輝く吹雪がネギの身体を貫く。闇の吹雪が貫通した部分を更に貫通して、その傷口を強引に押し広げながら。

「がぁあああああああ！！！？？？」

「安らかに眠ってくださいネギ先生・・・・・斬魔・浄霊の太刀！！！！」

「来世も魔族かもしれないけど、もう少しまともな人生を、歩んでね・・・・・水圧圧縮！　全開放！！！」

浄化の光と、物凄い量の水がネギを飲み込み、全身をズタズタに引き裂いた。最早、満身創痍になったネギに、最後のトドメを刺す。

「二刀黒刀五月雨切り！！」

「シリウス・・・術式装填、ダウンロード完了・・・燃える天空」

「結界弾、発射します」

周囲に被害が行かない様、茶々丸が放った結界弾がネギの周囲を結界で覆い、ペルシクムの放った燃える天空の矢と、月詠の二刀黒刀五月雨切りが直撃する。

ネギは意識を失ったのか、それとも死んだのか、それは定かではないが、近くにあった戦艦の船体に叩きつけられ、動かなくなるのだった。

造物主の相手をする事になった木乃香と、ナギを含む初代・紅き翼のメンバーたち。決して勝てる戦いではない、だが勝つ必要は無いのだ。アリスが不滅殺しの魔法を完成させるその時までの時間稼ぎをすれば良いのだから。

「貴様等程度、押し通る！」
「させへんよ！　常世の輝き！！」
「行くぜ！！　雷の投擲！！」

木乃香の常世の輝きと、ナギの雷の投擲が造物主に向けて放たれるが、それは造物主の障壁によって掻き消されてしまう。

「ふん、フィリウス・ゼクトの身体は流石だな。障壁が前の身体より強力だ」
「ハッ！　ゼクトの身体じゃねぇと勝てねぇって事だよなぁ！！　オラァ！！　羅漢・適当に右パンチ！！！！」
「魔法世界の人形が・・・人形は人形師に逆らえないという事を、思い知れ」

ラカンが放った適当に右パンチは造物主の方向とは全く別の方向に飛んでいった。やはり魔法世界人では造物主を相手に勝負にすらならないという事なのだろう。

「アル！！」
「ええ」

アルが展開した重力球、その数は４つ。それを造物主の四方から押し潰す様に飛ばしたアルだったが、４つの重力球は造物主が手を触れただけで消えてしまった。

「今のは！？」
「何、貴様等が王家の魔力と呼ぶ我の魔力を先ほどの魔法の中に混ぜただけの事よ」
「何と言うデタラメでしょうか・・・これはナギやラカン以上ですね、相変わらず」
「せやけど、攻撃が無駄やとは思わん！　せやから・・・！　燃えよ！　日の下の国に現れし、神の炎！！　火之迦具土神（ヒノカグツチノカミ）！！！」

天之尾羽張（アメノオハバキリ）が元々纏っていた炎が更に燃え上がった。火之迦具土神（ヒノカグツチノカミ）とは日本神話において父である伊邪那岐（イザナギ）に天之尾羽張（アメノオハバキリ）で切り殺された炎の神の名だ。

「む、う！？」
「教えたるえ、このアーティファクトはグレートグランドマスターピースのアーティファクトや」
「神話の再現・・・っ」

神話の力は神の力、つまり同じく魔法世界を作った神に等しき造物主であろうと、防ぎ切るのは不可能という事だ。

「なるほど、貴様は危険だな・・・ウェスペルタティアの女王！」
「何、言うとるん？　ウチは女王やない、王妃や。王なのは、ウチ

の旦那や！！！」
「どちらでも構わん！　どの道、此処で貴様等は死ぬのだからなぁ！！！」

造物主の砲撃と、木乃香の神の炎がぶつかった瞬間、激しい衝撃波と光の奔流が戦場を支配して、数瞬の間、全ての人間から視覚と聴覚を奪い去った。

そして、人々に視覚と聴覚が戻った時、戦場には・・・・・・頭から血を流しながら造物主に首を掴まれている木乃香の姿と、全身血塗れで近くの戦艦の船体に叩きつけられたアルやナギ、ラカン、更には二代目や三代目の紅き翼の姿があり、未だに準備を終えていないアリスが・・・最後の工程を終えようとしているのだった。

第二十二話　「時間稼ぎ」（後書き）

ビジネスホテルってネット回線ありますよね？　あればネットに繋げられるけど、でも書いてる暇が無いという罠ｏｒｚ

第二十三話　「魔法使いとしての人生に終止符を」（前書き）

出張先からの投稿！！　そして寝ます。明日も仕事ですので。

第二十三話　「魔法使いとしての人生に終止符を」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二十三話
「魔法使いとしての人生に終止符を」

木乃香の放った神の炎と造物主の砲撃がぶつかった瞬間、激しい衝撃波が生じて、周囲のアヴェンジャー艦隊の殆どが壊滅状態になった。
そして、炎と砲撃の激しい鬩ぎ合いの中、木乃香は己が魔力を更に上乗せして、一気に押し切ろうとしたのだが・・・。

「っ！」

背後から嫌な気配を感じて若干だが意識が削がれてしまう。
その気配の主は・・・・・ネギだった。二代目・紅き翼に敗北した筈のネギが何故か木乃香の背後に迫ってきていたのだ。

「馬鹿な！？」

エヴァの驚きの声が聞こえるが、そんな事を気にしている暇は無い。
造物主の砲撃と木乃香の炎が鬩ぎ合っている中、ネギに背後から攻撃されたらお終いだ。明らかに理性の無くなったネギは黒い雷を纏った雷天大壮２の状態で、雷速瞬動に入り、木乃香を殺そうと爪を伸ばす。

「っ！　もう、駄目や・・・」

ネギに背後から攻撃され、造物主の砲撃に飲み込まれる未来を想像して、木乃香は目を閉じそうになった。

だが、ネギの攻撃は木乃香に届く事は無かった。何故なら二代目・紅き翼、初代・紅き翼、が盾になり、木乃香を守ったのだから。

「ガァアアアアア！！！！」

雷化したネギの身体が激しくスパークする。雷天大壮2の最強技、千磐破雷だ。しかも理性を失い魔力もオーバードライブ状態での千磐破雷なので、その威力は通常の比ではない。

「障壁を張れ！！　全力でだ！！！　王妃を守るぞ！！」

エヴァの号令と共に、紅き翼の全員が障壁を最大出力で展開する。全員が障壁を張った瞬間、ネギが障壁にぶつかり、こちらでも激しく衝撃波を生んだ。

「グゥッ！？　ぼーやめ・・・、全魔力を注いだな！？」

オーバードライブ中の全魔力を注いだ千磐破雷、その威力はナギ譲りの膨大な魔力を持つネギだからなのか、このメンバーでも防ぎきるのが難しい。

「木乃香！　お前は・・・っ！」
「ウチも、不味いわ・・・っ」

前後の衝撃波で木乃香の体力が一気に無くなり掛けている。更に言えば、木乃香の魔力も、そろそろ底を尽きるだろう。

「アリスは・・・っ、まだか!?」
「もうちょっとやろ・・・せやけど、もう・・・アカン」

炎の威力、規模、込められた魔力、その全てが見る見る減少していく。当然、造物主の砲撃はそれを好機にどんどん押してきて、遂に紅き翼たちを飲み込んでしまった。

「母様!!　エヴァおかあさん!　お祖父様!!」
「お母様!!　エヴァまま!!　お祖父様!!」
「お母さま!!　エヴァママ!!　お祖父さま!!」

明日香、木乃里、明日葉の叫びが戦場に響く。
砲撃が止んだ後、そこには造物主に首を掴まれている木乃香の姿と、近くで辛うじて飛行している戦艦に叩きつけられ、意識を失っている二代目、初代の紅き翼のメンバー達の姿があった。

「これで終わりだ、神の力を持つ女王よ」
「グッ・・・・・・せや、ね・・・」

頭から血を流す木乃香だが、その瞳からは今尚、燃え続ける炎が見える。

「む・・・?　っ!!」
「気、ついた・・・?　せや・・・これで、時間稼ぎは、終わりや」
「その通りだ」
「ぬぅっ!?」

造物主が木乃香を放してその場を離れると、造物主の居た場所に雷撃が通った。

三代目たちが目を何事かと見れば、ネギを大きく吹き飛ばし、木乃香を抱きしめ、両手に“姫”とグレートグランドマスターキーを持ったアリスの姿が、そこにある。

「アリスさん・・・」
「ありがとう・・・木乃香、もう・・・大丈夫」

慌てて虚空瞬動で近づいてきた明日香、木乃里、明日葉に木乃香を預けたアリスは、四人に背を向け、造物主と向き合う。

「父様・・・」
「明日香、お母さんを頼む」
「・・・うん」

明日香は、今でも目標である広い背中を見て、涙が溢れてきた。
いつかは追いつきたいと思っている背中が、まだ、遠く感じる。

「お父様・・・どうか、ご無事で」
「ああ、必ず帰ってくる。木乃里、だから泣くな」
「っ、泣いて、ませんっ・・・っ！　お父様を、信じて、ますか、らっ！」
「そうか」

木乃里の涙声を背に、アリスの身体が放っている白い光が更に強くなった。

「明日葉」
「お父さま・・・帰ってきたら、おんぶ、してほしいのです」
「ああ、勿論だ」

まだまだ甘えん坊な娘に苦笑しながら、アリスは一度目を閉じ、そして・・・・・・。

「行くぞ造物主!!　これが、私の人生最後の魔法だ!!」
「ぬうううっ!!!!」
「不滅(デミウル)を滅ぼせし王家(ゴス)の光」

アリスが眩い光を纏って造物主に突っ込んだ。
造物主も、ただ滅ぼされるわけにはいかないと、砲撃を放ったが、デミウルゴスの盾である完全魔法無効化によって掻き消され、障壁も意味を成さない。

「おおおおあああああああああああ!!!!!!」
「ば、馬鹿なぁあああああああああああ!!!!!!」

造物主の胸の中心に“姫”が突き刺さった瞬間、デミウルゴスに必要な要素の全てが虹色の光を放った。
アリスと造物主の姿は光の中に消え、次の瞬間、真下の地面に向って何かが勢い良く落ちて大きな振動と大量の土煙を昇らせる。

「父様!!」
「お父様!!」
「お父さま!!」

見れば、戦場になっていた空からアリスと造物主は落ちていた。
少し離れた位置に倒れるアリスと造物主の姿・・・・・・いや、いつの間にか造物主の器になっていたフィリウス・ゼクトから黒いローブが消え、完全にゼクトの姿になった人影が、そこにはある。

「お師匠!!」

「まさか・・・ゼクトが開放されたのですか？」
「マジかよ・・・じゃあアリスの野郎、勝ったのか！？」

初代・紅き翼のメンバーがゼクトの下へ急ぎ、他のメンバーはアリスの下に飛んだ。
二人の容態を調べてみると、ゼクトは意識を失っているだけで、身体に異常は無い。それどころか造物主から開放されたのだろう、禍々しい気配が一切消えていたのだ。
アリスも意識が朦朧としてはいたのだが、直ぐにシルヴィアが治療を行い、何とか体力も回復して立ち上がったのだが・・・・・。

「・・・あ」

何かに気付いたのか、アリスは“姫”を落としそうになる。
そして、ゆっくりと目の前に翳した右掌を見て、その手を何度か開いて閉じてを繰り返すと、全身から魔力を噴出そうとした。しかし・・・・・・。

「・・・これが、代償」
「アリス、さん？」

シルヴィアに治療されて何とか動ける様になった木乃香がアリスの様子を不審に思い、駆け寄る。そして、駆け寄ってきた妻に振り返ってアリスは・・・一筋の涙を流す。

「ハハ・・・・・魔法、使えなくなった・・・。魔力が、王家の魔力も含めて、無くなったよ」
「っ！？　・・・そうなんや・・・・・・」

アリスが魔法を使えなくなった。それも永遠に、完全に魔法を使

う事が出来なくなってしまった。それがアリスに課せられたデミウルゴスの代償だ。

「でも、生きていてくれた・・・それが嬉しいえ」
「そうだよ父様、魔法が使えなくなっても、父様は父様だ！」
「お父様は、魔法が使えるから素敵なのではなく、お父様だから素敵なんですから」
「それに、わたし達が付いているのですよ」

魔法が使えなくなり、ショックを受けるアリスを支える様に、駆け寄った家族の温もりを感じ、アリスはもう一度、一筋の涙を流した。

魔法が使えなくとも、アリスはアリスで、新・ウェスペルタティア王国の国王なのだから。それは、絶対不変の事実であり、アリスが今までの人生で築き上げてきた信頼なのだから。

「アリス」
「エヴァ・・・」
「やったのか・・・？」
「ああ・・・そのはず・・・・・・っ！」

アリスがエヴァの問いに答えようとした瞬間、その場に居た全ての紅き翼の人間が背筋に悪寒を感じ、更にもう一つ感じたのだ・・・・・・造物主の、禍々しい気配を。

「ま、さか・・・・・・」
『gaaaaaaaaaaaaaaaaaaaa！！！！！！！！！！』

突如響いた叫び声、それはネギの居る場所から聞こえてきた。同

時に、そこから造物主の禍々しい気配も。

「おい、おいおいおい！！　まさか奴ぁ！！！」

「クソッタレ！！　魔族になったからって、俺の息子を寄り代にしやがったのか！！？」

戦いは・・・まだ、終わってはいなかったのだった。

第二十三話　「魔法使いとしての人生に終止符を」（後書き）

感想返しは出張が終わってからします。帰るのは３１日ですね。それまではずっと横浜ですので。

第二十四話　「今、最強を継ぐ時」（前書き）

忘れてましたが、アフターストーリーの主人公ってアリスではなく、明日香と木乃里なんですよねぇ。

第二十四話　「今、最強を継ぐ時」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～
第二十四話
「今、最強を継ぐ時」

「GAAAAAAAAAAAAAAAAA！！！！！！」

造物主に憑依され、身体を乗っ取られようとしているネギの雄叫びが戦場に響き渡る。必死に自分（ネギ）を保とうとするも、造物主の魂は並みの人間や魔族の魂では勝てない。必死にネギの魂が造物主の魂に抗った結果、ネギの肉体は完全に造物主に乗っ取られてしまうのだった。

「さ、最悪だ・・・・・・」
「不味いな、アリスはもう魔法が使えん。私も木乃香も、それに初代、二代目のメンバーは魔力が限界、ラカンでは造物主に勝てん、月詠は・・・」
「無理やろなぁ～、流石にダメージを負いすぎたみたいや。体力の限界やね」

まともに戦える者がいない。その状態で、しぶとくもネギの肉体を乗っ取って生き延びた造物主に勝てるのか・・・。
『聞け、紅き翼たち！』
「アマテル様・・・？」

その時だった。マーズに乗っているアマテルからの通信が届いたのは。

『アリスの使ったデミウルゴスは確かに成功している。何故なら造物主は・・・我が父はデミウルゴスによって不滅を殺されたのじゃからな』

「不滅を、殺した・・・？」

『そうじゃ、造物主の不滅性を殺し、今や不滅の存在ではなくしておるのじゃ』

つまり、デミウルゴスを使わずとも造物主は殺せるという事になる。しかし、それでも根本的な解決にはなっていない。何故なら、造物主と戦って勝てる人間が残っていないのだから。

「・・・・・父様」

「明日香・・・？　それに、木乃里、明日葉も」

「私たちが、戦います」

「っ！？　アカン！　それはアカンえ！！　木乃里たちじゃ勝てへんから悩んどったんやから！」

明日香たちでは造物主に勝てない、それは当然のことだ。最強クラスに未だ届かない明日香たちに、最強クラスのナギ達が束になって掛かっても勝てない相手と戦って、如何して勝てるというのか。

「明日香・・・木乃里、明日葉」

「「「はい」」」

「・・・負ければ死ぬぞ？」

「覚悟の上です」

「お父様に、散々教わりましたから」

「お父さまの子供である以上、ずっとその覚悟は持っていたのです

よ」
「・・・・・なら、行って来い」
「アリスさん!?　正気なん!?」

アリスが明日香たちを造物主と戦わせようとしている。それに対して木乃香は正気を疑ったが、何故かアリスだけではなく、エヴァやナギ、それに他の紅き翼の人間全員が頷いていた。

「木乃香、子供達が心配なのは解る。それは私だって同じだ・・・でも、信じよう。私と、木乃香の子供達を・・・、その仲間を」
「アリスさん・・・」
「それに・・・」

それに、アリスは今回の魔法を失った事によって思った事があったのだ。

「もう、私たちの時代は終わったんだ。これからは、明日香たち若い世代の時代だ。だからこそ、期待したいんだよ・・・新しい翼に」
「新しい翼・・・せやね。確かに、ウチらの時代は、終わったんやろなぁ」

確かに無茶な戦いかもしれない。だけど、もしも時代が明日香たちを受け入れたのなら、もしかしたら・・・・・。

「だから、行かせてあげよう。これからの時代を作る若者に」
「・・・うん」

木乃香がやっと納得してくれた所で、アリスは“姫”を明日香に向けて差し出す。

「明日香・・・もう一度、改めてお前に“姫”と、紅き翼を託す。魔法世界の未来と、これからの時代を、お前たちに任せる」
「父様・・・・・・はい、謹んでお受けします。国王陛下」

“姫”と、それに込められた様々な想いを受け取った明日香は、後ろを振り返る。
既に杖とホウマノツルギを構えた木乃里、鬼を背後に従えてオリハルコン製の扇を持つ明日葉、両拳をぶつけて不敵な笑みを浮かべるリューガ、杖を手に微笑むメルシィ、彼等が明日香を待っていた。

「みんな、厳しい戦いになるけど・・・付いて来てくれるかな？」
「私は、いつでもお兄様と共に戦うと誓ってます。今更ですよ」
「わたしも、お兄さまとお姉さまと共に戦うのですよ」
「俺は明日香と木乃里の背中を守るって、最初から決めてるからな。聞くまでも無ぇだろ」
「明日香様に拾われてからずっと、覚悟は出来ています」

三代目の翼たちは、皆が気合充分。造物主という強大な敵と戦う事になったというのに、その瞳からは確かな輝きが見て取れる。

「多重詠唱！　ブルグ・ブルーグ・ブレイジング　契約に従い　我に従え　高殿の王　来たれ　巨神を滅ぼす燃え立つ雷霆　百重千重と重なりて　走れよ稲妻／契約に従い　我に従え　炎の覇王　来たれ　浄化の炎　燃え盛る大剣　ほとばしれよ　ソドムを焼きし火と硫黄　罪ありし者を　死の塵に／契約に従い　我に従え　闇の女王　来たれ　終焉を司りし夜の支配者　絶望と憎しみを喰らいて覆い尽くせ　嘆きの闇」

それは、明日香が制御出来ない為に封印していた術式武装であり、嘗てはアリスも封印していたもので、森羅万象を除けば最強の術式

武装でもある。

「千の雷！　燃える天空！　闇の抱擁！　術式混合固定！　黄昏の剣、魔法付与！！　術式付与完了・・・是、“嘆きの焔雷姫”！！」

だが、今回ばかりは制御する自信があった。最強の術式武装、“嘆きの焔雷姫”を制御することが出来るという、確かな確信が。

「グゥウゥウゥウゥッ・・・！！　ハァッ！！！」

“姫”の刀身が黒い雷を纏った黒い炎に包まれ、その膨大な力に制御を持っていかれそうになった明日香だったが、気合を込めて魔力を更に込めてコントロールを得ると、術式武装を教わって初めて“嘆きの焔雷姫”の制御に成功するのだった。

「出来た・・・」

「見事だ、明日香。見事な嘆きの焔雷姫だよ」

「父様・・・」

「その術式武装を使いこなせれば、お前は最強クラスへ足を踏み入れる事になる。この戦いで、私達の領域に来い・・・待ってるよ」

明日香、最強クラス辿り着き掛けている。明日香だけではない、木乃里も、明日葉も、リューガも、メルシィも、最後の戦いを前にして、その失われない戦意がそれぞれの才覚を爆発的に開放しようとしていた。

「さぁ行け、明日香・・・三代目・紅き翼！！　初代と、二代目の意思と、最強を継いで来い！！」

「はい！！　さぁ！　行こう！！　皆！！！」

『応！！』

姫とテンマノツルギを構えた明日香が、ナギの杖とホウマノツルギを構えた木乃里が、木乃香から譲り受けたオリハルコン製の扇を構え鬼を従える明日葉が、両拳を打ちつけて気合を入れたリューガが、杖を構えて真っ直ぐ己が戦場を見据えるメルシィが、それぞれ黒い魔力を噴出しながらも、王家の魔力を全身に纏った造物主（ネギ）に向って飛び立った。

「グゥ、ガァアア！！！　オノレ・・・ヨクモ、ワレヲ・・・フメツヲ・・・・・」

「啼け！！　轟く焔の嘆き！！！　闇雷黒焔破！！！！」

「ヌゥッ！！　ザコガ！！　チョウシニノルナ！！！」

「あら、先ほどよ動きが鈍いみたいですね・・・では、開放！！　こおるせかい！！！」

明日香が放った闇雷黒焔破を掻き消した造物主（ネギ）だったが、やはり不滅性を失い、更にデミウルゴスの影響が未だ魂に残る状態で魔族の肉体であるネギの身体を乗っ取ったのはきつかったらしい。

明らかに、造物主（ネギ）の動きは先ほどの造物主（ゼクト）よりも鈍く、簡単にこおるせかいの餌食となって氷の内側に閉じ込められてしまう。

「まだまだ行くぜオラァ！！！　ラカン・ギガ・インッパクトォォォォオオオオオオオ！！！！！！！」

「高速詠唱！　闇の吹雪！！」

リューガが放った気と、メルシィが放った闇の吹雪が、氷の中で身動きの取れない造物主（ネギ）に氷を粉砕しながら直撃した。

リューガとメルシィの攻撃を受けて、先ず困惑したのは造物主（ネギ）が王家の魔力で魔法も気も無効化出来なかった事だ。こおるせかいも、闇の吹雪も、気も、全て無効化出来る筈なのに出来なかった。

「当たり前ですよ。だって、私が放ったこおるせかいの術式が込められた宝石には、私の王家の魔力が込められていたんですから」

王家の魔力で王家の魔力を中和した、そういう事だ。本調子の造物主（ネギ）だったのなら、魔力の質から考えて木乃里の魔力の方が負けてしまうのだが、ネギの身体を乗っ取って、本調子ではない今の造主（ネギ）が出せる王家の魔力など、純度が低い。

水に例えるなら、本来の造物主やアマテルが持つ王家の魔力を純水だとして、アリスや明日香、木乃里、アリカ、アスナが持つ王家の魔力は水道水、今の造物主（ネギ）の王家の魔力は泥水と言った所だろう。

「オ、オノレェエエエ！！！」

「さあ！　とうとう滅びる時だ！　造物主！！　新ウェスペルタティア王国第一王子、明日香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシアの名において、貴様を滅ぼす！！」

第二十四話　「今、最強を継ぐ時」（後書き）

次回、遂に決着！！　そして……。

第二十五話　「不滅の最期、戦場を駆ける新しい翼」（前書き）

３７年もの長きに渡る完全なる世界と、造物主との戦いに終止符です。

第二十五話　「不滅の最期、戦場を駆ける新しい翼」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二十五話
「不滅の最期、戦場を駆ける新しい翼」

二体の鬼を背後に従えた明日葉が両手にオリハルコン製の扇を構え、八咫烏（ヤタガラス）に乗って造物主（ネギ）に接近した。

「五行満つる星、陰陽の円、我は請う。万物の理に則り、示せ・・・・・これが、私が使える最大の術なのです！！　解！！！」

明日葉の前に展開された陰陽術では代表的な五方星の陣、そこから放たれるのは陰陽木火土金水の力、即ち闇、光、風、火、地、雷、水の力・・・万物を構成する自然界の力だ。

「コ、コノヨウナ、キュウセカイノコットウマジュツゴトキニ！！！」

「骨董魔術とは失礼なのですよ。陰陽術は日本の伝統、古来から脈々と継がれてきた由緒ある素晴らしい術なのです」

「ザレゴトヲ！！」

迫る陰陽五行の力を避けながら、造物主（ネギ）は砲撃を明日葉へ向けて放つ。だが、その程度の砲撃、意味は無い。

明日葉は確かに王家の魔力を持っていないが、この場には王家の魔力を持つ者が二人もいるのだから。

「人の妹に、無粋な砲撃を向けないで欲しいな」
「万死に値しますよ」

王家の魔力を全開にして完全魔法無効化状態にした明日香と木乃里が造物主の砲撃を掻き消し、その背後からリューガとメルシィが迫ってきた。

「オラァ！！！　ラカン！！　適当に右パンチ！！！！」
「氷神の戦槌！！」
「グォオオアアア！！！！」

背後から気で構成された特大の右パンチと、氷神の戦槌の直撃を受けた造物主（ネギ）は前のめりにバランスを崩し、決定的な隙を生んだ。

「木乃里！！」
「はい！　お兄様！！」
「「無極而太極斬！！！！」」

明日香と木乃里、二人が放った魔法無効化の斬撃が、造物主（ネギ）の魔法障壁を完全に掻き消し、両腕を根元から切り落とす。

「ガァアアアアア！！！！」
「全員！　合わせろ！！」

魔法障壁を失い、両腕すらも無くなった造物主（ネギ）に最期のトドメを刺すべく、明日香たちは最後の攻撃をする為、詠唱の準備に入った。

「ブルグ・ブルーグ・ブレイジング！　契約に従い　我に従え　高殿の王　来たれ　巨神を滅ぼす　燃え立つ雷霆　百重千重と重なりて　走れよ稲妻！！」

「フロム・フルーレ・ル・リフレイン！　契約に従い　我に従え
天界の王　来たれ　浄化の恵み　命の輝き　現世に育まれし　光の
象徴！！」
「ミグ・モル・メイグ・モラトリアム！　契約に従い　我に従え
氷の女王　来たれ　とこしえのやみ　えいえんのひょうが　全ての
命ある者に　等しき死を　其は安らぎ也！！」
「ラカン・特大・・・！！」
「五行満つる星、陰陽の円、我は請う。万物の理に則り、示せ！！」

それぞれが、自身の最強の技、魔法、術の準備を終え、体勢を整えて反撃しようとしている造物主（ネギ）にトドメを刺す。

「千の雷！！」
「無限の光！！」
「おわるせかい！！」
「ギガ・インッパクトォオオオオ！！」
「解！！」

放たれた五つの魔法、気、陰陽術、その全てが一つとなって造物主（ネギ）に迫る。

「ナメルナァアアアア！！！」

造物主（ネギ）が残された力を振り絞って全力の障壁を展開すると、三代目・紅き翼の攻撃を完全に受け止めてしまった。
だが、それでも威力があった為、造物主（ネギ）は障壁を展開しながらも後ろに押され、受け止めるだけで精一杯になり、純度の悪すぎる王家の魔力では無効化すら出来ないので、受け止めたまま膠着状態になる。

「グォオオオオオオオオ！！　っ！？」

何とか押し返そうと力を込めた造物主（ネギ）だったが、その視界の隅に見えたものに驚愕した。

「これで、終わりだあああああああ！！！！！」

「バ、バカナアアアアア！！！！？？？？」

“姫”を構えた明日香が、造物主（ネギ）の前に瞬動で現れ、心臓目掛けて突き刺した。“嘆きの焔雷姫”となった状態なので、突き刺さった所から黒い炎と雷に焼かれ、血すらも焦がされる。

「術式、開放！！　千の雷！！　燃える天空！！　闇の抱擁！！」

「オ、オノレ・・・オノレ！　オノレェエエエエエエエエ！！！！！！」

体内から千の雷、燃える天空、闇の抱擁を開放され、造物主（ネギ）の身体は爆散して、血潮も、肉片すら残さず、その魂まで、完全に、この世から消滅した。

「・・・・・終わった？」

目の前で消滅した造物主（ネギ）に、明日香は少し呆然と呟きながら背後を振り返った。そこには恐らくは今の明日香と同じ表情なのであろう呆然とした表情の木乃里、明日葉、リューガ、メルシィの姿と、その向こうには真剣な表情をして明日香達を見ている初代、二代目の紅き翼のメンバーが居る。

「皆・・・」

「お兄様・・・」

「お兄さま・・・」
「明日香・・・」
「明日香様・・・」

誰もが、造物主（ネギ）が死んだという事を信じられなかったのだが、その時、マーズから確かな知らせとなる通信が届く。

『お疲れじゃったな、明日香、三代目・紅き翼・・・造物主は、今、完全に滅んだぞ』
「っ！　じゃ、じゃあ！」
『うむ、明日香たちの、勝利じゃ』
「っ！！　や、やったぁーー！！」
「お兄様！！」
「やったのです！！」
「いよっしゃぁああ！！」
「よかった・・・！」

大空に剣や杖、扇が舞う。三代目・紅き翼は皆が一様に全身で喜びを示し、明日香に駆け寄って勝利を噛み締めていた。
そんな若い翼たちの様子を眺めていた初代、二代目の紅き翼たちは、苦笑しながらも造物主に勝利した新しい翼に、その確かな功績に喜びを表し、アリスと木乃香は抱き合いながら子供達の成長を、少し寂しいと思いながらも、喜んでいる。

「明日香、木乃里、明日葉、リューガ、メルシィ」
「あ、父様・・・」
「お疲れ様や」
「お母様・・・」

三代目に歩み寄ってきたアリスと木乃香に、明日香たちは少し緊

張の面持ちで対面した。流石に勝ったからとはしゃぎすぎてしまったのかと、緊張するメンバーだったが、待っていたのは満面の笑みを浮かべるアリスと木乃香、それと、その後ろで同じように笑みを浮かべる初代、二代目のメンバー達だった。

「強くなったね、明日香、木乃里、明日葉・・・それに、リューガも、メルシィも」

「まだまだな所もあるけど、もう5人とも、最強クラスの仲間入りや」

「え・・・最強クラスに・・・？」

「私達が・・・」

まだ下位とはいえ、明日香たちは間違いなく最強クラスに足を踏み入れた。特にメルシィなど、中級クラスから一気に最強クラス下位まで上り詰めた事になる。

「造物主を倒した・・・弱っていたとは言え、これは立派な功績だ。さぁ、帰ろう・・・王国へ」

「・・・はい！」

こうして、戦いは終わった。

魔法世界の未来を賭けた三度目の戦いは、三度目もまた、紅き翼に祝福の風を齎し、勝利を捧げたのだ。

明日香はマーズに戻る前に、もう一度、最後の戦いの場を振り返り、造物主を、そしてネギを倒した場所を眺め、今度こそマーズに戻るのだった。

第二十五話　「不滅の最期、戦場を駆ける新しい翼」（後書き）

次回と、その次が最終話になります。

第二十六話　「戦後処理」（前書き）

明日は会社に寄ってから店だ～…忙しいぜ。

第二十六話　「戦後処理」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

第二十六話
「戦後処理」

戦争が終結し、先ず行われた事は戦死した兵士達への表彰と葬儀、親族への慰問だった。アリスと木乃香が代表となって全てを終わらせると、次に戦争で新ウェスペルタティア王国に協力してくれたヘラス帝国、新メガロメセンブリアへの正式な礼状作りと今回の戦争で二国が負った被害の補償だ。
そして、それらが全て終わって初めて、始まる。今回の戦争の原因でもある女性・・・アヴェンジャー首領にして第一級戦争犯罪者、綾瀬夕映の裁判が。

「第一級戦争犯罪者、綾瀬夕映、先ずは被告人の申し開きを聞こう」

新ウェスペルタティア王国の裁判の間、その玉座にはアリスと木乃香が座り、その周りを重役や王国騎士団、騎士団長たちが囲み、更には通信によって魔法世界各国の代表者たちが裁判の様子を見ている。
アリス達が見下ろす先には両手を魔法封印の術式処理が施された手錠で繋がれ、同じ処理を施したアンクレットで足を拘束され、両脇に立つ騎士が交差させる剣の間に顔を挟まれた夕映の姿があった。

「っ！　これで、勝ったつもりですか・・・」
「つもりではない。勝ったんだ・・・そして、お前は戦争犯罪者と

して拘束され、こうして裁判に掛けられている」
「ふん・・・ネギ先生を殺したのは、貴方の子供ですか」
「そうだ、魔法世界の、これからを背負う新たな翼たちだ」

ギリッ、という音を立てて夕映が歯軋りをした。

「申し開きは？」
「何も言うことは無いです。私は今も認めないですよ・・・アリス・S・エンテオフュシア、貴様など、この世の害悪でしかないと、今でも思ってるですからね」
「そうか・・・」

夕映は今尚、アリスをこの世の害悪と言い、己が罪を認めない。故に、最初からそうだが、情状酌量の余地は無いという事だ。

「言い渡す。第一級戦争犯罪者、綾瀬夕映。汝に極刑を言い渡す、一週間後、ケルベラス渓谷にて魔法世界全土への映像配信の下、公開処刑に処す」

アリスが出した判決、それは戦争犯罪者には当然の判決ではあったが、嘗ての教え子に出す判決としては、やはり重く、辛いものだった。

「（この歳になって、若い頃より感傷的になった、かな）・・・・・・これにて、裁判を終了する」

もう、麻帆良で教師をしていた頃の自分など、切り捨てたとばかり思っていても、この歳になると、どうしてもあの頃の思い出が懐かしく感じて、時々だが思うのだ・・・・・・嘗ての３－Ａの皆と、一度でいいから会って、近況を知りたいと。

「極刑ですか・・・上等ですよ。死してその後も、永遠に呪い続けてやるです」

こうして、今尚、恨み言を言い続ける夕映の事も、国王としてのアリスとは別に、一個人のアリスとしての自分が考えるのだ・・・教え子に、こんな判決を下さねばならない辛さを。

「連れて行け」

だが、そんな自分を表に出す事無く、アリスは王国騎士団員に夕映を王城地下にある重犯罪者専用の特別牢獄へ連れて行く様に命じる。

連れて行かれる夕映の後ろ姿を眺めながら、アリスは誰にも気付かれる事なく、小さな溜息を吐いた。

「・・・・・」
「アリスさん？」
「・・・ん？　木乃香、どうかした？」
「なんや、辛そうな顔してたえ？」
「そっか・・・顔に、出てたんだ」

他にも臣民が居る中で、何時までもこんな情けない表情をしている訳にもいかないので、気を引き締める。

それからアリス達は、この後遅くまで夕映の公開処刑までの段取りを進め、ケルベラス渓谷の方に人を遣って処刑準備を行う為の手続きを行うのであった。

第一級戦争犯罪者、綾瀬夕映の公開処刑当日、明日香たち三代目・

紅き翼もまた、ケルベラス渓谷に来ていた。
今回の戦争の最大の功労者として勲章を受けた明日香たちには、今回の処刑に立ち会う権利を与えられているのと、明日香と木乃里、明日葉は立場的にこの場に居なければならないのだ。第一王子と第一王女、第二王女なので、この国にとっては重役も同じ。

「そろそろ始まるね・・・」
「どのような顔で、この場に来るのでしょうね」

明日香と木乃里は綾瀬夕映がどんな顔をして、この処刑場に来るのか、予想は凡そだが出来ていた。
そして、漸く王国騎士団に周囲を囲まれてケルベラス渓谷に連行されてきた夕映の表情は・・・明日香たちの予想していた憤怒の表情ではなく、無表情であった。

「無表情なのです」
「だな、意外だぜ」
「もう少し、現状に怒りを見せているのかと思ってましたけど」

明日葉、リューガ、メルシィもまた、明日香や木乃里と同じ事を考えていたらしい。だからこそ、三代目・紅き翼は今の夕映の表情が信じられなかった。

「それでは、これより第一級戦争犯罪者、綾瀬夕映の公開処刑を行う！！」

アリスが公開処刑開始の宣言をして、映像で繋がっている魔法世界全土の人間が息を呑んだ。
嘗て、３５年前にアリスの母、アリカが立った場所と同じ場所に、夕映が立ち、その後ろを王国騎士が逃げられない様に槍を向けて立

っている。

「最後に、何か言い残す事はあるか？」

「・・・・・そうですね。のどかに、これからも幸せにと、伝えてください」

「判った」

「それから・・・」

親友であったのどかに、これからも幸せであるように、そう伝えて欲しいと言って、それから・・・。

「新ウェスペルタティア王国に、呪いあれ！！！！」

最期に、新ウェスペルタティア王国に最大限の呪詛を叫び、勢い良く夕映は谷底に飛び降りた。

谷底で待ち構えていた魔獣は、飛び降りてきた夕映を空中で口の中に入れ、そのまま咀嚼する事無く飲み込んでしまう。

こうして、魔法世界の命運を左右するまでに発展した戦争を起こした戦争犯罪者、綾瀬夕映は３３歳という若さでこの世を去った。

この世と、新ウェスペルタティア王国、アリス・Ｓ・エンテオフュシアへの、憎しみと恨み、呪詛を吐き散らしながら・・・。

「最期の最期まで、私を恨んで逝ったんだな・・・綾瀬」

最後に、アリスは嘗ての教え子の最期に、複雑な想いを胸に抱き、静かに黙祷を捧げるのであった。

「お父様・・・お辛そうですね」

「父様にとっては、嘗ての教え子だったってのも、あるだろうからね」

「お父さま・・・」
「本当に、陛下はお人好しだよな・・・まぁ、それがアリス陛下の良い所か」
「本当、そうですね」

黙祷をするアリスを眺める明日香たちは、これで漸く、本当の意味で戦争が終わりを告げたのだと悟り、今まで肩に圧し掛かっていた重圧が、一気に開放された様な気がした。

そして、時は未来へと向って動き出す・・・・・・。

第二十六話　「戦後処理」（後書き）

次回、遂に最終回！！　長かった英雄と女王の子シリーズも、堂々の完結！！

最終話　「未来への翼」（前書き）

遂に、英雄と女王の子シリーズ最終話！！　これで本当に終わりです。

最終話　「未来への翼」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

最終話
「未来への翼」

アヴェンジャーとの戦争から随分な時が経った。魔法世界は戦争の爪痕を乗り越え、更なる発展を遂げ、一度は滅びたアリアドネーもまた、生き残りが再建を果して無事に復活している。

「陛下・・・おい、陛下！　いい加減に仕事に戻れ明日香陛下！！」
「う、うわぁ！？」
「まったく、王位を継承して間もないとは言え、お前は既に国王なのだから、もう少し確りしろ」
「は、はい・・・エヴァおかあ・・・っと、エヴァンジェリン宰相」

そして、ここ新ウェスペルタティア王国もまた、時代の流れと共に変化した。
初代国王のアリスは引退、王位を息子である明日香に継承させて隠居し、二代目国王として明日香が玉座に座った。明日香・S・K・エンテオフュシア、まだ２５歳での王位継承だ。

「で、でも・・・父様も気が早いよね。あの戦争で魔法を失って、１０年で引退だなんて」
「・・・そうだな、アイツもまだ４５歳だ。まだまだ国王として現役で行けたのだろうが・・・何か思うところがあったのだろう」

隠居してからのアリスと木乃香は王城の片隅で静かに毎日を過ごしていた。

もう二度と、戦場に出る事の無いアリスと、そんなアリスを支える為に同じく戦いを捨てた木乃香の二人、時々は国王になったばかりの明日香を助けたりするが、それ以外のときは殆ど旅行をしたり、デートを楽しんだりと、自由気ままな生活をしている。

「実は、自由に楽しみたかっただけだったりしないよね？」

「・・・無いとは、言い切れんのが、な」

明日香の問いに、エヴァは一筋の汗を頬に流し、目線を逸らした。

「そ、それよりだ。明日香陛下、今後の予定だが・・・・・・まず一ヵ月後には結婚式が迫っている」

「結婚式・・・そっか、もうそんな」

「アイツも・・・メルシィも楽しみにしているだろうさ」

「だと、いいな」

そう呟いて、明日香は手元の写真に目を向ける。そこにはリューガに肩を抱かれ、幸せそうな笑顔を浮かべる木乃里の姿が写っていた。

「木乃里がリューガと結婚して、ウォンバット公爵夫人になってから、もう半年か」

「早いなぁ・・・そう言えば明日葉もそろそろ結婚を考えてるって手紙で言ってたよ」

「アイツも結婚か・・・ふん、時が経つのは本当に早いものだ」

半年前、木乃里はリューガと結婚した。それからは王城を出て近くに領地を新たに与えられたウォンバット公爵家で暮らしている。

「それに、明日葉も、そろそろ結婚を考えているみたいです」
「ほう？　明日葉もか・・・そうか」

明日香と木乃里の妹、次期関西呪術協会長になる事が決まっている明日葉もまた、結婚を考えているらしい。そのような話を、以前届いた手紙に書いていたのだ。

「まぁ、今度はお前とメルシィの子供の世話でも、させてもらうさ」
「お願いします」

宰相の顔から、一気に母親の顔になったエヴァに、明日香は頭を下げるのであった。

ウォンバット公爵家の屋敷、そのリビングにはソファーに座って紅茶を飲む木乃里と、その視線の先で筋トレをしているリューガの姿があった。

「平和なこの時代なのに、頑張るわね」
「まぁ、な！　師匠からは、毎日続ける様に、言われてるんだよ！」
「そうなの・・・」

戦争が終わり、明日香が国王に就任して木乃里とリューガが結婚して、三代目・紅き翼は解散した。

解散後、リューガは師であるラカンが団長を務める第一騎士団に入団して騎士になり、明日香は国王、木乃里は公爵夫人、明日葉は旧世界で長になるために更なる勉強、メルシィは王城でシルヴィアに弟子入りして財務官見習いをしている。

「あまり無理しないでね？　来月にはお兄様とメルシィちゃんの結婚式なんだから」
「おう・・・それより、来月の結婚式、お前は出席出来るのか？」
「ん～・・・まだ予定日は先だから、問題ないかな」

リューガが心配そうに視線を向けたのは木乃里の下腹部、そこは少し膨らんでおり、木乃里の中に新たな命が芽吹いている事を表していた。

「明日葉ちゃんが結婚をいつするかによって、出席出来るか否かが関わるけど」
「そっか・・・しかし、俺も親父かぁ・・・・・・そうだ！　折角だし生まれた子には確りと筋トレをさせようぜ！」
「・・・・・・女の子よ？」
「・・・・・・あ～・・・筋肉質の女に育つのも問題か」

リューガの脳裏に、木乃里に似た筋肉質な女性のイメージが浮かんで、そのイメージを振り払った。

「ま、次に生まれたのが男なら筋トレをさせるか！」
「つ、次って・・・」
「頑張ろうぜ！」
「・・・もう、生むのは私なのに」

ラカンみたいな笑顔で笑うリューガに、木乃里も自然と笑いが込み上げてきて、同時にそんな夫に対する愛おしさが胸を占め、幸せを感じてしまう。
木乃里とリューガ、三代目の中で一番早く結婚した二人は、今が一番幸せな時なのであった。

旧世界は日本、京都にある関西呪術協会総本山、近衛家の屋敷の一室にて、明日葉は兄の結婚式の招待状を机の片隅に置き、以前に祖父である詠春から貰ったお見合い写真を眺めていた。

このお見合いの席で出会った男性とは、今も良いお付き合いをしており、明日葉も彼となら結婚をするのも満更ではない様子で、今はプロポーズを待っている様なものだ。

「・・・・・で、何で此処にいるのです？　メルシィさん」

「明日葉様・・・その、ごめんなさい」

「貴女は来月に迫ったお兄さまとの結婚の為の準備がある筈なのです」

「シルヴィア様が、少し息抜きに旧世界にでも行って来いと仰いまして・・・」

そして、旧世界に来たのは良いのだが、旧世界にあまり良い思い出の無いメルシィは嘗ての仲間である明日葉のところに来たという事だ。

「あの・・・」

「まだ、怖いのです？　お兄さまと結婚することが」

「いえ・・・その、怖いというより・・・まだ、信じられなくて」

「プロポーズまでして頂いて何言ってるのですか・・・」

未だ、自分はプロポーズをされていないというのに・・・。などと呟く明日葉は、少し嫉妬しているのかもしれない。

「私が、王妃になるなど・・・明日香様は立派にアリス様の後継者に相応しい国王になられましたが、私は木乃香様の様な王妃には・・・・」

明日香がアリスの跡を継いで、立派に国王をしているのを見て、メルシィは自分が明日香と結婚すればアリスの妻であり、前王妃であった木乃香の跡を継ぐという事なのだと今更ながら思い知り、それで不安がこみ上げてきたのだ。

「誰も貴女にお母さまの真似をしろなんて言っていないのですよ・・・寧ろ、お母さまはそんな事をメルシィさんに求めていないのです。貴女は貴女でしかなく、お母さまではないのですから、貴女らしい王妃になればそれで良いと思うのですよ？」

「そうでしょうか・・・」

「そうなのです」

木乃香の事をよく知る娘が断言するのだから間違いない。

「お兄さまの妻になって、直ぐに王妃としての完璧さなんて、誰も求めていないのです。ゆっくり、時間を掛けて良いのですよ・・・それよりも大事なのは、お兄さまと幸せになる事なのですから」

「明日葉様・・・」

「私から言えるのはこれくらいなのです」

「・・・ありがとう、ございます」

メルシィよりも年下なのに、明日葉の方がお姉さんに見えてしまう光景なのだが、明日葉は明日葉で義姉になるメルシィを確りと立てていた。

メルシィが、これから王妃としてやっていける様に、義姉に対して、義妹として・・・。

魔法世界某所、人気の無い荒野の一角に立つ二つの人影、アリス

と木乃香の姿がそこにはあった。

「アリスさん・・・」
「ん？」
「大丈夫？」
「ああ・・・まだ、身体に影響は無いよ」
「ほんなら、ええねんけど・・・」

４０代半ばに差し掛かったアリスだが・・・その見た目は随分と老け込んでいた。魔法を失ってからの１０年で、アリスは色々と変わってしまったのだ。

例えば魔法を使えなくなったので、気をメインにしたトレーニングをしたり、例えば急に老け込んだり、例えば・・・今までの戦いの古傷、特に究極身体強化魔法である無我の境地を使い続けた影響が、身体に出てきたり。

「無我の境地、まさかこんな副作用があったなんてなぁ」
「仕方が無いさ・・・どんなモノにも、代償は必要だ」
「せやけど・・・」
「無我の境地の副作用は、使用すればするほど、寿命を縮める。知っていて使ってきたのだから、自業自得さ」
「それ、ウチには教えてくれへんかったよね」

アリスに残された寿命は、アルが見た限りだと短くて１０年、長くても２０年は生きられないという事だった。

「無我の境地を戦闘に使う事は、私も、子孫も、この先、使う事は無い。私が最初で最後さ・・・無我の境地で寿命を縮め、早死にするのは」
「ウチは、如何したらええの？　アリスさんに先立たれて・・・そ

の先は」
「王国を頼むよ。明日香たちを支えて、ゆっくりしてくれ・・・私も、のんびりと待ってるから」

涙を流す木乃香の肩を抱き、アリスは地平線の向こうに目を向ける。その先にあるであろう新ウェスペルタティア王国の未来と、魔法世界全ての未来は・・・きっと、平和が長く続くと信じている。

「私達の世代がこの世を去った後は・・・」

きっと、いつかまた戦争が起きて、魔法世界の人類は戦いを始めるのだろう。だけど、新ウェスペルタティア王国だけは、滅びる事は無い。

「最強の魔法使いがいるからね・・・」

最後に空を見上げたアリスは・・・翌月に迫った息子の結婚式のことを考え、どこか嬉しそうな、誇らしそうな顔をしていた。

「さあ、帰ろうか木乃香・・・帰って明日香の結婚式の準備、しないとね」
「せやね・・・帰ろう」

木乃香が発動した風の転移魔法でその場を去った二人、その場には一つの花束が添えられた小さな墓があった。
墓石に書かれた文字は・・・・・・“ネギ・スプリングフィールド”だった。

そして、１００年以上の年月が経った魔法世界では、いまだに長

い平和が続いていた。
新ウェスペルタティア王国を中心に魔法世界の国々が手を取り合い、いつまでも平和を保とうとする人々の努力の結果は、嘗ての英雄が夢見た世界を築いている。

「全く・・・お前達の子孫は凄いな」

１００年以上前に封印が解かれ、改装された墓守人の宮殿にある王家の墓、その墓前に立つ金髪の女性・・・新ウェスペルタティア王国宰相、エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェルは、その墓に眠る嘗ての仲間や、自分にとっても子供の様な存在だった者たちに語りかけていた。

「なぁアリス・・・お前があの戦争の２５年後に死んで、それから明日香がアリスの意思を継いで、その後も子孫達がお前の意思を継いで、今も平和を保っているぞ」

新ウェスペルタティア王国王家の墓、そこに書かれた初代国王の文字と、国王の名であるアリス・Ｓ・エンテオフュシアの文字に指を這わせたエヴァは、少し寂しそうな顔をする。

「お前達の子孫は勿論、私も、元気だぞ・・・アリスが死んで、木乃香が死んで、二代目・紅き翼のメンバーが全員死んで、その後も・・・明日香が、木乃里が、明日葉が、木乃亜が、リューガ、メルシィが死んで、それでもずっと、王国でアリスの意思を見守ってきた。でもな、時々思うんだ・・・また、お前に会いたいと」

嘗て愛した男が死んでから１００年以上経つのに、エヴァの心は未だにアリスを求めていた。だが、それは既に叶わぬ想い。所詮は死者に対する想いでしかないと、エヴァ自身も理解していた。

「弱音を吐いたな・・・いや、此処でくらい、許されても良いよな、そうだろう？　アリス・・・木乃香、みんな」

大人の女性の姿から子供の姿に戻って、エヴァは涙を流した。

この場に来ると、いつもエヴァは涙を流している。自分を置いて死んでいった仲間達や愛した男、自分の子供の様に可愛がっていた者達を思い出して。

「また、来るぞ・・・」

暫く泣いていたエヴァは、涙を拭い宰相の顔に戻る。

振り返る事なく墓所を去ったエヴァの後姿を、確かに見ている者が居た事に、彼女は気付かない。赤み掛かった長い金髪を三つ編みにして、金色の刺繍で翼を描いた模様が入ったローブを纏う男が、エヴァの後ろ姿を見て微笑み、ゆっくりと溶ける様に消えていった。

最終話　「未来への翼」（後書き）

とうとう完結です。後は残っているコラボを書いて、少しだけ番外編として明日香が国王になってからの話と、アリスが死ぬ時の話を書こうかなと考えてます。

初代、二代目・紅き翼のその後（前書き）

番外編は現在執筆中です。もうしばらくお待ち下さい。

初代、二代目・紅き翼のその後

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

その後

・アリス・Ｓ・エンテオフュシア　享年６０歳
　アヴェンジャーとの戦争が終わってから１０年、国王として新ウェスペルタティア王国を統べていたが、４５歳の時に息子である明日香に王位を譲り隠居、同時に戦闘者として完全に引退した。
　そして５５歳の頃から無我の境地を使い続けた後遺症で寿命が短くなった事が原因と思われる急激な身体の衰えが始まり、手足が少しずつ動かなくなり、最後には寝たきり状態になって、６０歳の誕生日を迎えると同時に、愛妻達や子供達、孫達に見守られながら息を引き取った。

・木乃香・Ｓ・Ｋ・エンテオフュシア　享年８９歳
　夫であるアリスの死後も王国の行く末を見守り続けた。そして８０歳になった頃から心臓に病を抱え、長い闘病生活を送るも、８９歳という年齢を迎えるまでにこれまでの闘病中も木乃香を生きながらえさせていた膨大な魔力が衰え、遂に彼女の生命力を魔力で支えきれなくなって息を引き取った。

・シルヴィア・オーギス　享年７５歳
　アリスとの間に生まれた２人の子供達が結婚して、孫も生まれて、６５歳の時に財務大臣を正式に引退する。
　その後は国内にある魔法学校の校長に就任して多くの生徒に対して宝石魔法の基礎について教鞭を取り、優秀な魔法使いや宝石魔法

使いを輩出していった。だが、７５歳の時に教え子の宝石魔法の実験中に起きた事故で生徒を守り命を落とした。

・大河内アキラ　享年８０歳

アリスとの間に三人の子を授かり、孫まで生まれて幸せな生活を送る。身体の衰えもあり、５０歳の時に前線に出て戦うのを止め、第二騎士団長を引退した。

第二騎士団長を引退後、王国騎士養成学校の校長に就任して未来の王国騎士団員の育成に携わり、７５歳まで校長を務める。そして、８０歳の時に老衰によってこの世を去った。

・相坂さよ　享年９６歳

二代目・紅き翼の人間で最も長生きした女性で、アリスとの間には二人の子をもうけた。第三騎士団長をアキラと同じく５０歳まで務め、引退後は特に何かをしていたという事は無いが、王城でエヴァと共に明日香のメルシィの子、孫の世話をしていた。

９６歳になった頃にホムンクルスである肉体が劣化を始め、そろそろ限界だと感じたので、肉体と魂を擬似的に繋いでいた擬似精神を断ち切り、この世を去る。

・月詠　享年７０歳

二代目・紅き翼の人間の中で唯一、生涯現役で戦い続けた女性で、アリスとの間に生まれた子の数は１人。アリスの引退後は明日香の護衛として永く護衛部隊の隊長を務めていたが、７０歳の時に明日香を狙った暗殺者と戦って、その時に年齢による身体の衰えの為か、明らかに格下が相手だというのに、相打ちになり命を落とす。

・タカミチ・Ｔ・高畑　享年６９歳

ダイオラマ魔法球を使いすぎたのが原因か、早く老化が始まり、煙草も原因なのだろう、６９歳の時に肺癌でこの世を去る。

・エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル
　初代、二代目、三代目の紅き翼たちの死後も行き続け、現在も王国の行く末を宰相として見守っている。

・絡操茶々丸
　エヴァと同じく現在も王国電脳空間の観察者として王国を見守っている。

・ペルシクム・Ｓ・エンテオフュシア
　アリスの死後、エヴァを主として改めてドール契約を結び、アリスの子孫を見守り続けている。

・ジャック・ラカン　享年？
　いつの間にか死んでいた男。その死に様はやはりこの男らしく、騎士団寮にある自室で、立ったまま、握り拳を構えて死んでいたらしい。

・アルビレオ・イマ
　死んだという話を聞かない。寧ろ、王国中央図書館の史書長の欄にアリス達の死後１００年以上が経っても名前が残っている。つまり、姿を見せなくなったものの、生きてはいるらしい。

・ナギ・スプリングフィールド　享年９９歳
　随分と長生きした男だが、その長生きの秘訣は気合、らしい。ラカンと同じく、この男も気合で何とかなるらしい。

・アリカ・Ａ・Ｅ・スプリングフィールド　享年７８歳
　ナギよりは早く亡くなったが、最期はナギの腕の中だったので、幸せそうな顔で逝ったと、死を看取った者は口々に言う。

・近衛詠春　享年６７歳
長の座を明日葉に譲ってからは妻である木乃美と夫婦水入らず、のんびりとした隠居生活を送っていた。
６７歳の時に肝臓癌を患い、この世を去る。

・フィリウス・ゼクト
造物主から開放され、その後は新ウェスペルタティア王国王家専属の魔法講師として代々の王族、つまりアリスの子孫に魔法を教えている。
１００年以上、一緒に新ウェスペルタティア王国を見守ってきたエヴァとは良い茶飲み友達だったりするのだが、お互いに仕事が忙しいので会うのは稀らしい。

初代、二代目・紅き翼のその後（後書き）

次回はラストコラボです。

ラストコラボ　「可愛い叔母・前編」（前書き）

英雄と女王の子、最後のコラボです！
最後のコラボを飾るのはやはり！　初めてコラボをして頂いた私にとって一番の同志（とも）、竜華零さんとのコラボです。
今回のコラボは前編・後編に分けています。

ラストコラボ　「可愛い叔母・前編」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

ラストコラボ
「可愛い叔母・前編」

これは、アヴェンジャーとの戦争が始まる数ヶ月前、まだアリアドネーが崩壊する前の話である。
三代目・紅き翼に新メンバーとしてメルシィが加入してまだ一月程度しか経っていない頃の事だ。
いつもの様に明日香たちが修行の旅をしていて、野営の準備をしていた時、木乃里の持っていた荷物に覚えの無い物が紛れていたのを、荷物の持ち主である木乃里本人が発見したのが始まりだった。

「あの、お兄様・・・これって」
「ん？　何これ・・・宝石で出来た、剣？　・・・あれ？　何処かで見覚えがある様な・・・」

確か、まだメルシィが三代目・紅き翼に入る前、明日葉が久しぶりに王国に帰ってきて、明日香たちも王国で休暇を取っていた時の事だった。
明日香、木乃里、明日葉の三人が財務大臣であるシルヴィア個人所有の宝石魔法具倉庫の見学を行っていたのだが、その時に明日香が大事そうに保管されていた魔法具を見つけた時、突如起きた虹色の光に包まれ、三人は昔、父が話していた平行世界に転移したのだ。

「確か、その時に見た魔法具がこの剣だった気がする・・・」

「ああ、アリア叔母様にお会いした時の・・・」
「あん？　アリア叔母様だぁ？　アリス陛下に妹なんて居たか？」

明日香と木乃里の父、アリスに妹は居ない。弟は居るが、妹は存在しないのだ・・・、この世界には。

「この宝石剣、だっけ？　これは平行世界から魔力を持ってくることが出来る魔法具のレプリカなんだけど、これは時々、平行世界間の移動すらも可能にするって、父様が言ってた」
「実際、お父様は何度かこれで平行世界に行ったと仰ってましたし、実際にこの世界に平行世界からの来訪者が訪れた事もあるそうです」

更には、アリスと木乃香の結婚式には平行世界からの来訪者が出席していたという話だ。それに、旧世界にはアリスの妾が二名、居るのだが、その二名も平行世界出身という事なので、不思議でもない。

「あの、充分凄い事なので、不思議ではないというのは・・・」
「でもねメルシィちゃん、お父様たちにとっては、もう不思議でもなんでもないみたいなの」
「は、はぁ・・・」

平行世界に行く事、平行世界から人が来る事、ウェスペルタティア王国では不思議ではない。何故なら・・・・・・。

「ウェスペルタティア王国で暮らしているエルフやダークエルフの人って、みんな平行世界から移住してきた人たちなんだ」
「え・・・？」
「あ～、そういえば聞いた事があるなぁそれ。俺も師匠から聞いただけで、本人たちから聞いたって訳じゃないけど、ウェスペルタテ

ィアのエルフ族やダークエルフ族は平行世界出身ばかりだってな」

案外、身近に平行世界出身の存在は居るものだ。だからこそ、ウエスペルタティア王国において平行世界の存在は一般的なのだろう。

「それで、この宝石剣、なんで木乃里の荷物に紛れてたの？　確かシルヴィアさんの個人倉庫にあった筈だよね？」

「さ、さぁ・・・？　何ででしょう・・・？」

流石に、木乃里も判らなかった。誰かが悪戯でやったにしても、それ以前にあの倉庫の鍵を持っているのはシルヴィアとアリス、木乃香、エヴァのみなのだ。だから、此処にこれが存在しているのは、おかしい。

「おい？　何でそれが此処にあるのかを考えるのは良いけどよ、何か光ってねぇか？　それ」

「「え？」」

「流石は双子です。息ピッタリ・・・」

メルシィの言葉は兎も角、確かに宝石剣が光っていた。そして、何もしていないにも関わらず、明日香たちの前に空間の裂け目が生まれ、明日香たちが飲み込まれるのかと思われたが・・・逆だった。何かが・・・いや、誰かが裂け目から出てきたのだ。

「あ、あれって・・・」

「はい・・・間違いなく」

「お？　随分とアリス陛下・・・いや、アリカ様に似てるな」

「ですね・・・」

銀髪の髪が美しい少女、歳の頃は１６と言った所か・・・。明日

香やアリスに似ていて、何より明日香の祖母であり、アリスの母であるアリカによく似た少女、彼女は明日香と木乃里が知る頃よりも少し歳を重ねているものの、間違いなく。

「アリア叔母様だ・・・」
「アリア叔母様です・・・」
「へぇ、あれが・・・」
「アリス陛下の、妹君・・・」

意識を失っているドレス姿の女性はアリアだった。
アリア・アナスタシア・エンテオフュシア、平行世界におけるウェスペルタティア王国女王にして、この世界の新ウェスペルタティア王国国王アリス・S・エンテオフュシアの妹で、明日香・S・K・エンテオフュシアと木乃里・S・K・エンテオフュシアの叔母だ。

とりあえず、次元の裂け目から出てきたアリアを寝かせて、木乃里を残して明日香とリューガ、メルシィは食材探しに出かけた。
残った木乃里は毛布をアリアに掛けてあげると、近くに座って初めて会った時から成長した叔母の姿を眺め始める。

「何か・・・綺麗になったなぁ、アリア叔母様」

何と言うか、年齢は自分と同年代くらいだろうと思われるが、それにしても木乃里には無い何処か・・・そう、母である木乃香やシルヴィア達に近い雰囲気を感じられるのだ。

「何ていうか、大人の色気・・・みたいな」

胸は・・・・・スタイルは木乃里が勝っていたが、それ以外の、

寝ていても全身から放たれる大人な魅力、それを感じ取った木乃里は、なんとなく、叔母が・・・嘗ては年下だった叔母が、遠く感じられた。

「ぅ、んん・・・」
「あ・・・」

木乃里が見ている目の前で、アリアが目を覚ました。寝惚け眼で辺りをキョロキョロと見渡し、今いる場所が王城にある自室ではない事に気付き、そして目の前にいる木乃里の存在に気が付く。

「あれ・・・？　木乃里、さん・・・？」
「お久しぶりです。アリア叔母様」

木乃里の存在を確認して、アリアはゆっくりと上体を起こし、改めて周囲を見渡した。

「木乃里さんがいらっしゃるという事は、ここは・・・アリス兄様の世界、ですか？」
「はい。お父様は王国にいらっしゃいますので、この場には居りませんが・・・」
「見たところ旅の途中でしょうか？」
「ええ、三代目・紅き翼の、修行の旅です」

三代目・紅き翼のことを話すと、アリアは何処か感慨深げな表情になり、兄が子供達にどれ程の期待と希望を持っているのか、悟った。

「ところで、他の皆さんは・・・？　明日香さんも居るんですよね？」

「あ、今は食材の調達に行ってます。でもそろそろ・・・帰ってきましたね」

見れば明日香を先頭にリューガ、メルシィが帰ってきた所だった。

「あ、アリア叔母様、目が覚めたんですね」

「明日香さん、お久しぶりです」

「僕からしたらそんなにアリア叔母様と会ってから経ってないんですけど・・・アリア叔母様からしたら、お久しぶりなんですねぇ」

初めてアリアと出会った時は、まだ彼女は１０歳で、今は１６歳なのだから明日香と木乃里にとっては数ヶ月ぶりでも、アリアにとっては６年ぶりになるのだ。

「おい、明日香、そろそろ紹介してくれねぇか？」

「そうだね・・・アリア叔母様、ご紹介します。僕がリーダーを務める三代目・紅き翼のメンバー、ヘラス族の彼はリューガ・ウォンバット、ラカンさんの弟子で、木乃里の従者でもあります」

「よろしくなアリア・・・何て呼べば良い？」

「向こうでは女王をやってますけど・・・」

「んなら女王でいいか。よろしくな、アリア女王」

女王が相手だというのに、タメ口をやめないリューガに呆れつつ、明日香は隣に立つメルシィの紹介に移る。

「彼女は最近入ったばかりで、メルシィ・ブルーメールです。旧世界出身でして、今は僕の従者でもあります」

「よ、よろしくお願いします。アリア女王陛下」

「はい、よろしくお願いします。メルシィさん」

一通りの挨拶と自己紹介も終わり、早速だが木乃里の荷物に紛れていたシルヴィアの宝石剣レプリカと、アリアが持つ宝石剣の解析が行われ、何故アリアがこの世界に来たのかを調べる事になった。

「とは言え、理由は判ってますけど・・・」

「アリア叔母様？」

「あ、いえ・・・実は、フェイト・・・私の夫が倉庫に保管していたこの宝石剣に興味を示し、それで色々とお話をしていたのですが・・・・・・」

今まで宝石剣に近づいたことの無いフェイトの魔力に誤作動を起こした宝石剣が、握っていたアリアを平行世界へ転移させてしまったらしい。

「って、夫？　アリア叔母様、ご結婚成されたんですか？」

夫という所に明日香が驚いた。確かに１６ともなれば王族であれば結婚しているか、婚約者が居ても可笑しくは無い。

最も、国王であるアリスの子供達、明日香と木乃里、明日葉、木乃亜には未だ婚約者といったものは存在しないのだが・・・。

「最近、結婚したばかりなのですが・・・良い人ですよ」

「そうですか・・・」

叔母の幸せそうな表情、それを見るだけで明日香も木乃里も安堵の表情を浮かべた。叔母が、幸せな生活を送っていると知り、何処か安心したのだ。

ラストコラボ　「可愛い叔母・前編」（後書き）

次回は後編！　何書こうかなぁ…。
とりあえず王国に帰ります。

アリス・S・エンテオフュシアの子供（前書き）

コラボの続きではありません。申し訳ない。
以前、アリスの子供達の名前が知りたいという声がありましたので、とりあえず名前だけ載せます。
設定などはその内、追加していきますので。

アリス・S・エンテオフュシアの子供

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

アリス・S・エンテオフュシアの子供

父：アリス・S・エンテオフュシア　母：木乃香・S・K・エンテオフュシア

長男：明日香・S・K・エンテオフュシア

長女：木乃里・S・K・エンテオフュシア

次女：明日葉・S・K・エンテオフュシア

次男：木乃亜・S・K・エンテオフュシア

父：アリス・S・エンテオフュシア　母：シルヴィア・オーギス

長女：シルヴィー・オーギス

長男：アリエル・オーギス

父：アリス・S・エンテオフュシア　母：大河内　アキラ

長男：大河内　新（アタラ）

長女：大河内　冷良（レイラ）

次女：大河内　藍良（アイラ）

父：アリス・S・エンテオフュシア　母：相坂　さよ

長女：相坂　咲夜（さくや）

次女：相坂　綾夜（あや）

父：アリス・S・エンテオフュシア　母：青山月詠

長男：青山　月耶（つきや）

他、旧世界に二人

アリス・S・エンテオフュシアの子供（後書き）

その他二人については水竜さんが詳しいかと…。

月詠の姓、青山については…月詠がアリスの妾になるのに、ファミリーネームが必要だったので、詠春が気を利かせてくれたという設定です。

ラストコラボ　「可愛い叔母・後編」（前書き）

お待たせしました！　コラボ最終話です！！

ラストコラボ　「可愛い叔母・後編」

英雄と女王の子
～アフターシリーズ～

ラストコラボ
「可愛い叔母・後編」

何故か木乃里の荷物に紛れていた宝石剣の共鳴によって平行世界からアリアが来た後、三代目・紅き翼は旅を一時的に切り上げて新・ウェスペルタティア王国に戻ってきた。
王国に戻ってからリューガとメルシィは王国にある自宅で休暇を取る事になり、明日香、木乃里はアリアを連れて王城に向う。

「ただいま」
「ただいま戻りました」
「っ！　これは殿下に姫殿下！　お早いお帰りで、お疲れ様で御座います！！」

王城の門番を務める騎士が明日香と木乃里の姿を確認してすぐさま敬礼する。すると、二人の後ろに立つ白髪の美少女・・・アリアの姿が目に入った。

「あの、殿下、姫殿下、こちらは・・・」
「ん？　ああ、彼女はアリア・アナスタシアさん、父様と母様の知り合いらしい」
「は、陛下と王妃様の、でございますか？」

門番の騎士はそう言ってアリアをもう一度見る。明らかに明日香

と木乃里の同年代であろう少女、何処か明日香やアリスに似ている・・・というより、前王であったアリカ元女王と瓜二つの少女は、如何考えても年代的にアリスや木乃香の知り合いと言うには無理がある様にも思えるのだ。

「お父様とは特に懇意にしていらっしゃるお方です。丁重に御持て成しをしてくださいね？」
「りょ、了解いたしました！」

門を開いて王城の中に入ると、アリアは早速だが物珍しさでキョロキョロと辺りを見渡していた。彼女も城暮らしなのに、何処が珍しいのかを問えば・・・。

「え？　だってアリス兄様の住んでいるお城ですから」

との事だ。

兎にも角にも三人は中庭を通って城に入ると玉座の間の扉の前まで来た。この時間ならアリスも木乃香も、宰相であるエヴァも謁見の間に居る筈だ。財務大臣であるシルヴィアはこの時間だと自分の政務室に篭っているだろうが。

「さてと、じゃあ入りますよ？」
「ええ」
「はい・・・っ」

玉座の間には入りなれている明日香と木乃里は至って普通だが、この世界の、このウェスペルタティア王国の玉座の間に入るのは初めてであるアリアは少し緊張している。

そして、中に入ると、玉座に座っているアリスと、その隣の椅子に腰掛けている木乃香、そしてアリスの隣に立つエヴァ、それから

玉座の間の壁際一杯に並ぶ騎士たちが三人を出迎えた。

「只今戻りました、父様、母様、エヴァおかあさん」
「戻りました、お父様、お母さま、エヴァまま」
「お帰り、明日香、木乃里」
「今回の旅の感想、後で聞かせてな」
「おい、それより二人の後ろの女に気づけお前らは」

エヴァが目を向けた先、そちらにアリスと木乃香も目を向けると、アリアが立っていた。アリスや木乃香、エヴァが知るアリアよりも、少しだけ、成長した姿で。

「お久しぶりです。アリス兄様、木乃香義姉さま、エヴァさん」
「アリア・・・なのか？」
「え、ホンマに・・・？」

無理も無い。明日香や木乃里同様、二人も・・・いや、エヴァも入れれば三人とも最後に見たアリアの姿は１０歳の頃なのだから。
現在の年齢１６歳の彼女の姿は、色々と衝撃を受けた。背や髪も伸び、顔つきもまだまだ子供らしいあどけなさは抜けないものの、少しずつ大人の女性へと成長し始め、可愛いという印象から綺麗という印象へと変化を始めている。

「そっか、前・・・二度目と三度目に私がそっちに行った時と同じ現象か」
「ですね、今の私は１６歳ですから、あの時から６年も経ちました」
「そっかぁ、アリアちゃんも・・・せやね、色々と成長したみたいやわ」

木乃香はアリアの左手薬指に填められた指輪を見て、そう言い切

った。
　アリスもまた、指輪の存在には気が付いているが、特に何も言わない。・・・その実、腸が煮えくり返っているが。

「宝石剣の充電は明日にでも終わるだろう、今日は王城に泊まっていくと良い。月詠」
「はいな～」
「メイド長に連絡、至急ＶＩＰルームの用意を済ませておく様にと」
「了解です～、ほな」

　アリスの後ろに突然現れ、そして再び音も無く消えた月詠を見て、アリアは神鳴流剣士というより、忍者では？　などと思ってしまったのは、無理も無いだろう。

「エヴァ、今日この後の予定は？」
「む？　・・・ああ、なるほどな。安心しろ、今日は特に予定も入っていない。アリアも丁度良い時に来たものだな」
「え、アリス兄様？」
「今日は、久しぶりに家族水入らず、一緒に過ごそう」

　勿論、その家族の中には木乃香や明日香、木乃里も入っている。

「・・・はい！！」

　たとえお互いに王という立場になったとしても、アリスとアリア、この二人の兄妹の絆はいつまでも切れる事は無い。
　それを改めて認識したアリアは、満面の笑みを浮かべて立ち上がって両手を広げたアリスの胸に飛び込むのだった。

夕飯の席ではアリアの世界での事や明日香たち三代目・紅き翼の話題で持ちきりだった。

アリアの世界では魔法が使えなくなった事、アリアの女王としての6年間、そして結婚するまでの出来事、そしてお互いに王という事もあるので、お互いの国の法や政策などの意見交換をしたり、擬似的な国交の様なものをして本当に有意義で楽しい時間を過ごした。

「そういえば・・・アリス兄様たちはいつもこの様なお食事を？」

ふと、アリアが気になった事を尋ねた。アリア達が食べている夕餉、そのメニューは王族が口にするには、あまりに庶民的な・・・オムライスだったのだから、当然の疑問だろう。

「いや、いつもはアリアも同じだろうけど王城のシェフが作るディナーだけど。今日は特別に私が作ったんだ・・・このオムライスは」

「あ・・・じゃ、じゃあ」

「・・・覚えてる、かな？」

「・・・っ！　勿論です！！」

忘れる筈も無い。アリアにとって、アリスとの思い出の料理であり、アリスとアリアが兄妹として、家族として初めて一緒に食べた料理であり、アリアが初めて家族の温もりを感じたアリスお手製のオムライスなのだから。

懐かしい味に、もしかしたらとは思っていたが、まさか本当にアリスが自ら作ってくれたとは思いもよらず、思わず涙が溢れそうになるアリアだが、そこは女王としても、女としても成長したアリアは、涙をグッと堪えた。

「そういやぁ、アリスさん偶に自分でオムライス作って自分で食べとったなぁ。そういう意味やったんやね」

「そうか、あのときは木乃香はまだアリアと会っていなかったから知らないのだな」

エヴァが言うあの時というのはアリアがこの世界に初めて来た時の事だ。アリアにとっては6年前、アリス達にとっては10年以上も前の事で、しかし忘れる事の出来ない大切な思い出である。

「僕や木乃里がまだ小さい頃にも父様と母様はアリア叔母様の世界に行っているんですよね？」

「ああ、まだ木乃亜が木乃香のお腹に居る頃にね」

「あら、木乃亜くんがですか？」

「？　アリス兄様、木乃亜というのはもしかして・・・」

「正解、あの時、木乃香のお腹に居たのが・・・アリアがあの時、そっちのエヴァと一緒に触った木乃香のお腹の中に居た子だよ。次男なんだ」

その木乃亜も成長して、今はウェスペルタティア王国内にある魔法学園の生徒として寮に入っている。

「会えないのは残念ですね」

「アリアの事を話したら会いたがってたけど、仕方が無いよ」

学業の方が優先だ。

アリスとアリア、嘗てそれぞれの世界の麻帆良学園で教師をしていた兄妹の意見が見事に一致するのだった。

夕餉も終わり、もう夜も遅くなった時間、アリアはというと・・・。

「何ででしょう・・・眠れません」

宛がわれたＶＩＰルームのベッドの上で寝ようとしていたのだが、何故か目が冴えてしまい、寝付けずにいた。

「少し、テラスに行きますか・・・」

城の３階にある大型オープンテラスに足を運んだアリアは、そこで夜空を見上げる人影を見つけた。

「アリス兄様・・・？」

テラスにあるチェアーに腰掛、ワインを片手に月を見上げているアリスの姿。アリアが初めて出会った頃と比べて、随分と歳を重ねて、それでも尚、若々しい兄の姿を見て、アリアは自分も暫くは若々しくいられるのでは？　などと場違いな事を思う。

「ん・・・？　アリアか」

「アリス兄様も眠れないんですか？」

アリアに気付いたアリスに微笑み返し、隣に腰掛けたアリアは少しだけ、兄の身体に寄りかかる。６年前までなら少し恥かしいけど、家族の温もりが嬉しくて、甘えたくなった温もりが、今は恥かしさの方が大きくなったのか、若干だが頬が赤い。

「眠れない、そうだね・・・此処最近、眠れなくてね」

嫌な予感がするから、と言ってアリスは一口ワインを口に含んだ。

「嫌な、予感ですか？」

「ああ、また戦いが始まるような、そんな、嫌な予感さ」
「戦いが・・・」

アリスもアリアも、その人生に戦いは避けられない。寧ろ戦いの中で生きてきたのだから、今更、戦いを捨てるなんて出来ないのだ。真の意味で平和が来るその日までは。

「アリス兄様・・・多分、もう私は、二度とこの世界に来る事は出来ません」
「・・・宝石剣が限界？」
「・・・はい、多分あと一回世界を行き来するのが限界です、そしてそれは・・・この世界ではない気がするんです」
「そっか・・・」

平行世界を隔てた兄妹の、永遠の別れ、それが翌朝に迫っている。それを知ってアリスは、動揺する事は無かった。

「予感はしていた。アリアが持っている宝石剣から感じられる魔力が、随分と不安定になり始めているから」
「はい」
「宝石剣は、もう二度と作れないんだね？」
「はい、私も、魔法具を創り出すことが出来なくなりましたから」

だからこその、永遠の別れなのだ。元々、平行世界間の往復など、有り得なかったのだから、当然と言えば当然で、今までが奇跡だったのだから。

「多分、私の宝石剣が壊れれば、コピーであるシルヴィア姉様の造った宝石剣は、オリジナルの消失を感知して、機能を停止させるでしょう」

「つまり、私の方も宝石剣で平行世界間を行き来する事が出来なくなるのか・・・」

様々な世界に存在する友人達の姿が脳裏に浮かんだ。彼等とも、二度と会う事が出来なくなるのは、やはり寂しい。

「兄様・・・」

「・・・なんだい？」

「最後に、思いっ切り、甘えさせて、ください・・・・・・・我(ア)が最愛(リス兄様)のお兄様」

「・・・ああ、勿論だよ・・・・・・・我(アリア)が最愛の妹」

こうして、夜は明け、アリアは自分の世界に帰っていった。

その後暫くして、アリスの世界の宝石剣コピーは完全に機能を停止し、アリアの世界の宝石剣オリジナルが崩壊したのだと悟り、アリスは最愛の妹と出会えた数々の奇跡に、深く感謝するのだった。

ラストコラボ　「可愛い叔母・後編」（後書き）

遂に、英雄と女王の子、連載中から完結済みになります。
長い間、ご愛読ありがとうございました！！！
そして、次回！　英雄と女王の子リメイク！　プロローグをお楽しみに！！

…別作品として投稿しますからね？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6456i/

英雄と女王の子

2011年10月31日23時21分発行